

公益財団法人鹿児島県文化振興財団
埋蔵文化財調査センター発掘調査報告書 (20)

東九州自動車道（志布志 I C ～鹿屋串良 J C T 間）建設に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

まち だ ぼり い せき
町 田 堀 遺 跡 2

(鹿屋市串良町)

2018 年 3 月

鹿児島県教育委員会
公益財団法人鹿児島県文化振興財団
埋蔵文化財調査センター



町田堀遺跡遠景（南東から）



古墳時代 土器集合

序 文

鹿屋市串良町に所在する町田堀遺跡は、東九州自動車道の建設に伴い、平成 25～28 年度にかけて発掘調査が実施された遺跡です。

本遺跡の調査報告書については、平成 27 年度に平成 25 年度の記録を刊行しました。今回の報告書は平成 26～28 年度分の調査記録になります。

町田堀遺跡では、平成 25 年度に縄文時代後期から古代までの遺構や遺物が発見されました。特に、縄文時代後期の竪穴住居跡や埋設土器、ヒスイ製の垂飾品や石刀、古墳時代における南九州特有の墓である地下式横穴墓が 88 基発見されるなど、貴重な資料の発見は大いに注目されました。

平成 26～28 年度の調査でも、同様な時代の遺構や遺物が発見され、遺跡の広がりが確認されました。また、縄文時代早期の遺構・遺物も新たに発見され、本遺跡の年代がさらにさかのぼることが判明しました。

本報告書が、県民の皆様をはじめ多くの方々に活用され、埋蔵文化財に対する関心と御理解をいただくとともに、文化財の普及・啓発の一助になれば幸いです。

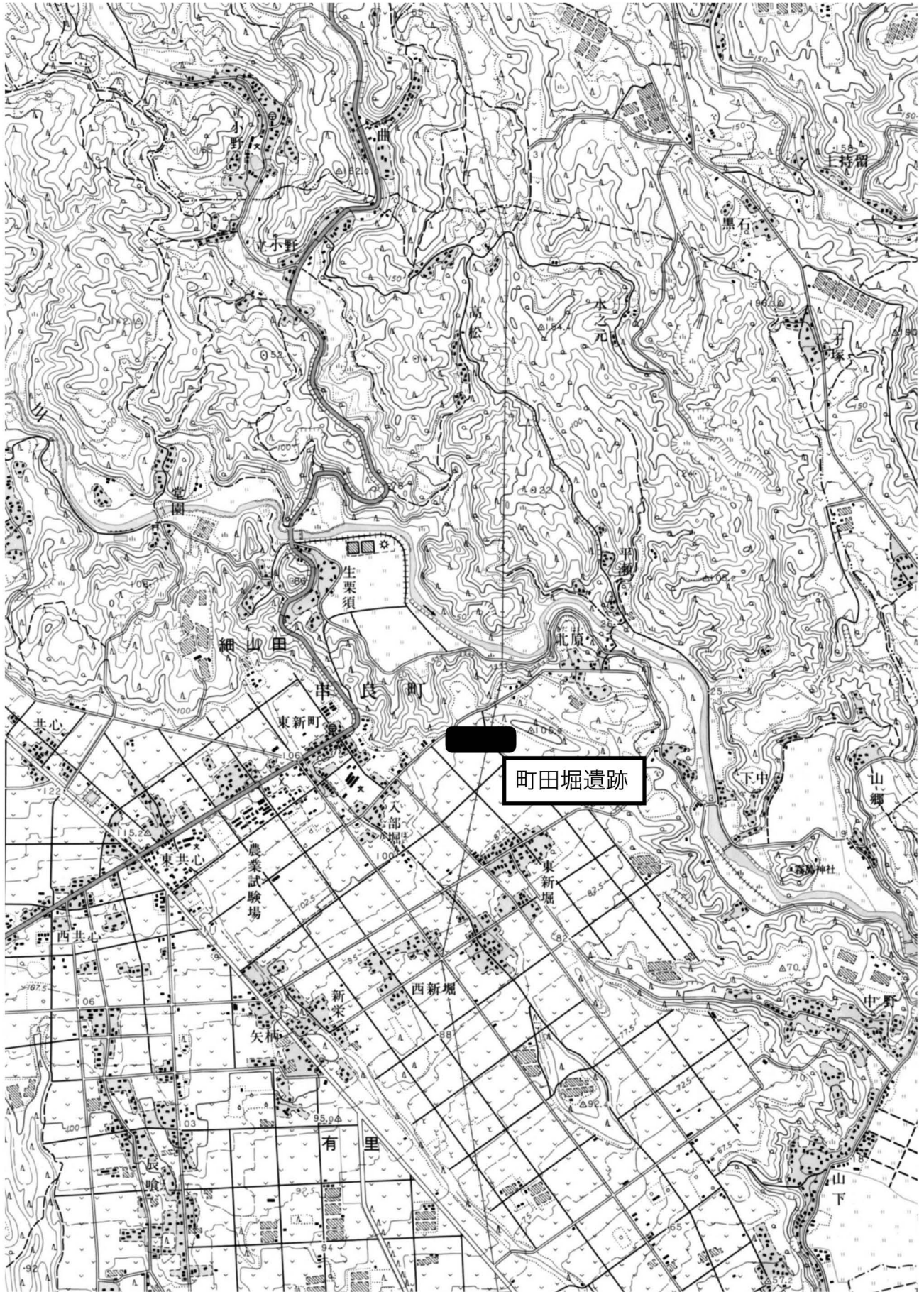
最後になりましたが、本県の埋蔵文化財保護のために御協力いただきました国土交通省九州地方整備局大隅河川国道事務所、鹿屋市教育委員会、調査中に御指導いただいた先生方、その他関係者の皆様に厚く御礼申し上げます。

平成 30 年 3 月

公益財団法人 鹿児島県文化振興財団
埋蔵文化財調査センター長 前迫 亮一

報 告 書 抄 録

ふりがな	まちだぼりいせき に							
書名	町田堀遺跡 2							
副書名	東九州自動車道（志布志 IC～鹿屋串良 JCT 間）建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書							
シリーズ名	公益財団法人 鹿児島県文化振興財団 埋蔵文化財調査センター発掘調査報告書							
シリーズ番号	第20集							
編集者名	繁昌正幸 樋口めぐみ							
編集機関	公益財団法人 鹿児島県文化振興財団 埋蔵文化財調査センター							
所在地	〒 899-4318 鹿児島県霧島市国分上野原縄文の森 2 番 1 号 TEL0995-70-0574 FAX0995-70-0576							
発行年月	2018年3月							
ふりがな	ふりがな	コード		北緯	東経	発掘期間	発掘面積 (㎡)	発掘原因
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号					
まちだぼりいせき 町田堀遺跡	かごしまけん 鹿児島県 かのやしくしら ちよう 鹿屋市串良 町 ほそやまだ 細山田	46203	203-300	31° 26' 41"	130° 55' 55"	事前調査 2014. 8. 01 ～2014. 11. 28 本調査 2015. 6. 03 ～2014. 1. 28 2014. 8. 04 ～2014. 10. 28 2015. 12. 11 ～2016. 2. 25 2016. 5. 15 ～2017. 2. 24	17,515	東九州自動車道 (志布志 I C～鹿 屋串良 J C T 間) 建設に伴う記録保 存調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主要な遺構		主要な遺物		特記事項	
町田堀遺跡	散布地	縄文時代 早期	集石遺構		中原式土器, 下剥峯式土 器, 塞ノ神式土器, 打製石 斧, 磨石			
	集落 散布地	縄文時代 後期	竪穴住居跡, 埋設土器, 石 器集積遺構, 土坑		中岳Ⅱ式土器, 打製石斧, 打製石鏃, 剥片石器, 管玉, 磨石			
	散布地	縄文時代 晩期			入佐式土器, 黒川式土器			
	集落 散布地	弥生時代	竪穴住居跡, 掘立柱建物跡, 土坑		刻目突帯文土器, 入来式土 器, 山ノ口式土器, 中津野 式土器, 磨製石鏃			
	地下式横 穴墓群 散布地	古墳時代	地下式横穴墓, 溝, 土器破 砕祭祀(空間)遺構		刀子, 東原式土器			
	散布地	古代以降 および時 代不詳	掘立柱建物跡, 道跡		土師器(甕・坏)			
要約	<p>町田堀遺跡は、標高 90 m の笠野原台地の北縁辺部に位置し、遺跡の北側と東側を串良川が蛇行して流れる。本遺跡は縄文時代早期から古代にかけての複合遺跡である。</p> <p>縄文時代早期は集石遺構が多く検出され、中原式土器や下剥峯式土器などが出土した。縄文時代後期は竪穴住居跡が 4 軒、埋設土器が 3 基検出され、住居跡からは中岳Ⅱ式土器が出土している。縄文時代晩期は遺構は検出されなかったが、遺物が少量出土した。弥生時代では、竪穴住居跡が 2 軒と掘立柱建物跡が 1 棟検出された。1 軒の住居跡からは後期終末期に位置けられている中津野式土器が出土した。古墳時代では、南九州特有の地下式横穴墓が 4 基検出され、過年度の調査と併せて 92 基の地下式横穴墓となった。町田堀遺跡では南九州で初めて円形周溝を伴う例が確認され、大隅地域や南九州の古墳時代の在り方を考える上で貴重な資料といえる。時代は不詳であるが、掘立柱建物跡が 5 棟検出され、そのうちの 4 棟は 2 間×2 間の総柱建物である。</p>							



町田堀遺跡位置図 (1/25,000)

例 言

- 1 本書は、東九州自動車道（志布志 IC～鹿屋申良 JCT 間）建設に伴う町田堀遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 本遺跡は、鹿児島県鹿屋市申良町細山田に所在する。
- 3 発掘調査は、平成 25 年～28 年度にかけて、国土交通省九州地方整備局から鹿児島県教育委員会が受託し、公益財団法人鹿児島県文化振興財団埋蔵文化財調査センターが実施した。
- 4 整理・報告書作成事業は、平成 26～29 年度に公益財団法人鹿児島県文化振興財団埋蔵文化財調査センターが実施した。
- 5 本書は平成 26～28 年度に発掘調査を実施した成果の記録である。
- 6 掲載遺物の番号は通し番号であり、本文・挿図・表及び図版の遺物番号は一致する。
- 7 検出された竪穴住居跡は縄文時代 4 軒、弥生時代 2 軒、掘立柱建物跡は弥生時代 1 棟、時代不詳 5 棟であるが、発掘調査時の番号を各時代の住居跡番号及び掘立柱建物跡番号に変更して掲載した。
- 8 地下式横穴墓は 4 基検出され、発掘調査時は発見された順に番号を付したが、本報告書では番号を付し直して掲載することとした。
- 9 挿図の縮尺は、挿図ごとに示した。土器は 1/3 を基本とするが、大型の埋設土器や二重口縁壺等は 1/4 とした。石器は小型の石鏃等は原寸、石斧等は 1/3、大型の石皿等は 1/4 とした。
- 10 本書で用いたレベル数値は海拔絶対高である。
- 11 遺物注記で用いた遺跡記号は「マチ」である。
- 12 本書で用いた方位は全て磁北である。
- 13 発掘作業における写真撮影は調査担当者が行った。また、空中写真撮影は株式会社ふじたに委託した。
- 14 平成 26 年度の発掘調査は株式会社埋蔵文化財サポートシステムに支援業務を委託した。
- 15 遺構の実測図作成・遺物分布図作成及びデジタルトレースの一部は、株式会社埋蔵文化財サポートシステムが行った。
- 16 出土遺物の実測・拓本・トレースは、繁昌・樋口が整理作業員と協力して行った。また、石器の実測は、大成エンジニアリング株式会社に委託したほか、繁昌が整理作業員と協力して行った。
- 17 出土遺物の写真撮影は辻明啓・吉岡康弘が行った。
- 18 金属製品（鉄器）の保存処理は、鹿児島県立埋蔵文化財センターの武安雅之が行い、実測・トレースは、樋口が整理作業員と協力して行った。
- 19 本報告書に係る年代測定及び種実・樹種同定の自然科学分析は、株式会社パレオ・ラボに委託した。

20 本書の編集は、整理作業員の協力を得て繁昌・樋口が行った。執筆の担当は以下のとおりである。

- 第 1 章 樋口
- 第 2 章 樋口
- 第 3 章 樋口、繁昌
- 第 4 章 第 1 節 樋口
第 2 節 繁昌
第 3 節 - 1 樋口
- 2～6 繁昌
- 第 5 章 - 1～3 株式会社パレオ・ラボ
- 4 武安
- 第 6 章 繁昌

- 21 出土遺物及び実測図・写真等の記録は鹿児島県立埋蔵文化財センターで保管し、展示・活用を図る予定である。
- 22 遺物出土のドット図は縄文早期のもののみ作成した。V 層より上位はゴボウ栽培のためのトレンチャー等による攪乱が著しく、遺物の残存状況が悪くなかったために作成しなかった。

凡 例

網掛け

- 赤色顔料：
- 丹塗り土器：
- 煤の付着：
- 焦げの付着：
- 黒 斑：
- 遺構断面：
- 調査範囲：
- 時代別範囲：

遺構の略号（観察表で使用）

- S I：竪穴住居跡
- S J：埋設土器
- S T：地下式横穴墓
- S K：土坑
- P：ピット（柱穴）

遺構名

- 第 180 図 () なし：本報告書掲載
() あり：2016 年 3 月刊の報告書掲載
- 第 181 図 ゴシック体：本報告書掲載
明朝体：2016 年 3 月刊の報告書掲載

目次

巻頭図版	
序文	
報告書抄録	
例言・凡例	
第1章 発掘調査の経過	1
第1節 調査に至るまでの経緯	1
第2節 事前調査	1
第3節 本調査の経過	1
第4節 整理作業・報告書作成	3
第2章 遺跡の位置と環境	6
第1節 地理的環境	6
第2節 歴史的環境	6
第3節 東九州自動車道関連の遺跡	8
第4節 遺跡及び遺跡周辺の地形	8
第3章 発掘調査の方法と層序	16
第1節 発掘調査の方法	16
第2節 層序について	18
第4章 発掘調査の成果	30
第1節 縄文時代早期の調査	30
第2節 縄文時代後・晩期の調査	65
第3節 弥生時代の調査	107
第4節 古墳時代の調査	126
第5節 II層の調査	159
第6節 II層ほか出土の石器	184
第5章 自然科学分析	215
第1節 放射性炭素年代測定	215
第2節 町田堀遺跡から出土した炭化種実	218
第3節 町田堀遺跡出土炭化材の樹種同定	221
第4節 町田堀遺跡出土の赤色顔料について	224
第6章 総括	226
写真図版	239

挿図目次

第1図 年度別調査範囲図	5
第2図 周辺遺跡位置図	9
第3図 東九州自動車道関連遺跡	11
第4図 町田堀遺跡調査範囲図	17
第5図 標準土層図	18
第6図 土層断面図1	19
第7図 土層断面図2	20
第8図 土層断面図3	21
第9図 土層断面図4	22
第10図 土層断面図5	23
第11図 土層断面図6	24
第12図 土層断面図7	25
第13図 土層断面図8	26
第14図 土層断面図9	27
第15図 土層断面図10	28
第16図 土層断面図11	29
第17図 縄文時代早期集石遺構位置図	31
第18図 IX層上面コンター図	32
第19図 縄文早期遺物ドット図	33
第20図 縄文早期1号集石遺構・出土遺物	34
第21図 縄文早期2号集石遺構・出土遺物	35
第22図 縄文早期3号集石遺構・出土遺物	36
第23図 縄文早期4号集石遺構・出土遺物	37
第24図 縄文早期5号集石遺構・出土遺物	37
第25図 縄文早期6号集石遺構・出土遺物	38
第26図 縄文早期7号集石遺構	38
第27図 縄文早期8号集石遺構	39
第28図 縄文早期9号集石遺構・出土遺物	40
第29図 縄文早期10号集石遺構・出土遺物	40
第30図 縄文早期11号集石遺構・出土遺物	41
第31図 縄文早期12号集石遺構・出土遺物	42
第32図 縄文早期13号集石遺構・出土遺物	43
第33図 縄文早期14号集石遺構・出土遺物	44
第34図 縄文早期15号集石遺構	44
第35図 縄文早期16号・17号・18号集石遺構	45
第36図 縄文早期19号集石遺構・出土遺物	46
第37図 縄文早期20号集石遺構	47
第38図 縄文早期の土器1	48
第39図 縄文早期の土器2	49
第40図 縄文早期の土器3	50
第41図 縄文早期の土器4	51
第42図 縄文早期の土器5	52
第43図 縄文早期の土器6	53
第44図 縄文早期の土器7	54
第45図 縄文早期の土器8	55
第46図 VII層出土の石器1	56

第 47 図	Ⅶ層出土の石器 2	57	第 95 図	弥生時代遺構位置図	108
第 48 図	Ⅶ層出土の石器 3	58	第 96 図	1号竪穴住居跡 1	109
第 49 図	Ⅶ層出土の石器 4	59	第 97 図	1号竪穴住居跡 2	110
第 50 図	Ⅶ層出土の石器 5	60	第 98 図	1号竪穴住居跡出土土器 1	111
第 51 図	Ⅶ層出土の石器 6	61	第 99 図	1号・2号竪穴住居跡出土土器 2・石器	112
第 52 図	Ⅶ層出土の石器 7	62	第 100 図	2号竪穴住居跡	113
第 53 図	Ⅶ層出土の石器 8	63	第 101 図	1号掘立柱建物跡	114
第 54 図	Ⅵ層出土の石器	64	第 102 図	弥生土坑 1号	115
第 55 図	V層上面コンター図	66	第 103 図	遺物集中域・出土土器	116
第 56 図	縄文時代後期遺構位置図	67	第 104 図	遺物集中域出土土器・石器	117
第 57 図	縄文後期 1号竪穴住居跡	68	第 105 図	弥生時代の土器 1	119
第 58 図	縄文後期 1号竪穴住居跡出土土器	69	第 106 図	弥生時代の土器 2	120
第 59 図	縄文後期 1号竪穴住居跡出土石器 1	70	第 107 図	弥生時代の土器 3	121
第 60 図	縄文後期 1号竪穴住居跡出土石器 2	71	第 108 図	弥生時代の土器 4	122
第 61 図	縄文後期 2号竪穴住居跡	72	第 109 図	弥生時代の土器 5	123
第 62 図	縄文後期 2号竪穴住居跡出土土器	73	第 110 図	弥生時代の土器 6	124
第 63 図	縄文後期 2号竪穴住居跡出土石器	74	第 111 図	土製勾玉	125
第 64 図	縄文後期 3号竪穴住居跡	76	第 112 図	古墳時代遺構位置図	127
第 65 図	縄文後期 3号竪穴住居跡出土土器 1	77	第 113 図	第 2地点検出遺構図	128
第 66 図	縄文後期 3号竪穴住居跡出土土器 2	78	第 114 図	1号地下式横穴墓・出土の鉄器	129
第 67 図	縄文後期 3号竪穴住居跡出土石器	79	第 115 図	2号地下式横穴墓・出土遺物	130
第 68 図	縄文後期 4号竪穴住居跡・出土土器	80	第 116 図	3号地下式横穴墓	131
第 69 図	1号埋設土器・出土土器・石器	81	第 117 図	4号地下式横穴墓・出土遺物	132
第 70 図	2号埋設土器	82	第 118 図	1号溝・4号溝	133
第 71 図	2号埋設土器・出土土器	83	第 119 図	1号溝・4号溝遺物出土状況	135
第 72 図	3号埋設土器・出土土器	84	第 120 図	2号溝	136
第 73 図	縄文後期土坑 1・出土遺物	86	第 121 図	2号溝遺物出土状況	137
第 74 図	縄文後期土坑 2	87	第 122 図	3号溝	138
第 75 図	縄文後期土坑 3	88	第 123 図	3号溝遺物出土状況	139
第 76 図	縄文後期土坑 4・出土遺物	89	第 124 図	1号溝出土の土器	140
第 77 図	縄文後期土坑 5・出土遺物	90	第 125 図	2号溝出土の土器 1	140
第 78 図	縄文後期土坑 6・出土遺物	91	第 126 図	2号溝出土の土器 2	141
第 79 図	縄文後期土坑 7	92	第 127 図	3号溝出土の土器	142
第 80 図	石器集積遺構	93	第 128 図	土器破碎祭祀遺構	143
第 81 図	石器集積遺構出土石器 1	94	第 129 図	土器破碎祭祀遺構内出土遺物 1	144
第 82 図	石器集積遺構出土石器 2	95	第 130 図	土器破碎祭祀遺構内出土遺物 2	145
第 83 図	遺物集中域 1	96	第 131 図	土器破碎祭祀遺構内出土遺物 3	146
第 84 図	遺物集中域 1出土石器	97	第 132 図	古墳時代の土器 1	148
第 85 図	遺物集中域 1出土土器	98	第 133 図	古墳時代の土器 2	149
第 86 図	遺物集中域 2・出土土器	98	第 134 図	古墳時代の土器 3	150
第 87 図	縄文後・晩期の土器 1	99	第 135 図	古墳時代の土器 4	151
第 88 図	縄文後・晩期の土器 2	100	第 136 図	古墳時代の土器 5	152
第 89 図	縄文後・晩期の土器 3	101	第 137 図	古墳時代の土器 6	154
第 90 図	縄文後・晩期の土器 4	102	第 138 図	古墳時代の土器 7	155
第 91 図	縄文後・晩期の土器 5	103	第 139 図	古墳時代の土器 8	156
第 92 図	縄文後・晩期の土器 6	104	第 140 図	古墳時代の土器 9	157
第 93 図	縄文後・晩期の土器 7	105	第 141 図	古墳時代の土器 10	158
第 94 図	縄文後・晩期の土器 8・土製加工品	106	第 142 図	Ⅱ層遺構位置図	161

第 143 図	掘立柱建物跡計測図 1 (柱穴の規模) ……	163
第 144 図	掘立柱建物跡計測図 2 (柱間の距離) ……	164
第 145 図	1号掘立柱建物跡……………	166
第 146 図	1号掘立柱建物跡のピット内遺物……………	167
第 147 図	2号掘立柱建物跡・ピット内遺物……………	168
第 148 図	2号掘立柱建物跡のピット内遺物……………	169
第 149 図	3号掘立柱建物跡……………	170
第 150 図	3号掘立柱建物跡のピット内遺物……………	171
第 151 図	4号掘立柱建物跡……………	171
第 152 図	4号掘立柱建物跡のピット内遺物 1 ……	172
第 153 図	4号掘立柱建物跡のピット内遺物 2 ……	173
第 154 図	4号掘立柱建物跡のピット内遺物 3 ……	174
第 155 図	5号掘立柱建物跡・ピット内遺物……………	175
第 156 図	ピット内出土の遺物 1 ……	178
第 157 図	ピット内出土の遺物 2 ……	179
第 158 図	ピット内出土の遺物 3 ……	180
第 159 図	ピット内出土の遺物 4 ……	181
第 160 図	ピット内出土の遺物 5 ……	182
第 161 図	1号道跡……………	183
第 162 図	古代以降の出土遺物……………	183

第 163 図	V層出土の石器……………	184
第 164 図	IV層出土の石器……………	185
第 165 図	II層出土の石器 1 ……	186
第 166 図	II層出土の石器 2 ……	187
第 167 図	II層出土の石器 3 ……	188
第 168 図	II層出土の石器 4 ……	189
第 169 図	II層出土の石器 5 ……	190
第 170 図	II層出土の石器 6 ……	191
第 171 図	II層出土の石器 7 ……	192
第 172 図	II層出土の石器 8 ……	193
第 173 図	II層出土の石器 9 ……	194
第 174 図	II層出土の石器 10……………	195
第 175 図	II層出土の石器 11……………	196
第 176 図	II層出土の石器 12……………	197
第 177 図	II層出土の石器 13……………	198
第 178 図	時期別変遷図……………	230
第 179 図	遺跡の残存範囲図……………	232
第 180 図	縄文時代後期検出主要遺構図……………	235
第 181 図	古墳時代墓域全体図……………	237

表目次

第 1 表	周辺遺跡一覧表……………	10
第 2 表	志布志 I C～鹿屋申良 J C T間の遺跡……………	12
第 3 表	縄文後期土坑観察表……………	92
第 4 表	各掘立柱建物跡の柱穴深さ及び柱穴間距離……………	165
第 5 表	ピット観察表……………	177
第 6 表	縄文時代早期遺構内出土土器観察表……………	199
第 7 表	縄文時代後期遺構内出土土器観察表……………	199
第 8 表	弥生時代遺構内出土土器観察表……………	200
第 9 表	古墳時代遺構内出土土器観察表……………	200
第 10 表	II層遺構内出土土器観察表……………	201
第 11 表	縄文時代早期土器観察表……………	202
第 12 表	縄文時代後・晩期土器観察表……………	203
第 13 表	弥生時代土器観察表……………	205

第 14 表	古墳時代土器観察表……………	207
第 15 表	古代土師器・須恵器観察表……………	209
第 16 表	弥生時代装飾品観察表……………	209
第 17 表	縄文時代早期石器観察表……………	210
第 18 表	縄文時代後・晩期遺構内出土石器観察表……………	211
第 19 表	弥生時代遺構内出土石器観察表……………	212
第 20 表	古墳時代遺構内出土石器観察表……………	212
第 21 表	II層遺構内出土石器観察表……………	212
第 22 表	V層出土の石器観察表……………	212
第 23 表	IV層出土の石器観察表……………	213
第 24 表	II層他出土の石器観察表……………	213
第 25 表	古墳時代遺構内出土鉄器観察表……………	214

図版目次

巻頭図版 1 町田堀遺跡遠景 (南東から)
 巻頭図版 2 古墳時代土器集合

図版 1	縄文時代早期の遺構 1……………	239
	① 1号集石, ② 4号集石, ③ 5号集石 ④ 6号集石, ⑤ 2号集石, ⑥ 3号集石	
図版 2	縄文時代早期の遺構 2……………	240
	① 7号集石, ② 9号集石, ③ 10号集石, ④ 11号集石 ⑤ 12号集石, ⑥ 13号集石, ⑦ 14号集石, ⑧ 15号集石	

図版 3	縄文時代早期の遺構 3……………	241
	① 16号集石, ② 17号集石, ③ 18号集石, ④ 19号集石 ⑤ 20号集石, ⑥ B-4 遺物出土状況 ⑦ D-4 遺物出土状況, ⑧ A-4 遺物出土状況	
図版 4	縄文時代後期の遺構 1……………	242
	縄文後期 1号竪穴住居跡	
図版 5	縄文時代後期の遺構 2……………	243
	①～③ 2号竪穴住居跡, ④・⑤ 3号竪穴住居跡 ⑥・⑦ 4号竪穴住居跡	

図版6 縄文時代後期の遺構 3	244	縄文時代の遺物7 (後期・遺構)	
①～③1号埋設土器, ④～⑥2号埋設土器		図版22	260
図版7 縄文時代後期の遺構 4	245	縄文時代の遺物8 (後期・遺構)	
①～③3号埋設土器, ④・⑤土坑1号		図版23	261
⑥・⑦土坑2号		縄文時代の遺物9 (後期・遺構)	
図版8 縄文時代後期の遺構 5	246	図版24	262
①～④土坑3号, ⑤・⑥土坑4号, ⑦土坑5号		縄文時代の遺構10 (後期・遺構)	
⑧土坑7号		図版25	263
図版9 縄文時代後期の遺構 6	247	縄文時代の遺物11 (後期・包含層)	
①・②土坑11号, ③・④土坑15号, ⑤・⑥土坑17号		図版26	264
⑦・⑧土坑18号		縄文時代の遺物12 (後期・包含層)	
図版10 弥生時代の遺構 1	248	図版27	265
①～④1号竪穴住居跡		縄文時代の遺物13 (後期・包含層)	
図版11 弥生時代の遺構 2	249	図版28	266
①2号竪穴住居跡, ②1号掘立柱建物跡		縄文時代の遺物14 (後・晩期・包含層)	
③～⑤土坑1号, ⑥・⑦遺物集中域		図版29	267
図版12 古墳時代の遺構 1	250	弥生時代の遺物1 (遺構)	
①～③1号地下式横穴墓, ④・⑤2号地下式横穴墓		図版30	268
⑥・⑦3号地下式横穴墓		弥生時代の遺物2 (遺構)	
図版13 古墳時代の遺構 2	251	図版31	269
①～③4号地下式横穴墓, ④土器破碎祭祀遺構		弥生時代の遺物3 (包含層)	
⑤・⑥2号溝遺構		図版32	270
図版14 II層検出の遺構	252	弥生時代の遺物4 (包含層)	
①・②1号掘立柱建物跡, ③2号掘立柱建物跡		図版33	271
④3号掘立柱建物跡, ④・⑤4号掘立柱建物跡		古墳時代の遺物1 (遺構)	
⑦・⑧5号掘立柱建物跡		図版34	272
図版15	253	古墳時代の遺物2 (遺構)	
縄文時代の遺物1 (後期・遺構)		図版35	273
図版16	254	古墳時代の遺物3 (遺構・包含層)	
縄文時代の遺物2 (早期・遺構)		図版36	274
図版17	255	古墳時代の遺物4 (包含層)	
縄文時代の遺物3 (早期・包含層)		図版37	275
図版18	256	古墳時代の遺物5 (包含層)	
縄文時代の遺物4 (早期・包含層)		図版38	276
図版19	257	古墳時代の遺物6 (包含層)	
縄文時代の遺物5 (早期・包含層)		図版39	277
図版20	258	II層出土の石器1	
縄文時代の遺物6 (早期・包含層)		図版40	278
図版21	259	II層出土の石器2	

第1章 発掘調査の経過

第1節 調査に至るまでの経緯

鹿児島県教育委員会は、文化財の保護・活用を図るため、各開発関係機関との間で、事業区域内における文化財の有無及びその取り扱いについて協議し、諸開発との調整を図ってきた。

この事前協議制に基づき、日本道路公団九州支社鹿児島工事事務所(現西日本高速道路株式会社)は東九州自動車道(志布志IC～末吉財部IC)建設を計画し、当該事業区間における埋蔵文化財の有無について鹿児島県教育委員会に照会を行った。

これを受けて、鹿児島県教育庁文化財課(以下、「文化財課」という。)は平成12年2月志布志IC～鹿屋串良JCT間の埋蔵文化財分布調査を実施したところ、50か所の遺跡(総表面積 854,100㎡)の存在が判明した。この分布調査の結果をもとに、事業区間内の埋蔵文化財の取り扱いについて、日本道路公団九州支社鹿児島工事事務所、鹿児島県土木部道路建設課高速道対策室、文化財課、県立埋蔵文化財センター(以下、「埋文センター」という。)の4者で協議を重ね対応を検討してきた。

その後、日本道路公団民営化の政府方針が提起され、事業計画の見直しと建設コストの削減も検討することとなった。このような社会情勢の変化や、道路建設工事計画に伴い、遺跡についてもより綿密な把握が求められることとなり、埋蔵文化財の詳細分布調査と試掘調査及び確認調査が実施されることとなった。なお、志布志IC～鹿屋串良JCT間については、平成14年4月に再度分布調査を実施し、遺跡の総表面積を289,000㎡と報告した。

その後、日本道路公団民営化の閣議決定と新直轄方式に基づく道路建設の確定、平成16年3月に国土交通省九州地方整備局長、日本道路公団九州支社長、鹿児島県知事の間で新直轄方式施工に伴う確認書が締結された。工事は日本道路公団が国土交通省から受託し、発掘調査は日本道路公団が鹿児島県へ再委託することとなり、これまでの確認書、協定書はそのまま生きるということになった。また、日本道路公団からの再委託は曾於弥五郎ICまでで終了し、曾於弥五郎ICからの先線部は国土交通省からの受託事業となった。

なお、平成21年度までの当該区間の確認調査は、事業の円滑な推進を図る観点から本発掘調査の手順の中で国土交通省の事業費により行ってきたが、平成23年度からは文化庁の国庫補助事業を受けて、鹿児島県教育委員会が県内遺跡事前調査事業として実施することとした。

平成24年度の県内遺跡事前調査事業として、東九州

自動車建設に係る確認調査が町田堀遺跡の他に3遺跡を対象として実施された。町田堀遺跡では縄文時代・弥生時代・古墳時代の遺物包含層が確認され、弥生時代の住居跡や古墳時代の地下式横穴墓等の遺構も確認された。

近年、東九州自動車等の国道路建設事業等の増加に伴い、埋蔵文化財調査の事業量も増大することが見込まれ、その対応が困難な状況となりつつあった。そこで、公益財団法人鹿児島県文化振興財団埋蔵文化財調査センター(以下「埋文調査センター」という。)を平成25年に設立し、国関係の事業に係る発掘調査をより円滑かつ効率的に実施することとなった。

また、事業の効率化を図るために平成24年度から発掘調査の支援業務を民間調査組織へ委託することとなり、平成25年度から埋文調査センターが発足するにあたり「埋蔵文化財発掘調査支援業務の委託実施要項」を策定し、それに基づき、株式会社埋蔵文化財サポートシステムへ発掘調査の委託を行った。平成26年度には、株式会社埋蔵文化財サポートシステムへ整理作業支援業務を委託した。平成27年度には、国際文化財株式会社へ整理作業及び報告書作成作業支援業務を委託した。平成27年度・平成28年度は埋文調査センターで発掘調査及び整理作業、平成29年度は報告書作成作業を行った。

第2節 事前調査

期間 平成24年8月1日～平成24年11月28日

調査体制

調査主体	鹿児島県教育委員会
企画・調整	鹿児島県教育庁文化財課
調査総括	鹿児島県立埋蔵文化財センター
所長	寺田 仁志
調査企画	鹿児島県立埋蔵文化財センター
次長兼総務課長	新小田 譲
次長	井ノ上秀文
調査第一課長	堂込 秀人
調査第一課第二調査係長	大久保浩二
調査担当	鹿児島県立埋蔵文化財センター
文化財主事	吉岡 康弘
文化財研究員	今村 結記
事務担当	鹿児島県立埋蔵文化財センター
主査	下堂蘭晴美

第3節 本調査の経過

本調査は、平成25年6月3日～平成26年1月28日、

平成26年8月4日～10月28日、平成27年12月11日～平成28年2月25日、平成28年5月15日～平成29年2月24日の期間実施した。各調査の調査体制等詳細については、以下のとおりである。なお、ここでは本書の対象である平成26～28年度の経過について述べることにする。

調査体制（平成26年度）

事業主体 国土交通省九州地方整備局大隅河川国道事務所
調査主体 鹿児島県教育委員会
調査総括 (公財)埋蔵文化財調査センター
センター長 堂込 秀人
調査企画 (公財)埋蔵文化財調査センター
総務課長兼係長 山方 直幸
調査課長 八木澤一郎
調査第一係長 中村 和美
調査担当 (公財)埋蔵文化財調査センター
文化財専門員 平木場秀男
〃 大岩本博之
文化財調査員 下田代清海
〃 稲垣 友裕
〃 勝田 裕介
事務担当 (公財)埋蔵文化財調査センター
主 査 岡村 信吾

調査の経過

平成26年度は、A～F-1～5区、B～F-6～8区、D～F-9～11区、F～G-11～12区の調査を行った。

調査の経過については、日誌抄を月ごとに集約して記した。

平成26年8月

A～F-1～5区：表土剥ぎ・Ⅱ・Ⅲ層掘り下げ。Ⅴ層上面コンター図作成。B～F-6～8区：Ⅲ層上面コンター図作成。F～G-11～12区：表土剥ぎ・Ⅱ層掘り下げ。遺物取り上げ。遺構配置図作成。

平成26年9月

A～F-1～5区：Ⅱ層掘り下げ。B～F-6～8区：表土剥ぎ・地下式横穴墓の竪坑検出。F～G-11～12区：Ⅱ層掘り下げ・Ⅲ層上面遺構検出。Ⅲ・Ⅳ層掘削・Ⅴ層上面遺構検出。

平成26年10月

A～F-1～5区：Ⅱ層掘り下げ。B～F-6～8区：表土剥ぎ・地下式横穴墓の調査。D～E-9～11区：表土剥ぎ・Ⅱ層掘り下げ。F～G-11～12区：Ⅱ層掘り下げ・Ⅲ層上面遺構検出。Ⅲ・Ⅳ層掘削・Ⅴ層上面遺構検出。

記録保存調査を終了する。

調査体制（平成27年度）

事業主体 国土交通省九州地方整備局大隅河川国道事務所
調査主体 鹿児島県教育委員会
調査総括 (公財)埋蔵文化財調査センター
センター長 堂込 秀人
調査企画 (公財)埋蔵文化財調査センター
総務課長兼係長 有村 貢
調査課長 八木澤一郎
調査第一係長 中村 和美
調査担当 (公財)埋蔵文化財調査センター
文化財専門員 三垣 恵一
文化財調査員 下田代清海
〃 宮田 大之
事務担当 (公財)埋蔵文化財調査センター
主 査 荒瀬 勝己

調査の経過

平成27年度は、A～F-1～8区、F・G-10・11区の調査を埋文調査センターが行い、遺構実測の一部を、(株)パスコに委託した。

調査の経過については、日誌抄を月ごとに集約して記した。

平成27年12月

A～F-1～8区：表土剥ぎ・Ⅱ層掘り下げ。F・G-10・11区：表土剥ぎ・Ⅱ層掘り下げ。

平成28年1月

A～F-1～8区：Ⅱ層掘り下げ。B～F-6～8区：表土剥ぎ・地下式横穴墓の竪坑検出掘り下げ。F・G-10・11区：Ⅱ層掘り下げ・Ⅲ層上面遺構検出。Ⅲ・Ⅳ層掘削・Ⅴ層上面遺構検出。

平成28年2月

A～F-1～8区：Ⅱ層掘り下げ。B～F-6～8区：表土剥ぎ・地下式横穴墓の調査。D～E-9～11区：表土剥ぎ・Ⅱ層掘り下げ。F～G-11～12区：Ⅱ層掘り下げ・Ⅲ層上面遺構検出。Ⅲ・Ⅳ層掘削・Ⅴ層上面遺構検出。

記録保存調査を終了する。

調査体制（平成28年度）

事業主体 国土交通省九州地方整備局大隅河川国道事務所
調査主体 鹿児島県教育委員会
調査総括 (公財)埋蔵文化財調査センター
センター長 堂込 秀人
調査企画 (公財)埋蔵文化財調査センター
総務課長兼係長 有村 貢
調査課長 八木澤一郎

調査第二係長	宗岡 克英
調査担当 (公財)埋蔵文化財調査センター	
文化財専門員	吉岡 康弘
〃	立神 倫史
〃	石畑 浩一
文化財専門員	平 美典
〃	徳永 愛雄
文化財調査員	大坪 啓子
〃	中村 有希
事務担当 (公財)埋蔵文化財調査センター	
主 査	荒瀬 勝巳
現地指導元 (公財)埋蔵文化財調査センター	
文化財専門員	中村 耕治

調査の経過

調査を実施するにあたり、遺跡全体を道路や畦畔により区分し、西から調査区を設定した。G-100区・1～2区、H-1～3、I-2～3区、A～D-3～8区、F～I-17～19区、E～F-9～13区の調査を行った。

調査の経過については、日誌抄を月ごとに集約して記した。

平成28年5月

環境整備、A～D-3～7区：Ⅷ～Ⅸ層掘り下げ。遺構精査・遺構検出。

平成28年6月

B～D-3～7区：Ⅷ～Ⅸ層掘り下げ。Ⅸ層遺構検出・実測・遺物取り上げ。土坑検出・Ⅸ層上面コンター図作成。

平成28年7月

H・J-2・3区、F・G-1区：Ⅱ～Ⅲ層掘り下げ。市道部分G～J-1～3区：表土剥ぎ・遺物取り上げ。

平成28年8月

H-1区土器集中遺構検出。実測・遺物取り上げ。G～I-1～3、98～100区：Ⅵ・Ⅶ層掘り下げ。遺物取り上げ・Ⅴ層上面コンター図作成。G～I-18～20区：Ⅱ層掘り下げ・遺構精査。

平成28年9月

G-100区遺構検出。実測・写真撮影。G～I-1～3区：Ⅷ層掘り下げ。Ⅸ層上面遺構精査・土層断面図作成・Ⅸ層上面コンター図作成・撤収作業。F～I-17～19区養生。

平成29年1月

環境整備、荷物搬入。F・G・H-17～20区：掘り下げ。I-19区地下式横穴墓検出。写真撮影・実測・Ⅱ層掘り下げ。遺構検出・遺物取り上げ。

平成29年2月

G・H・I-19区：遺構検出。写真撮影・実測。E・F-9～12区：Ⅱ・Ⅲ層掘り下げ。土層断面図作成。

記録保存調査を終了する。

第4節 整理作業・報告書作成

報告書刊行に伴う整理・報告書作成作業は、平成28年度に整理作業のみを、平成29年度には報告書刊行に向けた作業を、いずれも(公財)埋蔵文化財調査センター第一整理作業所で実施した。

作成体制(平成28年度)

事業主体	国土交通省九州地方整備局大隅河川国道事務所
調査主体	鹿児島県教育委員会
調査総括	(公財)埋蔵文化財調査センター センター長 堂込 秀人
調査企画	(公財)埋蔵文化財調査センター 総務課長兼係長 有村 貢 調査課長 八木澤一郎 調査第二係長 宗岡 克英
整理担当	(公財)埋蔵文化財調査センター 文化財専門員 繁昌 正幸 文化財調査員 新屋敷久美子
事務担当	(公財)埋蔵文化財調査センター 主 査 荒瀬 勝巳

作業の経過

平成28年7月

土器・石器水洗い。石器実測委託準備。土器接合・復元。

平成28年8月

土器・石器水洗い、注記。分類・接合。図面整理。石器実測委託。

平成28年9月

土器・石器水洗い、注記。分類・接合。図面整理。遺構配置図トレース。

平成28年10月

土器・石器水洗い、注記。分類・接合。遺構配置図トレース。

平成28年11月

遺構内遺物確認、土器・石器水洗い、分類・接合。石器実測委託確認。

平成28年12月

遺構内遺物確認、土器実測、復元、石器実測委託確認。

平成29年1月

図面整理、遺構内遺物確認、土器実測、復元、石器実測委託確認。

平成29年2月

図面整理、遺構内遺物確認、土器実測、復元。

平成29年3月

図面・遺物整理，仮収納。

作成体制（平成29年度）

事業主体 国土交通省九州地方整備局大隅河川国道事務所
調査主体 鹿児島県教育委員会
調査総括 (公財)埋蔵文化財調査センター
センター長 前迫 亮一
調査企画 (公財)埋蔵文化財調査センター
総務課長兼係長 中村伸一郎
調査課長 中原 一成
調査第二係長 岩澤 和徳
整理担当 (公財)埋蔵文化財調査センター
文化財専門員 繁昌 正幸
文化財調査員 樋口めぐみ
事務担当 (公財)埋蔵文化財調査センター
主 査 荒瀬 勝巳

作業の経過

平成29年4月

土器・石器水洗い，注記。分類・接合。遺構図・土層断面図確認。原稿執筆・編集。

平成29年5月

土器・石器水洗い，分類・接合。土器実測，拓本，石器実測，土器復元。遺物観察表作成。遺構配置図作成。遺物出土状況図作成。原稿執筆・編集。

平成29年6月

土器実測，拓本，石器実測，土器復元。遺物観察表作成。遺構配置図作成。遺物出土状況図作成。原稿執筆・編集。

平成29年7月

土器実測・トレース。石器実測・トレース。土器復元。遺物観察表作成。遺構配置図作成。遺物出土状況図作成。原稿執筆・編集。

平成29年8月

土器実測・トレース。石器実測・トレース。土器復元。遺物観察表作成。遺構配置図確認。遺物出土状況図確認。原稿執筆・編集。

平成29年9月

遺物・遺構トレース確認，遺物観察表確認。遺構・遺物レイアウト。土器復元。原稿執筆・編集。写真撮影。

平成29年10月

遺物・遺構トレース確認，遺物観察表確認。遺構・遺物レイアウト仮貼り。土器復元。原稿執筆・編集。写真撮影。

平成29年11月

遺物・遺構トレース確認，遺物観察表確認。遺構・遺物レイアウト本貼り。土器復元。原稿執筆・編集。写真

撮影。

平成29年12月

校正。遺物・遺構トレース確認，遺物観察表確認。原稿執筆・編集。

平成30年1月

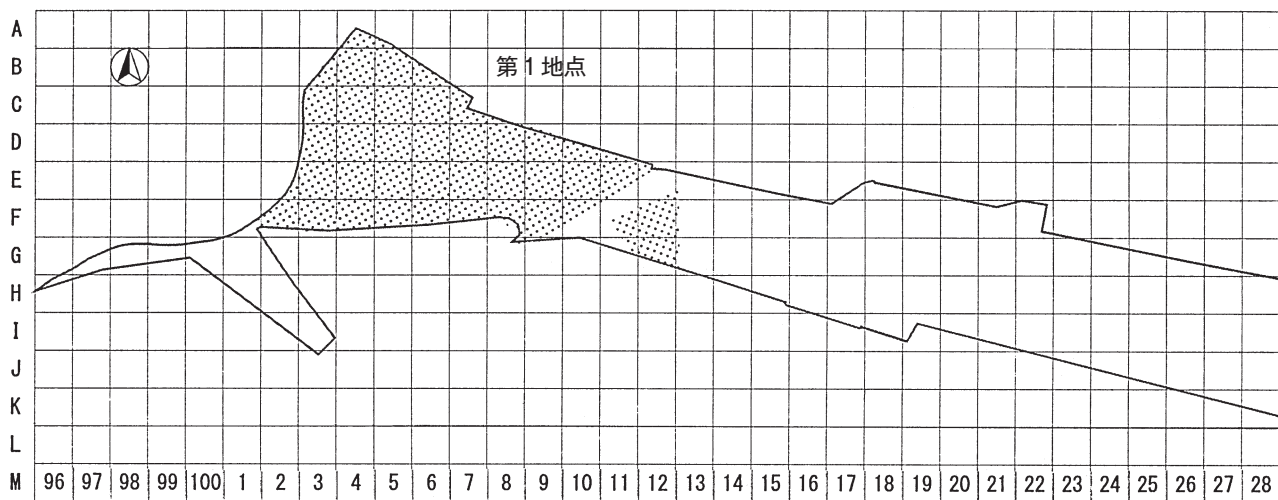
校正。遺物収納準備。

平成30年2月

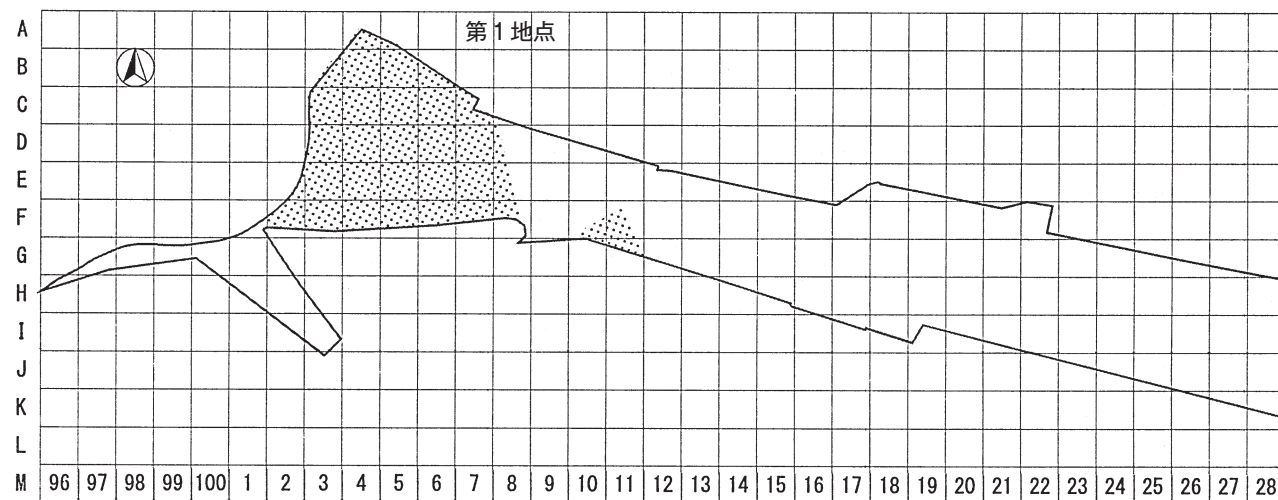
遺物収納。

平成30年3月

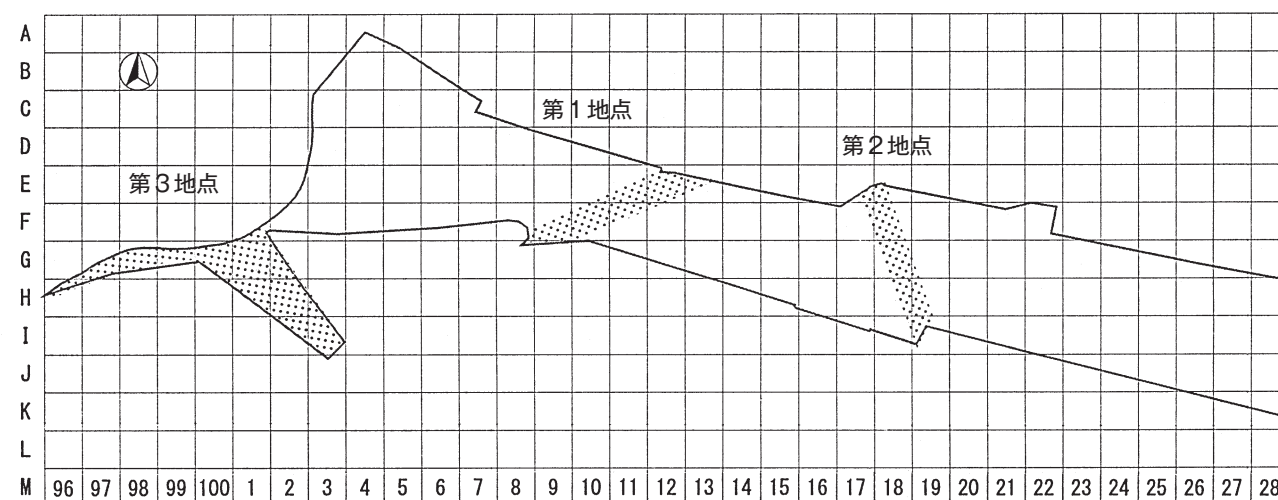
図面収納。報告書納品。



平成26年度



平成27年度



平成28年度

第1図 年度別調査範囲図

第2章 遺跡の位置と環境

第1節 地理的環境

鹿屋市串良町は、大隅半島東南部のほぼ中央に位置し、東には肝属郡東串良町、南には肝属川を隔てて肝属郡肝付町、西には鹿屋市東原町、旭原町、笠之原町、北東は立小野台地を隔てて曾於郡大崎町と接している。

鹿屋市が位置する大隅半島は、九州山地の延長をなす東西方向の山地が北部と南部にあり、その間を丘陵や台地及び低地等から構成され、地質は大部分がシラスやボラ等の火山灰土壌である。

東側の山地は、志布志湾北部から宮崎県側に突き出した形で北から南へ延びる鰐塚山地である。主峰は宮崎県内の鰐塚山(1,119 m)で中生層の地質からなっている。

西側の山地は北部の霧島火山の分脈から湾奥に形成された始良カルデラのカルデラ壁を含み、南部の高隈連山へと連なっている。高隈山地は、北部の白鹿岳・荒磯岳等の標高500~600 m級の山々と、南部の大籠柄岳(1,236.8 m)を主峰とする横岳・御岳等の1,000 m級の山からなる山地で、山容は急峻で深い森林に覆われている。

先述したように、東西の山地は、ともに九州山地の延長をなし、それらの間は低地帯となり丘陵や台地及び低地となっている。これらの山間地を埋めるような形で、洪積世の火山活動による火砕流が堆積し、丘陵や台地が広く分布したシラス地形となっている。この火砕流は、南西部の鹿児島湾口に形成された阿多カルデラの火砕流や湾奥に形成された始良カルデラの入戸火砕流である。これらの火砕流をはじめとする噴出物が、堆積直後から現在に至るまで大小多くの河川で開析され、断片的な台地を残すだけの丘陵状地形や、原面がほとんど浸食されずに残った広大な台地となっている。

一方、低地には、高隈山地や鰐塚山地等を水源とする大小の河川が走り、志布志湾、鹿児島湾等に注いでいる。この河川は、上・中流域で狭い谷底平野を形成し、また、何段かの河岸段丘も認められる。

この大隅半島に位置する串良町の地形は、東西に6.5km、南北に13kmの狭長で北部の山地中央部の台地と南部の低地に大別されるが山地は少なく、大部分は笠野原台地と呼ばれる平坦なシラス台地から成っている。台地は「黒二ガ」と呼ばれる黑色火山灰土壌に覆われており、広大な畑地帯が形成されている。南部及び東部は肝属川とその支流の串良川が流れ、それによる沖積地が広がり、約695haの水田地帯を形成している。また、北部には低い丘陵性の山地が存在するが、町域に占める割合は少ない。

町田堀遺跡は、この串良町の北東部に位置し、笠野原

台地の縁辺部に位置する。当遺跡の北及び東側を串良川が蛇行しながら南流する。

第2節 歴史的環境（周辺の遺跡を中心に）

串良町では、昭和36年度と昭和50~52年度に分布調査が行われ、数多くの遺跡が周知の埋蔵文化財包蔵地となった。現在までに、詳細分布調査及び確認調査により、それらの遺跡の範囲が確定しつつある。また、串良町における遺跡の大半は、笠野原台地の縁辺部に集中して立地していることが明らかになっている。ここでは、町田堀遺跡周辺の主要な遺跡を中心としながら、近隣市町の遺跡も含め時代別に紹介する。東九州自動車道関連遺跡については、第1章第3節において記すことにする。

1 旧石器時代

旧石器時代の遺跡は本遺跡周辺の二子塚A遺跡において旧石器時代の可能性のある剥片が数点出土しているほか、本遺跡からやや離れるが国道220号鹿屋バイパス建設に伴って発掘調査が行われた西丸尾遺跡・榎崎A遺跡・榎崎B遺跡でナイフ形石器文化期~細石刃文化期の遺構・遺物が確認されている。

2 縄文時代

早期の遺跡としては田原迫ノ上遺跡・益畑遺跡・下堀遺跡・古園遺跡・石縊遺跡・十三塚遺跡等があげられる。本遺跡より東に2km離れた益畑遺跡では、早期の竪穴住居跡2軒、連穴土坑16基、集石遺構85基、土坑160基が検出されている。竪穴住居跡の埋土に桜島起源の軽石(P13)がレンズ状に堆積していることから霧島市上野原遺跡とほぼ同様の状況が窺える。田原迫ノ上遺跡は早期の竪穴住居跡21軒、連穴土坑40基、集石遺構192基、石器製作跡5基が検出されている。早期中葉の石坂式土器を主体とし、早期中葉から早期後葉をつなぐ時期の集落として貴重な遺跡である。下堀遺跡では集石遺構13基が検出され、前平式土器・手向山式土器・塞ノ神式土器等が出土している。古園遺跡では、早期の石坂式土器に比定される山形波状口縁をもった貝殻条痕文の円筒土器が確認されている。石縊遺跡では、遺構は縄文時代早期の集石遺構と土坑が検出された。また、隣接する十三塚遺跡では縄文時代早期の石坂式土器等が出土している。前期の遺跡としては、神野牧遺跡・石踊遺跡などがあげられる。神野牧遺跡では集石遺構3基が検出され、曾畑式土器・深浦式土器等が出土している。石踊遺跡では、深さ10cmの落ち込みの中に、磨石・敲石5個と角礫1個の上に約20cmの大きさの五角形状の板石が乗った状態で検出された集積遺構1基、曾畑式土器・轟式土器

が出土している。

中期の遺跡としては、前谷遺跡・岩崎遺跡などがあげられる。前谷遺跡では竪穴住居跡5軒（方形状3軒・円形状2軒）及び集石遺構1基などが検出され、春日式土器が出土している。後・晩期の遺跡としては、釜ヶ宇都遺跡・二子塚B遺跡・ホンドンガマ遺跡・十三塚遺跡・柿木段遺跡等があげられる。ホンドンガマ遺跡では、後期の市来式土器に比定できる土器、石匙、打製石斧等の遺物が確認されており、十三塚遺跡では凹線文土器・市来式土器・三万田式土器や晩期の黒川式土器が出土している。牧山遺跡では西平式土器・中岳Ⅰ式・Ⅱ式土器などが出土し、後期のピットにおいて、遺物が環状に集中する範囲の内側から同心円状に検出されており、環状集落を呈していたと考えられる。晩期の遺構としては、宮下遺跡・柿之木段遺跡などがあげられる。宮下遺跡では黒川式土器・夜臼式土器並行の刻目突帯文土器・組織痕土器（平織り）が出土している。柿木段遺跡では晩期の落とし穴・土坑のほか、石斧埋納遺構が検出されている。

3 弥生時代

本県全体として言えることであるが、大隅半島においても前期の遺跡はわずかで、確認できる遺跡も規模としては小さく、分布状況も散発的である。そのような中であって、先述した宮下遺跡は、縄文時代晩期から弥生時代前期への移行期にあたる遺跡と思われる、その意味でも貴重と言える。

上述のように、前期の遺跡は当遺跡から東に約10km離れた大崎町沢目遺跡や天神段遺跡等があげられるなど、わずかしか確認されていない。中期以降の遺跡としては、吉ヶ崎遺跡・西ノ丸遺跡・下堀遺跡・王子遺跡・十三塚遺跡・益畑遺跡・田原迫ノ上遺跡等多くの遺跡があげられる。吉ヶ崎遺跡では、中期の竪穴住居跡が3軒確認されており、特に1号住居跡はベッド状の遺構をもち、床面には焼土や炭化物が多く見られたことから、焼失した家屋と考えられている。そのために、甕形土器・壺形土器の完形品が各4点と磨製石鏃・磨製石斧等が竪穴住居跡の床面から発見されており、1軒の住居で使われていた道具の構成を考える上で貴重な資料といえる。下堀遺跡では竪穴住居跡7軒が検出され、土製勾玉も出土している。石縊遺跡では弥生時代の遺構は確認されていないが山ノ口式土器等が出土している。十三塚遺跡では、弥生時代中期の竪穴住居跡が8軒検出されており、方形や花卉形等に分類されている。竪穴住居跡内からは、甕形土器や壺形土器のほか、棒状叩具・磨製石鏃・鉄鏃等が出土している。また、掘立柱建物跡が3棟と土坑7基が検出されている。田原迫ノ上遺跡では、竪穴住居跡31軒や掘立柱建物跡40棟（そのうち、棟特柱を持つ掘立柱建物跡が2棟）と柱穴列が6列検出され、山ノ口式土器と多くの土製加工品も出土している。調査区外に延

びる大型建物跡と考えられる柱穴列は、協議により、現地にそのまま保存されることとなった。

4 古墳時代

大隅半島、特に志布志湾沿岸部は古くから唐仁古墳群や塚崎古墳群、横瀬古墳をはじめとする多くの古墳が存在することが知られている。また、南九州特有の地下式横穴墓も多く分布する地域でもある。

町田堀遺跡の周辺には、立小野堀遺跡・牧山遺跡・上小原古墳群・下堀遺跡・岡崎古墳群等が存在する。立小野堀遺跡では約190基の地下式横穴墓と鉄剣や鉄鏃等数多くの副葬品が出土している。副葬品の中の青銅鈴は環鈴の転用品で、国内最古級のものであることが判明した。上小原古墳群では、前方後円墳1基と円墳20基、それに地下式横穴墓が確認されている。地下式横穴墓では赤彩された軽石製石棺をもつものや、大型で玄室床面に粘土床をもつものが確認されている。岡崎古墳群は、18基の高塚墳と数基の地下式横穴墓が確認されているが、同じ台地上に高塚墳と地下式横穴墓が存在しており、4号墳・16号墳・17号墳・18号墳では高塚墳の周溝内に竪坑を掘って造られた地下式横穴墓が複数基確認されている。岡崎古墳群では、18号墳の2号地下式横穴墓で確認された須恵器が、愛媛県伊予市の市場南組窯産と考えられるものであった。また、鉄鋌・U字型鍬鋤先・鑷子状鉄製品等の朝鮮半島系遺物のほか、琉球列島産のイモガイ製貝鈎等により、広域交流を積極的に行っていたことが想定されている。下堀遺跡では須恵器が出土した竪穴住居跡や溝状遺構等のほか、地下式横穴墓5基が確認されており、地下式横穴墓2号からは大隅半島では初見となる異形鉄器が出土している。また、地下式横穴墓周辺からは高坏や埴が意図的に置かれたような状態で発見され、祭祀遺構の可能性が考えられる。

集落遺跡としては、小牧遺跡・川久保遺跡があげられる。小牧遺跡では一般的な竪穴住居跡9軒のほかに、花卉形住居跡2軒が検出されている。また、礫集積遺構8基も確認された。川久保遺跡では竪穴住居跡27軒（うち、鍛冶関連の建物跡と考えられるもの2軒）が検出され、鉄滓・鞆の羽口等が出土している。中でも、鞆の羽口は高坏脚部の転用品ばかりでなく、専用の羽口として作られた可能性があるものも出土している。

5 古代及び中世以降

稲村城跡・下堀遺跡・柿木段遺跡・十三塚遺跡があげられる。岡崎古墳群とは甫木川を挟んだ西側の丘陵上に位置する稲村城跡は、16基の近世墓のほか、土師器・青白磁・染付・備前焼・東播焼等が確認されている。下堀遺跡では土坑墓・畑の畝跡・溝状遺構のほか、多くの柱穴・土坑や近世の可能性が高い鍛冶炉も検出されている。柿木段遺跡では古代のカマド跡・溝状遺構・古道、中世から近世にかけてのものと考えられる溝状遺構・道跡・

土坑が検出された。十三塚遺跡では古道跡が8条検出されており、陶磁器片の出土から近世以降のものである可能性が考えられている。

第3節 東九州自動車道関連の遺跡

東九州自動車道については、平成26年度に鹿屋串良JCTから加治木JCTまでの間が開通している。現在、志布志ICから鹿屋串良JCTまでの間で、工事や埋蔵文化財の発掘調査が行われている。

埋蔵文化財の調査は、平成20年度から石縊遺跡・十三塚遺跡が開始され、第3図及び第2表にあるように平成28年度までに23遺跡の調査が行われている。

旧石器時代の遺跡としては、荒園遺跡・永吉天神段遺跡と牧山遺跡の3遺跡がある。現在調査中の小牧遺跡や川久保遺跡からも確認された。荒園遺跡では、細石器文化期の細石刃・畦原型細石核が出土している。永吉天神段遺跡ではナイフ形石器や尖頭器が出土している。

多くの遺跡で発見されているのが縄文時代に関する情報である。縄文時代早期では堅穴住居跡・連穴土坑・礫の集積遺構・落とし穴・石器製作跡等の遺構から、集落跡として認知されている田原迫ノ上遺跡をはじめ18遺跡が確認されている。縄文時代早期の遺物は、石坂式・塞ノ神式等早期中葉から後葉の時期のものが多く、前平式土器等早期前半の遺物が出土する遺跡は数少ない。大隅半島ではアカホヤ火山灰の堆積が厚く、その下位にある縄文時代早期の遺物は保存状態がよいものが多く、土器では復元可能な個体も多く出土している。

縄文時代前期・中期・後期の遺跡は少ないが、牧山遺跡からは轟式土器の埋設遺構が検出されている。京の塚遺跡では中期前半の深浦式土器が多量に出土し、近畿系・瀬戸内系の土器も見られる。また、土坑も数多く検出されている。田原迫ノ上遺跡では、池田軽石層直上から曾畑式土器が出土している。

縄文時代後期では町田堀遺跡で後期後半の中岳Ⅱ式が出土し、平成25年度調査では堅穴住居跡3軒も検出されている。1軒の堅穴住居跡からは石刃が出土し、話題となった。牧山遺跡からは西平式土器・市来式土器・丸尾式土器が出土し、田原迫ノ上遺跡からは指宿式土器・市来式土器、京の塚遺跡からは辛川式土器・丸尾式土器・西平式土器・中岳Ⅱ式土器がそれぞれ出土している。

縄文時代晩期では、黒川式土器が十三塚遺跡・立小野堀遺跡・田原迫ノ上遺跡・川久保遺跡・京の塚遺跡等から出土している。

弥生時代では多くの遺跡で中期の山ノ口式土器が出土し、石縊遺跡・田原迫ノ上遺跡・永吉天神段遺跡で堅穴住居跡が多く検出され、集落を形成している状況が確認されている。永吉天神段遺跡では円形周溝墓を中心とした土坑墓群も発見されている。土坑墓には鉄鏃を副葬す

る墓もある。また、数は少ないが町田堀遺跡・川久保遺跡・荒園遺跡でも堅穴住居跡が検出されている。

古墳時代では立小野堀遺跡・町田堀遺跡で多くの地下式横穴墓が発見され、副葬品も鉄器をはじめ豊富な状況である。堅穴住居跡は川久保遺跡・荒園遺跡・春日堀遺跡で検出されている。川久保遺跡では鍛冶工房跡が発見され、それに伴う遺物も出土している。荒園遺跡では焼失家屋も検出された。

古代・中世は遺跡の数は少ないが、永吉天神段遺跡で中世の土坑墓が検出され銅鏡や滑石製石鍋も出土している。川久保遺跡では中世の掘立柱建物跡が検出されている。

第4節 遺跡及び遺跡周辺の地形

町田堀遺跡は笠野原台地の中央部東側の端部に位置しており、遺跡を中心とした地域としては北側及び西側は傾斜面となって串良川に至っている。

標高約90mのほぼ平坦な台地であるが、北側にはおおそ東西方向に延びる、比高差約20mほどの小さな丘陵がある。

小丘陵の北側には2段ほどの河岸段丘が見られ、段丘と段丘の狭隘な段丘には串良川と並行するように家屋が所在する。

町田堀遺跡は小さな丘陵の南側に広がる遺跡と考えられ、北側はこの小丘陵まで、西側は崖端部までと想定されるものの、東側及び南側の境界は不明といわざるを得ない。それは、北及び西側は遺跡の広がりを丘陵又は崖によって遮断されるが、東及び南側は平坦な台地がある程度延びることによって明確な境界を見いだすことができないからである。

ただ、大まかには、東の端は平成25年度の調査によって遺構や遺物の密度が急激に薄くなる、北側の小丘陵の中央部付近ではないかと考えられる。

しかし、南側は発掘調査で限界の所在を示すような遺構・遺物密度の急激な減少は見られなかったことから、不明といわざるを得ない。

遺跡の調査は、この町田堀遺跡の北側の小丘陵と西側の崖端部に囲まれた範囲を、幅約30~50mほどで設定された東九州自動車道の計画路線に沿って行われた。

調査に入る前の地形は、若干南側に向けて傾斜が見られるものの、台地特有の平坦な地形を呈しており、調査を行った段階でも層序が欠失するようなことはなく、極めて整然とした堆積状況を示しており、大隅半島で広範囲に見られる黒ニガと呼ばれる黒色土が幾層にも厚く堆積している地域と言える。

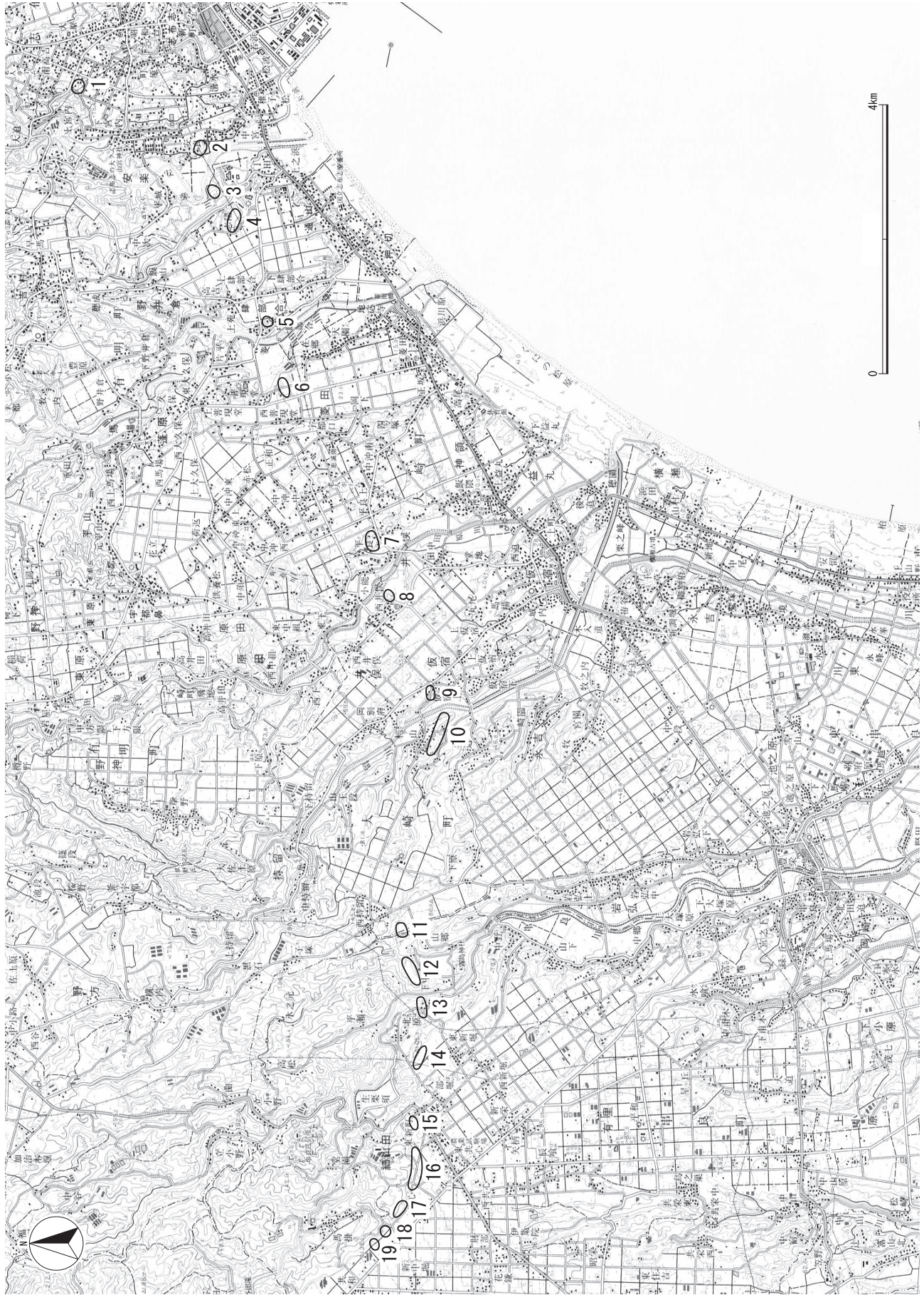
ただ、調査区の場合によっては、各層の堆積状況に違いが見られ、そのことから下部の地形は異なっているところも見られた。



第2図 周辺遺跡位置図 (1/25,000)

第1表 周辺遺跡一覧表

番号	遺跡名	所在地	地形	時代	備考
1	町田堀遺跡	鹿屋市串良町細山田アタゴ山	台地	弥生, 古墳	本報告書
2	遠見ヶ丘遺跡	曾於郡大崎町野方立小野	台地	中世	
3	立小野A・B遺跡	鹿屋市串良町細山田立小野	台地	縄文	
4	立小野遺跡	鹿屋市串良町細山田立小野	台地	縄文(後), 弥生	
5	高松遺跡	鹿屋市串良町細山田高松	台地	弥生	
6	二子塚A遺跡	曾於郡大崎町野方二子塚	台地	旧石器, 縄文(早・晩), 弥生, 古墳	平成11年度本調査
7	二子塚B遺跡	曾於郡大崎町持留二子塚	台地	縄文, 弥生	
8	二子塚C遺跡	曾於郡大崎町持留二子塚	山腹緩斜面	弥生(中・後)	
9	大佐土原遺跡	曾於郡大崎町野方大佐土原	台地	弥生(中)	
10	佐土原遺跡	曾於郡大崎町野方4715-2	台地	縄文, 古墳	
11	栢山城跡	曾於郡大崎町持留	扇状地	弥生, 古墳, 中世	別称「山ノ城」, 城跡の正確な場所は不明, 推定
12	川上神社遺跡	曾於郡大崎町持留中持留	台地	縄文(後)	
13	持留牧遺跡	曾於郡大崎町持留牧・東尾ノ鼻	台地	縄文, 古墳	平成9年度農政分布調査
14	茶木遺跡	曾於郡大崎町持留1406-2	台地	古墳	
15	京の塚遺跡	曾於郡大崎町下原 鹿屋市串良町下中京の塚	台地	縄文(早～晩)	平成25～27年度本調査
16	細山田段遺跡	曾於郡大崎町下原 鹿屋市串良町下中京の塚	台地	縄文(後・晩), 弥生(前), 古墳	平成8年度農政分布調査, 平成11年度農政分布調査で拡大
17	益畑遺跡	鹿屋市串良町細山田益畑	洞窟	縄文, 弥生	
18	ホンドンガマ遺跡	鹿屋市串良町細山田下中	丘陵	縄文	シラス洞窟で崩壊しつつある
19	霧島城跡	鹿屋市串良町細山田下中	丘陵	中世	
20	小牧遺跡	鹿屋市串良町細山田小牧	台地	縄文, 弥生, 古墳	平成27～29年度本調査
21	川久保遺跡	鹿屋市串良町細山田川久保	台地	縄文, 弥生	平成26～29年度本調査
22	北原古墳群	鹿屋市串良町細山田北原	台地	古墳	
23	北原墓地逆修古石塔群	鹿屋市串良町細山田北原	台地	中世(鎌倉末)	
24	北原城跡	鹿屋市串良町細山田生栗須	台地	中世(南北朝)	
25	細山田城跡	鹿屋市串良町細山田生栗須	台地	中世	
26	生栗巢遺跡	鹿屋市串良町細山田生栗須	台地	弥生	
27	牧山遺跡	鹿屋市串良町細山田牧山	台地	弥生, 古墳	平成11年度分布調査, 平成12年度試掘調査, 平成25～29年度本調査
28	入部堀遺跡	鹿屋市串良町細山田入部堀	台地	弥生, 古墳	
29	新堀遺跡	鹿屋市串良町細山田新堀	台地	縄文	
30	是ヶ迫遺跡	鹿屋市串良町細山田是ヶ迫	台地	縄文, 弥生	
31	瓜々良蒔遺跡	鹿屋市串良町有里瓜々良蒔	台地	弥生	平成12年度本調査
32	熊ヶ鼻遺跡	鹿屋市串良町有里熊ヶ鼻	台地	縄文, 弥生	
33	栢場遺跡	鹿屋市串良町有里栢場	台地	弥生	
34	永田堀遺跡	鹿屋市串良町有里永田堀	台地	弥生, 古墳	
35	宮留古墳群	鹿屋市串良町有里	台地	古墳	
36	石塚遺跡	鹿屋市串良町有里石塚	台地	弥生	
37	石塚古墳	鹿屋市串良町有里石塚2169	台地	古墳	
38	牧内古墳	肝属郡東串良町岩弘	台地	古墳	
39	下原遺跡	曾於郡大崎町持留	台地	縄文(後), 弥生, 古墳	
40	岩弘上古石塔	肝属郡東串良町岩弘上共同墓地	台地	中世	
41	上市ノ園古墳群	肝属郡東串良町岩弘	台地	古墳	



第3図 東九州自動車道関連遺跡

第2表 志布志IC～鹿屋串良JCT間の遺跡

(遺跡の番号は、第3図の番号と対応する)

番号	遺跡名	所在地・立地	調査年度	整理・報告書	遺跡の概要		
					時代	主な遺構	主な遺物
1	見婦	志布志市志布志町志布志台地上 標高約70m	H25年度 H28年度 終了 ※H25年度は埋文センター調査	作業中	旧石器	—	細石刃, ナイフ形石器, ハンマーストーン
					縄文早期	土坑	押型文・石坂式・下剥峯式土器, 石鏃, 磨石, 石皿
					縄文前・中期	落とし穴, 土坑	—
					縄文後・晩期	溝状遺構	磨消縄文・丸尾式・西平式・中岳Ⅱ式土器, 磨石, 敲石
縄文時代を中心とした遺跡である。旧石器時代は細石刃並びにナイフ形石器文化期に比定される。縄文時代早期は、土器に比べ石器の出土が極めて少ない。前～中期の落とし穴は2基で、底部に杭跡は確認できなかったが全体形状から想定した。							
	宮ノ上	志布志市志布志町安楽台地上 標高約45m	県教委文化財課の試掘調査により、本路線には遺構・遺物がないことが確認されたため、本調査を実施せず。				
2	安良	志布志市志布志町安楽台地上 標高約30m	H28年度 H29年度 調査中	作業中	縄文早・後期		納曾式・西平式土器
					弥生中期		山ノ口式・須玖式土器
					古墳時代	溝状遺構	笹貫式土器, 須恵器
					古代		土師器, 須恵器
				中世	掘立柱建物跡, 土坑, ビット他	青白磁, 滑石製石鍋, 土師皿	
これまでのところ、古墳時代後半期と中世の複合遺跡であることが判明。調査区内における両時期の集落構造把握等に向けて調査中である。さらに古い時期の包含層も確認されている。							
3	小牧古墳群	志布志市志布志町安楽台地上 標高約50m	H27年度 H28年度 終了	作業中	旧石器	—	細石刃核, 細石刃, ナイフ形石器
					縄文草創期	集石遺構	黒曜石剥片, 土器片, 磨石, 敲石, 石皿
					縄文早期	集石遺構	吉田式・妙見・天道ヶ尾式・塞ノ神A式・塞ノ神B式・苦浜式土器, 耳栓, 石鏃, 磨石, 異形石器
					弥生	—	弥生土器, 石包丁
起伏のある地形に立地し、縄文時代早期を中心に旧石器時代、縄文草創期も出土した複合遺跡。縄文早期の集石は検出層によって構成の大きさに差が見られる。また、塞ノ神式土器の壺形土器や、耳栓、異形石器、円盤状石器等が出土している。古墳群として遺跡登録されているが、これまでの調査では痕跡を含め古墳は確認されていない。							
4	次五	志布志市有明町野井倉台地縁辺部 標高約50m	H27年度 終了	H27年度 終了	旧石器	—	畦原型細石刃核, 細石刃, 剥片
					縄文早期	落とし穴, 連穴土坑, 土坑, 集石遺構, 磨石集積遺構	前平式・加栗山式・吉田式・札ノ元Ⅶ類・石坂式・中原Ⅴ式・下剥峯式・桑ノ丸式・押型文・手向山式・塞ノ神B式土器, 打製・磨製石鏃, 石錘, 局部磨製石斧
旧石器時代から縄文時代早期を中心とする遺跡。旧石器時代は、細石刃文化期の遺物が出土している。縄文時代早期は、前葉に該当する遺構や遺物を多く発見した。既知の当該期遺跡と同様、被熱破砕礫が多量に出土した。							
	大代	志布志市有明町野井倉台地縁辺部 標高約40m	県教委文化財課の試掘調査により、本路線には遺構・遺物がないことが確認されたため、本調査を実施せず。				
5	木森	志布志市有明町野井倉河岸段丘 標高約30m	H26年度 調査中	作業中	縄文早期	集石遺構	前平式・加栗山式・吉田式・下剥峯式・押型文土器, 石鏃, 石匙, 磨石・敲石
					中世	掘立柱建物跡	須恵器, 土師器, 青磁, 白磁, 滑石製石鍋片, 鉄製品, 鉄滓
縄文時代早期と中世を中心とする複合遺跡。遺構では縄文時代早期の集石遺構、中世の掘立柱建物跡等が発見され、遺物では縄文時代早期の土器, 石器, 石匙, 磨石・敲石のほか、須恵器, 土師器, 青磁, 白磁, 滑石製石鍋片, 鉄製品等が出土している。							
6	春日堀	志布志市有明町蓬原河岸段丘 標高約30m	H26年度 H27年度 H28年度 調査中	作業中	縄文早期	竪穴住居跡, 連穴土坑, 集石遺構, 土坑, 土器集中, 炭化物集中, 落とし穴	前平式・加栗山式・石坂式・下剥峯式・桑ノ丸式・押型文・手向山式・塞ノ神式土器, 打製石鏃, 打製・環状石斧, トロトロ石器, 磨石, 台石, 石皿, 砥石, 穿孔円礫
					弥生	竪穴住居跡	山ノ口式土器
					古墳	溝状遺構, 竪穴住居跡, 土坑, 棒状礫集積遺構	甕(笹貫式・東原式土器), 壺, 埴, 高坏, 須恵器高坏, 棒状礫, 磨製石鏃片
					古代～中世	焼土跡, 竪穴建物跡, 土坑墓, 掘立柱建物跡, 柵列	土師器(坏, 甕, 椀)
				近世	古道, 溝状遺構, 土坑, 遺物集中	陶器, 磁器	
縄文早期から中世を中心とする複合遺跡。遺構では縄文時代早期の竪穴住居跡, 連穴土坑, 集石遺構, 落とし穴, 弥生時代の竪穴住居跡, 古代～中世の掘立柱建物跡が検出され、遺物では縄文時代早期の土器, 打製石斧, 環状石斧, トロトロ石器等をはじめ、弥生時代から中・近世の遺物が出土している。また鬼界カルデラ噴火に伴う噴砂跡も確認されている。							

番号	遺跡名	所在地・立地	調査年度	整理・報告書	遺跡の概要		
					時代	主な遺構	主な遺物
	稲荷堀	曾於郡大崎町 菱田 台地上 標高約 50 m	県教委文化財課の試掘調査により、本路線には遺構・遺物がないことが確認されたため、本調査を実施せず。				
7	平良上C	曾於郡大崎町 井俣 台地上 標高約 40 m	H 26 年度 H 27 年度 終了	H 28 年度 終了	縄文早期	竪穴住居跡、連穴土坑、集石遺構、埋設土器、チップ集中	吉田式・石坂式・下剥峯式・押型文・平椀式土器、石鏃、石匙、打製・磨製石斧、扁平打製石斧、磨石、石皿、礫石器、石核、フレーク、チップ
		縄文時代早期を中心とする遺跡。遺構では竪穴住居跡、連穴土坑、集石遺構、土坑が検出されている。遺物では、縄文時代早期の土器、石鏃、石匙、打製石斧、磨製石斧等が出土している。また、鬼界カルデラ噴火に伴う噴砂跡も確認されている。					
8	宮脇	曾於郡大崎町 井俣 台地上 標高約 40 m	H 27 年度 調査中	—	旧石器	—	石核、円礫、フレーク、チップ
					縄文早期	集石遺構、土坑、土器集中	加栗山式・小牧3A・下剥峯式・桑ノ丸式・押型文・平椀式・塞ノ神式土器、打製石鏃、磨石、チップ
					近世	—	土瓶（薩摩焼）、寛永通宝
		旧石器時代・縄文時代早期を中心とする遺跡。旧石器時代の遺構は検出されていないが、石器製作に関連すると考えられる石核、フレーク、チップ等が出土している。縄文時代早期の遺構は、集石、土坑、土器集中遺構、ピットが検出されている。遺物は、土器、石器等が約 10,000 点出土している。鬼界カルデラ噴火時に伴う 2 度の大地震により発生した液状化現象を示す噴砂層も確認されている。					
	堂園堀	曾於郡大崎町 井俣 台地上 標高約 45 m	県教委文化財課の試掘調査及び埋文センターの確認調査により、本路線には遺構・遺物がないことが確認されたため、本調査を実施せず。				
9	荒園	曾於郡大崎町 仮宿 台地縁辺部 標高約 50 m	H 24 年度 H 25 年度 H 26 年度 調査中	H 28 年度 (第 1 地点) 作業中	旧石器	—	畦原型細石核・細石刃・水晶剥片
					縄文早期	素材剥片（頁岩）遺構、集石遺構、チップ、剥片集中区、土坑	前平式・吉田式・加栗山式・下剥峯式・押型文・手向山式・平椀式・塞ノ神式・苦浜式・条痕文土器、壺形土器、石鏃、スクレイパー、石匙、耳栓、打製・磨製石斧、磨石、石皿、フレーク、チップ
					弥生中期	竪穴住居跡、土坑	吉ヶ崎式・山ノ口式土器、磨製石鏃未製品、砥石
					古墳	竪穴住居跡	東原式・笹貫式土器、須恵器、砥石
					古代以前	片薬研堀	—
					中世	掘立柱建物跡、土坑、溝状遺構、帯状硬化面	土師器、東播系須恵器、陶器、青磁、華南三彩
					近世以降	帯状硬化面	薩摩焼
		縄文時代早期から古墳時代を中心とする複合遺跡。遺構は、縄文時代早期の集石、弥生時代・古墳時代の竪穴住居跡、古代以前の片薬研堀、中世の掘立柱建物跡等が検出され、遺物は縄文時代早期の土器、石器、弥生時代・古墳時代の土器、土師器、陶器、磁器等が出土している。また、鬼界カルデラ噴火に伴う液状化現象の痕跡も確認されている。					
10	永吉天神段	曾於郡大崎町 永吉 台地縁辺及び 河岸段丘 標高 30～50 m	H 24 年度 H 25 年度 H 26 年度 H 27 年度 終了	H 27 年度 (第 1 地点) H 28 年度 (第 2 地点 1) 作業中	旧石器	ブロック、礫群	尖頭器、ナイフ形石器、台形石器、剥片
					縄文早期	集石遺構、土器埋設遺構	前平式・吉田式・加栗山式・手向山式・下剥峯式・押型文・平椀式・塞ノ神式・苦浜式・条痕文土器、石鏃、石匙、石斧、磨石、敲石、石皿、フレーク、チップ
					縄文前期	—	曾畑式土器
					縄文後期	—	岩崎上層式・北久根山式・中岳Ⅱ式土器
					縄文晩期	竪穴住居跡、落とし穴、土坑	入佐式・黒川式・刻目突帯文土器、管玉、打製石斧
					弥生	竪穴住居跡、円形周溝墓、土坑墓群、掘立柱建物跡、土坑	入来式・山ノ口式・黒髪式土器、鉄鏃、磨製石鏃、管玉
					古墳	竪穴住居跡、土坑	成川式土器、須恵器
					古代	掘立柱建物跡、土坑	須恵器、土師器
					中世	掘立柱建物跡、土坑墓、地下式坑、火葬土坑、土坑	白磁、青磁、土師器、瓦質土器、東播系須恵器、備前焼、常滑焼、湖州六花鏡、砥石、石塔、古銭
近世	近世墓	薩摩焼、染付、寛永通宝、石臼					
		旧石器時代から近世までの複合遺跡。弥生時代中期の円形周溝墓を頂点とする土坑墓群から、国内最古級に比定される鉄鏃が出土した。中世では白磁、青磁、瓦質土器、東播系須恵器等が多量に出土した。また、地下式坑と呼ばれる中～近世の大型土坑も確認された。					

番号	遺跡名	所在地・立地	調査年度	整理・報告書	遺跡の概要		
					時代	主な遺構	主な遺物
11	京の塚	曾於郡大崎町 西持留 台地上 標高約95m	H25年度 H26年度 H27年度 終了	作業中	縄文早期	集石遺構	石坂式・下剥峯式・中原式・押型文・塞ノ神式 土器, 打製石鏃, 石核
					縄文前期～ 中期初頭	土坑, 土器集中	曾畑式・深浦式・大歳山式・鷹鳥式・船元式土 器, 打製石鏃, 石匙, 石錐, スクレイパー, 二 次加工剥片, 磨石, 敲石, 石皿, 石核, フレー ク
					近世以降	溝状遺構・古道	—
縄文時代前期から中期初頭を中心に、縄文時代早期から近世まで含む複合遺跡。縄文中期では、200基を超える土坑が検出されたほか、在地系土器の深浦式土器、近畿地方の大歳山式土器や鷹鳥式土器、瀬戸内地方の船元式土器などが出土し、当時の遠隔地との交流の一端が明らかとなった。							
12	小牧	鹿屋市串良町 細山田 台地上 標高約60m	H27年度 H28年度 H29年度 調査中	作業中	旧石器	—	細石刃, フレーク, チップ
					縄文早期	竪穴住居跡, 連穴土 坑, 土坑, 集石遺構	前平式・吉田式・石坂式, 下剥峯式・平椀式・ 条痕文土器, 石匙, 磨石, 石皿
					縄文前期	—	曾畑式土器, 深浦式土器, 磨石
					縄文後期	竪穴住居跡, 伏甕, 石皿立石遺構, 石斧 集積遺構, 集石遺構, 土坑	阿高式系・岩崎上層式・指宿式・市来式土器, 石鏃, 横刃型石器, 打製石斧, 磨石, 石皿, 大 珠
					縄文晩期	—	入佐式・黒川式・刻目突帯文土器
					弥生中期	—	入来式・山ノ口式土器, 砥石
					古墳	竪穴住居跡, 礫集積, 土器溜, 土坑	東原式・辻堂原式・布留系土器, 須恵器, 鉄 鏃, 鉄製品, 敲石, 勾玉, 軽石加工品
					古代	土坑	土師器(甕・坏), 須恵器短頸壺
中世以降	竪穴建物跡, 掘立柱 建物跡, 溝状遺構, 土坑, 焼土域	土師器(坏), 白磁, 青磁, 石鍋, 轆の羽口					
旧石器時代から中世までの複合遺跡。縄文時代早期前半から中葉の集落、後期の石皿遺構を伴う環状構造の集落とこれらに伴う遺物が特筆される。このほか、古墳時代の花卉形住居跡を伴う集落や中世の掘立柱建物跡群も発見されている。周辺の遺跡を含めて、良川沿岸における人間活動の変遷を継続的に追うことができる遺跡である。							
13	川久保	鹿屋市串良町 細山田 河岸段丘 標高30～50m	H26年度 H27年度 H28年度 H29年度 調査中	作業中	旧石器	礫群	畝原型細石核, ナイフ形石器, 剥片尖頭器
					縄文早期	集石遺構, 土坑	前平式・加栗山式・吉田式・倉園B式・石坂 式・下剥峯式・押型文・塞ノ神式土器, 石鏃, 打製石斧, 石皿
					縄文前期	集石遺構	轟式・曾畑式土器, 磨製石斧
					縄文晩期	集石遺構	黒川式・刻目突帯文土器
					弥生中期	竪穴建物跡	高橋式・下城式・山ノ口式土器
					古墳	竪穴住居跡, 鍛冶関 連建物跡, 竪穴状遺 構, 古道跡	笹貫式土器, 轆羽口, 高坏脚転用轆羽口, 鉄 鏃, 鉄滓, 勾玉, 管玉
					古代	掘立柱建物跡	須恵器, 土師器
中世	掘立柱建物跡, 古道 跡, 溝状遺構	青磁, 白磁, 瓦器椀					
旧石器時代から中世までの複合遺跡。特に古墳時代では、集落を構成する多数の竪穴建物跡や鍛冶関連遺構を伴う遺構が多数発見されているほか、専用の轆の羽口も出土している。古墳時代の鉄製品の生産過程を明らかにする良好な資料である。							
14	町田堀	鹿屋市串良町 細山田 台地縁辺部 標高約90m	H25年度 H26年度 H27年度 H28年度 終了	H27年度 (1) H29年度 (2) 本報告書	縄文早期	集石遺構	下剥峯式・塞ノ神式土器
					縄文後期	竪穴住居跡, 埋設土 器, 落とし穴, 土坑, 石斧集積遺構	中岳Ⅱ式土器, 石刀, 打製・磨製石斧, 石鏃, ヒスイ製垂飾, 小玉, 勾玉, 管玉
					縄文晩期	—	刻目突帯文, 黒川式土器
					弥生中期	竪穴住居跡	山ノ口式, 入来式土器, 土製勾玉
					古墳	竪穴建物跡, 地下式 横穴墓, 円形周溝墓, 溝状遺構	成川式土器(壺・高坏・埴), 人骨, 鉄剣, 鉄 鏃, 刀子, 鉞, 異形石器
古代	焼土跡, 古道	土師器, 須恵器					
縄文時代早期から古代までの複合遺跡。古墳時代では地下式横穴墓が92基発見され、円形周溝を伴う例も初めて確認されている。立小野堀遺跡や下堀遺跡等との類似性が想定され、高塚墳と共存する志布志湾沿岸部の地下式横穴墓との比較が可能になり、大隅半島の古墳時代像解明に必須の遺跡である。このほか、縄文時代後期の竪穴住居跡から、檜原文を施す完全な石刀が出土している。							

番号	遺跡名	所在地・立地	調査年度	整理・報告書	遺跡の概要		
					時代	主な遺構	主な遺物
15	牧山	鹿屋市串良町 細山田 台地縁辺部 標高約110m	H25年度 H26年度 H27年度 H28年度 H29年度 調査中	H28年度 (A地点1) 作業中	旧石器	—	剥片
					縄文早期	竪穴住居跡、連穴土坑、土坑、集石遺構、石器製作跡	吉田式・石坂式・下剥峯式・辻タイプ・桑ノ丸式・押型文土器、石鏃、石匙、スクレイパー、磨石、剥片、チップ
					縄文前期	埋設土器(轟式)	轟式・条痕文土器
					縄文後期	土坑、落とし穴状遺構、埋設土器、石器集中部	市来式・西平式・丸尾式・太郎迫式・三万田式・中岳Ⅱ式土器、打製・磨製石斧、磨石、剥片、石核、台石、石冠
					縄文晩期	土坑	入佐式・刻目突帯文土器
					弥生中期	竪穴住居跡、掘立柱建物跡、土坑	山ノ口式土器、打製・磨製石斧、磨製・打製石鏃、磨石、敲石、石皿、青銅鏝
					中・近世	古道跡	青磁、白磁、薩摩焼
旧石器時代から中世にかけての複合遺跡。特に、縄文時代後期の建物跡を構成していた可能性のある柱穴群(300~400個)が環状に発見されたのが注目される。また、同時期の複数の埋設土器と、石冠も1点出土している。							
16	田原迫ノ上	鹿屋市串良町 細山田 台地縁辺部 標高約120m	H22年度 H23年度 H24年度 H25年度 H26年度 調査中	H26年度 (1) H28年度 (2) 作業中	縄文早期	竪穴住居跡、連穴土坑、集石遺構、落とし穴、土坑、石器製作跡	前平式・吉田式・倉園B式・石坂式・下剥峯式・辻タイプ・桑ノ丸式・中原式・押型文・手向山式・平椽式・塞ノ神式土器、石槍、石鏃、石匙、磨石、敲石、石皿、打製石斧
					縄文後期	落とし穴、礫集積	指宿式・市来式土器、石鏃、磨石
					縄文晩期	—	黒川式土器
					弥生中期	竪穴住居跡、大型建物跡、掘立柱建物跡、円形・方形周溝、土坑	山ノ口式・中溝式土器、擬凹線文系壺、土製勾玉、鉄器、磨製石鏃、石匙、砥石、敲石、台石
					古墳時代以降	溝状遺構、畝状遺構	土師器椀、薩摩焼
縄文時代早期から弥生時代中期を中心とした複合遺跡。弥生時代中期では、ベッド状遺構を伴う方形や円形の大型竪穴住居跡、棟持柱をもつ掘立柱建物跡2棟を含む建物跡群、柱穴列や円形・方形の周溝など、大隅半島中央部での当時の集落の様相を知る上で貴重な遺跡である。また、大型建物跡の可能性が高い遺構の一部が現地に保存されたことは特筆される。このほか、縄文時代早期では竪穴住居跡20軒、連穴土坑40基など、集落を想定させる遺構が多数発見されていることも注目される。							
17	立小野堀	鹿屋市串良町 細山田 台地縁辺部 標高約125m	H22年度 H23年度 H24年度 H26年度 調査中	H28年度 (1) 作業中	縄文前・中期	—	深浦式土器
					縄文後期	—	指宿式・西平式・市来式土器
					弥生中期	—	山ノ口式土器
					古墳	地下式横穴墓、土坑墓、溝状遺構	成川式土器、須恵器、鉄器(刀・剣・槍・鉾・刀子・鏃等)、青銅鈴、人骨
					時期不詳	溝状遺構	—
縄文時代前期から古墳時代までの複合遺跡。特筆すべきは、古墳時代の地下式横穴墓が190基発見されたことである。玄室内には鉄鏃や鉄剣等の鉄器、青銅製鈴等の副葬品と人骨が多数残っていたほか、墓周辺から多量の土器や須恵器が出土した。青銅製鈴をはじめ、これだけ多種多様な副葬品を伴った地下式横穴墓群の発見は、個別研究のみならず南九州の古墳時代墓制の様相全体を解明していく上で貴重な資料である。							
18	十三塚	鹿屋市串良町 細山田 台地上 標高約140m	H20年度 H21年度 終了	H22年度 終了	縄文早期	—	石坂式土器
					縄文後期	—	凹線文・市来式・三万田式土器
					縄文晩期	—	黒川式土器
					弥生中期	竪穴住居跡、掘立柱建物跡、土坑	山ノ口式土器、土製勾玉、打製・磨製石鏃、棒状敲具、鉄鏃
					古墳時代	—	成川式土器
					中世~近世	道路状遺構	加治木銭
弥生時代中期を中心とする遺跡。花卉形・方形・円形に分類された竪穴住居跡が発見された。出土遺物等から、王子遺跡(鹿屋市王子町)や前畑遺跡(同市郷之原町)等と同時期の集落跡と考えられている。また、集石遺構が竪穴住居跡内から発見されている。また、7号住居跡の埋土内から、松木菌遺跡(南さつま市金峰町)や永吉天神段遺跡(曾於郡大崎町)から出土した鉄鏃と類似する無茎の鉄鏃が出土した。							
19	石鑑	鹿屋市串良町 細山田 台地上 標高約140m	H20年度 H21年度 終了	H22年度 終了	縄文早期	集石遺構、土坑	岩本式・前平式・志風頭式・石坂式・平椽式・貝殻条痕文・鎌石橋式・轟A式土器、打製石鏃、磨石、敲石
					弥生中期	—	山ノ口式、須玖式土器
縄文時代早期前半から早期末を中心とする遺跡。鎌石橋式土器が1個体と轟A式土器が2個体出土し、両型式が同時期に存在した可能性を示唆する遺跡である。							

第3章 発掘調査の方法と層序

第1節 発掘調査の方法

本節では、発掘調査の方法、遺構の認定と検出方法、整理報告書作成作業について簡潔に述べる。

1 発掘調査の方法

町田堀遺跡の発掘調査は、平成25年度から平成28年度まで4年間に渡り実施した。調査対象表面積は12,790㎡、調査対象延面積は31,970㎡であった。

調査区は道路や畦畔により調査区1～調査区4まで区分した。グリッドは座標値(X=-172350, Y=-6460)を起点として磁北に合わせて設定し、10m単位で北からA・B・C……区、西から1・2・3……区とした。また、1区の西側の現道部分にも遺跡が広がることが想定されたことから協議を行い、調査対象とした。そのため、1区より西側は、100, 99, ……区として95区までを設定した。

発掘調査は、基本的に重機で表土剥ぎを行った後、平成24年度の確認調査の結果に基づき、遺物包含層については人力による掘削を行い、遺物や遺構の検出に努めた。遺物の取り上げ及び、一部の遺構実測については平板実測またはトータルステーションを用いて行った。また、地形測量、まとまった土器については、手測り実測を行った。遺構実測や写真撮影を適宜行った。竪穴住居跡については、中央に十字の土層観察用ベルトを残し掘り下げ、遺物はトータルステーションによる点上げと手測り実測を併用した。土坑については半裁し完掘まで慎重に調査した。集石遺構については、検出時の礫を平面・見通し断面の2面で実測した後、礫を取り上げ掘り込みの有無の精査を行った。地下式横穴墓については、土層断面の実測を行いながら、竪坑の1/4掘り下げ、1/2掘り下げを行った後発掘した。玄室については、流入土や天井落盤土のある墓は土層の主軸断面を実測後、慎重に土砂除去を実施した。V層(アカホヤ層)下位については、各調査区共にトレンチを設定し下層確認調査を行った。

2 遺構の認定について

検出面、埋土状況、規模等を総合的に判断し、担当職員で検討したうえで遺構の認定を行った。本書掲載の遺構の認定の状況は以下のとおりである。

ア 竪穴住居跡・土坑

規模、埋土、壁の立ち上がり状況や床面(底面)の状況などで総合的に判断した結果、6軒(縄文時代後期2軒、弥生時代2軒)を竪穴住居跡、それよりも規模の小さなものを土坑と認定した。

イ 集石遺構

周辺の遺物出土状況や礫破片、チップ等の広がり、範囲を総合的に判断し、また、礫が同一平面上に複数個並ぶので、火熱を受けていたり、内部の埋土中に木炭粒がみられるものを検討して20基を集石遺構と認定した。

ウ 地下式横穴墓

竪穴の下部に玄室を持つ遺構を検討し、残存状態の良くないものも含めて4基を地下式横穴墓と認定した。

エ 掘立柱建物跡

直径20～30cm程度を主とする小規模な円形で、ほぼ垂直に掘られた柱穴(状ピット)が規模や向きを揃えて並ぶものを検討し、6棟を掘立柱建物跡と認定した。

オ 土器破碎祭祀遺構

古墳時代の土器が地下式横穴墓の周辺で粉々に破壊されて検出された遺構で、復元作業によりほぼ完形品として復元できたものを、墓前祭祀が行われた可能性がある遺構として認定した。

3 整理作業・報告書作成作業の方法

平成28年度

平成28年度は発掘調査を並行して実施したことから、発掘現場から搬入された遺物の水洗い・注記を行うとともに、平成27年度までに整理作業を行った遺物も含めて、分類や土器の接合等の作業を行った。石器の実測は大成エンジニアリング株式会社に委託した。

平成29年度

平成29年度は、過年度までの整理作業を基に、土器・石器の実測・トレース、遺物のレイアウト、遺構図作成、写真撮影等、報告書刊行に向け整理作業を行った。また、石器の実測を大成エンジニアリング株式会社に委託したほか、炭素による年代測定や種実・樹種同定の自然科学分析を株式会社パレオ・ラボに委託した。

4 出土遺物の分類について

(1) 土器類についての分類

出土した遺物については、Ⅶ層出土のものは時代を縄文時代早期として確定して分類できたものの、Ⅱ層出土のものは、新旧の遺物が混在した状況であったことから層位としての分別は困難であった。そのため、水洗い作業が終わった段階で、土器の文様や調整などから時代・時期を分けるとともに型式分類を行った。



第4図 町田堀遺跡調査範囲図

(2) 石器類についての分類

石器についても土器類の分類と同様に考えて分類を行った。Ⅵ・Ⅶ層出土のものは縄文時代早期として分類

したが、Ⅱ層出土のものは時代の特定が困難であったことから、Ⅱ層出土の石器として総合的に扱うこととした。

第2節 層序について

町田堀遺跡の基本土層及び遺物・遺構の年代を把握する手がかりの一つとなる火山灰等の詳細については、以下のとおりである。

I層：灰黒色土（耕作土）、白色軽石・混在。

Ⅱ層：黒色土で層厚が90cmを越す所もある。色調の変化でa・b・cに細分される。

Ⅱa層：黒色土（主に弥生時代・古墳時代の包含層）

Ⅱb層：黒褐色土（縄文時代後期～晩期の包含層）

Ⅱc層：黒色土、粘性が強い

Ⅲ層：白色軽石層で、2～5cmの堆積である。（池田カルデラ起源、約6,500年前）

Ⅳ層：暗茶褐色土、やや硬質

Ⅴ層：黄橙色火山灰土で鬼界カルデラ起源である。上層が火山灰土、下層が軽石である。a・bに細分される。

Ⅴa層：黄橙色火山灰土（鬼界カルデラ起源：アカホヤ火山灰、約7,300年前）

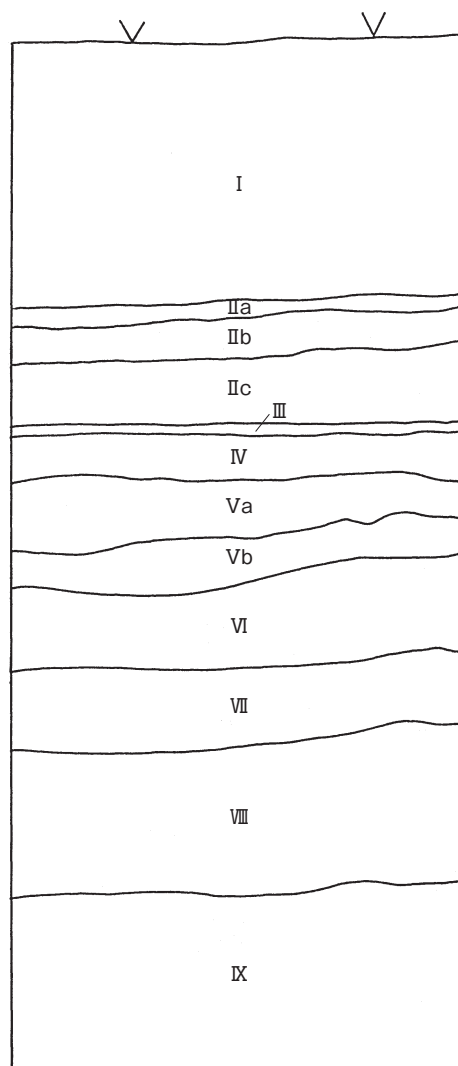
Ⅴb層：黄橙色軽石（鬼界カルデラ起源の軽石）

Ⅵ層：黒褐色土（黄色パミスを少量含む）

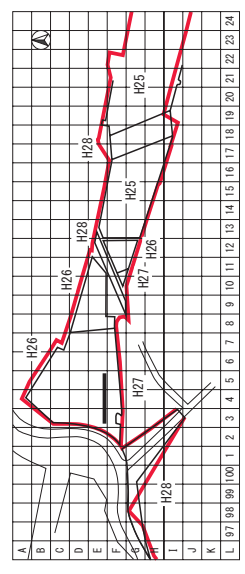
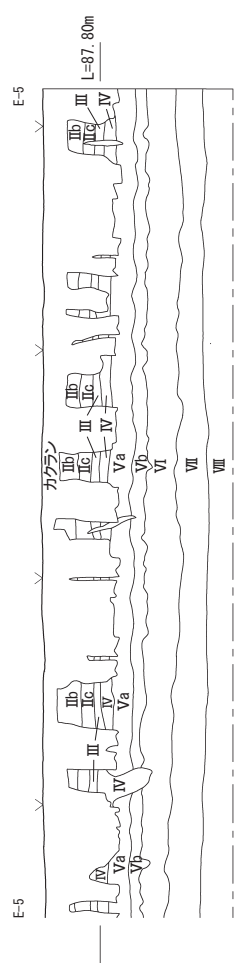
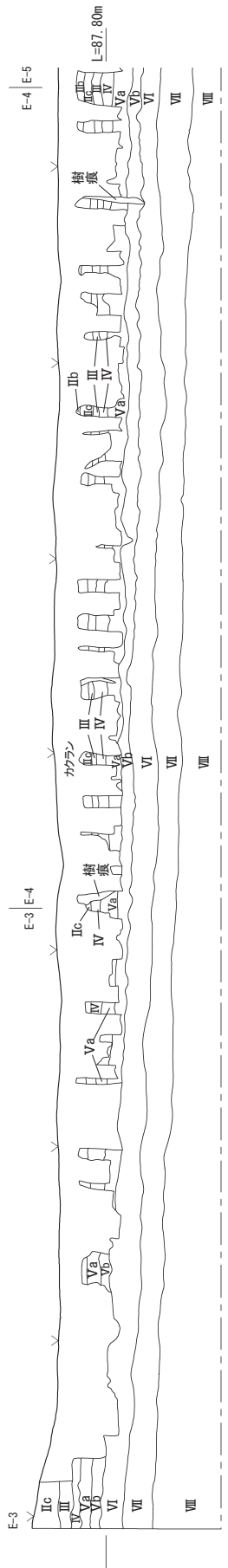
Ⅶ層：暗茶褐色土（黄色パミスを多量含む）

Ⅷ層：黄白色火山灰土（桜島起源の薩摩火山灰）

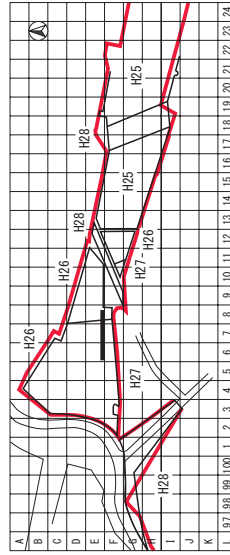
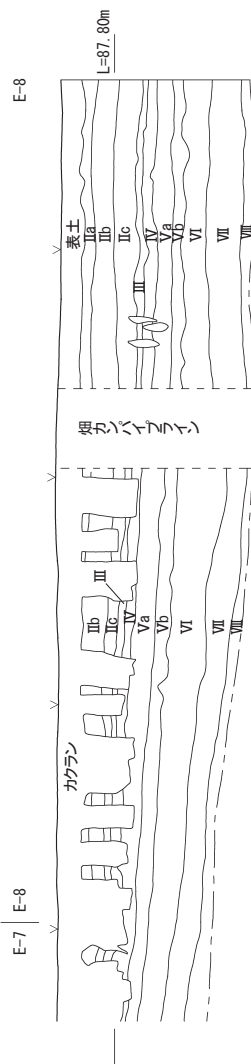
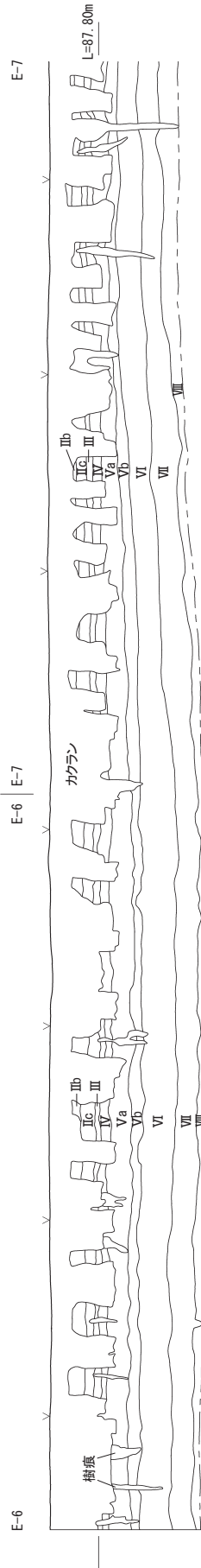
Ⅸ層：茶褐色粘質土



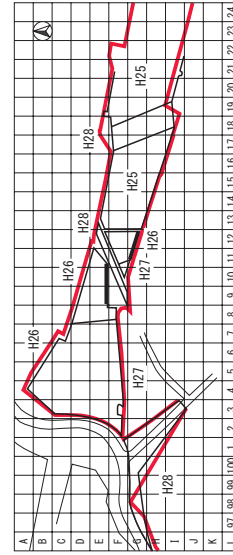
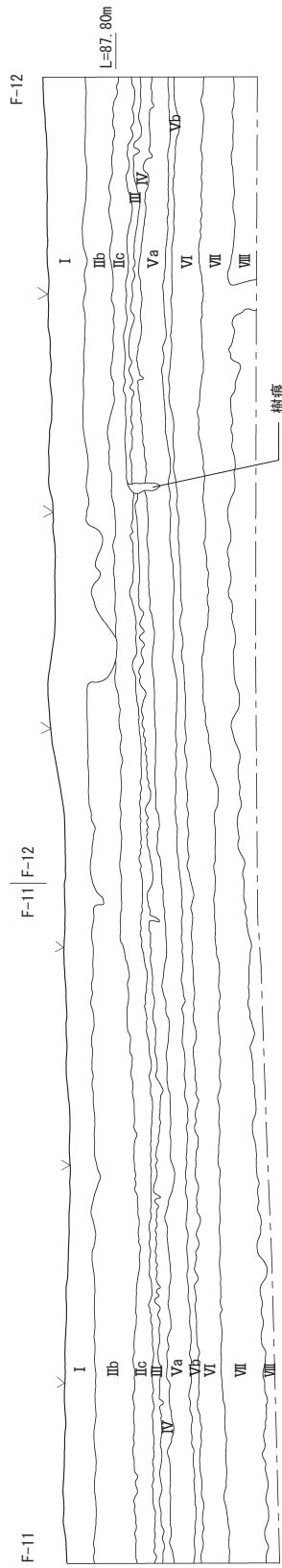
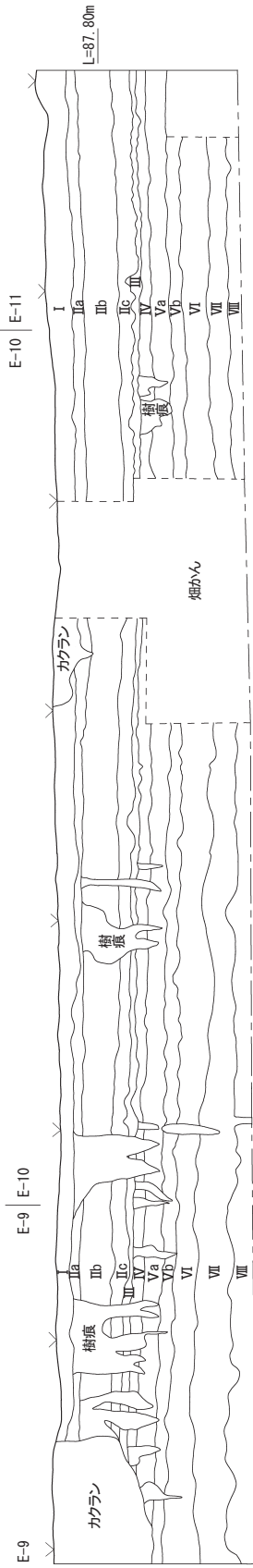
第5図 標準土層図



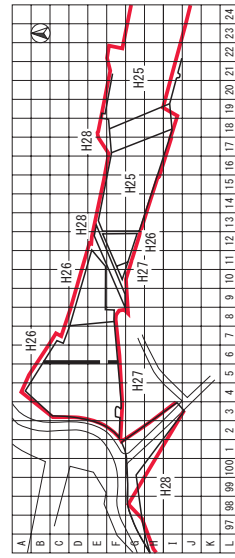
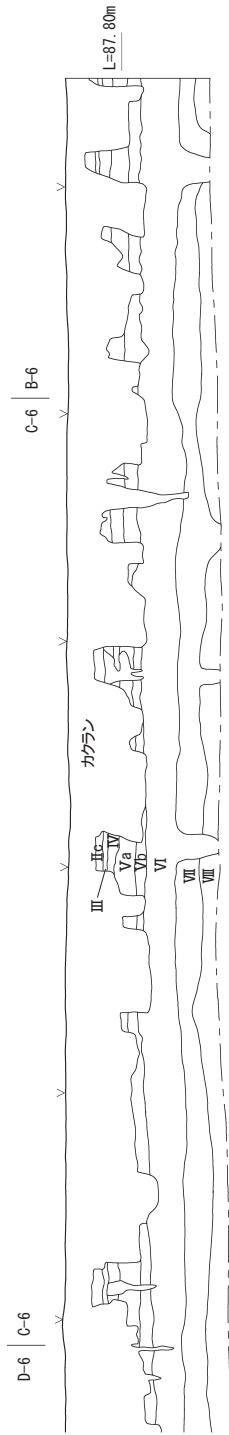
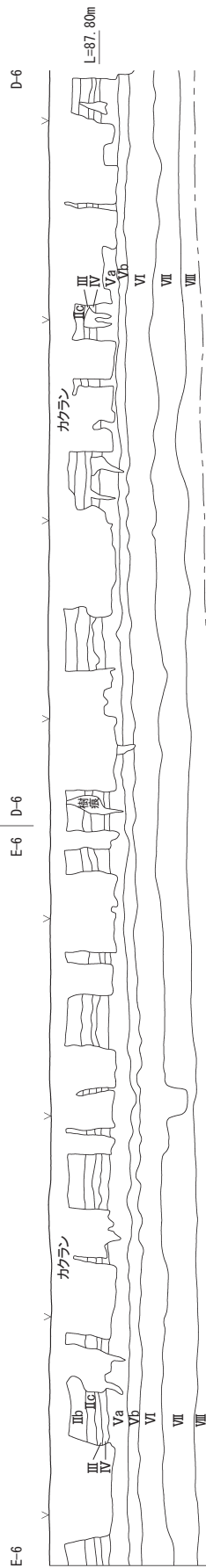
第6図 土層断面図1



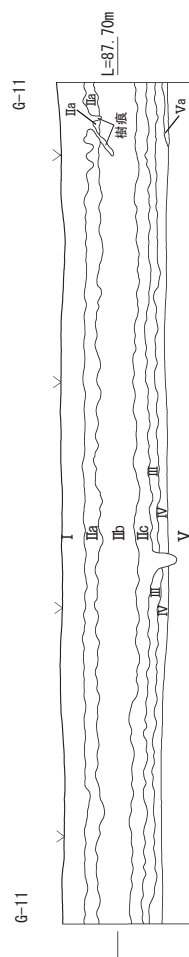
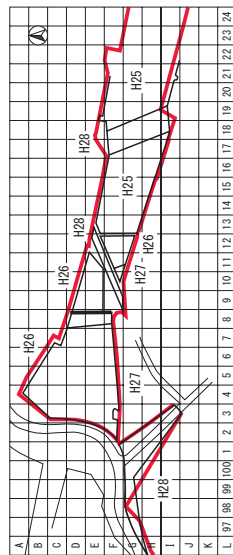
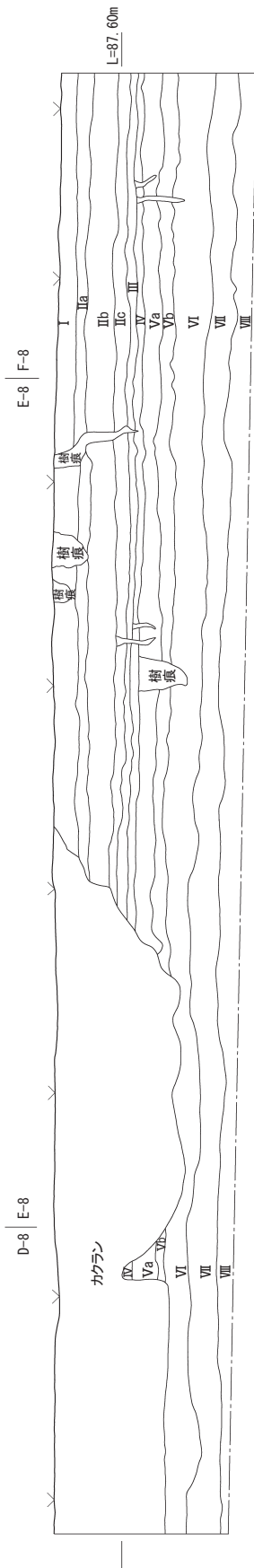
第7図 土層断面図2



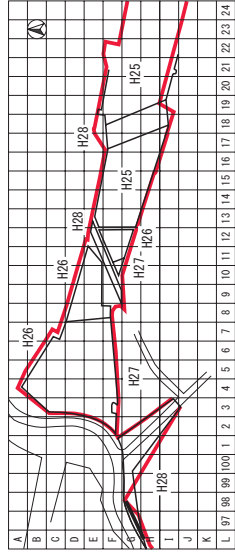
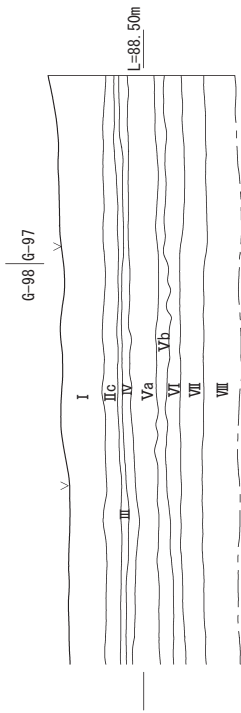
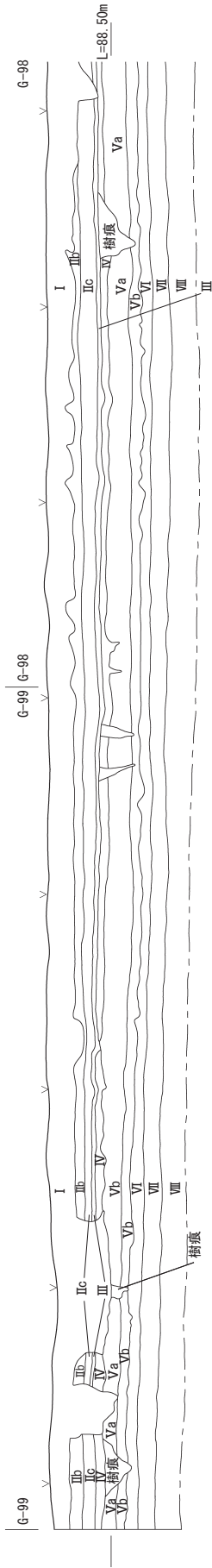
第8図 土層断面図3



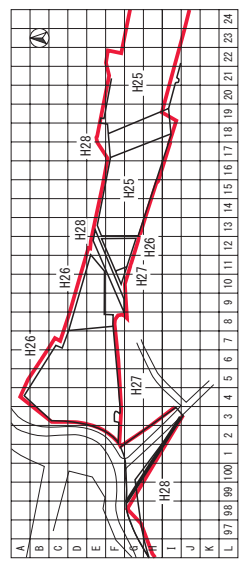
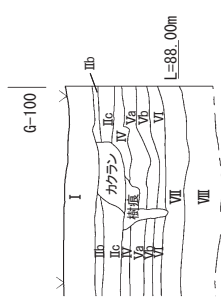
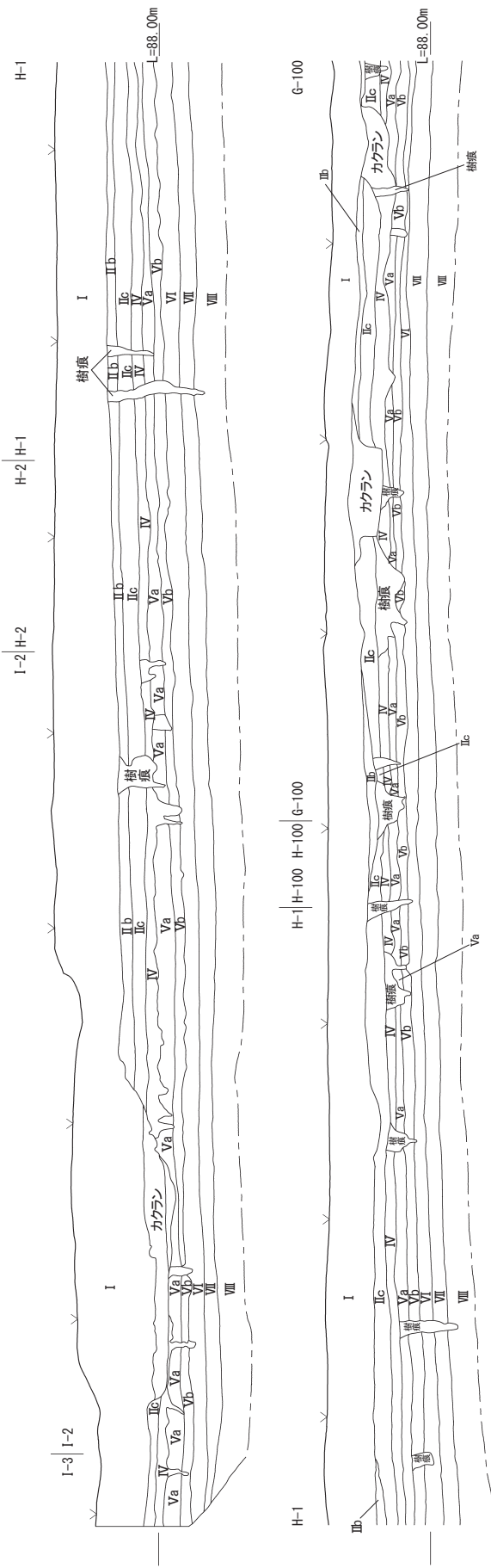
第9図 土層断面図4



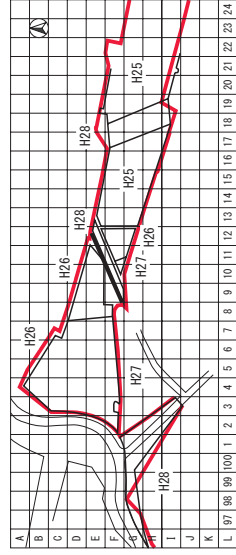
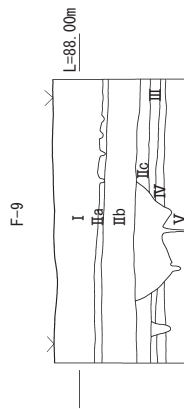
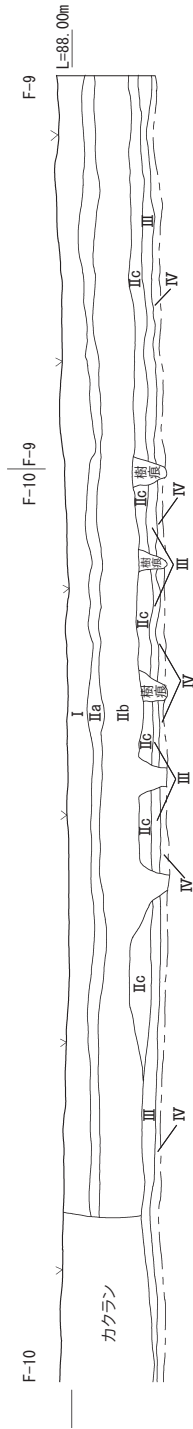
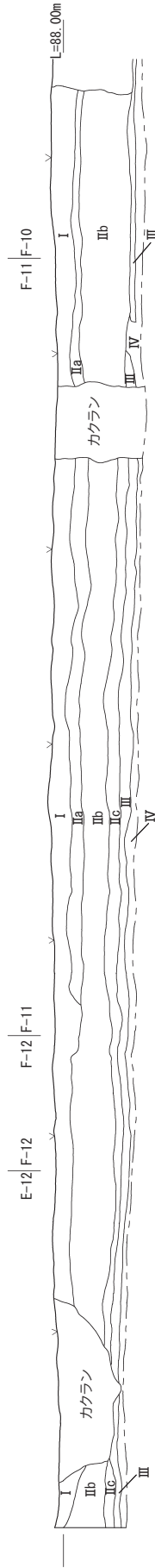
第10図 土層断面図5



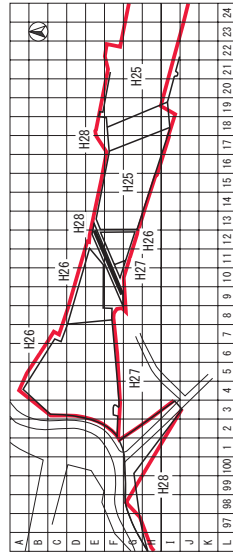
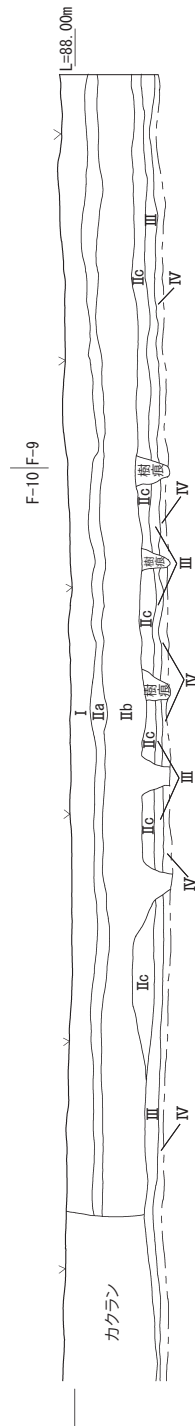
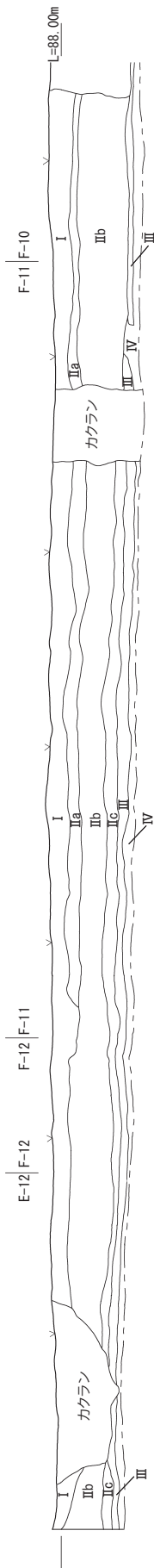
第11図 土層断面図6



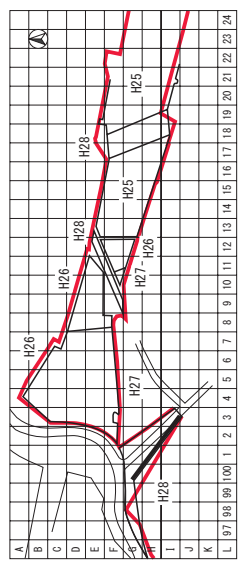
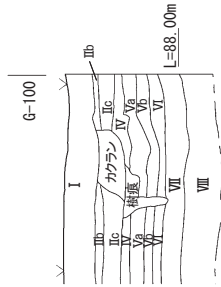
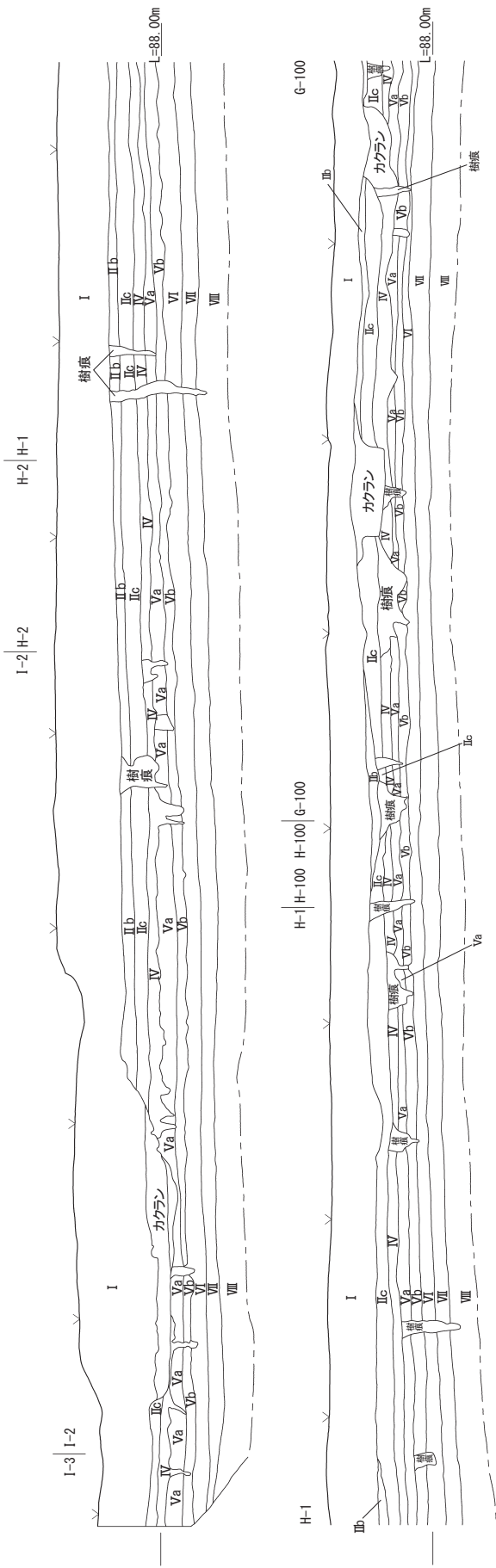
第12図 土層断面図7



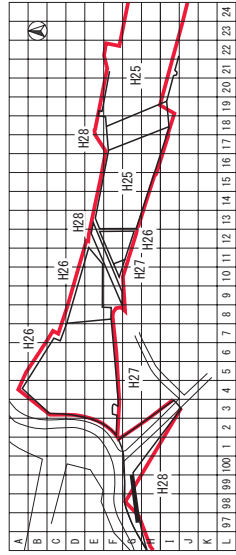
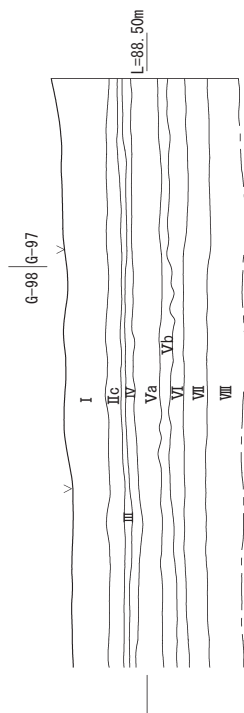
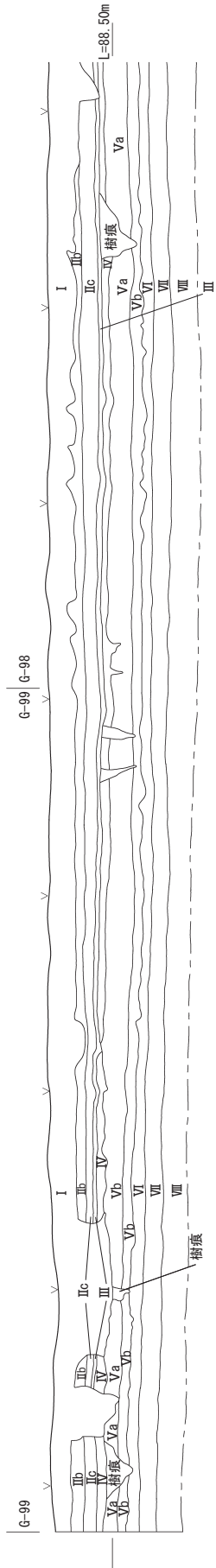
第13図 土層断面図8



第14図 土層断面図9



第 15 図 土層断面図 10



第 16 图 土層断面图 11

第4章 発掘調査の成果

第1節 縄文時代早期の調査

縄文時代の調査は、Ⅵ層・Ⅶ層を包含層とする早期の調査と、Ⅱ層を包含層とする後期・晩期の調査に分けられることから、それぞれに記載することとする。

平成26年度に調査を行った第1地点の下層確認調査によって、2～8区に縄文時代早期の遺物が確認されたことから、翌平成27年度に本格調査を行った。

また、平成28年度に市道の取り付け部分の第3地点にも早期の層が広がることが想定されたことから協議を行い、調査を行った結果、遺物及び遺構が検出された。

ただ、8区から東側にも確認トレンチを入れて調査を行ったが、遺物の広がりには確認されていない。

1 遺構（集石遺構）（第17・18図）

第1地点からは、集石遺構が17基検出された。ほかに、小型の円形ないし楕円形を中心とするピット状のものも検出されたが、建物の跡と認定するにはまとまりに欠けるものがほとんどで、ピットとして認定することには躊躇を覚えるものであった。また、当該地は樹木を植栽していた経歴もあることから、木の根の可能性のあるものもあり、そのことからピットとしての遺構認定は留保せざるを得ない状況であった。ただ、記録として残すために、明らかに樹痕と考えられるものは除外したうえで実測を行った。

第3地点からも集石遺構が3基確認された。

地形の復元のために、Ⅸ層上面でコンターを記録した。

第1地点では、西側が高く、全体的に東側にかけて下っているほか、北側には直径5m程の凹みが見られ、南側は直径10m程の大規模な凹みとなっている。そのことから、北東側にかけては馬の背状の鞍部となっている。

遺構は、17基の集石遺構が調査区の北側に偏って集中しているほか、南側では適度な間隔を持ちながら散らばっていると言える。

地形的には、北側のほぼ中央部に5m程度の凹みが見られることから、この凹みを取り囲むような状況で、凹みの北側にまとまって集石遺構が所在しているように感じられる。

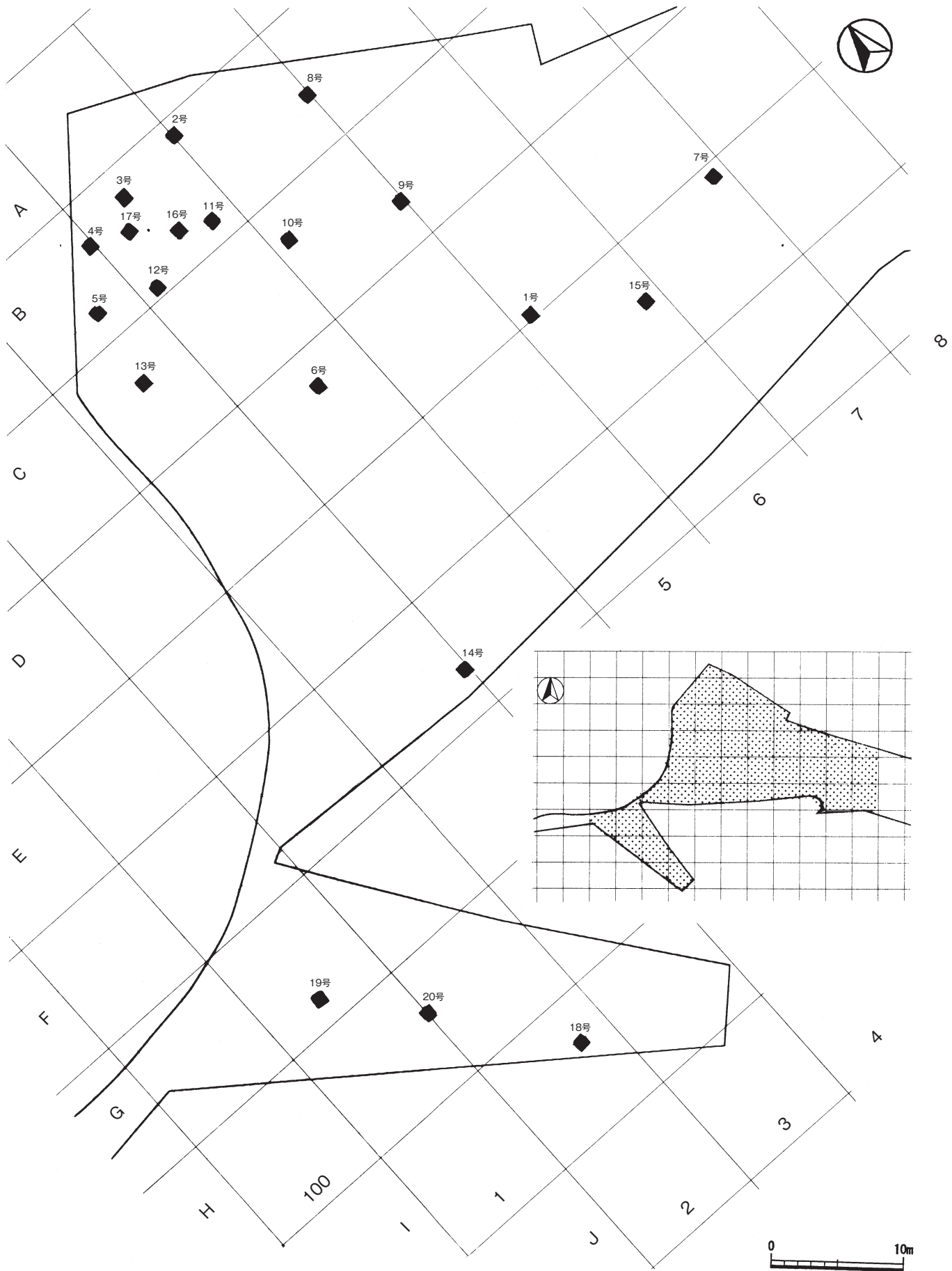
また、馬の背状になった部分の中央には集石遺構は見られないことから、道路などとして使用されていた可能性も考えられる。

さらに、南側の大きな凹みには集石遺構は見られないことから、この凹みの北側に展開する疎らな集石遺構は、凹みを避けた状況で設定されたことが考えられる。

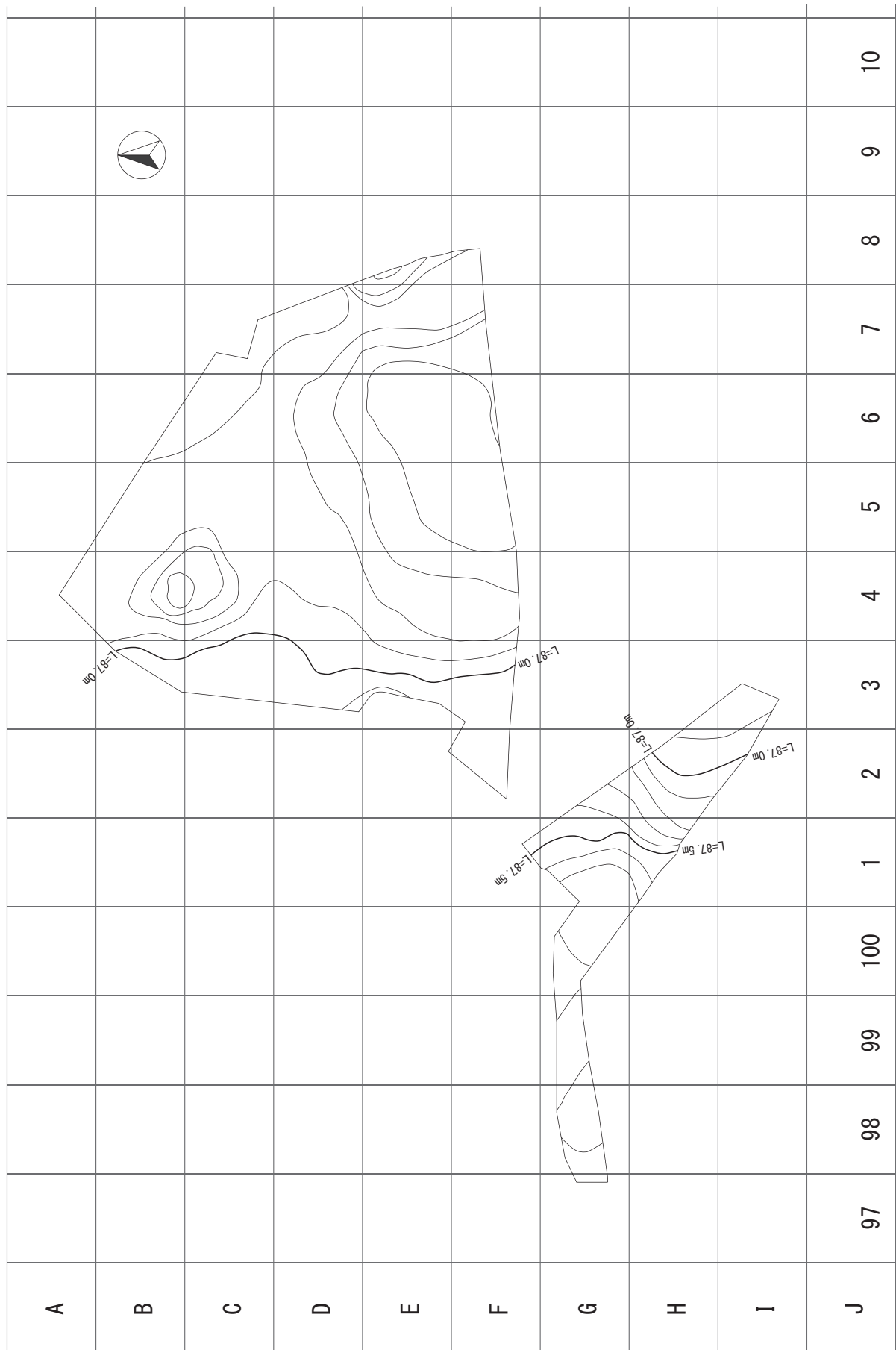
第2地点では、逆V字状となっている調査区のほぼ中央部を最高所として、西側及び南東側にかけて徐々に下がっている。

3基の集石遺構は最も高い部分を避けるようにして、南東側に、見かけ上は列状に位置している。集石遺構が西側に見られないのは、調査区の北側がすぐに急峻な斜面となることからと考えられる。

以下、それぞれの集石遺構について述べてゆく。

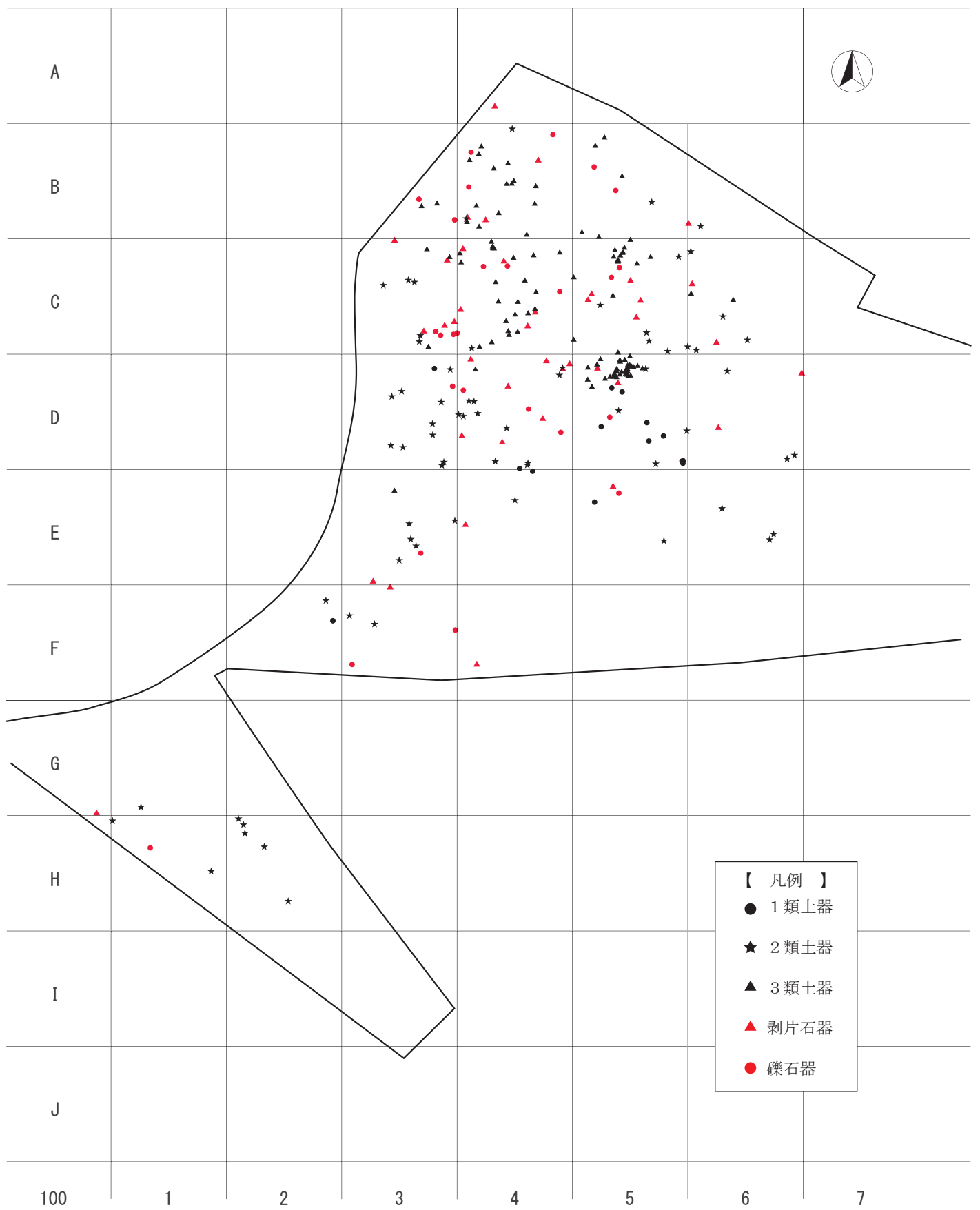


第 17 図 縄文時代早期集石遺構位置図



1 グリッドは 10m x 10m

第18図 Ⅷ層上面コンター図



第 19 図 縄文早期遺物ドット図

集石遺構 (第 20~37 図 1~33)

1号集石遺構 (第 20 図 1)

D・E - 6区で検出された。50cm×70cmの範囲に広がり、構成礫数は30個である。礫の総重量は5,885g、平均重量は196g、被熱により赤化、破碎したとみられる礫は1点である。構成礫の中から、平滑な器面上に刻線状の傷が見られる礫(1)が1点見つかった。砂岩製で、磨面が凹面を呈することから砥石の破片とみられる。

2号集石遺構 (第 21 図 2~7)

B - 4・5区で検出された。320cm×370cmの範囲に広く散在する。特に掘り込みは確認できなかった。構成礫数は、144個である。礫の総重量は21,397g。平均重量は148g、被熱により赤化、破碎したとみられる礫は、全体の2割ほどある。集石の中から、土器が21点出土したが、その多くは小片だったので、その内6点(2~7)を図化した。5点が深鉢の胴部で1点が底部である。

3号集石遺構 (第 22 図 8~11)

B - 4区で検出された。250cm×430cmの範囲に広く散在する。特に掘り込みは確認できなかった。構成礫数は、225個である。礫の総重量は30,664g、平均重量は136gである。構成礫は安山岩と砂岩の円礫が多く、被熱を帯びた痕跡の残る礫は少ない。集石遺構の中から、土器が7点、石器が1点出土した。土器は小片が多かったが、その内3点(8~10)と石器1点(11)を図化した。土器はいずれも深鉢の胴部であるが、早期土器の分類に当てはまる特徴は観察できなかった。石器は粗面の安山岩製の磨石である。若干歪んでいるが、円形に近い自然礫を用いている。上面を磨り面として使用している。

4号集石遺構 (第 23 図 12)

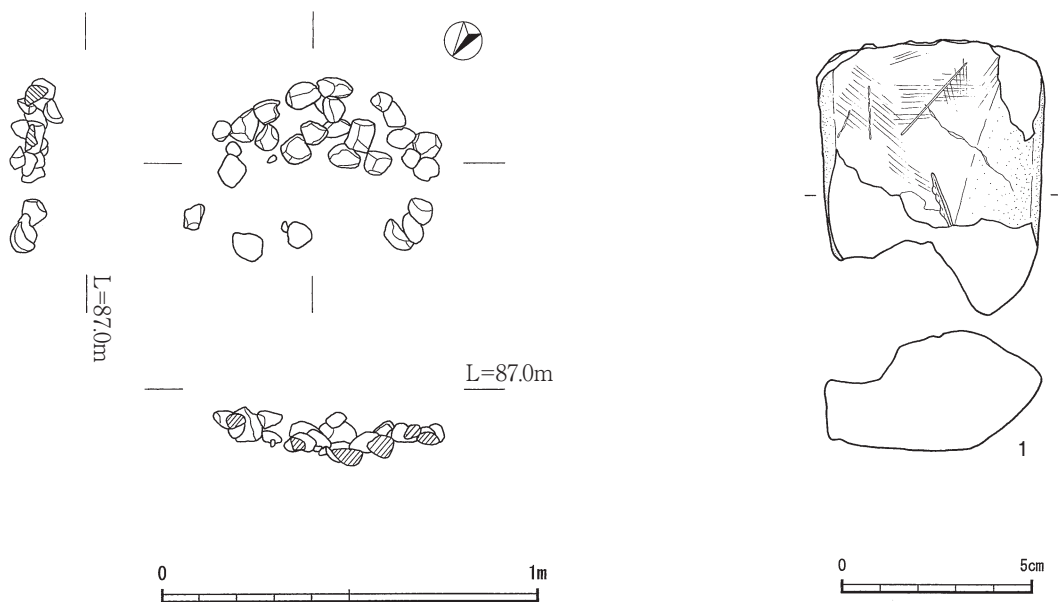
B - 3・4区で検出された。135cm×245cmの範囲に広く散在する。特に掘り込みは確認されなかった。構成礫数は46個である。礫の総重量は4,280g。平均重量は95gとやや小さめの礫が多い。安山岩で熱を帯び破碎したと考えられる礫が5点見られる。集石遺構の中から、土器が6点、石器のチップが3点出土した。土器は小片が多かったが、その内1点(12)のみ図化した。深鉢の胴部ではあるが、土器の分類には至らなかった。

5号集石遺構 (第 24 図 13)

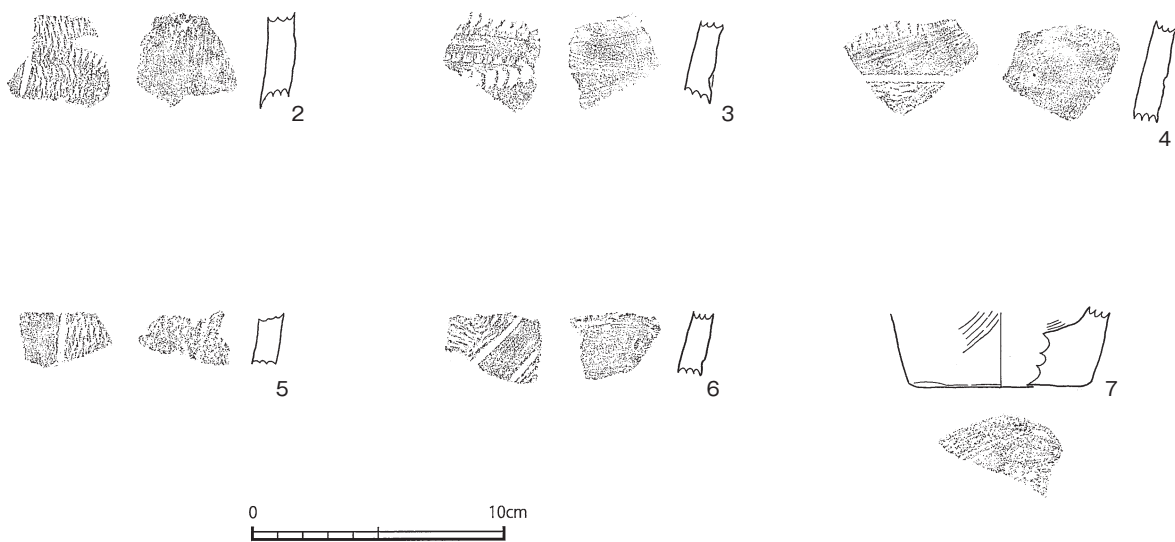
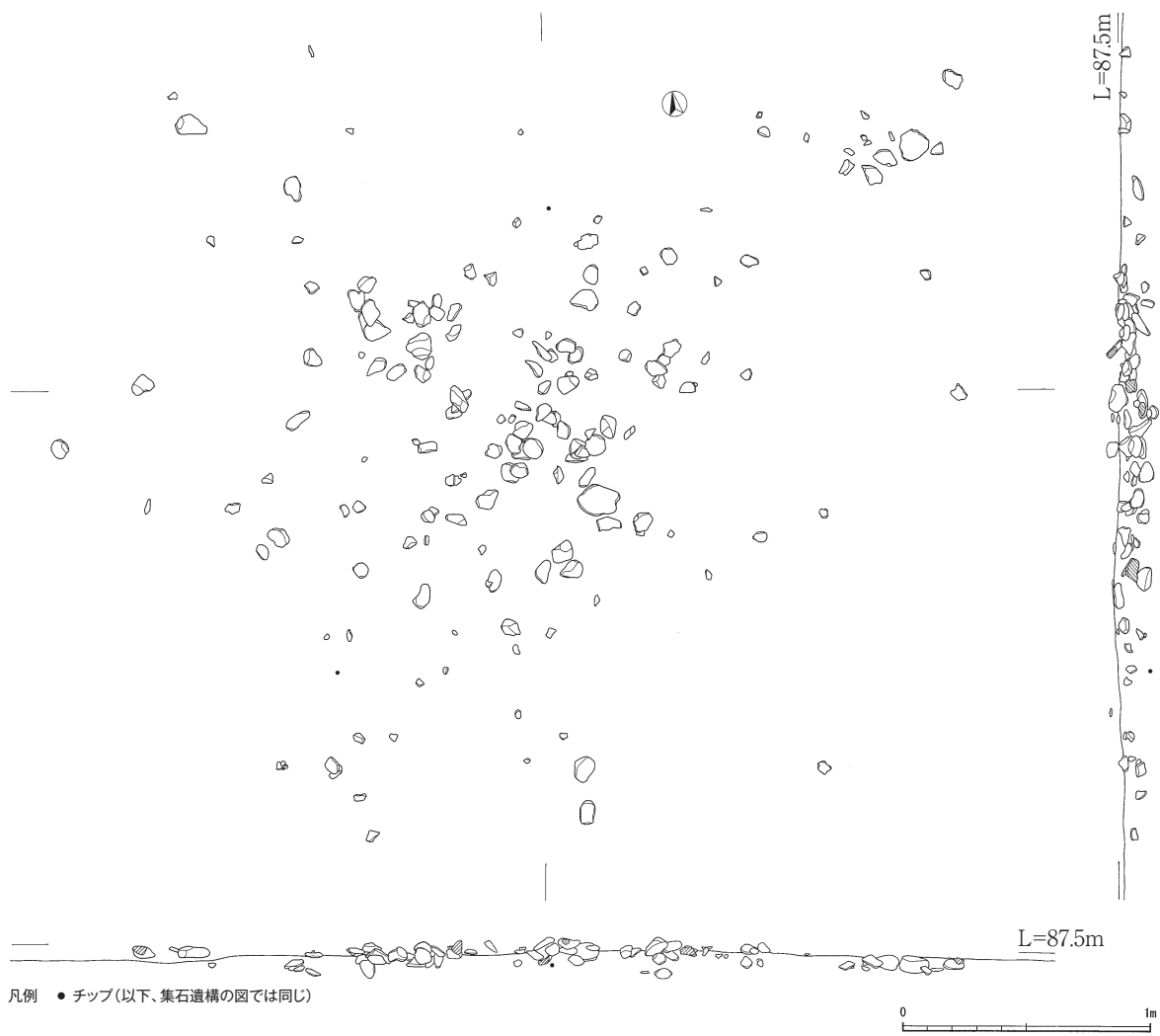
B - 3区で検出された。120cm×175cmの範囲に広がる。礫の重なりから、掘り込みの可能性もあったが、明確な掘り込みは確認できなかった。構成礫数は36個である。礫の総重量は10,035g、平均重量は279gである。拳大以上の礫が6点あるが、その内3点は中心部より外れる。集石遺構内より磨・敲石1点、チャート、安山岩のチップが3点出土した。その内、安山岩の磨・敲石(13)を図化した。上下の平滑な面を磨石として使用した可能性が高い。

6号集石遺構 (第 25 図 14)

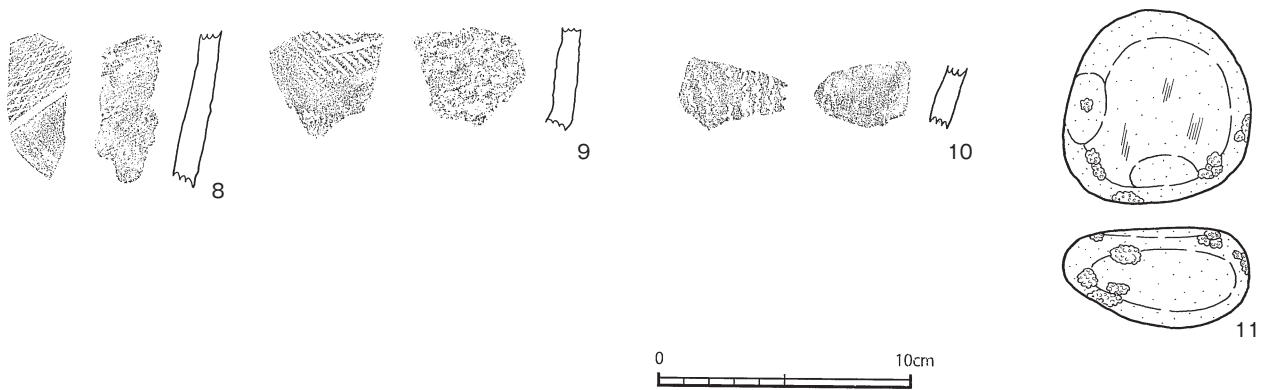
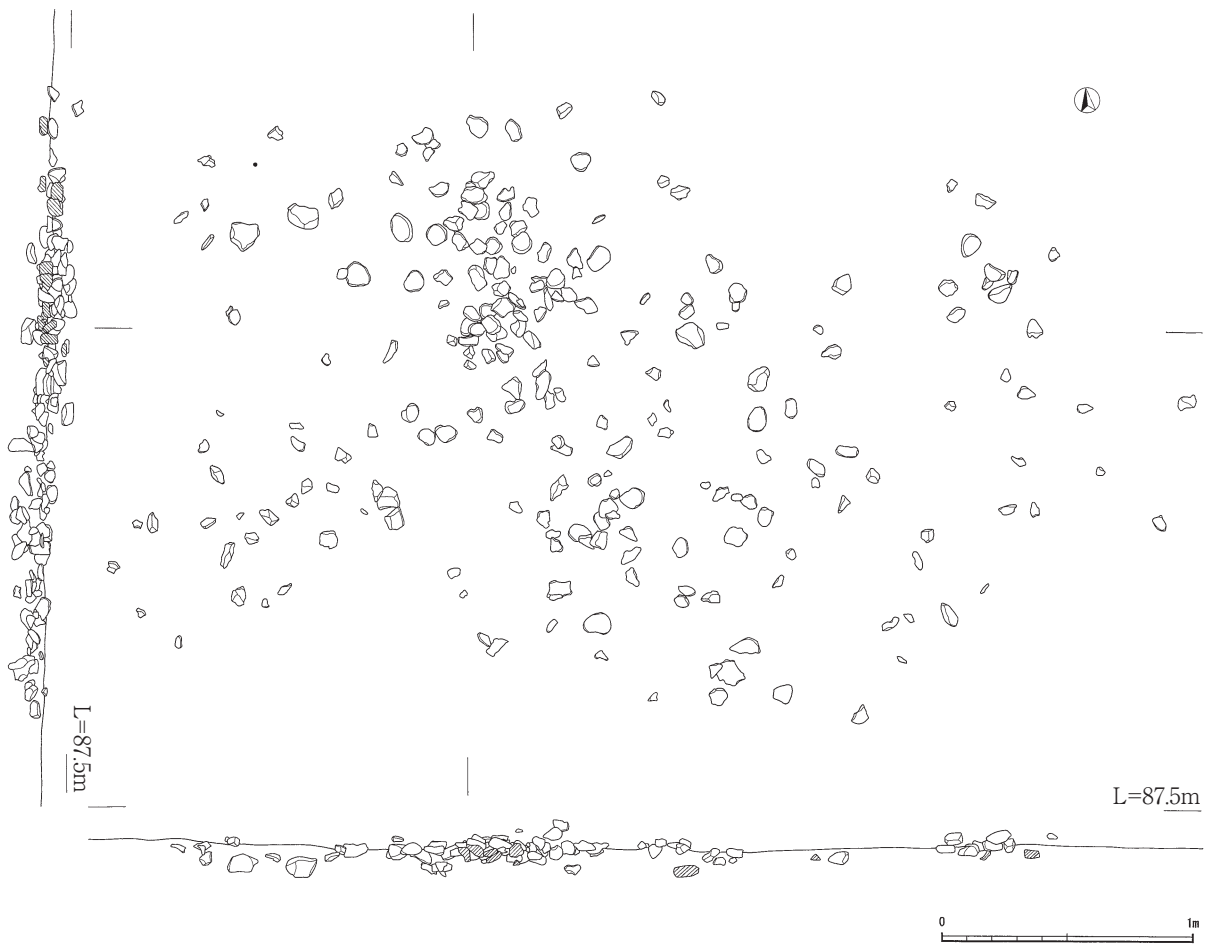
D - 4区で検出された。198cm×252cmの範囲に広く散在する。特に掘り込みは確認されなかった。構成礫数は44個である。礫の総重量は8,210g、平均重量は182gである。構成礫には、破碎した砂岩が多い。集石遺構からは土器が1点、チップが2点出土したが、土器1点(14)を図化した。



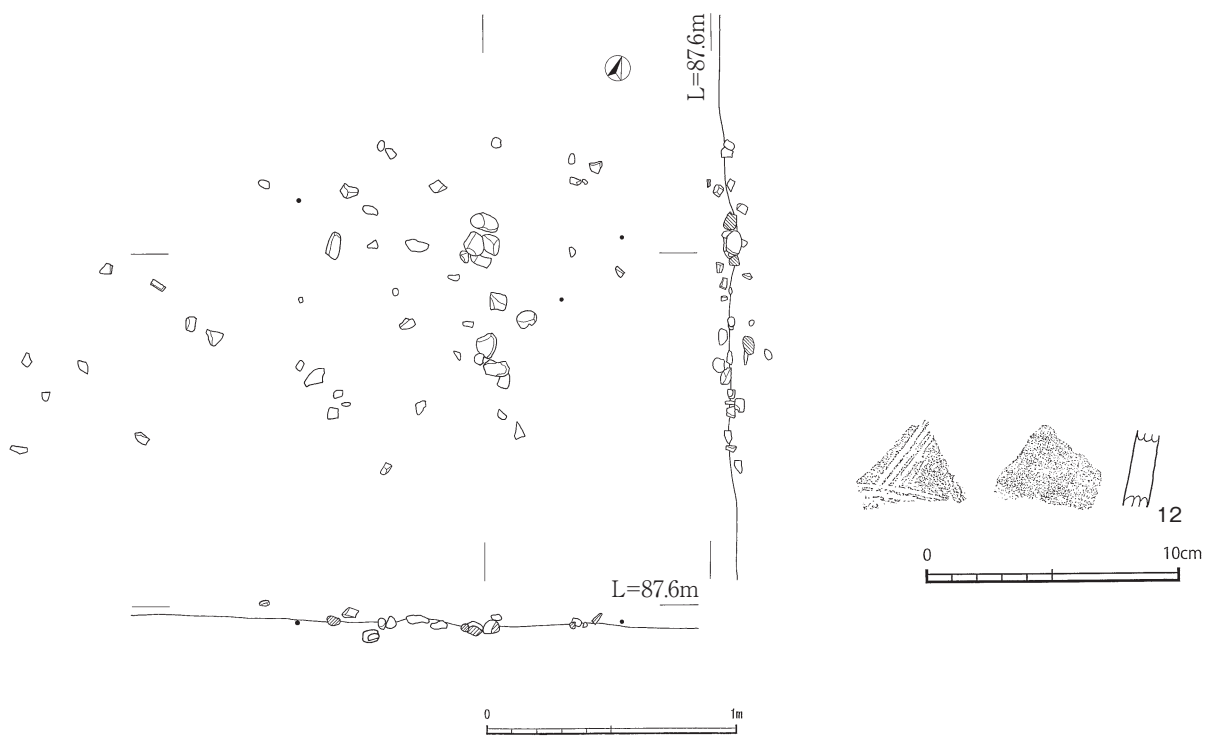
第 20 図 縄文早期 1号集石遺構・出土遺物



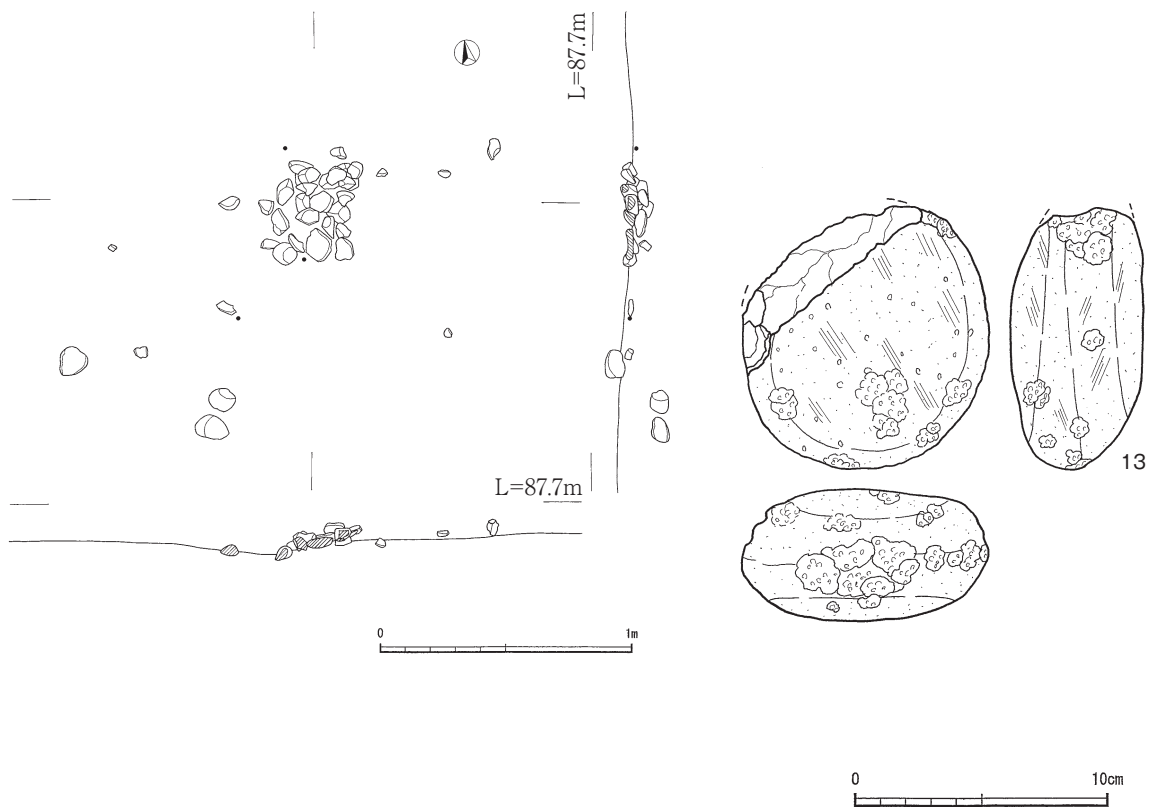
第 21 図 縄文早期 2 号集石遺構・出土遺物



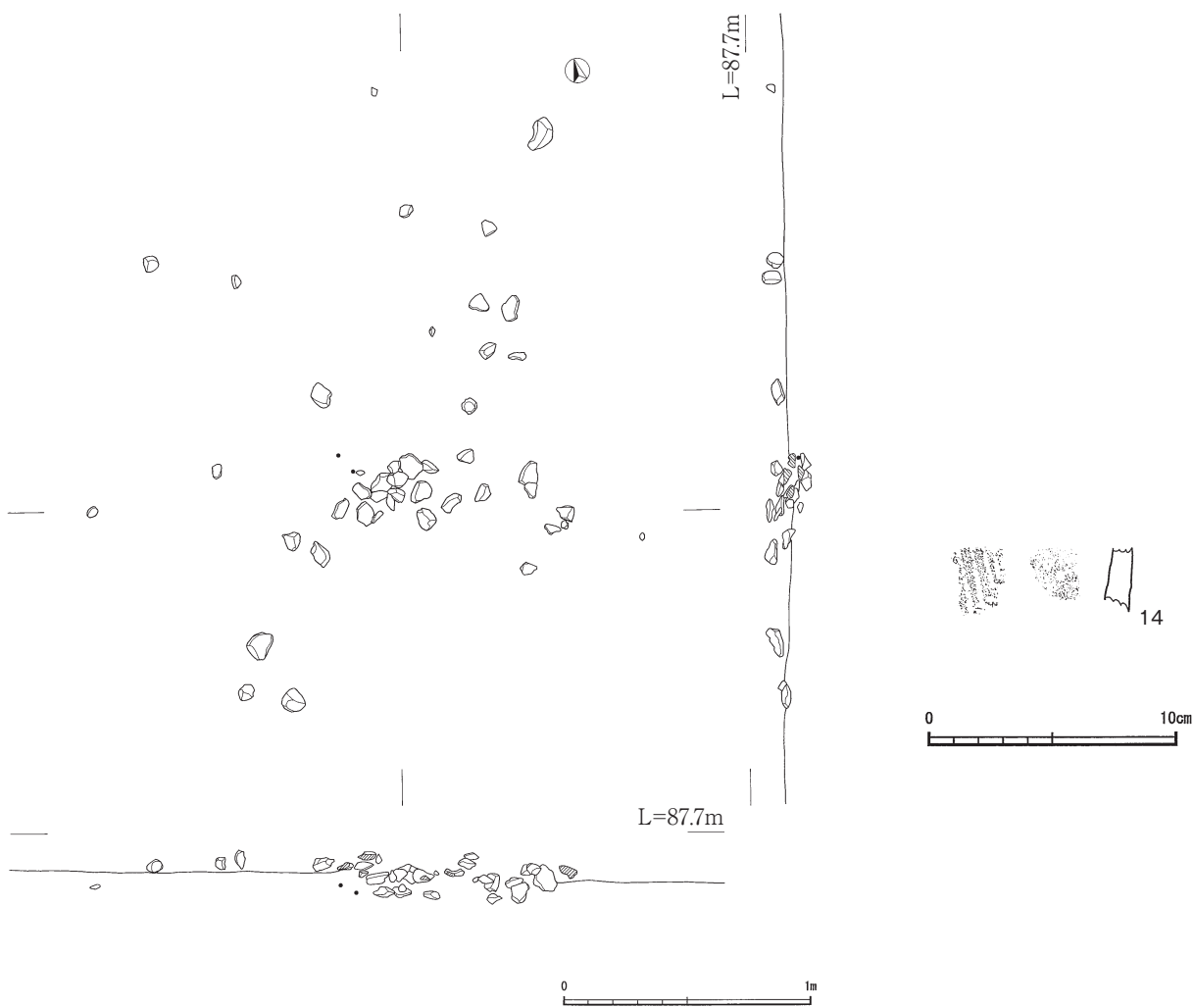
第 22 図 縄文早期 3 号集石遺構・出土遺物



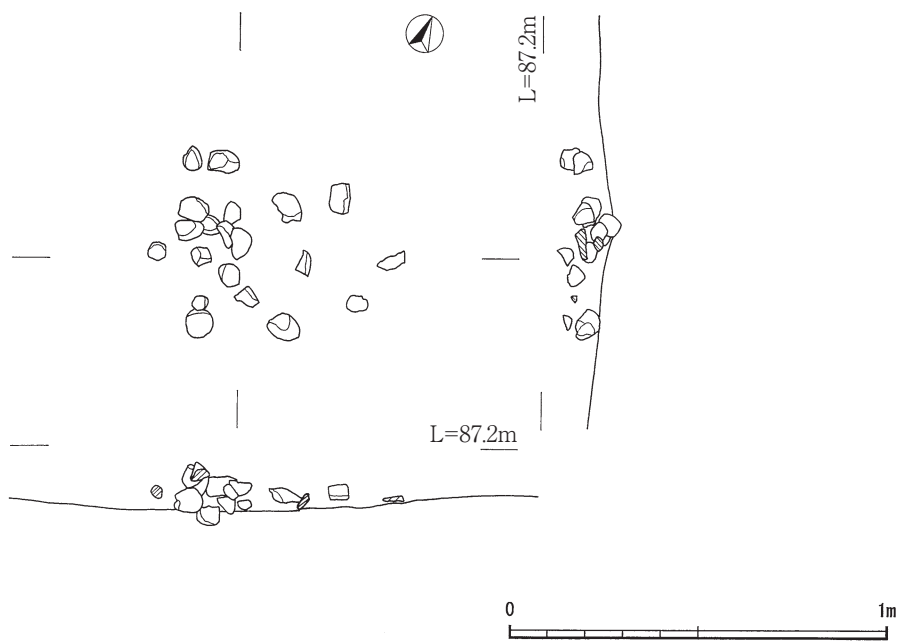
第 23 図 縄文早期 4 号集石遺構・出土遺物



第 24 図 縄文早期 5 号集石遺構・出土遺物



第 25 図 縄文早期 6 号集石遺構・出土遺物



第 26 図 縄文早期 7 号集石遺構

7号集石遺構 (第26図)

E-7区で検出された。51cm×69cmの狭い範囲に集中する。特に掘り込みは確認されなかった。構成礫数は21個である。礫の総重量は2,910g, 平均重量は139gである。構成礫のほとんどを安山岩がしめる。被熱を帯びた痕跡のある礫は確認できなかった。

8号集石遺構 (第27図)

B-5・6区で検出された。246cm×265cmの広い範囲の中に、中心部をもたず散在する。特に掘り込みは確認できなかった。構成礫数は64個である。礫の総重量は8,815g, 平均重量は138gである。構成礫は安山岩と砂岩が半々で、拳大以上の大きめの礫が5個入るが、いずれも安山岩である。土器が1点出土したが、小片のため図化しなかった。

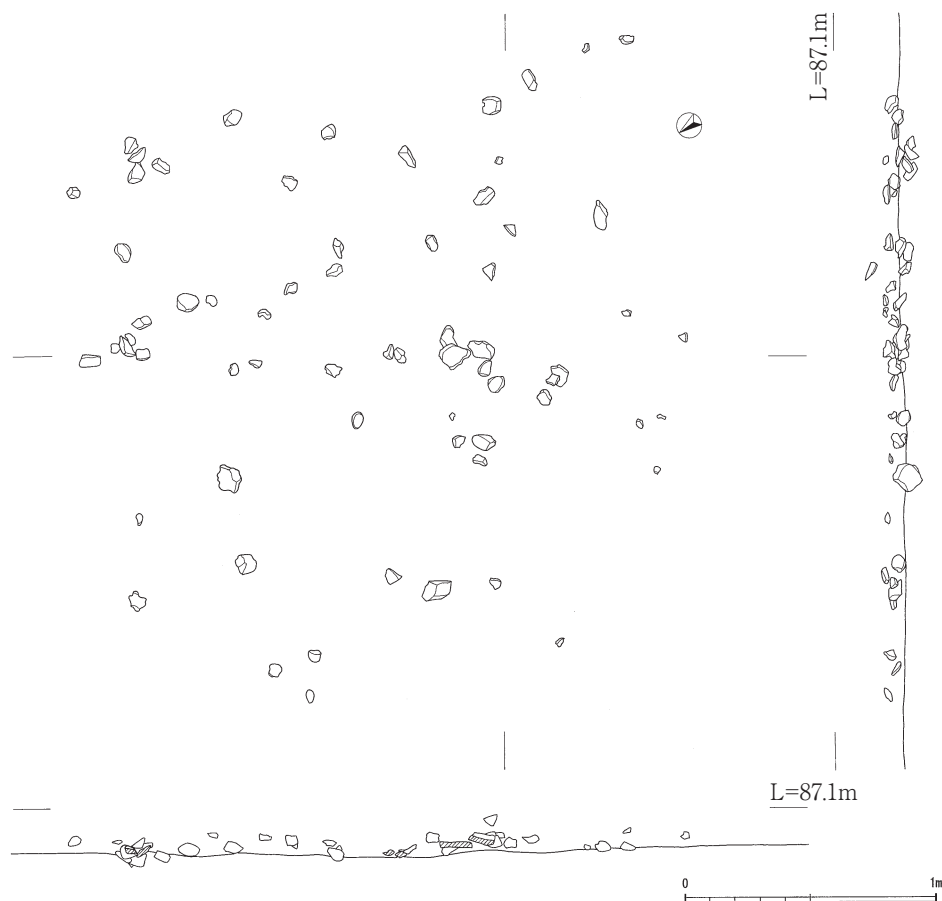
9号集石遺構 (第28図 15・16)

C-5・6区で検出された。178cm×373cmの広い範囲の中に、中心部をもたず散在する。特に掘り込みは確認

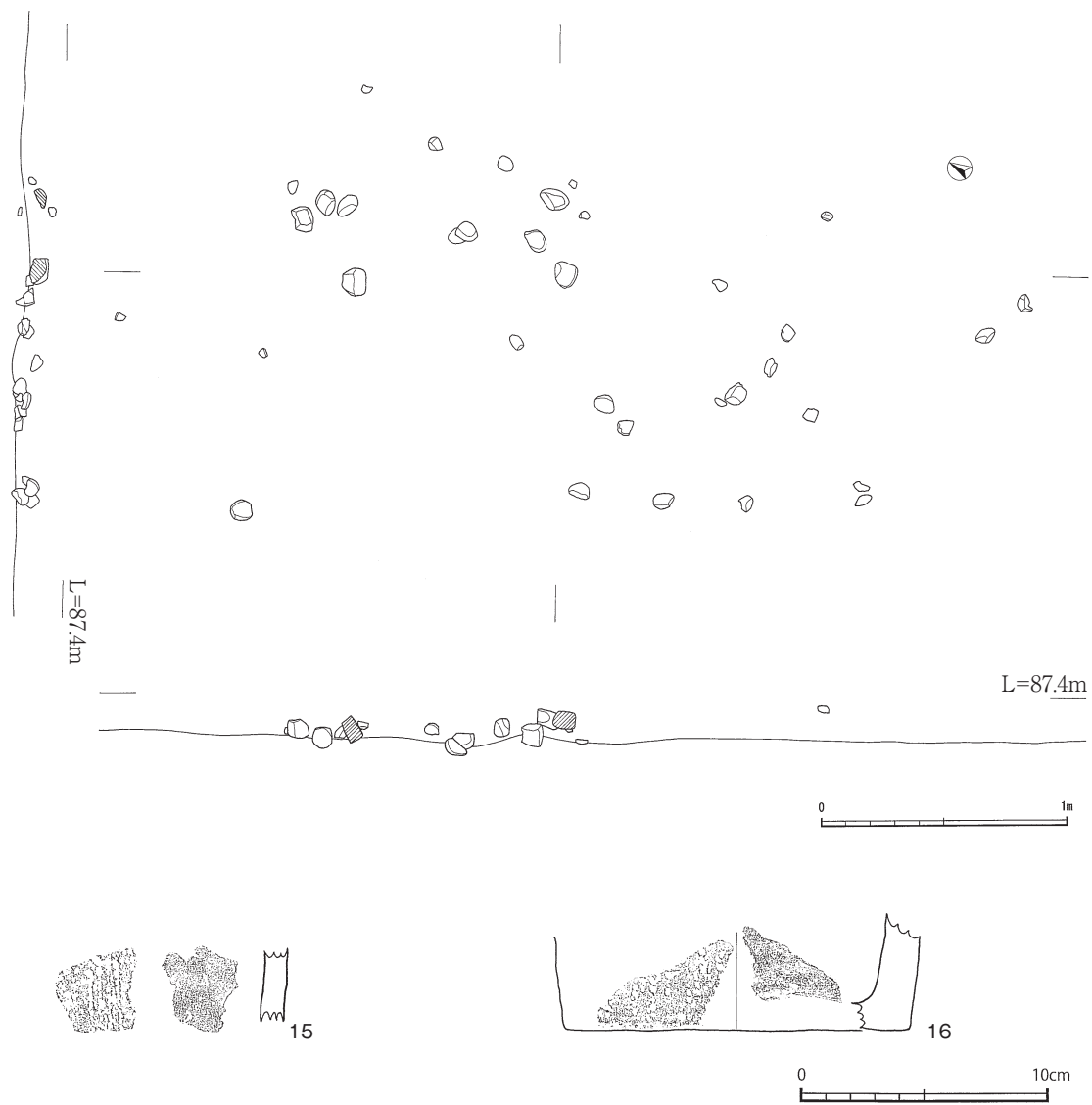
できなかった。構成礫数は30個である。礫の総重量は8,590g, 平均重量は296gである。集石遺構内から土器が2点出土した。胴部片1点(15), 底部片1点(16)で、いずれも小片である。

10号集石遺構 (第29図 17)

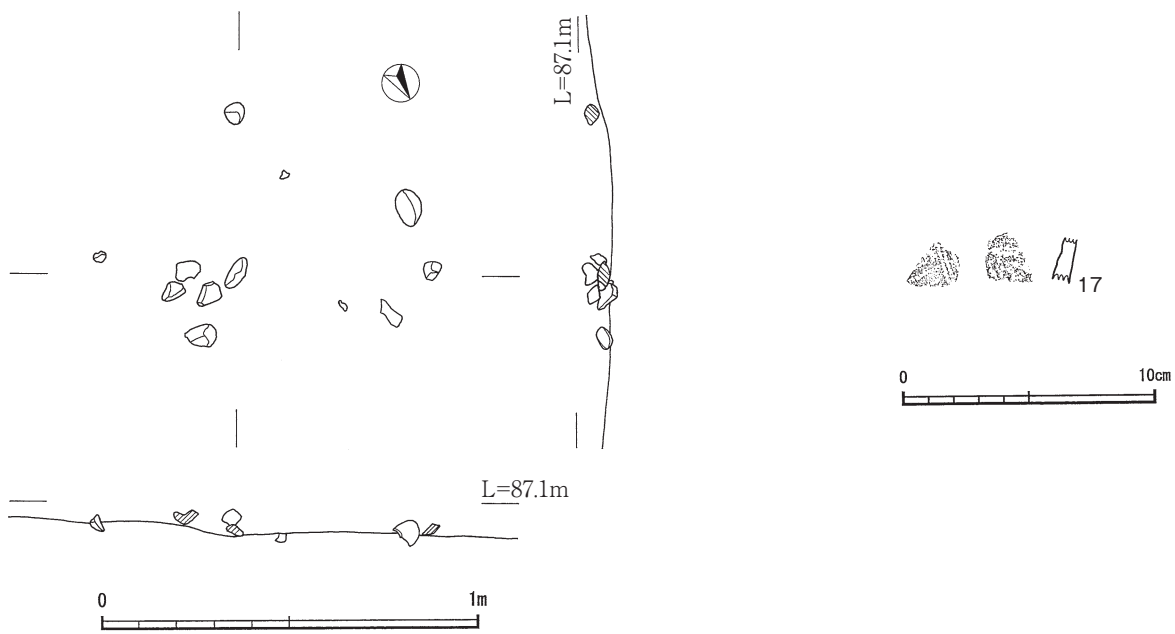
C-5区で検出された。65cm×94cmの間に散在する。特に掘り込みは確認されなかった。構成礫数は11個である。礫の総重量は1,313g, 平均重量は119gである。礫のほとんどに熱破碎の痕跡は見られない。安山岩の円礫で構成されている。集石遺構内からは、土器が1点(17)出土したので図化したが、小片のため、分類はできなかった。



第27図 縄文早期8号集石遺構



第 28 図 縄文早期 9 号集石遺構・出土遺物



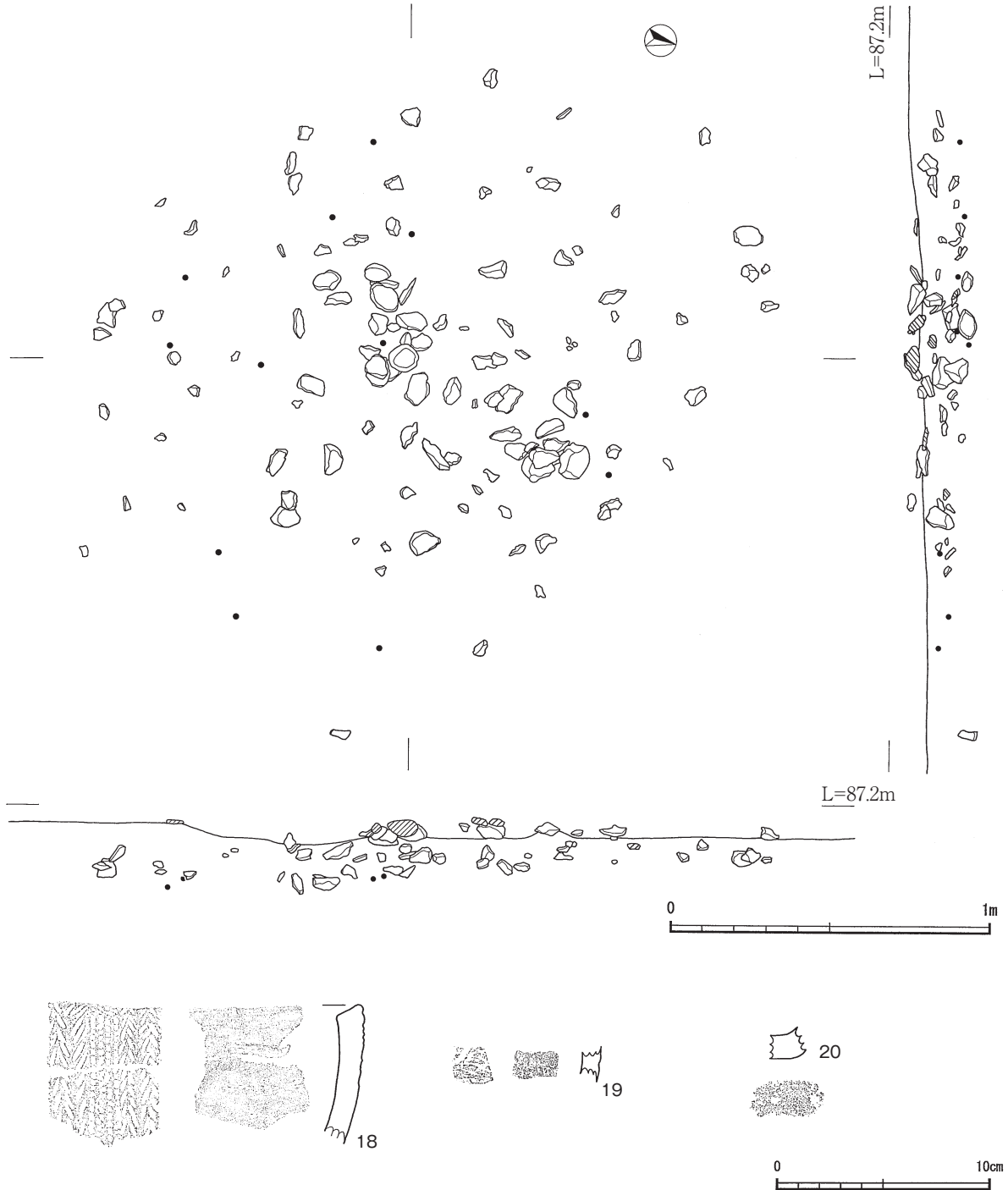
第 29 図 縄文早期 10 号集石遺構・出土遺物

11号集石遺構 (第30図 18~20)

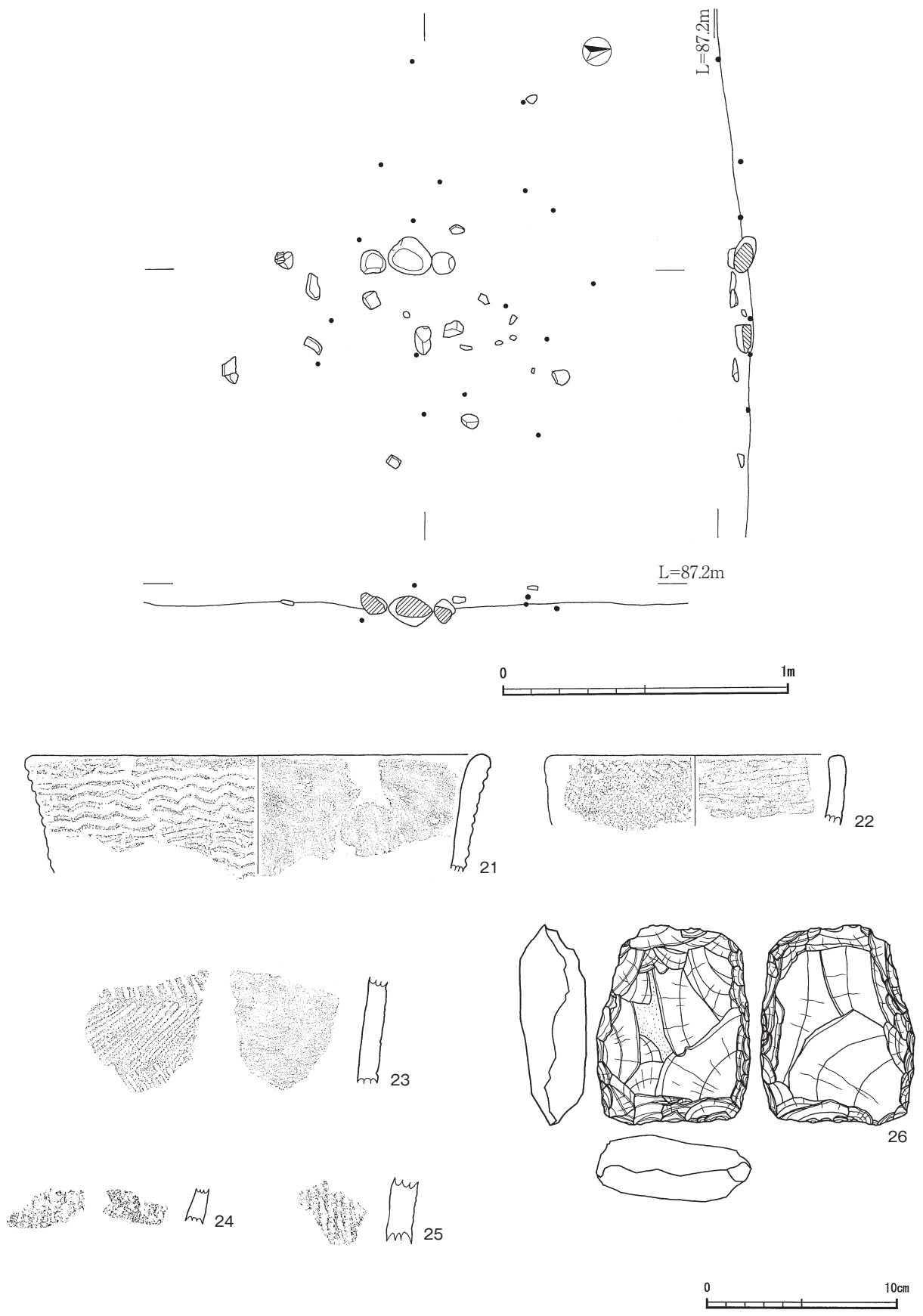
B-4区で検出された。218cm×210cmの範囲に広く広がっている。特に掘り込みは確認されなかった。構成礫数は111個と多い。礫の総重量は14,327g, 平均重量は129gである。熱破碎したと考えられる礫も1割ほど見られる。集石遺構内からは土器が3点, チップが12点出土した。土器3点(18~20)を図化した。18は, 胴部から口縁部にかけてやや内湾する土器である。胴部には, 細かく短めの貝殻刺突文が規則的に施されている。

12号集石遺構 (第31図 21~26)

B-4区で検出された。132cm×123cmの範囲に広がり, 構成礫数は12個である。特に掘り込みは確認されなかった。総重量は4,045g。平均重量は337gと大きめの礫を使用している。礫は乳児頭大の礫を中心に散在していることがわかる。集石遺構から, 土器が7点, 石器が1点, 黒曜石等のチップが17点出土している。土器片2点は小片であったので図化しなかった。土器5点(21~25)は, 貝殻条痕文を施したやや口縁部が外反する



第30図 縄文早期11号集石遺構・出土遺物



第 31 図 縄文早期 12 号集石遺構・出土遺物

21, やや内湾する 22 がある。26 は, 打製石斧である。刃部が基部よりも若干広がる。長さと同幅が同じような長さであること, 長さの割に厚さもあることから, 折れた石斧を再利用した可能性もある。

13号集石遺構 (第32図 27)

C-3区で検出された。245cm×413cmの範囲に幅広く散在している。構成礫数は82個である。特に掘り込みは確認されなかった。総重量は13,950g。平均重量は176gである。熱を帯びて赤化した痕跡の残る礫は, ほとんどなかった。集石遺構から土器が2点出土したが, 胴部の1点(27)だけ図示した。

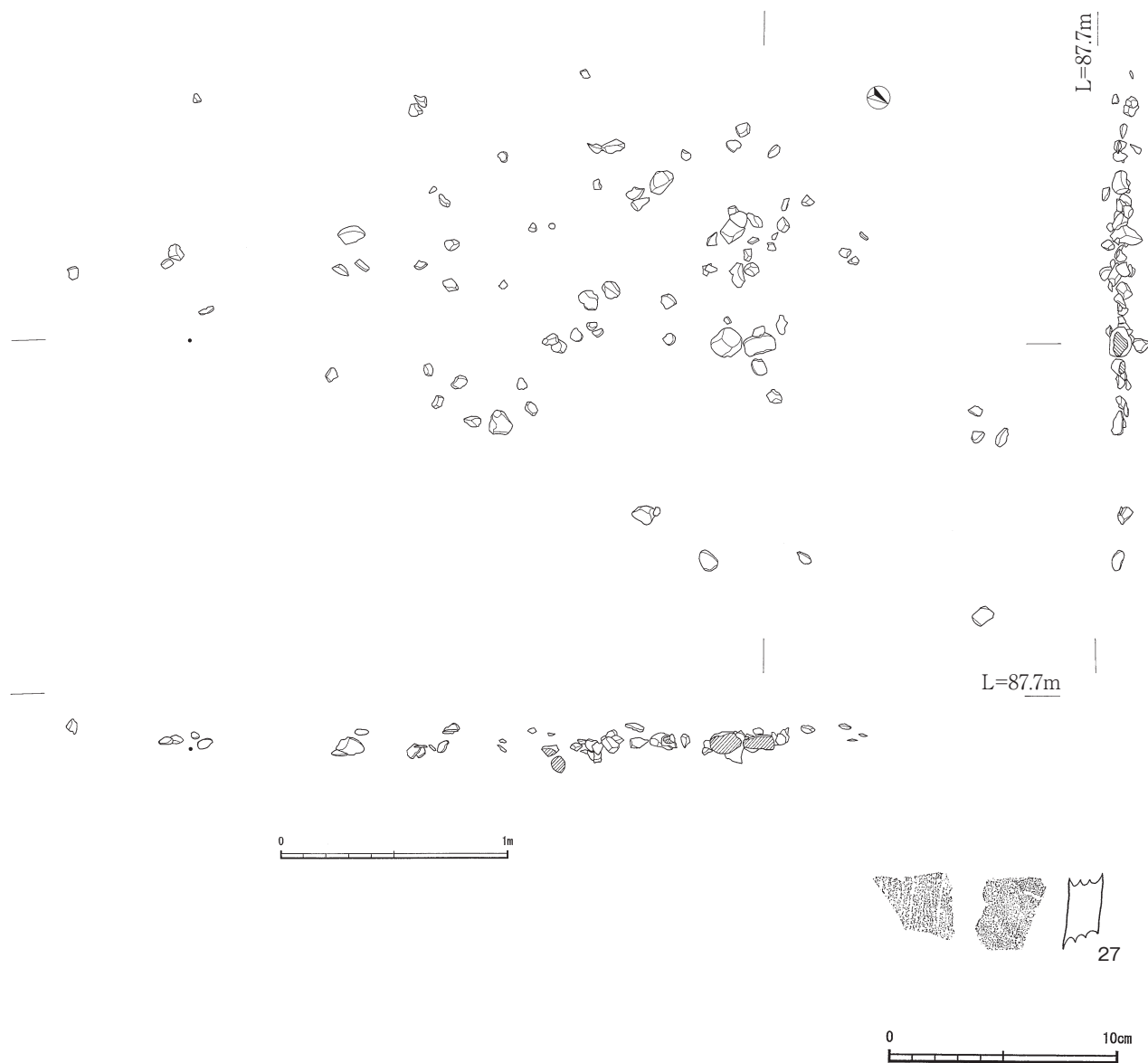
14号集石遺構 (第33図 28~31)

F-3・4区で検出された。162cm×216cmの範囲に広

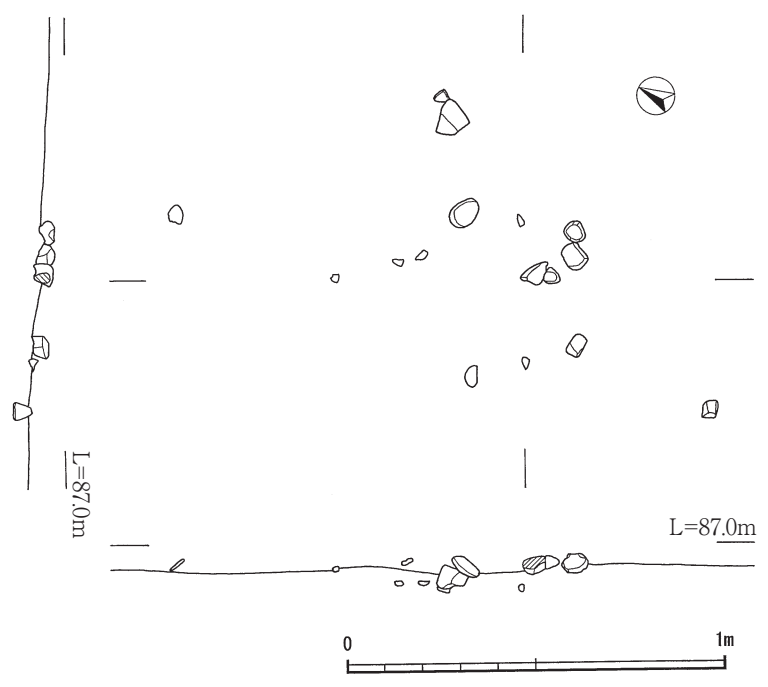
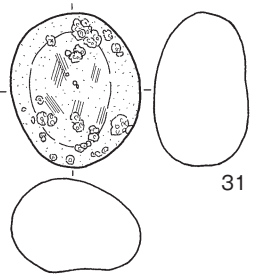
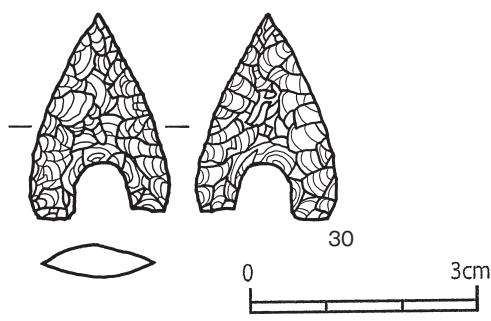
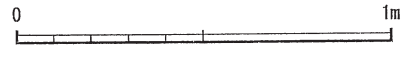
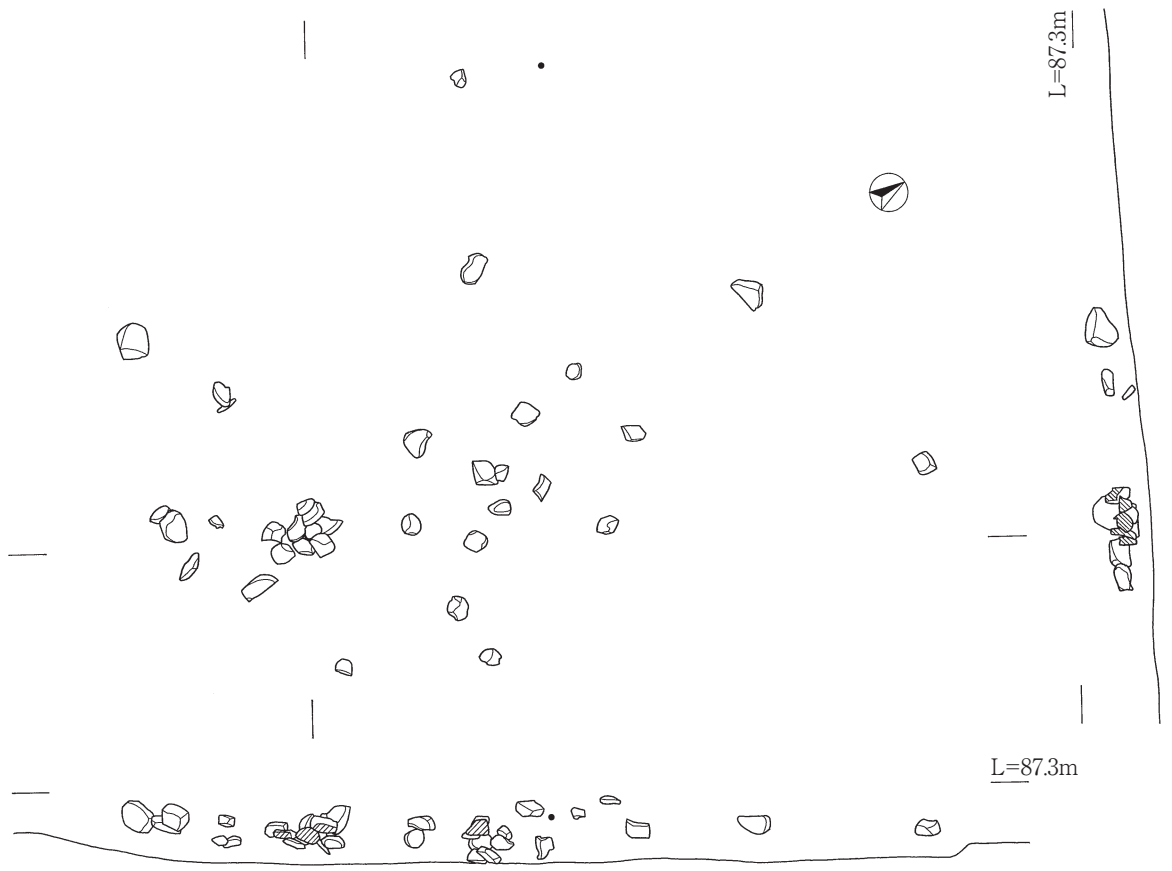
がっている。構成礫数は35個である。特に掘り込みは確認できなかった。総重量は4,165g。平均重量は119gであり, 100~200gの大きさの礫を多く使用している。集石遺構からは土器が2点(28, 29)と石鏃(30), 磨石(31)が出土した。土器は深鉢の胴部小片, 石鏃はチャート製で, 基部にU字状の抉りが入る鋏形鏃で, 磨石は多孔質の安山岩小円礫である。明確な敲打痕は見られないが, 部分的に平滑な面があり, 磨・敲石として使用された可能性がある。

15号集石遺構 (第34図)

E-6区で検出された。145cm×118cmの範囲に散在する。構成礫数は17個と少ない。特に掘り込みも確認できなかった。総重量は1,853g, 平均重量は109gである。集石遺構内からは遺物の出土は見られなかった。



第32図 縄文早期13号集石遺構・出土遺物

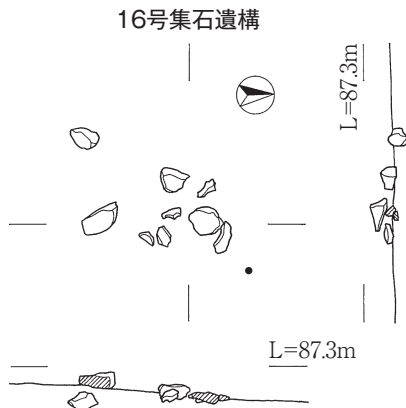


第 33 図 縄文早期 14 号集石遺構・出土遺物

第 34 図 縄文早期 15 号集石遺構

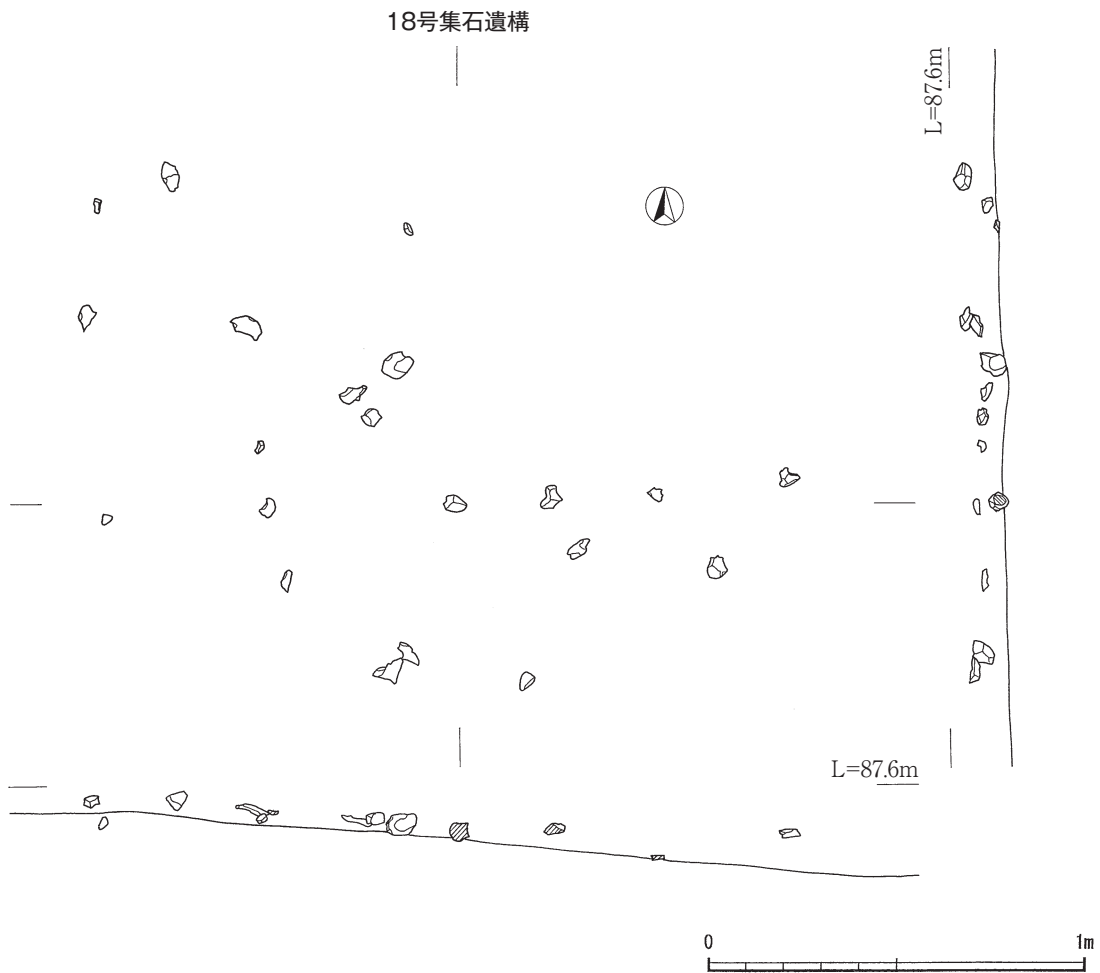
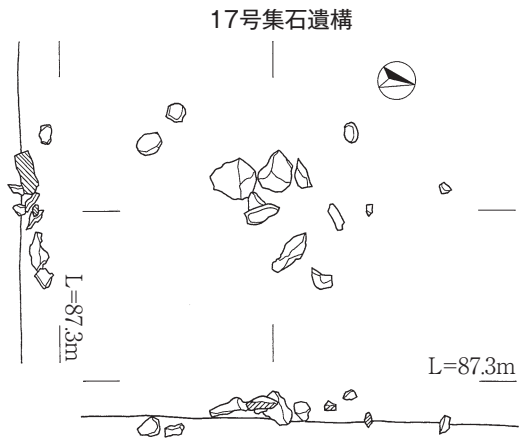
16号集石遺構 (第35図)

B-4区で検出された。43cm×33cmの狭い範囲に集中しているが、構成礫数は9個と少ない。掘り込みは確認できなかった。総重量は900g、平均重量は100gと小ぶりの礫を使用していることがわかる。集石遺構内からは、チャートのチップが1点出土した。



17号集石遺構 (第35図)

B-4区で検出された。50cm×83cmの範囲に割と集中はしているものの構成礫数は13個と少ない。特に掘り込みは確認されなかった。総重量は1,765g。平均重量は136gである。割と大きめの拳大の砂岩3個を使用している。集石遺構内からは遺物は出土しなかった。



第35図 縄文早期16号・17号・18号集石遺構

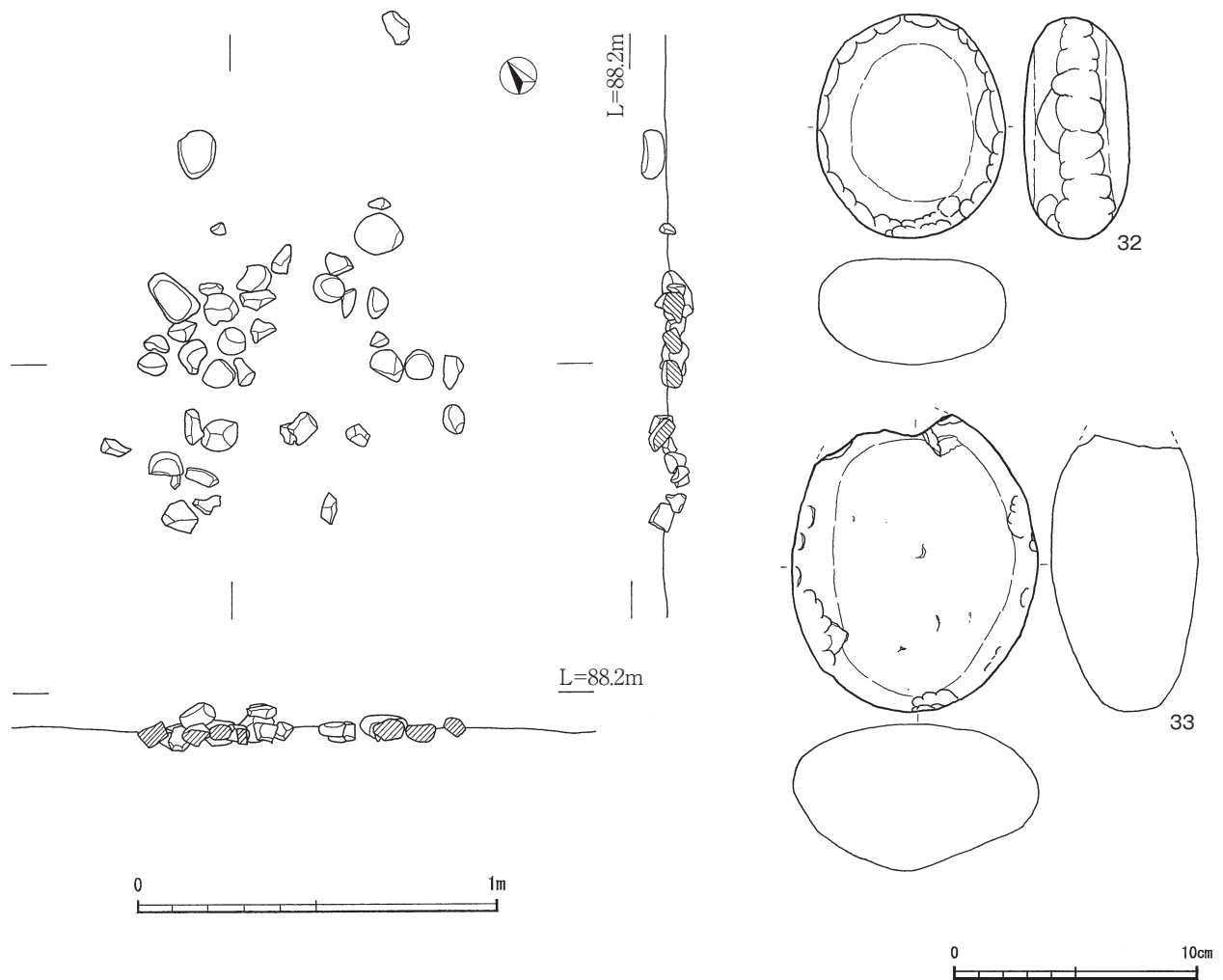
18号集石遺構 (第35図)

I-2区で検出された。190cm×140cmの範囲に中心をもたず散在する。構成礫数は20個である。総重量は1,511g。平均重量は75gと全体的に小ぶりの礫を使用している。礫の多くは砂岩の角礫である。

19号集石遺構 (第36図 32・33)

G-1区で検出された。145cm×100cmの範囲に半円状に集まっている。礫が配置されている弧に沿って、若干掘り込みの可能性が残されたが、図示するまでには至

らなかった。構成礫数は40個である。総重量は8,165g、平均重量は255gである。集石遺構の中から、石器が2点出土したので図示する。32は円礫の上面、下面の3分の2ほどを磨り面として使用している。さらに側面は全体に渡って敲打の痕跡が巡っていることから、敲打兼用の磨石といえる。33は円礫を磨石として使用したものである。上面に広く磨り面として使用した痕跡が残る。側面に見られる不規則な凹みは敲打痕と考えられる。また、上部は敲打により欠損した可能性もある。

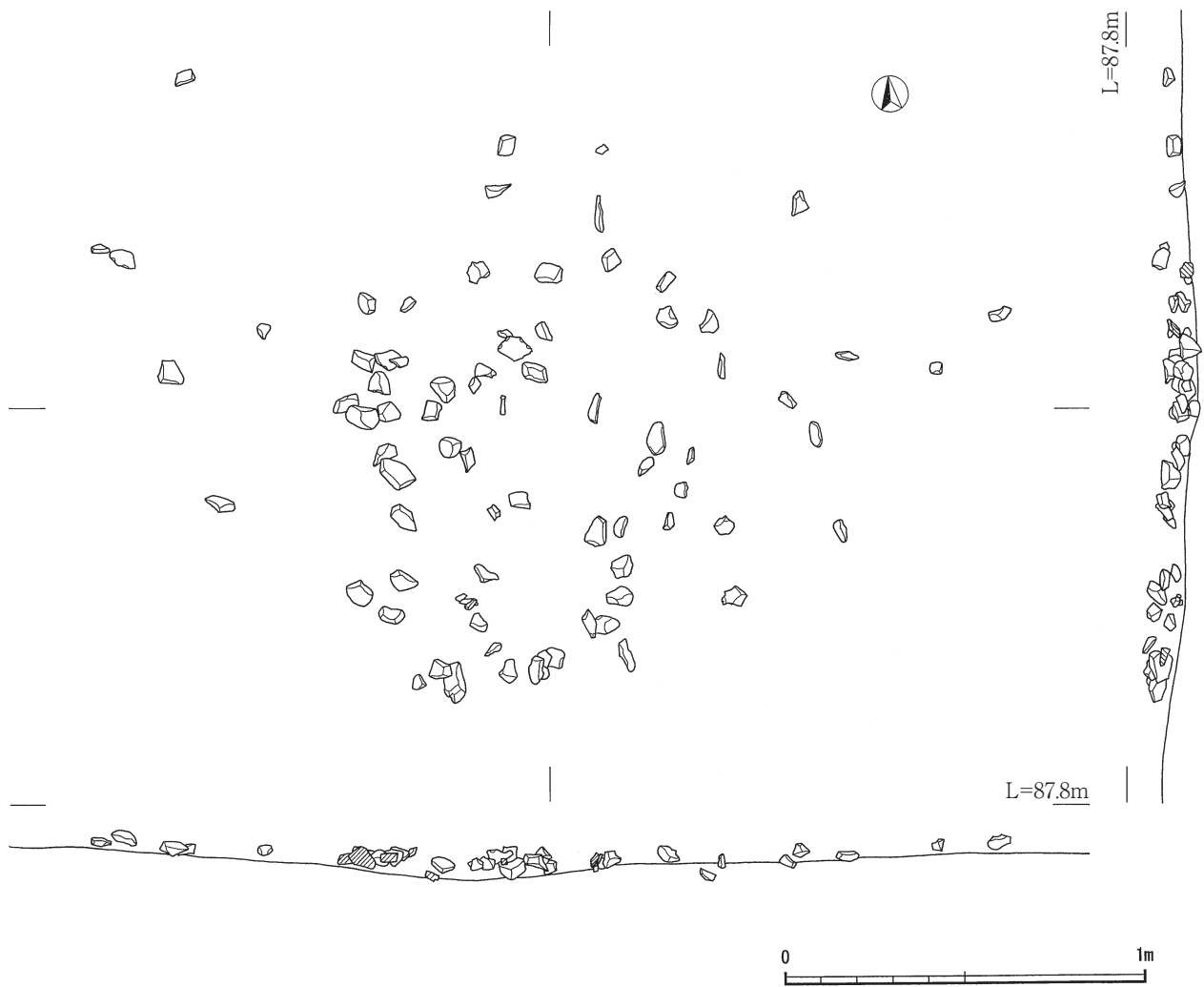


第36図 縄文早期19号集石遺構・出土遺物

20号集石遺構 (第37図)

H-1・2区で検出された。175cm×257cmの範囲に広く散在している。構成礫数は78個である。特に掘り込

みは確認されなかった。総重量は6,725g、平均重量は85gと小ぶりの礫が多い。100g未満が56個である。集石遺構からは遺物は出土しなかった。



第37図 縄文早期20号集石遺構

2 遺物

(1) 土器 (第 19・38~45 図 34~115)

1 類土器 (第 38 図 34~36)

1 類土器は、平底の底部から口縁部に向かい緩やかに外傾する深鉢形の土器である。口縁部から胴部上位には貝殻による横位条痕文を施し、胴部中位以下には、斜位に交差するように沈線を施している。内面は、斜めから縦方向のナデ調整が行われている。

34 は口縁部から胴部にかけて接合した破片である。口唇部の端部は丸まっており、器壁はほぼ同じ厚さ（約 1.2cm）である。外面は、口縁部から胴部上位にかけて横方向に 15 条の沈線が巡らされている。5 条が単位となっている。

胴部中位から下位にかけては、斜めの 2 方向の沈線が施されている。左下方向へのものと右下方向へのものである。左下方向へは 6~7 本が 1 組、右下方向へは 4~10 本が 1 組に見える。しかし、沈線をナデ消されている部分や重複している部分もあるので、4 本が最小の単位であって、10 本の部分についても 4~5 本が 1 単位となっていると考えられる。内面は口縁部付近が斜めから横方向のナデ調整、口縁部の下部から胴部の残存している部分の下部にかけてはほぼ上下方向のナデ調整がおこなわれている。

上位にある横方向の沈線に若干、斜め方向に延びる沈線の名残がある。沈線の切り合い関係の観察より、左上から右下への沈線が最初、次に右上から左下への沈線、最後に上位の横方向の沈線が施されたのがわかる。

35 は胴部の破片である。上部には横方向の 8~9 条

の沈線が付されている。その下部には、下方の沈線と重複して、斜めの 2 方向の沈線が交互に施されている。1 つには左下方向へのものであり、もう 1 つには右下方向へのものである。左下方向へのものは 5 本の沈線が 1 組となっており、右下方向へのものは 4~6 本の沈線が 1 組となっているようである。内面は斜めから縦方向のナデ調整が行われている。

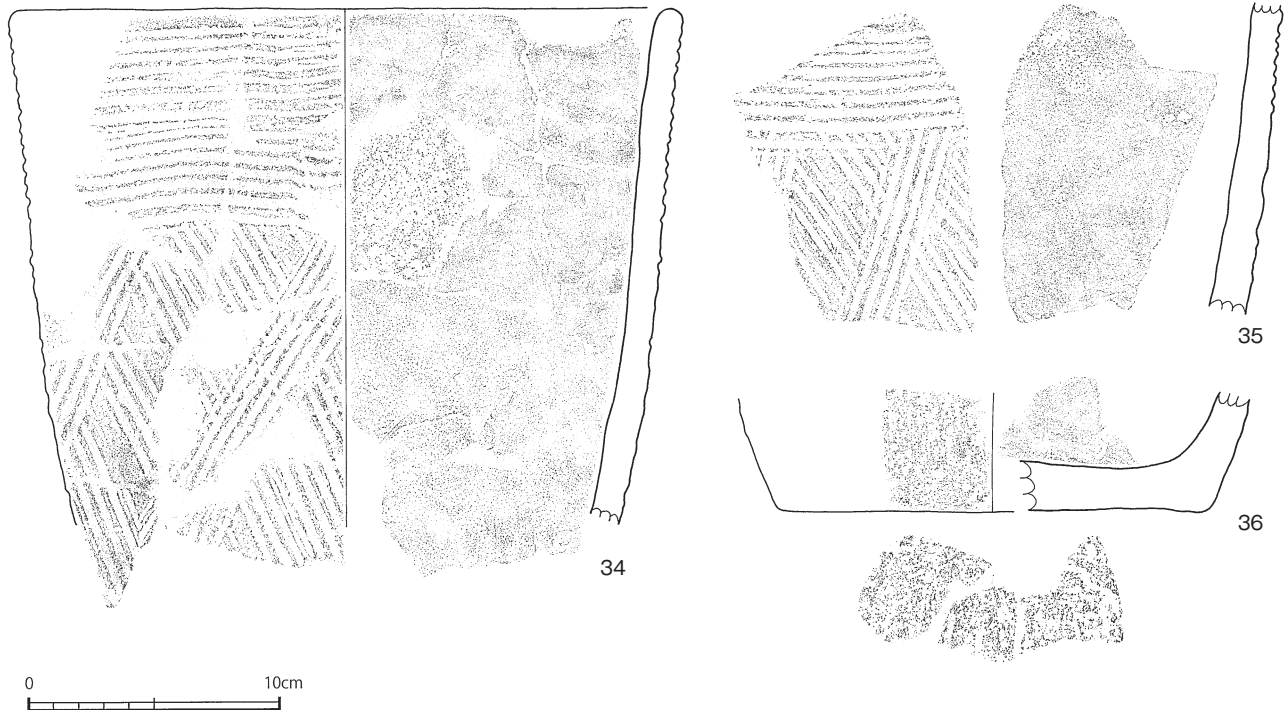
沈線の切り合い関係は、34 と同じく、左上から右下への沈線が一番最初、次に右上から左下への沈線、最後に上位の横方向の沈線が施されている。

36 は底部の破片である。安定した平底を呈するもので、底面と胴部下部の接合点にかけては、幾分上げ底となっている。胴部へは、やや開き気味なカーブで上部へと立ち上がっていく。外面は縦方向のナデ調整が行われている。内底もナデによる調整である。

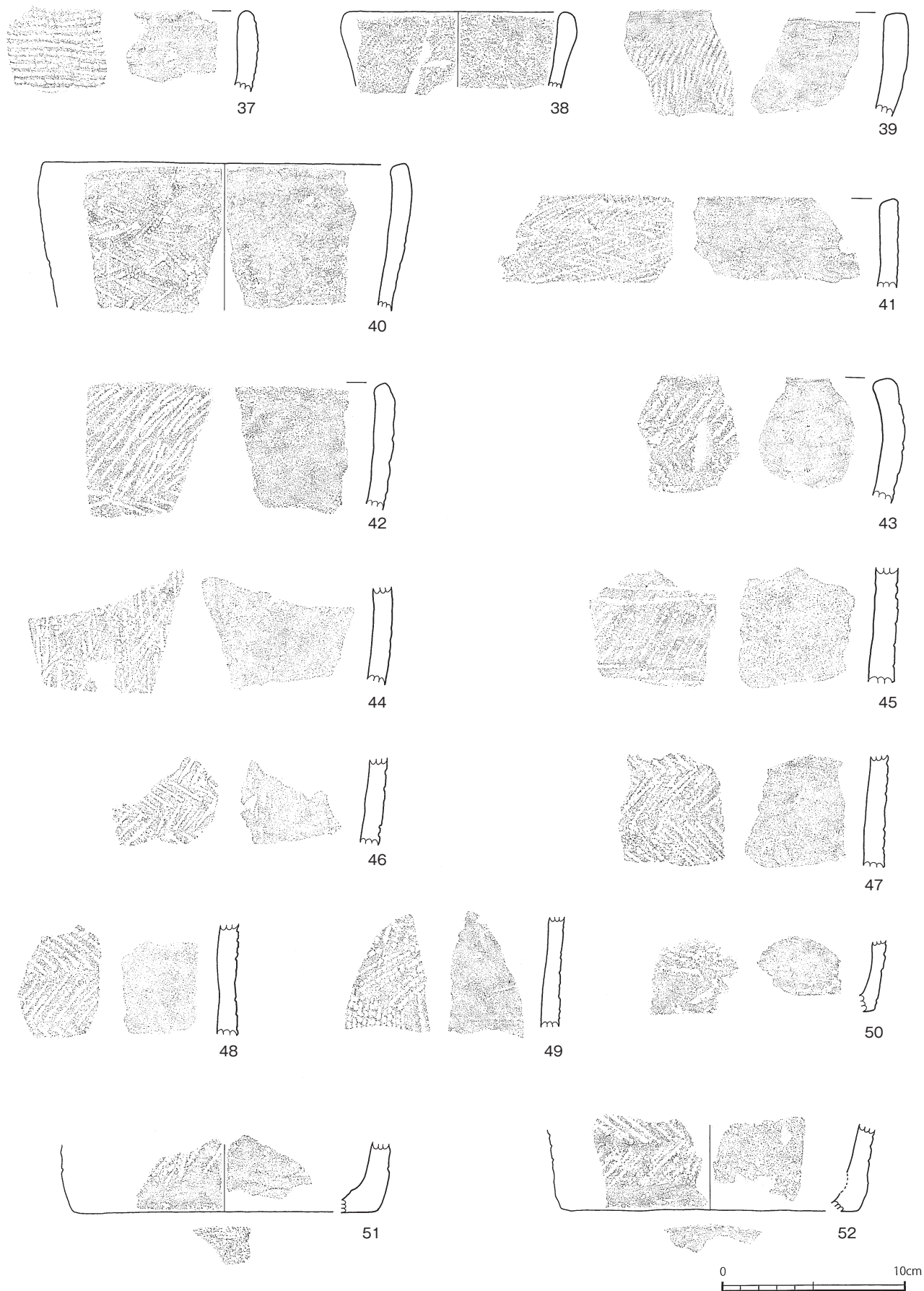
34 と 35 を比較すると、上部の横方向の沈線の下部に斜めの 2 方向の沈線があること、そして左下方向の沈線が少なく、右下方向へが左下方向へのものの約 2 倍の数の沈線であること、沈線の施文順が同じであること、器壁の厚さがほぼ同じであることなどから、同一個体と考える。また、36 も内面の器面調整や器壁の厚さがほぼ同じであること、底部から復元した胴部の大きさが同等になりそうなことから、3 点とも同一個体になる可能性がある。

2 類土器 (第 39~42 図 37~96)

2 類土器は、胴部に貝殻刺突文及び羽状文を施す深鉢形の土器であるが、文様構成により細分類した。



第 38 図 縄文早期の土器 1



第 39 図 縄文早期の土器 2

37～52までは、2-a-1類と位置づけた。この類は胴部から口縁部にかけてやや内湾する。口唇部がやや丸みを帯び、貝殻条痕文は浅いが「く」の字状に大きめの文様が施される一群である。37～43は胴部から口縁部にかけてであるが、44～49は胴部、50～52は底部である。

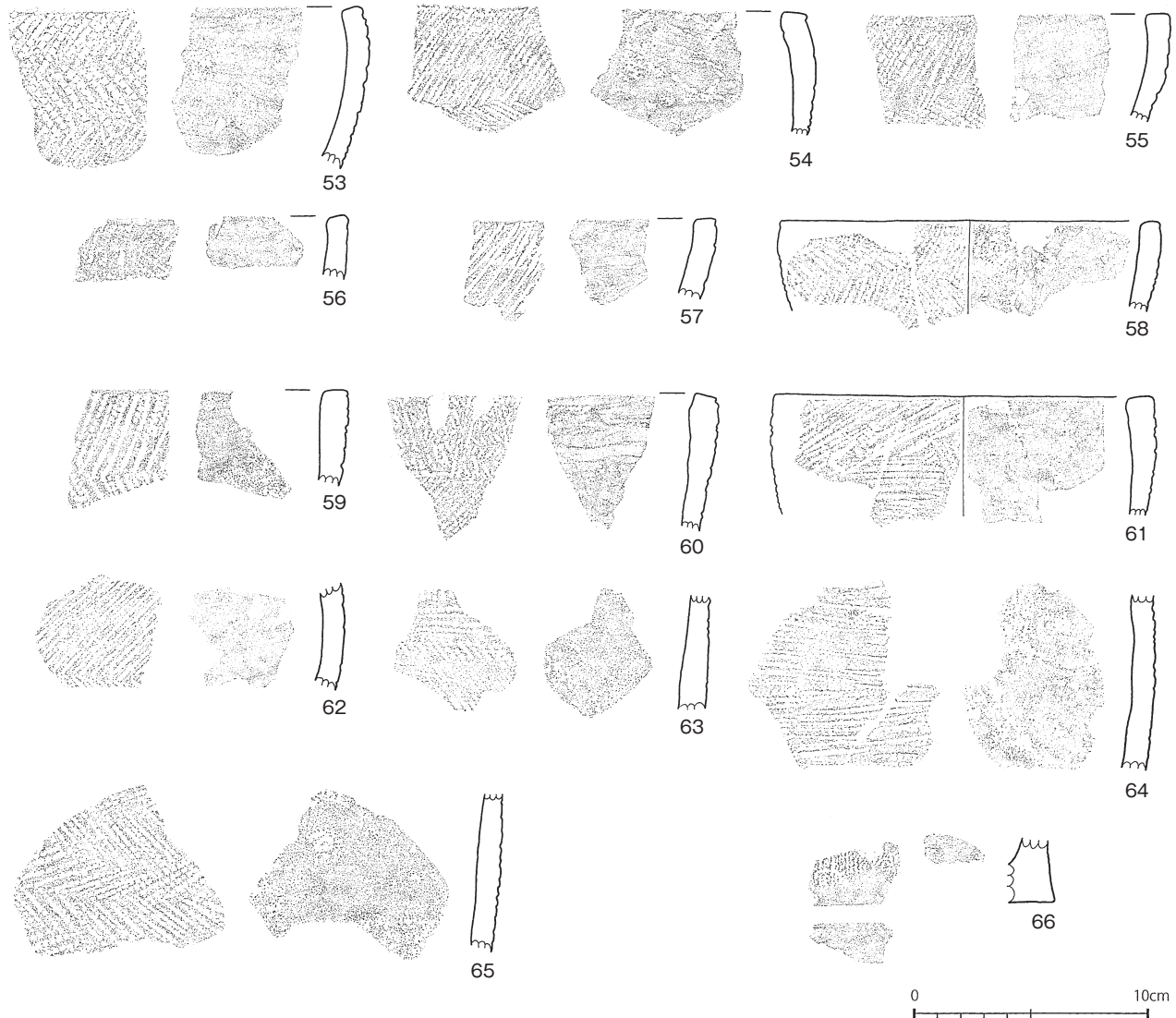
37は、口縁部の小片であるが、口唇部の端部は丸まり、外面は貝殻の腹縁による横方向への列状の押圧が施されている。内面は横方向の丁寧なナデ調整が行われている。38、39は貝殻条痕文を口縁部付近まで施しているが口縁部付近がやや肥厚する。39は口唇部をナデ、平らな面を作る。40は貝殻刺突を「く」の字状に施すが、不規則である。口唇部には煤が付着する。41も40に類する。42は「く」の字状ではあるが、刺突を繋ぎ長めに斜の文様を施している。43は等間隔に刺突を施す。44は不規則な刺突である。45は斜位に刺突文を施しているが、その上下には横位に貝殻刺突文を施している。46は、短い沈線で羽状文を施している。47～50は、貝殻刺

突を「く」の字状に規則正しく施している。51、52は底部付近まで刺突を施していることが観察される。

53～66は、2-a-2類と位置づけた。この類は口唇部が平坦面を成している。貝殻刺突文が2-a-1類と比べて深く、文様間が比較的狭い一群である。

53～61は口縁部を含む胴部である。59以外からは、口唇部を強くナデ平坦面を構築した様子が、口唇部端に粘土が溜まっていることから窺える。53～59は「く」の字状に貝殻刺突を狭い間隔で丁寧に施している。60、61は斜位の刺突文の下に横位に刺突文を施している。62～65は胴部片である。62は、斜位の刺突文を長めに施している。63は60と同様、「く」の字状の刺突文の上部に横位に刺突文を施している。64は横位に近い角度に斜位の刺突を長めに施している。65は「く」の字を横だけでなく、上下にも連続で丁寧に施している。66は底部であるが、貝殻刺突文が施文されている様子が窺える。

67～86は2-a-3類と位置づけた。2-a-1、2類と



第40図 縄文早期の土器3



第 41 図 縄文早期の土器 4

同じような文様を施しているが、全体の器形が不明な一群である。

67～69は、胴部上位から口縁部が残る。器形は、やや内湾気味で、貝殻刺突をはっきりと細かく丁寧に繰り返している。70、71は口縁部が残存しない胴部であるが、67～69と同様の貝殻刺突文が施されている。72～77は、胴部から口縁部が残るものであるが、いずれも口唇部に平坦面をもち、貝殻刺突文を施してはいるものの、やや施文が不規則だったり空間が入ったりするものもある。75は、口唇部付近に煤の付着が見られる。78は、口縁部に縦位に貝殻刺突を巡らせ、その下方に「く」の字状の刺突を繰り返している。79～82は胴部である。「く」の字を意識した刺突が繰り返されている。83は底部であるが、貝殻刺突の痕跡は微妙に残る。84は完形品である。口縁部が大きく内湾し、突帯を1条貼り付けている。外面には貝殻刺突文が施され、内面はナデとミガキ調整が行われている。底部は安定した平底である。85、86は84の形状に近いと考えられる口縁部である。縦位の貝殻刺突文が施されるが、屈曲部の上位は丁寧なナデが見られる。2点とも小片のため、傾きには若干の不安も残

される。文様形態や屈曲部の様子から同一個体の可能性がある。

87～91は、2-b類と位置づけた。丁寧なつくりで口縁部が平坦になることが予測される一群である。87、91は羽状文を横方向に巡らせ、88～90は、縦方向に施文を繰り返している。また、列点状に施した刺突文も縦方向の施文の間に見られる。

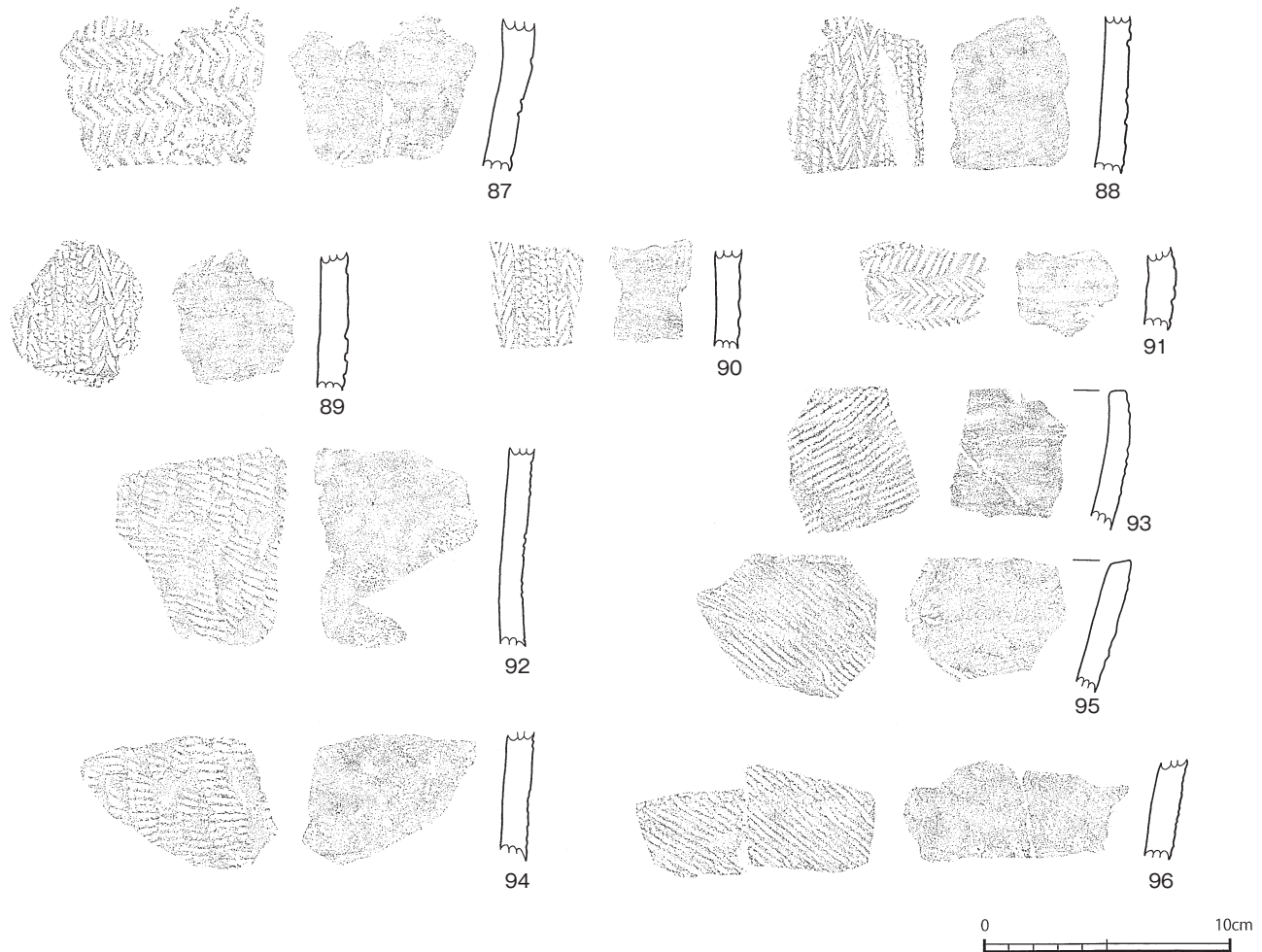
92～96は、2-c類と位置づけた。口縁部断面形状、内面磨きなどから2類の範疇とした。外面に単節の斜縄文を施している。

3類土器 (第43～45図 97～115)

口縁部がラッパ状に開き、胴部がやや膨らみ、底部が安定した平底となる土器の一群である。

97～103を3-a類と位置づけた。c類と比べると比較的器壁が薄めで沈線と捺糸による文様が施されている。

97は口唇部に刻み目が等間隔で施されている。97～104は、沈線による施文の状況、内面及び外面の調整等から同一個体の可能性が高い。99、101は胴部である。沈線と捺糸文を施しているが、同一個体の可能性が



第42図 縄文早期の土器5

ある。102, 103 は胴部である。撚糸文を施した後、沈線により文様を描いているが、同一個体の可能性がある。

105~109 を 3-b 類と位置づけた。a 類と同じように器壁は薄めで、口縁部は外側に大きく開くものである。口唇部の端部は角張るもの (105・107・108) と丸みを帯びるもの (106・109) とがある。105 は外面の口唇部の端部から口縁部全体にかけて、短い爪形の連続刺突文が4段に亘って波状に付されている。106 の口唇部の端部から口縁部にかけては同様な施文が6段施されている。また、頸部から胴部の上部にかけても施され、それより下部は格子状の沈線の内側に撚糸文が充填される。撚糸文が充填された格子の外側は丁寧にナデられて無文となる。107 は波状となる口縁部で、口唇部の端部と口縁部の下部のみに短い爪形の連続刺突文が、108 は残存している部分には3段の同様な施文が見られる。109 は口唇部の端部に短い刻みがあるほか、口縁部にも3列に「D」の字状の形状の貝殻刺突文が3段付されている。頸部に

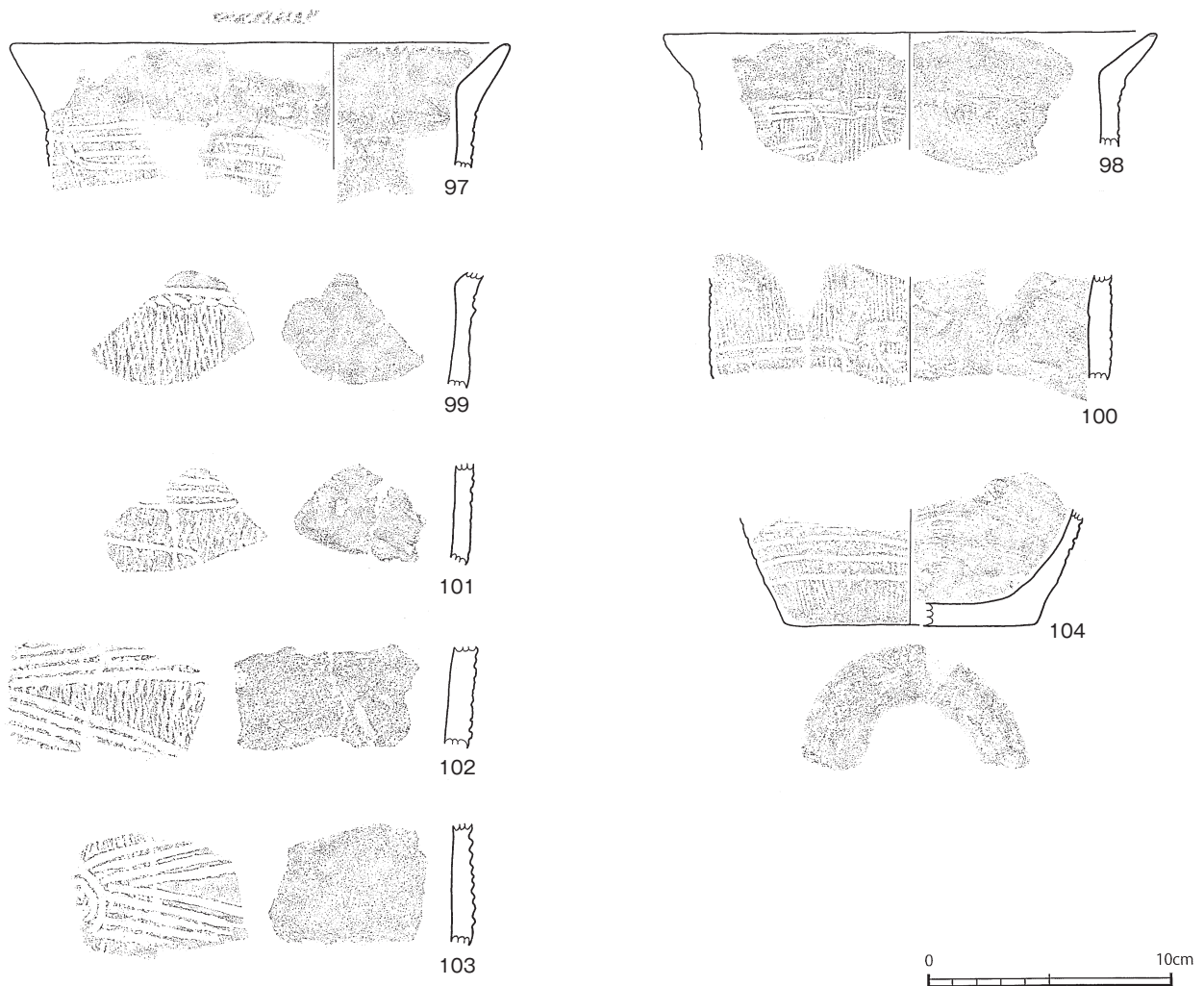
かけては横方向の沈線が4, 5 巡り、胴部には三角ないしは六角形状の沈線の内部を貝殻の刺突による文様を満たしている。

110~115 は 3-c 類と位置づけた。器壁がやや厚く貝殻刺突文、押し引き文、貝殻条痕文が施される一群である。

110 は円筒形を呈する土器の口縁部から胴部にかけての破片で、外面には横方向を主とする貝殻条痕文が付される。

111 と 112 は胴部である。横方向と波状の貝殻条痕文が施されている。器壁は比較的厚い。

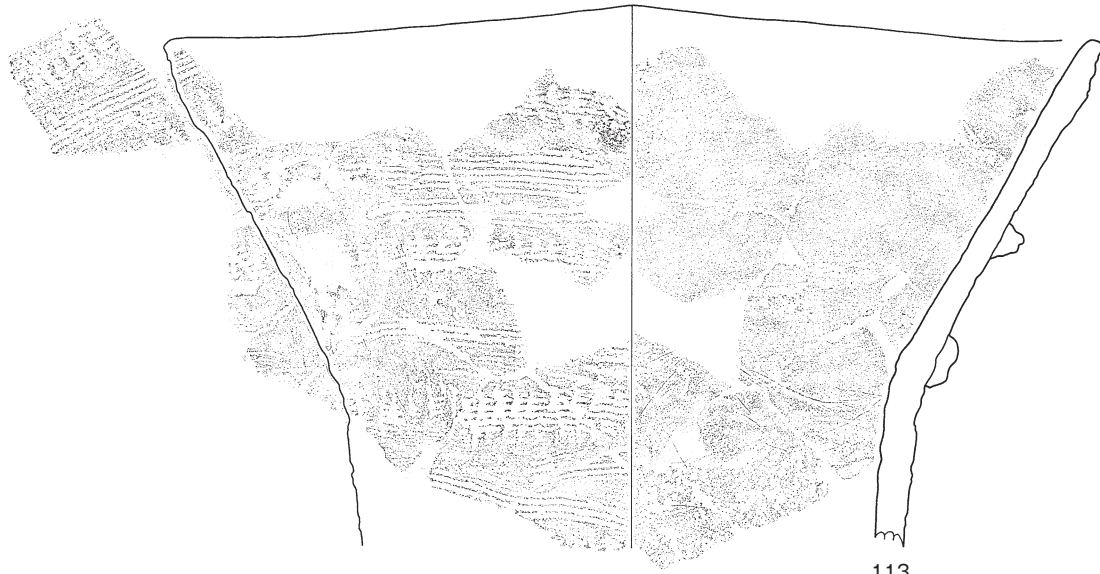
113 は口縁部が長く大きく開くもので、外面には横方向の貝殻条痕文と貝殻腹縁の押圧が連続的に行われているほか、塊状の突帯が部分的に付される。114 と 115 は、外面に横方向の貝殻条痕文と貝殻腹縁の押圧が連続的に行われているものの胴部である。113 と文様形態は似ている。113~115 は、同一個体である可能性が極めて大きい。



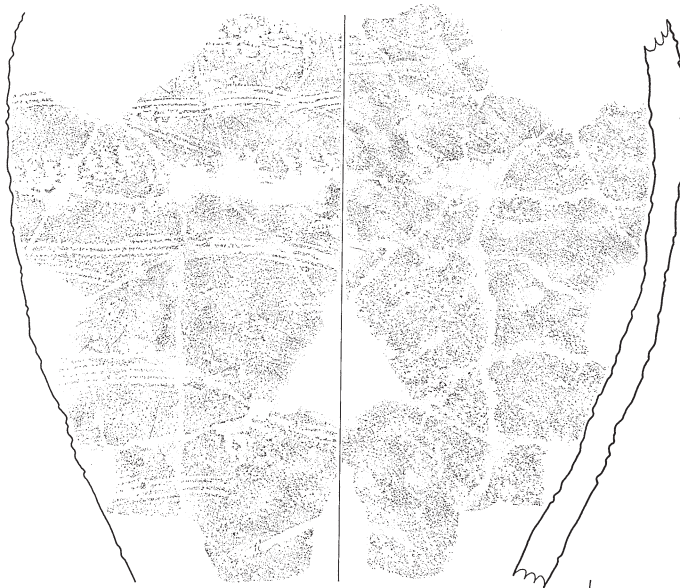
第 43 図 縄文早期の土器 6



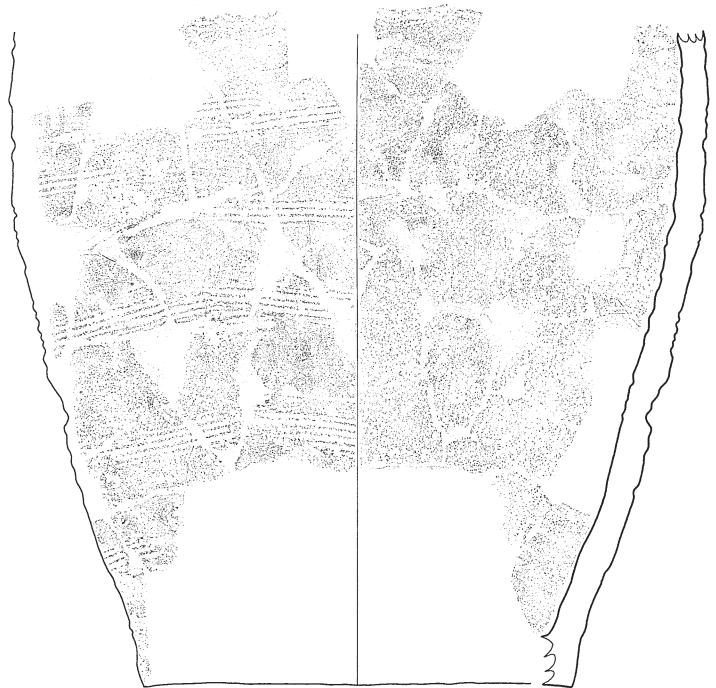
第44図 縄文早期の土器7



113



114



115



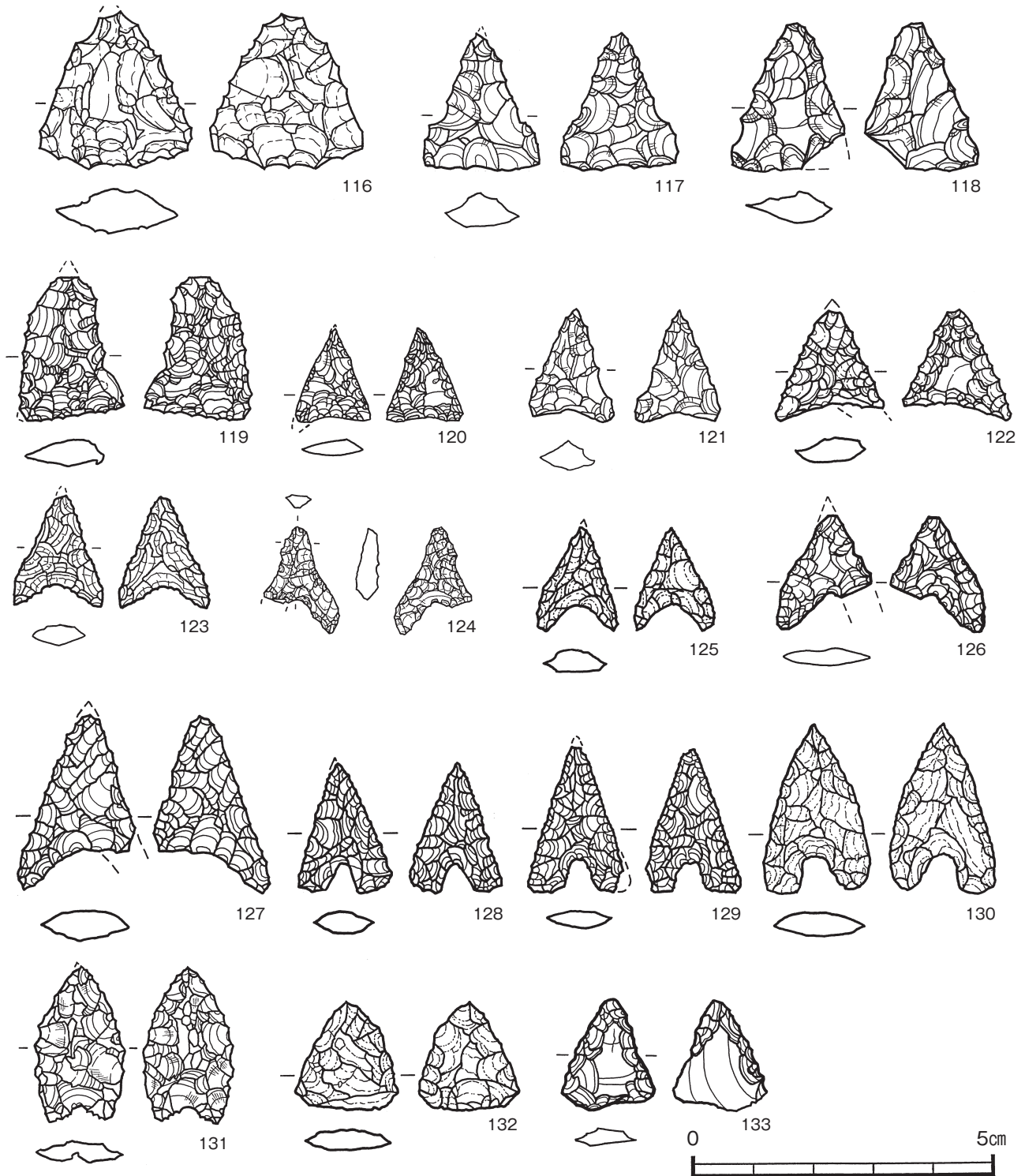
第 45 図 縄文早期の土器 8

(2) VII層出土石器 (第 19・46~53 図 116~182)

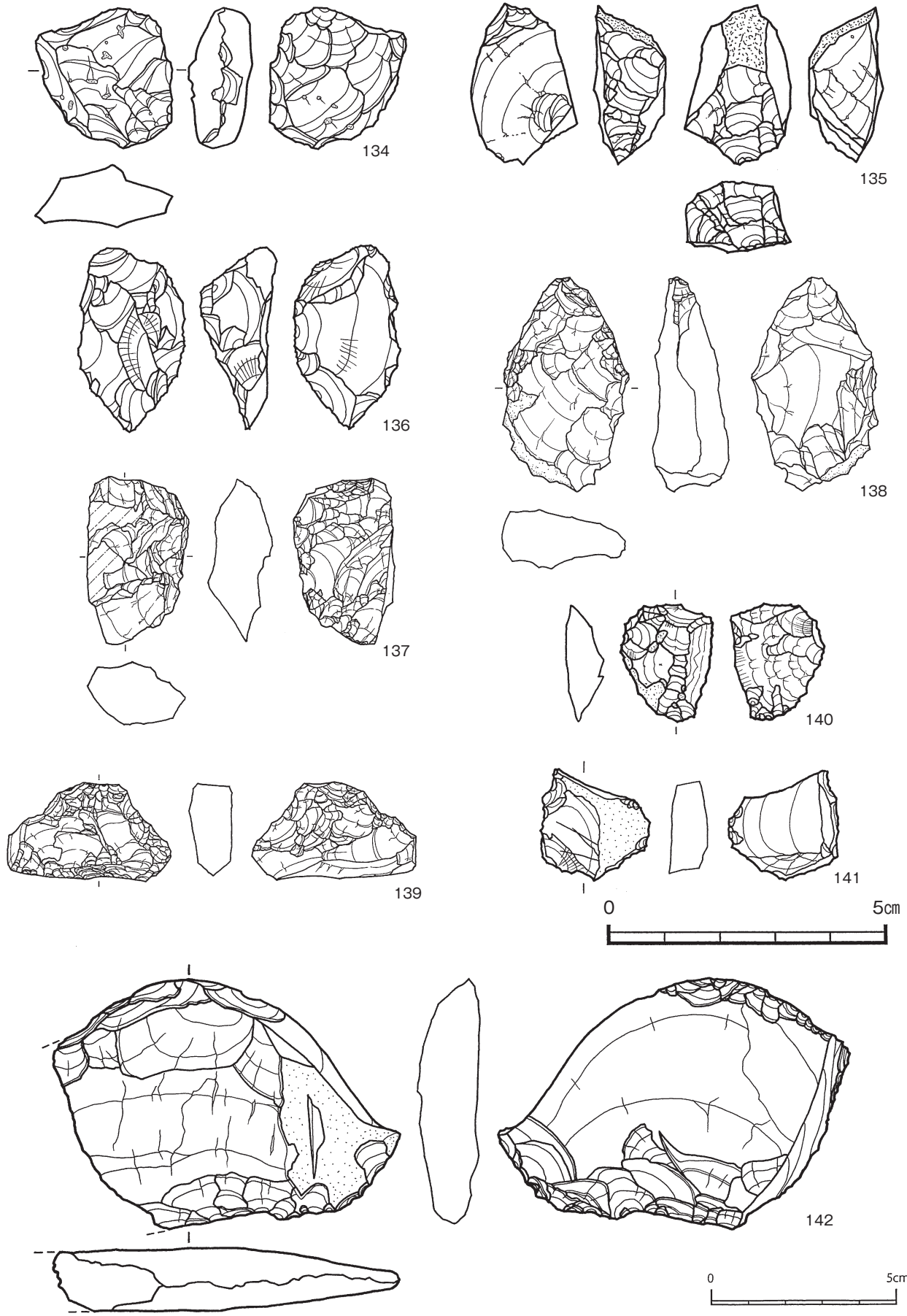
VII層出土の石器として、石鏃 18 点、搔器 3 点、彫器 1 点、楔形石器 1 点、加工痕・使用痕のある剥片 4 点、磨製石斧 4 点、打製石斧 (加工痕のある剥片 1 点を含む) 3 点、礫器 2 点、磨・敲石類 11 点、砥石類 5 点、石皿 2 点、石錘 8 点、蜂の巣石 1 点を図示した。

石材に関する分析・同定は行っていないが、黒曜石 I 類は不純物を多く含む漆黒色不透明の黒曜石で、薩摩川

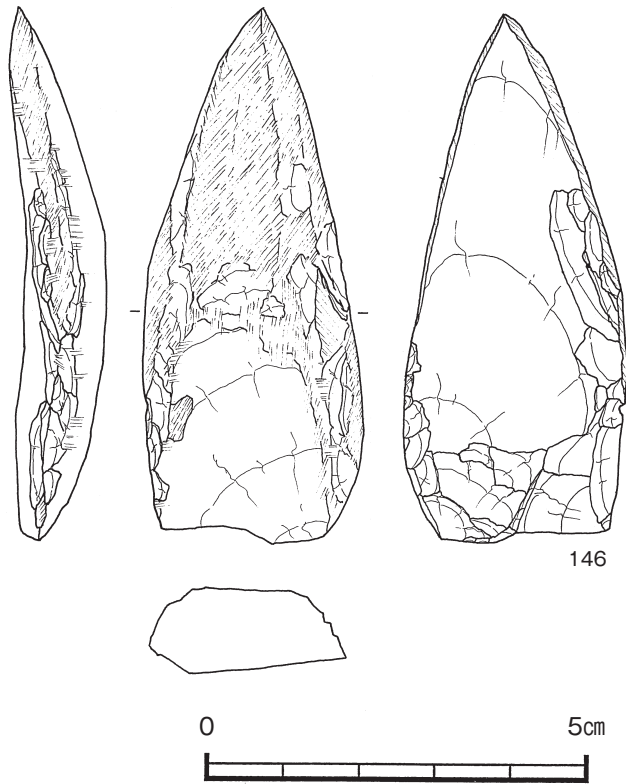
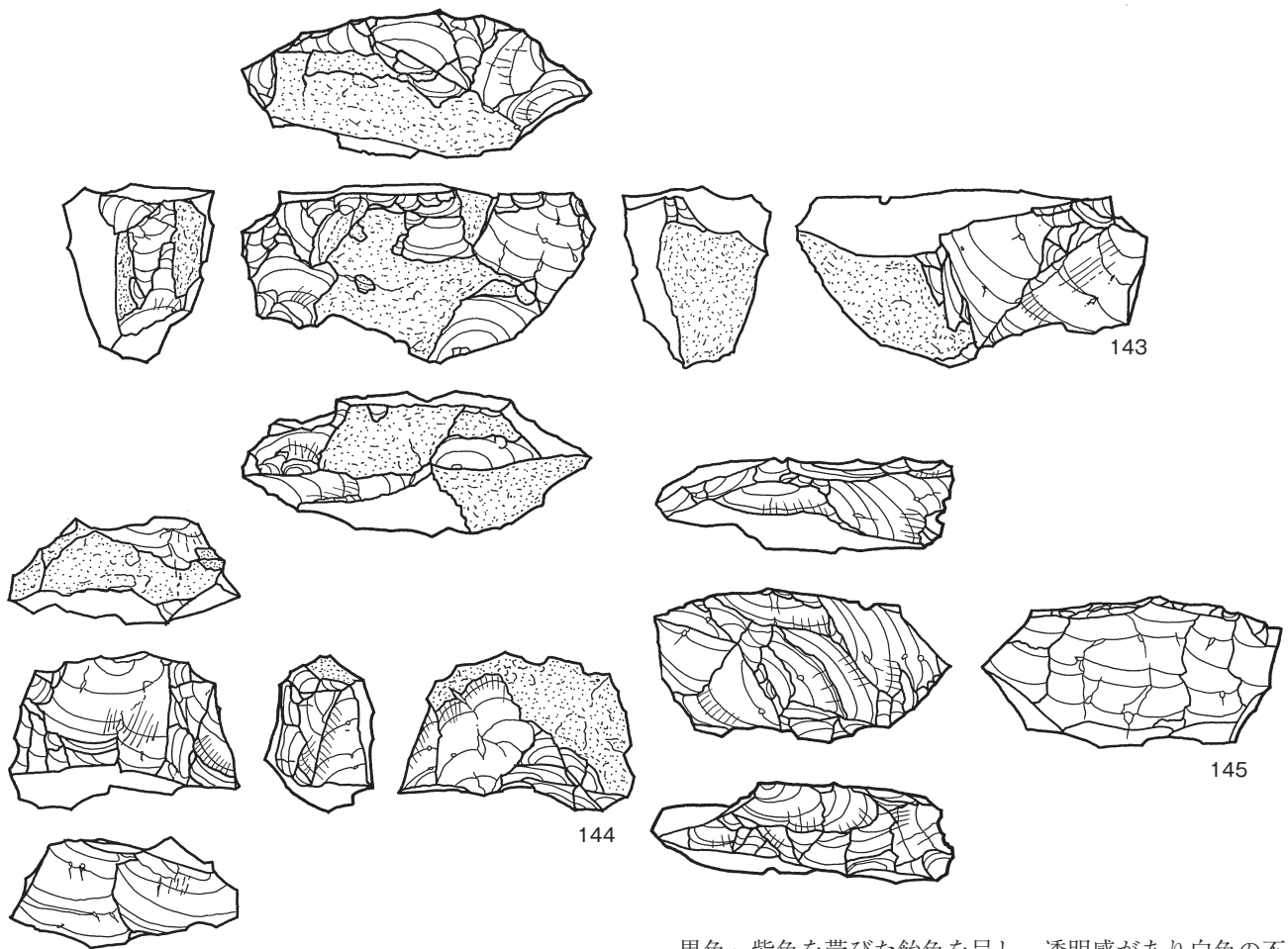
内市樋脇町上牛鼻、いちき串木野市市来町平木場産に類似する。II類はガラス質の透明感があり不純物を多く含む黒曜石で 3 類に細分できる。II A類は黒色～黄茶褐色を呈し均質に不純物を含む黒曜石で伊佐市大口日東・五女木産に類似する。II B類は青みがかった灰色の色調を呈する黒曜石で錦江町長谷産に類似する。II C類は青みがかった灰色から黄茶褐色を呈し不均質に不純物を含む黒曜石で鹿児島市三船産に類似する特徴をもつ。III類は



第 46 図 VII層出土の石器 1



第 47 図 VII層出土の石器 2

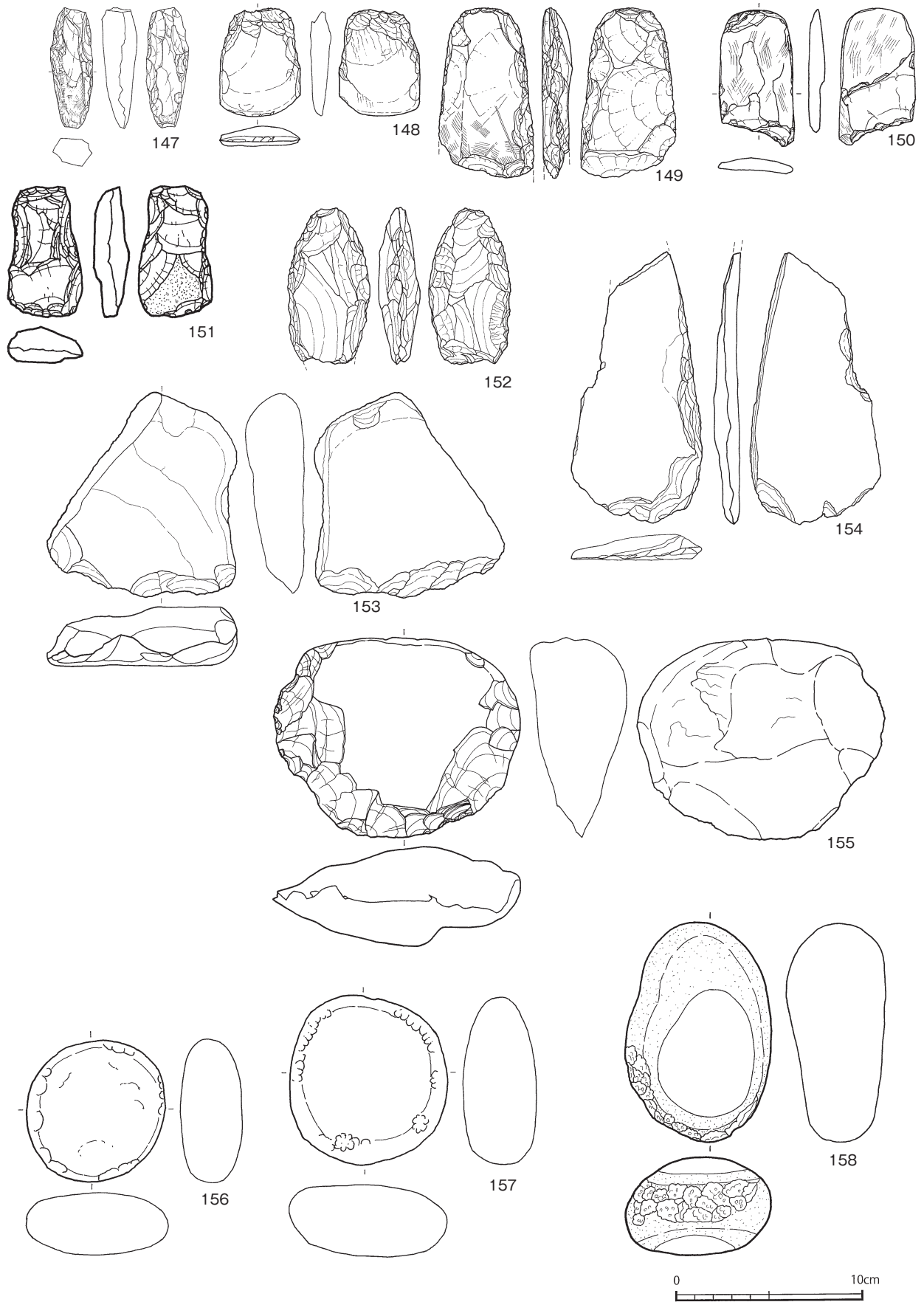


黒色～紫色を帯びた鉛色を呈し、透明感があり白色の不純物を含む、熊本県人吉市桑ノ木都留産及び上青木産に類似する。ⅢⅤ類は黒色～濁灰黒色半透明で白色の不純物をやや多く含む黒曜石で内屋敷ⅤⅥ群に類似する特徴をもつ。Ⅳ類は黒色ガラス質で不純物が少なく良質な黒曜石で佐賀県伊万里市腰岳産に類似する。Ⅴ類は黒色～灰黒色で透明度低く、少量の不純物を含む黒曜石で、長崎県佐世保市針尾中町産黒曜石に類似する。Ⅵ類は青灰色で透明度が低く不純物を少量含む黒曜石で長崎県佐世保市東浜産黒曜石に類似する。Ⅶ類は不純物をほとんど含まない薄い灰色～オリーブ色を呈する黒曜石で、佐賀県嬉野町椎葉川流域で採集される黒曜石に類似する。Ⅷ類は不純物をほとんど含まない透明感の無い灰白色～灰色を呈する黒曜石で大分県姫島産に類似する。

石鏃 (第46図 116～133)

116は緻密な安山岩製の大型の円基鏃である。重量・厚みがあり、鉛先の可能性もある。117・118は平基の三角鏃でチャート製である。119は黒曜石Ⅰ類で、先端部及び右側辺部を欠損するが残存部から五角形鏃とみられる。120～122は浅い凹基の三角形鏃で、120は黒曜石Ⅳ類、121は黒曜石ⅢC類、122は黒曜石Ⅷ類とみられる。123～127は、基部が弧状に内弯あるいは三角形状の挟りが入る凹基の石鏃である。123が緻密な安山岩、124・

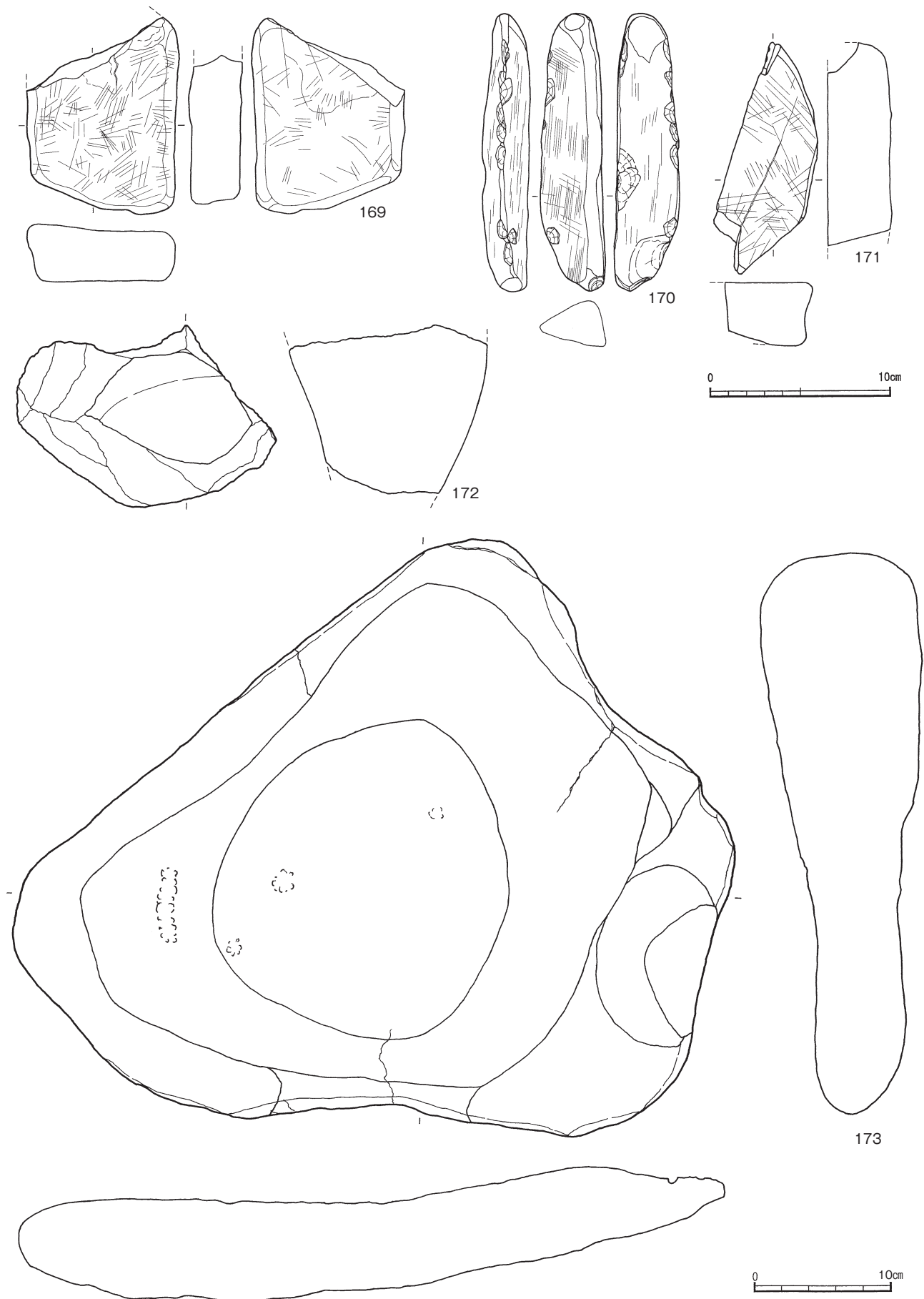
第48図 VII層出土の石器3



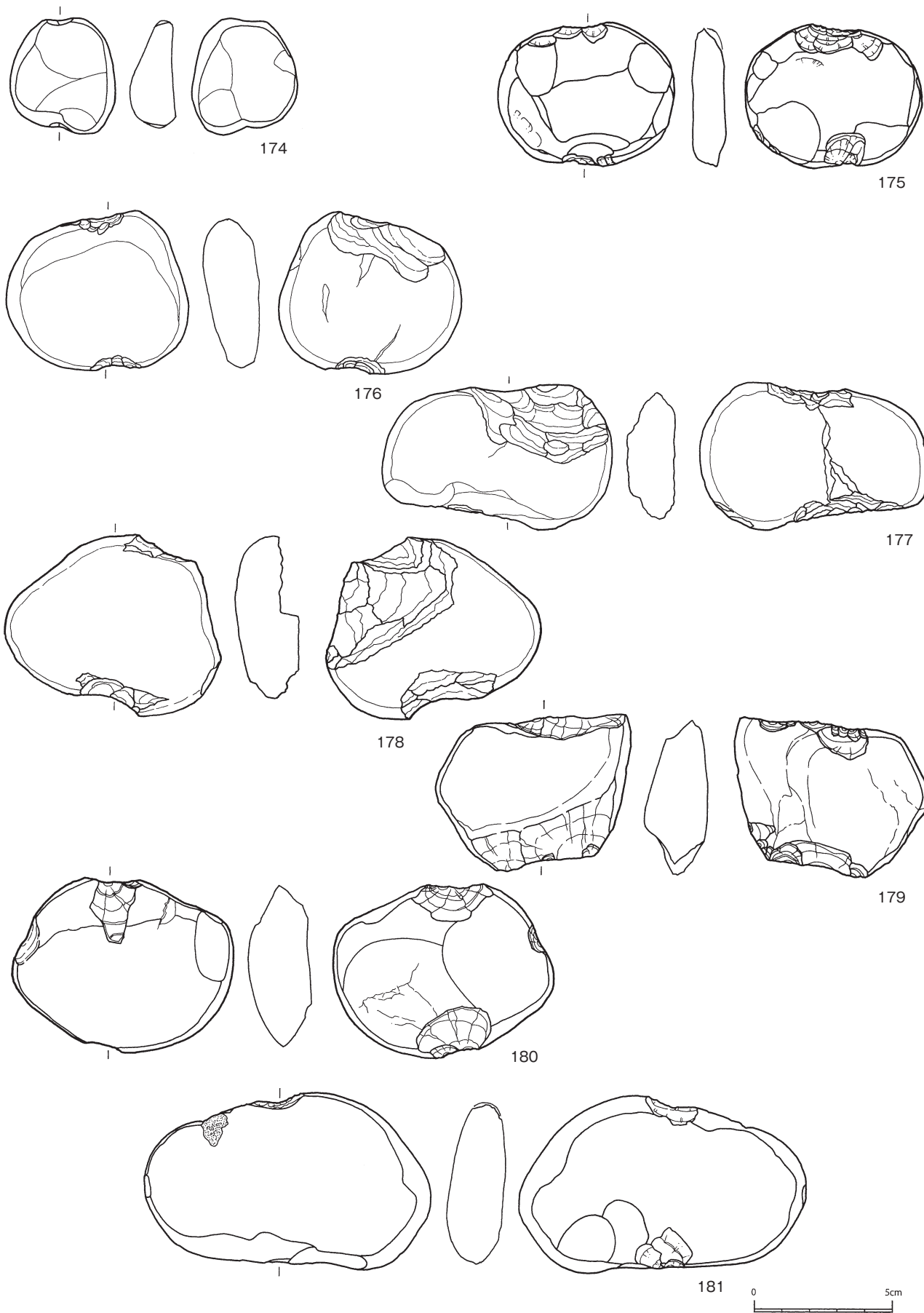
第 49 図 VII層出土の石器 4



第 50 図 VII層出土の石器 5



第 51 図 VII層出土の石器6



第 52 図 VII層出土の石器 7

126 は珪質頁岩, 125・127 は黒曜石Ⅷ類に類似する。128～130 は, 基部にU字状の抉りが入る鋏形鏃である。128 は灰褐色のチャート製, 129 は珪質頁岩製, 130 は緻密な安山岩製を石材としている。131 は身部中央に最大幅を持ち基部で窄まり, 基辺に浅い三角形の抉りが入る。132 は玉髓製で石鏃若しくは製作段階の欠損品とみられる。133 は緻密な安山岩製の石鏃若しくは未製品である。

搔器 (第47図 134～136)

やや厚みのある不定型な剥片で二次加工により部分的に刃部が作り出される。134 は黒曜石Ⅱc類, 135 は黒曜石Ⅰ類, 136 は珪質頁岩製である。

楔形石器 (第47図 137)

137 は緑灰色のチャート製で上下に対向する剥離があり, 縦断面は紡錘形を呈し, 上辺に階段状の剥離がみられることから楔形石器とした。

彫器 (第47図 138)

138 は玉髓製の厚みのある不定形剥片で, 上半部を中心に調整剥離が施され, 右辺稜上に上端から槓状剥離が加えられることから彫器とした。

加工痕のある剥片 (第47図 139～142)

139 は灰色を呈するチャート製で左右側辺, 下辺部に調整剥離が加えられている。製作途上で摘み部を欠損した石匙の未製品である可能性もある。140 は黒曜石ⅡC類の不定形剥片で, 上辺・左側辺上部, 下端に不規則な剥離がみられる。141 は背面に自然面を残す珪質頁岩の剥片で, 不規則な剥離及び微細剥離がみられる。142 はホルンフェルス製のやや大型の剥片で, 下辺及び上辺に二次的な剥離が加えられている。

石核 (第48図 143～145)

いずれも黒曜石Ⅰ類の石核である。143 は各面に自然面が残り, 剥片剥離が進行しないまま遺棄される。144 は下面, 正面, 上面へと90°単位に打面を転移させなが

ら剥片を剥離している。

尖頭状石器 (第48図 146)

146 は砂岩の縦長剥片を素材とし, 周縁部から側縁に剥離を加えた後, 背面及び左右側面上半部に研磨を加え, 端部が尖る形状に成形されている。

磨製石斧 (第49図 147～150)

147～150 はいずれもホルンフェルス製の磨製石斧である。147 は小型で細身の石斧である。左右側辺に剥離を加えて整形し刃部だけに研磨を加えた鑿形の石斧である。148 は小型扁平な片刃の石斧である。欠損後基部に再加工を施し再利用したものとみられる。149 は横長の剥片素材の石斧で, 両側辺に剥離調整を加え整形した後, 刃部を中心に部分的に研磨を加える。使用によると考えられる刃部の欠損が生じている。150 は, 小型扁平な磨製石斧である。

打製石斧 (第49図 151・152・154)

いずれも石材はホルンフェルスである。151・152 は研磨痕がみられないため打製石斧とした。154 は便宜上ここに掲載したが, 整形加工が不明瞭である。

礫器 (第49図 153・155)

153 は下辺部に, 155 は左右側縁及び下縁に二次的な剥離がみられることから礫器とした。いずれもホルンフェルス製である。

磨・敲石類 (第49図 156～158 第50図 159～166)

156～166 は磨・敲石類である。158・162 は敲石で明瞭な磨面はみられず石器制作に用いられた可能性が高い。その他は磨面をもち側縁部に部分的に敲打痕がみられるもので, 明瞭な形状加工を伴うものはみられない。石材は, 158 が砂岩, 161 が花崗岩で, 他はいずれも器面の粗い安山岩製である。

砥石類 (第50図 167・168 第51図 169～171)

167・168 は砂岩のやや扁平な円礫で表面に凹面状を呈する磨面を持つことから砥石とした。169・171 は盤状の砂岩礫片で不規則な擦痕がみられる。170 はホルンフェルスの棒状礫で, 部分的に擦痕がみられる。

石皿 (第51図 172・173)

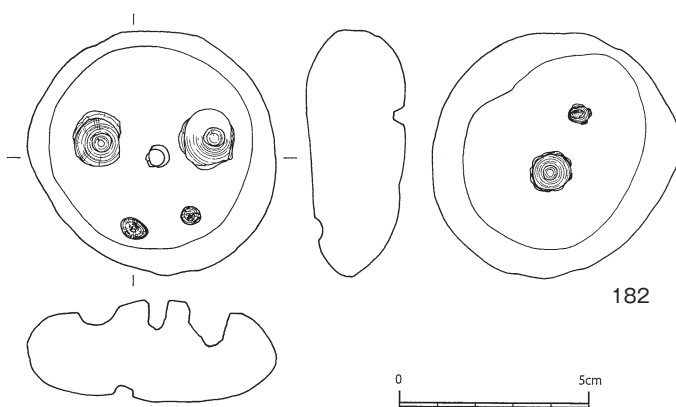
172 は花崗岩製の石皿の破片である。173 は粗面の安山岩製の石皿で表面中央付近に使用の痕跡をみる。

石錘 (第52図 174～181)

174～177 は砂岩製, 178 は粗面の安山岩製, 179～181 はホルンフェルス製のいずれも打ち欠きの石錘である。

蜂の巣石 (第53図 182)

多孔質の安山岩製で器面には無数の自然の凹みがみられる。図示されるものは, 凹みの形状から回転穿孔により自然の凹みが拡張されたものとみられるが, 擦痕・線状痕は不明瞭である。



第53図 VII層出土の石器8

(3) VI層出土石器 (第54図 183~192)

VI層出土の石器として、石鏃6点、加工痕・使用痕のある剥片2点、打製石斧1点、磨・敲石類1点を図示した。

石鏃 (第54図 183~188)

183・184は基部が弧状に内湾あるいは三角形状に抉りが入る凹基の石鏃である。石材は、183が黒曜石Ⅷ類、184が安山岩である。185は基部にU字状の抉りが入るチャート製の鋳形鏃である。186~188は深いU字状の抉りが入る石鏃で、186が緻密な安山岩、187が鉄石英、188が黒曜石Ⅲ類である。

加工痕のある剥片 (第54図 189・190)

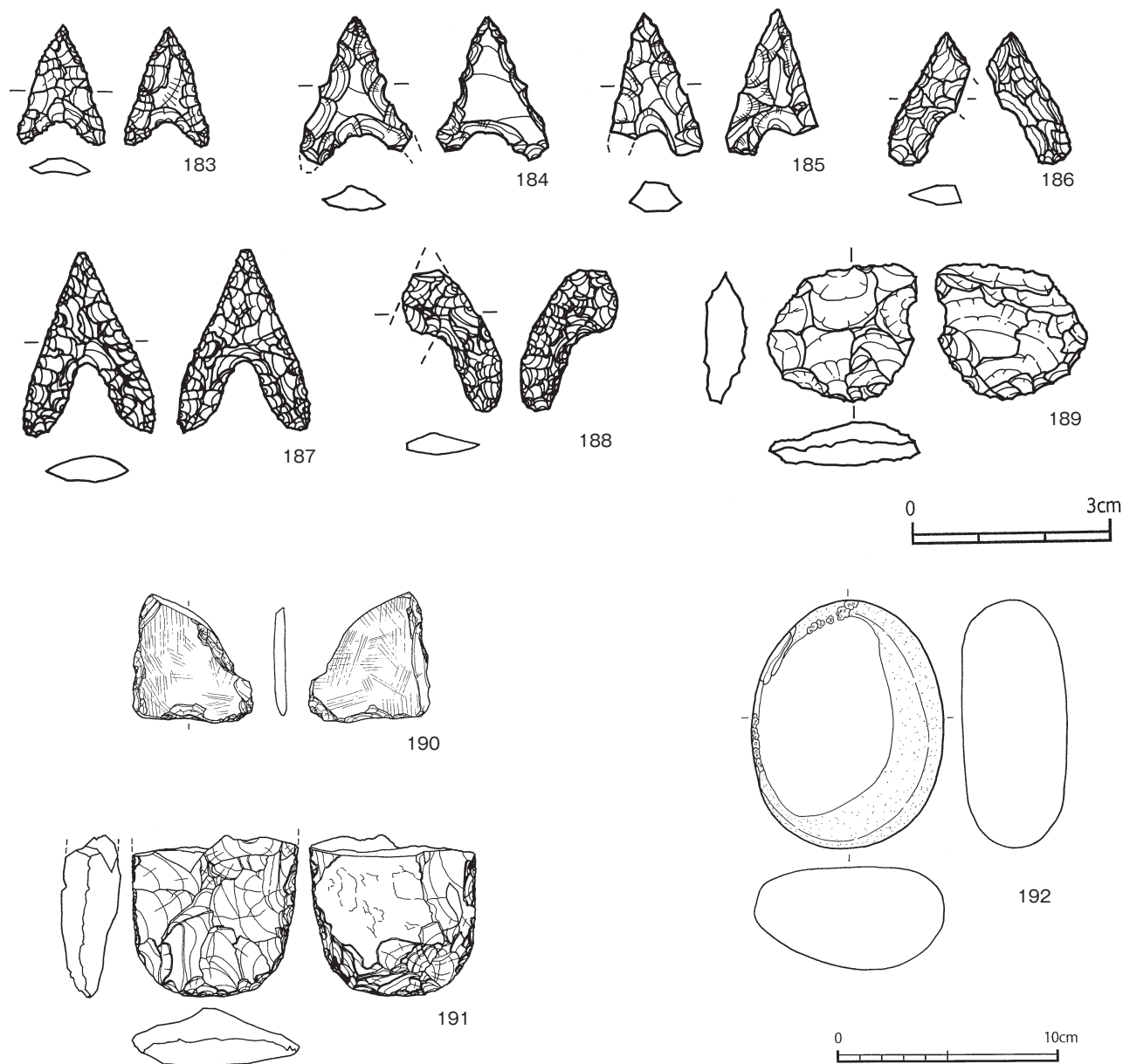
189は鉄石英の不定形剥片で周縁に部分的に二次的な調整剥離が加えられている。190は粘板岩の剥片で、表裏に研磨の痕跡を認める。

打製石斧 (第54図 191)

ホルンフェルス製で、上辺の折れにより欠損する。研磨調整がみられないため打製石斧としたが、磨製石斧の未製品の可能性もある。

磨・敲石類 (第54図 192)

粗面の安山岩の円礫で、上面に部分的に磨面があり、周縁部分に部分的に敲打痕がみられる。



第54図 VI層出土の石器

第2節 縄文時代後・晩期の調査

縄文時代後期及び晩期の調査は、遺物包含層であるⅡb層の掘り下げを中心に行った。遺構検出はⅢ層の池田カルデラ起源の白色軽石層を目安として行った。ただし、白色軽石層の堆積が不安定な箇所については、Ⅴ層のアカホヤ層上面まで掘り下げて行った。

遺物包含層は残存状況が全体的に良好であったことから、調査範囲は第1地点を中心として第2・第3地点の調査区全体とした。遺構調査の範囲も同様である。

第1地点からは、縄文時代後期の竪穴住居跡や土坑・ピットなどが検出され、遺物としては後期及び晩期の土器や石器などが数多く出土した。土器や石斧などの集中域も見られた。第2地点からは、後期の竪穴住居跡が検出されたほか、その時期の土器・石器などが出土した。第3地点からは、土坑が検出されたほか、土器・石器も出土している。

調査範囲のほぼ全体から遺構や遺物が確認され、この時期の町田堀遺跡は人々の生活の痕跡が色濃く残っていることがわかった。

当時の地形に近いと考えられるⅤ層上面のコンターで見ると、第1地点では全体的に西側が高く、東側に向かって下がっていることがわかる(第55図)。また、北側が高く、南側に向かって下がっている。ただ、細かく見ると、西側では中央に北東-南西方向に安定した尾根上の段があり、その部分を挟んで北西及び南東に3m程の凹部が見られるが、その部分を避けるようにして竪穴住居跡や土坑などが広がっていることがわかる。

F-5区にある2号竪穴住居跡が、周辺よりも低い場所に位置していることは特徴的である。また、F-2・3区に土坑が集中しているが、ここは本遺跡では高い部分になる。

調査区の東地区は、東及び南側が低くなっている。石斧や土器が集中して出土した場所は、北側の高い部分に、土坑は南側の低くなる傾斜部分に位置している。また、4号竪穴住居跡は南東部の緩やかな斜面に位置している。

第3地点は、北西から南東にかけて漸次低くなっている状況であるが、ここでも土坑は比較的高い場所に位置している。

また、第2地点で検出された竪穴住居跡は、ほぼ平坦で、遺跡全体としても比較的安定した高い部分に位置していた。

遺跡の中での遺構のある位置は、今後他遺跡との比較検討の必要もある(第56図)。

1 遺 構

(1) 竪穴住居跡(第57~68図 193~290)

1号竪穴住居跡(第57・60図 193~225)

E-5区に位置し、Ⅳ層上面で検出された。検出面での規模は2.55m×2.53mで、ほぼ円形を呈しており、残存部の最深部は検出面から43cmであった。

東西、南北両方向に耕作による深い攪乱が筋状に見られたため検出は困難であった。実際の掘り込み面は、検出面よりも上位にあったことが考えられる。床面及び周囲は精査を繰り返したが、柱穴は確認されなかった。

埋土は、最下部が黄色土ブロック混じりの黒褐色土で、敷き詰められた後に固められた状況を呈していた。その上の壁付近には黄色土がマーブル状に混じる砂質の暗茶褐色土が斜めに堆積していた。このような堆積状況は他に見られないことから、壁面の崩壊土と考えられる。その上に堆積している土は、下層から黄褐色土のブロックを少量含む砂質の黒褐色土、白色パミス(軽石)と黄褐色土を多く含むやや硬質の暗茶褐色土、最上部が白色パミスが少量混じる砂質の黒色土で、軟らかく粒が細かいものの順であった。

遺構内からは土器や石器、礫が出土した。最下部の硬化した黒褐色土の上面から出土したもののうち、大型の石皿の破片など数点は床着であったことから本住居で使用された可能性も考えられるが、それ以外の大多数の遺物は、住居の廃棄後に堆積したものと考えられる。

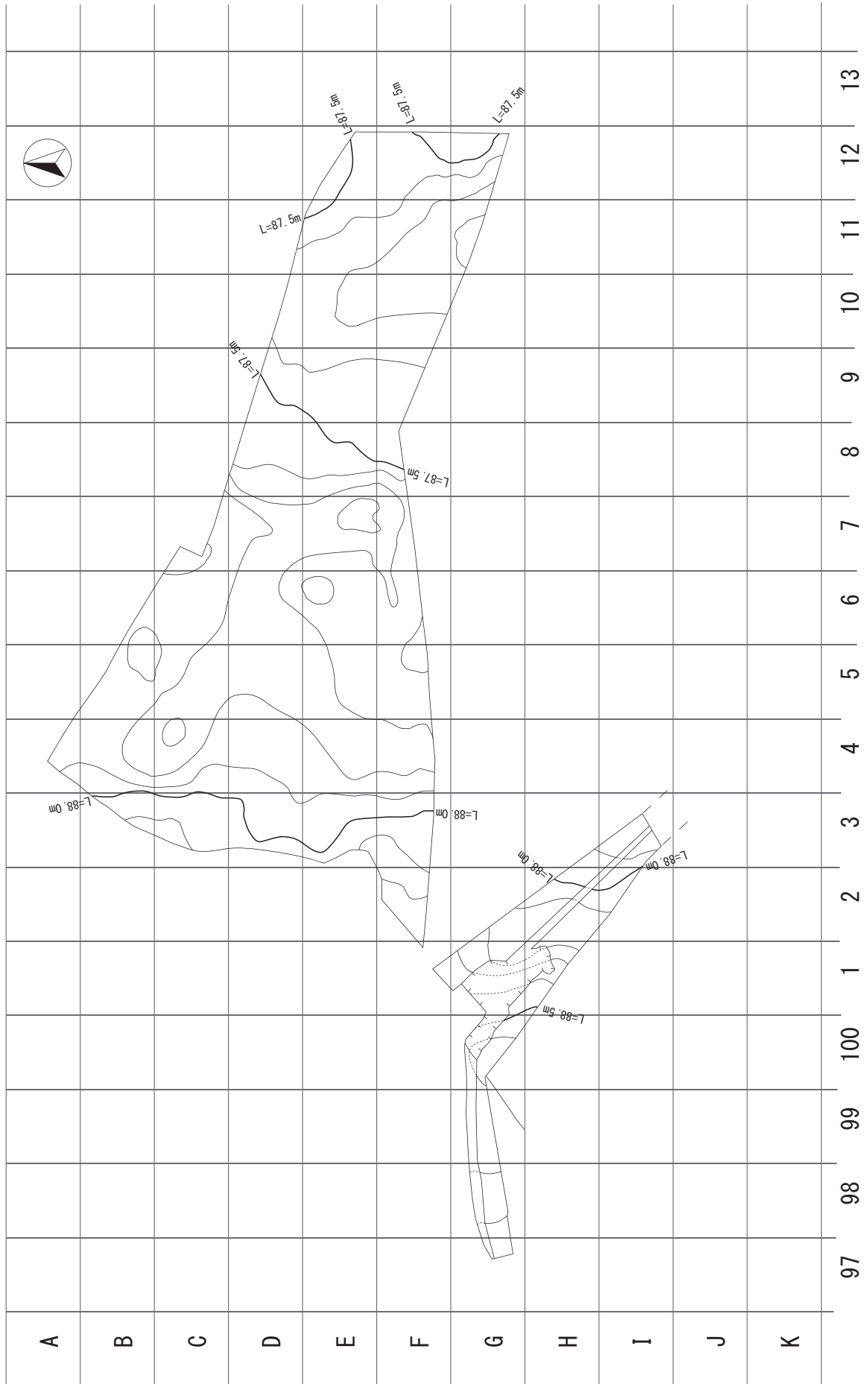
竪穴住居跡の床面近くからは、炭化物が多く検出されたので放射性炭素による年代測定を行い 3020 ± 25 (yrBP $\pm 1\sigma$)という数字が得られた。(P216参照)

以下、本住居跡から出土した遺物について説明を行う。

土器は193~211を図化した。193~195、197~205は口縁部である。そのうち193と194は胴部の直径が復元できた。いずれも胴部が膨らみ、上部にかけては一旦すぼまった後に口縁部が開いている。膨らんだ胴部最大径の部分には明確な稜を持つ。内面は、口唇部下位に段を有し、胴部の稜は不明確である。

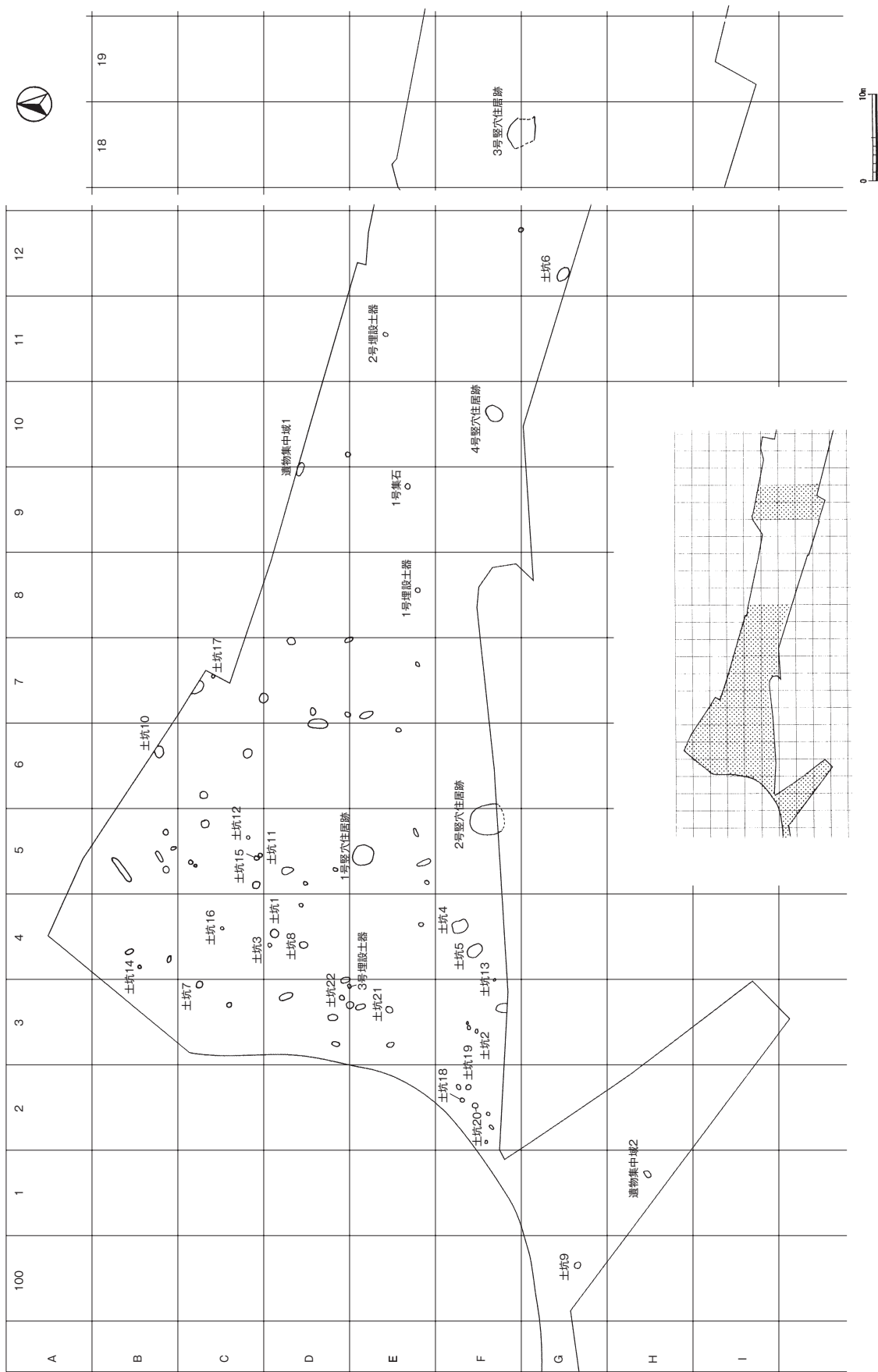
194は口縁部の端部を欠くが、形態的には193と類似している。195は口縁部の端部に平坦面を作っている。197は194に類似するが、口唇部に平坦面を作り、その中央に沈線を1条施すが、口縁部端外面にも同様に2条の沈線を巡らせている。199は頸部が外反しているものの、口縁部の端部は内側に向かうことはない。口唇部には1条の浅い沈線が巡る。198は口唇部直下に1条の凹線が巡り、線上には円形に近い凹点が一箇所施される。200は口縁部が大きく外反している。

201~205は口縁部付近の破片である。201は外面に1条の沈線が巡り、202~205は2条の沈線凹線が巡っている。203は太めの凹線状であるが、外は細くシャープな沈線である。

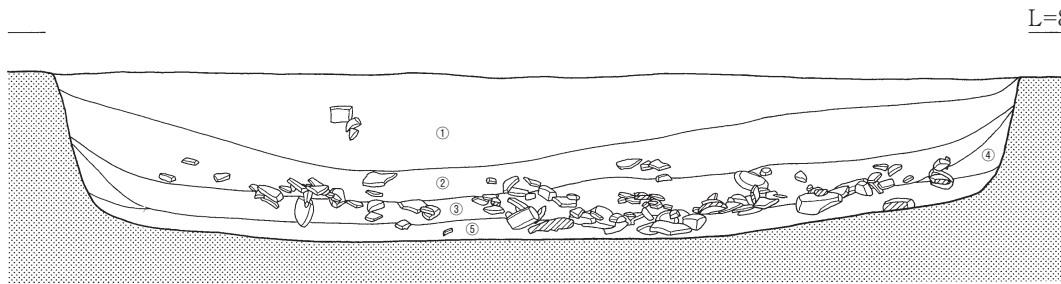
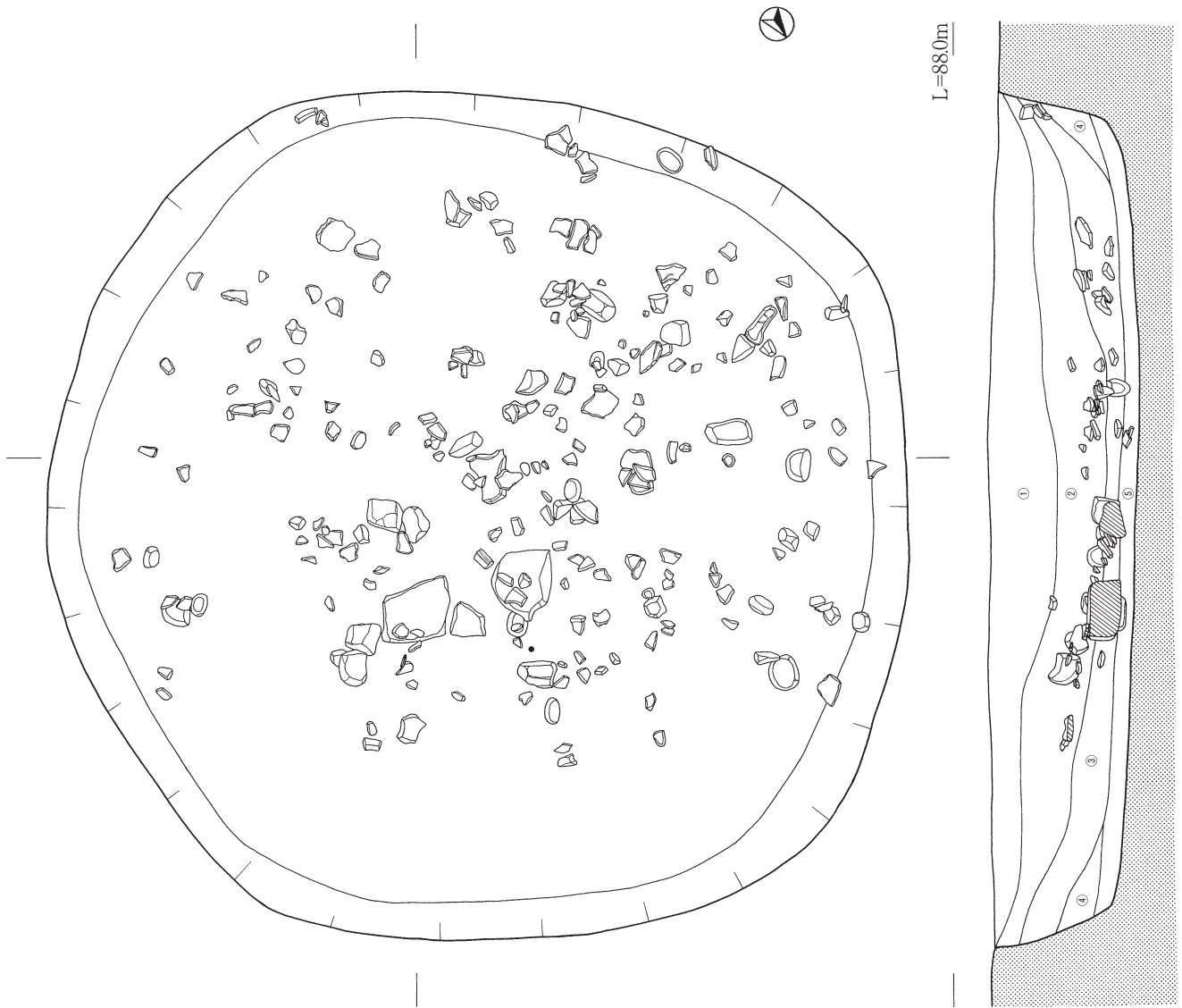


1 グリッドは 10m x 10m

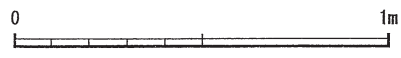
第55図 V層上面コンター図



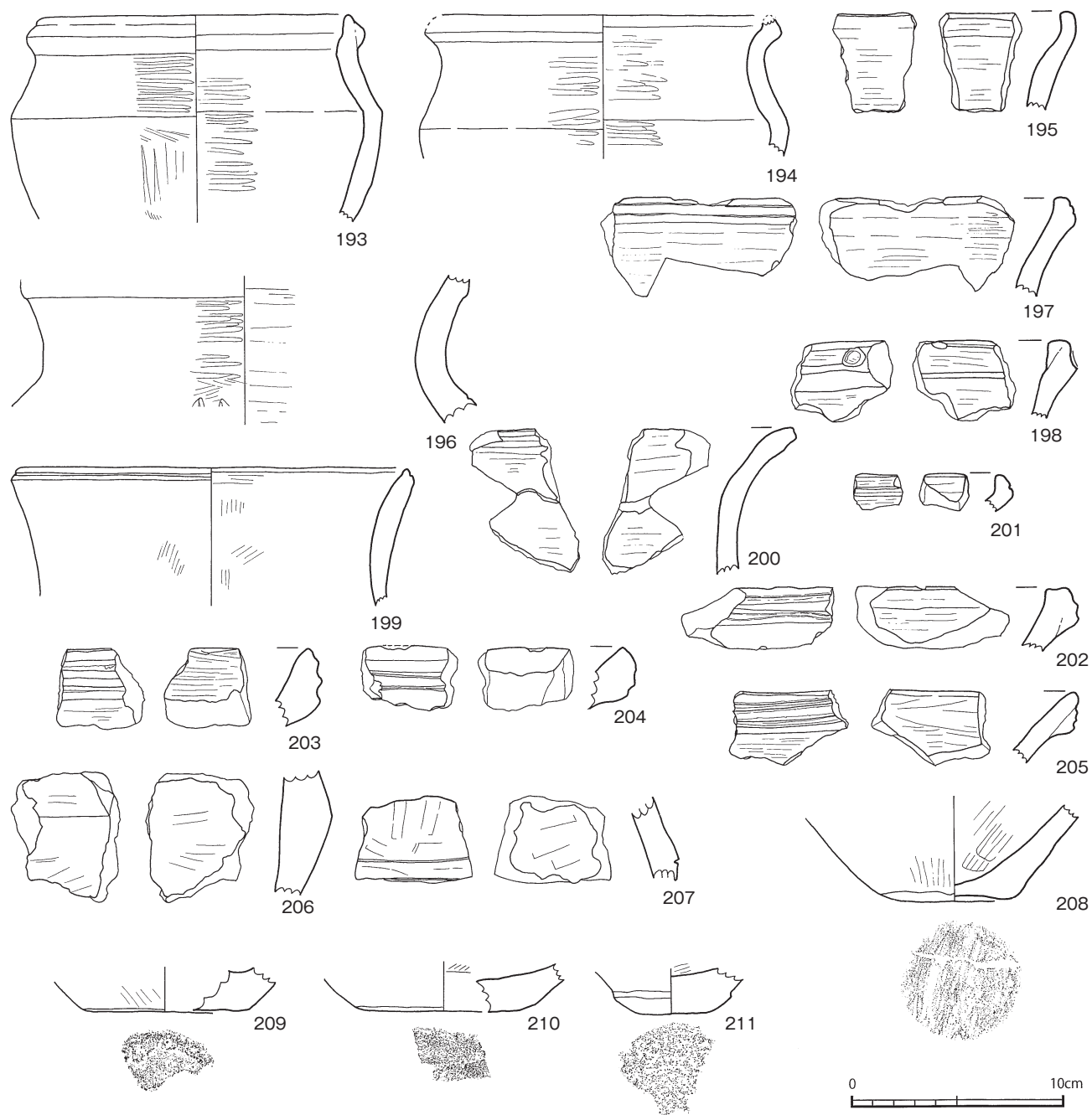
第56図 縄文時代後期遺構位置図



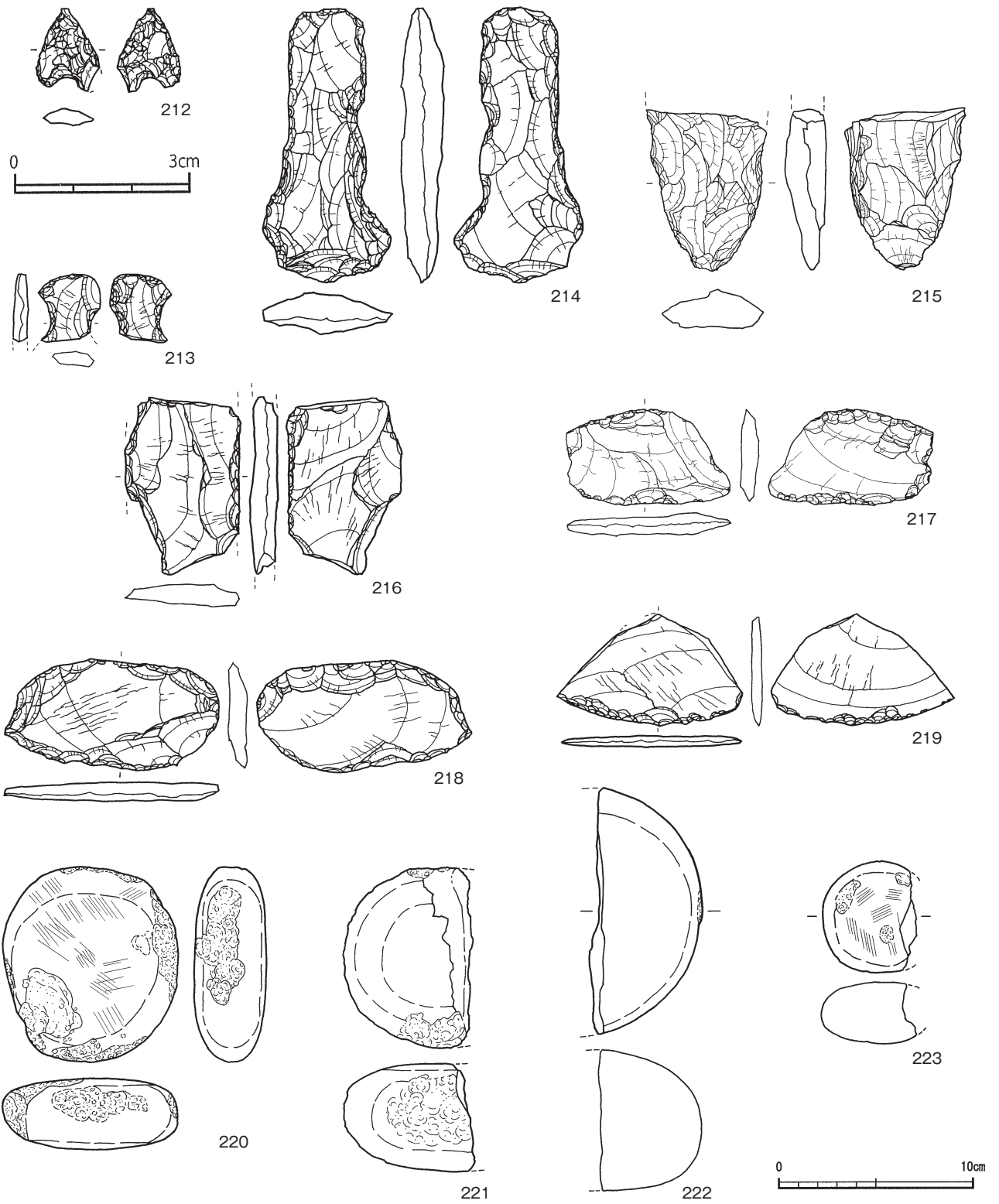
- ① 黒色土、砂質、白色ハミス少量混じり、やわらかく粒が細かい。
- ② 暗茶褐色土、やや硬質、白色ハミス(軽石)、黄褐色土ブロックを多く含む。
- ③ 黒褐色土、砂質、黄褐色土ブロックを少量含む。
- ④ 暗茶褐色土、砂質、黄色土がマーブル状に混ざる。壁近くのみ見られ、壁面の崩落土と思われる。
- ⑤ 黒褐色土、硬質、黄色土ブロック(5~10cm)が多く混在し、数き詰められた後踏み固められた硬質土。



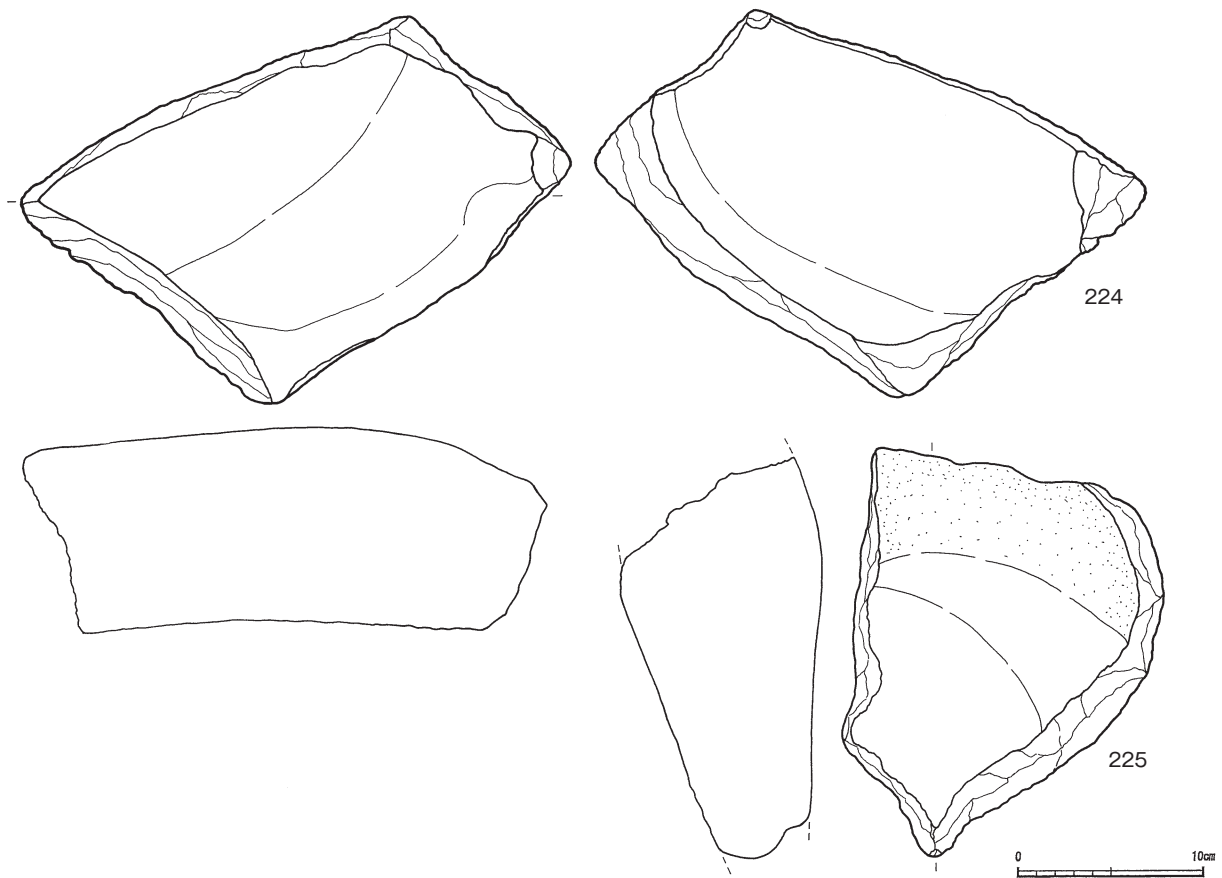
第 57 図 縄文後期 1 号 竪穴住居跡



第 58 図 縄文後期 1 号竪穴住居跡出土土器



第 59 図 縄文後期 1 号竪穴住居跡出土石器 1



第60図 縄文後期1号竪穴住居跡出土石器2

206と207は胴部の破片である。胴部の中でも、最も張り出す部分と考えられるが、いずれもやや内傾しながら立ち上がる器形を呈する。207は胴部に2条の沈線が巡る。

208～211は底部である。208と209は若干上げ底となるが、ほかは平底である。209は底部が厚い割に小さく、やや不安定な底部である。

石器は打製石鏃、打製石斧、スクレイパー、磨・敲石などが出土した。212は凹基式の打製石鏃213～216は打製石斧と考えられるもので、213は基部、216は刃部付近であるが刃部を欠失する。215は刃部である。217～219はスクレイパーと考えられる。それぞれ形状が異なっている。220～223は磨・敲石である。自然円礫を用いて広い2面を磨り面に、側縁を中心に敲打に使用している。

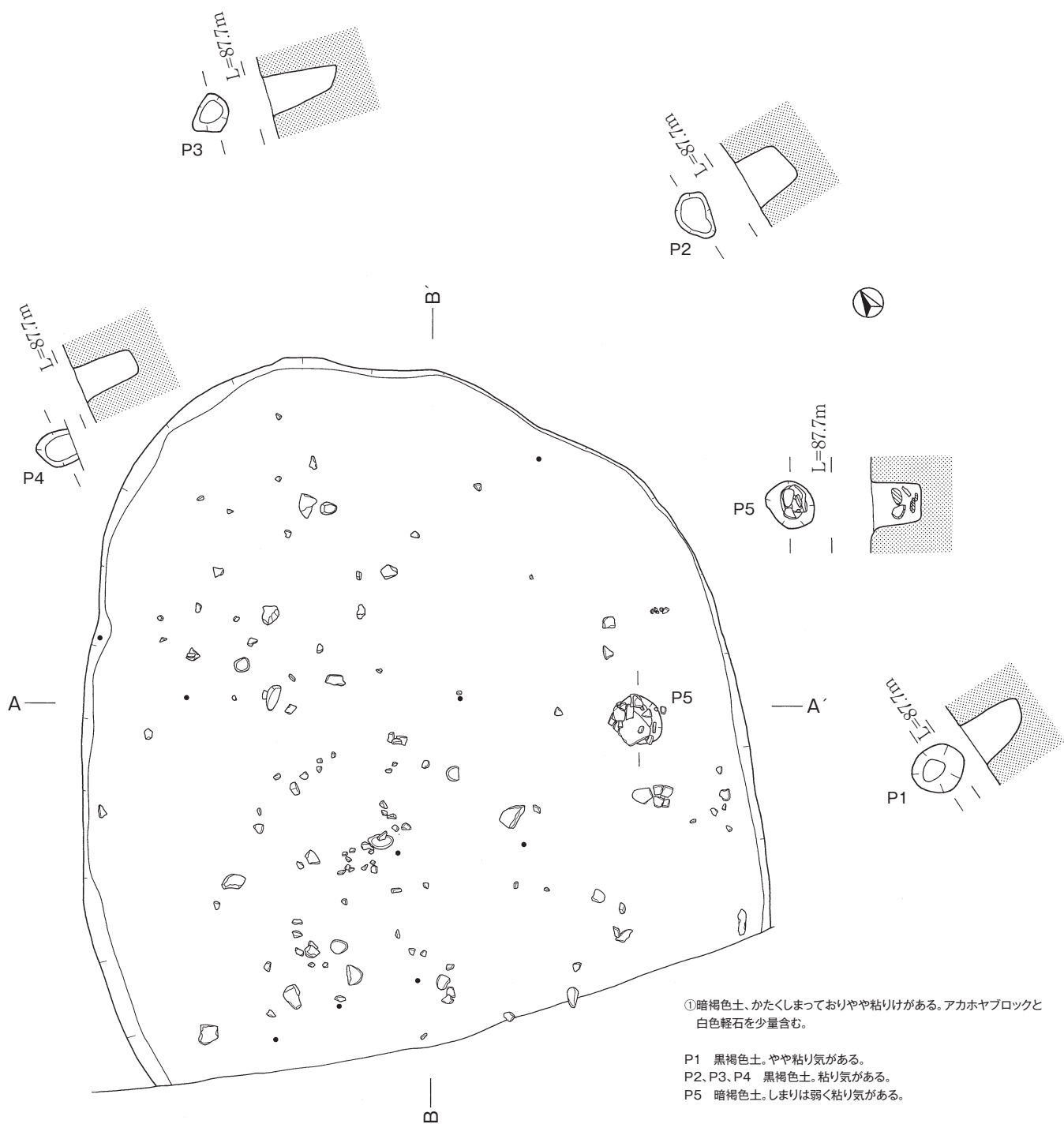
224と225は大型の石皿の破片である。大きな自然礫の広い面を使用面として利用している。

2号竪穴住居跡（第61～63図 226～250）

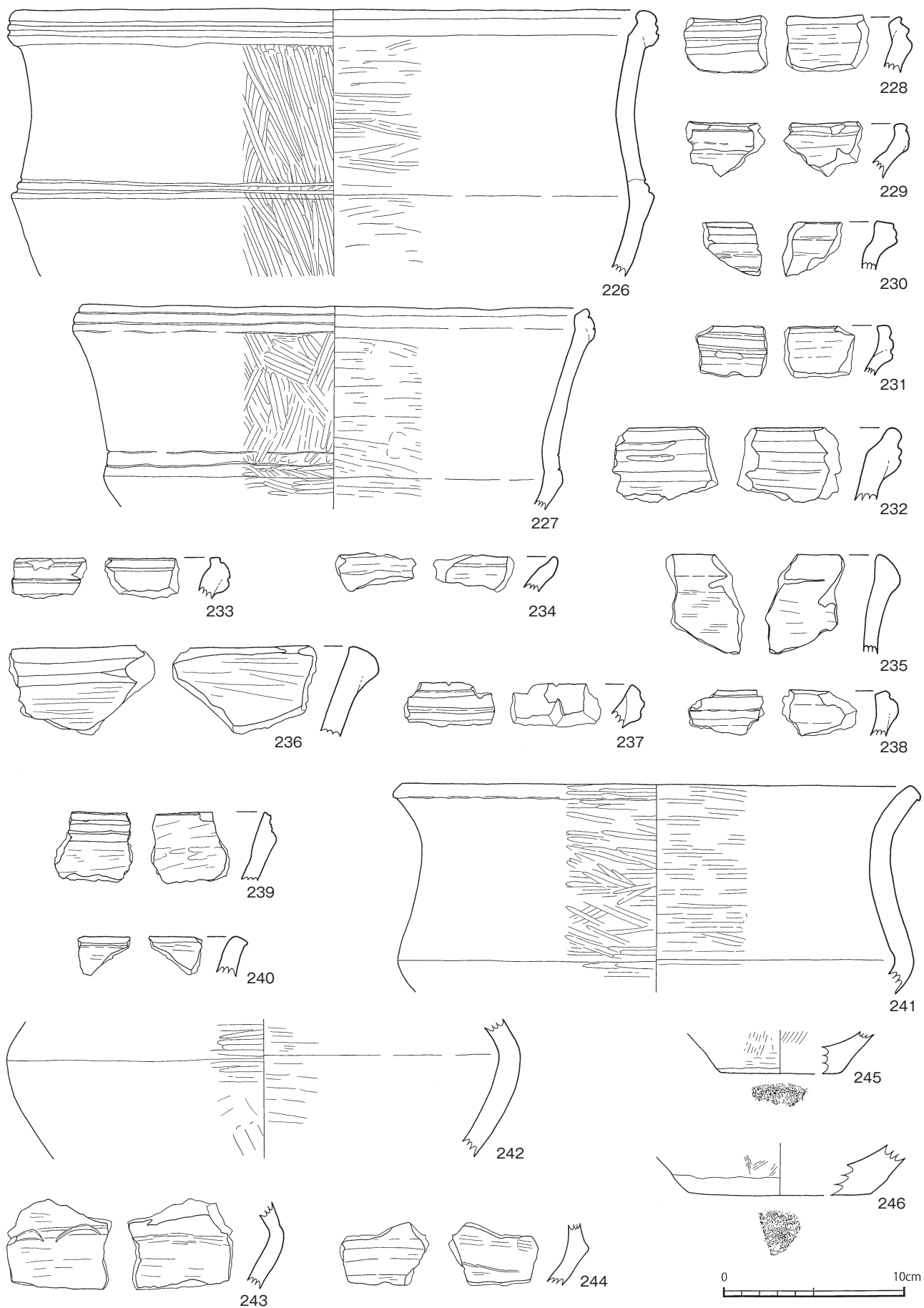
F-5区に位置し、V層上面で検出された。南側は調査区外に延びるため、長軸方向の最終的な長さは不明であるが、検出面での規模は3.50m×3.41mで、全形は楕円形を呈すると考えられる。残存部の最深部は18cmであった。床面に1基の柱穴と思われるピットがあったほか、周囲から4基のピットも検出されたが、本住居跡との関係については明確にできなかった。

埋土は、アカホヤのブロックと白色の軽石を少量含む暗褐色土で、硬くしまっており、やや粘り気がある。床面には若干凸凹が見られ、貼床と考えられるものは確認されなかった。また、埋土中の炭化物について放射性炭素による年代測定を行い、 3095 ± 20 (yrBP $\pm 1\sigma$) という数値結果が得られた。(P216参照)

遺構内からは土器や石器、礫が出土した。埋土はやや粘性もあるが硬くしまった暗褐色土の1種類であった。明確に床着と考えられる遺物は少なく、遺物の多くは住居の廃棄に伴って遺棄されたものである可能性が高いと



第 61 図 縄文後期 2 号 竪穴住居跡



第 62 図 縄文後期 2 号 竖穴住居跡出土土器

考えられる。

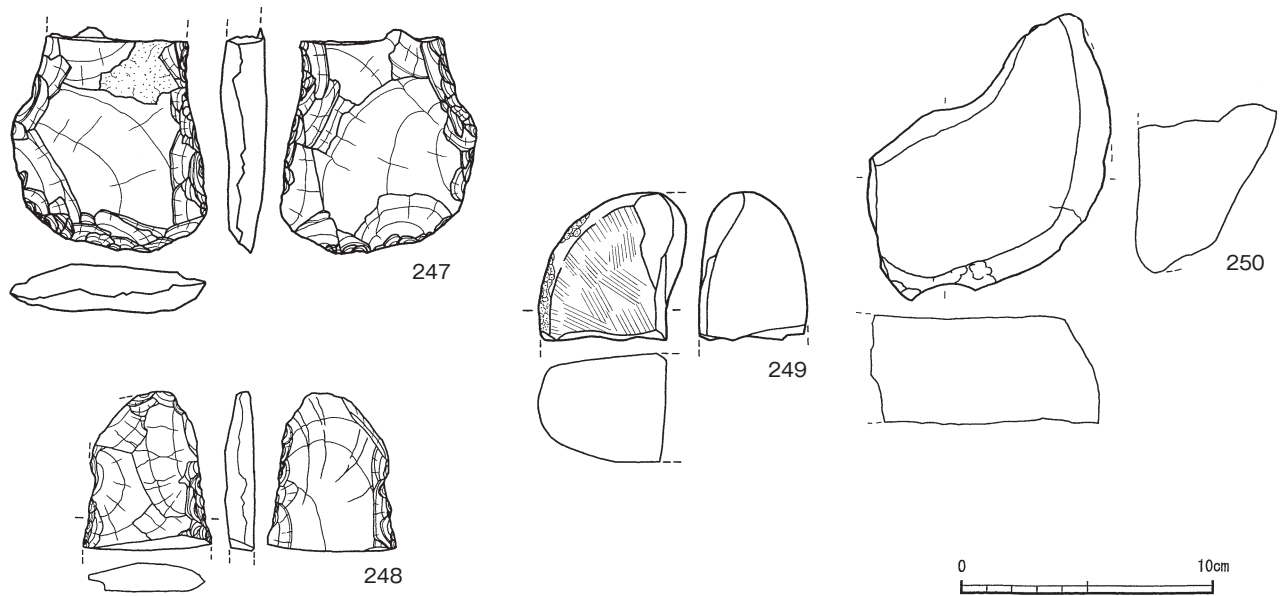
土器は、226～241が口縁部、242～244は胴部、245・246は底部である。そのほとんどが深鉢であった。

226は口縁部の外面に深い2条の沈線が巡る。また、「く」の字状に屈曲する胴部の上位にも、2条の沈線を巡らせている。外面は縦方向のミガキ、内面は横方向のナデ調整が行われている。227も226と同様に、口縁部下と「く」の字状に屈曲する胴部の上位にそれぞれ2条の沈線を巡らせている。口唇部は平坦面を作出しているが内傾している。228～240は口縁部の小片である。断面の形状や口縁部下の沈線の有無などの様々なバリエーションがあることがわかる。241は胴部が若干丸みを帯

びており、頸部にかけては大きく内傾し、その後、口縁部の端部にかけては大きく外反している。器面調整は、外面が斜め方向のミガキ、内面は横方向のナデが中心となっているが部分的にミガキも見られる。

242と243は胴部が丸みを持って頸部に向かい、244は明確な稜を持って頸部につながっている。245と246は底部である。いずれも底面が狭いことから全体は不明確である。

石器は、247と248は打製石斧、249は敲石兼用の磨石、250は石皿である。247は打製石斧の刃部、248は基部である。249は自然円礫の広い面を磨る使用面とし、側縁に敲打痕が見られる。



第63図 縄文後期2号竪穴住居跡出土石器

3号竪穴住居跡（第64～67図 251～288）

F・G-18区に位置し、V層上面で検出された。西側は側溝で切られており、南東部は2号地下式横穴墓により、また、南側の一部も3号溝によって切られていることから、本来の規模は不明である。北～東にかけての形状が緩やかな弧状を呈することから、円形もしくは楕円形状の住居であったことが想定される。規模としては、残存部の形状から、直径3.2m程度の円形を呈していたと推測される。

床面のほぼ中央部にピット状のごく浅い凹みを検出したが、掘り込みの底部がはっきりしないことから、樹痕の可能性が大きいと判断された。それ以外には、床面にも周囲にも柱穴は確認されなかった。

埋土は、下部が池田降下軽石がごくわずかに混じるIV層と考えられる黒褐色土、上部がII b層の黒褐色土とII a層の黒色土との混在土、直径1cm未満のアカホヤの混じった黒色土で、炭化物を多く含んでいる。

この炭化物を試料として放射性炭素による年代測定を行い、 3065 ± 25 (yrBP $\pm 1 \sigma$) の数値結果が得られた。(P216参照)

本住居跡には貼床及び床の張り出し部分は確認されなかった。

埋土中からは多くの土器や石器、礫が出土した。ほぼ全部が住居の廃棄に伴って遺棄されたものである可能性が大きいと言える。

土器は、251～271が深鉢、272～277が浅鉢である。251～261は口縁部である。251は胴部に稜を持つもので、口縁部にかけては外反した後に再び内湾する。口縁部下には深い2条の沈線が巡っている。内外面ともにナデ調整が行われるが、内面には指頭圧痕が残っている。

252～260口縁部の様々なバリエーションである。断面形状や沈線の有無、器面調整などに変化のあることがわかる。257は口縁部下の文様帯が比較的幅広く、3条の沈線が巡っている。260は口唇部の端部に縦方向の刻みが見られ、器壁も薄くほかとは異なった特色をもつ。261の口縁部下にある2本の並行沈線のうち、上位の沈線の一部が山形に施され、それに伴って口唇部もごくわずかに盛り上がる形状を呈している。このわずかなピークの口唇部端には、刻み目状の凹点が2か所施される。262は頸部の破片で、大きく外反するものである。

263～265は胴部で、稜のある胴部最大径付近の破片である。基本的に、稜の上位に1～2条の沈線が巡っている。263は上位の沈線には逆「ハ」の字状の刻みを、下位の沈線には凹点を付している。また、264の沈線が上下にずれて、一部は2本の沈線となっている部分もある。265は、胴部稜の上位に2条の細くシャープな沈線を施している。266、267は胴部と底部が直接接合したのではないが、色調や器面調整、胎土などから、同一個体に

なる可能性があると考えられる。胴部の稜のある部分から上方、頸部にかけては大きく内傾しながら立ち上がっている。また、下方へはすぼまりながら底部に向かう器形となっている。267の底部は厚く接地面は少ないことから厚く作られているが、器形全体からすると若干不安定な感は否めない。

268～271の底部は若干上げ底状のものもあるが、ほぼ平底である。底面が狭く不安定なものも見られる。

272～277は浅鉢の破片である。272は残存状態は余り良くないが、底部を欠くものの、ほぼ完形に図上復元することができた。胴部はなめらかなカーブを描いて上方に向かい、上部の稜の部分ではほぼまっすぐに立ち上がった後で大きく外反して口縁部に向かう。口縁部の端部には1条の浅い沈線を巡らせ玉縁状の口縁部を意識している。器面調整は内外面ともにミガキ調整で非常に丁寧な作りになっている。

273～277の口縁部は小片のため詳細は不明瞭であるが、いずれも器面の内外に丁寧な磨きが施されている。

石器は、278と279はいずれも凹基式の打製石鏃、280は磨製石斧の基部で、破損したものを敲石として使用した可能性のある転用品と考えられる。281は磨製石斧の刃部で、使用中に折損したものと考えられる。282と284は打製石斧の折損したもの、283は打製石斧の基部で、抉りの部分から折損したと考えられる。285は刃部である。286はスクレイパーである。当初は、打製石斧の刃部と考えたが、打製石斧として使用する際の刃部とされる部分は、調整痕が見られるのみで使用痕がなく、一方の側縁に当たる部分に使用痕が見られたことから、スクレイパーとして図示した。287は磨・敲石の破損品、288は砂岩製の磨石である。

4号竪穴住居跡（第68図 289・290）

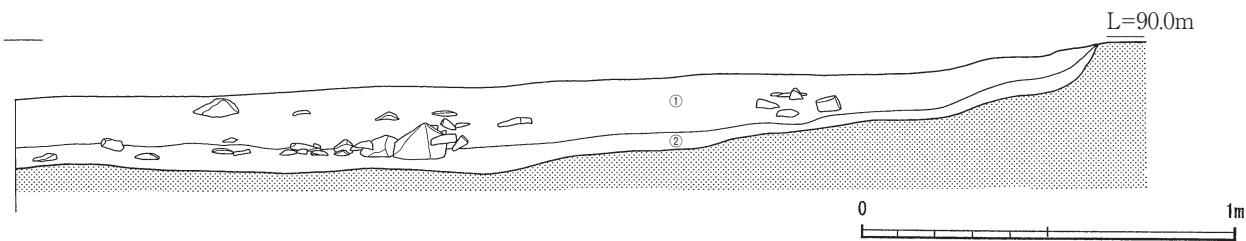
F-10区に位置し、III層から検出された。検出面での規模は2.25m×1.80mで、若干いびつな楕円形である。残存部の最深部は9cmであった。上面は削平されていると考えられる。埋土中の遺物は小片ながら縄文時代後期の土器であることや埋土中に池田軽石が含まれることから、この時期の遺構と判断した。床面及び周囲には柱穴は見られなかった。

埋土は池田軽石の混じる黒色土であり、分層はできなかった。また、埋土中から石皿の破片と土器が出土したが、極めて少数であった。図化できたものは2点のみである。

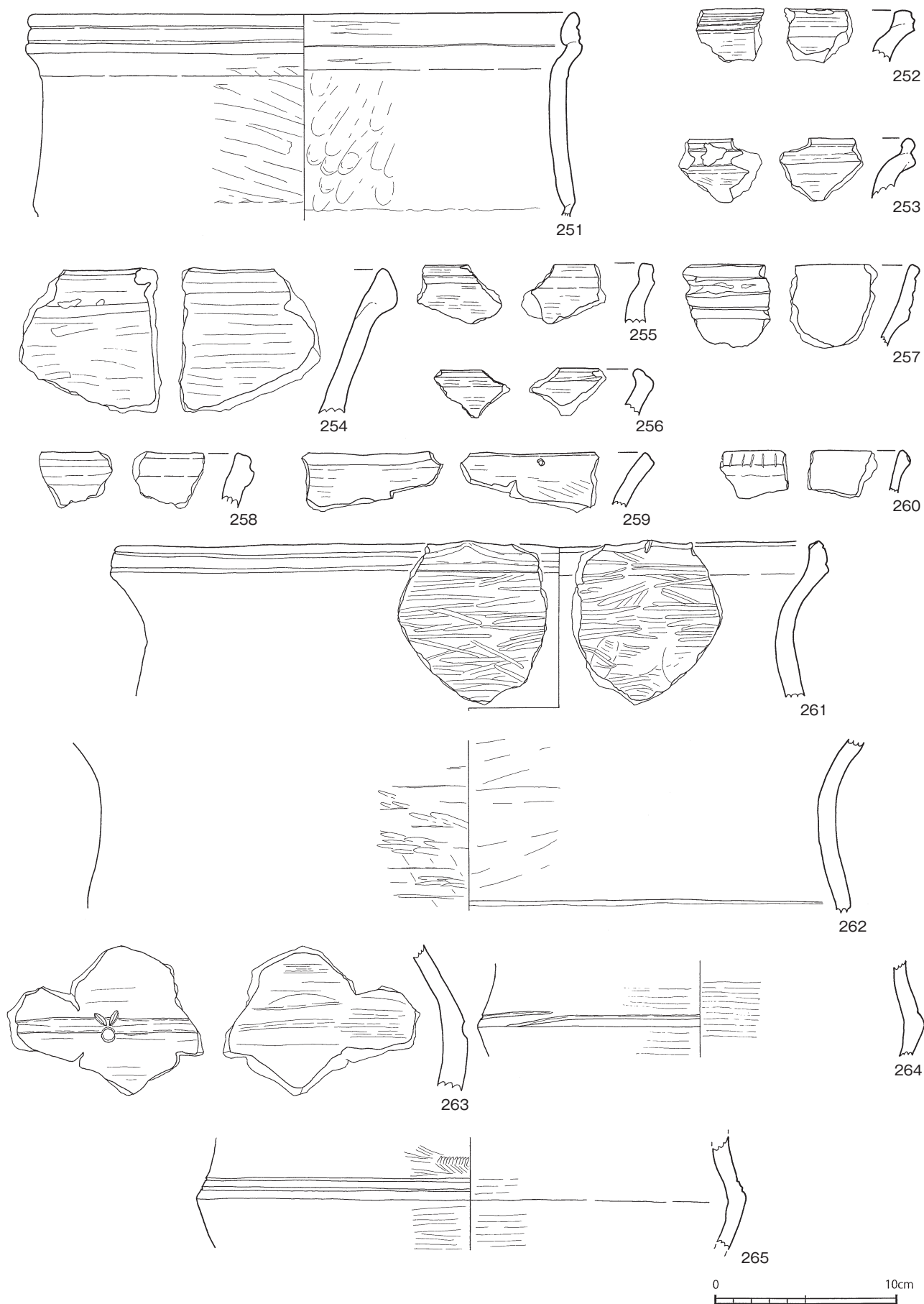
289は浅鉢の口縁部と考えられるものである。口唇部は丸く、全体の形状としては外反器形を呈するものである。290は口唇部を平坦に仕上げた後、等間隔で細くシャープに縦方向の刻みを施している。



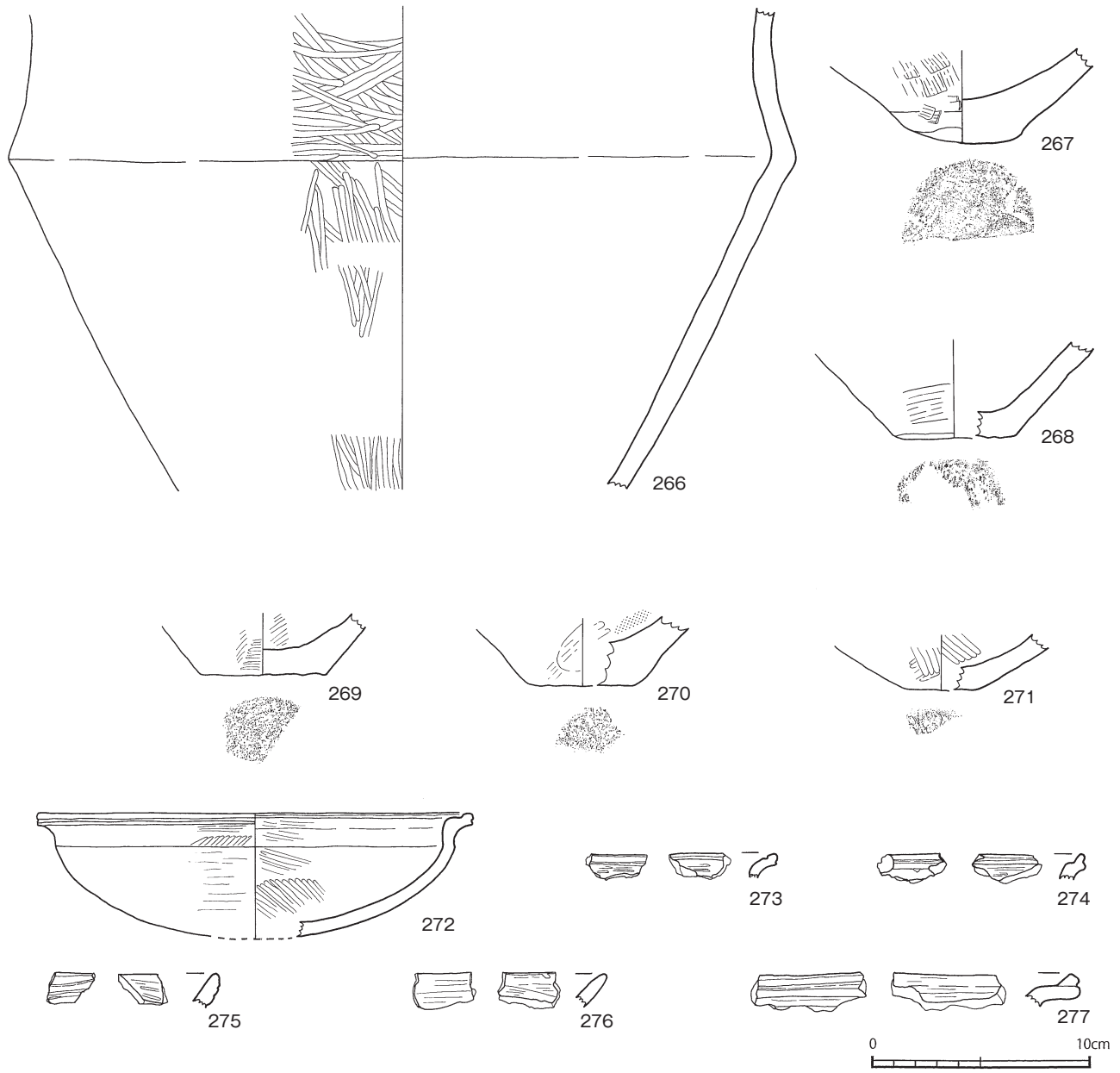
- ① 黒色土に径1cmのアカホヤが混じる。(アカホヤ30%) (黒色土はIIa層(黒色土)の混在土)
(炭化物を多く含む)
- ② 黒褐色土(IV層)に池田降下軽石がごくわずかに混じる。



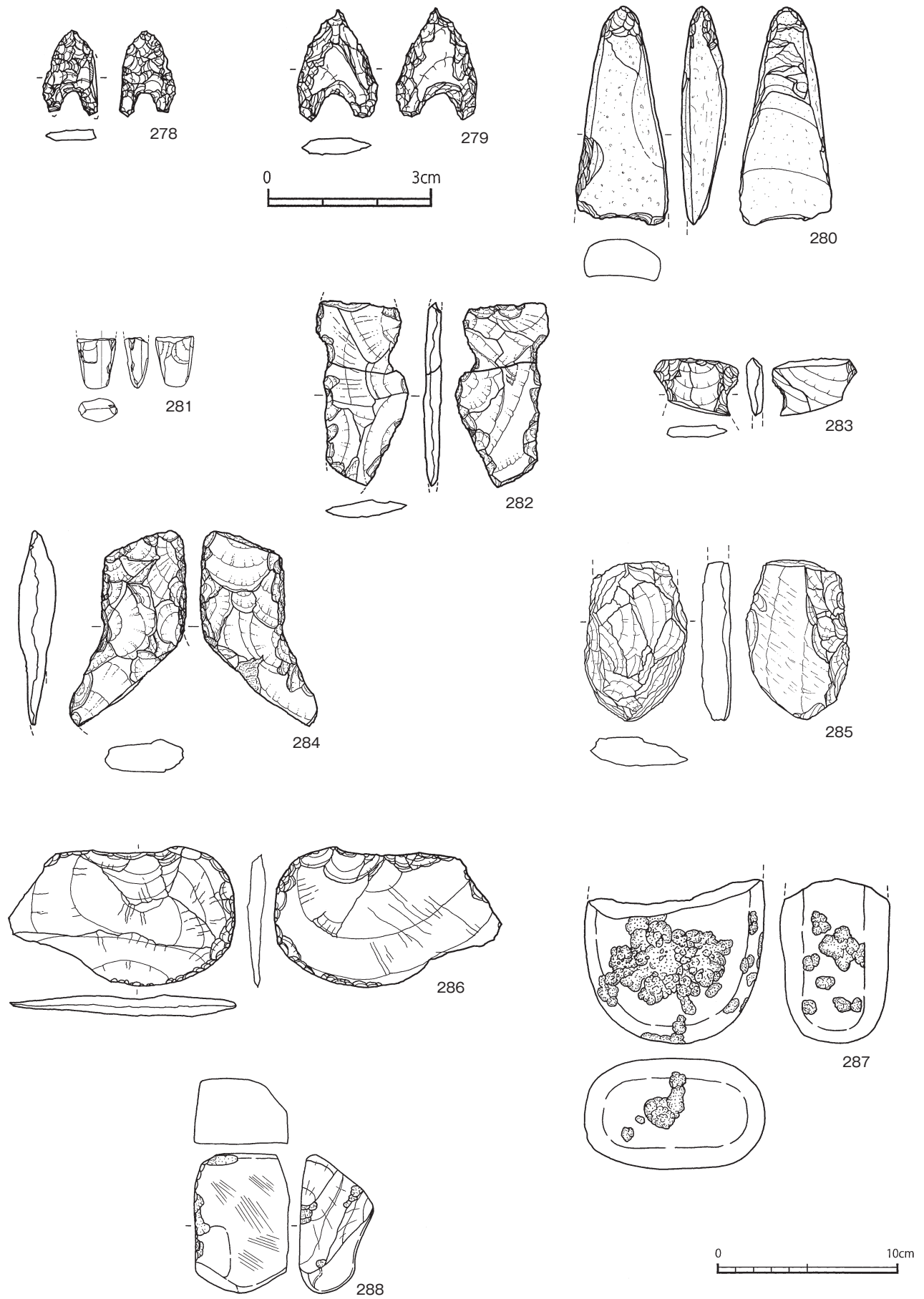
第 64 図 縄文後期 3号竖穴住居跡



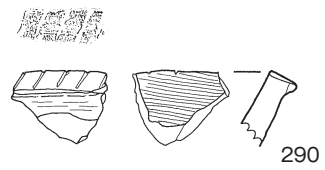
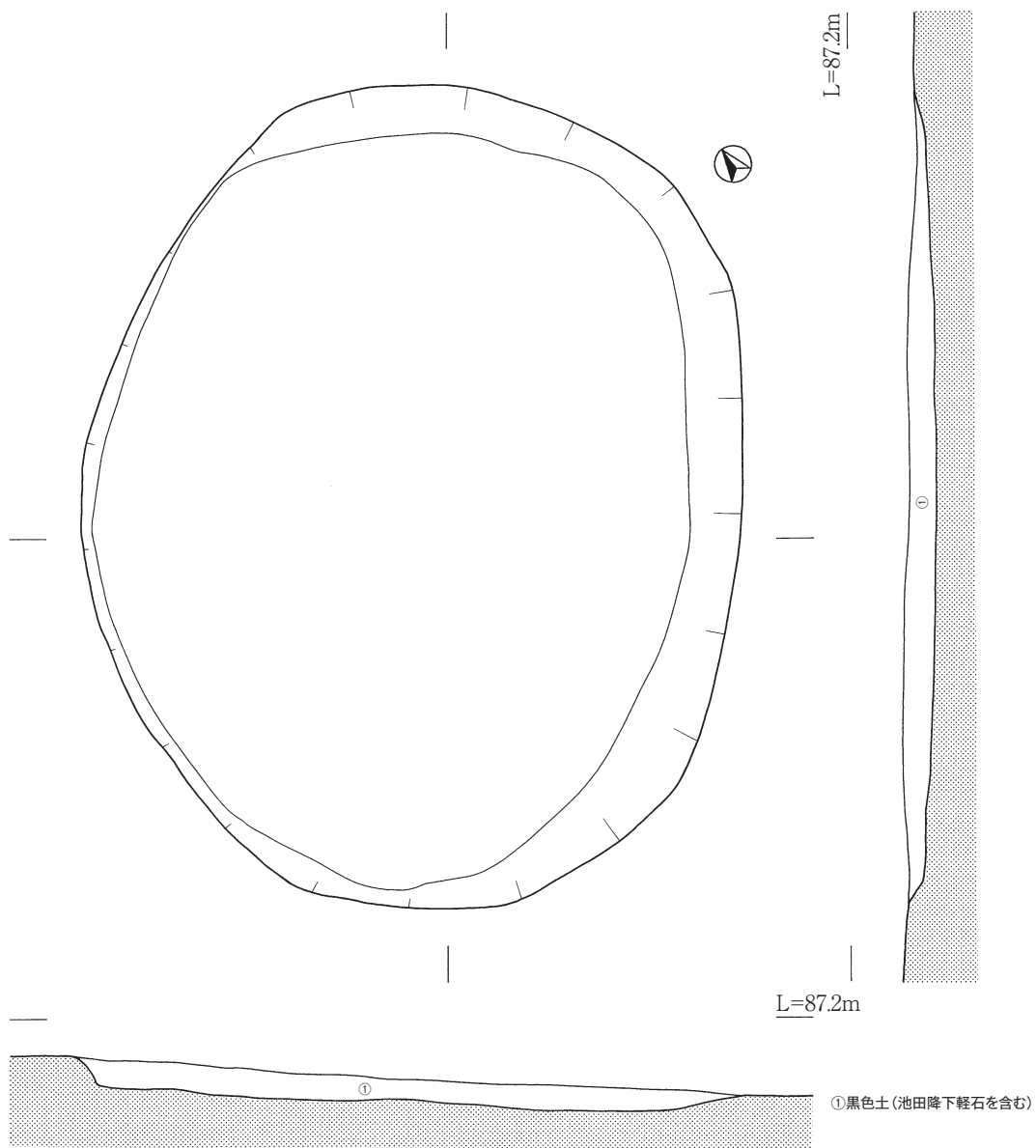
第 65 図 縄文後期 3 号 竪穴住居跡出土土器 1



第66図 縄文後期3号竪穴住居跡出土土器2



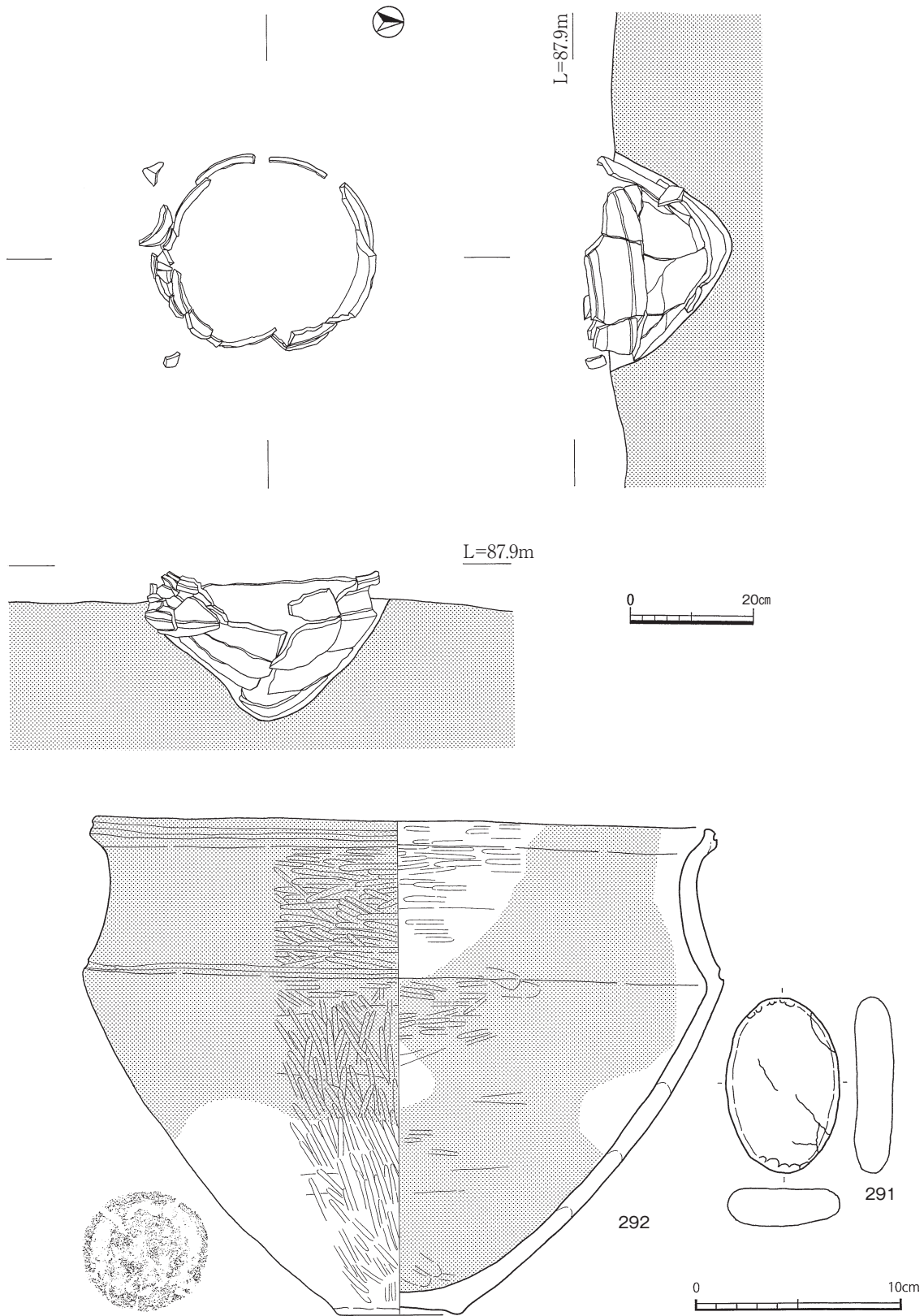
第 67 図 縄文後期 3 号 竪穴住居跡出土石器



第 68 図 縄文後期 4 号 竪穴住居跡・出土土器

(2) 埋設土器 (第 69~72 図 291~294)

埋設土器が3基検出された。いずれも第1地点から検出されたものである。



第 69 図 1 号埋設土器・出土土器・石器

1号埋設土器 (第69図 291・292)

E-8区のIIb層で検出された。

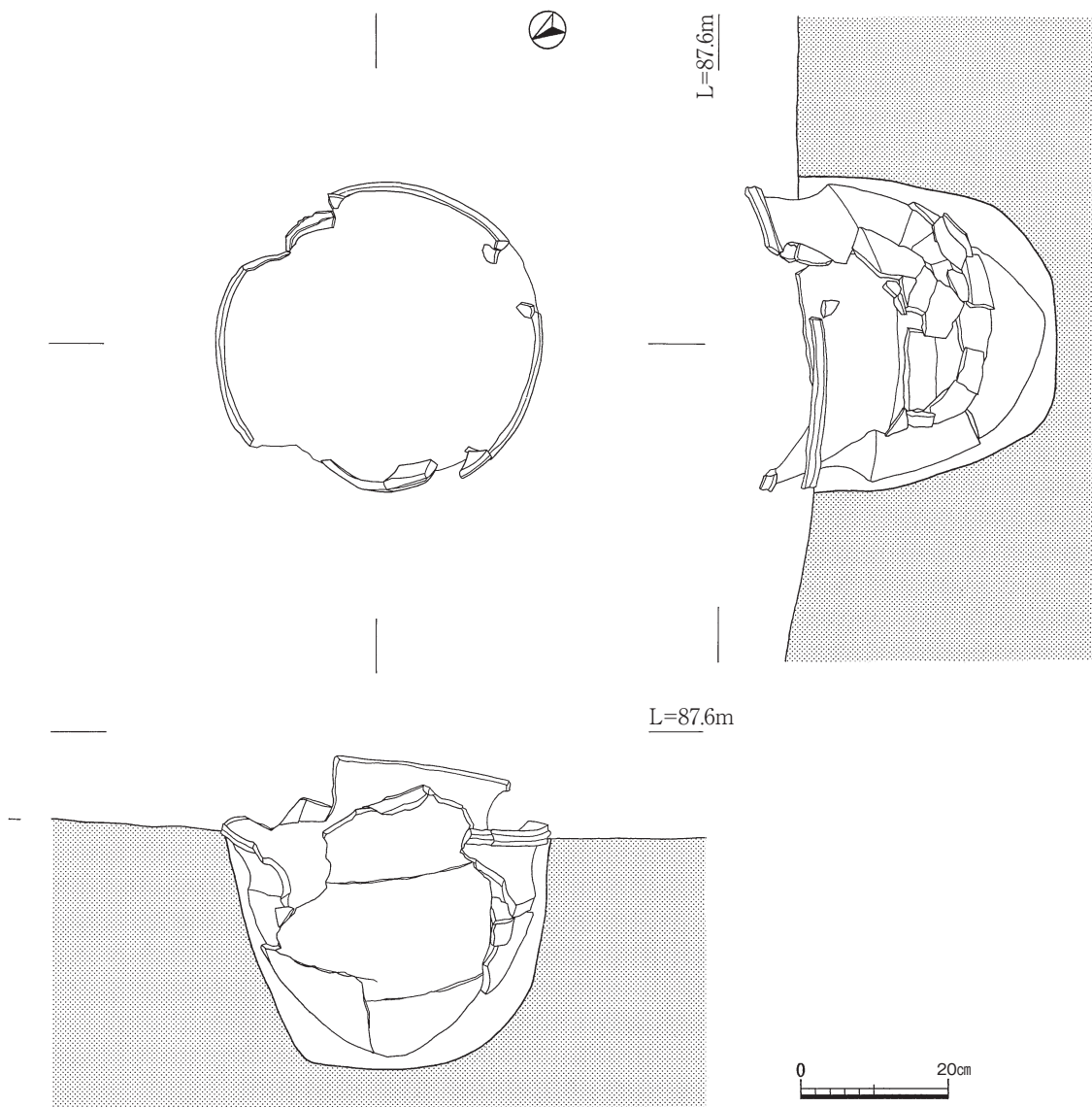
土器が検出された場所は、西側に向かって緩やかに上っていく傾斜面にあり、平面形が、約40cm×35cmの略円錐状を呈し、深さが約25cmの土坑に、ぴったりと納まるように埋設されていたことから、極めて安定した状況であった。

土器は口縁部付近に欠損が見られるものの良好な残存状態であった。中に入っていた埋土は黒色土の単一土であり、土器や炭化物等は検出されなかった。

この土器を接合し、復元した結果、口径30.4cm、底径6cmで、器高は34.4cmとなった。胴部の最大径は全体の

高さの3分の2程のところにあり、30.9cmであった。その上部には深い1条の沈線が巡り、そこから口縁部に向かっては内傾しながら立ち上がり、口縁部端部にかけて再び外反する。口縁部は丸みを持って肥厚し、外面の中央には1条の沈線が巡っている。

胴部最大径の部分から底部にかけては幾分膨らみもちながらすぼまる。外面は口縁部直下が横方向、胴部から底部にかけては縦方向のミガキ調整が施され、内面は部分的に指頭痕が残るものの全体的には横方向のミガキ調整が見られる。底部は口縁部の約5分の1の直径で、若干上げ底を呈している。それらのことから、この土器は縄文時代後期中岳II式の深鉢と考えられる。



第70図 2号埋設土器

2号埋設土器 (第70・71図 293)

E-11区のⅡb層で検出された。

土器は、平面形が直径43cmの円形を呈し、深さが33cmのバケツ状の土坑に、ほぼ納まるように埋設されており、極めて安定した状況であった。

口縁部の一部は耕作により欠損している。全体的に残存状態が良く、埋められた当時の状況が想定できるが、やや北側に傾いており、中段には圧迫された痕跡が残っている。残存状態が良かったことから土器の中の埋土を残したまま取り上げを行った。土器中の埋土は分層できず、単一の黒色土であった。また、土器や炭化物は検出されなかった。

この土器を接合し、復元した結果、口径53cm、底径5cm、器高は40.6cmとなった。胴部の最大径は40.2cmで、その上部には沈線は見られない。そこから口縁部に向かっては内傾しながら立ち上がり、口縁部端部にかけて

再び外反する。口縁部は全体的に四角形状に角張り、外面の稜の下部には浅い1条の沈線が巡っている。

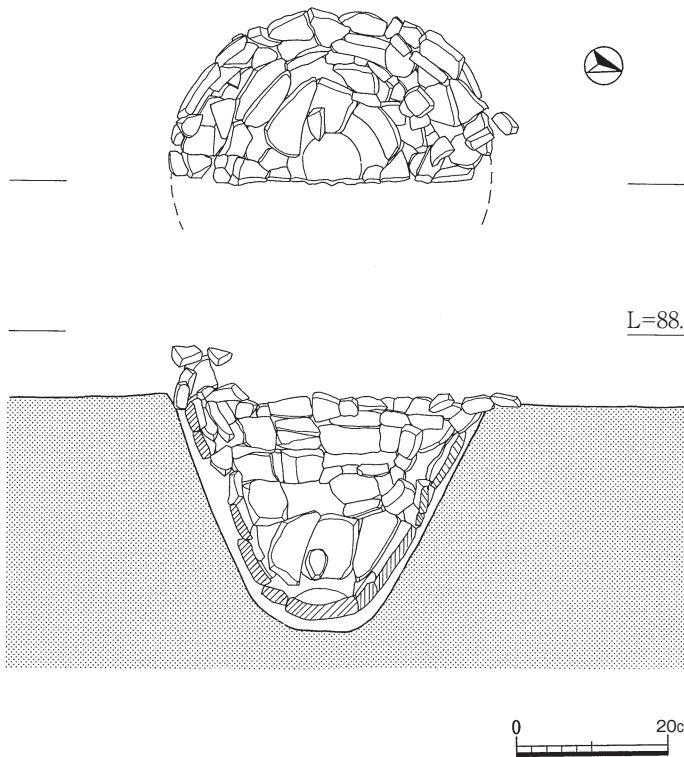
胴部最大径の部分から底部にかけては、底部付近でやや膨らみを持つものの、全体的には直線的にすぼまっている。底部は接地面が狭小で上げ底を呈している。外面は口縁部の下部と胴部最大径付近の上下が横方向、それ以外の部分は縦～斜め方向のミガキ調整が施されており、内面は口縁部から胴部の上にかけては横方向、それより下位は斜め～縦方向のミガキやナデ調整が見られる。それらのことから、この土器は縄文時代後期中岳Ⅱ式の深鉢と考えられる。

3号埋設土器 (第72図 294)

D-3区の表土直下で検出された。現況は畑地であったことから、地盤整備等で削平を受けて口縁部から胴部の上部にかけては消失していたほか、トレンチャーによ



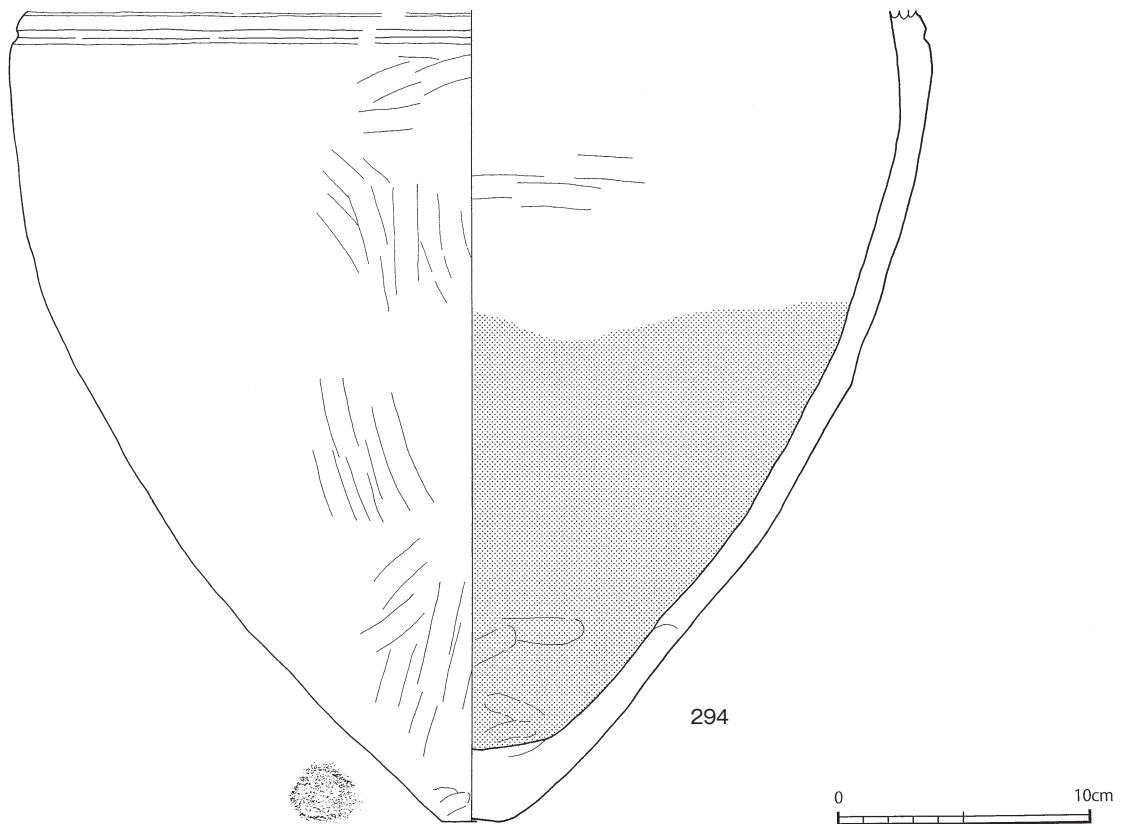
第71図 2号埋設土器・出土土器



る掘削のために東側に当たる全体の半分ほどは断ち切られて消失していた。また、上方及び横方向からの掘削時の圧迫によるものか、土器は全体的に粉々に割れていた。検出時の最上面の土層はIV層であったが、上部を大きく消失していたことから、本来の掘り込み面はまだ上部に位置していたと予測される。

検出時の土器の大きさは、直径の残存部での復元口径が43cm、深さは上部の残存部分から計測すると35cmであった。堀方は直径の検出部分で42cm、深さ31cmの円錐状の土坑を呈していた。最下位はVa層（アカホヤ火山灰層）の下位で止められていたことから、先端の底部がしっかりと座るようにVa層を成形して据えたと考えられる。土器は極めて安定した状況であった。

この土器は粉々に割れていたことから、接合・復元は困難を極めたが、胴部最大径は36cm、底径は3cm、残存長は32cmとの情報を得ることができた。全体の形状は、口縁部付近を欠くことから明確ではないが、胴部最大径の上部には浅い1条の沈線が巡っており、そこから口縁部に向かっては内湾している。また、胴部最大径から底部に向かっては緩やかなカーブを描きながら底部に繋がっている。底部は接地面が極めて狭小で、若干上げ底状を呈している。



第72図 3号埋設土器・出土土器

(3) 土坑 (第 73~79 図 295~311)

第 1 地点及び第 3 地点から土坑が多数検出された。しかしながら、全体的に耕作による破壊や攪乱が激しく、遺物等帰属時期を検討できる情報が残っていた土坑はごく限られたものにとどまっており、資料化できたものはわずかとならざるを得なかった。以下、図化した土坑について説明する。

なお、説明は、便宜上、形態が類似したものの毎にまとめて行う。また、図中の点線は、各遺構の想定線を意味する。各土坑の計測値は表 3 にまとめた。

土坑 1~8 は、縦横長に比較して深さが相対的に浅い一群である。(a 類)

土坑 1 は、粘性のない黒色土とアカホヤブロックが多く混じり、粘性のある暗褐色土を埋土とする。黒色土から土器小片が出土したほか、南西隅から両埋土の境界付近で磨石片が小礫とともに出土した。

土坑 2 はこの群のなかでは小型である。埋土中に中岳Ⅱ式と考えられる胴部片と黒曜石のチップが出土した。埋土には炭化物も散見されたが、サンプルを採取できるほどではなかった。

土坑 3 は約半分を耕作により失っている。残存した埋土中から、中岳Ⅱ式の胴部小片と 295 の石器が出土した。295 は磨製石斧の基部と考えられる破断資料で、石材はホルンフェルス、重さ 95.5g。両側辺から平坦剥離により成形した後、形状を整えている。縁辺部には稜を軽く潰したような痕跡も確認できる。また、背面から基部端部にかけて色調がやや赤変している。

土坑 4 はやや粘質のある黒色土を埋土とし、床面や壁面に被熱等の痕跡は確認できなかった。遺物は胎土や焼成等の特徴から、中岳Ⅱ式と考えられる土器小片が数点出土した。

土坑 5 は粘質のない黒色土を埋土とする。埋土中から、内外面を軽く研磨した器壁の薄い土器小片が 1 点出土した。

土坑 6 は、明褐色と黒色のシルト質の埋土で、池田降下軽石やアカホヤブロックの混在度合いからさらに細分できた(断面図参照)。しかし、いずれの層からも遺物は出土しなかった。

土坑 7 は、アカホヤブロックを含み、やや粘性のある黒色土を埋土とする。耕作により床面等は十分観察できるほど残存していなかった。わずかな埋土中から中岳Ⅱ式の底部と想定される小片や比較的器壁が薄くやや雑なナデ仕上げの胴部片などが出土した。

土坑 8 は、池田降下軽石とアカホヤブロックがわずかに混じる黒色土を埋土とする。器壁の薄い土器小片が数点出土した。

土坑 9~12 は、縦横長と深さが相対的にほぼ同じ一群である。(b 類)

土坑 9 は G-100 区Ⅳ層下位で発見された。平面検出時点で土色の変化と遺物を確認し、遺構の認定を行った。全体形状は、壁が場所によって凹凸するものの、床面はほぼ平坦でおおむね樽のような形態である。埋土はやや粘性のある灰褐色土で、橙色ブロックの混在度合いで分層した。遺物は上位の埋土から多く出土した。図化できたものについて説明する。296、297、298 の口縁部は、いずれも器壁が分厚く、端部外面には太く浅い凹線が横位に施文される。296 のみ口縁端部が短く強く屈曲して立ち上がり、屈曲部に細かい刻み目が施文される。299、300 の胴部はやや器壁が厚く、どちらも焼成は良好で、内外面は軽く研磨されている。299 には屈曲部の上端に細く浅い凹線が 2 条、横位に施文されている。300 は 299 よりも屈曲部がやや丸く仕上げられている。301 と 302 の底部は、どちらも明瞭な底面平坦部を有するものの面積は小さい。内外面とも丁寧なナデられている。303、304 は打製石斧の破断資料で、石材はどちらもホルンフェルス、重さは 303 が 51.0g、304 が 98.0g である。

土坑 10 は、耕作により検出面はほとんど攪乱されていたが、床面付近は残存しており調査が可能だった。床面付近から土器小片が複数出土した。小片で詳細は不明だが、器壁が薄く器面を研磨した資料もある。

土坑 11 は、C-5 区のⅨ層上面で発見した。粘性の有無などから埋土を細分したが、略水平という特徴的な堆積状況を呈している。遺物は出土しなかった。検出面はⅨ層であるが、埋土の全体的な特徴がⅡ~Ⅲ層に類似すること、埋土 2 並びに 4 には開聞岳噴出物由来とみられる土壌を含んでいたことから、縄文後期に帰属すると考えられる。因みに、隣接する牧山遺跡でも類似する形態の土坑が検出されており、縄文後期の落とし穴と想定されている。

土坑 12 も耕作により攪乱されていたが、遺構西側のほぼ半分と床面付近が残存しており、調査・記録することができた。やや粘性のある黒色土を埋土とする。遺物は出土しなかった。

土坑 13~17 は、縦横長と比較して深さが相対的に深く、柱穴状の断面形状を呈する一群である。(c 類)

土坑 13 は、検出面と底面では平面形が大きく異なる形態の土坑である。粘性がある黒色土の埋土から、中岳Ⅱ式と想定される土器小片が出土した。

土坑 14 も耕作により大きく攪乱された遺構だが、アカホヤブロックを含む粘性がある黒色土の埋土から、中岳Ⅱ式と考えられる底部小片が出土している。

土坑 15 は縄文土器の小片と、305 の花崗岩製磨石が出土した。磨石の使用面はごく平滑である。劣化の進行が激しい。現状の重さは 217.0g。

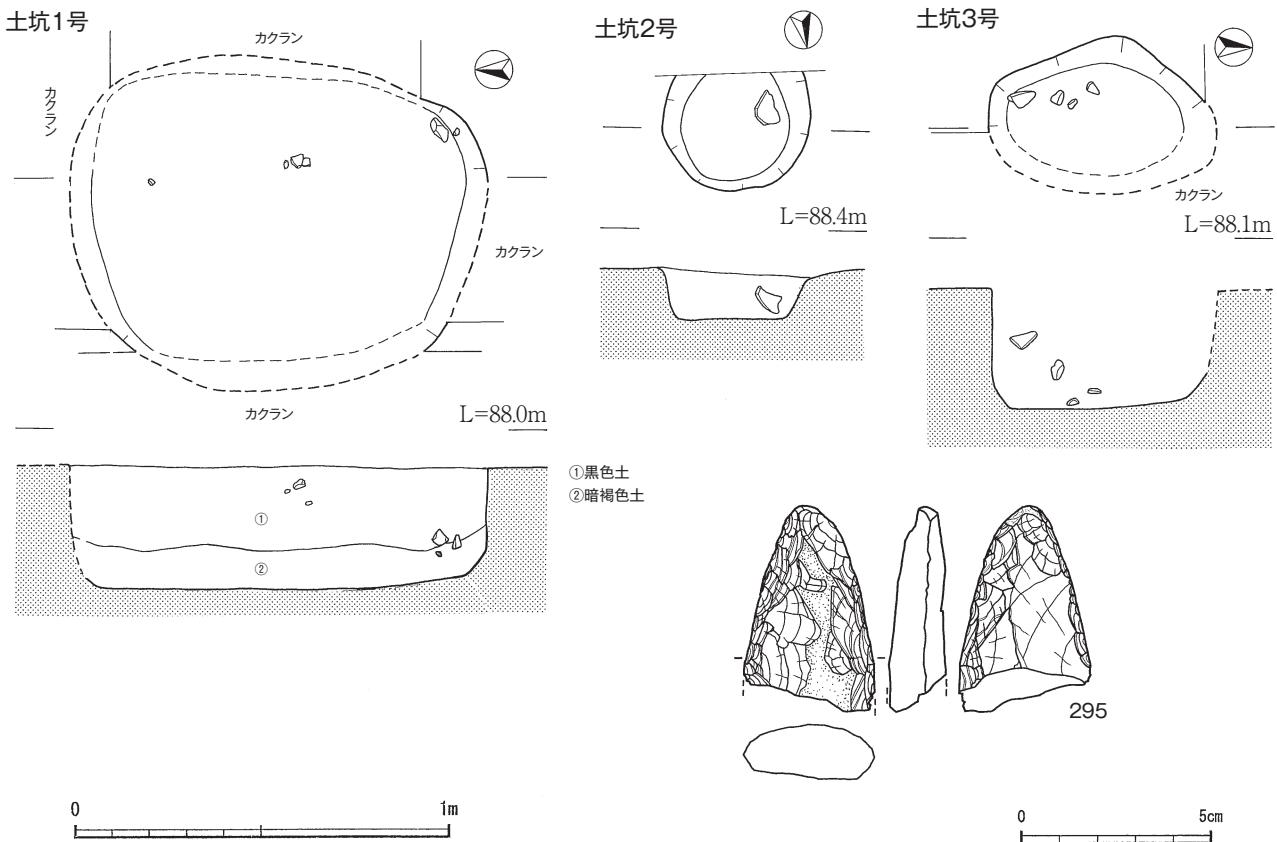
土坑 16 は、全体形状がラッパ状を呈する。アカホヤブロックを含み粘性のある黒色土の埋土から 306 の中岳

Ⅱ式口縁部片が出土した。器壁は比較的薄く、内外面を研磨で仕上げ、口唇部は断面略方形である。口唇部外面に太く浅い凹線が2条、横位に施文される。

土坑17はC-7区で発見された。全体形状は単純な柱状を呈する土坑であるが、埋土の中～上位から石皿の破片等が多数出土するという、特徴的な出土状況を示す遺構である。埋土は池田降下軽石やアカホヤ小粒をわずかに含む黒色土で、細分はできなかつた。出土した石器のうち、図化できたのは以下の4点である。なお、これらを含む石器は、縦位に埋まっていた309の直上に311、308などがあり、さらにその上に310、307があるという状況であった。307は加工痕のある剥片である。石材は黒曜石で、軽石粒などの不純物を多く含むことからⅡC類とみられる。やや厚めの縦長剥片に部分的に不規則な剥離が加えられている。重さ7.0g。309は凝灰岩製の

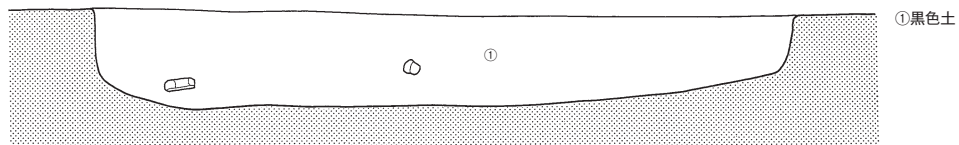
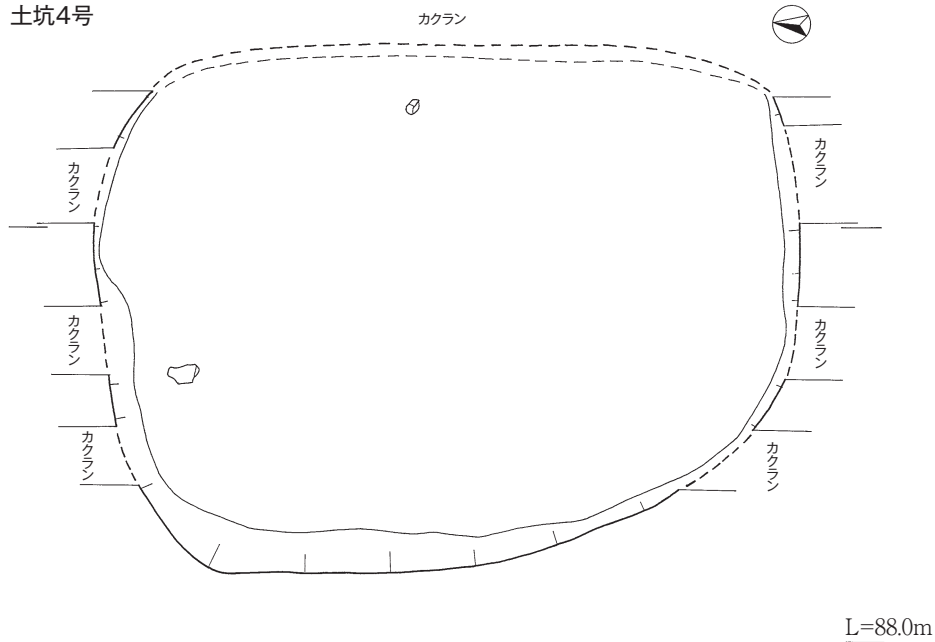
大型石皿の破片で、重さ12,000g。表面の色調はやや赤みを帯びている。308も大型石皿の破片で、安山岩製、重さ5,020gである。上面、下面ともきわめて平滑で、さらに上面はわずかに凹むが、残存する側面は整形痕を残す。311も凝灰岩製の大型台石の破片であるが、破損が激しく下面と側面の一部しか器面が残存していない。全面赤みを帯びている。重さ1,860g。309とは接合しないが、同一個体である可能性もある。310は、凝灰岩製の礫片である。破碎と器面の風化により磨面等の残存は認められない。重さ990g。

土坑18～22は、縦横長に対する深さでは最初にまとめた一群と同様であるものの、全体形状が皿状や不定形になる一群をまとめた。(d類) いずれも埋土は黒色土で、出土遺物は、中岳Ⅱ式と想定される土器片などもあったが、ほとんどが小片で詳細を明らかにできなかった。

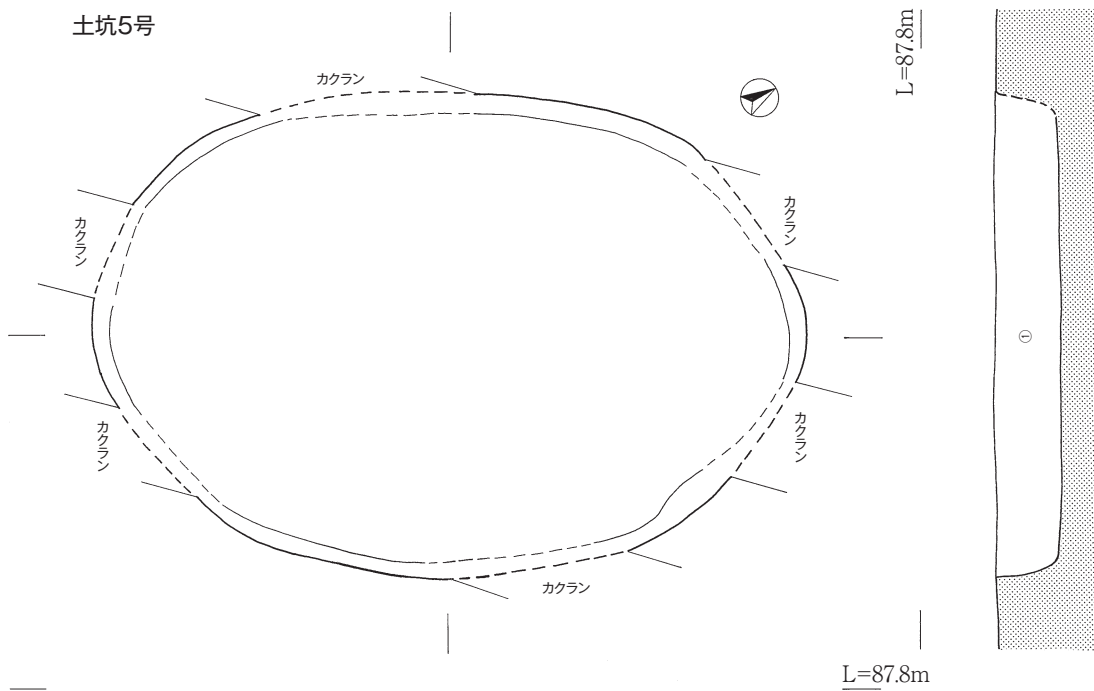


第73図 縄文後期土坑1・出土遺物

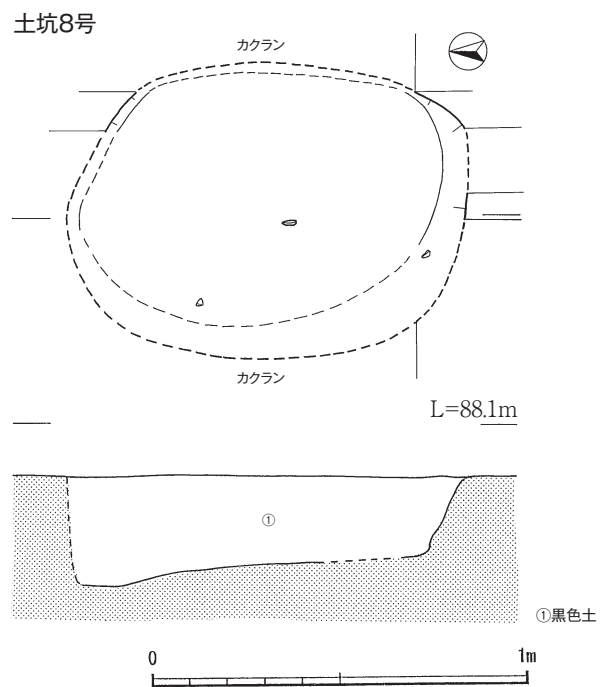
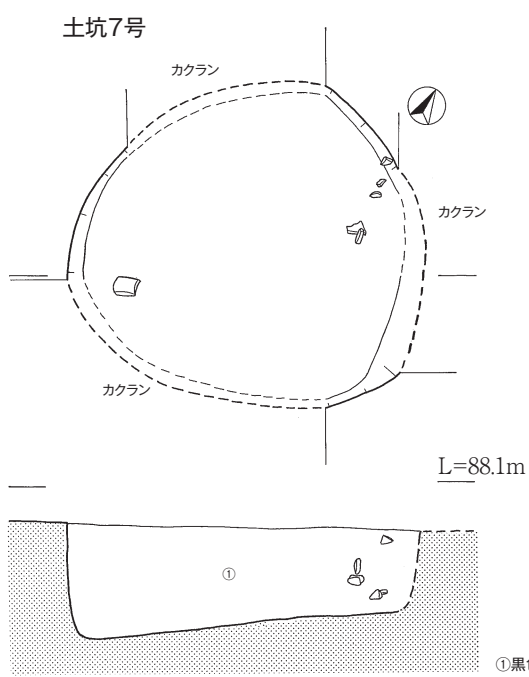
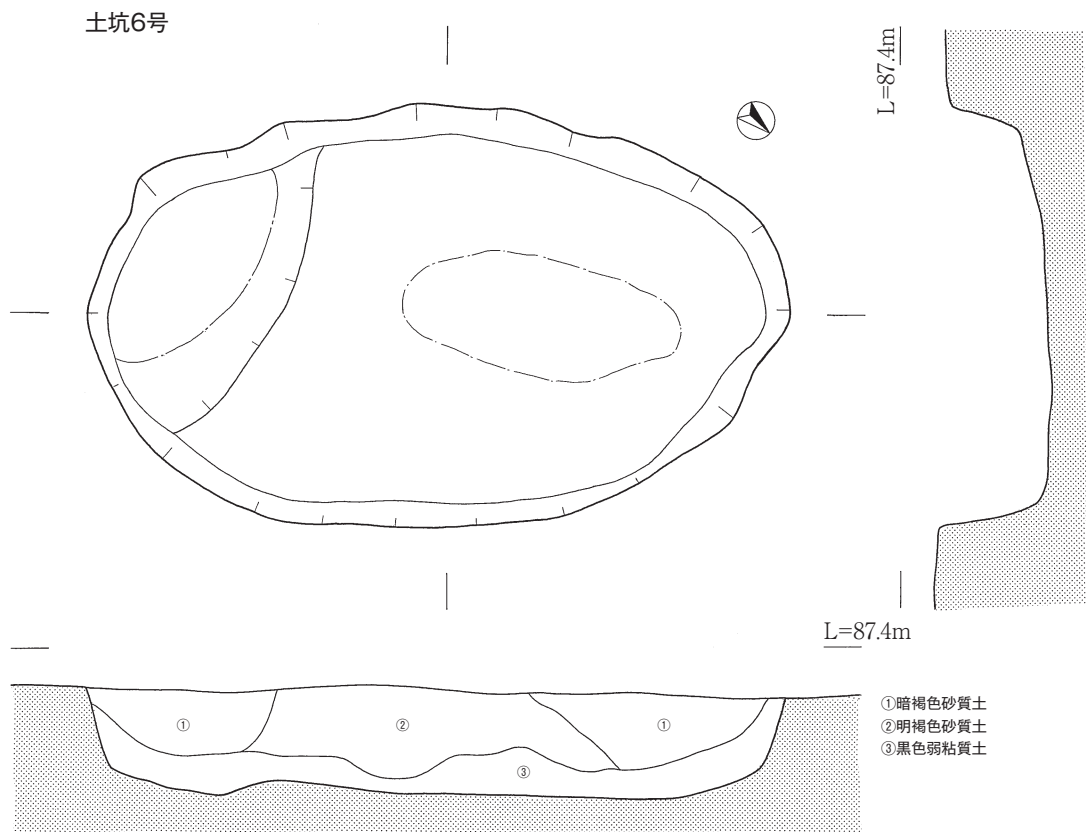
土坑4号



土坑5号

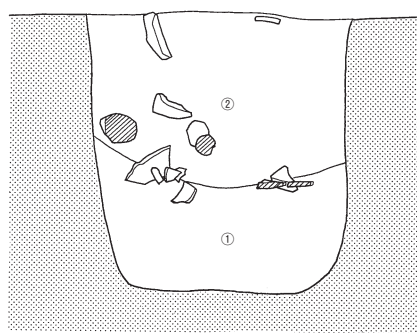
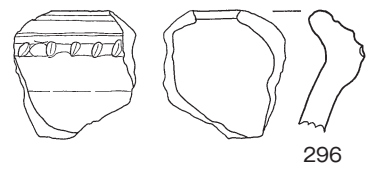
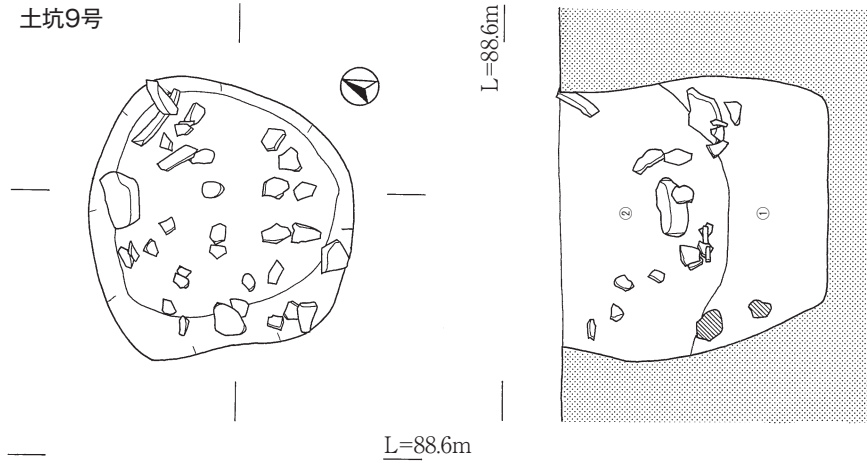


第 74 図 縄文後期土坑 2

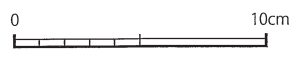
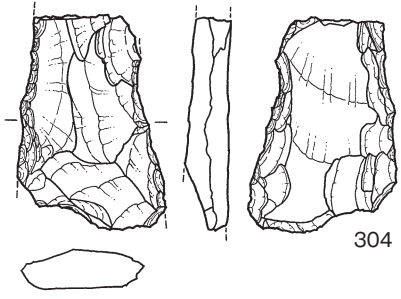
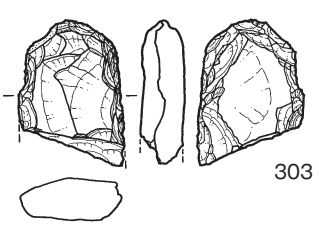
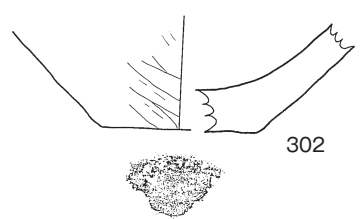
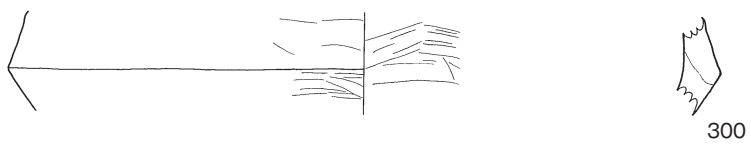
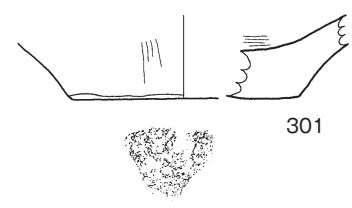
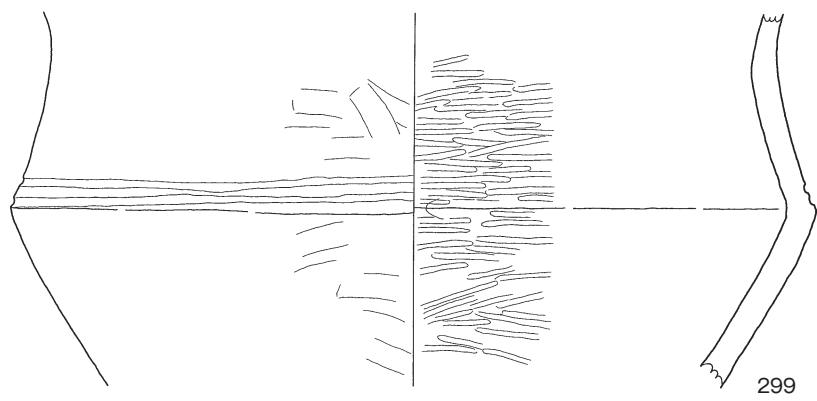
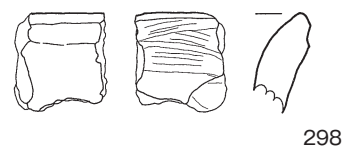


第 75 図 縄文後期土坑 3

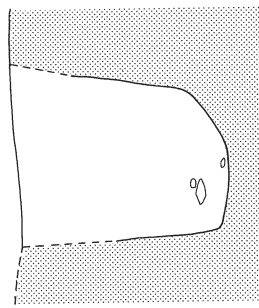
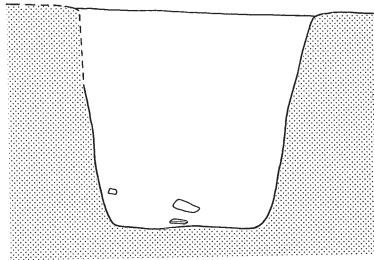
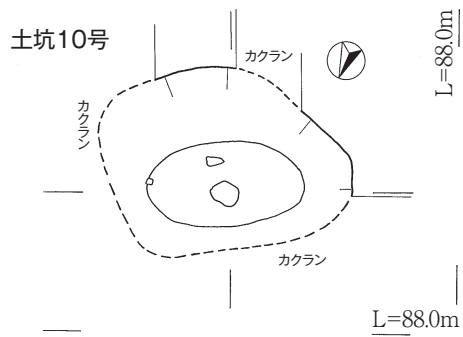
土坑9号



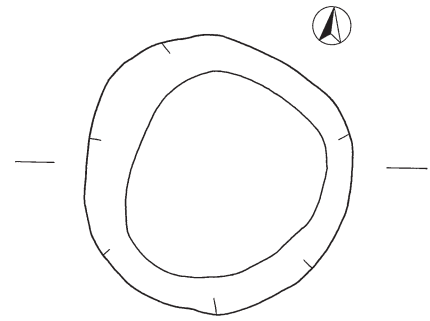
①灰褐色土、しまりあり。
②灰褐色土、しまりなし。



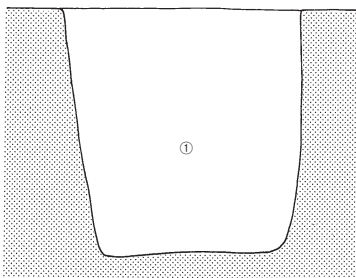
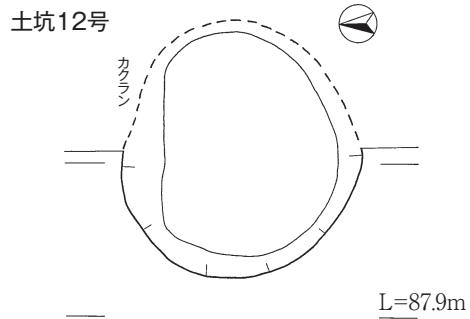
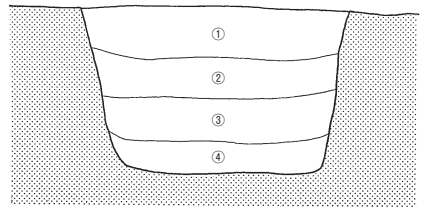
第76図 縄文後期土坑4・出土遺物



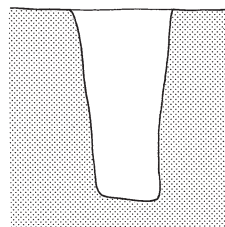
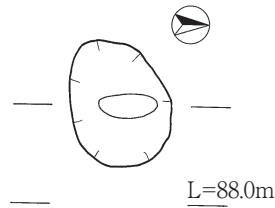
土坑11号



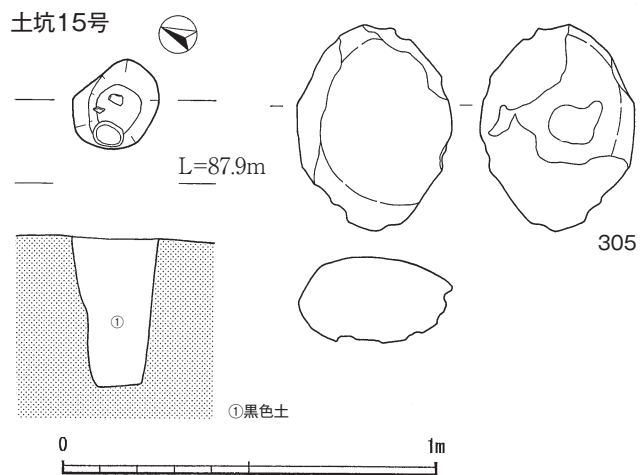
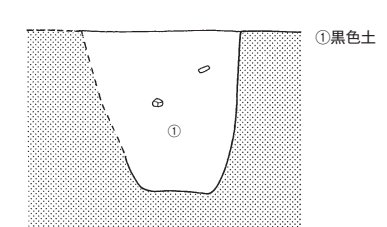
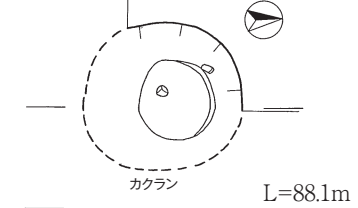
L=86.9m



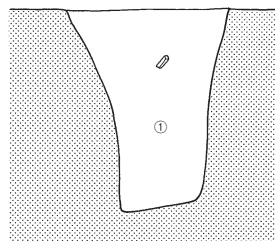
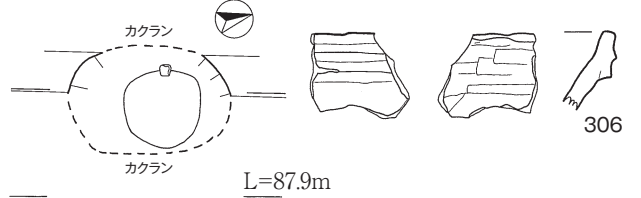
土坑13号



土坑14号

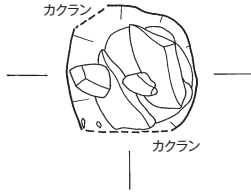


土坑16号

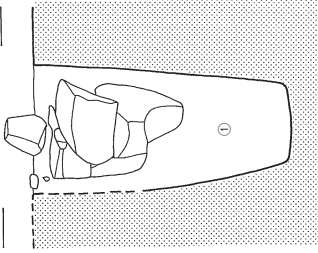


第77図 縄文後期土坑5・出土遺物

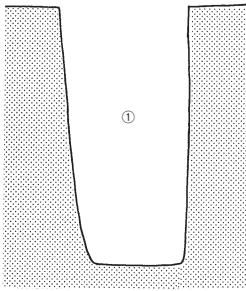
土坑17号



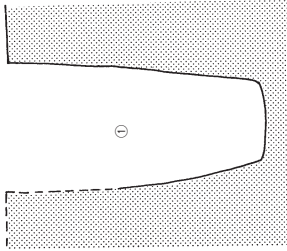
L=87.9m



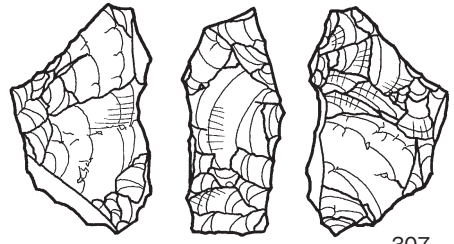
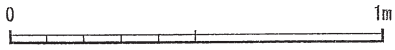
L=87.9m



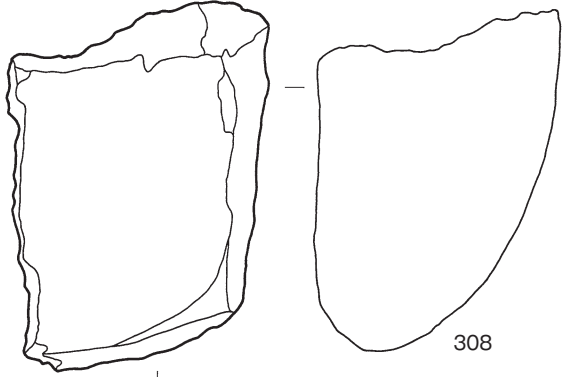
L=87.9m



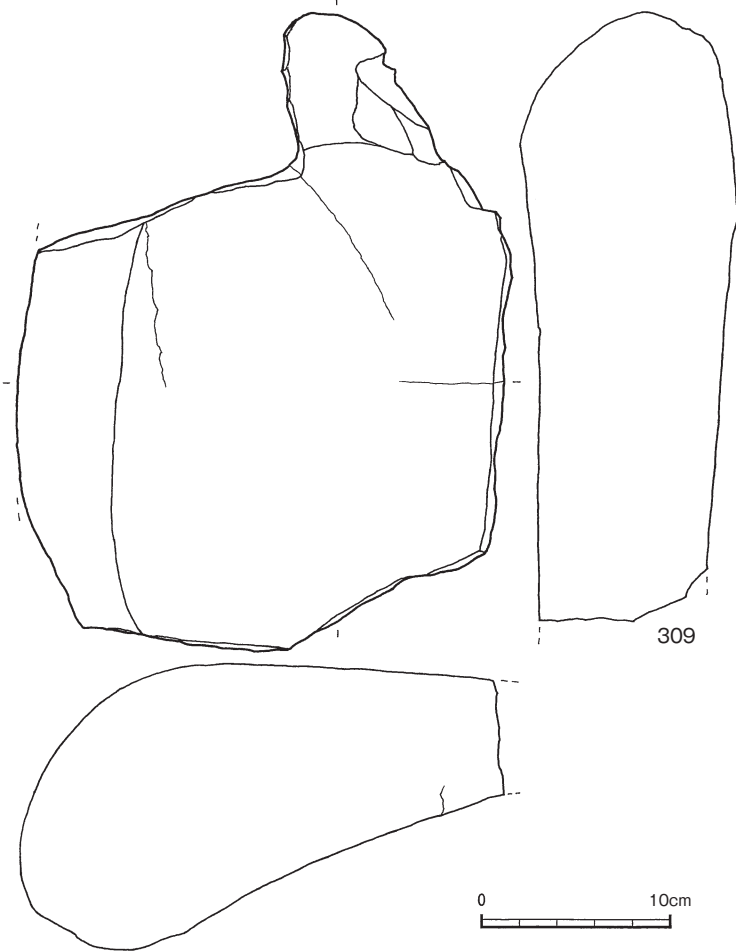
土坑17号
①黒色土



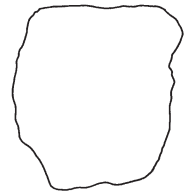
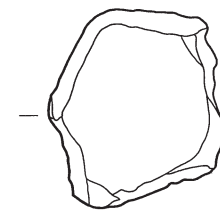
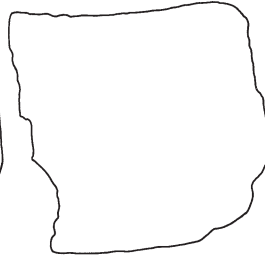
307



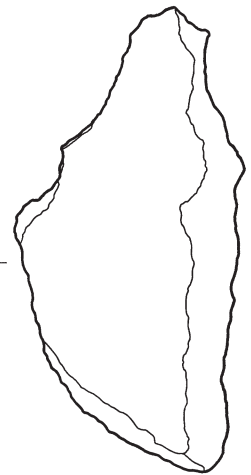
308



309



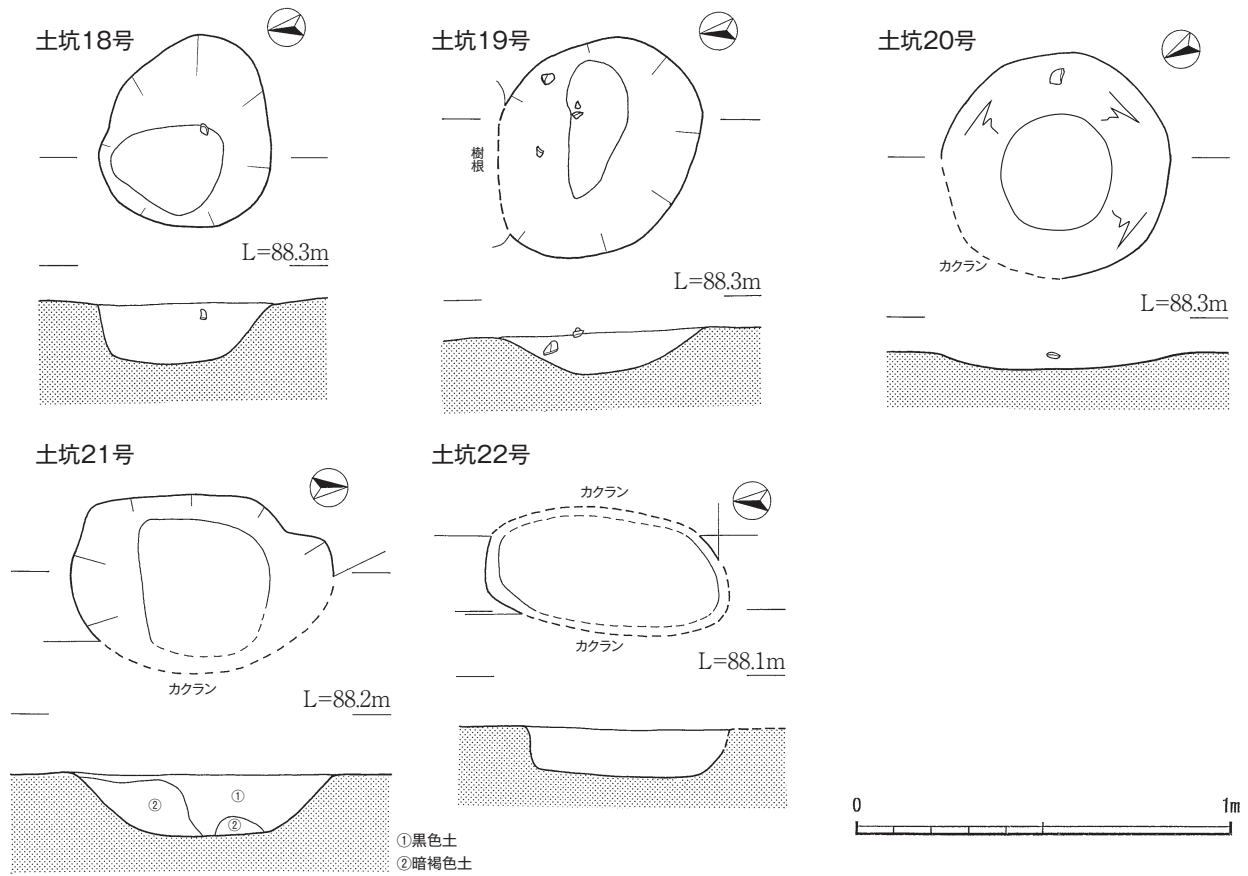
310



311



第 78 図 縄文後期土坑 6 ・ 出土遺物



第 79 図 縄文後期土坑 7

第 3 表 縄文後期土坑観察表

図	番号	類型	区	層	規模 (単位 : cm)			遺物	備考
					縦	横	深		
73	1	a	D4	V	90	110	32	縄文土器	
	2		F3	IV	31	39	13	中岳式	
	3		D4	V	42	61	32	中岳Ⅱ式, 295	
74	4		F4	V	(140)	188	25	中岳式	
	5		F4	V	127	189	16	縄文後期末?	
75	6		G12	V	112	187	27	無	
	7		C3	V	86	95	30	中岳式, 縄文後期末?	
	8		D4	V	(78)	(105)	29	縄文後期末?	
76	9	G100	IV下	75	71	72	301, 302, 303, 304, 他		
77	10	b	B6	V	(46)	(64)	57	縄文後期末?	
	11		C5	IX	74	71	44	無	
	12		C5	V	(69)	64	65	無	
	c	13	F3	V	33	27	50	中岳Ⅱ式	
		14	B4	V	(39)	(42)	43	中岳Ⅱ式	
15		C5	V	24	23	39	縄文土器, 305		
16		C4	V	(30)	42	52	306		
78	17	C7	IV	38	40	70	307, 308, 309, 310, 311		
79	18	d	F2	IV	52	46	16	縄文土器	縄文後期末
	19		F2	IV	58	(53)	11	縄文土器	
	20		F2	IV	60	61	5	縄文土器	
	21		E3	V	(47)	70	17	中岳Ⅱ式	
	22		D3	V	(33)	(64)	12	中岳Ⅱ式	

(4) 石器集積遺構 (第 80~82 図 312~328)

E-9区のⅡ層上面で検出された。全体の規模は、東西2.26m、南北1.90mで、高低差は約20cmであるが、細かく見ると、東西2つのまとまりとして分けられる。その場合には、東側が1.16m×1.13m、西側が1.88m×1.34mとなる。2つの塊の中心の距離は約1.2mであった。

本遺構が所在する場所は、ほぼ平坦といえる。

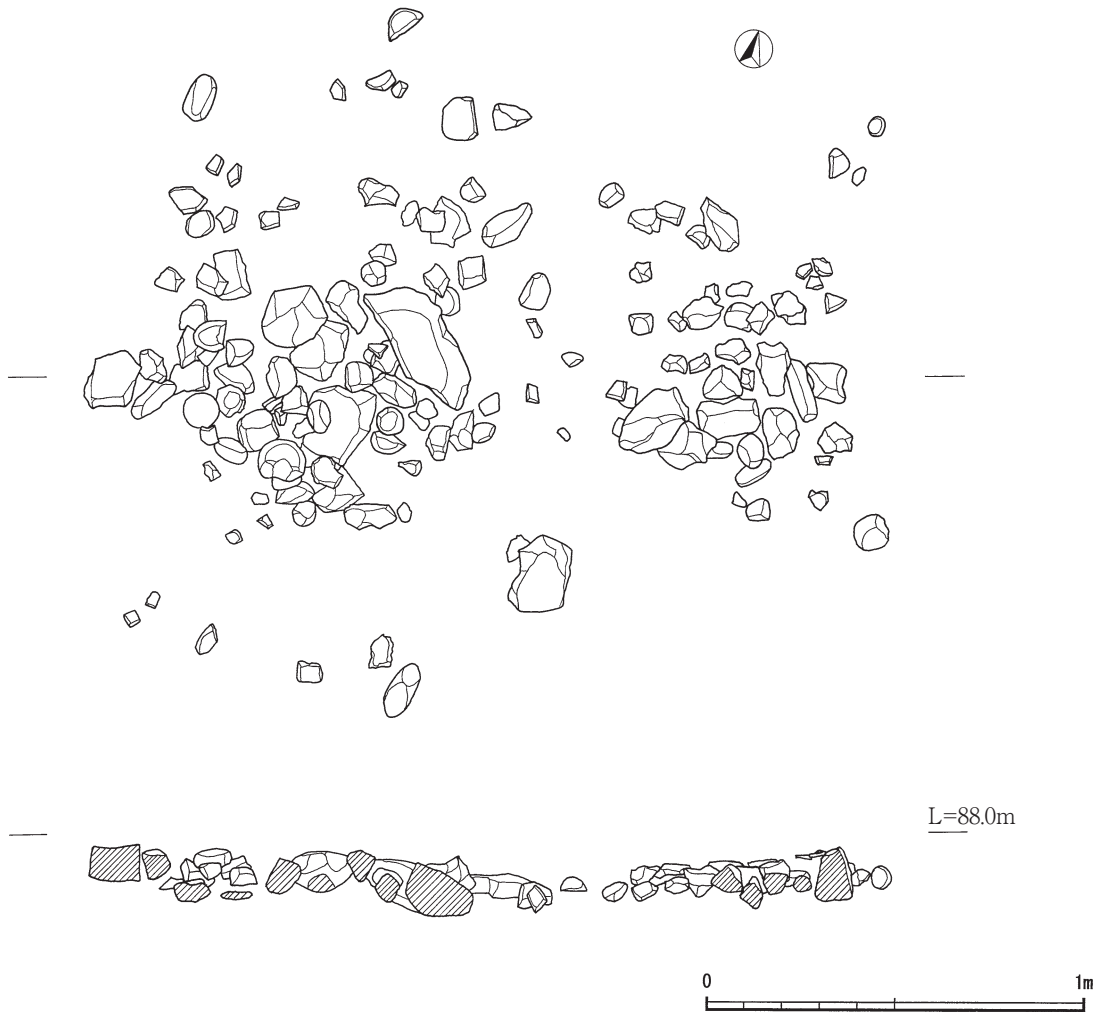
礫の組成は、一般の自然礫の割合は少なく、破碎された石皿や台石、磨石、敲石、石斧などの石器が大部分を占めている。長さが40cmを越える大型の石器が多いのも特徴である。中には10cm前後の破碎礫や土器片も含まれている。礫を外し、掘り込みや焼土域、赤化などの確認を行ったが、確認することはできなかった。遺物の量や状態を見ると、廃棄による可能性も考えられる。

遺構から出土した石器等で図化したものは17点である。

土器片は29点出土したが、部位や施文がはっきりしない小片だったため図化しなかった。312~320・322は打製石斧、321はスクレイパー、323、325、326は敲石兼用の磨石、324は軽石加工品、327、328は石皿である。

打製石斧のうち、313は刃部は残存しているものの、基部が斜め方向に欠損したもので、内外両面の一部には自然面が残っている。312は打製石斧の刃部を欠損したもので、314~316は基部、317と318は刃部と基部を欠損するもの、319~321は刃部である。刃部のうち、319は基部に対して刃部がやや広がるもの、320と322は刃部の先端が尖るものである。

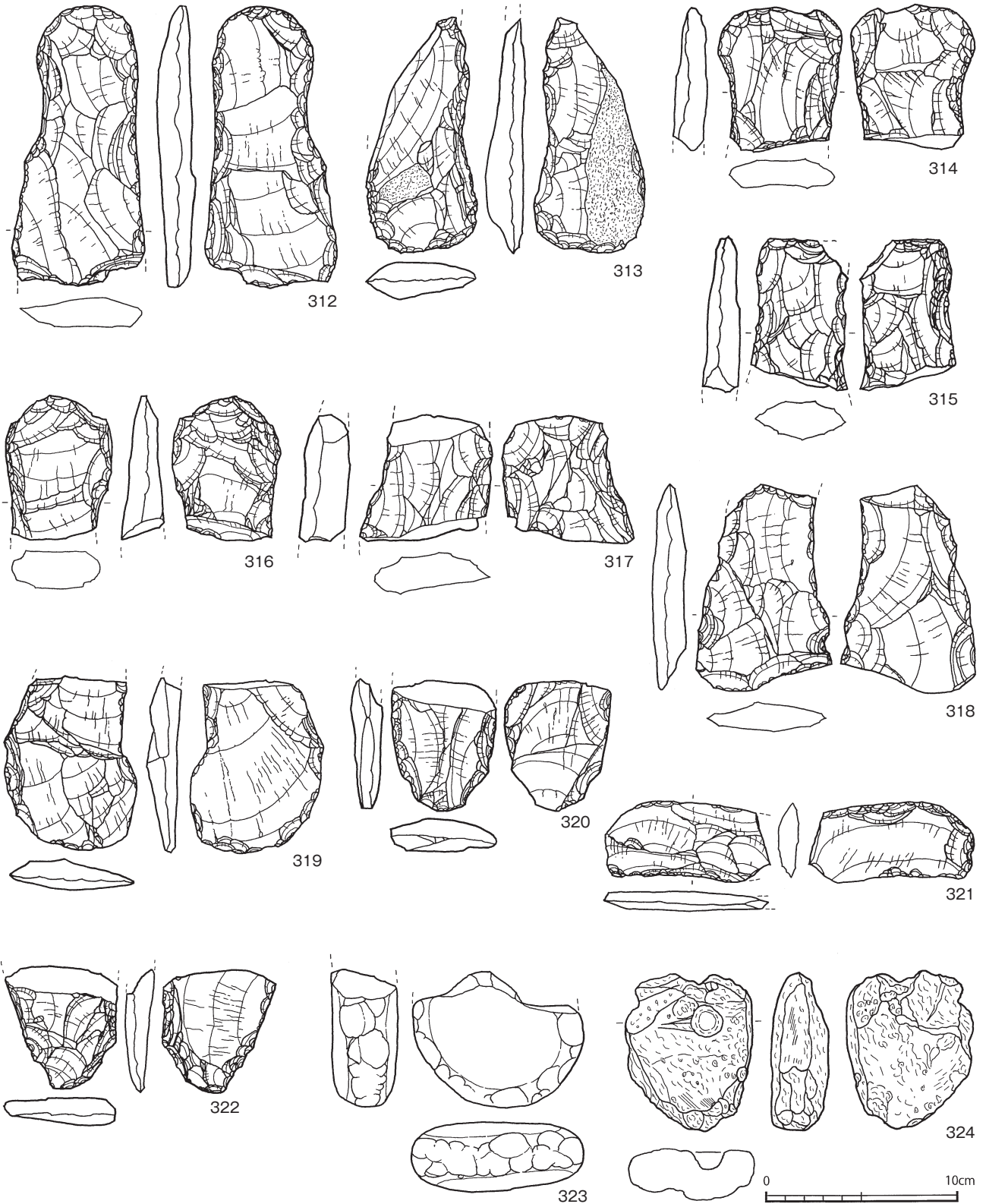
321のスクレイパーは刃部が直線的である。323の敲石兼用の磨石は中央部付近で折損しているが、広い2面を磨るための使用面としており、側面には広く敲打面が巡っている。324は上面に直径1.5cmほどの穴が見られるが、貫通はしていない。面として整えられた形跡はな



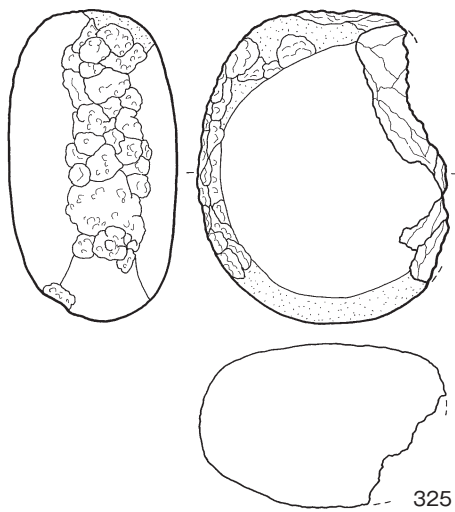
第 80 図 石器集積遺構

く、穴を空けようとした加工痕だけのものと考えられる。
石皿2点は、いずれも破片である。327は上下2面を

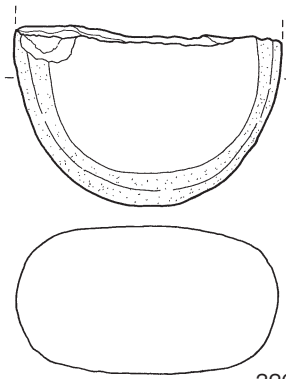
使用しており、328は片面のみの使用であるが一部に敲
打痕が見られ、台石としての使用も考えられる。



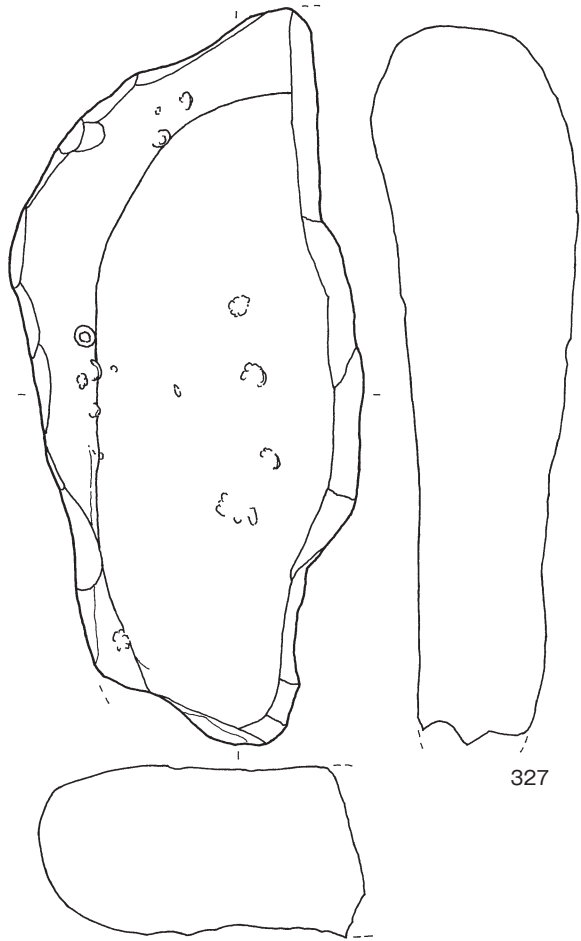
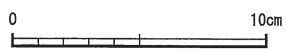
第81図 石器集積遺構出土石器1



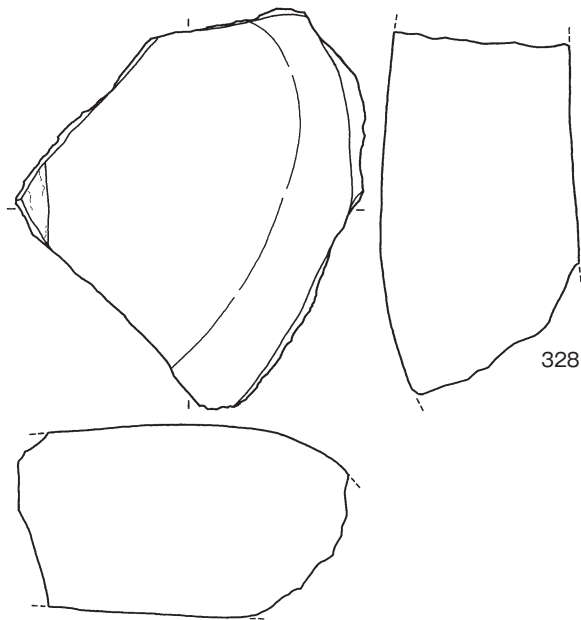
325



326



327



328



第 82 図 石器集積遺構出土石器 2

(5) 遺物集中域 1 (第 83~85 図 329~346)

D-9・10 区のⅡ層で検出された。長径 1.75 m、短径 1.56 m の範囲に石斧 6 点を含む遺物が広がっており、検出レベル差は約 26cm である。石斧の他は、破碎した自然礫や磨石、土器なども出土している。石斧は、幅約 0.6 m、長さ約 2 m の北西-南東の帯状の範囲にあり、北西端と南東端にそれぞれまとまっているような状況である。当初、意識的に石斧、礫、土器などを配置しているようにも見られたが、掘り込みの有無や規則性を検討した結果、遺構としての決め手を欠いたので、ここでは遺物集中域として、遺物の出土状況と遺物を掲載する。

石器は、打製石斧 6 点、スクレイパー 2 点、敲石類 1 点を図示した。

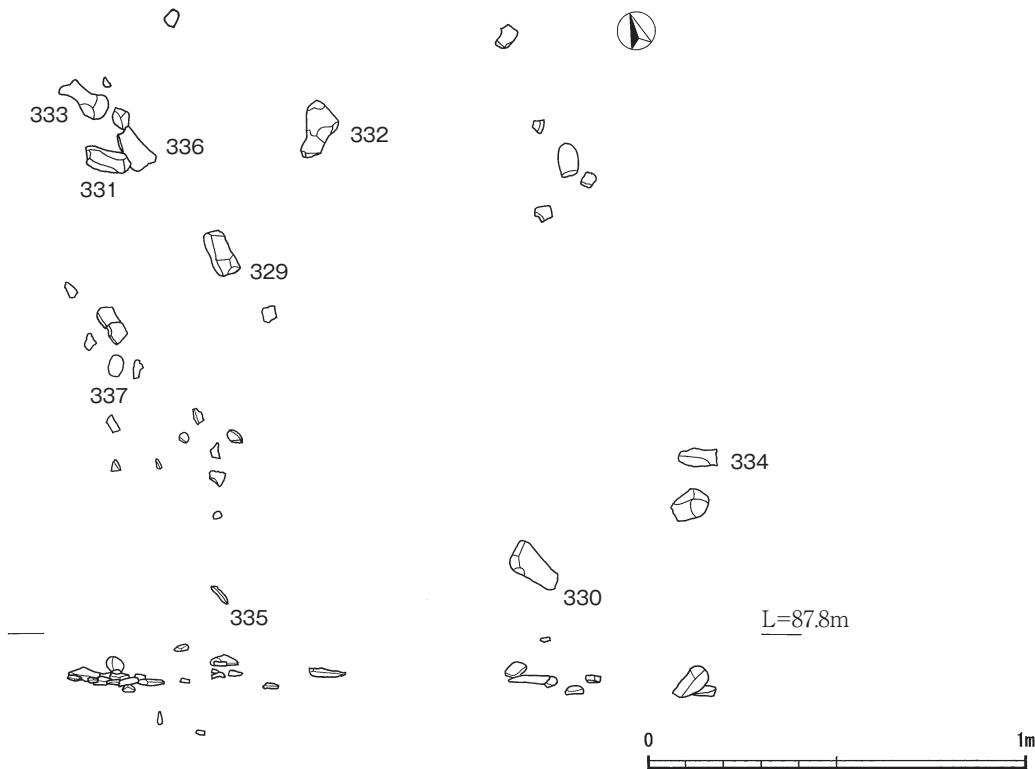
329 はホルンフェルス製の打製石斧で、横長の剥片を素材とし、周縁からの平坦剥離によって整形されている。背面の刃部に接する部分に自然面が残り、平面形は短冊形であるが、刃部側がわずかに幅広となる。331 も短冊形の打製石斧である。横長のホルンフェルス剥片に周縁からの平坦剥離によって整形される。背面上部付近に摩耗がみられることから、上辺が刃部となっていた可能性がある。330・332 はいずれも刃部の幅に比して、基部が幅狭となる撥形に類する打製石斧で、刃部が器軸に対して斜行する偏刃の打製石斧である。330 は風化した器面が黄褐色を呈するホルンフェルス製、332 は灰褐色を呈するホルンフェルス製としたが、こちらも変性を受けている

可能性がある。333 は刃部に対し細く括れた基部をもつ撥形に類する打製石斧である。ホルンフェルス製で背面側の稜上に摩耗を認める。

334 は薄い板状のホルンフェルス剥片で、右側面は折れ面である。縁辺の剥離により下縁部が鋸歯状を呈することからスクレイパーとしたが使用の痕跡は明確ではない。335 はやや厚みのあるホルンフェルスの剥片で調整剥離は不規則であるが、表裏面にわずかに摩耗を認める。

337 は安山岩の扁平な円礫である。表裏面とも面上に摩耗・磨面は認められないが、側縁下端部にわずかに敲打によるつぶれ状の痕跡を認める。

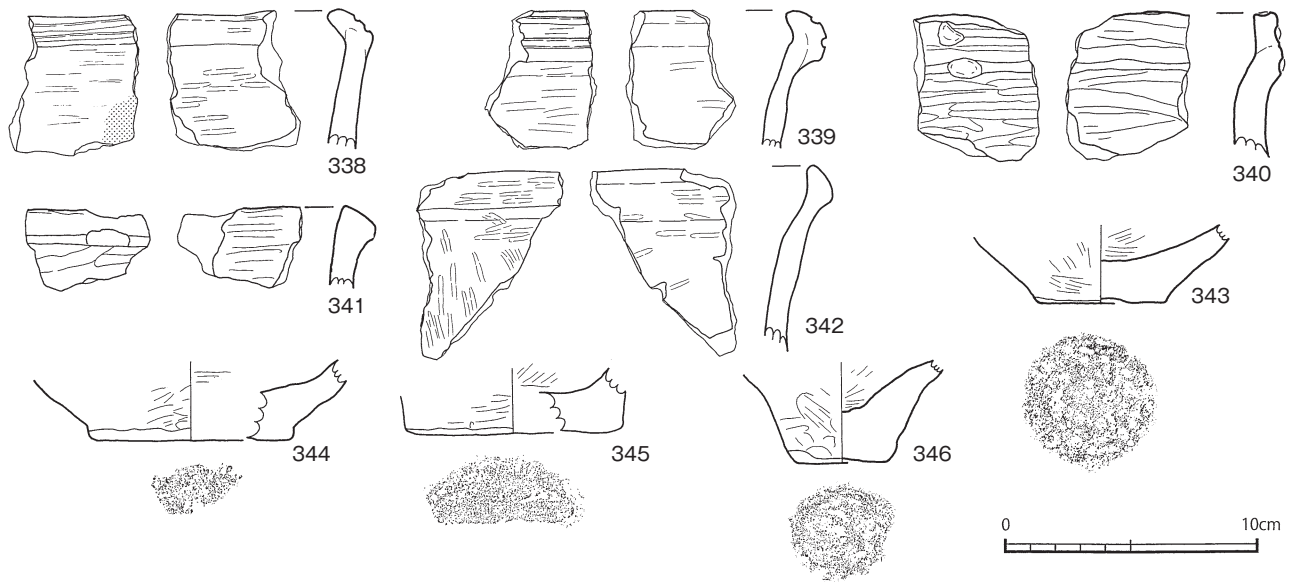
土器は 17 点出土したが、小片は除き 9 点を図化した。338~342 は深鉢の口縁部、343~346 は深鉢の底部である。口縁部、底部ともに様々な形状がみられる。338 は口縁部が内湾する。339 は口縁部が外反しており、内面には緩やかな段が見られる。340 は口縁部が直立しており、口唇部は平らに整えられている。また、外面の 2 条の沈線内には、それぞれに楕円形状の小さな貼り付けが見られる。341 は肥厚した口唇部をやや外反気味に貼り付けており、内面は稜が明確である。342 は外反した口縁部にほぼ直立気味に断面が三角形状の口唇部を貼り付けている。底部はすべて平底であるが、底面の広さや形状がそれぞれ異なっており、若干上げ底となるものも見られる。



第 83 図 遺物集中域 1



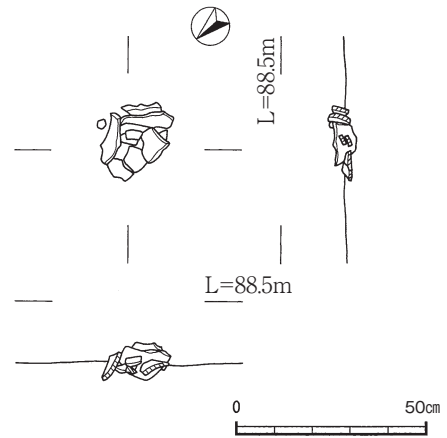
第 84 図 遺物集中域 1 出土石器



第 85 図 遺物集中域 1 出土土器

(6) 遺物集中域 2 (第 86 図 347)

H-1 区のⅢ層で検出した。遺物は、20cm×18cmの範囲で、深さ 11cm にまとまって重なるように出土した。土器片の総数は 10 点であった。小片の土器が多かったので、ここでは接合できた 1 点のみ図化した。347 は器壁の厚さが一定せず、器面は内外面共に若干の凹凸が見られる。また両面共に横及び斜め方向のナデによる調整が見られる。胎土に雲母を多量に含んでいるのが特徴である。



第 86 図 遺物集中域 2・出土土器

2 遺物

(1) 土器 (第 87~94 図 348~505)

縄文時代後期及び晩期に相当する土器には多くの種類が見られる。以下、分類に従って概略を述べる。

4 類土器 (第 87 図 348~354)

深鉢で、外面の口縁部下部あるいは胴部にかけて沈線を付す土器の一群である。

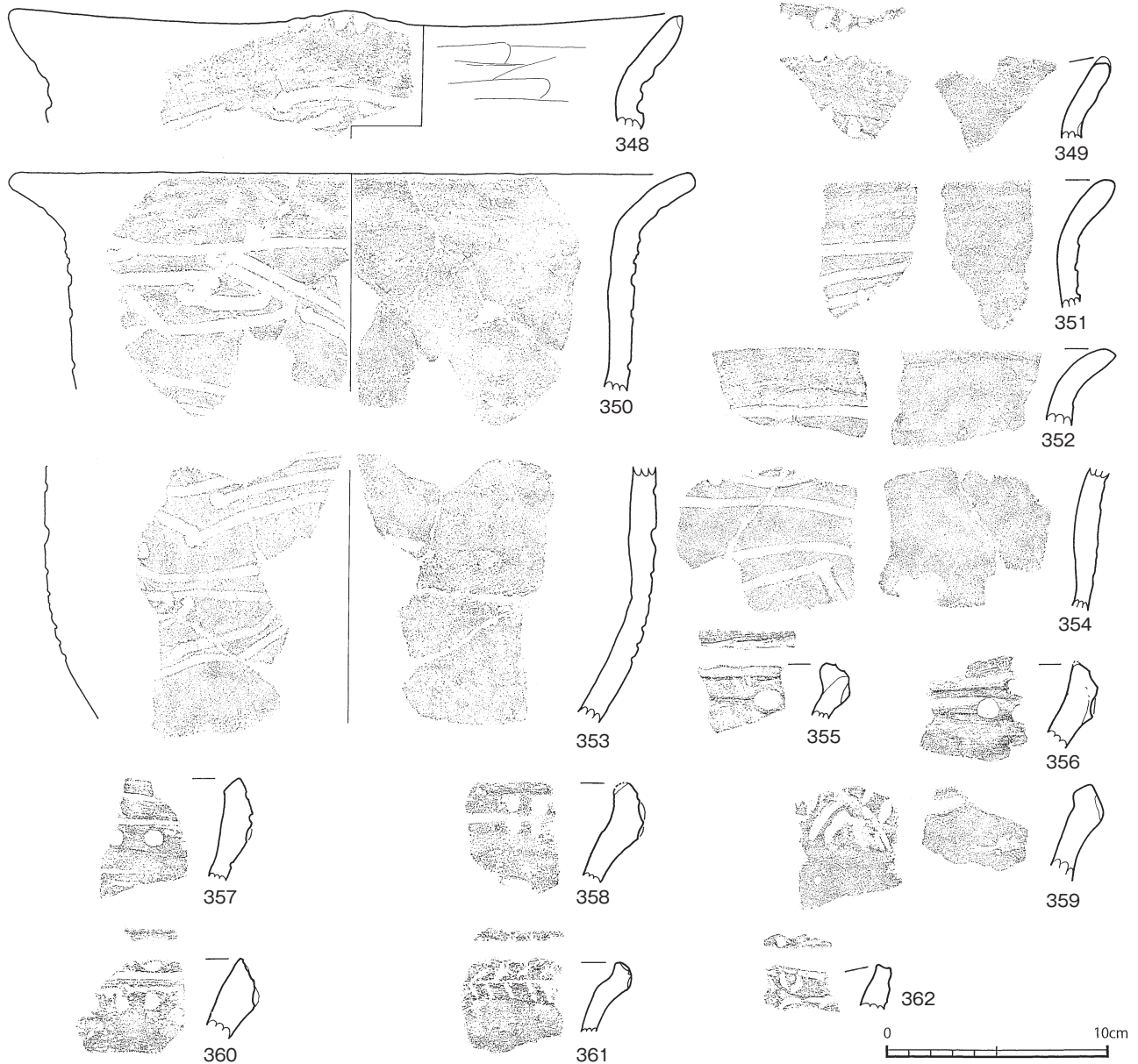
348 は口縁部が波状となるものであり、波状口縁の先端には 4 か所に刻みが付される。口縁部下部には鉤手状の繋ぎ文が付されている。350 は、ほぼ直立する胴部であるが、口縁部はラッパ状に開く形状である。屈曲部より下部に横及び斜め方向に太めの凹線が施される。353 も同じような文様構成である。

349 は 348 と同様な波状口縁で先端には 2 か所に刻みが付される。351 は外反する口縁部の下部に、3 条の沈線が施され、352 は 1 条の沈線が口縁部とほぼ平行に付されている。

353 と 354 は胴部に沈線が描かれているものであるが、そのうち 353 は横～斜め方向に鉤手状の繋ぎ文などが広い部分に描かれている。また、354 は緩やかな曲線の下方に、直線が向きを大きく変えて描かれている。

5 類土器 (第 87~93 図 355~498)

深鉢は胴部から口縁部にかけて全体的に外反し、口縁部は肥厚する。そして、その肥厚した口唇部は平坦部を作出されたものが多く、口縁部の内面に明瞭な段を有するものもある。口縁部に沈線が巡るものや刺突文・凹点が施さ



第 87 図 縄文後・晩期の土器 1

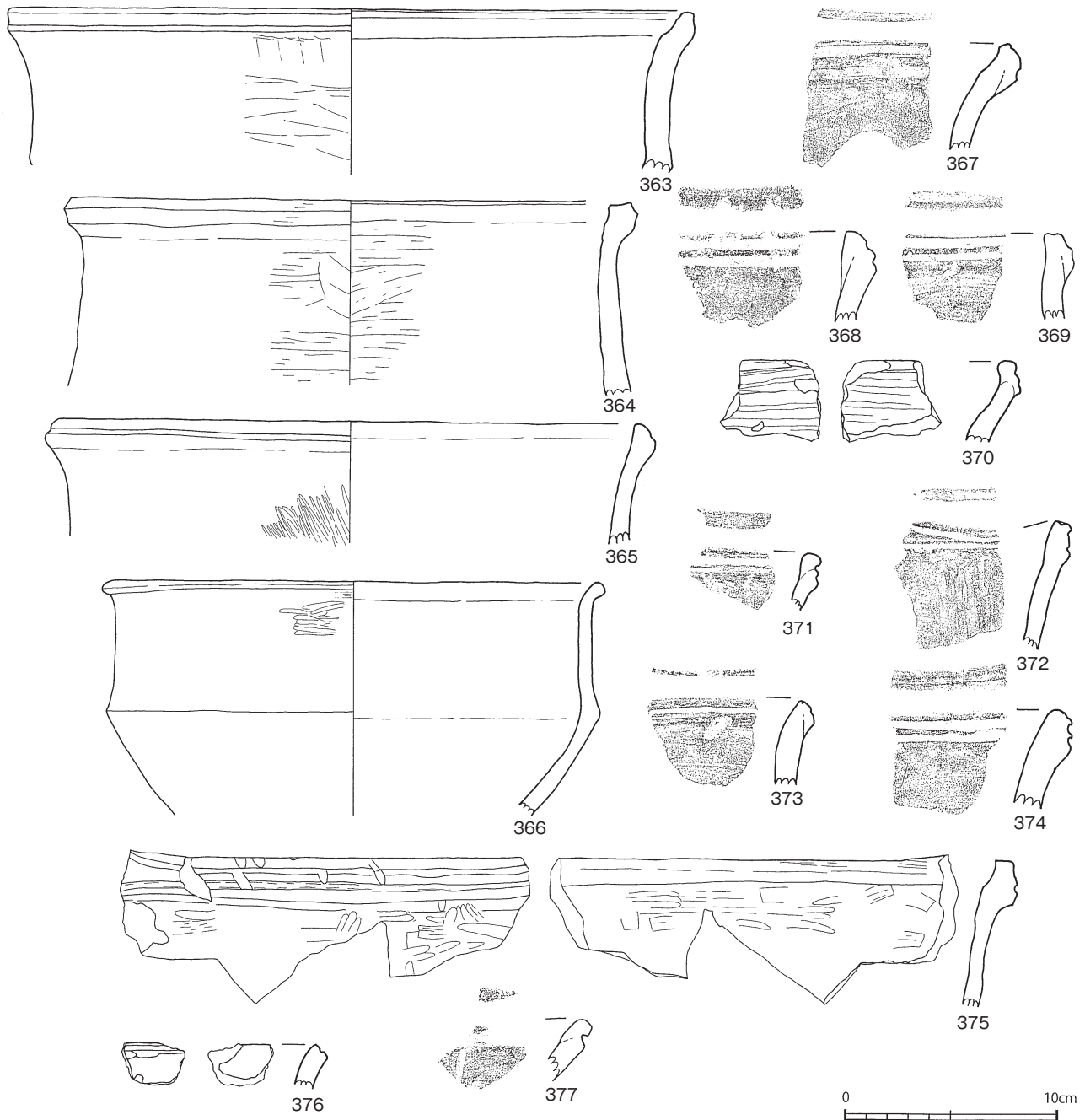
れるものもある。胴部は張り、胴部の上部に沈線が付されるものもある。底部は平底のほか、上げ底も見られる。浅鉢も口縁部は外反し、胴部が張り、底部は平底である。

355～414 は口縁部である。そのうち、355～362 は刺突文や凹点のあるものである。355～358, 360 は沈線が付された上下に凹点が見られる。凹点の位置や大きさ、数などに差異がある。359, 361, 362 は斜め方向を主とした刻みが付されるものである。361 が細い沈線の上下に向きを違えた刻みが付されているのに対して、359 や 362 は方向に規則性がなく、何らかの表現を意図している可能性も考えられる。

363～377 (364・366 を除く) は文様として沈線が巡る

ものである。沈線は1条が多く見られるが、2条の沈線も見られる。口縁部の形状にも、直立 (363 など)、内湾 (370 など)、外反 (373 など) ともに見られる。

363 は外反する口縁部で、外面には幅の広い1条の沈線が巡り、367 は幅の狭い2条の沈線が巡る。いずれも内面には段が見られる。364 は口唇部が凹状に面取りされていることから、断面形状は四角形に近いといえる。365 は断面三角形で、中ほどを細い沈線が巡る。368 も断面が三角形を呈するが、沈線は2条である。369 は口唇部を平らに調整する。370 は口縁部が内湾して内面に段を有し、2条の沈線が付される。371 は直立した口縁部に幅の異なる2条の沈線が施される。372 は幾分外反



第 88 図 縄文後・晩期の土器 2

した口縁部に2条の沈線が施されるが、平行とはなっていない。373と374は口縁部が外反する。375は口唇部が平らに面取りされ、2条の沈線は平行な部分とそうでない部分とが見られる。376は口唇部に1条の沈線が見られる。

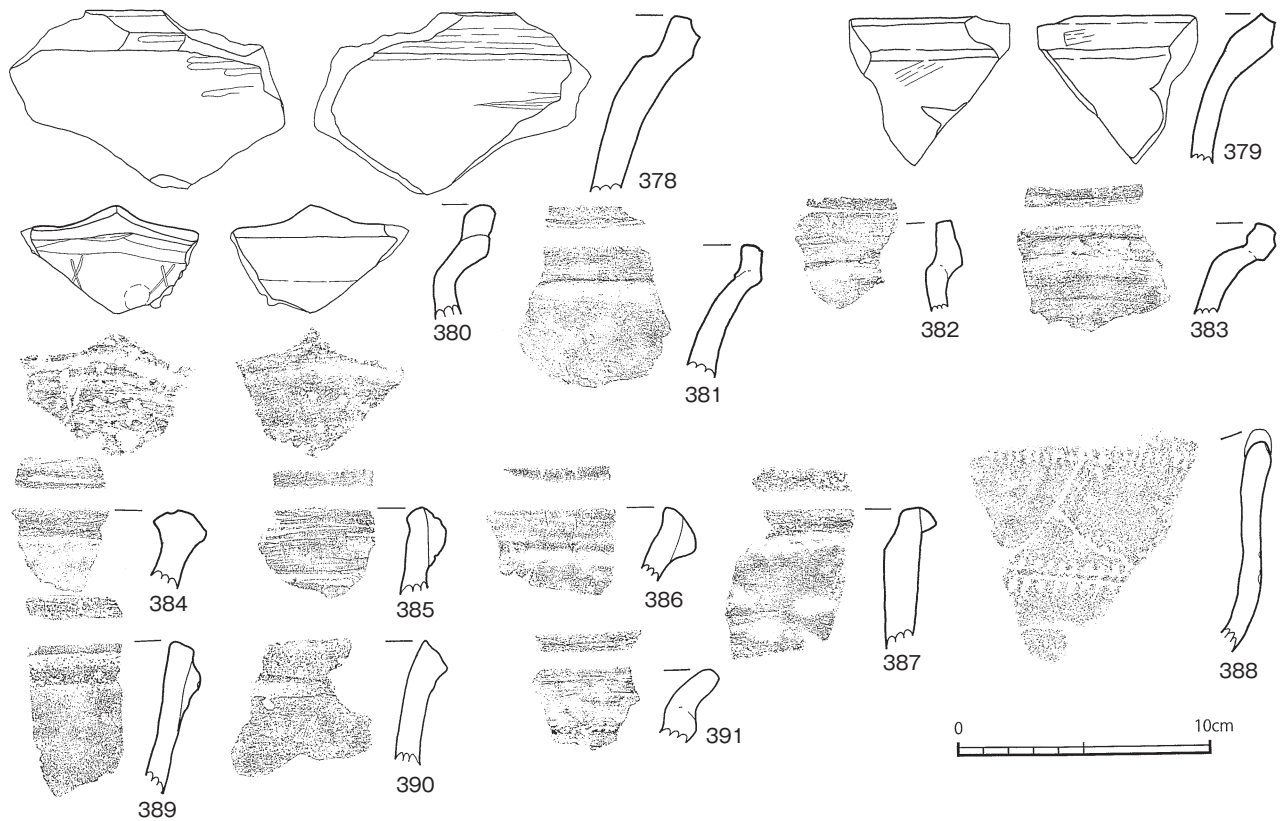
378～391は無文のものである。378は口唇部が平らに整えられ、内面には段を有する。口縁部はほぼ直立している。379の口縁部は外反する。380は内面に段を有するもので、波状の口縁部である。直立した口縁部の下部には×のような印が2か所に見られる。381～387のように、口縁部の向きや断面形状もさまざまである。

388は小型の土器である。形や文様などから5類の中を含めた。口縁部はほんのわずかに外反し、口唇部には突起が見られる。口縁部に短めの刻みが施されるほか、胴部にも1条の沈線とともに左下がり方向の刻みが見られる。胴部はそれほど張らず、緩やかに底部へと向かっている。

392～404を5類に含めたのは、器形や文様などからこれらとほぼ同様な時期の土器群と考えたからである。392は断面形が三角形を呈する口縁部がほぼ直立しており、2条の沈線が付され、内面には段を有する。胴部にも1条の沈線が巡っていることから、この沈線の下部に胴部最大径の部分があると考えられる。器面調整は内外面ともに横～斜め方向のナデ調整が行われ、外面の胴部の沈線から上部は縦方向のミガキ調整が見られる。393は口唇部を平坦部を作り出し、口縁部には2条の沈線が

施される。内面には段が見られる。器面調整は、内外面ともに横～斜め方向のミガキ調整が行われている。394は断面が三角形の直立した口縁部には2条の沈線が巡っており、内面には段を有する。395は全体的に直立した口縁部には2条の沈線が施されており、口唇部は狭く平らに面取りされている。内面には段は見られない。396は幾分外反気味の幅の広い口縁部に、斜め方向の2条の沈線が施されている。399は端部が外反した口縁部で、3条の細い沈線が付されている。396のほとんど直立した口縁部には3条の沈線が斜め方向に付されている。397は直立気味の口縁部に3条の沈線が、ほぼ平行になるように整然と施されている。398は外反した口縁部に2条の沈線が施されており、内面には明瞭な段が見られる。401は平らに面取りされた口唇部に沈線が見られる。口縁部の断面形状はほぼ四角形で、内面には明瞭でない段が見られる。402と403は口縁部全体の形状が類似している。402が若干長く、断面も厚い。いずれにも、内面に緩やかな段が見られる。口唇部の形状は若干異なっている。404は面取りした口唇部に沈線が施されており、401と類似するが、口縁部内面の段が明瞭で、胴部に向かうカーブが大きいことが要因と考えられる。

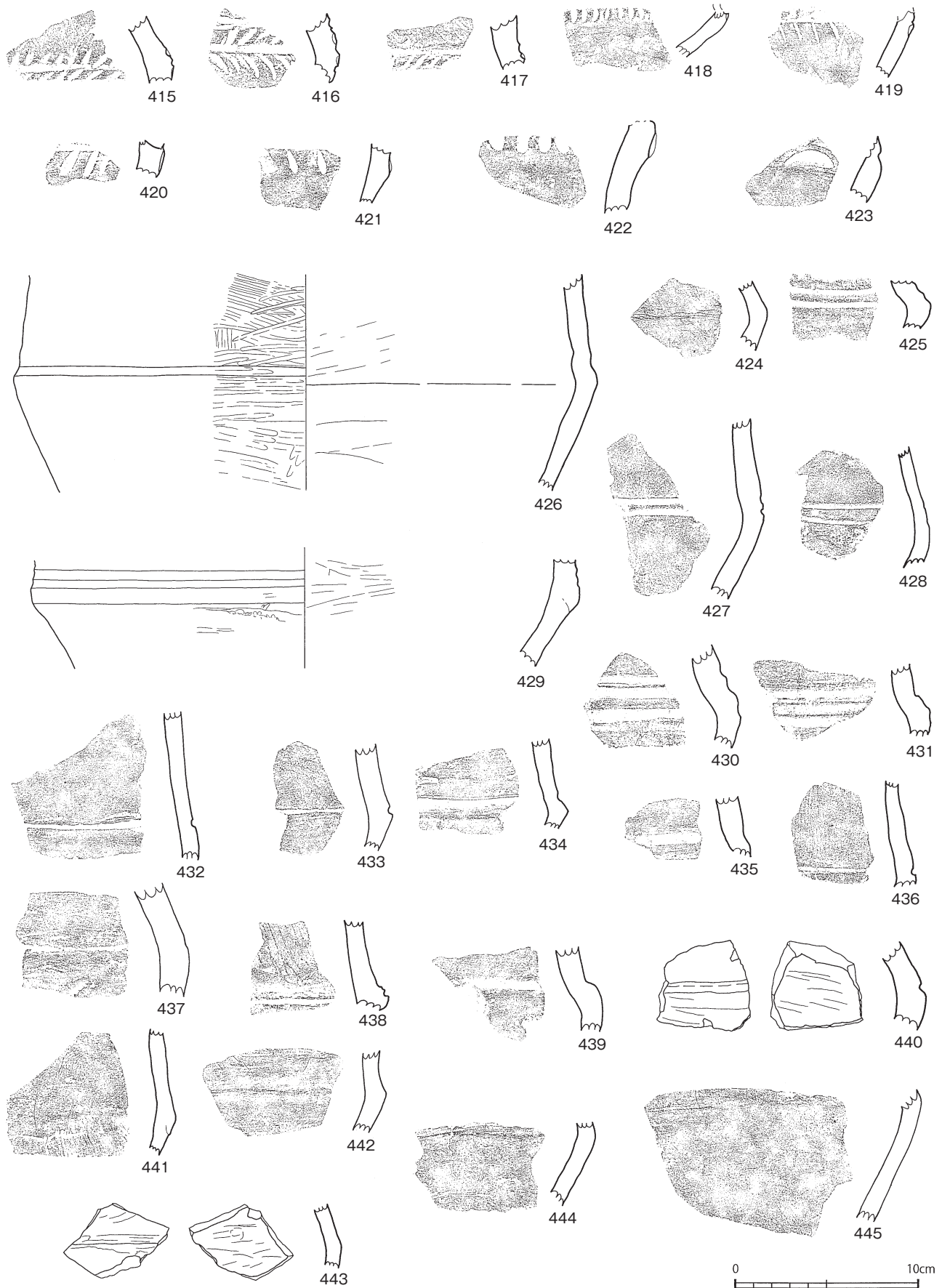
399～414は5類と同時期と考えられる外反する口縁部である。405は口唇部が丸く整えられており、口縁部の下部に1条の細い沈線が巡っているほか、胴部の上部にはそれよりも太い沈線が巡っている。断面には輪積み



第 89 図 縄文後・晩期の土器 3



第90図 縄文後・晩期の土器4



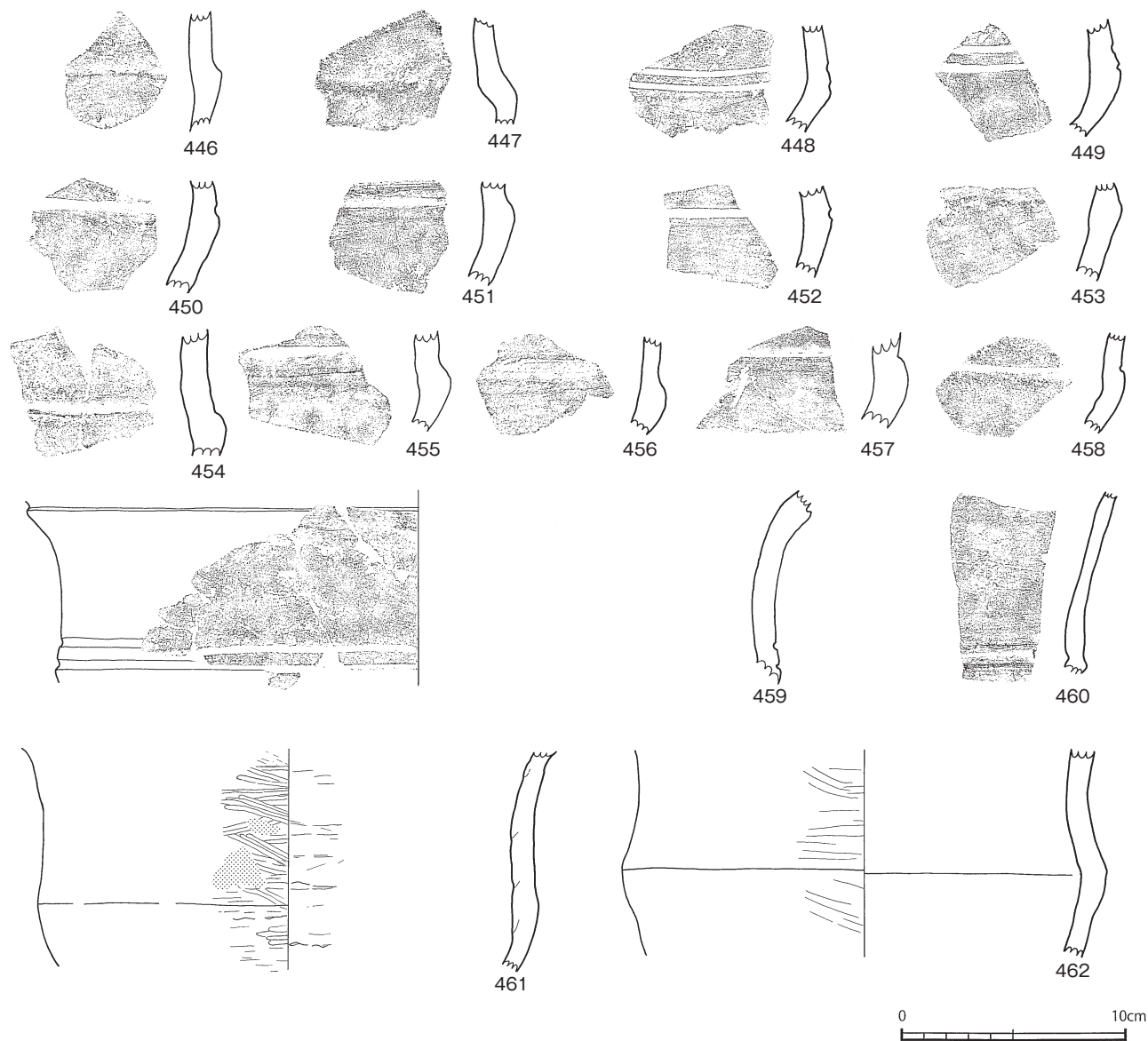
第91図 縄文後・晩期の土器5

痕が明瞭に残っている。器面調整は横方向のミガキ調整であるが、ナデ調整も見られる。406は口唇部がやや波打ったようになっている。409は口唇部を斜めに整えた結果、外面には稜が残る形となった。410は口唇部を丸く整えている。407は口縁部の内面をまっすぐに整えた結果、頂部には稜が残っている。408は口唇端部が外反する。ハケ目調整が見られる。411は410に類似している。412は口縁部の断面形状が四角形で、内面には明瞭ではないものの段が見られる。414は口唇部に1条の沈線が施されている。

415～462(422を除く)は胴部である。そのうち415～423は、刺突文及び凹点の文様が施されたものである。415は胴部の屈曲部付近と考えられるところに巡らされている1条の沈線の上下に、左下がりの刻みが施されている。416は沈線の上下で向きの異なる斜め方向の刻みが施される。417は胴部の屈曲部よりやや上部に巡って

いる沈線の下部に、左下がりの刻みが見られる。418は屈曲部付近に、縦方向の短い刻みが見られる。419は屈曲部付近の1条の沈線より下部に右下がりの刻みが付されている。420は屈曲部付近の沈線の下部に、左下がりのやや長目の刻み、421は屈曲部付近から上部にかけて右下がりのやや長目の刻みがそれぞれ施されている。422には凹点状の刻みが見られ、423は屈曲部付近に半月形の上向きの大きな凹点が刻まれている。

424～445は胴部の屈曲部から上部が内湾するもので、そのうち426～435は沈線のあるもの、442～445は沈線の見られないものである。426は屈曲部の上部に1条の沈線が巡っている。424には極めて細い沈線が見られる。425、427～429は2条の沈線が巡るものである。その中で、428は断面に整えられた痕跡があり、円盤状土製加工品(いわゆるメンコ)の可能性も考えられる。430は3条、431は太い2条の沈線である。432～434、436～



第92図 縄文後・晩期の土器6

438 は 1 条の沈線, 440 は太い沈線である。439・441～445 には沈線は見られない。

448～458 は直立するものである。沈線のあるものは, 448, 449 が 2 条, 450, 452, 458 が 1 条あり, それ以外は沈線が見られないものである。459 は外反するもので, 2 条

の沈線が巡るもの, 460～462 は沈線のないものである。459 は口縁部と考えられる部分に 1 条の沈線も見られる。胴部の屈曲部付近の 2 条の沈線は幅が広い。462 は 461 と比較すると, 胴部が張り屈曲により稜が確認できる。

463～498 は後期の土器である。463～484 は口縁部を

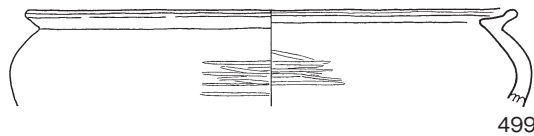


第 93 図 縄文後・晩期の土器 7

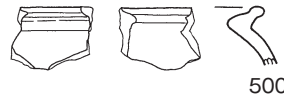
含む胴部, 485, 486 は胴部片, 487~498 は底部である。口縁部及び胴部は, 小片の土器が多く, 傾きに関しては, 正確性にやや欠ける恐れもある。口唇部に平坦面をもち, 土器によっては, 平坦部に沈線を意識した凹みを巡らせるものが多い。また, 口縁部に1条もしくは2条の沈線を巡らせるタイプ, 口縁部近くに屈曲部をもつタイプが多いのが特色である。底部の資料も胴部の形状がわかるものが少ない。487, 488 は小型の鉢, 489 は若干上げ底の底部である。490~498 はいずれも底部であるが, 小片のため全体の器形は不明である。

6類土器 (第94図 499・500)

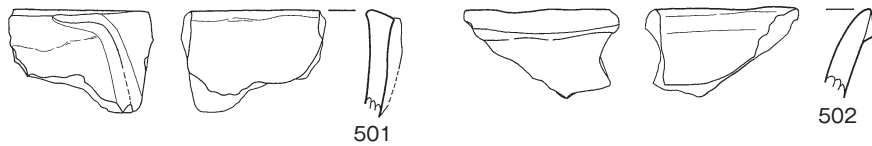
499 と 500 が該当する。いずれも晩期の浅鉢である。器壁が薄く, 胴部が大きく張り出している。口縁部は短く, 口唇部近くの内面に沈線を施すことで, 玉縁状になることを意識している。



499

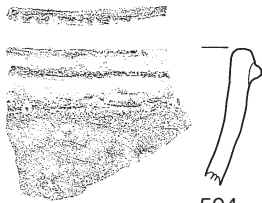


500

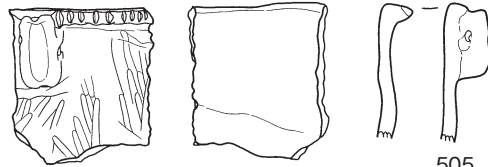


501

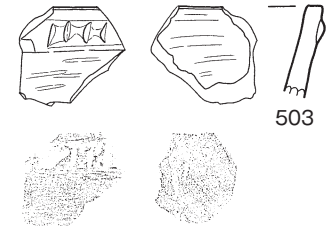
502



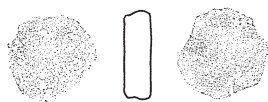
504



505



503



506



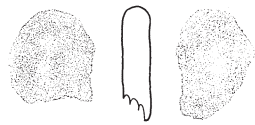
507



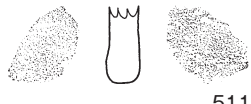
508



509



510



511



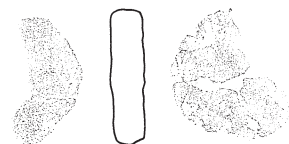
512



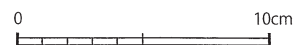
513



514



515



7類土器 (第94図 501~505)

501~505 は深鉢である。口縁部に突帯が付くタイプである。501 は口唇部に並行した突帯が途中から胴部に縦に付されているが, この類とした。502, 504 は口唇部に近い外面に貼り付けられている。505 は刻み目のある突帯の一部に繭玉状の瘤を貼り付ける。瘤には, 焼成前の穿孔も観察できるが, 意図的なものか偶然かは判断できなかった。

(2) 円盤状土製加工品 (メンコ) (第94図 506~515)

土器片を円盤状に加工したものである。10点を図化した。ほかにも, 加工痕の観察される土器片2点もあったが, 明確ではなかったので掲載しなかった。欠損もあるので正確な全体形状は推測になるが, どれも形状はほぼ円形である。側面を磨った形跡, 特に角を磨り, 丸めた様子が伺える。厚さや大きさは様々である。

第94図 縄文後・晩期の土器8・土製加工品

第3節 弥生時代の調査

弥生時代の調査は、Ⅱ層を包含層とする遺物の調査と、Ⅲ層以下を検出面とする遺構の調査として行い、第1地点を主な調査区として実施した。

第1地点の調査は、当初、A～E-2～8区を対象とし、その後、F・G-2～8区、そしてD・G-9～12区の調査と、調査区を分割しながら行っていった。

調査の結果、弥生時代の竪穴住居跡2軒、掘立柱建物跡1棟、土坑や多数のピットなどが検出されたほか、弥生時代中期を中心として、土器や石器などが出土した。

竪穴住居跡は2軒とも、周囲よりも若干低い、調査区の南側に位置していた。また掘立柱建物跡1棟も同様な地形のところから検出されている。弥生時代の明確な土坑は1基のみで、住居や建物などよりも比較的高い場所から検出された。

2軒の竪穴住居跡については、検出面が低いことから、本来はまだ周囲に広がりがあった可能性も否定できない。

1 遺 構

(1) 竪穴住居跡 (第96～100図 516～531)

1号竪穴住居跡 (第96～99図 516～528・531)

D・E-5区のV層で検出された。東西2.44m、南北2.18mの規模で、北側が若干張り出すものの、全体としては隅丸方形の平面形を呈する住居跡で、検出面からの最大の深さは50cmであるが、約10cm程でベッド状の高まりが見られる部分もある。遺構内には4基のピットがあり、位置や間隔、深さなどから判断すると、これらは全て支柱穴と考えられる。中央部は一段下がっており、西側を除く3方向にベッド状の段が設けられている。ほぼ中央部に78cm×71cmの隅丸方形を呈し、深さ14cmの土坑があるが、焼土や赤化は見られないことから、炉の可能性は低いと思われる。

床面直上には床面を整えるためと考えられる暗褐色土主体のやや硬質な土が敷き詰められていた。中には直径が5cm前後のアカホヤのブロックが多く混在していた。

甕や壺、鉢などの大量の遺物が床面付近に広がって出土したが、床面直上よりもやや浮いた状態であったため、住居の廃棄に伴って遺棄されたものと考えられる。

埋土は、最下位は暗褐色粘質土で硬い。貼床と考えられる。その上位には、壁側に近い部分に黒褐色砂質土で、黄褐色のアカホヤの小ブロックが少量混じっている。最上部には比較的軟らかい黒色土があり、Ⅳ層と考えられ

る茶褐色粘質土が少量混在する。遺物は、特に最上部の黒色土中から大量に出土している。

1号住居跡から出土した遺物は多いが、ここでは主なものを掲載した。

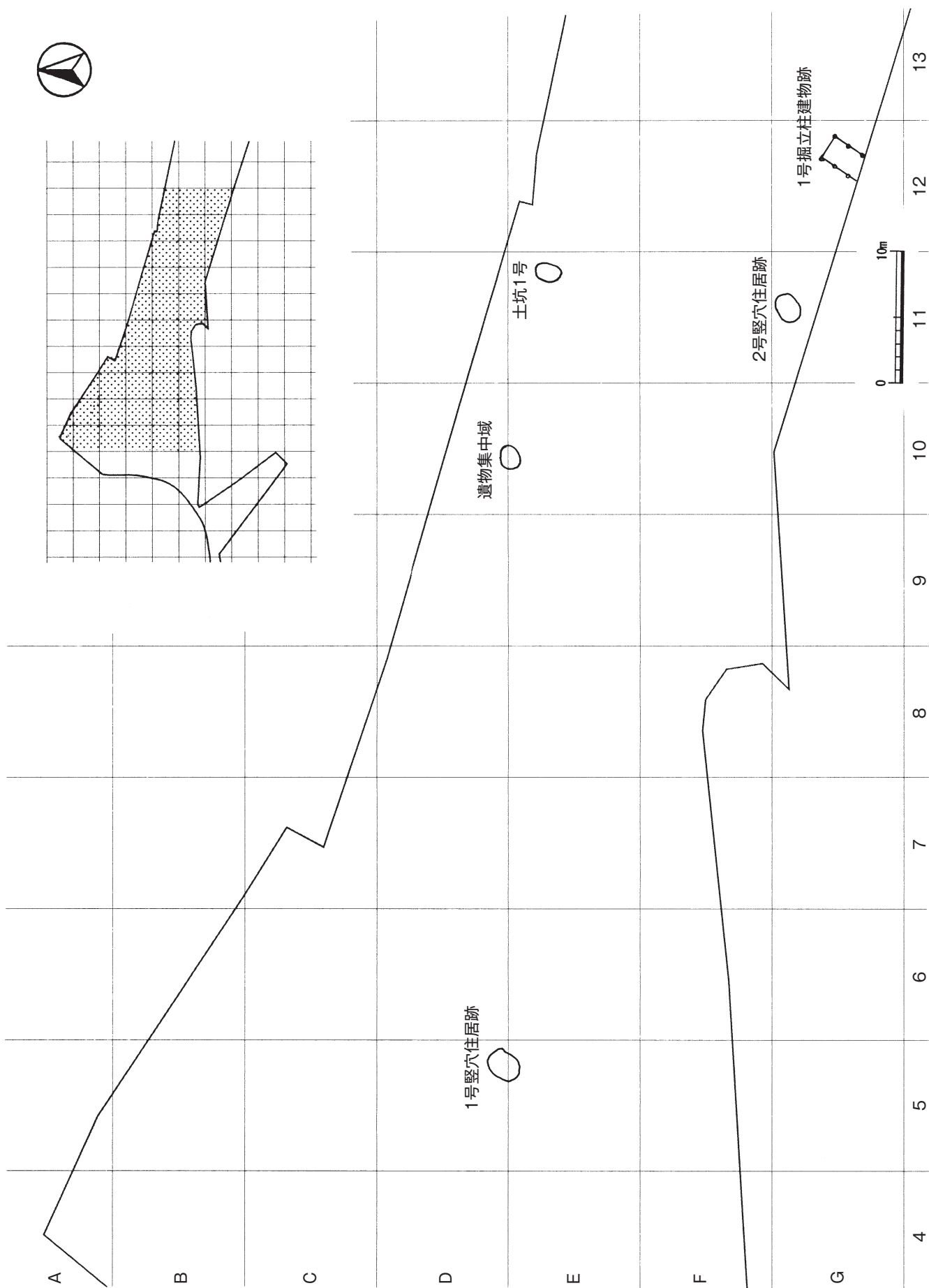
516～523は甕形土器である。いずれも口縁部は外反し、内面の稜は明確ではなく、滑らかとなっている。516は口唇部の下端がやや尖り気味となっており、胴部上部から底部へは急速にすぼまっている。517は口唇端部が丸味を帯びており、胴部上部から底部へは緩やかにすぼまって行く。518は口縁部が上向き気味にカーブしており、口唇端部は小さく丸められている。器面は、内外面ともに細かなハケ目調整によって整えられている。519の口縁部も518と同様に上向き気味にカーブしており、器面調整は、外面の口縁部付近を横方向のナデ、胴部は縦方向のナデ調整が行われ、内面も横～斜め方向のナデ調整である。520は口縁部の中央部が厚く作られており、口唇端部は小さく丸められている。521は全体的に器面の厚さが厚く、特に頸部から胴部にかけては著しく肥厚しているといえる。522は外反する口縁部で、内面のカーブは極めて緩やかである。523は胴部下半から底部にかけてである。底部は端部を欠いているが、底径は10cm程度と考えられる。

524は壺形土器の完形品である。口縁部は短く外反し、胴部最大径は頸部から3分の1ほどのところにある。底部は平底で、比較的安定している。断面の輪積み痕が明瞭である。器面調整は、外面が斜め方向のハケ目、内面はナデによって整えられており、内外面ともに部分的に指頭圧痕が残る。外反する口縁部をもつ短頸の壺である。

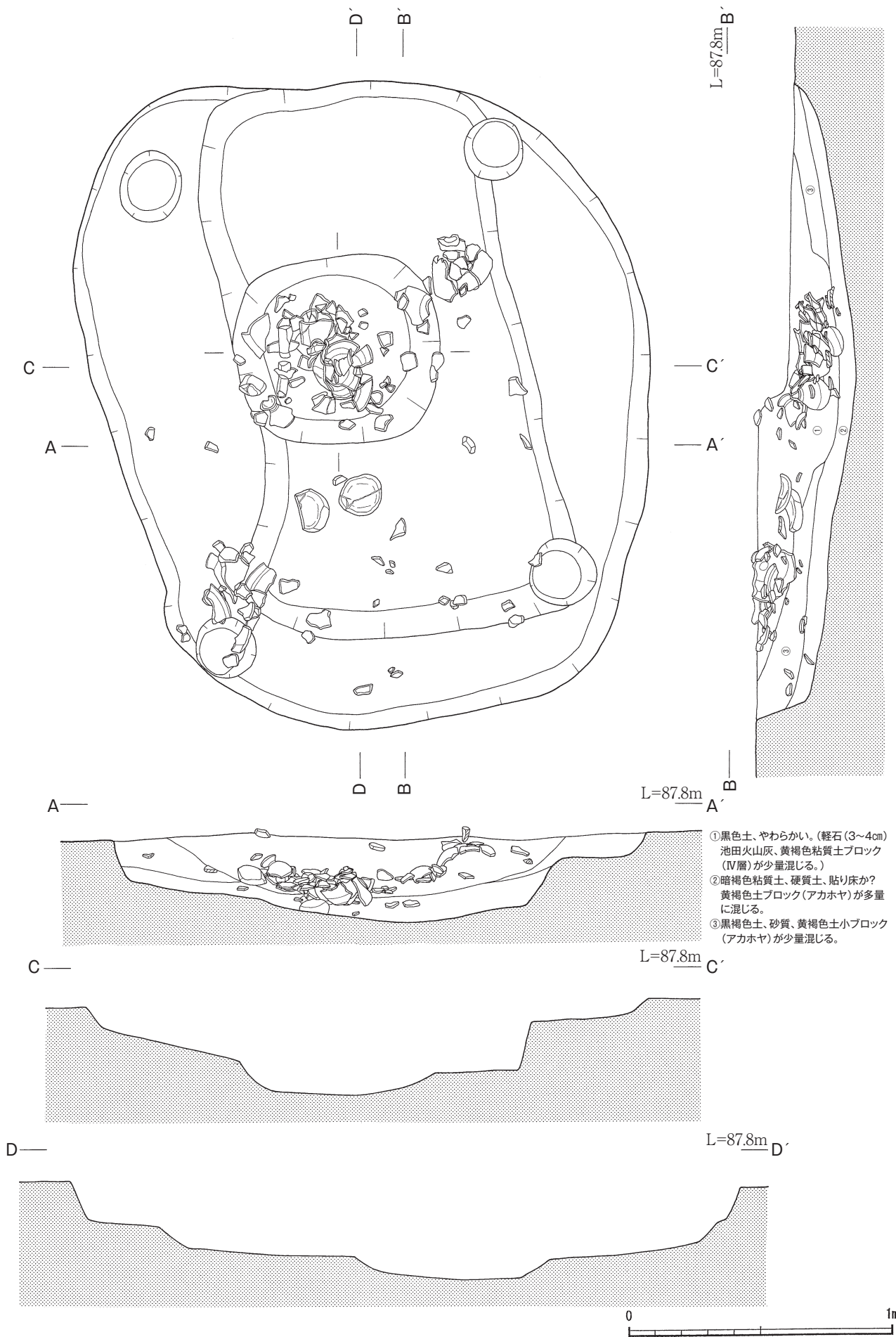
525～528は鉢形土器と考えられる。525は口縁部から胴部にかけての傾きが大きいことや、口径に対する器高が甕ほどは高くないことなどから鉢形土器とした。526は内湾する口縁部をもつ鉢で、胴部は膨らむ。528は胴部から底部にかけての部分であるが、端部を欠くものの、底部がそれほど高くないと考えられることから鉢形土器と想定した。527は胴部から口縁部にかけて大きく開いている鉢である。底部の脚台は低く、端部は外側に大きく踏ん張っている。

これらの土器は、主に甕形土器の形状などから、弥生時代後期末の中津野式と考えられる。

また、石器を1点図化した。531は砥石で、広い2面のほか、側縁と、割れた面も砥面として使用している。石材は軟らかい砂岩を利用している。

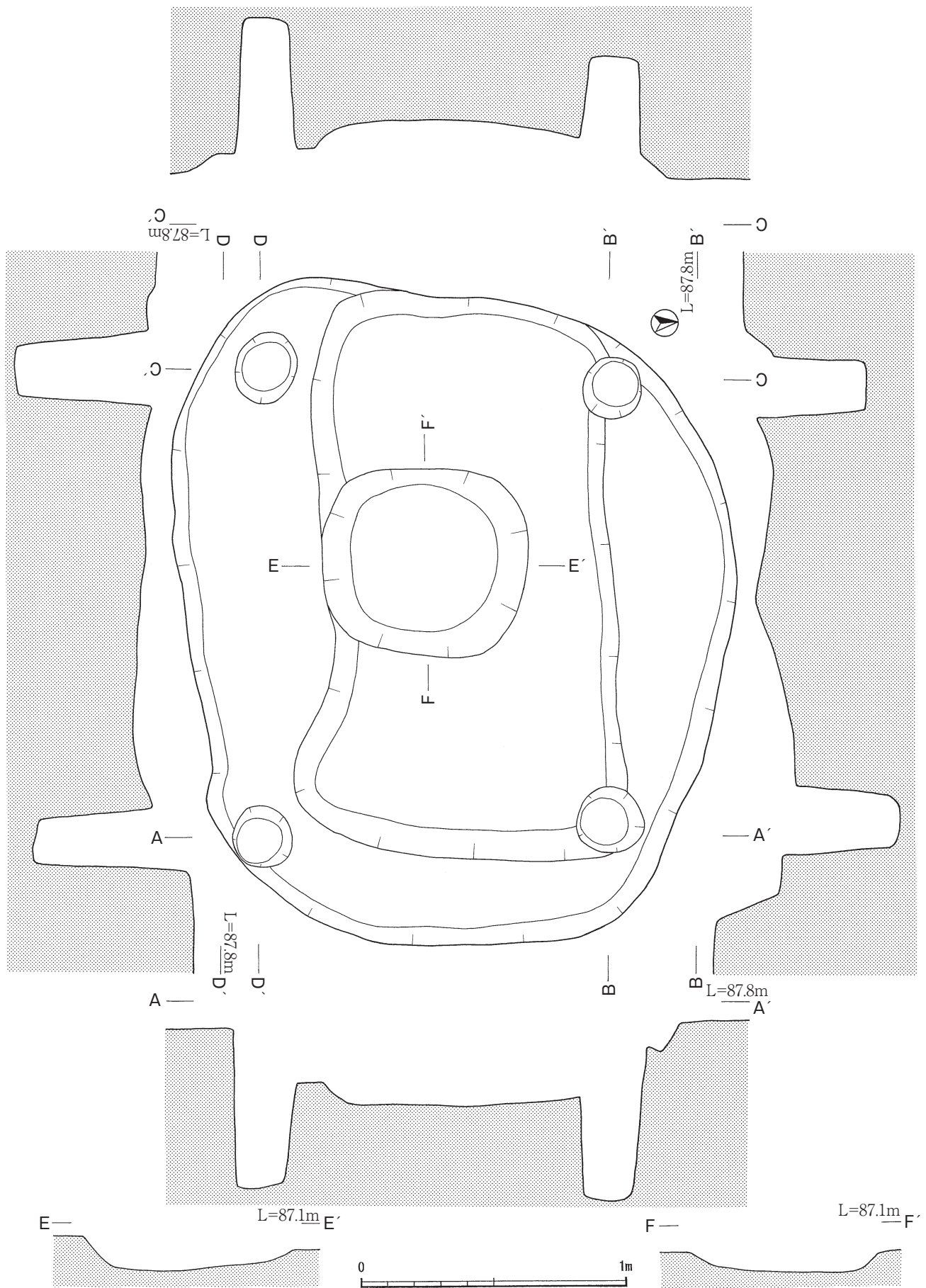


第 95 图 弥生時代遺構位置图

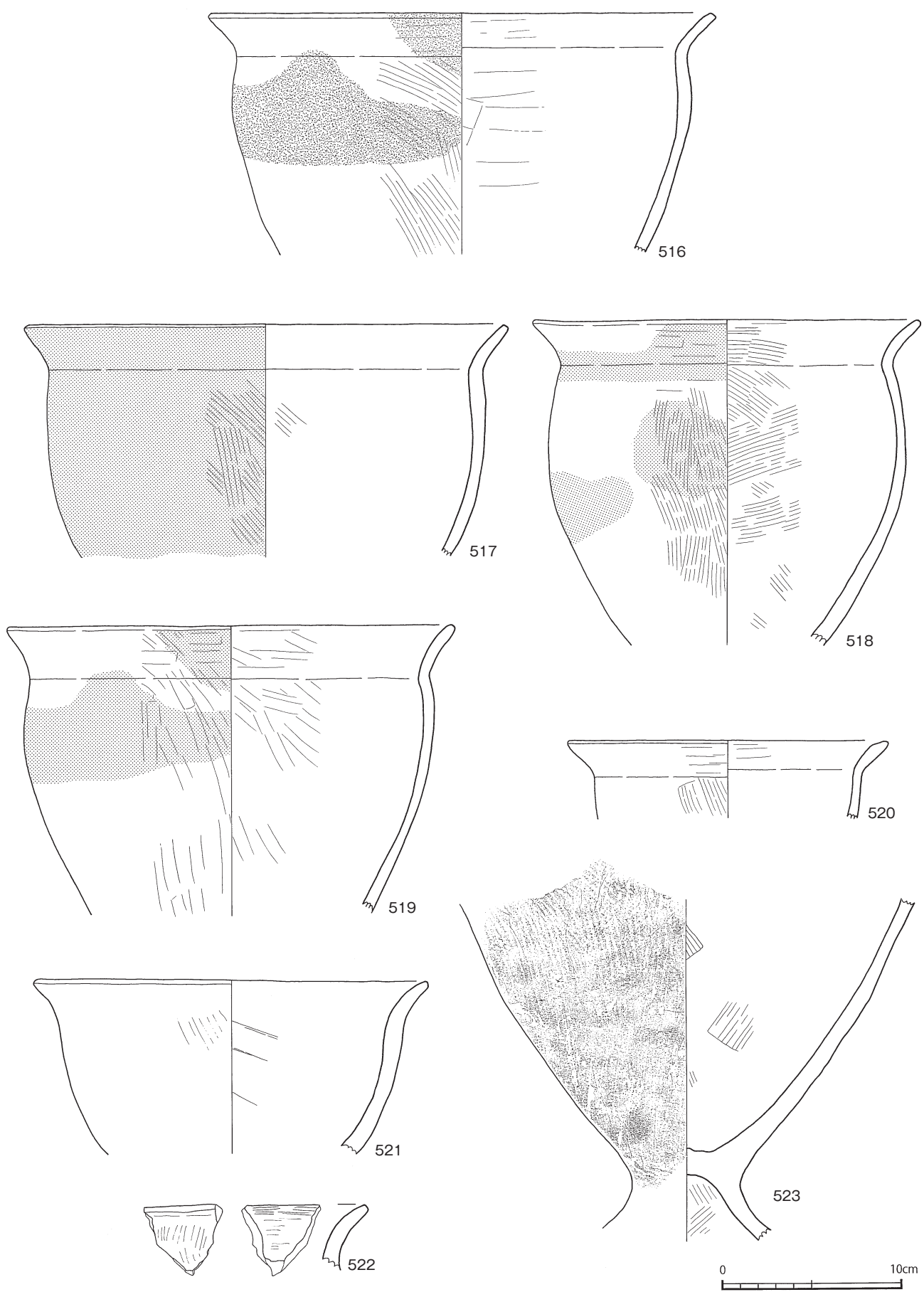


- ① 黒色土、やわらかい。(軽石(3~4cm)池田火山灰、黄褐色粘質土ブロック(IV層)が少量混じる。)
- ② 暗褐色粘質土、硬質土、貼り床か? 黄褐色土ブロック(アカホヤ)が多量に混じる。
- ③ 黒褐色土、砂質、黄褐色土小ブロック(アカホヤ)が少量混じる。

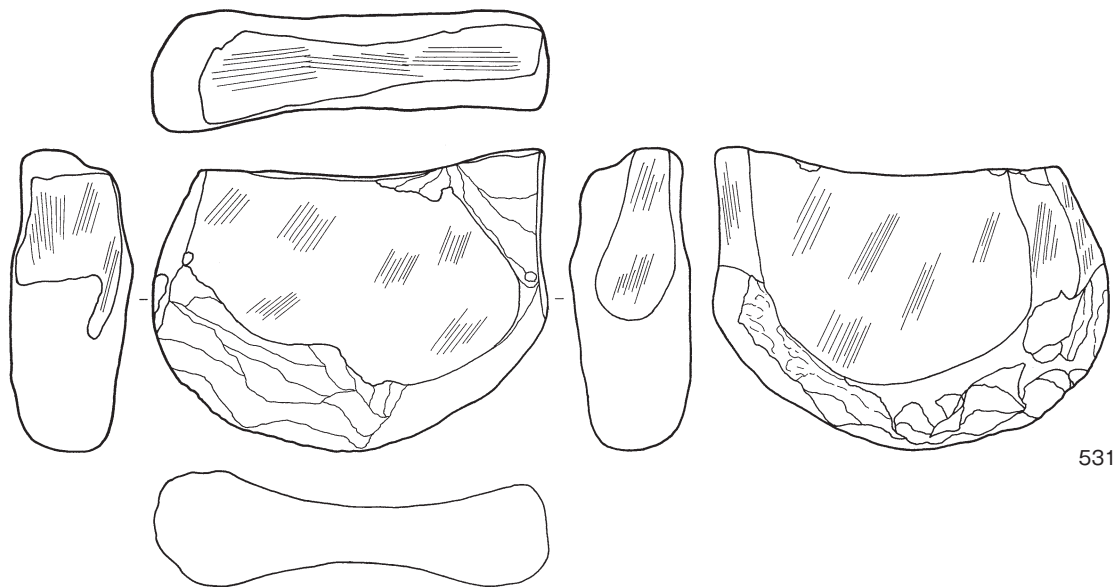
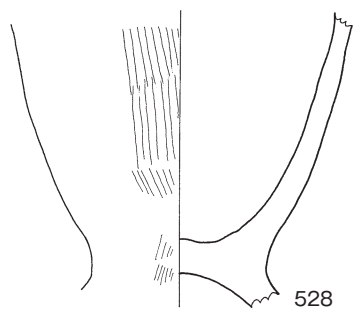
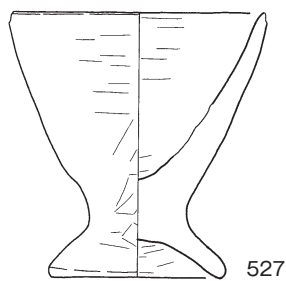
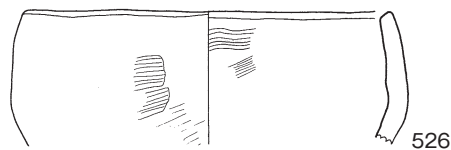
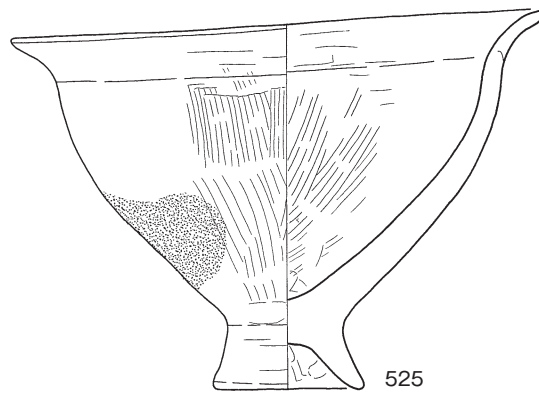
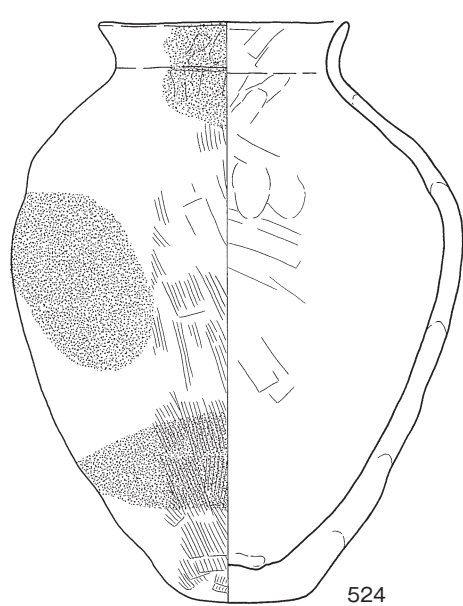
第 96 図 1 号 竪穴住居跡 1



第 97 图 1 号竖穴住居迹 2



第 98 图 1 号竖穴住居跡出土土器 1



第99图 1号·2号竖穴住居跡出土土器2·石器

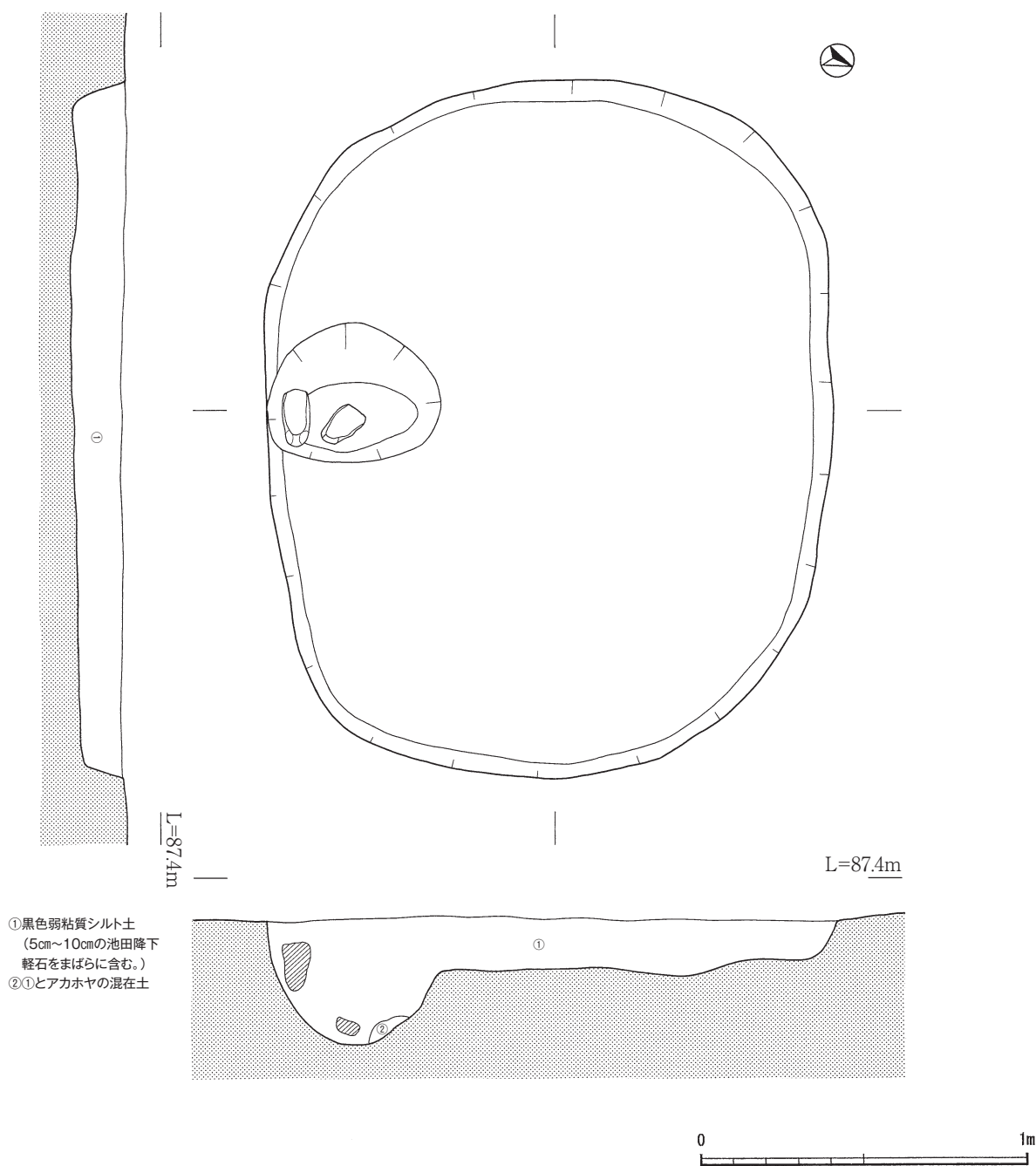
2号竖穴住居跡 (第 99・100 図 529・530)

G-11 区のIV層上面で検出された。長径 2.11 m、短径 1.74 mで、残存している深さは 15cmであるが、本来の堀方上面はもっと上部にあったと考えられる。北東-南西方向を主軸とし、内部には南側のほぼ中央部に 54cm × 43cm、深さ 26cmの略円形の土坑が見られるほかは、住居跡の内外にはピットは見られない。(N 65° E)

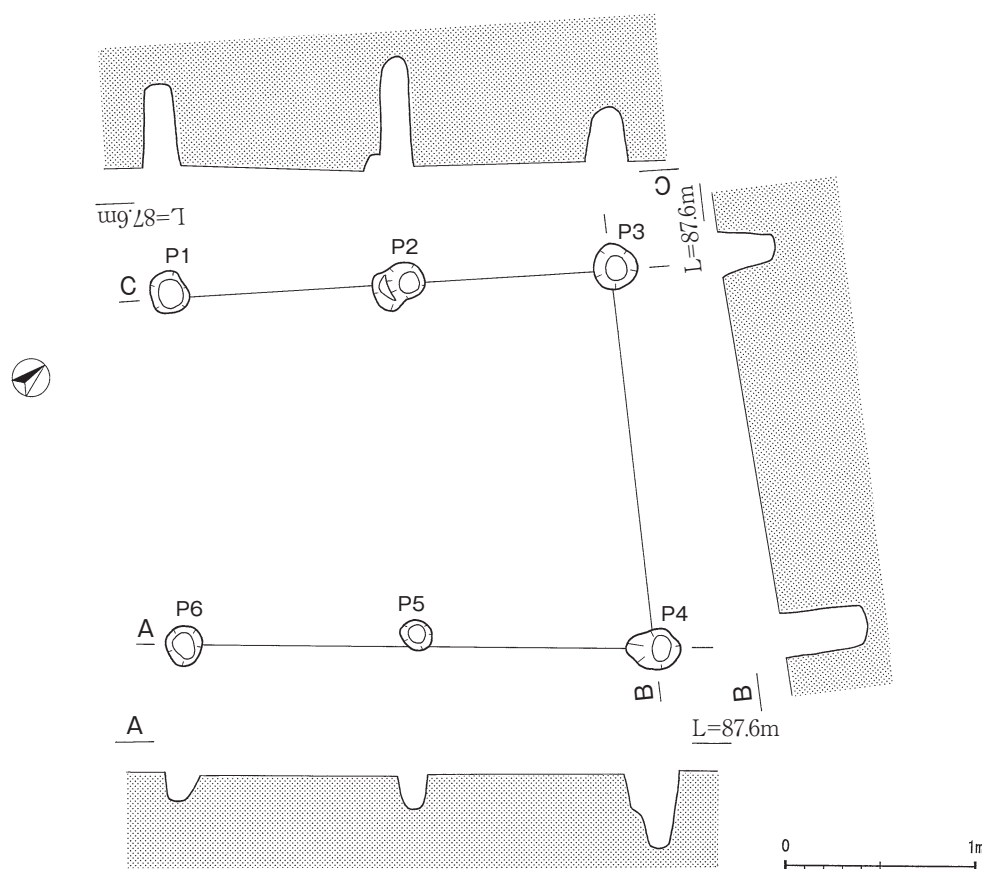
埋土は分層できず、黒色弱粘質シルト土で、5~10mm

の池田降下軽石とアカホヤのブロックを疎らに含んでいるもののみであった。

遺物は、土坑内から土器片 2点と礫が 2点出土した。土器片のうち 530 は壺形土器で、肩部に付された三角突帯が 2条残存している。礫の 1点はほぼ床着、1点は土坑中位の壁際にやや浮いた状態で出土した。注意深く観察したが、使用した痕跡は見当たらなかった。



第 100 図 2号竖穴住居跡



第101図 1号掘立柱建物跡

(2) 掘立柱建物跡 (第101図)

1号掘立柱建物跡

G-12区のV a層上面で検出された。6基の柱穴からなる。1間×2間分の検出であるが、柱穴が調査区域外に延びる可能性もある。柱筋は北側で広く、南側に向かっては狭まる傾向が見られる。建物は北東-南西方向に主軸を取っている。(N 36° E)

柱穴の深さはまちまちで、最も深いP 2が59cm、最も浅いP 6が15cmであり、その差は44cmある。そのほかの柱穴の深さはP 1が43cm、P 3が30cm、P 4が40cm、P 5が18cmであり、平均すると34.1cmとなる。二重の堀方を持つピットがP 2とP 4であり、これらはいずれも深く掘られたものであることから、抜き取り痕の可能性も考えられる。

いずれの柱穴内からも遺物は出土しなかった。

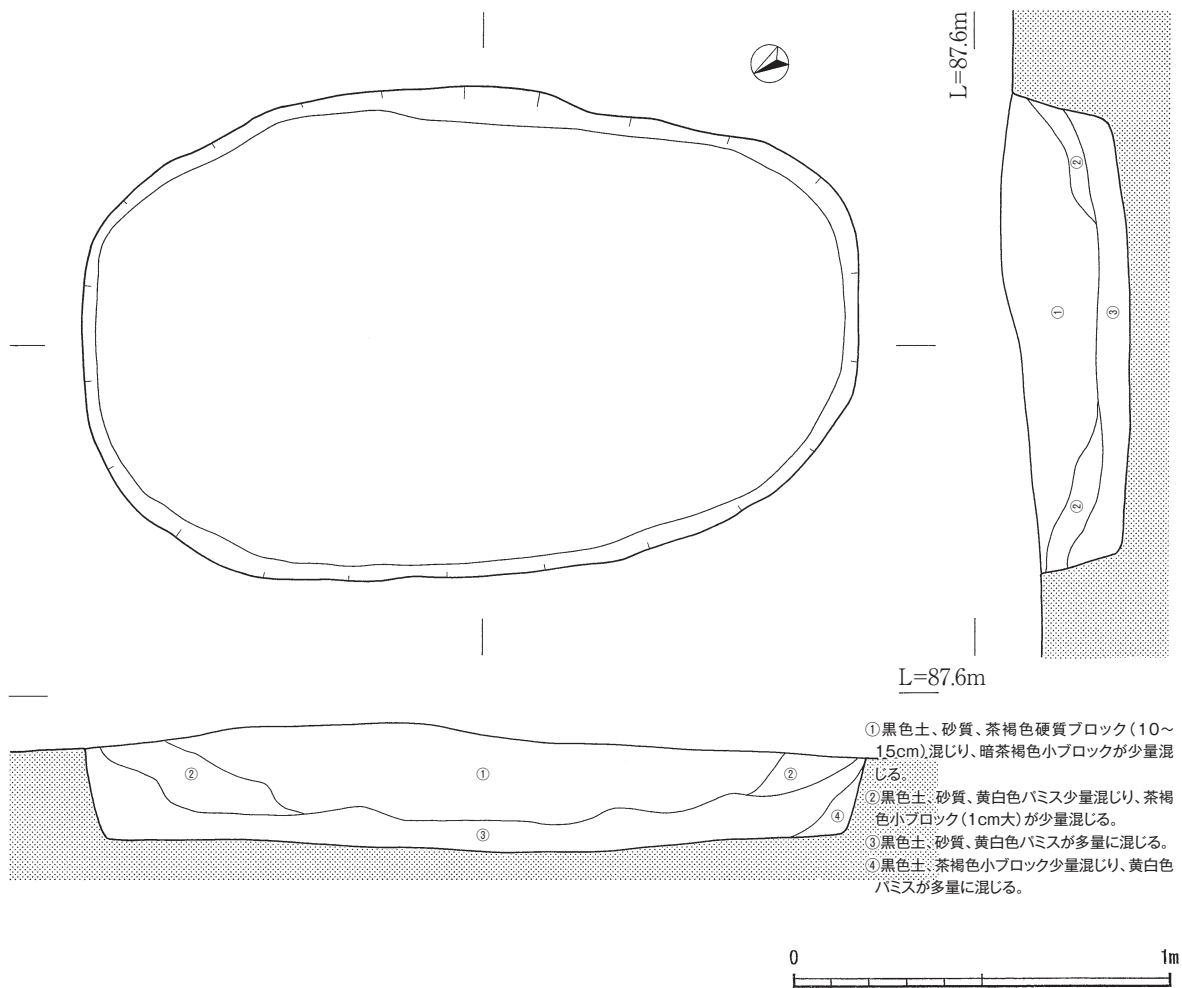
(3) 土坑 (第102図)

弥生土坑1号

E-11区のV a層上面で検出された。主軸方向はほぼ南北で、規模は南北2.06m、東西1.30m、残存している深さは32cmで、ほぼ楕円形を呈している。(N 30° E)

埋土は4層に分けることができる。最も下部の南端に部分的に見られるものは壁の崩落土と考えられる黒色土で、茶褐色の小ブロックが少量と黄白色パミスが大量に混じっている。それ以外の大部分を占める最下層は砂質の黒色土で、黄白色のパミスが大量に混じっている。それより上部の壁面近くにある土は砂質の黒色土で、黄白色のパミスを少量含み、1cm大の茶褐色の小ブロックを含むもので、最上部は砂質の黒色土で、10~15mm大の茶褐色の硬質ブロックに暗茶褐色の小ブロックが少量混じったものである。

遺構に伴う遺物は出土していない。



第 102 図 弥生土坑 1 号

(4) 遺物集中域 (第 103・104 図 532~550)

D・E-10 区境界付近において、土器や石器がまとまって出土した。明瞭な遺構ではないが、ここでは遺物集中域として取り上げることとする。調査を進めていく段階で、住居跡になることも想定したが明確な掘り込みを見いだすことはできなかった。

遺物集中域は 4.2 m × 3.3 m 程度の範囲に広がっていた。

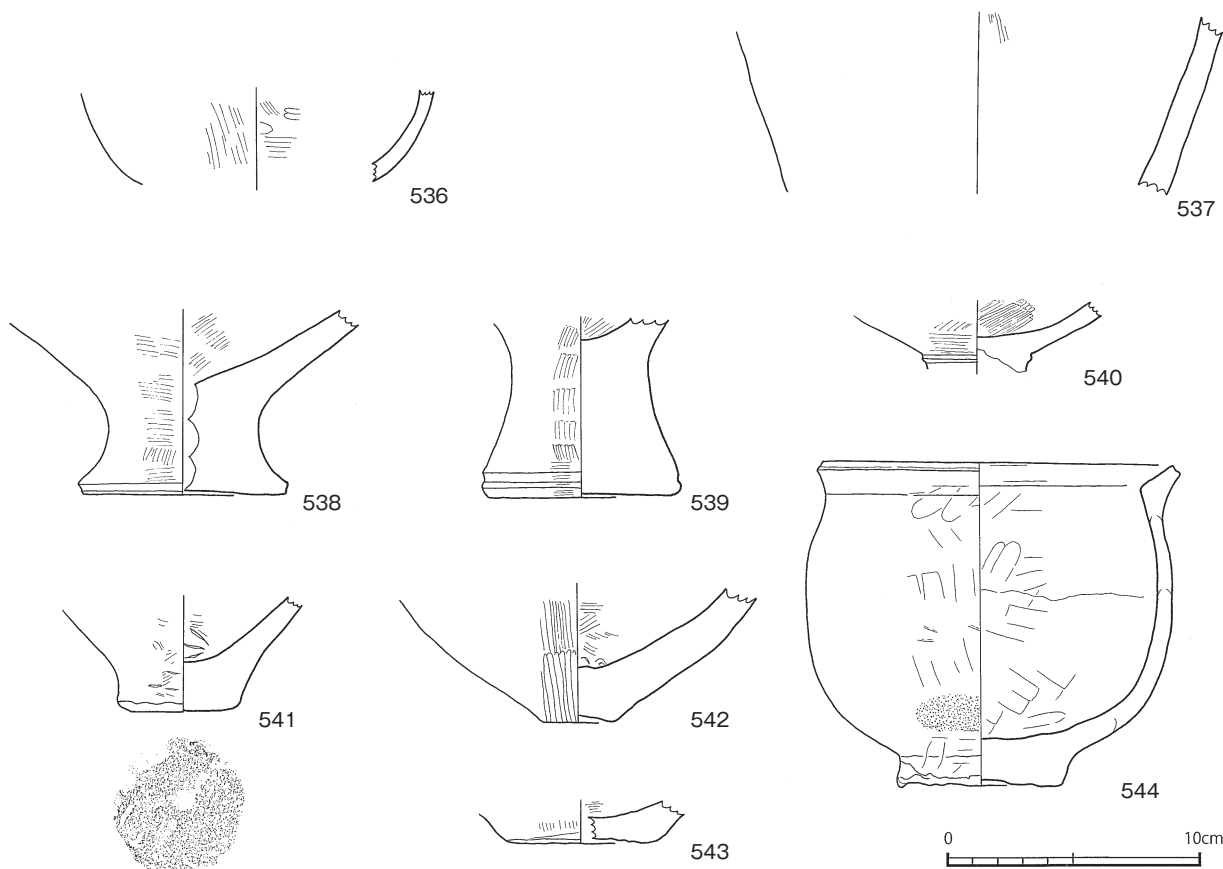
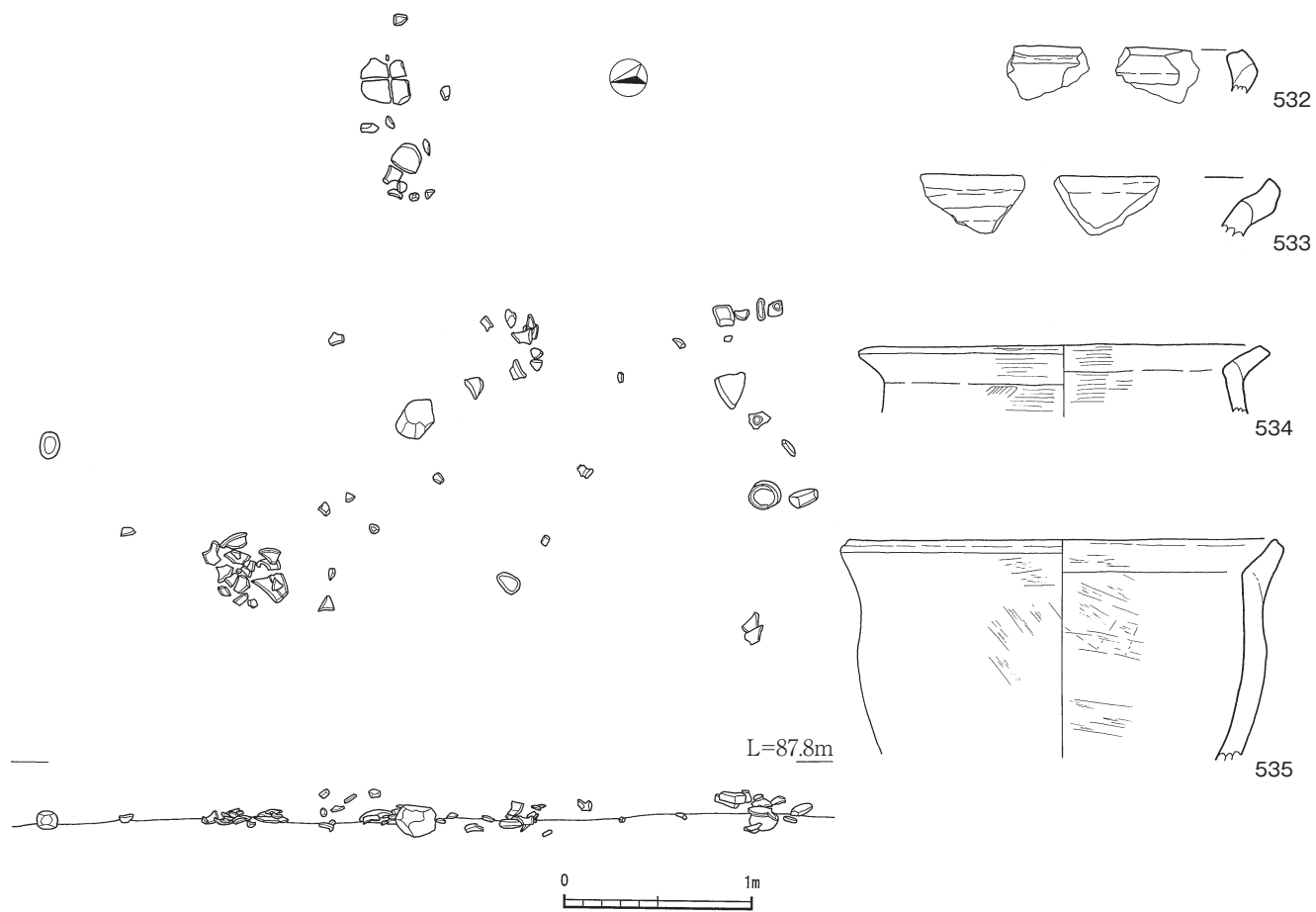
主な出土遺物を 19 点図化した。

534~539 (536 を除く) は甕形土器である。534, 535 は口縁部で「く」の字状を呈する。537 は胴部下段, 538, 539 は底部で、538 は充実した脚台を持つ。541~543 は壺形土器の底部であろう。

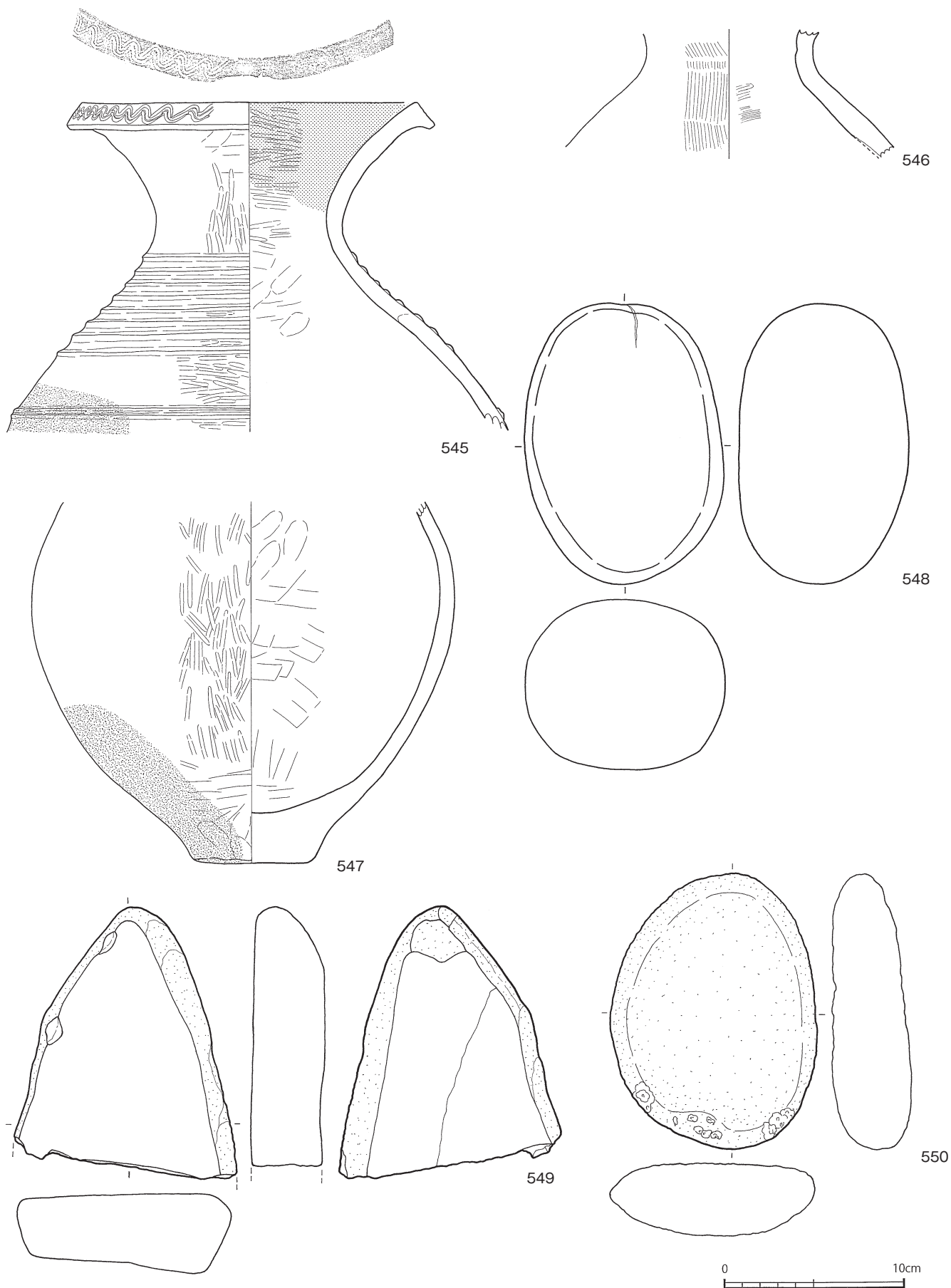
544 は無頸壺で、口縁部は端部が小さな凹線が巡り、内面に稜の見られる逆「L」字状を呈する弥生時代中期の特徴を有している。内外面ともに指頭圧痕と細かなハケ目調整が見られ、底部は若干上げ底状を呈している。

545 は口唇部に櫛描波状文が見られるものの、全周に描かれるわけではなく、一部に描かれているに過ぎない。頸部は大きくすぼまり、肩部には 8 条の三角突帯が、胴部には「M」字状の突帯が巡る。外面は頸部付近が縦方向の、胴部が横方向のミガキ調整、内面は頸部より上位が横方向のミガキ調整で、肩部には指頭圧痕が残っている。546 は頸部であるが、突帯は付されていない。

548 は磨石、549 は砥石、550 は磨・敲石と考えられる。



第103図 遺物集中域・出土土器



第 104 図 遺物集中域出土土器・石器

2 遺物

(1) 土器 (第 105~110 図 551~666)

弥生時代の土器は、甕形土器、大型甕形土器、鉢形土器、壺形土器、高坏のほか、土製品として土製勾玉が出土している。以下、器種毎に概略を述べて行く。

甕形土器 (第 105~107 図 551~593)

551~593 は大型のものを含む甕形土器である。そのうち、551~559 は口縁部や胴部の突帯に刻目が付くものである。器形は基本的に口縁部が外反あるいは直行している。552・555・558 は口縁部の下部に突帯が付くもの、それ以外の突帯は見られないものである。全般的に刻目は小さく、浅く付されているものが多い。

557 は口唇端部の上面から突帯が連続して延び、それより下部に 2 条の突帯を巡らせている。口縁部下部の突帯は、2 条ともに口縁部の突帯よりも低くなっている。刻目は非常に小さく浅いものが付されている。551 は口唇端部の上面から延びるものと、それより下部に 1 条の突帯を巡らせている。口縁部下部の突帯は、口縁部のものとはほぼ同じ高さにある。刻目は浅く小さく付される。口縁部は若干内湾気味となっている。552 は口縁部が内湾するもので、口縁部よりも下部の突帯は、貼り付ける位置が離れている。また、刻目は深く大きく施されている。553 も口縁部とそれより下部に合わせて 2 条の刻目突帯が巡っている。口縁部下部の突帯は、突帯の向きが下方を向いているが、刻目は浅く小さい。口縁部は若干内湾気味である。554 も 553 と類似するものである。口縁部よりも下部の突帯が下向きとなっている分、刻目は浅く小さい。口縁部は、ほぼ直立しており、555 は口縁部よりも下部の突帯が、さらに離れた位置に貼り付けられたものである。口縁部は直立から若干内湾気味となっており、刻目は浅く小さい。556 と 558 は口縁部に巡らされた突帯で、1 条見られる。ただ、口縁部よりも下部に突帯が付されていたかどうかは、いずれも不明である。558 の口縁部はやや外反し、口唇端部に添うように小さい突帯を巡らせる。刻目は小さいが、若干深いものである。557 は口唇端部に添うように、大きく貼り付けられた突帯である。刻目は浅く小さい。559 は、突帯の付された胴部である。刻目は浅く小さい。

560 からは刻目のない突帯が巡るものである。561 は口縁部が逆「L」字状となるもので、端部は三角形気味となっている。560 も逆「L」字状となる口縁部で、端部は若干丸みを帯びる。口縁部の下部に 2 条の三角突帯が巡り、復元口径が約 45.2cm の大型の甕形土器といえる。563 と 566 も逆「L」字状の口縁部であるが、断面形状が台形を呈しており、端部には浅い凹状の沈線が巡っている。同器種の他の土器に比べて、胎土に黒雲母を大量に含む。また、563 は胴上部に約 3mm 幅の凹線を 1 条、そ

の下に沈線を 2 条巡らす。566 は胴上部に沈線を 2 条巡らせる。外面に煤が厚く付着する。562・564 も逆「L」字状の口縁部であるが、端部は三角形を呈している。564 は直立、562 は幾分内湾しながら口縁部に至る。

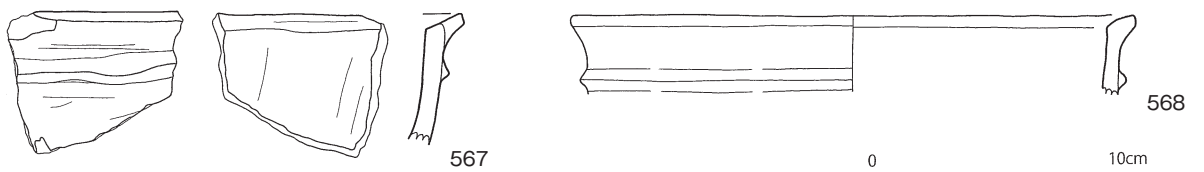
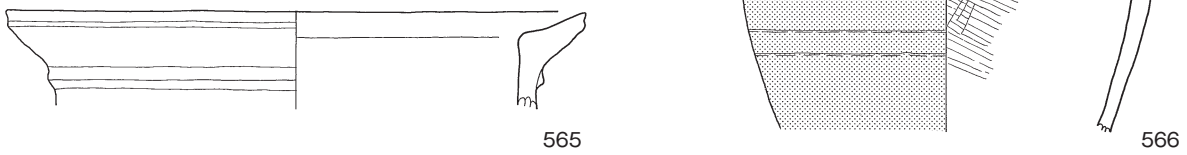
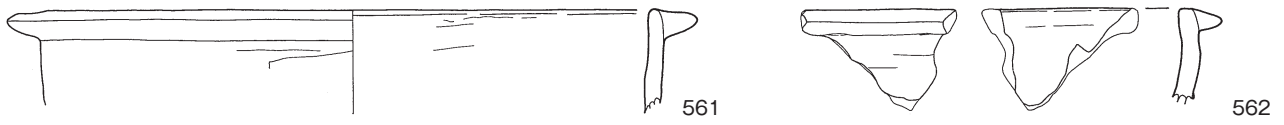
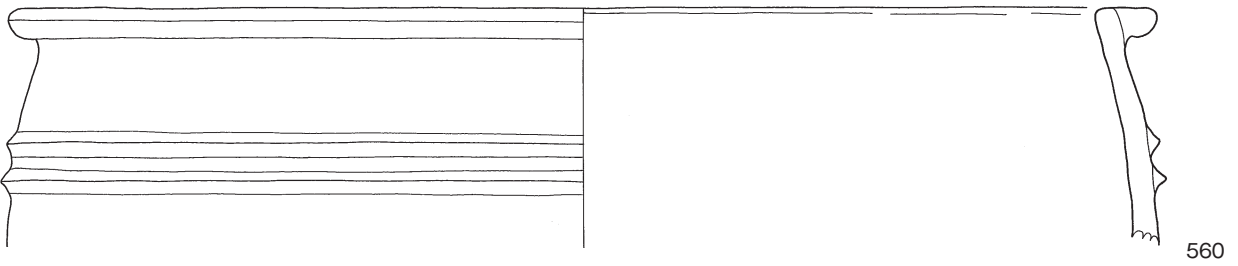
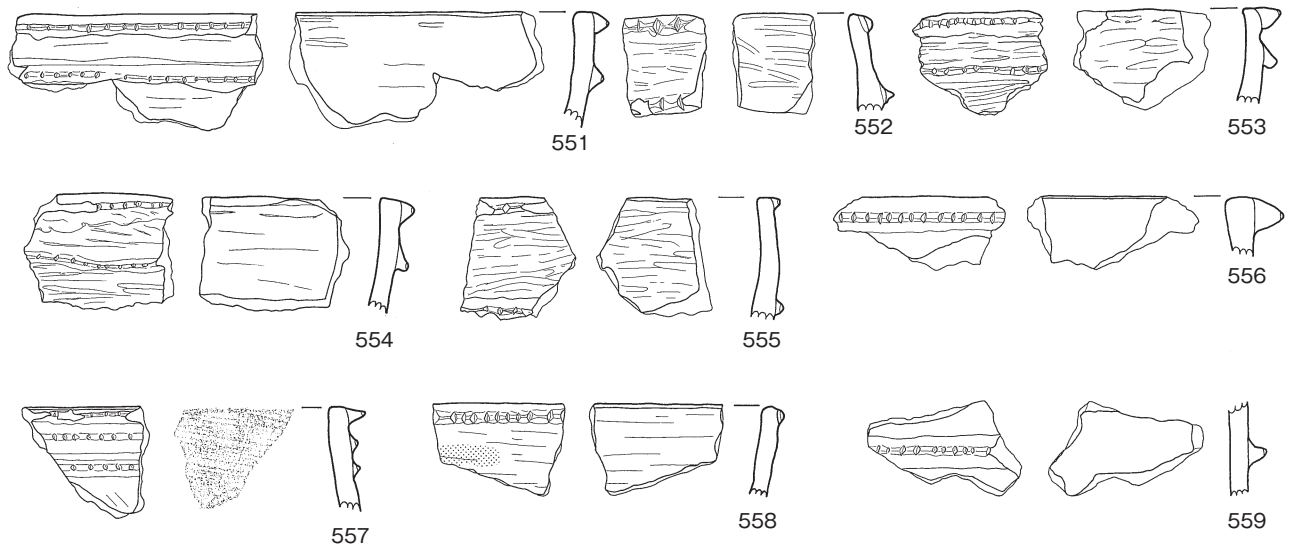
565 からは「く」の字状の口縁部を持つもので、大型の甕形土器も含まれる。568 は短い口縁部を持つもので、逆「L」字状の口縁部に近い形状をしている。口縁部やや下部に、少なくとも 1 条の三角突帯が付されている。567 は、口縁部が「く」の字状に屈曲する口縁部の口唇部は、浅い凹状となる。569・570 はいずれも口縁部が「く」の字状に、やや外反気味に開くものである。口唇部は凹みを有し、3 条の三角突帯を貼付する。

571~580 は充実した脚台を持つ底部である。接地面は外側に向かって張り出すものが多く、端部は平らにヨコナデし、小さく凹ませている。579 の接地面は、外側への張り出しは見られない。

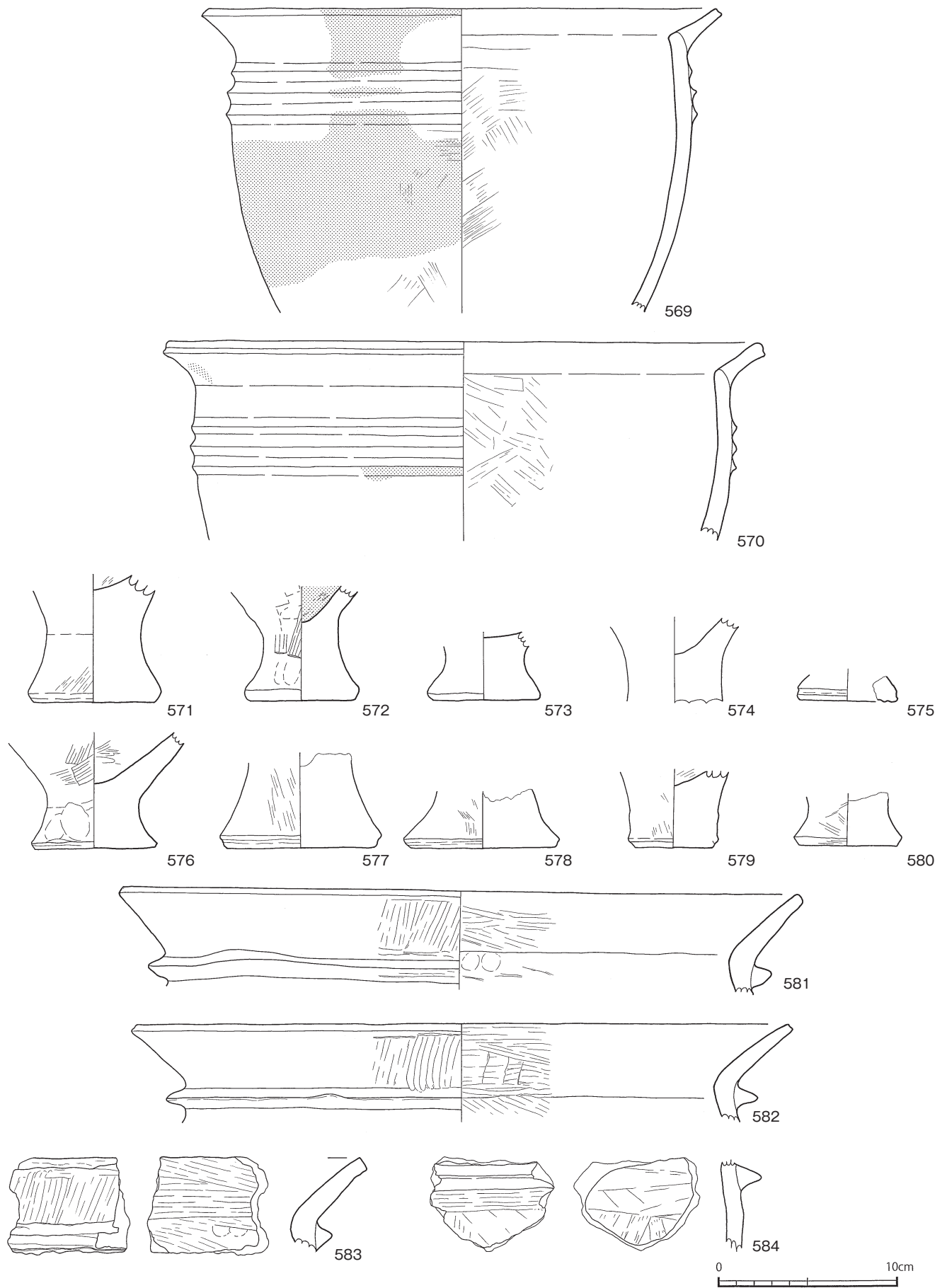
581~593 は大型の甕形土器である。口縁部はいずれも「く」の字状に外反しており、口縁部の下部に接するように高い三角形の突帯が巡り、断面で見ると口縁部と突帯は V 字状をなす。585 は胴部がやや膨らんだ後にすぼまって行く。586 は口縁部は外反しているが、胴部にかけては膨らまずに徐々にすぼまっている。それでも内面には明確な稜が見られる。口縁部からやや離れて、下部に略台形の突帯が巡っているが、585 ほど高いものではない。断面で見ると、口縁部と突帯は U 字状をなす。587 は口縁部の形状が、本体側の基部の厚みが厚く、先端側が薄くなっており、端部はヨコナデして中央部を少し凹ませていることから、台形に近い形となっている。590~593 は胴部に付された突帯である。591 のみ端部にヨコナデが見られず、鈍い三角形状となっている。

鉢形土器 (第 108 図 594~605)

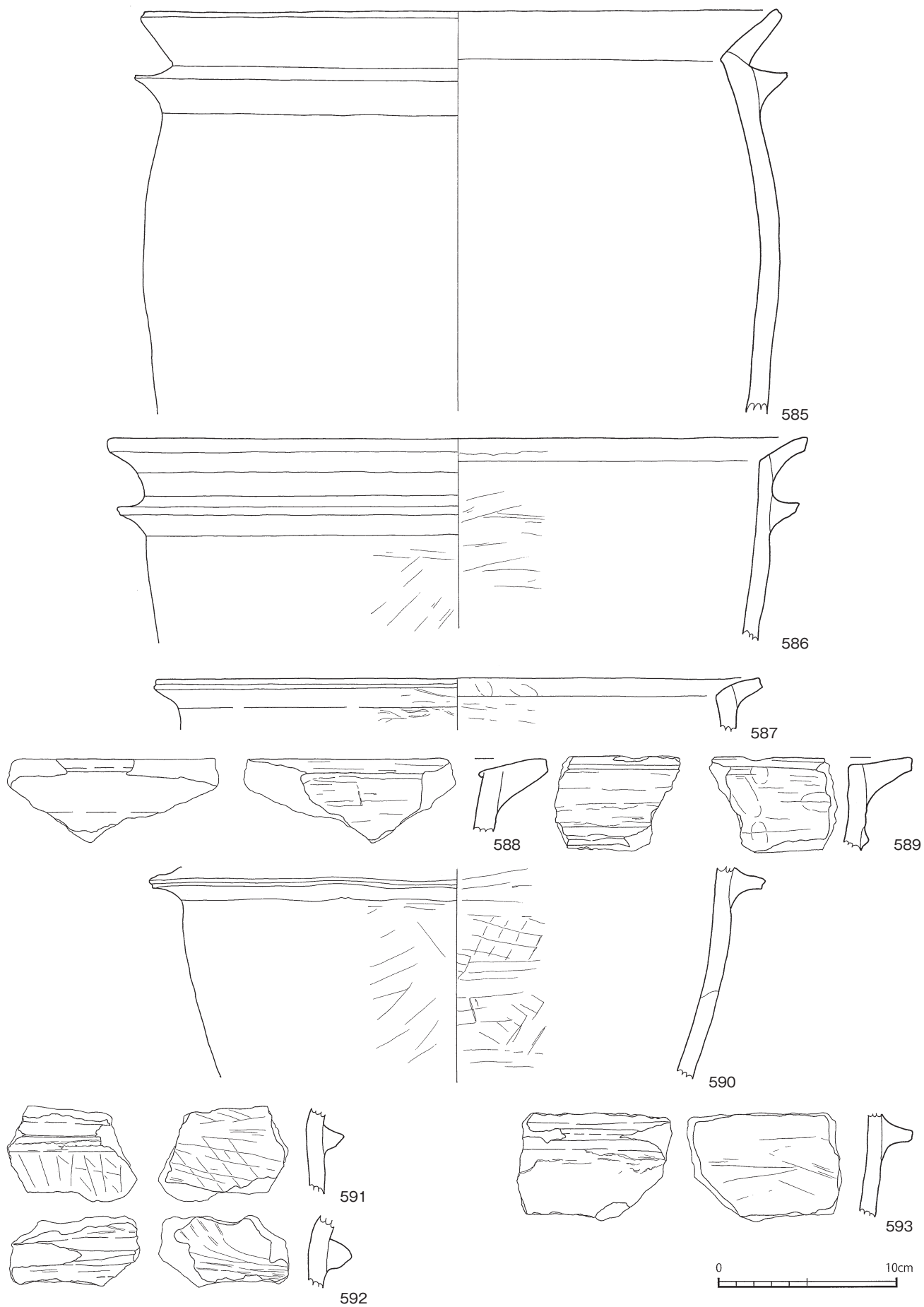
594~605 は鉢形土器である。これら全てに、口縁部あるいはそれより下部に突帯が巡っている。594 はやや外反する口縁部を持ち、口縁部と口縁部から離れた下部に低い突帯を巡らせている。595 は口縁部のみであるが、594 と同様な形のもので、口縁部はやや外反する。596 はほぼ直立する口縁部からすぐに胴部に向かってすぼまって行く。口縁部から離れた下部に突帯が巡る。597 は 594 と同様な口縁部の形状でほぼ直立しているが、口縁部の下部に突帯が巡るのか否かは不明である。598 は内湾する口縁部である。599 はほぼ直立する口縁部を持ち、胴部に向かってすぐにすぼまって行く。601 はやや外傾、600 は明確な外傾、604 は直立気味に若干外反する口縁部である。603 は断面形状が丸みを持つ、かまぼこ形の口縁部である。604 は口縁部よりもやや下部に突帯を巡らせている。そのために 594~603 とは形状が若干異なっているといえる。605 は大きく外反する口縁部よ



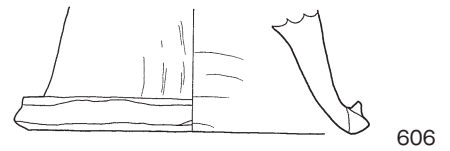
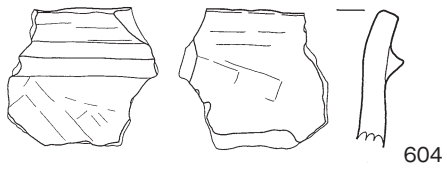
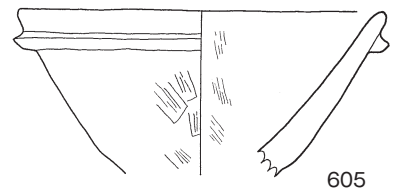
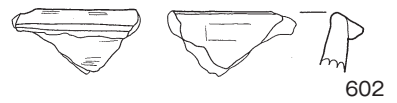
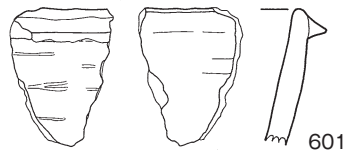
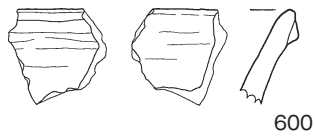
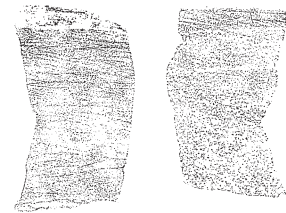
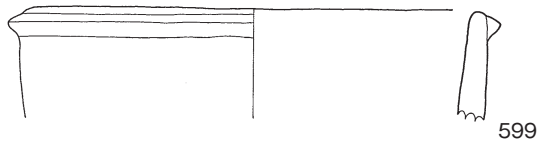
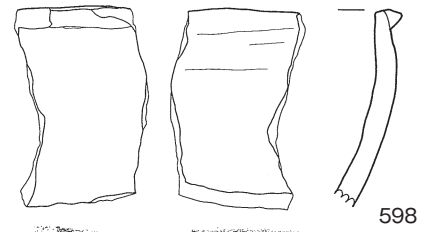
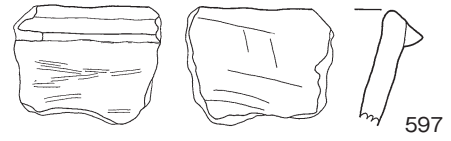
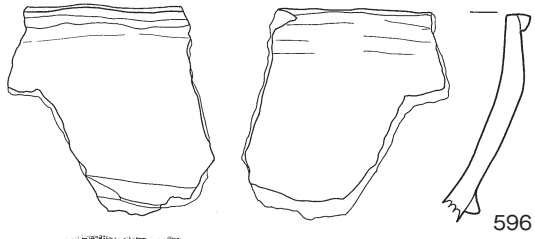
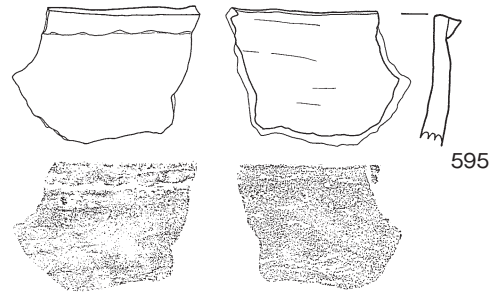
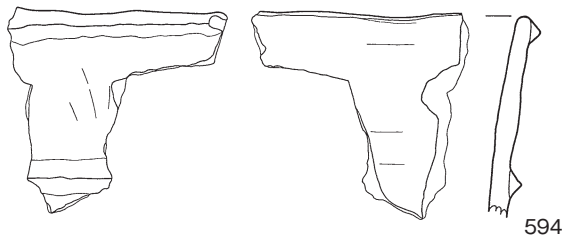
第 105 図 弥生時代の土器 1



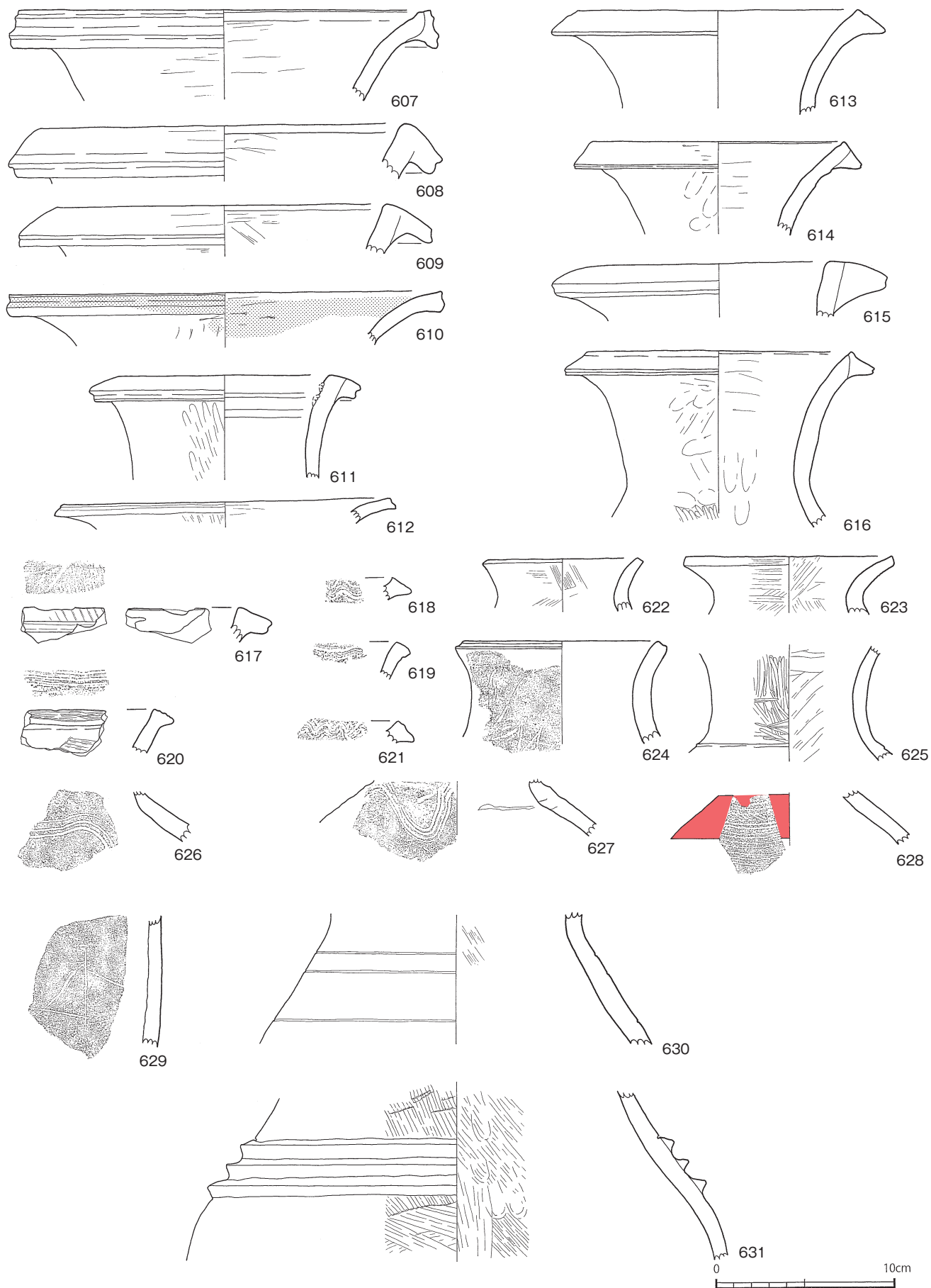
第106図 弥生時代の土器2



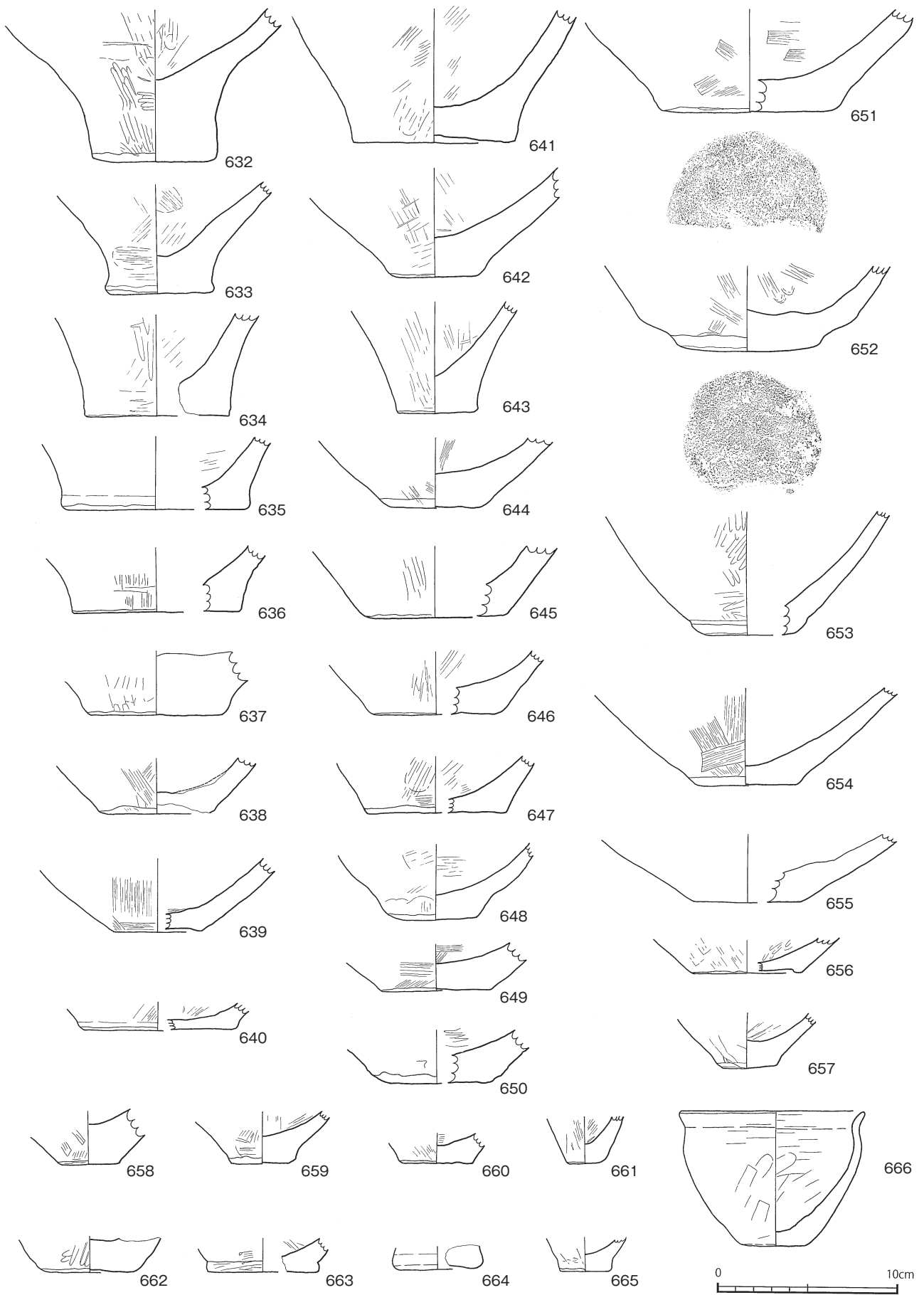
第 107 図 弥生時代の土器 3



第 108 図 弥生時代の土器 4



第 109 図 弥生時代の土器 5



第110図 弥生時代の土器6

りも下部に突帯が巡るもので、小型の鉢形土器といえる。

高坏 (第 108 図 606)

606 は高坏の脚部である。外面の裾部分に 1 条の突帯を巡らす。脚部はそれほど高くないと考える。

壺形土器 (第 109・110 図 607~666)

607~666 は壺形土器である。口縁部は、口唇端部が平らにヨコナデされ、中央部には凹みが見られるものがほとんどである。608 と 609 は肥厚した口縁部であることから、大型の壺形土器と考えられる。608 は逆「L」字状に垂れ下がる口縁部である。口唇端部は凹線状に凹む。609 は外反する口縁に端部を薄くし、基部を厚くした断面形状が台形となる口縁部が取り付けられている。611 は、外反する頸部に逆「L」字状に垂れ下がる口縁部をもつ。口唇部端は凹線状に凹む。631 は肩部に 3 条の三角突帯が巡っているもので、胴部は大きく張っている。629 は胴部の破片であるが、直線的な線刻により文様が描かれている。611 は内面に 2 条の低い突帯が付されていたものが剥落している。616 は頸部から外側に向けて、大きくカーブしながら外反し、614 はほぼ直線的に外反している。617 は口唇部に縦方向の短沈線の刻みが少なくとも 8 本ほど見られる。622~624 は外反する口縁部がそのまま開くもので、口唇端部もそのままの状態ですらに面取りされ、624 には浅い凹みが巡らされる。625 は端部を欠くが、622 に近い形状の口縁部と考えられる。頸部と胴部の境界付近には低い突帯が付されている。626~631 は頸部から胴部の上部にかけての部分で

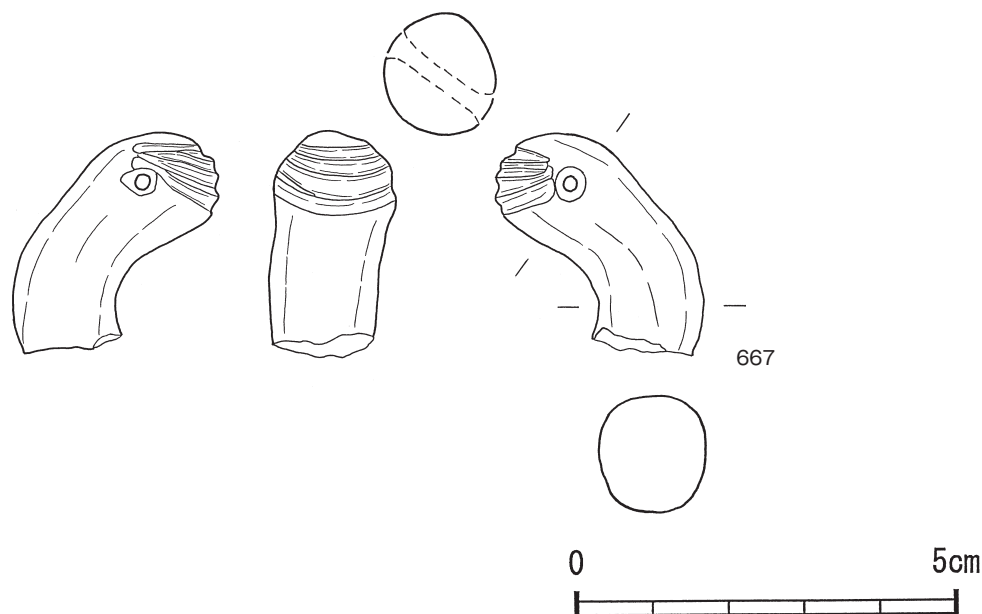
ある。626 は少なくとも 3 条にわたって沈線が巡っている。627 は 2~3 本の曲線で文様が描かれている。628 は横方向の沈線の中に、右下がりの短い斜線が刻まれ、幅の広い文様帯となっている。外面には丹塗りが観察される。618~621 は口縁部の口唇端部に沈線や櫛描波状文などが描かれている。

632~665 は底部である。いずれも平底である。さまざまな形状のものが見られる。632 は底部が厚く、やや脚台状を呈する。643・661 は小さい底部である。底面や端部の状況などもさまざまである。666 は短頸壺（もしくは小型鉢）である。口縁部が「く」の字状に外反し、器高は口径に近い長さである。頸部が幾分すぼまるものの、それほどしまったものではない。

(2) 土製品 (第 111 図 667)

土製勾玉

土器ではないが、土製の勾玉 667 も出土した。4 条の沈線の丁字頭をもち、尾部は欠く。頭部は丸みを帯び穿孔されている。胴部の形状から判断すると、尾部もそれほど小さなものではないと思われる。作りは丁寧で焼成も良好である。



第 111 図 土製勾玉

第4節 古墳時代の調査

古墳時代は、Ⅱ層を包含層とする遺物の調査と、Ⅲ層以下を検出面とする遺構の調査を行った。第1地点と第2地点が主な調査区となった。

なお、第2地点は、平成25年度の調査時に、市道として共用されていた部分の調査を行った。

調査は表土及び道路の基礎部分の砂利等を重機によって剥いだ後に、人力により、掘り下げを行った。

その結果、前回調査の続き部分として溝が4条検出されたほか、地下式横穴墓の竪坑と考えられる遺構も検出された。また、溝の掘り下げ部分より地下式横穴墓の竪坑と考えられる遺構が検出された。市道部分からも地下式横穴墓が検出されたことから、地下式横穴墓は今回、合わせて4基確認されたことになる。

そのほかにも、第2地点からは溝に近接して大型の壺形土器の破片が大量に出土する範囲が見られた。土器集中区と呼び調査を進めたが、最終的には地下式横穴墓の祭祀に係わる遺構と考えられるに至ったため、他区の調査地と同様に「土器破碎祭祀遺構」と判断した。

1 遺 構

(1) 地下式横穴墓 (第114~117図 668~676)

1号地下式横穴墓 (第114図 668)

道路部分のアスファルトを取り除いた面(Ⅵ層)のI-19区で検出された。竪坑の規模は長軸が0.53m、短軸が0.32mで、残存していた部分の深さは最大で6cmであった。遺構の上部が削りされ、床面のみが残存していたことになる。竪坑の長軸方向は、北西-南東方向で、玄室も同様の向きであったと考えられる。(N 22° W)

埋土は黒色土で、アカホヤの粒が含まれている部分と、暗褐色土の含まれている部分とがある。おそらく、玄室部分が黒色土で、暗褐色土の部分が羨道部分と想定された。ほぼ床着で、玄室の北側の端から鉄製品が出土したが、取り上げて観察した結果、刀子の破片であることが判明した。

全体の規模を埋土を除去して計測した結果、羨道部分が0.47m×0.20m、深さは6cm、玄室は長軸が1.48m、短軸は0.7mで、深さは15cmであった。玄室は平入りで、竪坑の最深部よりも5cmほど低く作られていた。

竪坑が極端に小さいことから、竪坑の大部分は道路の敷設工事などで削りされ、残存していた竪坑部分で最も深い部分が残ったものと判断される。

玄室から出土した刀子は、全長が6.5cm、最大幅1.4cmで、最も厚い部分で0.3cmほどである。刃は緩やかなカーブを持ち、先端は鋭くとがっている。背部は極めて

微細なカーブであり、ほとんど直線的といってもいいほどである。刃部は完全に残存しているが、基部は途中で折損している。銹着が著しく、木質が付着している部分も見られる。

2号地下式横穴墓 (第115図 669~673)

F・G-18区のⅤ層上面で検出された。南側の3号溝を切っていることから、溝よりも新しいことがわかる。

規模としては、竪坑と玄室を合わせたもので、長軸で2.40m、短軸で2.08mである。平成25年度の調査で遺構の東側が検出されていた。下部が安定した状況ではなく、平成28年度に検出された西側の床面が安定していることから、西側の部分が玄室、東側が竪坑と判断できる。

その場合、竪坑は長軸が2.08m、短軸が1.13m、検出面からの深さは0.82mとなり、玄室は長軸が2.10m、短軸が1.32m、深さは0.98m、玄室の長軸方向は北東-南西向きとなる。(N 17° E) 玄室は竪坑よりも15cmほど低く作られており、平入りで、羨道は確認できない。

また、玄室が竪坑よりも大きく作られており、竪坑と玄室がほぼ平行になるような作りと言える。

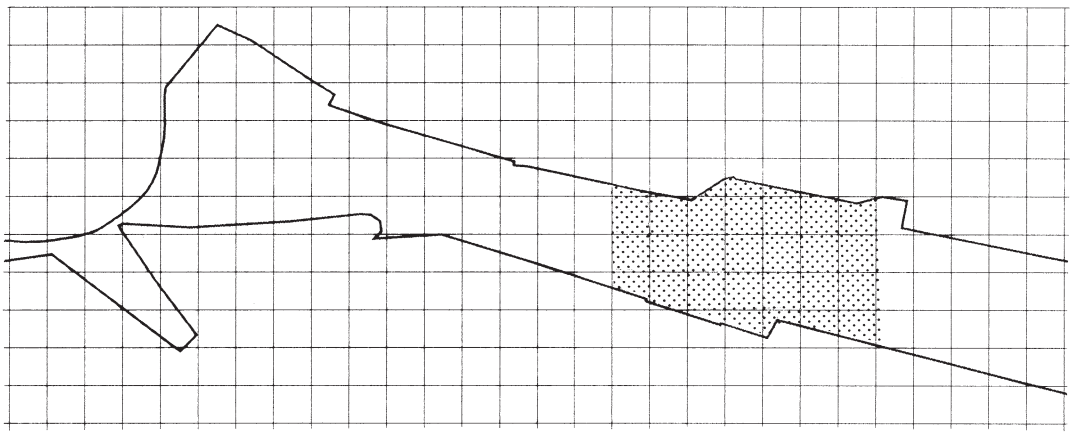
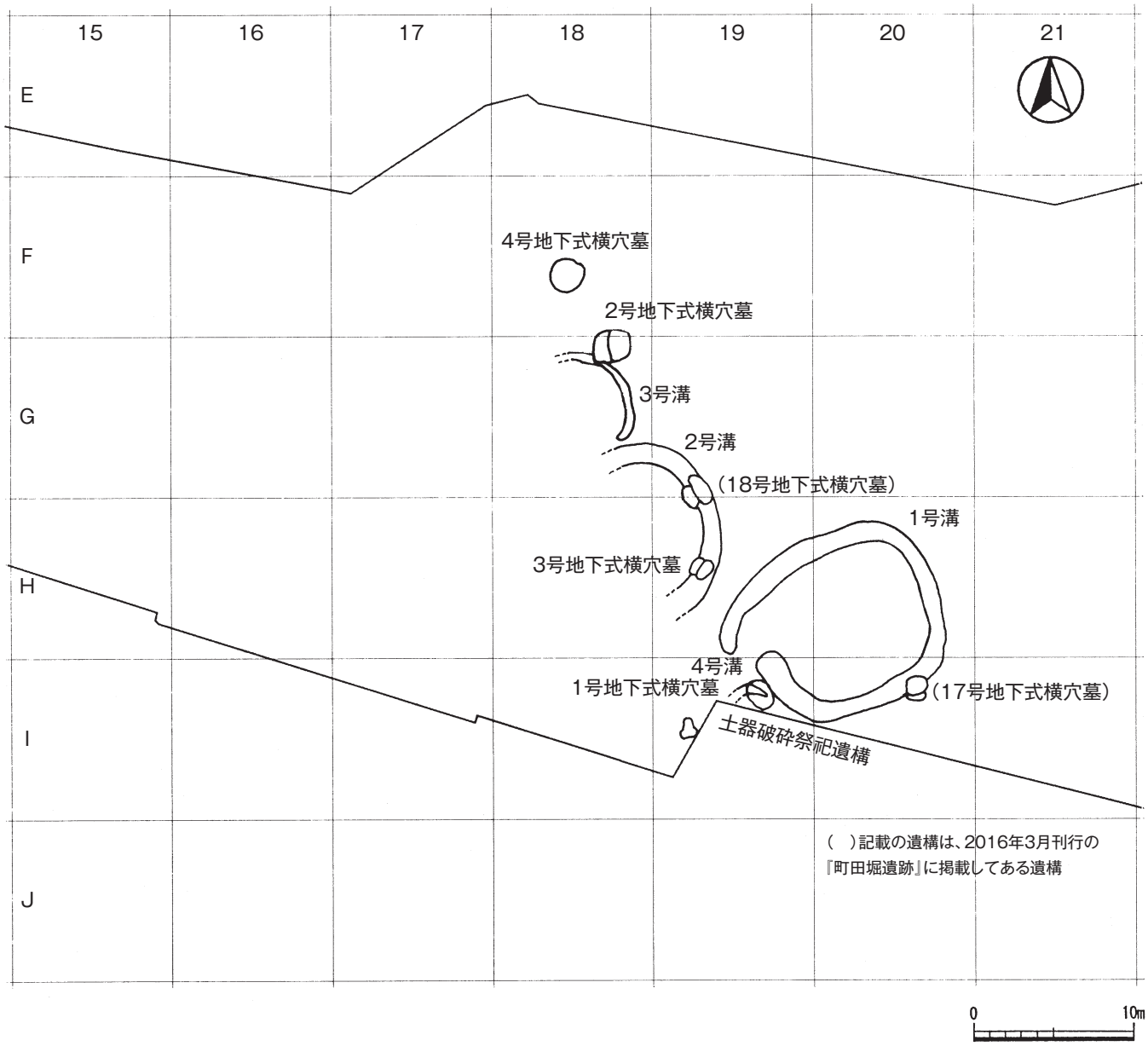
669~673は2号地下式横穴墓から出土したものである。670以外は、縄文時代後・晩期の5類土器の口縁部、胴部、底部である。670は壺形土器の肩部に付された突帯で、弥生時代中期のものと考えられる。673は打製石斧の基部で、裏面には自然面が残っている。

3号地下式横穴墓 (第116図)

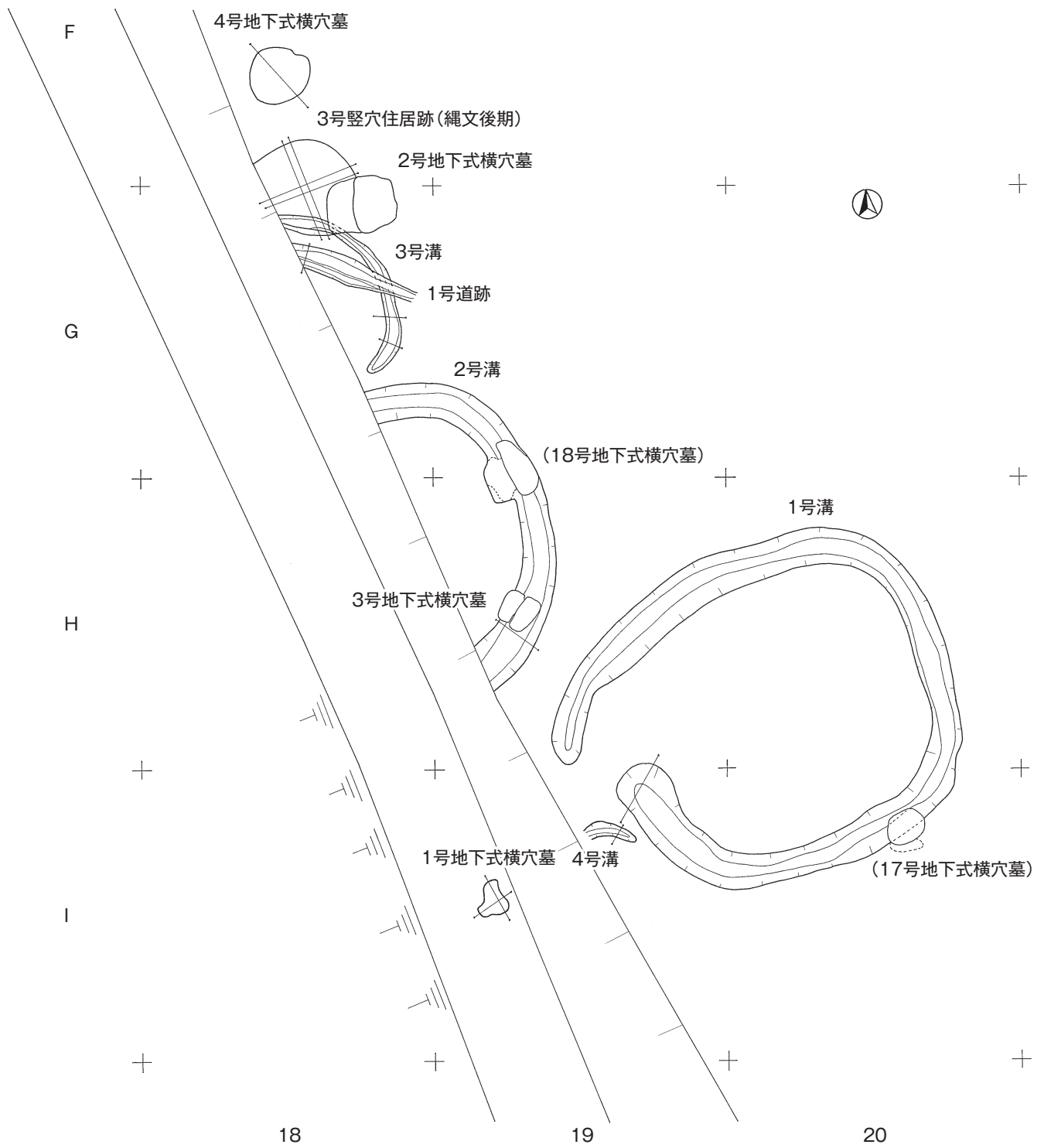
H-19区で検出され、2号溝の内部に、溝から掘り込まれて作られていた。

溝内にある竪坑は、長軸が1.27m、短軸が0.62mで、ほぼ長方形を呈しており、溝下部の検出面からの深さは0.78mである。ほぼ西方向に平行して作られている玄室は、長軸1.12m、短軸0.58mで、おおよそ隅丸の長方形を呈しており、溝の検出面からの深さは1.15mである。玄室の床面は、竪坑の最下部よりも13cmほど高い位置に段を設けるようにして作られている。玄室の長軸方向は、北東-南西に向いている。(N 28° E)

玄室の床面から天井までの高さは約40cmほどであり、内部には中央から南側にかけて赤色顔料が見られた。これをサンプリングして県立埋蔵文化財センターに分析を依頼した結果、鉄を主成分とし、針状の結晶が見られることからパイプ状ベンガラの可能性が高いことが判明した。(第5章第4節参照)



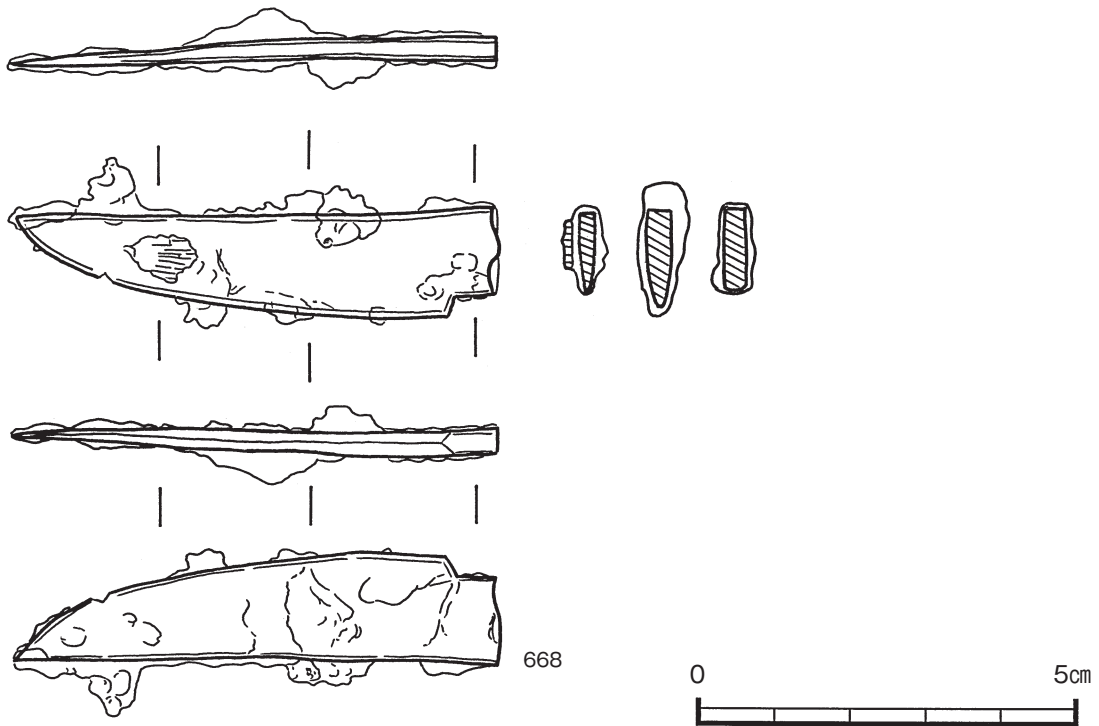
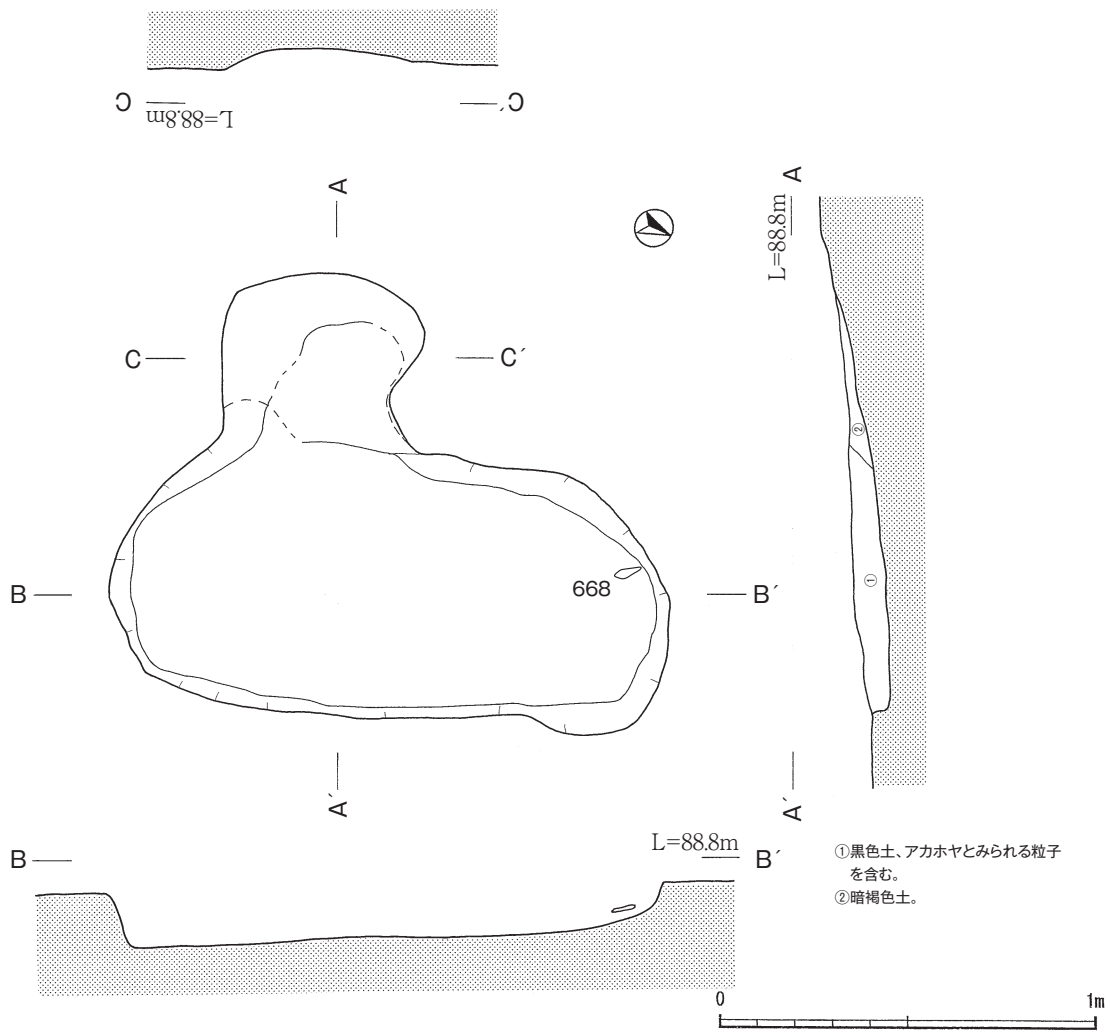
第 112 図 古墳時代遺構位置図



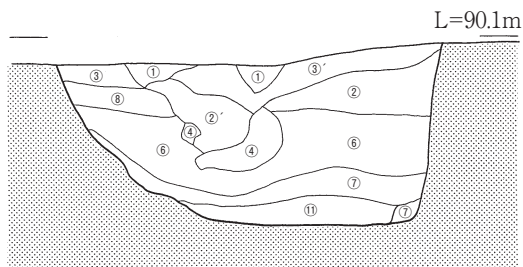
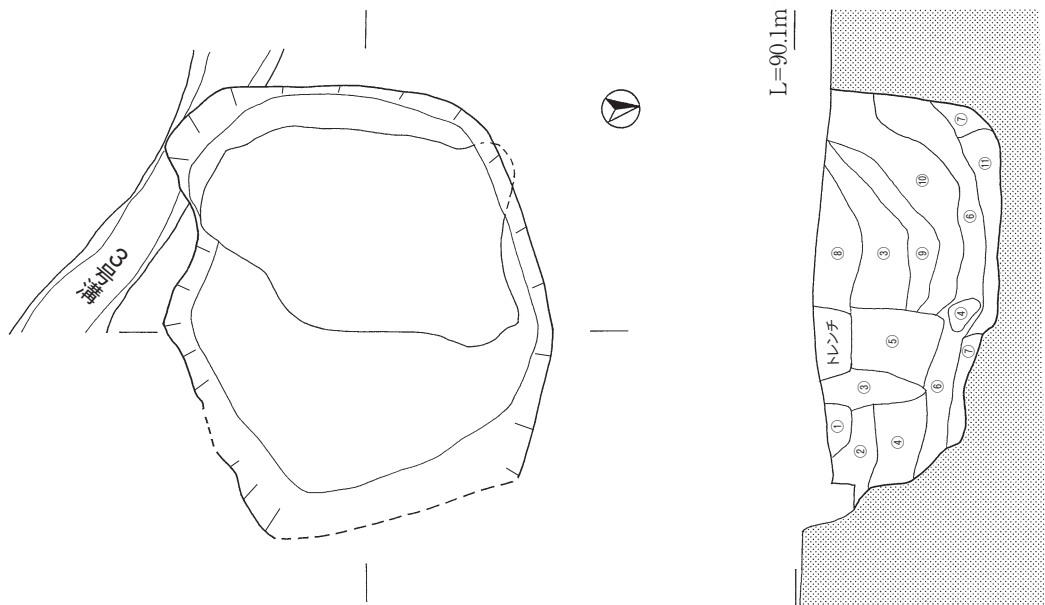
()記載の遺構は、2016年3月刊行の『町田堀遺跡』に掲載してある遺構



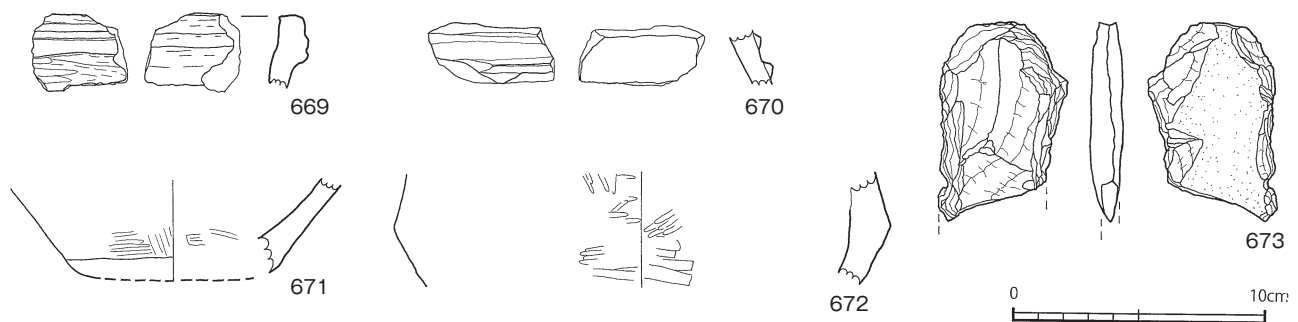
第 113 図 第 2 地点検出遺構図



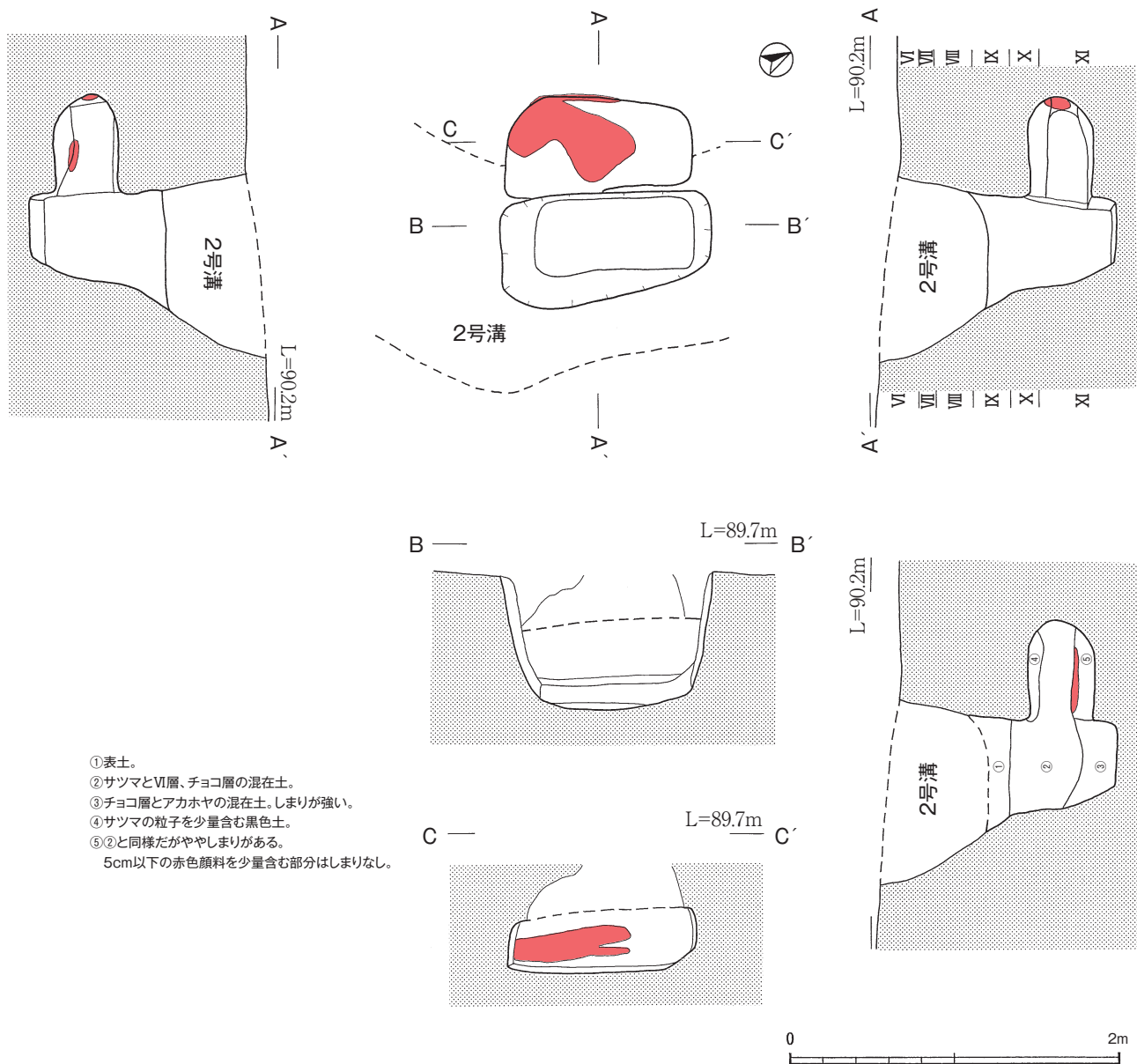
第 114 図 1 号地下式横穴墓・出土の鉄器



- ① 黒色土 (落ち込んだところにIIa層埋土が入ったとみられる。)
- ② 黒褐色土 (アカホヤが微量に混在。)
- ②' 黒色土 (IIa層) に②を多く含む。
- ③ アカホヤとVI層の混在土 (アカホヤが多い。)
- ③' ③に黒色土 (IIa層と類似) と直下の②'埋土。VI層のブロックを多く含む。
- ④ VI層の埋土ブロック。
- ⑤ 丸太を積み重ねて閉塞したと推定される箇所。(有機物を多く含んでいると考えられる。) 非常にフカフカしている。
- ⑥ 黒褐色土 (VI層とVII層の混在土)
- ⑦ 茶褐色土 (VIII層とIX層 (サツマ) 混在) サツマを多く含む。
- ⑧ 黒色土に径1cmのアカホヤが30%混じるIIb層 (黒褐色土) とIIa層 (黒色土) の混在土。炭化物を多く含む。
- ⑨ 黒系のサラサラした土。IIa層と類似。
- ⑩ 黒褐色土 (VI層) に池田降下軽石がわずかに混じる。
- ⑪ サツマにVI層と黒色土を含む。玄室の床面と考えられる。



第115図 2号地下式横穴墓・出土遺物



第116図 3号地下式横穴墓

4号地下式横穴墓 (第117図 674~676)

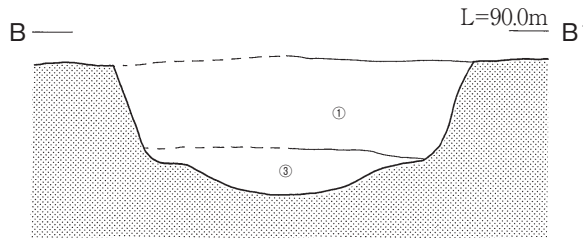
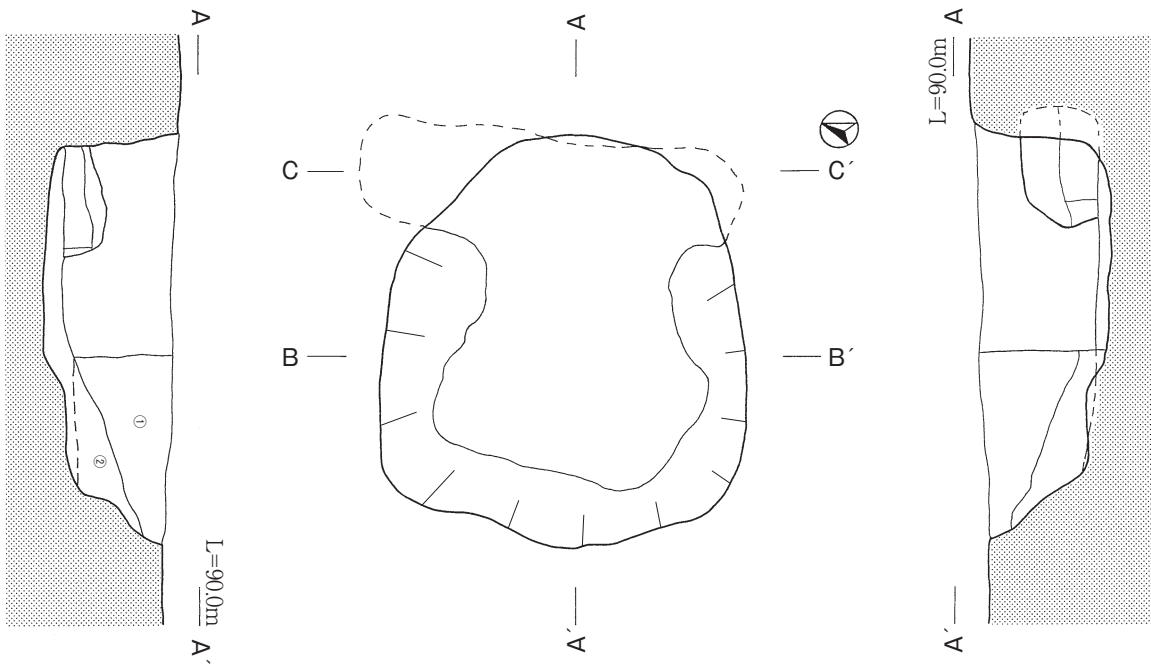
F-18区のV層で検出された。竪坑は長軸1.95m、短軸1.20m、検出面からの深さは0.73mであり、玄室は長軸2.03m、短軸0.60m、検出面からの深さは0.70mである。また、羨道の規模は0.96m×0.56mである。遺構全体の主軸方向は北東-南西を向いている。玄室の床面から天井までの高さは約0.30mと、天井は極めて低い。

674~676は4号地下式横穴墓から出土した遺物である。674は深鉢の口縁部、675は底部である。いずれも5類土器と考えられる。676はスクレイパーである。

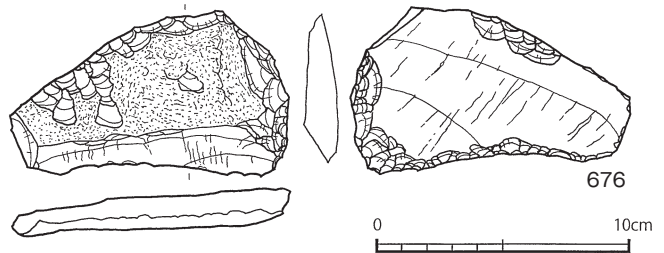
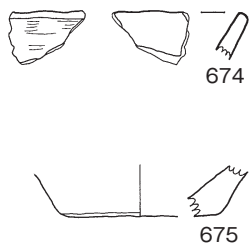
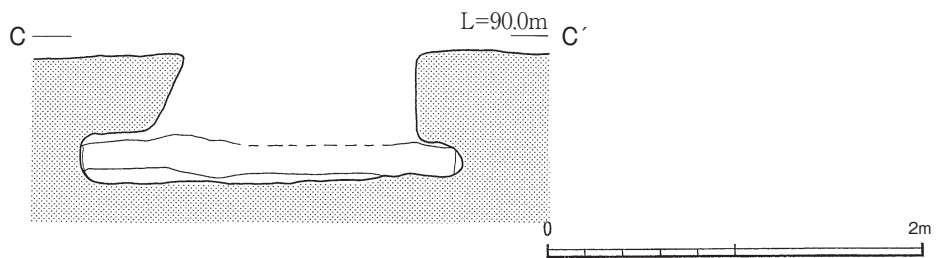
(2) 溝状遺構 (第118~127図)

1号溝 (第118・119・124図 677~679)

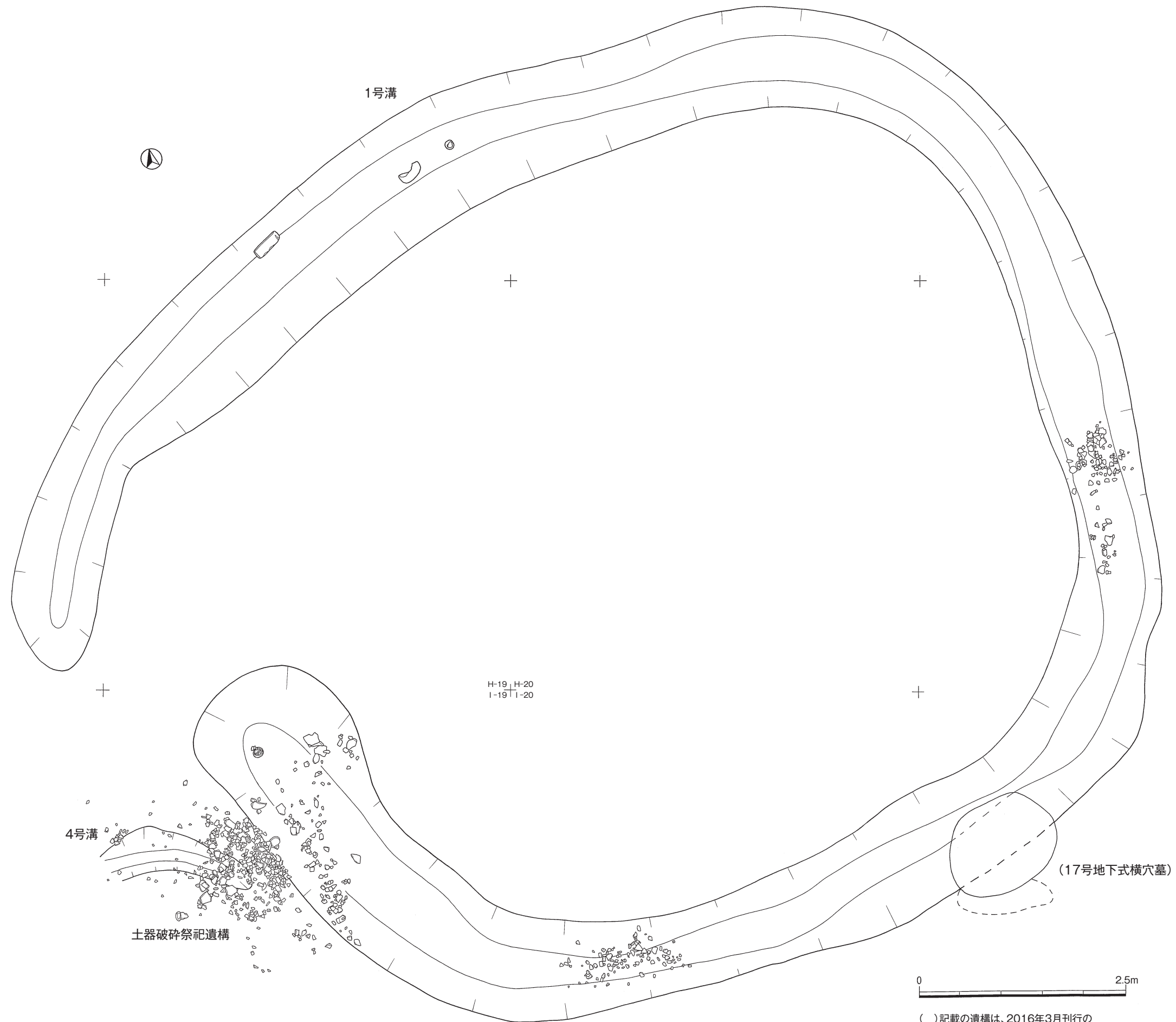
H・I-19・20区のV層で確認されたが、平成25年度の調査で一部検出されていたもので、その北側の先端



- ① 黒色土にアカホヤの粒が混じる。
- ② 黒色土にアカホヤの粒が混じる。
- ③ 茶褐色土。アカホヤのブロック混じりて上の土より明るい。

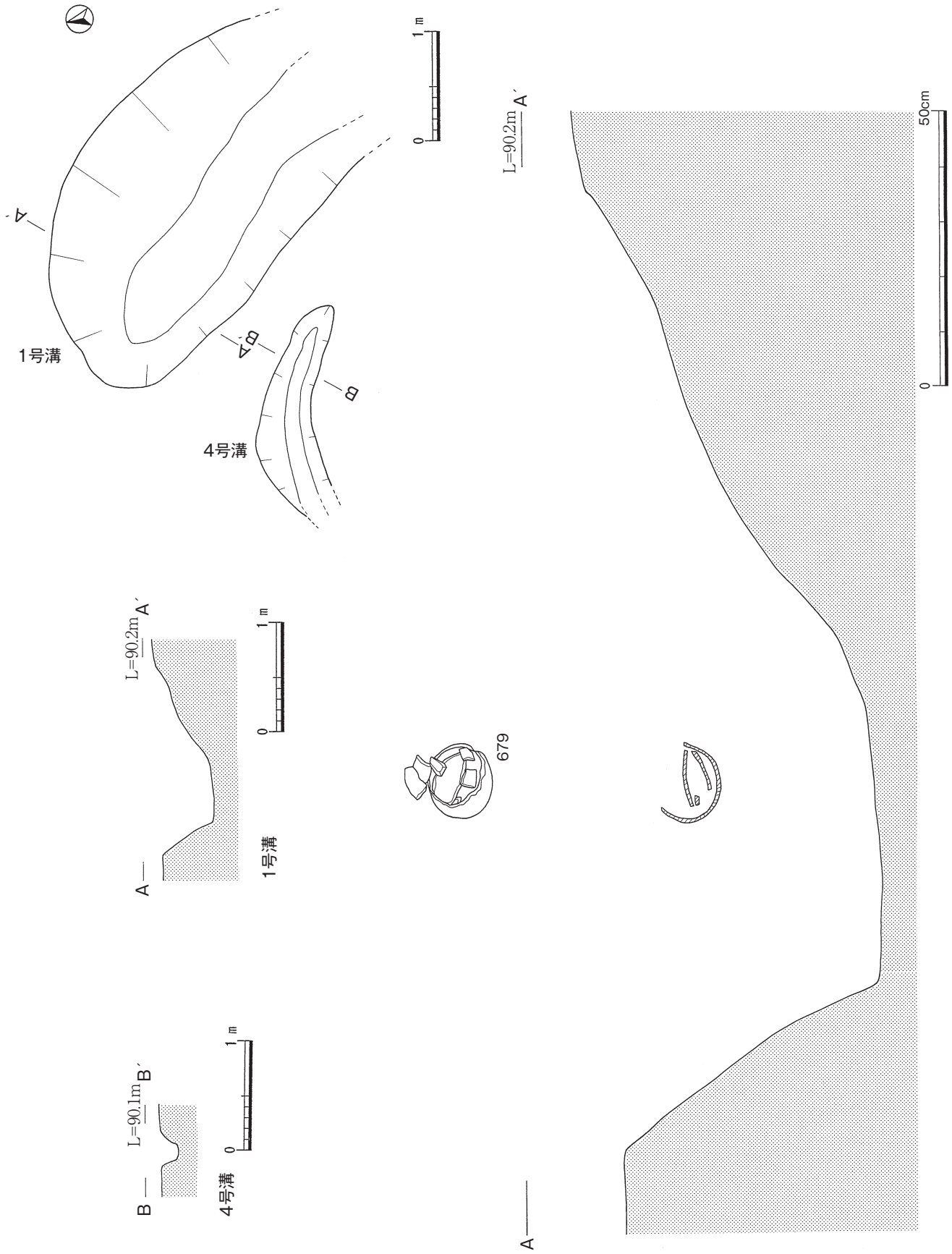


第117図 4号地下式横穴墓・出土遺物

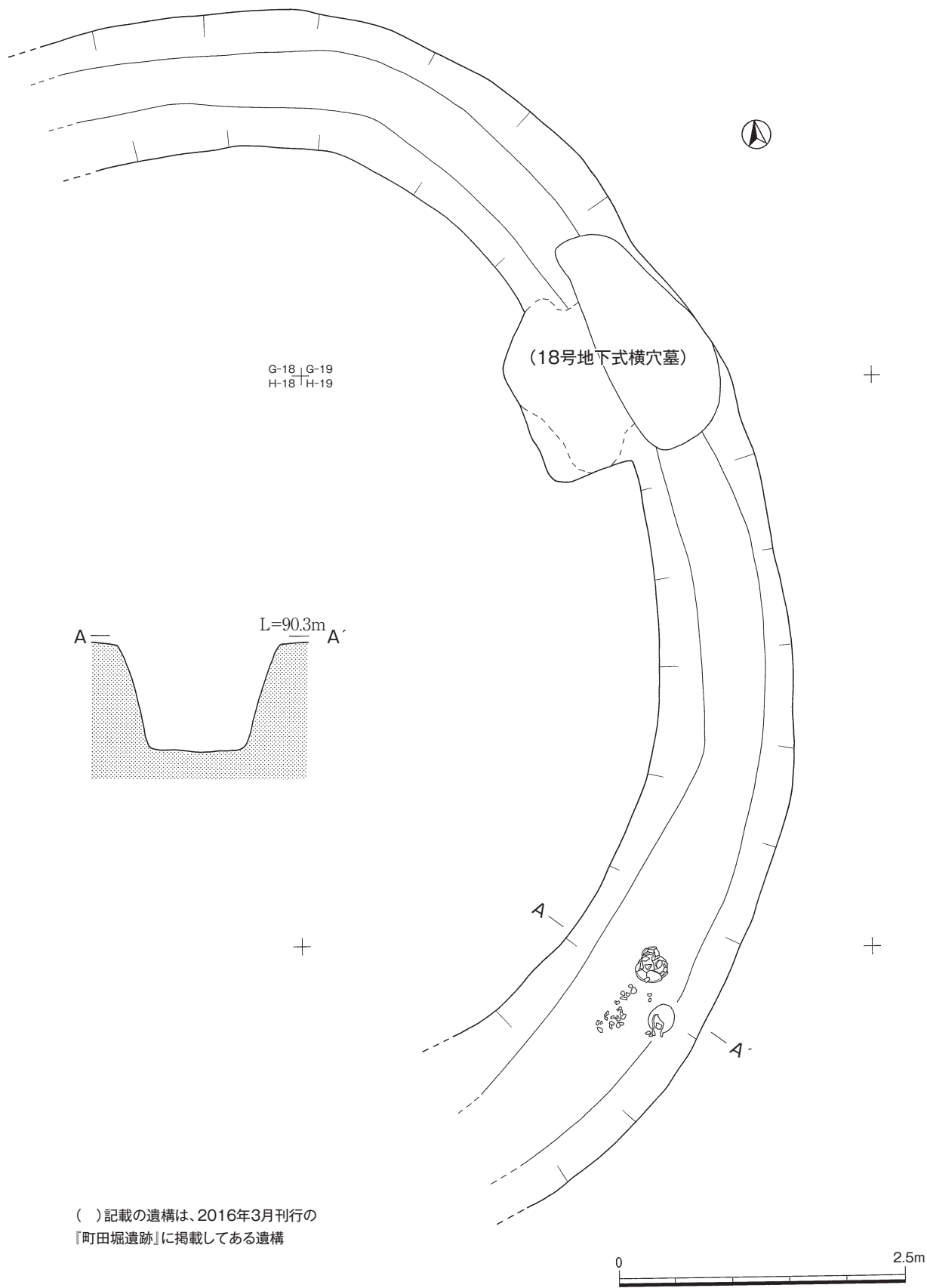


第118図 1号溝・4号溝

()記載の遺構は、2016年3月刊行の『町田掘遺跡』に掲載してある遺構

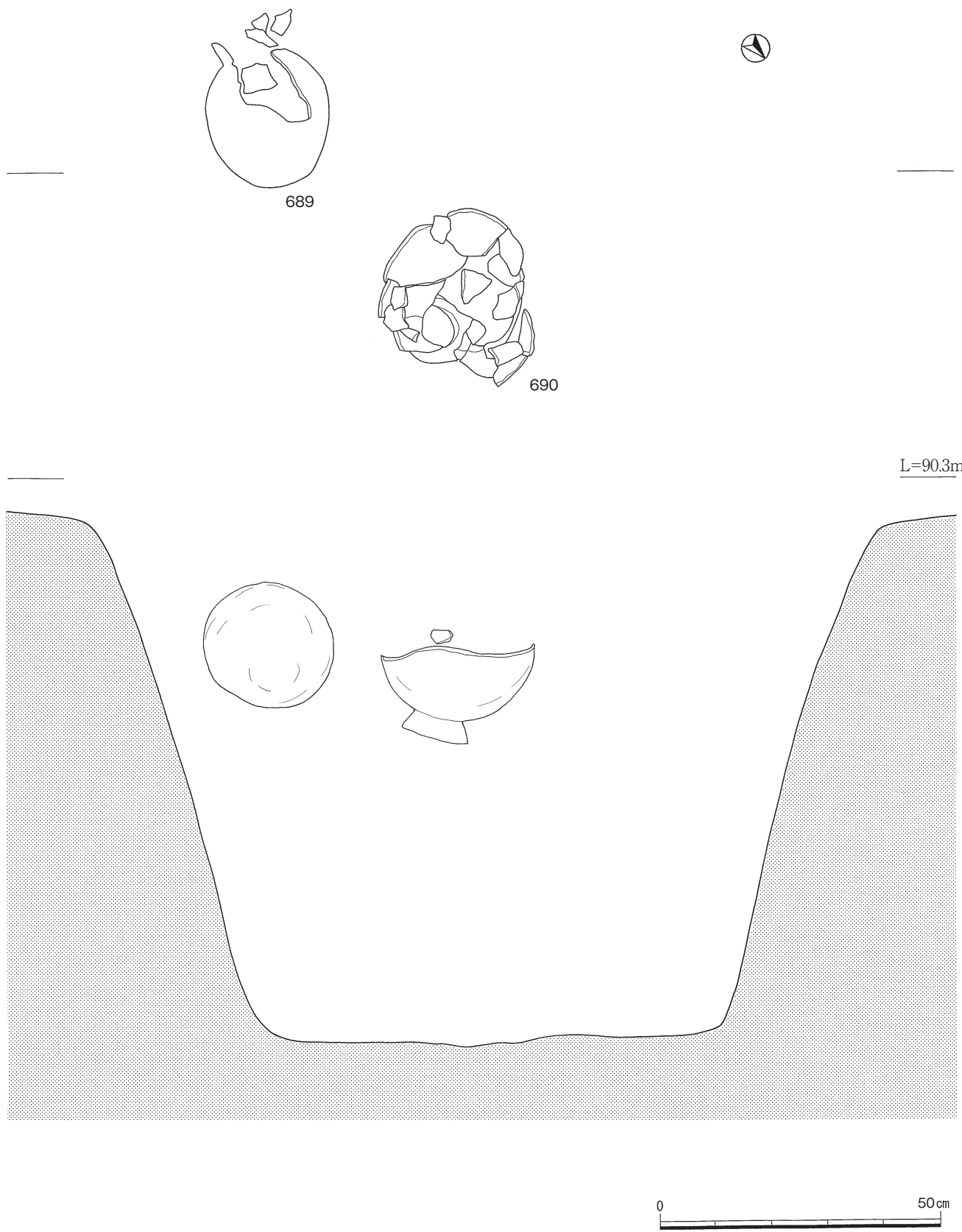


第119图 1号溝・4号溝遺物出土状況



()記載の遺構は、2016年3月刊行の『町田堀遺跡』に掲載してある遺構

第 120 図 2号溝

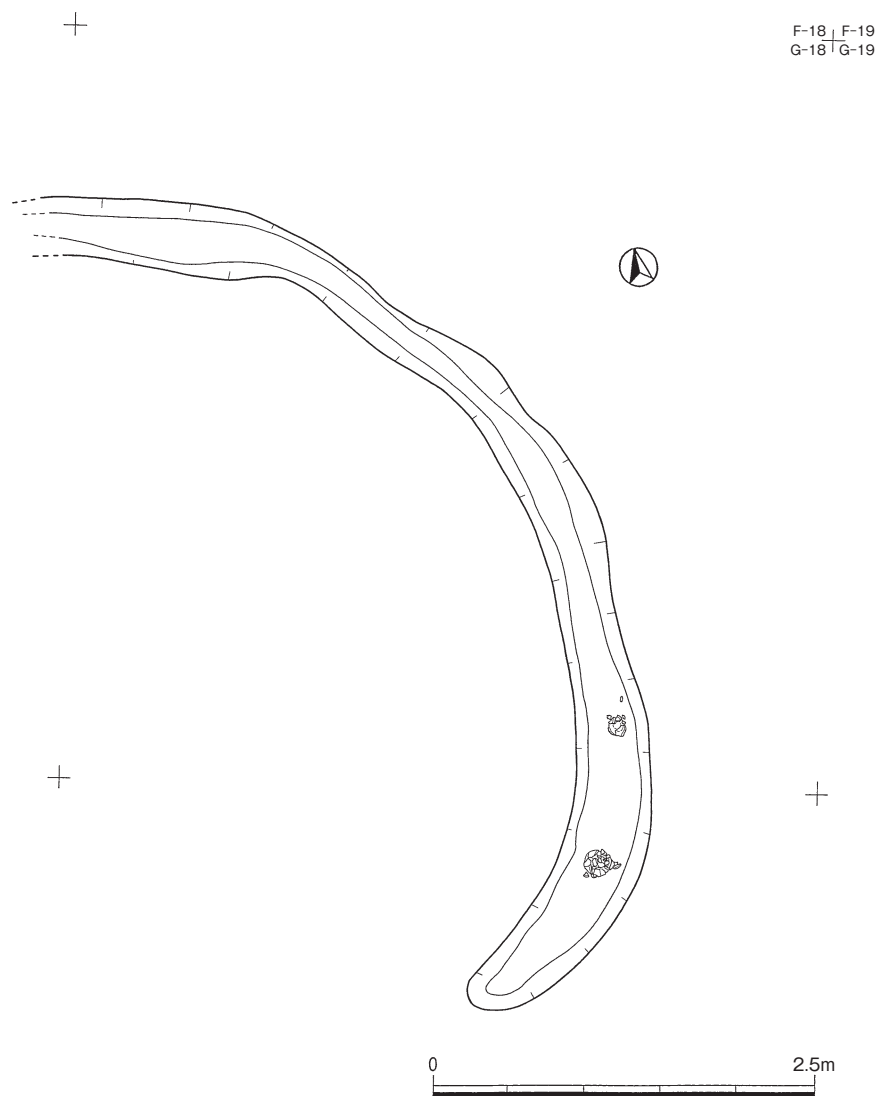


第 121 図 2号溝遺物出土状況

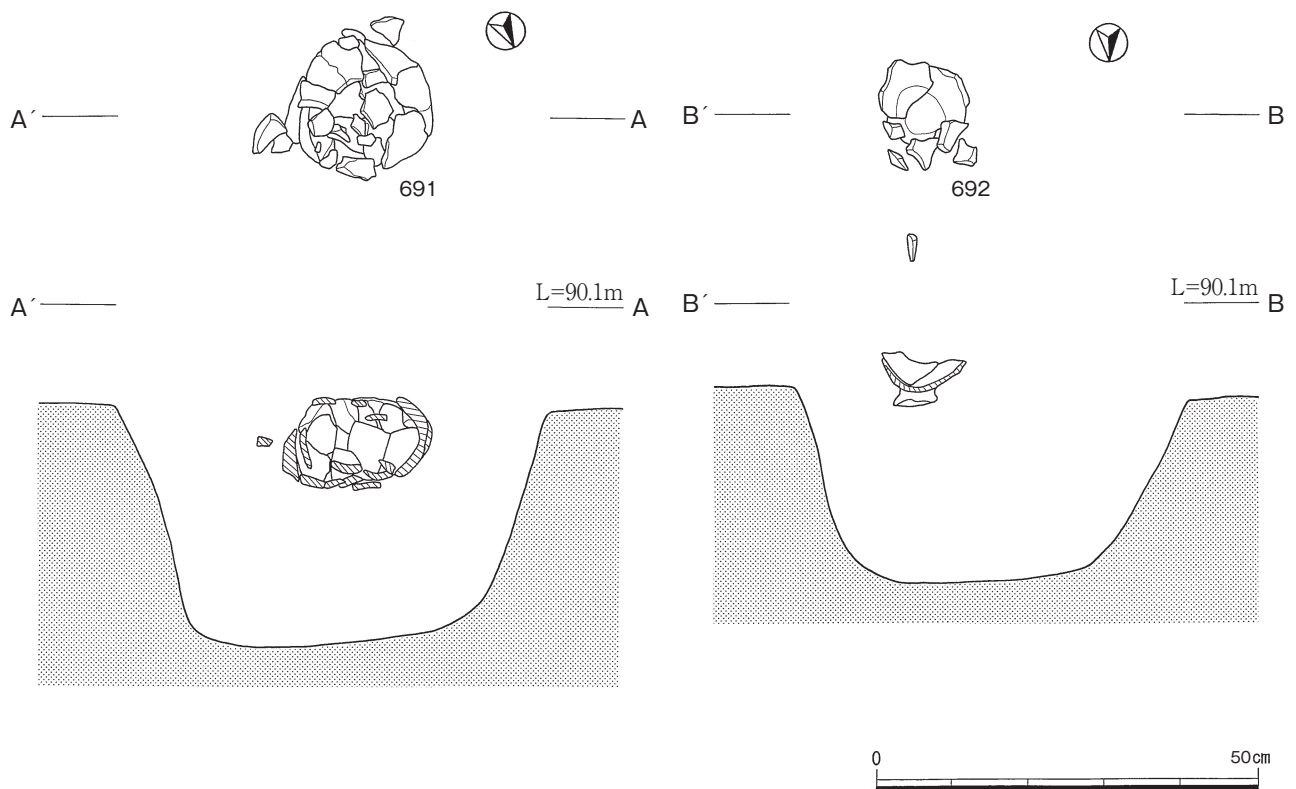
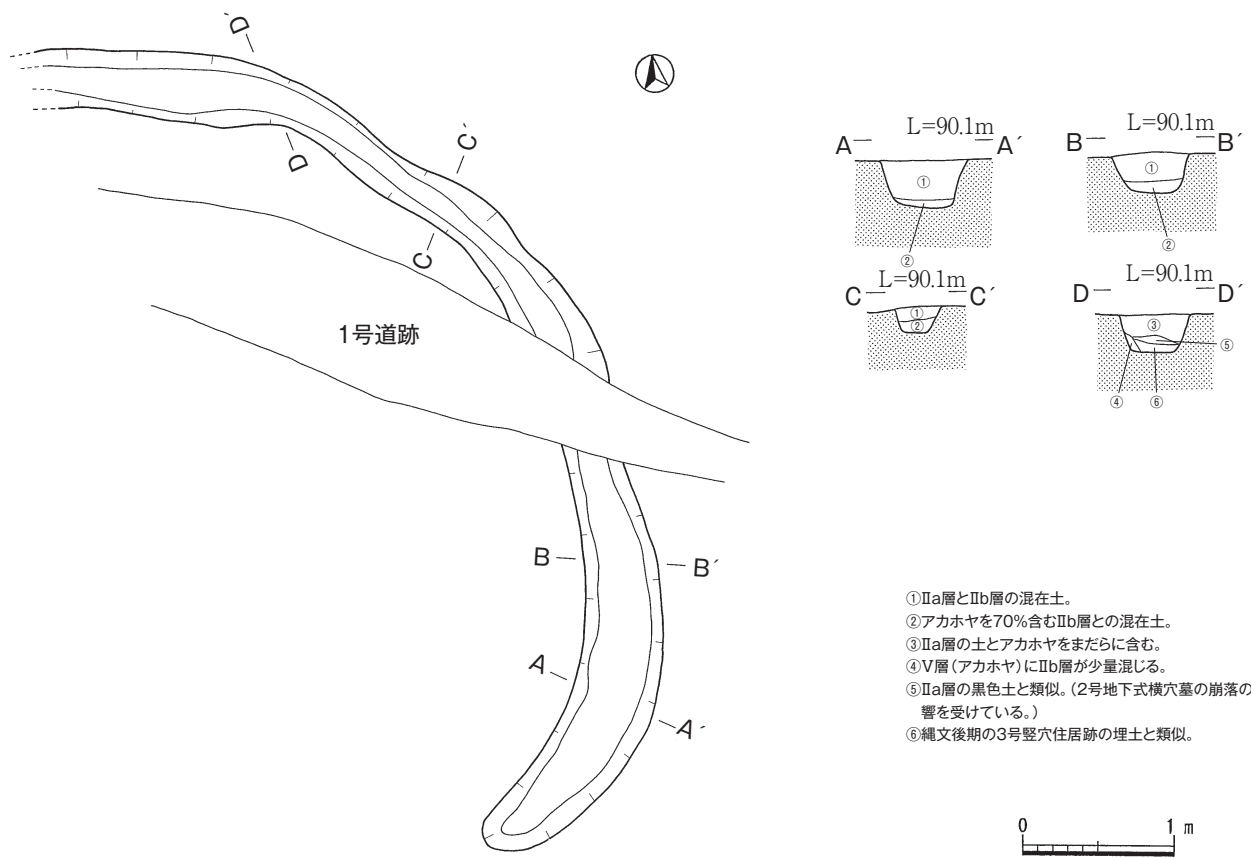
部分に当たる。最大幅は 1.75 m，検出された先端までの長さは約 3.2 m である。最大の深さは 0.52 m で，黒色土の埋土中からはほぼ完形となる土器が出土した。

677～679 が 1 号溝から出土した土器である。677 は甕形土器の口縁部である。「く」の字状の口縁部を持ち，口唇端部が平らにヨコナデされており，口縁部下位には三

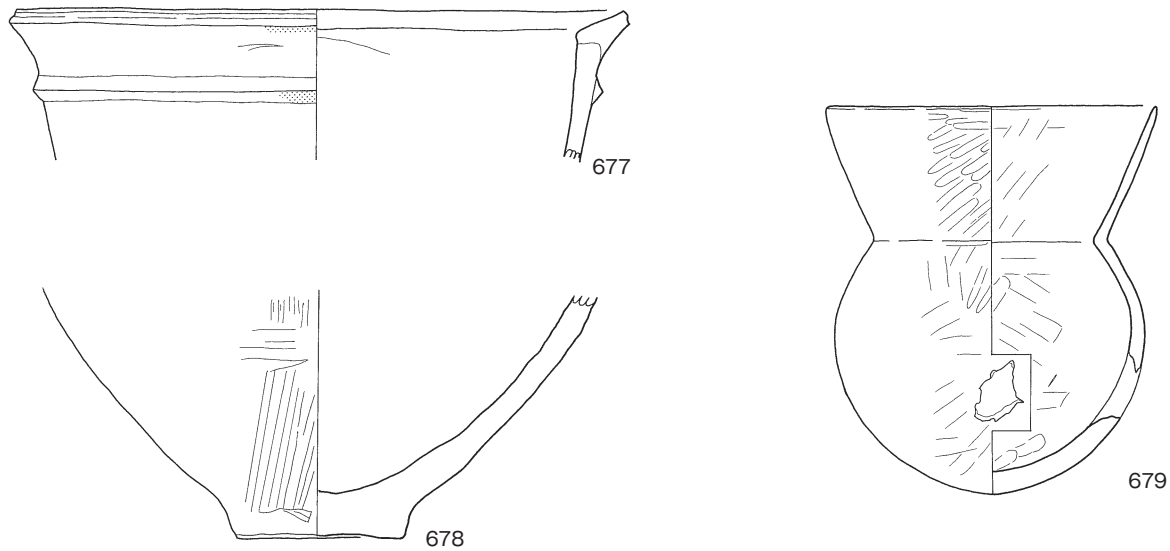
角突帯が 1 条巡っている。678 は壺形土器の底部付近と考えられる。安定した平底で，底部から胴部への立ち上がりが滑らかでシャープである。これらはいずれも弥生時代中期の山ノ口式土器と考えられる。679 は小型丸底壺（埴）の完形品である。体部は球状で，胴部には穿孔が見られる。古墳時代の土師器である。



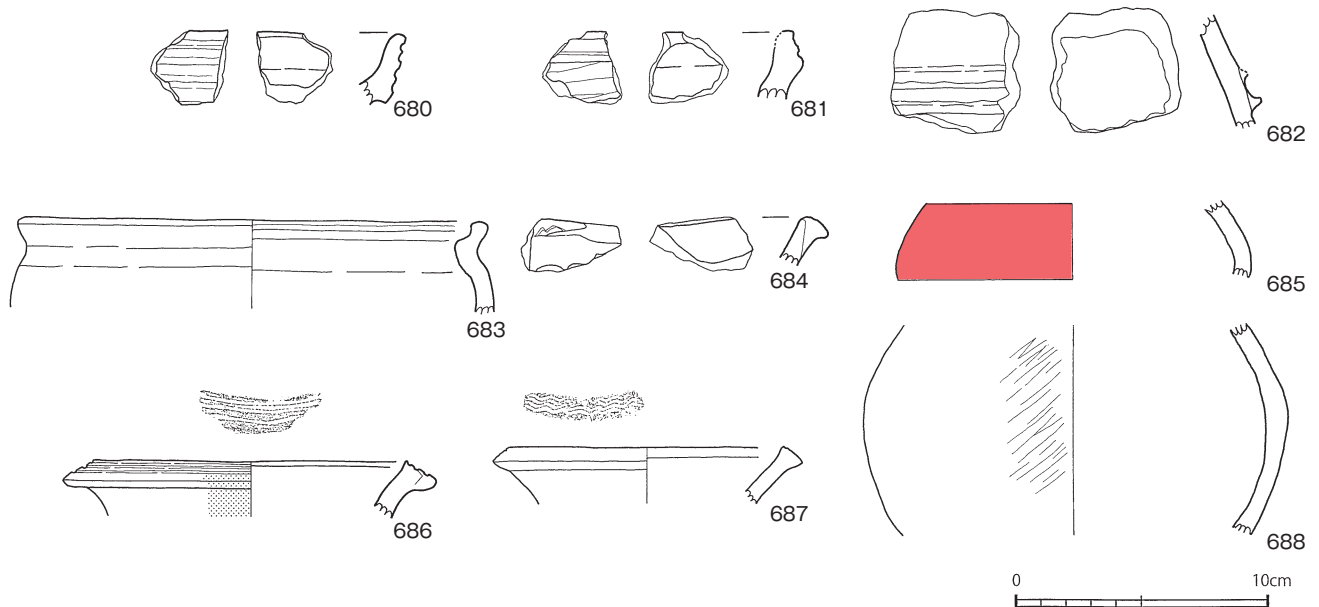
第 122 図 3号溝



第 123 図 3号溝遺物出土状況



第124図 1号溝出土の土器



第125図 2号溝出土の土器 1

2号溝 (第120・121・125・126図 680~690)

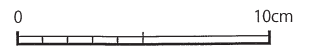
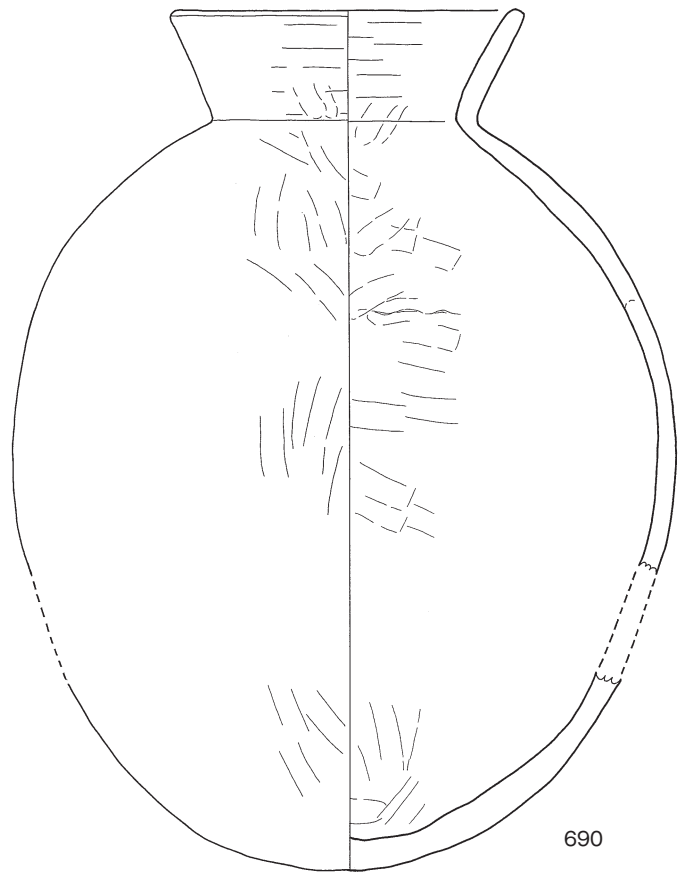
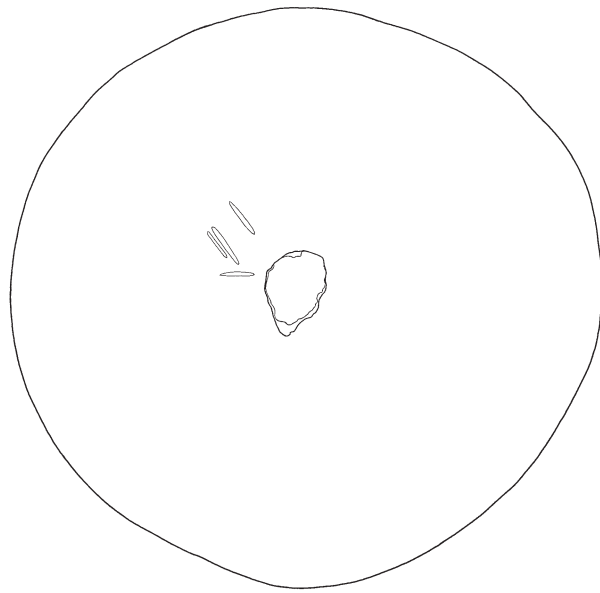
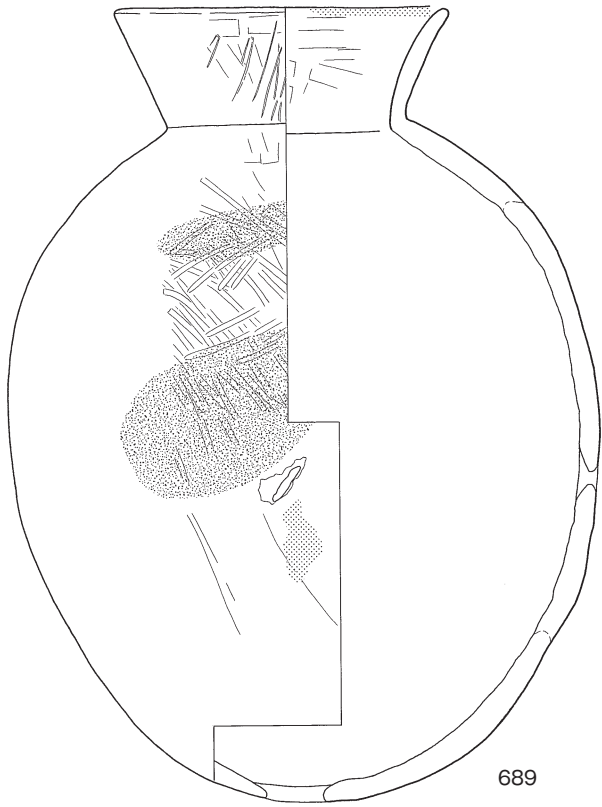
G・H-18・19区のV層で確認された。平成25年度の調査では2号溝A・Bとして調査したが、平成28年度の調査で、これが繋がったことから、改めて2号溝という呼称で呼ぶこととなった。

規模は、検出した南北の径(端部と端部の間隔)が、10.8mあり、西側は市道の敷設により切られているため残存部分では4.15mある。幅は最大で1.76m、残存している最大の深さは0.88mである。断面形状は、最下面が幅80cm程度であり、堀方の両側は急勾配で直線的となっており、U字状の溝と言える。この溝からは、今回の調査で検出された3号地下式横穴墓のほかにも、『町田堀遺跡』に掲載の18号地下式横穴墓も検出されてお

り、合わせて2基(以上)の地下式横穴墓がこの溝をもとにして作られていたことが判明した。

この溝の黒色土の埋土からも完形品を含む土器が多数出土した。680~690が2号溝から出土した土器である。680・681・683は縄文時代後期あるいは晩期頃の土器と考えられる深鉢と浅鉢である。682・684・685・688は弥生時代中期の壺形土器と考えられる。686・687も壺形土器であるが、古墳時代のものである可能性が高い。

689・690はほぼ完形となる壺形土器である。いずれも口縁部が大きくラッパ状に開き、頸部が締まり、胴部にかけては大きく膨らむ器形のもので、底部はともに丸底である。古墳時代に位置づけられるものである。689は胴部中位と底部に穿孔が見られ、祭祀に伴う可能性が考えられる。



第 126 図 2号溝出土の土器2

3号溝 (第 122・123・127 図 691~693)

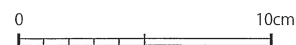
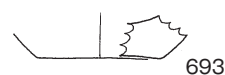
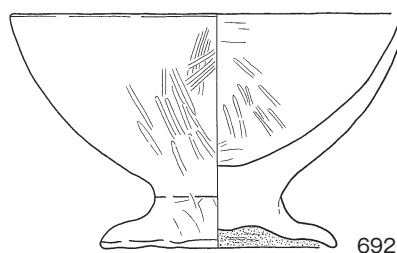
G-18 区のV層で検出された。規模は、検出された南北の径(端部と端部の間隔)は6.22 mあり、西側は市道の敷設により切られているが残存部分は約2.2 mある。深さは最大で0.33 mほどである。

埋土は黒色土を主体としており、土器片も混じっている。691~693は3号溝から出土した土器である。691は2号溝から出土した689や690と類似する壺形土器である。692は鉢形土器で、半球形の体部に若干上げ底となる不整形の底部が付く。693は壺形土器の底部と考えられる。



4号溝 (第 118・119 図)

I-19 区のV層で検出された。規模は、東西方向の長さが1.8 m、最大幅は0.55 m、最も深い部分で0.18 mである。西側は市道の敷設工事により削られている。埋土は黒色土である。図化できる遺物は出土していない。



第 127 図 3号溝出土の土器

(3) 土器破碎祭祀遺構 (第 128~131 図 694~707)

1号溝の南側にあたる部分から、土器片が大量に出土した。それらは細かく割れたものが多く、接合作業を進めた結果、完形品として復元できるものもあった。このような土器の出土状況は平成25年度調査時にも見られ、この周辺が地下式横穴墓や円形周溝墓などからなる墓域であることから、個々の地下式横穴墓などの墓、または墓域全体の祭祀の場である可能性が高いとし、「土器破碎祭祀遺構」の呼称が付された経緯があった。そこで今回のこの土器の出土状況も同様に判断することとした。

この遺構の範囲は、長径3.50 m、短径1.80 mにも及び、遺物の出土する上下の範囲は25cmの間に集中している。

土器破碎祭祀遺構から出土した土器を4点図化した。704は粉々に割れていたためパーツ毎に実測を行い、完形品として復元したものである。二重口縁に見える大型の壺形土器で、大きく外反した口縁部の外面のほぼ中央部に三角形の突帯を付すことで二重口縁の土器に見せている。頸部は締まり、外面には突帯を巡らして刻目を付している。胴部は大きく膨らみ、ゆっくりとすぼまりな

がら底部へと向かう。底部は底径が10cmほどで、全体の長さや胴部の大きさに比して極めて小さい。

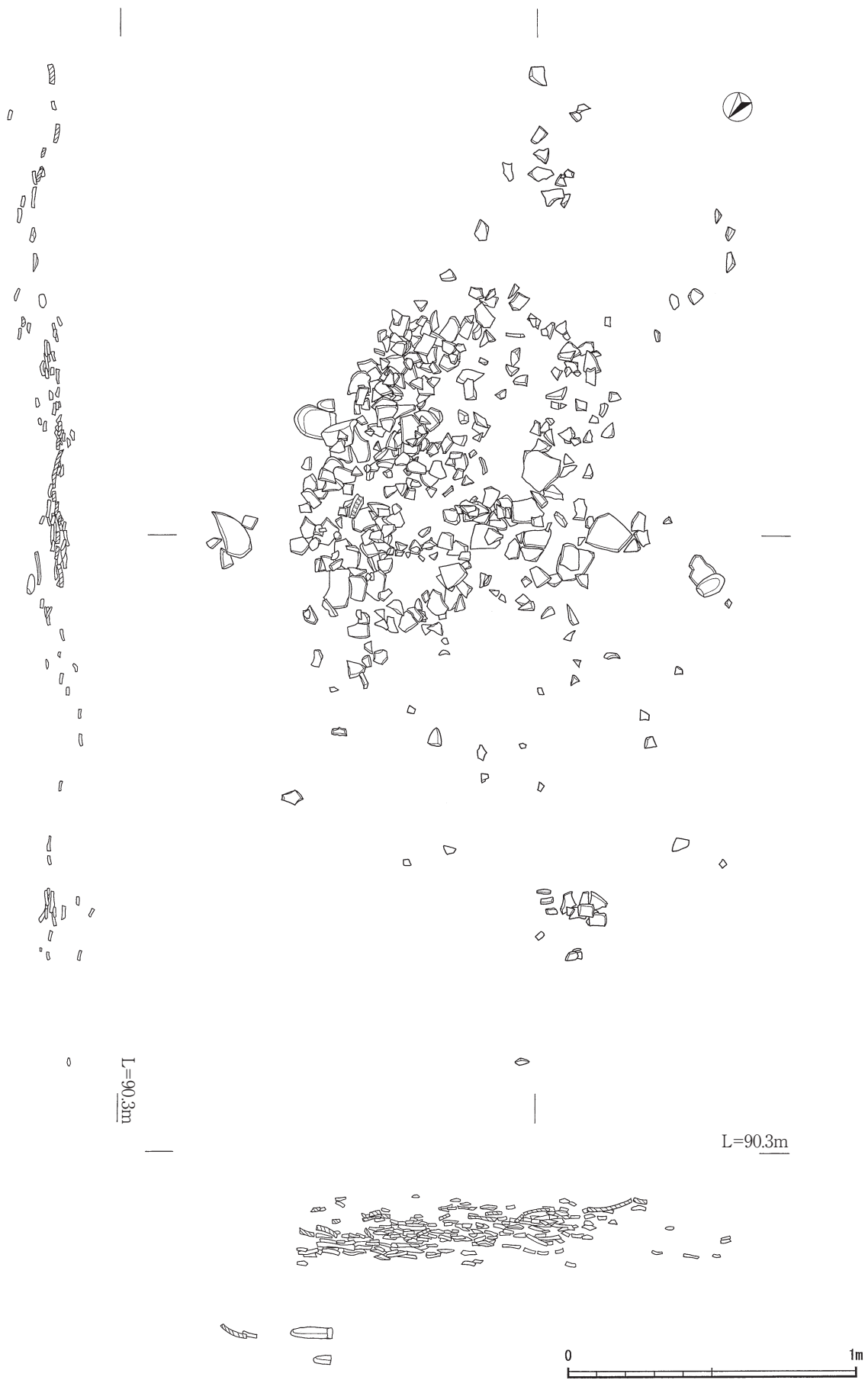
705~707は壺形土器の底部である。705は平底、706、707は丸底である。

また、この遺構からは縄文時代後期と考えられる5類土器694~702及び磨石703も出土している。時代的にはそぐわないが遺構内から出土した遺物として、ここで取り上げた。

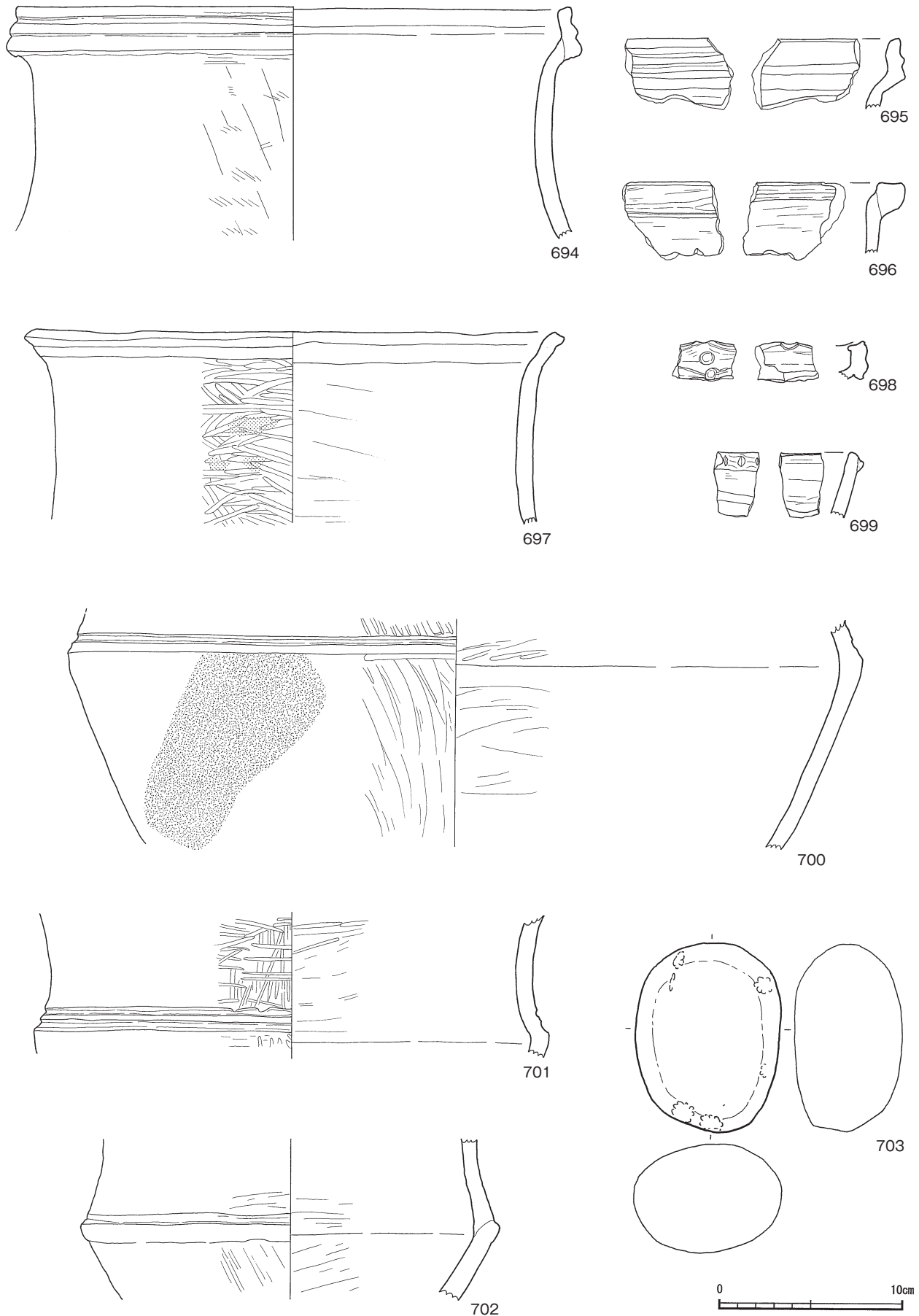
694~699は口縁部である。694と695は、口縁部に幅広い浅い沈線を2条施し口縁部を強調している。696は肥厚した口縁部を作り出しているが沈線は施されていない。697は直立気味に胴部上位まで立ち上がるが、口縁部は大きく外反し細めの沈線を1条施している。698は、口唇部から口縁部にかけて凹点を縦に施している。699は、口唇部に刻目突帯を貼り付ける。

700~702は胴部で屈曲部を残す。いずれも沈線を施し、屈曲を強調しているが、701は2条を、700、701は1条を巡らせている。

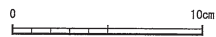
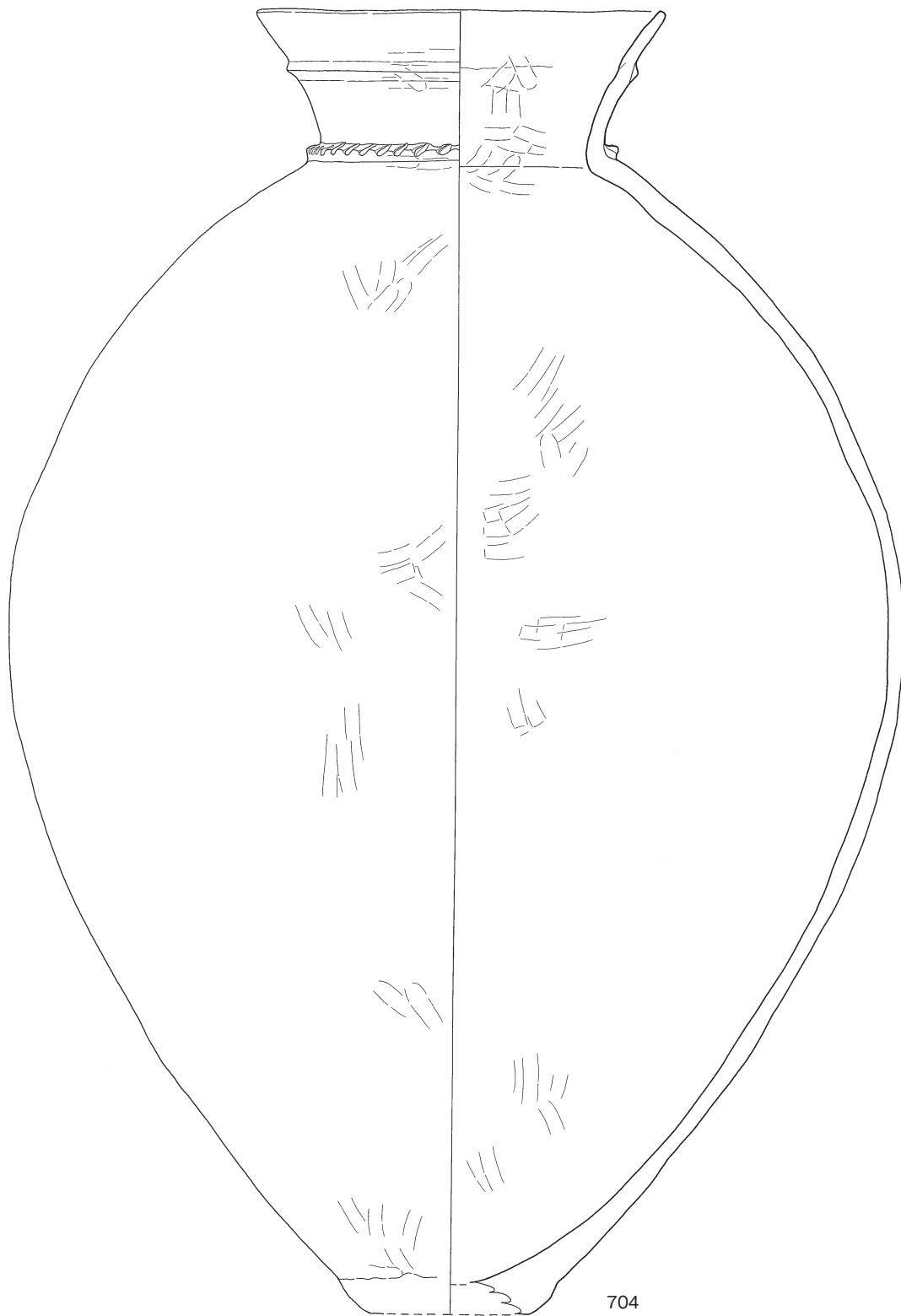
703は、磨り敲きの痕跡がわずかに残る磨石である。



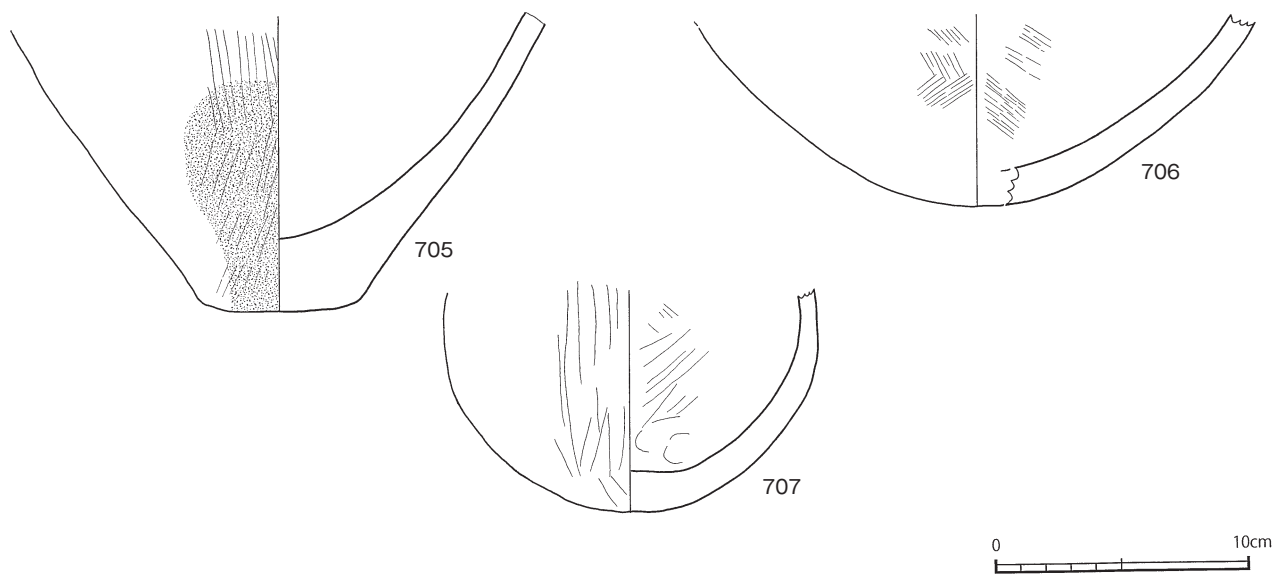
第 128 図 土器破碎祭祀遺構



第 129 図 土器破碎祭祀遺構内出土遺物 1



第 130 図 土器破碎祭祀遺構内出土遺物 2



第 131 图 土器破碎祭祀遺構内出土遺物 3

2 遺物

(1) 土器 (第 132~141 図 708~839)

古墳時代の土器には、甕形土器、鉢形土器、壺形土器、高坏、手捏ね土器が見られる。

甕形土器 (第 132~135 図 708~762)

708~713 は口縁部が滑らかに外反し、内面には明確な稜が残り口縁部の下部には突帯が巡るものである。この突帯は、三角形の突帯の上から刻みを施し、布目痕が認められる (708~712) が、無文のもの (713) も見られる。突帯は、布目の圧痕が見られるものは、内面の稜の位置よりも下部に付されているのに対して、無文のものは稜の位置と考えられる部分に付されている。708~710 は、突帯の接着痕上下のラインが刻みの力の入れ具合により歪みが生じている。709 や 710, 711 には、突帯の貼り付け部分の上部または下部に、横あるいは斜め方向の傷跡が見られるが、これは布目を押圧する棒状の施文具の先端によって付けられたものと考えられる。傷跡は、突帯の上部あるいは下部のいずれか一方に付いていることから、突帯の下部あるいは上部いずれかの方向から付されたことがわかる。器面調整は、内外面ともにナデによるものが多く、ハケ目調整も一部に見られる。

714~729 は口縁部が緩やかな「く」の字状となる口縁部を持つ甕形土器である。714・719・725 などのように内面の稜が明確なものも見られるが、多くは稜が不明瞭なものである。口唇部は若干浅い凹みを持つもの (714・715 など) や平らに成形してあるもの (718・721 など)、丸みを持つもの (716・717 など)、三角形気味に仕上げるもの (725・729 など) など、さまざまな形状が見られるほか、端部がまっすぐに整えられておらず、波打ったようになっているもの (715・720 など) も見られる。器面調整はナデ調整が多く見られる。また、ハケ目が明瞭に残るものと、ハケ目の幅はわかってハケ目の木目が明確でないものが見られるが、これは調整に使用するハケ目板がすり減ったものを使用していたことも考えられる。頸部から口縁部にかけて跳ね上げるようなハケ目痕が見られるものも多い。

730~740 は胴部を中心としたものである。口縁部付近のものも多く、内面の稜は全体的に不明瞭である。また、外面は口縁部に向かって「く」の字状に緩やかに外反する。胴部は割合に膨らむもの (731・737 など) と、それほど膨らまないもの (730・738 など)、すぼまるもの (739 など) などのタイプが見られる。器面調整はナデ調整が多く見られ、ハケ目が明瞭に残るものと 1 本 1 本のハケ目が明確でないものの両方がある。また、ハケ目の幅が異なるものも見られる。

741~750 は底部付近であるが、脚部の先端は欠損する。甕形土器本体の体部の下部は、割合に広い底部から

上部の胴部・口縁部方向に向かってゆったりと膨らんで行くもの (741・746 など) と、狭隘な底部から急角度で広がって行くもの (742・748 など) のタイプが見られる。なお、図で断面をケバで表現しているものは、その部分から折れたり割れたりしているもので、断面の形状を表現しているものは、主に剥離した形状を表している。器面調整は内外面ともにハケ目調整が多く見られる。

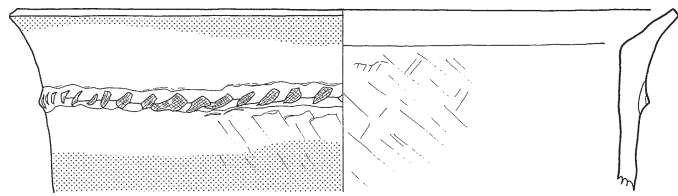
751~762 は底部 (脚部) である。甕形土器の底部 (脚部) としているが、鉢形土器の底部 (脚部) も含まれている。しかし、両者を明確に区別することが困難であったため、底部として一括して掲載した。

脚部の高さや端部の形状もさまざまである。751 は脚部の高さが低く、端部は太く丸まっている。752 はやや高く直線的な脚部で、端部は丸まる。753 も直線的な脚部で、端部は小さく丸まる。754 は体部の下部が広く、脚部は反り気味となっており、端部はやや尖り気味に丸まっている。755 は脚部が先端に向かうほど薄くなる直線的な脚部をもつ。756 は脚部全体が緩やかにカーブしており、端部は丸まっている。757 は大きく開く脚部である。759 はさらに大きく開く脚部である。760 は緩やかにカーブした脚部の端部が大きく開いている。761 は逆に脚部全体が内側に向けてカーブしている。脚部の高さが最も高いタイプと考えられる。脚部の断面を見ると、756・757・759・761 などは体部の下部を製作後に、脚部を貼り付けて製作されていると考えられる。

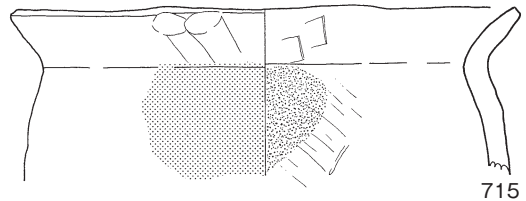
鉢形土器 (第 136 図 763~778)

763~778 のうち、763~767, 769, 770 は口縁部, 768, 771 は頸部~胴部, 777, 778, 774 は底部である。また、772, 773 は完形に復元された、割合に小型のものである。

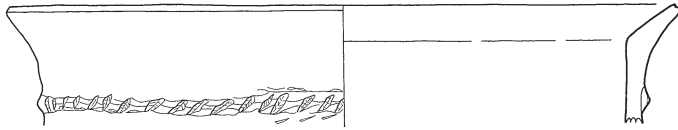
口縁部のうち、763 は開いた体部が一旦立ち上がって幾分内湾気味となるもので、口唇端部は若干波打ったような状況になっている。器面調整は、内外面ともに粗い指ナデ調整が行われている。764 は体部から口縁部がほぼ直線的に開くもので、一部に指頭圧痕が残るものの、丁寧なハケ目による器面調整が行われている。765 は胴部がほぼまっすぐに立ち上がった後に、口縁部の端部が短く外反する。口唇部は平らに成形されている。766 は直線的に広がる胴部から、口縁部がさらに大きく外反する。767 は直立気味の胴部から、口縁部が大きく外反するものである。769 と 770 は口縁部の端部よりやや下位に突帯が付されるもので、突帯の付される位置には違いが見られる。770 は内面に段が見られ、口唇部は幾分平坦部をもつ作りである。769 の口唇部は丸みを帯びている。768 と 771 は頸部付近である。768 は外面に煤の付着が見られ、内面の稜は明確ではない。771 は、内面の稜は幾分明確である。器面調整は 768 は内面にハケ目調整が行われており、1 本 1 本のハケ目が明瞭である。



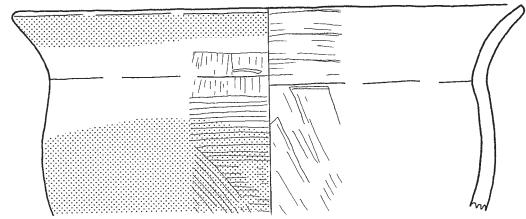
708



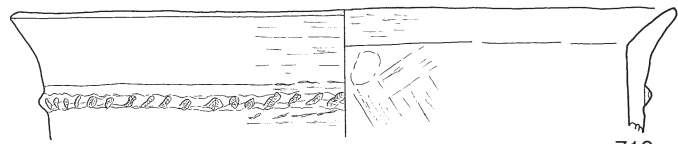
715



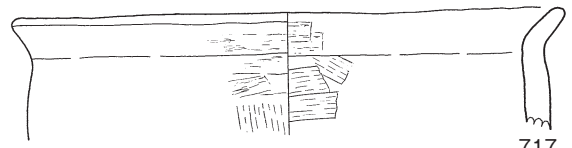
709



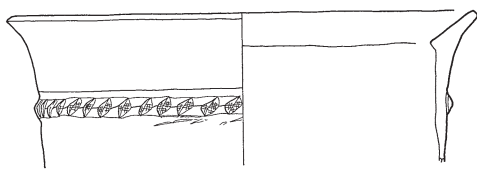
716



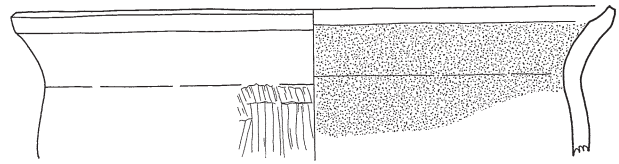
710



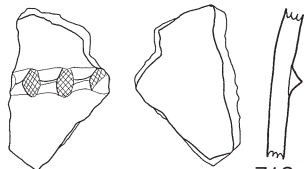
717



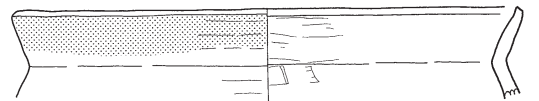
711



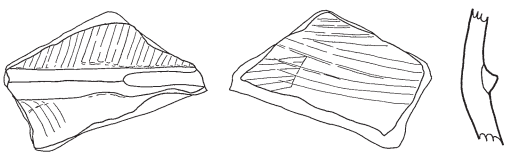
718



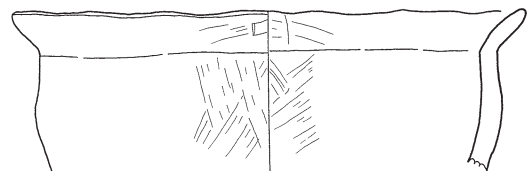
712



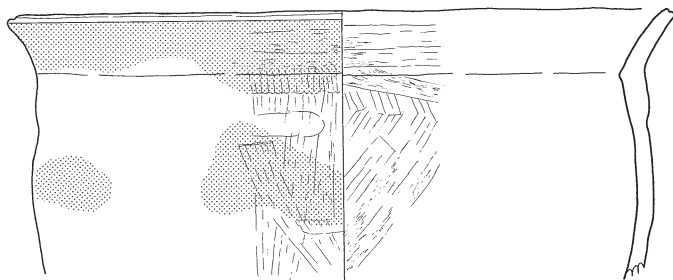
719



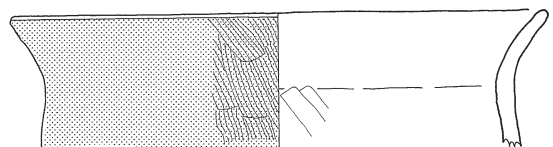
713



720



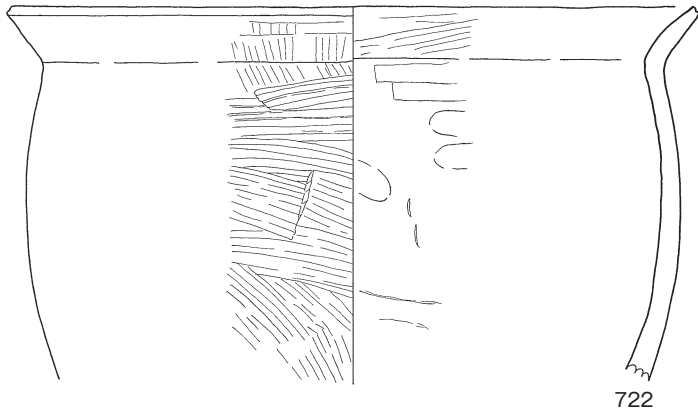
714



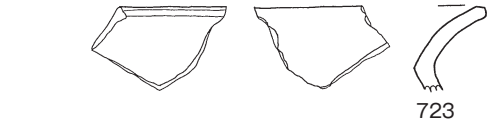
721



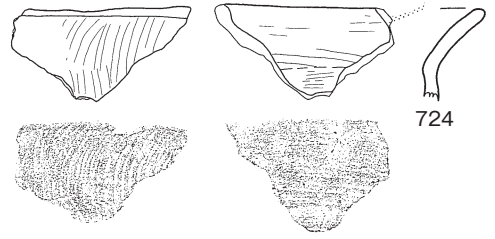
第 132 図 古墳時代の土器 1



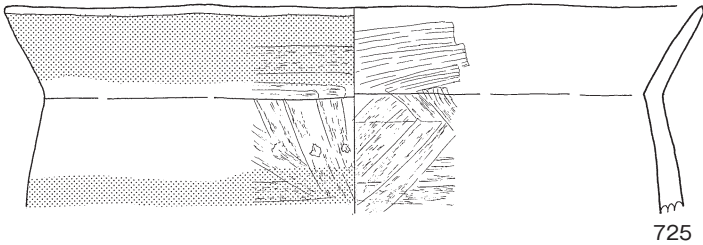
722



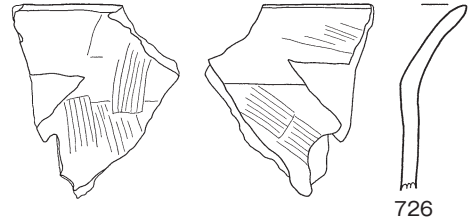
723



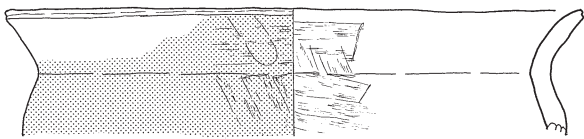
724



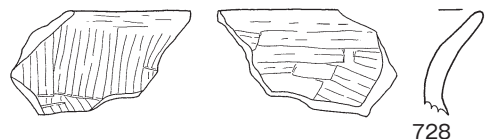
725



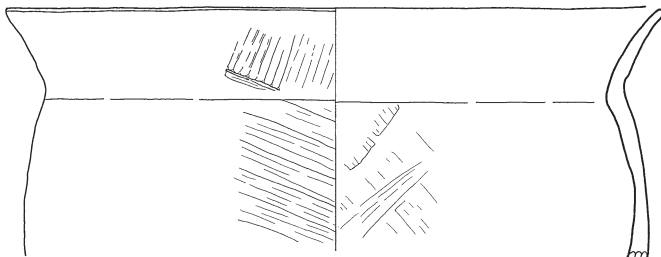
726



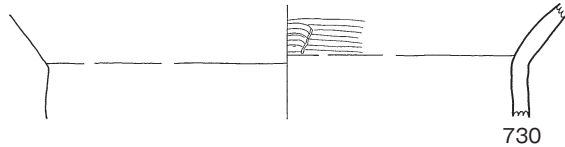
727



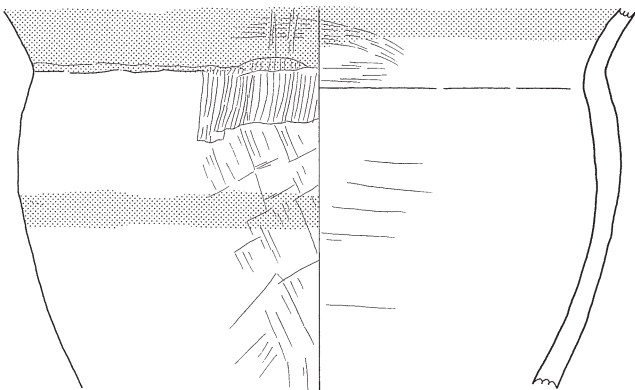
728



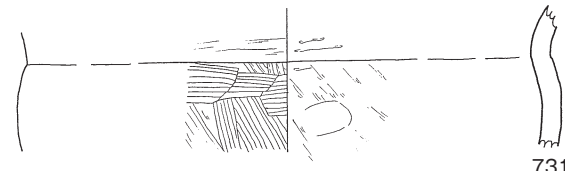
729



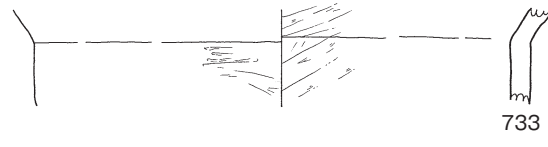
730



732



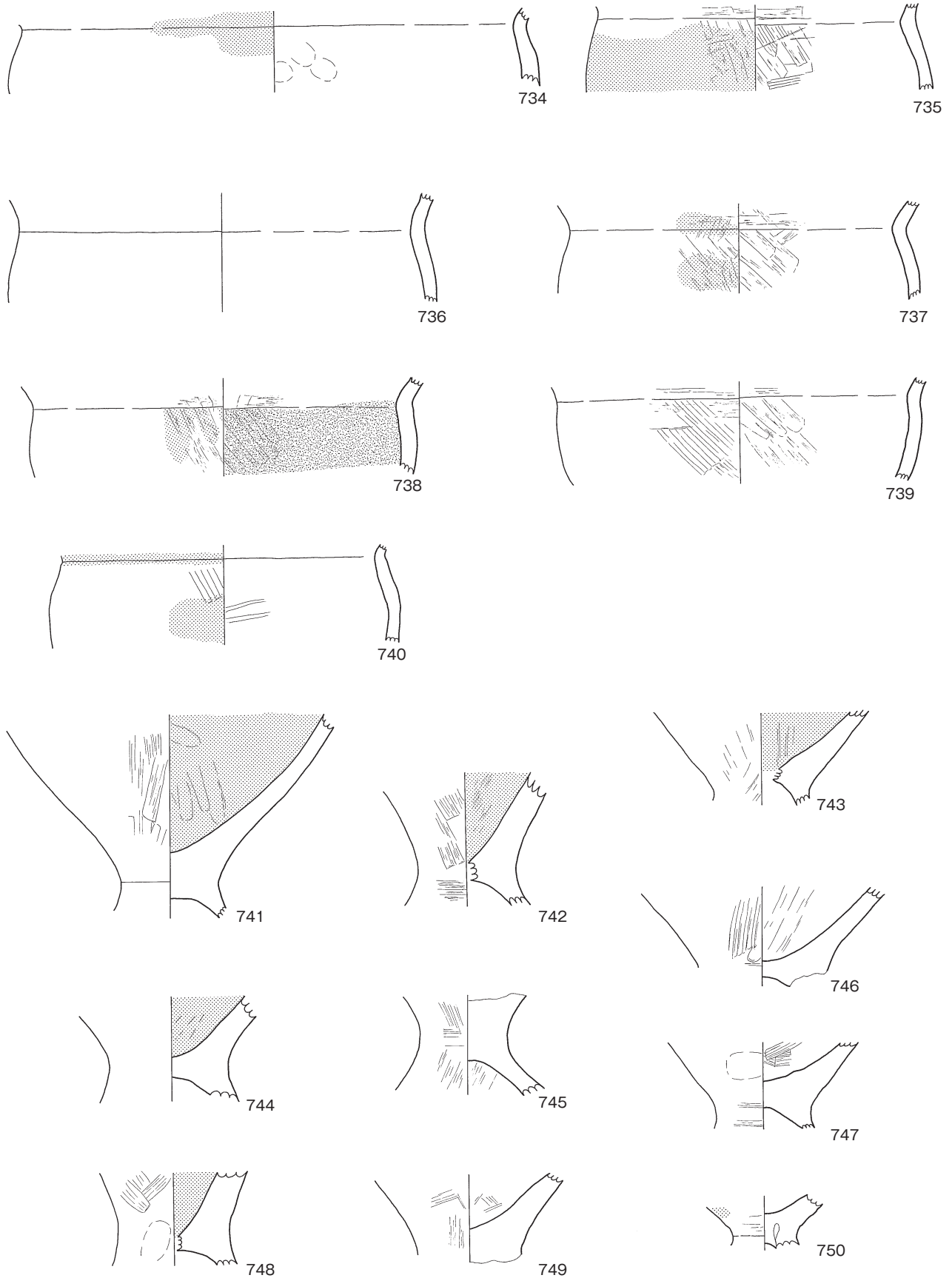
731



733



第 133 図 古墳時代の土器 2



第 134 図 古墳時代の土器 3

772は鉢形土器の中でも甕形土器と類似した器形のもので、本体には比較的高い脚台が付き、端部は外側に大きく開いている。外面には煤の付着も見られる。それに対して、773は772と同様の高い脚台を持つものであるが、口縁部が若干内湾気味に直立しており、772と比べて全体的に小型である。774・777・778は底部である。脚部の高さがそれほど高くなく、底部（脚部）が甕よりやや小さいため、口縁部が大きく開くタイプの鉢形土器のものと考えられる。

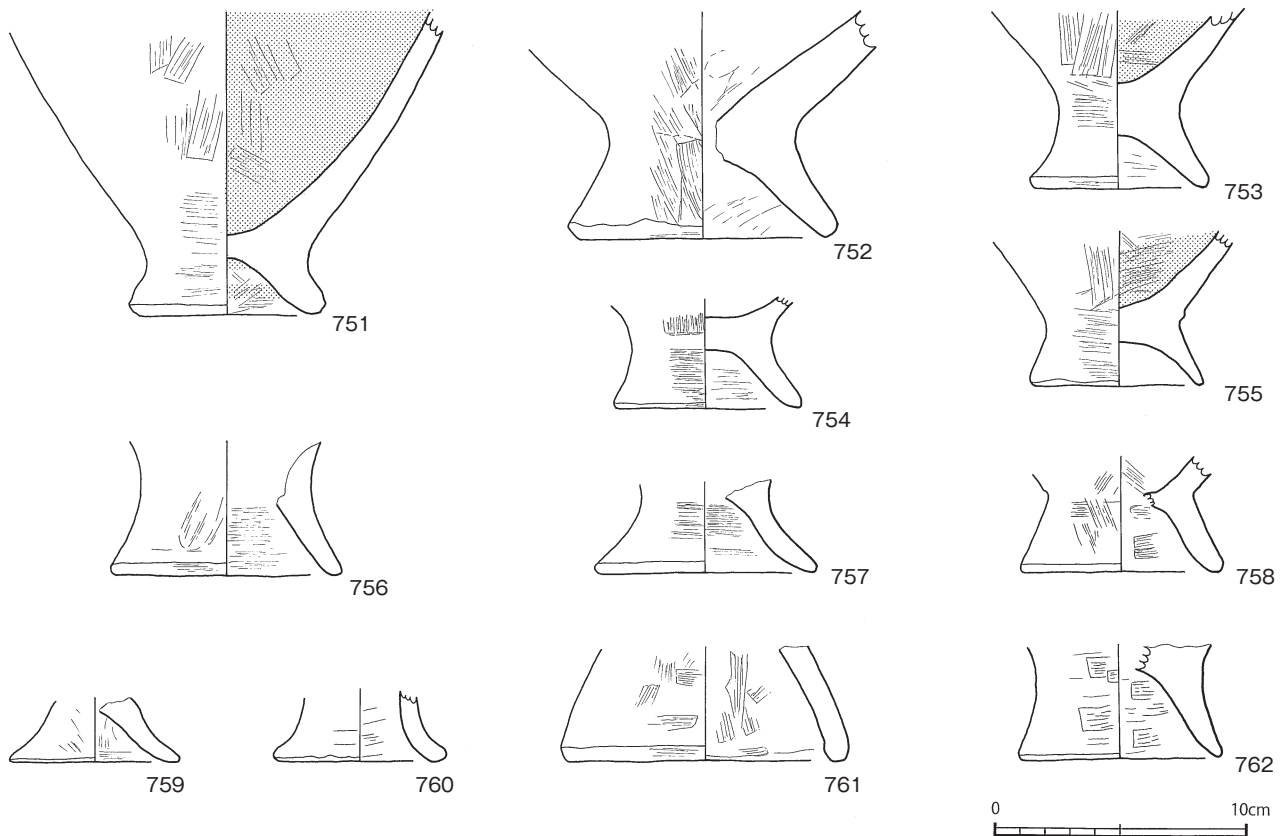
775と776は小型の鉢形土器と考えられる完形品である。大きさは手捏ね土器と同程度の大きさであるが、器面に指頭痕が顕著に見られず、小さなハケなどを用いて器面調整が行われていることなどから、鉢形土器と判断

した。775・776ともにコップ状を呈しており、底部は平底である。776は幾分傾いた形状をしている。

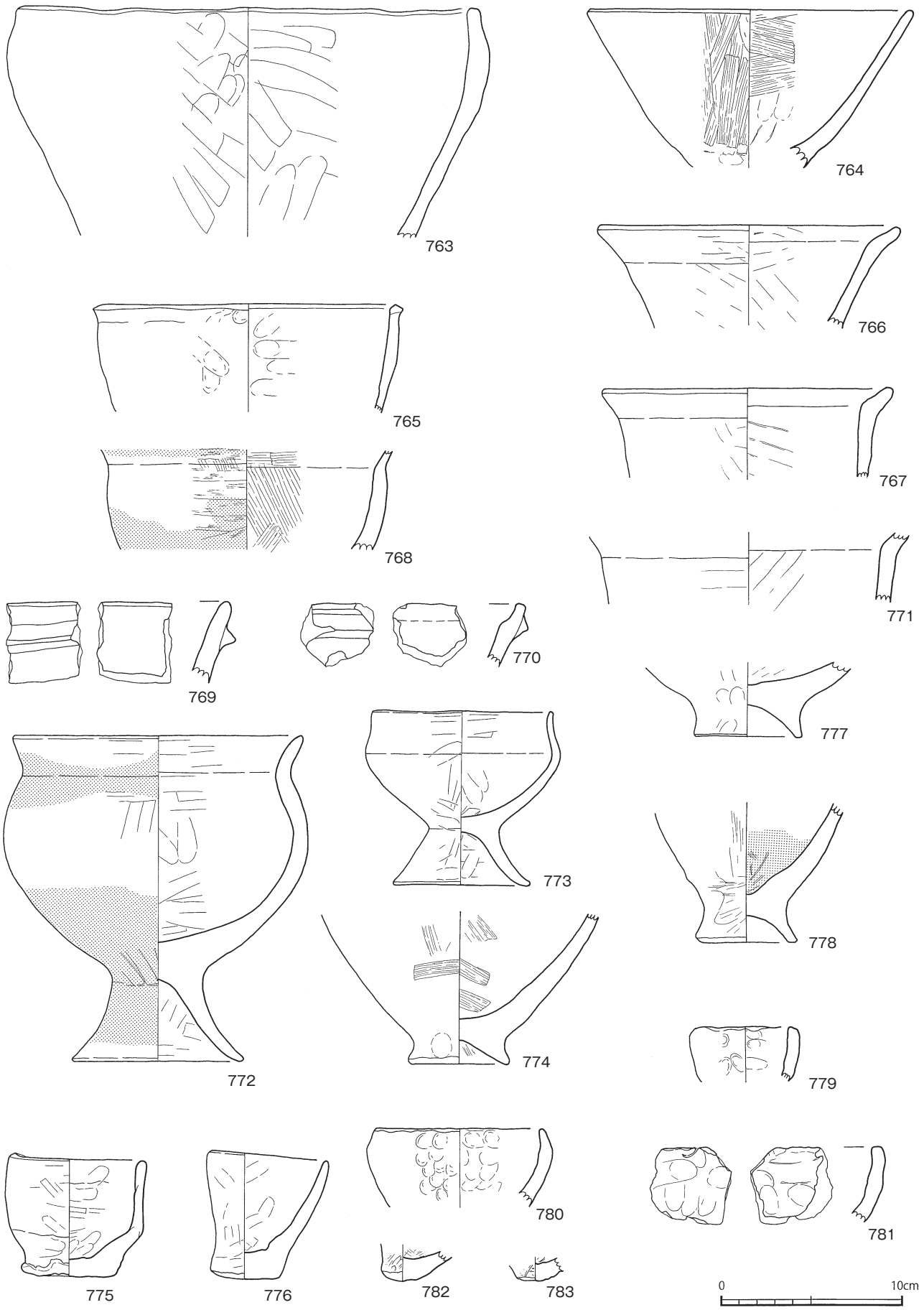
手捏ね土器（第136図 779~783）

779~783は手捏ね土器である。全て破片であることから、全体の形状をつかむことは難しい。

779~781は口縁部である。器形的には、開くタイプの体部が口縁部に向かって直立気味となり、端部は三角形状から平らに面取りしたような形状である。内外面共に指頭圧痕が顕著に見られる。782と783は底部である。いずれも不安定ながら平底を表現していると考えられる。これらの手捏ね土器は、平底の鉢形土器をモチーフとしているように思われる。



第135図 古墳時代の土器4



第 136 図 古墳時代の土器 5

壺形土器 (第 137~140 図 784~835)

784~835 は壺形土器である。

784 は頸部から口縁部を欠くが、胴部から底部にかけて復元できたものである。全体的な形は卵形または砲弾形といえよう。肩部から胴部にかけては大きく膨らみ、胴部から底部にかけては次第にすぼまっていく。底部は厚い。器面調整は内外面ともにハケ目によって丁寧に調整が行われている。785 は完形に復元できた壺形土器である。頸部はすぼまり、口縁部はカーブを描きながら大きく外反し、口唇部は平坦面を作り出している。頸部内面には明瞭な稜が見られる。胴部は大きく膨らみ、胴部から底部にかけては次第にすぼまっていく。全体的な形状は、784 と同様、卵形または砲弾形といえよう。器面調整は内外面に部分的に指頭圧痕が残り、全体としてはナデ調整である。底部は若干丸みを帯びた平底である。

786~792 は口縁部である。786 と 787 はほぼ直線的に外反するものであるが、786 は端部に向かって次第に薄くなっており、幾分内湾している。787 は、全体的に同じ厚さで端部に向かっていく。788 はほぼ直線的に外反した口縁部が、端部付近で大きく開く形状をしている。口唇部は平らに成形し、さらに小さく凹ませている。789 は大きく開いた口縁部で、平らに成形した口唇部は小さく凹ませている。

790 は内湾気味に立ち上がる口縁部で、口唇部は平らに成形されている。791 は外反して立ち上がった口縁部が、端部ではさらに小さく外反している。頸部の外面には小さな段が見られる。792 は大きくカーブしながら外反した口縁部の端部を内側に折り曲げて平らに成形し、口唇部には、全面に櫛描波状文が付されている。

793~795 は頸部から胴部や肩部を中心とした部分、796~806 は胴部及び胴部の破片である。793 は頸部から口縁部にかけて大きく外反しており、頸部の内面には明瞭な稜が見られる。肩部が張り、胴部に向けては大きく膨らむ。胴部以下は欠損のためどのような形態か不明であるが、残存する胴部からは、偏球状に膨らむ胴部が予測される。胎土は土師質で、1~2mm大の礫を多く含む。794 と 795 は頸部から胴部上半の肩部にかけての部分である。頸部から胴部に向かっては、794 が大きく開くものに対して、795 は広がり方が若干小さい。

胴部のうち、796 は卵形と考えられる壺形土器の胴部の最大径付近に、かまぼこ状ないしは台形状の突帯が巡るものである。場所により突帯の全体的な形や断面の形状が異なっている。797 は 793 と類似した形状の壺形土器の胴部である。胴部の上部、頸部付近には横方向の沈線が上には少なくとも2条、その約1.6cm下に2条の沈線を引く。また、2条の沈線の間約1.6cm幅の部分には右下がりの斜沈線が描かれる。この土器は、赤みの強い土器であり、他地域からの搬入品の可能性も考えられる。

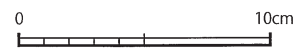
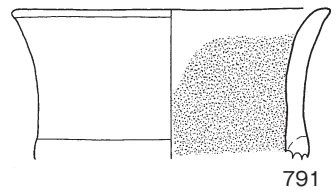
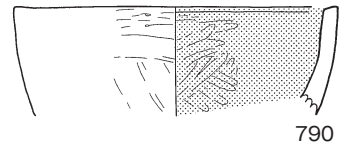
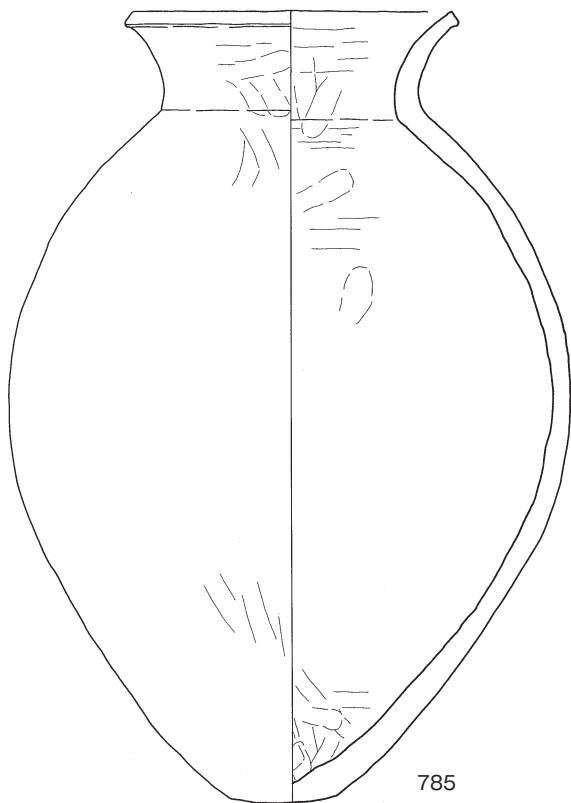
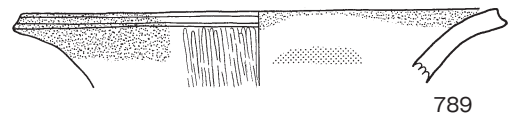
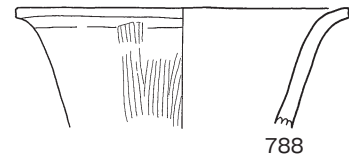
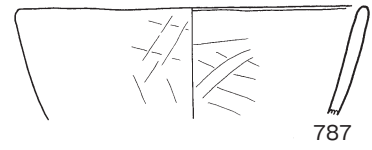
798 からは胴部の破片である。798 から 804 は胴部の突帯部分である。刻目を持たない三角形の突帯が、798 は2条、799 は少なくとも1条それぞれ巡らされている。800~804 は突帯に刻目が付されるものである。801 はかまぼこ状あるいは台形状の突帯に、鋭く短い刻みが施されている。802 は平らな楕円形状を呈する刻目が施されている。803 と 804 は浅い刻目を付している。805 と 806 は沈線で文様を描くが、沈線はいずれも直線であり、805 は鋸歯状か矢羽根状と考えられ、806 は沈線が2本交わっていることがわかる。

807~835 は底部を中心としたものである。807 は卵形を呈する壺形土器の胴部の最大径を有する辺りに802 と類似したような平らな楕円形状の刻目を持つ突帯が巡っている。底部は安定した平底である。器面調整は、内外面ともにハケ目により丁寧に調整がなされている。808 は丸底の厚い底部である。809 は 808、810 と類似する不安定な丸底である。811 は安定した平底で、若干上げ底となっている。813 も 811 に似た形状を呈している。812 もこれに似るが、接地面の外への張り出しがほとんどない。

814~835 は底部のさまざまな形の一括して掲載した。814 は丸底、815 は狭い底部を持つ、厚みのある平底である。

818 は平底気味の丸底で、接地面はある程度広い。819 は広く、安定した平底である。822 は狭い底部を持つ、厚みのある平底で、やや安定性には欠ける恐れがある。823 は丸底気味の平底で、やや安定性を欠くものである。826 は厚みのある丸底の底部である。827 は厚みのある安定した平底で、胴部に向かっては緩やかにカーブしながら膨らんでいる。829 は平底の底部で、胴部への立ち上がりはほぼ直線的である。830 の底部は丸底となる可能性が大きい。832 は球形状を呈する壺形土器である。底部は極めて狭く、不安定な平底である。833 は不安定な平底気味の丸底で、胴部に向けては直線的に立ち上がるような状況となる。

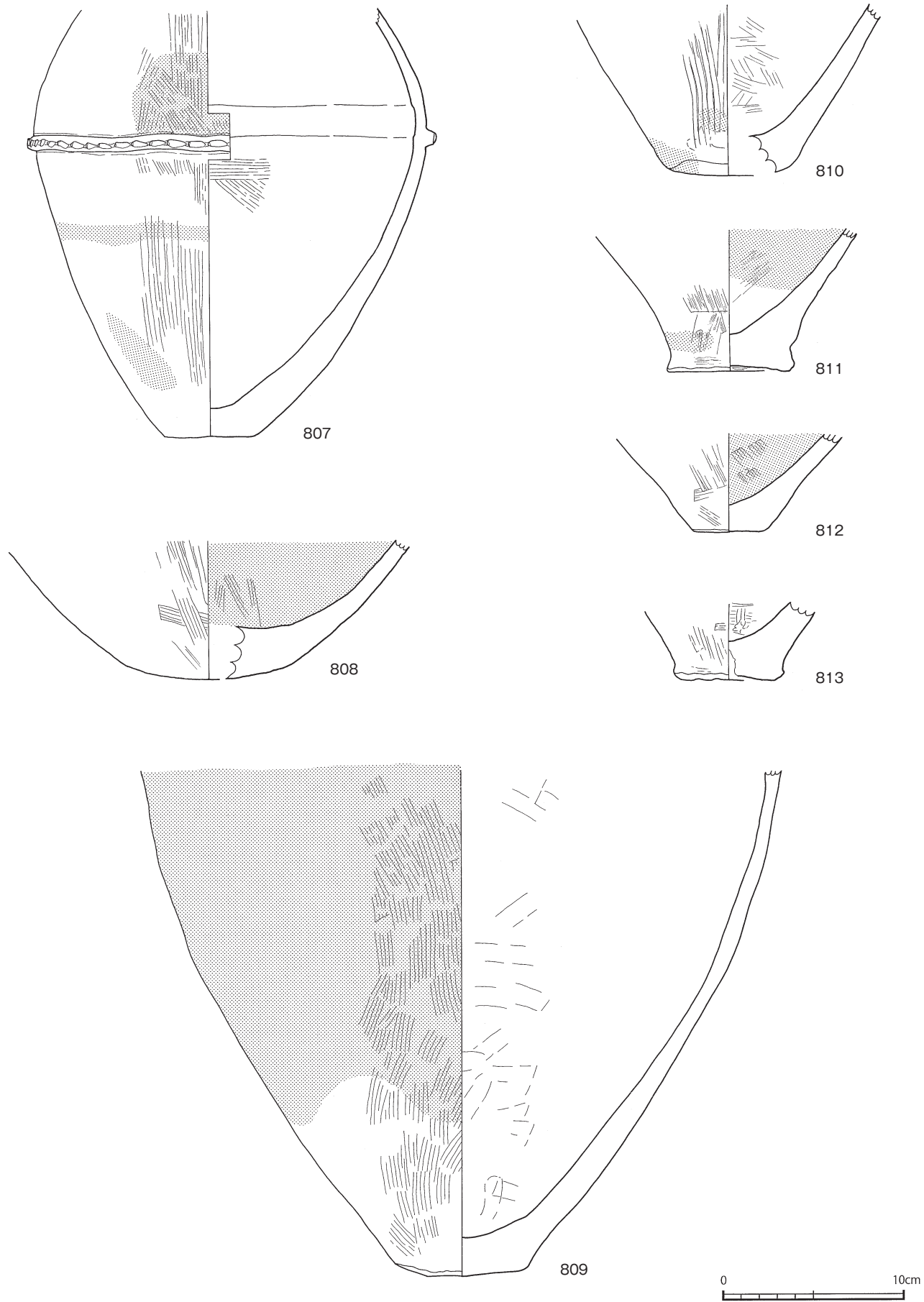
816 は極めて厚い底部を持ち、幾分上げ底気味の平底である。817 も平底といえるが、面積としては非常に狭く、安定した平底とはいえない。820 は厚い底部を持つ、丸底気味の平底で、安定性はそれほどよくはない。821 は狭い平底を持つ底部である。胴部に向けては大きく広がりながら立ち上がる。824 は厚い底部を持つ丸底のもので、胴部に向けては大きく広がる。825 は狭い平底を持つ底部で、内面の中央部は若干凹んでいる。828 は極めて安定した平底の底部である。胴部に向けては、割合に急傾斜に近い状況で立ち上がる。831 は狭い平底の底部で、胴部に向けては緩やかなカーブで立ち上がって行く。834 は底部そのものは欠くが、胴部に向けては緩やかなカーブで立ち上がっていく。底部そのものは丸



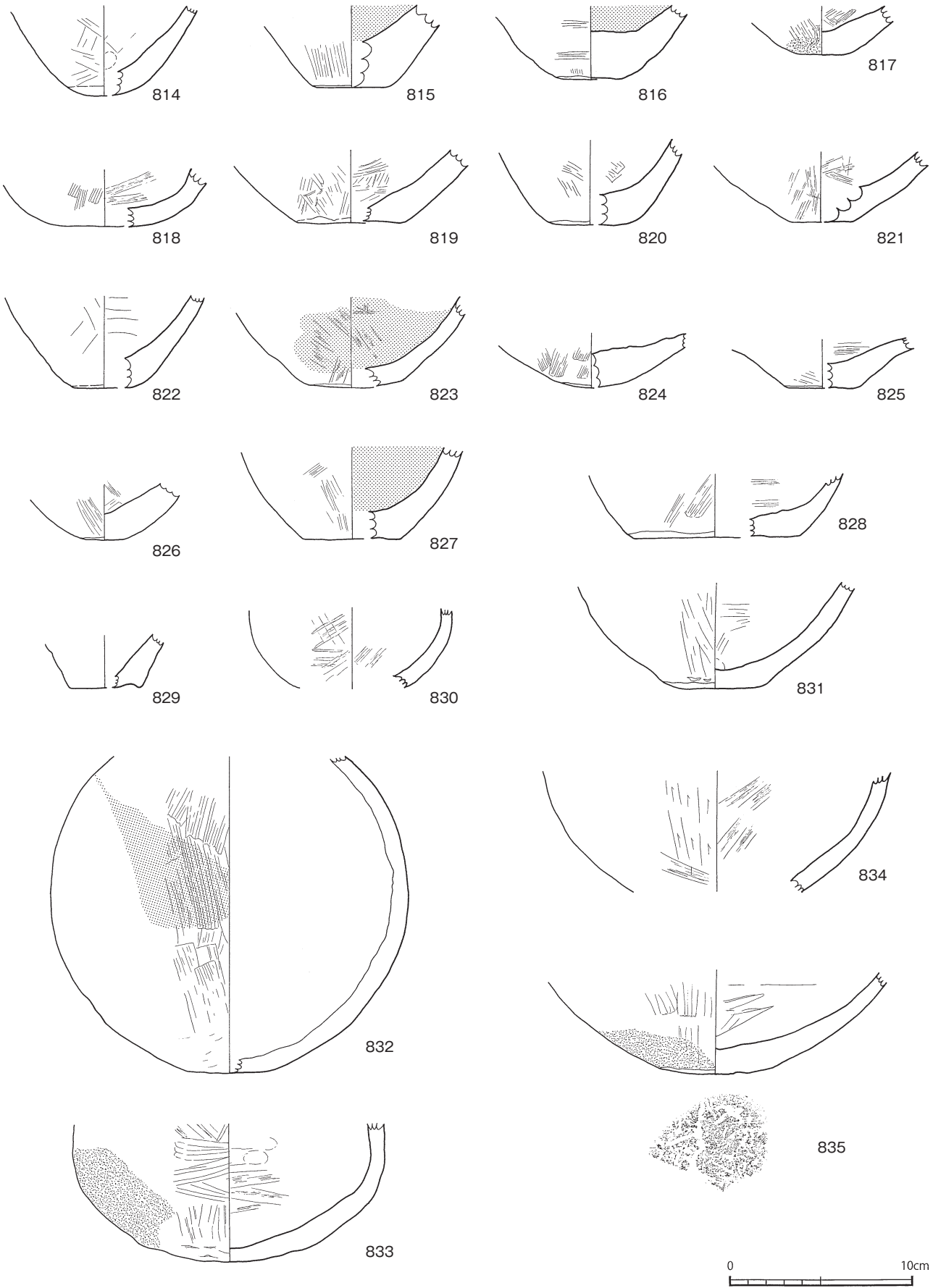
第137図 古墳時代の土器6



第 138 図 古墳時代の土器 7



第 139 図 古墳時代の土器 8



第 140 図 古墳時代の土器 9

底と考えられる。835は丸底の底部である。外底にはヘラのような工具によると思われる痕跡が見られる。胴部に向けては緩やかなカーブで立ち上がっていく。

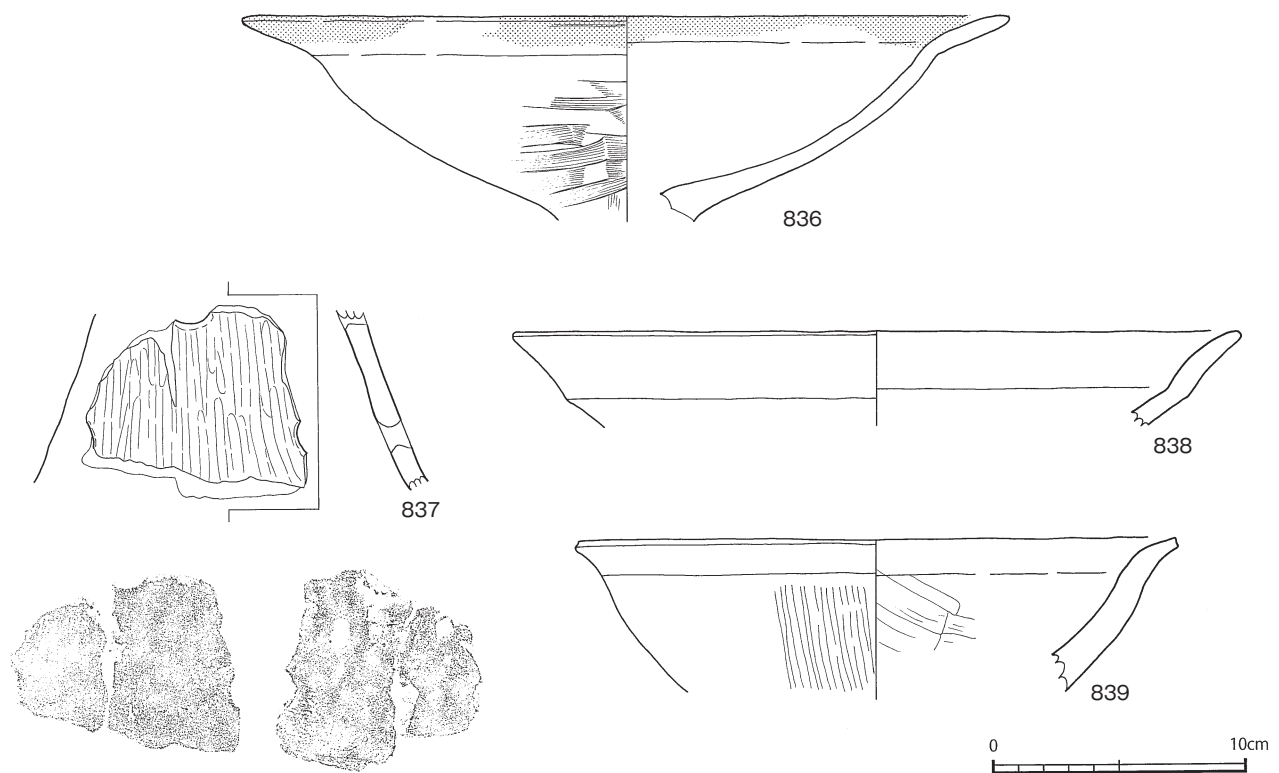
高坏 (第141図 836~839)

836~839は高坏である。836・838・839は坏部、837は脚部である。

836は緩やかに膨らみ気味の坏部が、口縁部にかけては大きく外反しており、尖り気味の端部は丸められている。

838は直線的な体部から口縁部に向かって明瞭な稜を設け、その後外反して口縁部へと続いている。口縁部は全体的に丸みを帯びており、端部も丸みを持つ。内面にも段が見られる。839は器壁の厚い坏部であり、口縁部付近のラインは丸みを帯びて滑らかである。

837は脚部であるが、大きく開いた脚部には土器製作時に開けた穿孔が少なくとも3か所に見られる。破片を見る限り、穿孔のある位置の間隔から考えると、下部の穿孔は4か所に見られると考えられるが、上部の穿孔が何か所あるかは不明である。



第141図 古墳時代の土器 10

第5節 II層の調査

本節では、II層をベースとした埋土を有し、III層上面以下で検出された遺構の調査と、II層を包含層とする遺物について報告する。調査は、第1地点及び第2地点を調査区として実施した。また、掘立柱建物跡として想定復元できるピット群についても、時代、時期の特定が厳しいことから、ここで取り上げることとする。

なお、II層出土遺物の中で、縄文時代後・晩期、弥生時代、古墳時代の土器についてはそれぞれの節で取り上げた。ここでは古代以降の焼物と、時代を特定できない石器について取り上げる。

1 遺 構

(1) 掘立柱建物跡 (第143~155図 840~894)

1号掘立柱建物跡 (第145・146図 840・841)

E-10・11区のV層上面で検出された。この1棟のみ、柱筋は北から西に約5°傾くが、東西南北の軸に最も近い。東側と西側の柱穴にそれぞれ重複が確認されるものの、基本的には2間×2間の総柱建物である。

柱穴の規模は、平均するとP713・P712・P710が直径約30cmで深さ約60cm、P714西側・P715・P717が直径約30cmで深さ約70cm、P714・P716・P718が直径約30cmで深さ約80cm、P720・P724・P707が直径約25cmで深さ約60cm、P720西側・P723・P707西側が直径約30cmで深さ約60cmである。

柱穴の状況については、P713・P712・P710の柱穴列は、東側及び西側よりも若干浅い。また、東端及び西端の柱穴列は、各々のすぐ内側の柱穴列よりも若干深くなっている。こうした状況から、この建物は1棟であり、東側並びに西側の最も外側で重複する柱穴列は、すぐ内側の柱穴列の添柱であった可能性を想定している。この場合、柱穴間の距離は約1.6mである。

なお、調査段階では、P713~710の柱穴が共通する(再利用か)、重複した2軒の掘立柱建物と想定しているが、報告書の作成に際して、上述のとおり解釈を変更した。

柱穴埋土内には、比較的遺物が多く含まれていたが、いずれも中岳Ⅱ式や石皿などの破片である。主なものを挙げる。P712の埋土中やや下位から、840の石皿の破損品が出土した。花崗岩製で、わずかしが残っていないが作業面を観察できる。P707の埋土中位から、841の横刃型石器が出土した。ホルンフェルスの横長剥片を素材とし、下端に刃部を設けている。右側辺にはごく簡単な調整剥離が観察される。

2号掘立柱建物跡 (第147・148図 842~852)

E-10・11区のV層上面で、1号掘立柱建物跡と重複して検出された。柱筋は北から東へ約22°傾く。1号と同じく、2間×2間の総柱建物である。

柱穴の規模は、平均すると、P633・P725・P739が、直径25~30cm程度で深さは40~60cm程度、P738・P711・P709が、直径25~30cm程度で深さ40~50cm程度、P705・P706・P722が、直径約30cmで深さは30~40cm程度である。

柱穴の状況については、中央のP725が最も深く、次いでP739が深い。そのほかの東側、西側及び北側の柱穴は上記2基より浅いがほぼ深さが揃っている。また、中央、北側及び東側にみられる柱穴の重複や段掘りについては、建て替え等による可能性が高いと解釈している。柱穴間の距離は、約2mである。

柱穴埋土内には、比較的遺物が多く含まれていたが、いずれも中岳Ⅱ式や石皿などの破片である。主なものを挙げる。P738の埋土中から、842の軽石加工品が出土した。右半部が欠損しているが、全体は半割した卵形を呈するもので、上部に弧状に内湾する底面が認められる。P705の埋土上半から、843、844などが出土した。844は胴部屈曲部で、器面調整を兼ねて明確な稜線を形成し、その上位にやや浅い凹線を丁寧に施文している。P706の底面近くからは、845などが出土した。中岳Ⅱ式の口縁部片で、口唇部をやや肥厚させている。摩耗により文様は不明。P711の埋土下半から土器片や石皿の小片などが出土した。846は中岳Ⅱ式の口縁部で、摩耗しているが口縁部外端に横位の浅い凹線文を2条観察できる。浅鉢のような器形と想定される。P633からは、土器片や石器が埋土の下半と検出面からまともに出土した。848のみ埋土中位から出土している。847、848は中岳Ⅱ式である。847は口縁部形状が略方形を呈する点、848は浅鉢のような器形となる点が特徴である。849は、打製石斧と考えられる。砂岩のやや厚みのある剥片を素材とし、刃先は、潰れて丸く滑らかになっており両端が破損している他、色調が赤変しており被熱した可能性がある。また、正面並びに背面の稜もわずかに滑らかになっている。850、851は、ホルンフェルスの横長剥片を素材とした打製石斧と想定される。851は、正面中央部分の稜がわずかに丸く滑らかになっており、背面側刃部には使用に伴うと考えられるステップ状の剥離が観察される。852は、破損品のため詳細は不明だが、頁岩の薄い剥片を素材とした剥片石器である。平坦剥離で素材剥片の打瘤部を除去している。刃先並びに刃部の稜は、わずかに角が取れて滑らかになっている。

3号掘立柱建物跡 (第149・150図 853)

1、2号から西へ約5mほど離れた、D・E-9・10区のV層上面で検出された。柱筋は、2号と同様、北から東へ18°ほど傾く。中央部の柱に重複があるが、1、2号と同じく2間×2間の総柱建物跡である。

柱穴の規模は、平均すると、P677・P749・P743が

直径約 30cm で深さ 25～40cm 程、隣接する P 676・P 750・P 742 が直径約 30cm で深さ 20～40cm 程、P 733・P 682・P 748 が直径約 30cm で深さ 25～40cm 程、P 663・P 667・P 671 が直径約 30cm で深さ 40～50cm 程である。

柱穴の状況については、P 733 のみ特に深いのが、それ以外の柱穴は比較的深さが揃っている。その中で、四隅に位置する柱は比較的深く、中央に位置する P 749 と 750 は比較的浅い。また、P 677～743 と P 676～742 の柱穴列の関係については、この 2 列のみ重複している一方で四隅の柱穴は深く重複がないこと、柱穴の位置関係をみると P 676～742 列は建物の中心からやや外れることなどから、P 676～742 列を P 677～743 列の添柱の可能性が高いと解釈している。(調査段階では建て替えと解釈していた。) この場合、柱穴間の距離は約 2m で、わずかに東西方向が長い。

なお、想定時期が異なるものの、西側には古墳時代の土器破碎祭祀遺構が、東側には弥生時代の遺物集中域が隣接している。また、3号の周辺ではピットが多数確認されたが、3号との関連は見いだせなかった。

遺物は、P 733 の埋土上位から 853 の敲石が出土した。砂岩製の大型の磨・敲石で面上にあばた状の敲打痕が見られる。被熱による赤化剥落が生じている。

4号掘立柱建物跡(第151～154図 854～887)

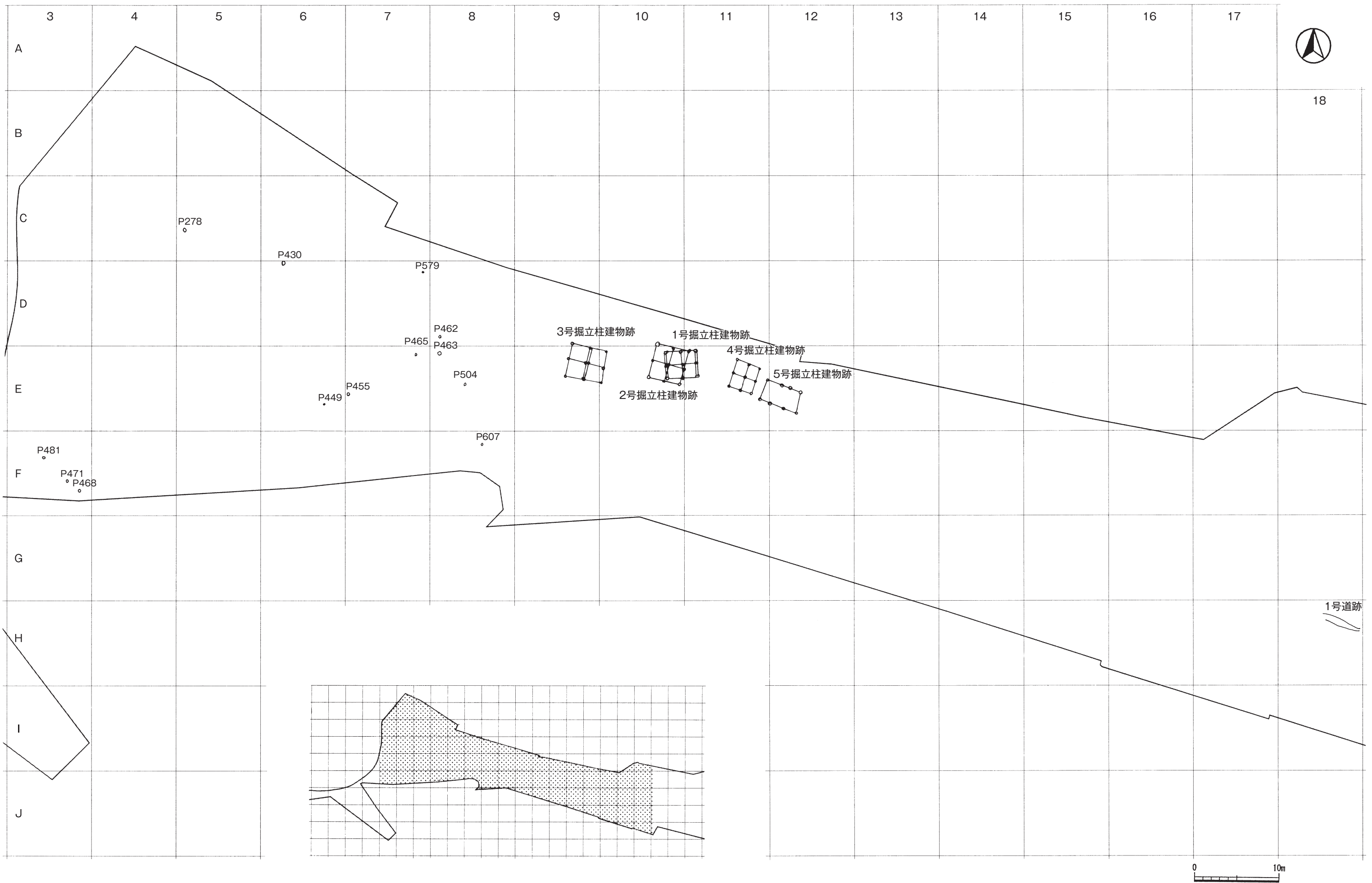
1, 2号から東南東へ約 4m 離れた、E-11 区の V 層上面で検出された。柱筋は、2, 3号と同様北から東へ傾くが、傾斜度は約 29° である。1～3号と同じく、2間×2間の総柱建物である。

柱穴の規模は、平均すると P 721・P 754・P 632 が直径 25～30cm 程度で深さ 20～50cm 程、P 755・P 751・P 752 が直径 20～30cm 程度で深さ 30～60cm 程、P 631・P 740・P 753 が直径 20～30cm 程度で深さ 20～50cm 程である。

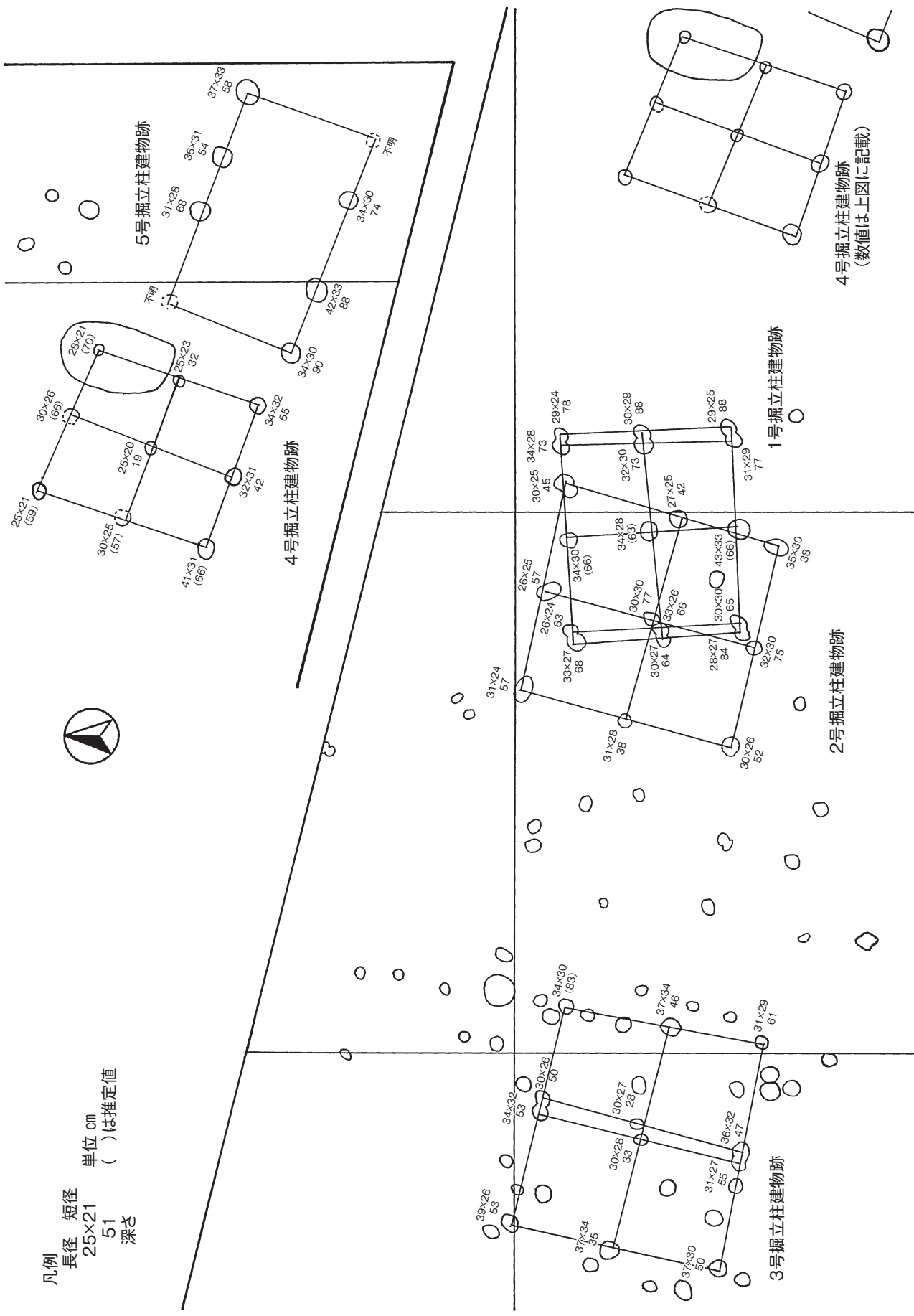
柱穴の状況は、3号と類似する傾向がみられる。即ち、四隅の柱穴が全体の中では比較的深い一方、それ以外の柱はより浅く、特に P 754 と 740 が浅い。また、この建物には重複する柱穴がみられない。柱穴間の距離は、東西方向が約 1.4m で南北方向が約 1.6m と、南北方向がやや長い。

柱穴には、埋土中に大量の遺物が詰め込まれたような出土状況を呈するものがあつた。P 631 からは、土器や石器が検出面並びに埋土中央部に集中して出土した。854 と 855 は中岳Ⅱ式の底部で、集中の最下部あたりで出土した。855 はやや上げ底に整形されている。856～859, 861 は、集中の上半部から出土した。856 は、横刃のスクレイパーである。ホルンフェルスの横長剥片を素材としている。857 は、磨製石斧の破損品である。石材はホルンフェルスで、側辺部分に敲打調整の痕跡が

残る。858 は、砥石である。砂岩製で、磨面は部分的に見られ、平滑である。背面にはススの付着が観察される。859 は、磨・敲石である。花崗岩製で、表面及び裏面に磨面が認められ、側縁に部分的に敲打痕が残る。860 は、敲石である。集中の下半部から出土した。ホルンフェルスの棒状礫で、上端部が敲打具として用いられた可能性がある。861 は、磨・敲石である。粗面、多孔質安山岩製で、上端部にわずかに敲打の痕跡を認めるが、磨面は不明瞭である。下半を欠損するが、欠損面にススが付着する。862 は、軽石加工品である。複数の平坦面を観察できる。色調もわずかに赤変しており、被熱した可能性がある。P 721 では、遺物が、検出面から出土した他、柱穴をおよそ 3 分割するような深さから、面を水平に置く意図があるかのような状態で出土した。特に、検出面では土器片と石器片が敷き詰められたかのような出土状況であつた。863～867 は、中岳Ⅱ式である。いずれも検出面から出土した。863 は、断面略方形に整形した口縁部に、凹点文と横位の浅い凹線文 1 条が施文される。2号掘立柱建物跡の P 633 埋土中出土の破片と接合している。864 は、小型浅鉢状の器形を呈する。口縁部は波状に小さく隆起する。865, 866 は胴部片で、866 は屈曲部に細い沈線文を 1 条施文する。867 は底部である。868 は磨・敲石である。最下段の上位にあつた。花崗岩製、楕円形の磨石の破損品で、上面に磨面を持ち、下面に敲打痕が見られる。869 は、磨・敲石である。868 と同じく最下段にあつた。安山岩製で、磨面、敲打痕ともに明瞭なものではない。870 は、磨・敲石である。輝石を含む安山岩製で、正面と背面の磨面は比較的顕著である。右側縁部分に敲打によるつぶれが見られない。871 は、安山岩製の磨・敲石である。検出面の中央から出土した。872 は、磨・敲石の破損品である。検出面から出土した。ホルンフェルス製で、側縁の敲打痕は、顕著な敲打つぶれが複数面形成される。背面は、節理面を利用して磨面としている。P 632 でも、検出面付近と埋土やや下位の 2 か所からはほぼ水平にまとまって出土するという、P 721 と類似した状況を呈している。図化した土器はいずれも中岳Ⅱ式で、検出面付近のまとまりから出土した。873, 874 は口縁部片である。873 は、器壁がかなり薄い。875, 876 は胴部片である。外面のみ軽くミガキ調整で仕上げ、屈曲上端に横位の浅い凹線文を 3 条施す。877 は、敲石と考えられる。粘板岩の扁平な礫片で、側縁部に敲打の痕跡が見られるが、正面、背面ともに剥落が著しい。878 は、砂岩製の石皿の端部付近の碎片資料と考えられる。平坦な磨面が部分的に残存する。P 740 は、埋設土器 2 号の調査後、石皿片(887)を中心として土器片や石器片が幅、深さともに 30cm 程度の範囲に密集して出土したことで確認した。879, 880 は中岳Ⅱ式の口縁部片で、879 は 887 の下、880 は 887 の上から出土している。879



第 142 图 II 层遗构位置图



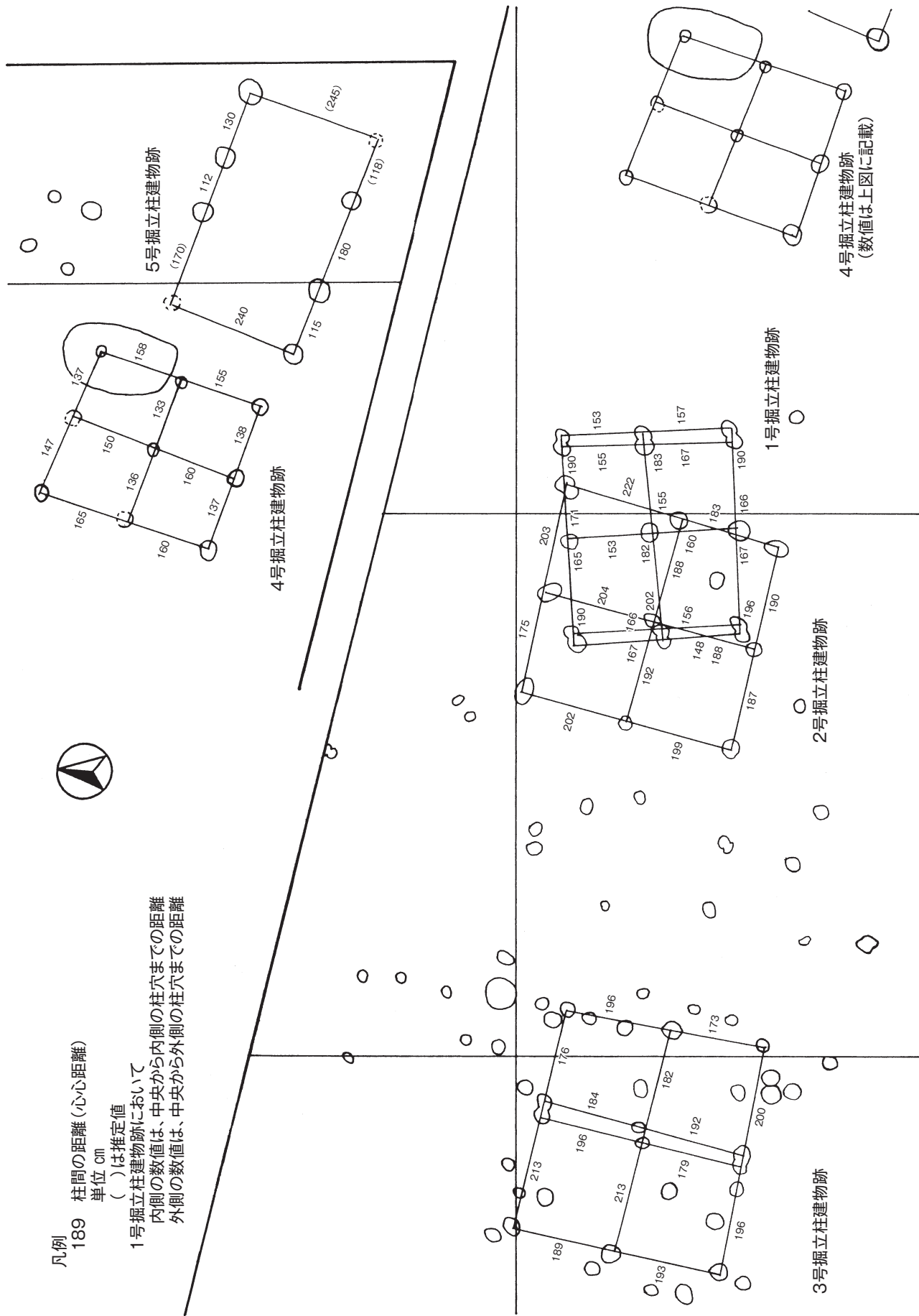
第143図 掘立柱建物跡計測図1 (柱穴の規模)

凡例

189 柱間の距離(心-心距離)
単位 cm
()は推定値

1号掘立柱建物跡において

内側の数値は、中央から内側の柱穴までの距離
外側の数値は、中央から外側の柱穴までの距離



第144図 掘立柱建物跡計測図2 (柱間の距離)

には特有の2連の凹点文を観察できる。881は、磨製石斧の基部である。遺物の中では最下段、柱穴の断面形状が狭くなる辺りから出土した。ホルンフェルス製で、丁寧な加工で形状を整え、側縁部は剥離整形の後、敲打が加えられている。882は、ハンマー又は敲石の端部片である。密集部の上位から出土した。敲打部はよく潰れて複数の平坦面が形成されている。883～885は、破損した軽石加工品で、密集部の上位から出土した。いずれにも浅い溝状の凹みが複数観察される。特に、884の右上と885の右側辺の凹み部分は色調が赤変している。886は安山岩製の大型磨石の破片で、スス痕が観察される。887は花崗岩製の大型石皿片で、密集部の中心から出土した。表面全体の色調が赤変しており、破片の状態で被熱した可能性がある。わずかに凹んだ作業面が一部残存しているが、被熱または敲打によると想定される損傷が激しい。

5号掘立柱建物跡 (第155図 888～894)

4号に隣接して、E-11・12区のV層上面で検出された。確認できなかった柱穴を含むものの、1間×3間の掘立柱建物である。柱筋は、長軸は北から東へ約210°ほど傾くが、短軸では北から東へ29°ほどの傾きとなり、2～4号とおおむね揃う。

柱穴の規模は、平均するとP1～P3が直径約30cmで

深さ50～60cm程、P7、P6、P4が直径30cm程度で深さは40～50cm程である。柱穴の状況等は、未確認の柱があるため限界があるが、ほぼ同じ深さである。

遺物は、P4の埋土中からは中岳Ⅱ式が出土した。888、889は口縁部片である。どちらも口縁部外端に横位の浅い凹線文を2条めぐらせているが、889には特有の2連の凹点も施文される。890、891は胴部片である。P6の埋土中からはやや摩耗した中岳Ⅱ式の口縁部片(892、893)と894の磨・敲石が出土した。894は破損品だが、左側端部に敲打部が観察されるほか、上部の破断面も稜がとれて丸くなっているか所が複数観察されることから、破損後も使用し続けたと考えられる。

ピット (第142・156～160図 895～928)

第1地点では、他に掘立柱建物等の構造物としては把握できなかったが、ピットが多数検出された(分布状況は第142図)。これらピットの中には、埋土中に遺物を含むものが散見されたため、それらを中心に報告する。

なお、各ピットの埋土に、遺物の上下で埋土の変化等は確認されていない。

ピット462は、D-8区で検出された。平面形は不整円形、断面は略円筒形で底面はⅥ層に達する。遺物は、自然礫や石器片が12点、埋土中に集中して出土した。895は、ハンマーまたは敲石で、長さ13.7cm×幅6.55cm

第4表 各掘立柱建物跡の柱穴深さ及び柱穴間距離 (P:柱穴No, ():各断面図標高からの柱穴深度, 単位:cm)

1号掘立柱建物跡

P714 (78)	153	P716 (88)	157	P718 (88)	
190	P● (73)	183	P715 (73)	167	190
	171		155	P717 (77)	
	P713 (66)	153	P712 (63)	160	P710 (66)
165	190	166	182	202	167
P720 (63)			P724 (66)		156
	P● (68)	167	P723 (64)	148	P719 (84)

(P●は番号なしのピット)

2号掘立柱建物跡

P738 (45)	222	P711 (42)	183	P709 (38)
203		188		190
P633 (57)	204	P725 (77)	188	P739 (75)
175		192		187
P705 (57)	202	P706 (38)	199	P722 (52)

4号掘立柱建物跡

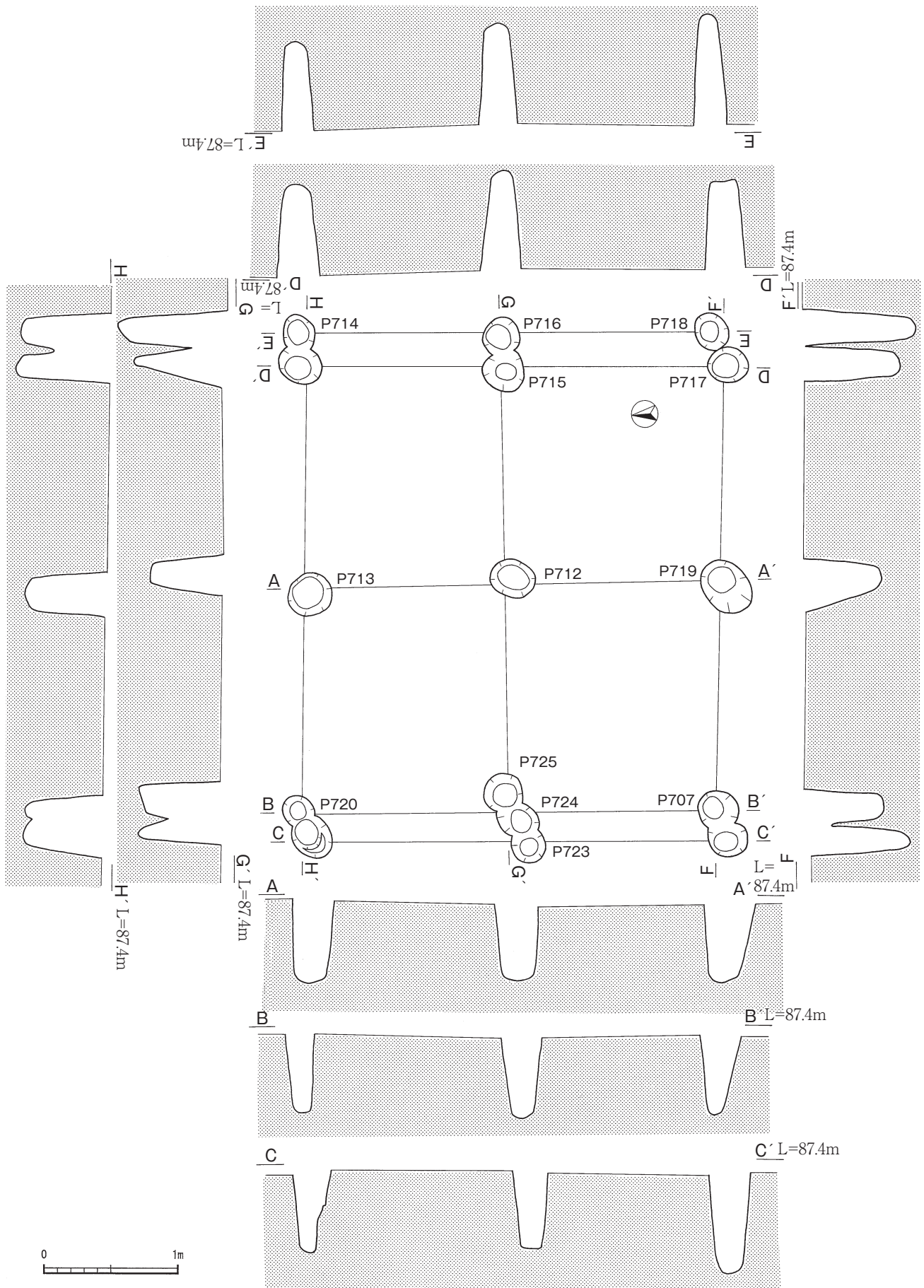
P755 (70)	158	P751	155	P752
137		133		138
P721 (66)	150	P754	160	P632
147		136		137
P631 (59)	165	P740 (57)	160	P753 (66)

3号掘立柱建物跡

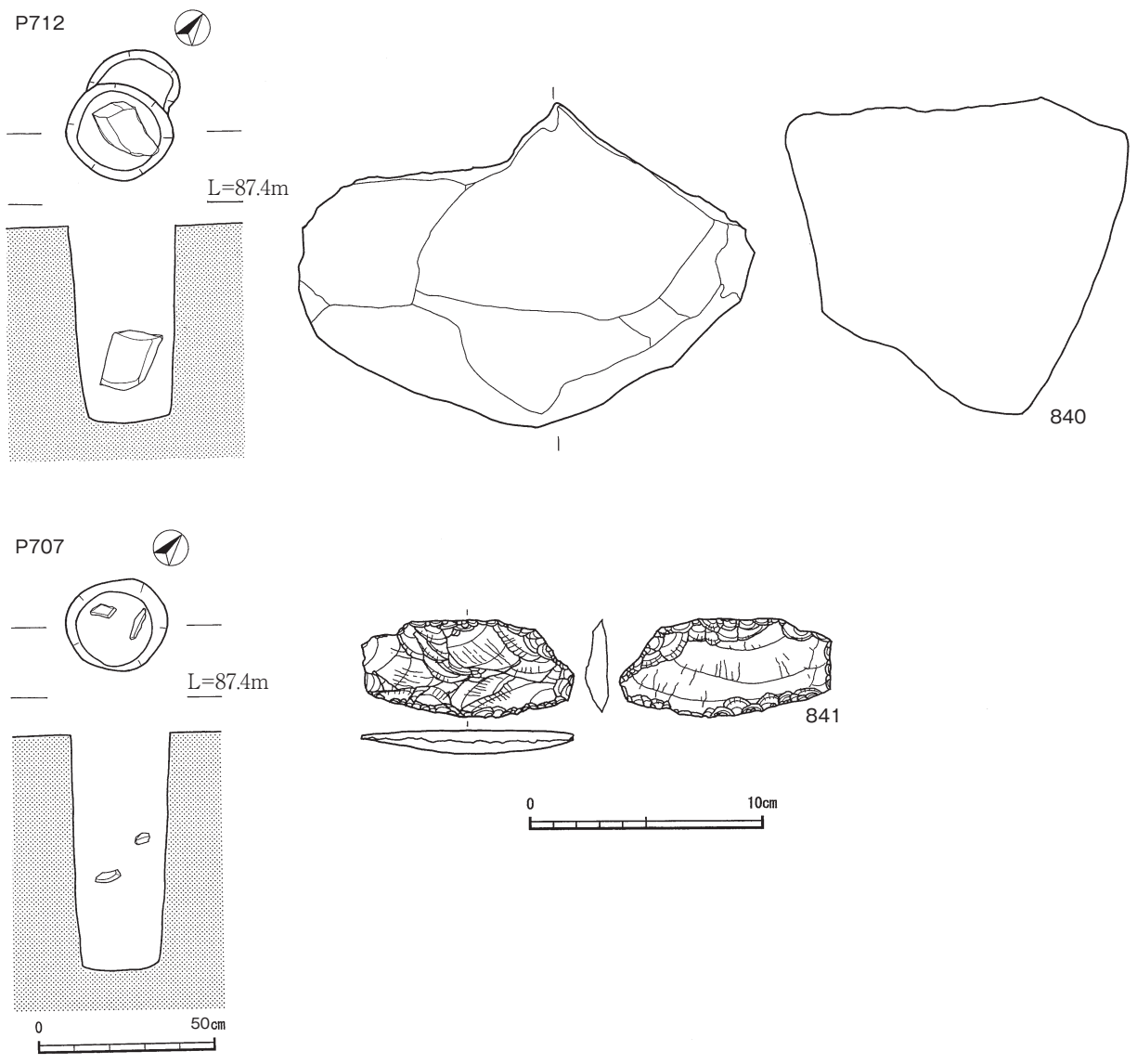
P733 (83)	196	P682 (46)	173	P748 (61)
176		182		200
P677 (50)	202	P749 (28)	209	P743 (47)
	184		192	225
P676 (53)	196	P750 (33)	179	P742 (55)
213		213		196
P662 (53)	189	P666 (35)	193	P671 (50)

5号掘立柱建物跡

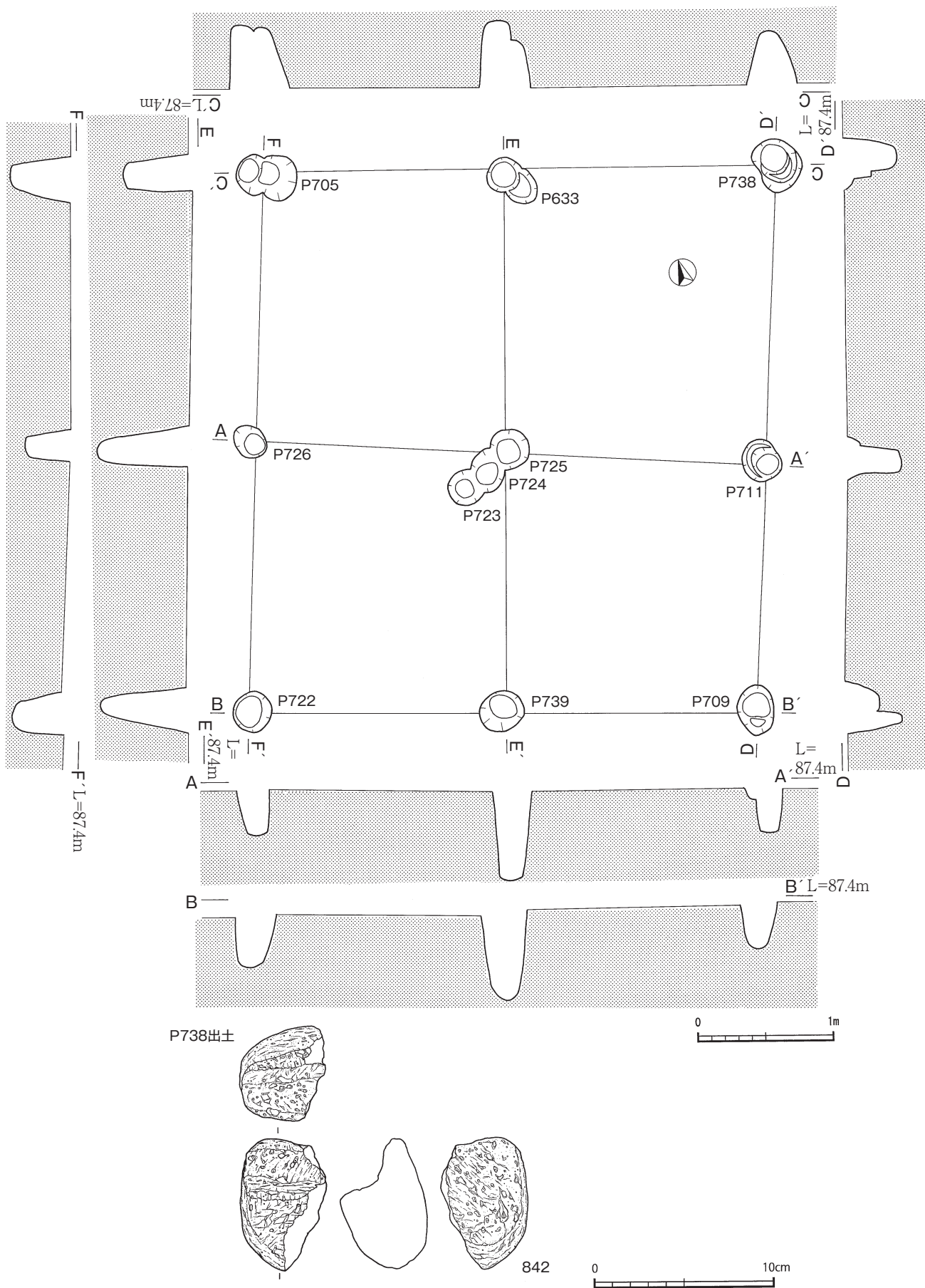
(P)	170	P1 (68)	112	P2 (54)	130	P3 (58)
240		(260)		(250)		245
P7 (90)	115	P6 (88)	180	P4 (74)	118	(P)



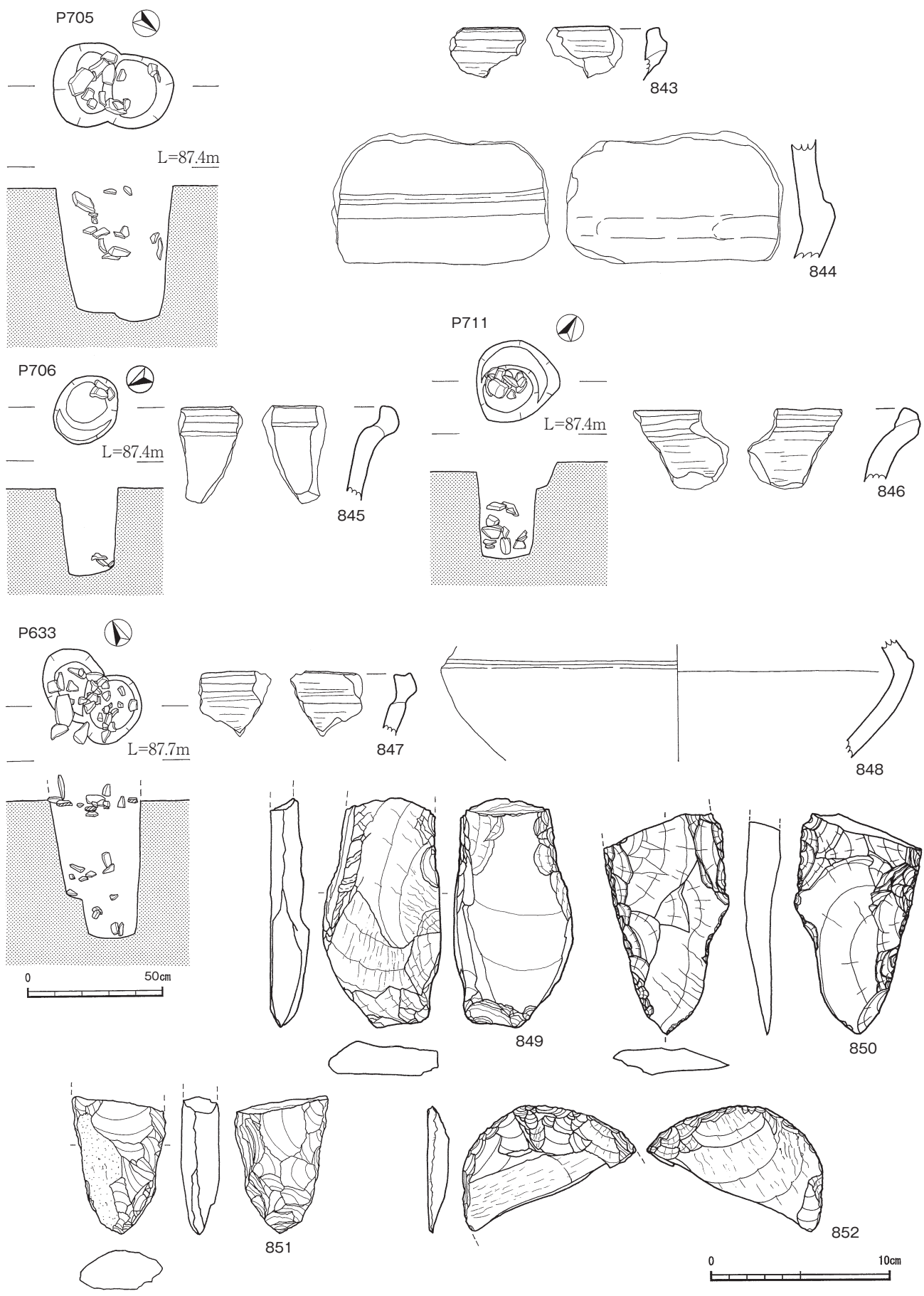
第 145 图 1 号掘立柱建物跡



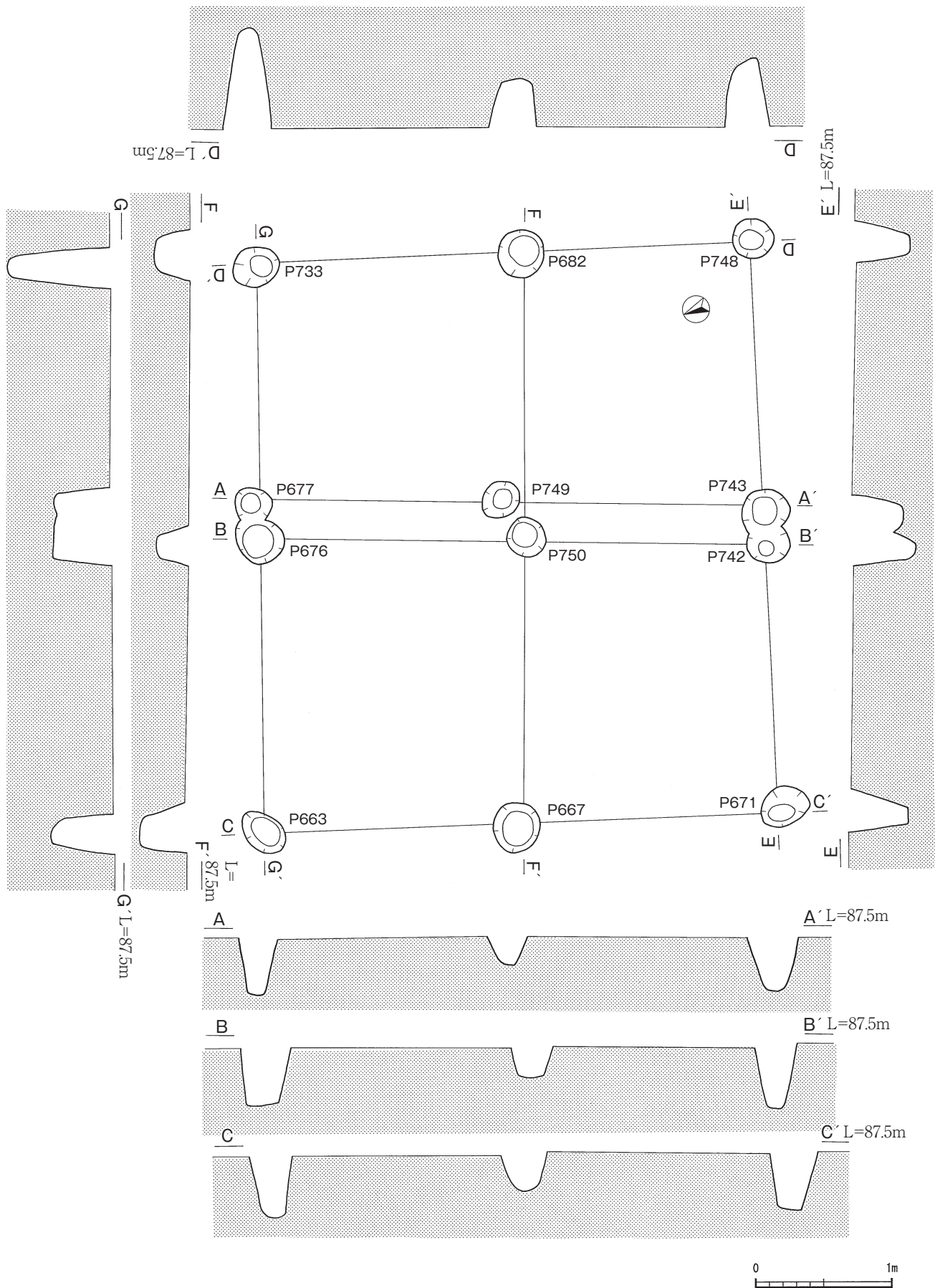
第 146 図 1号掘立柱建物跡のピット内遺物



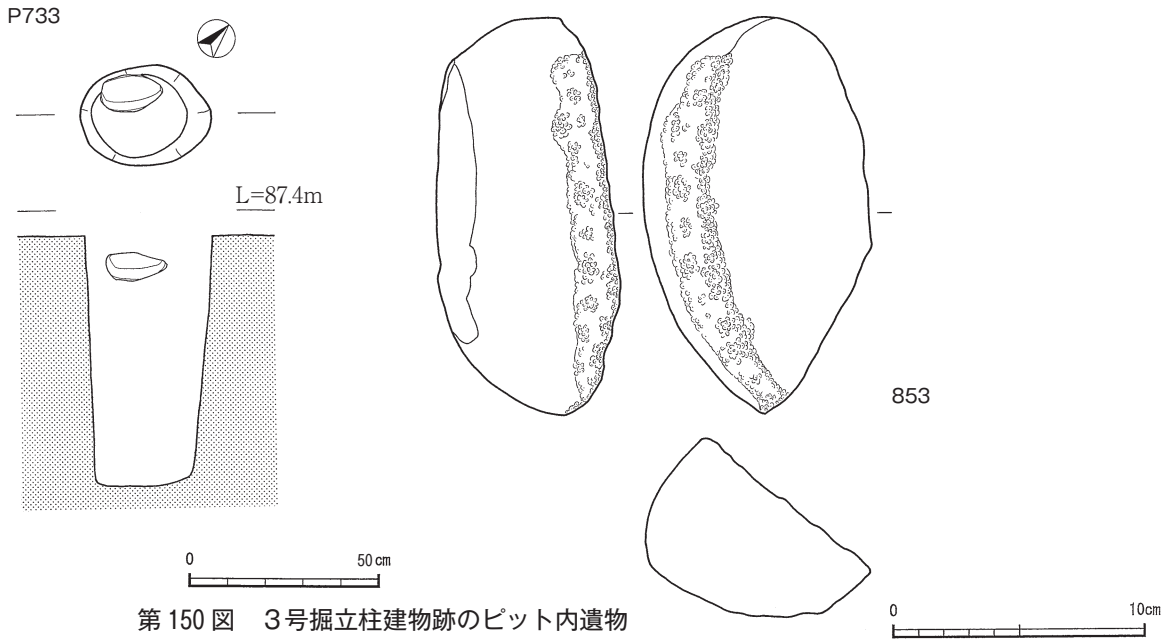
第147図 2号掘立柱建物跡・ピット内遺物



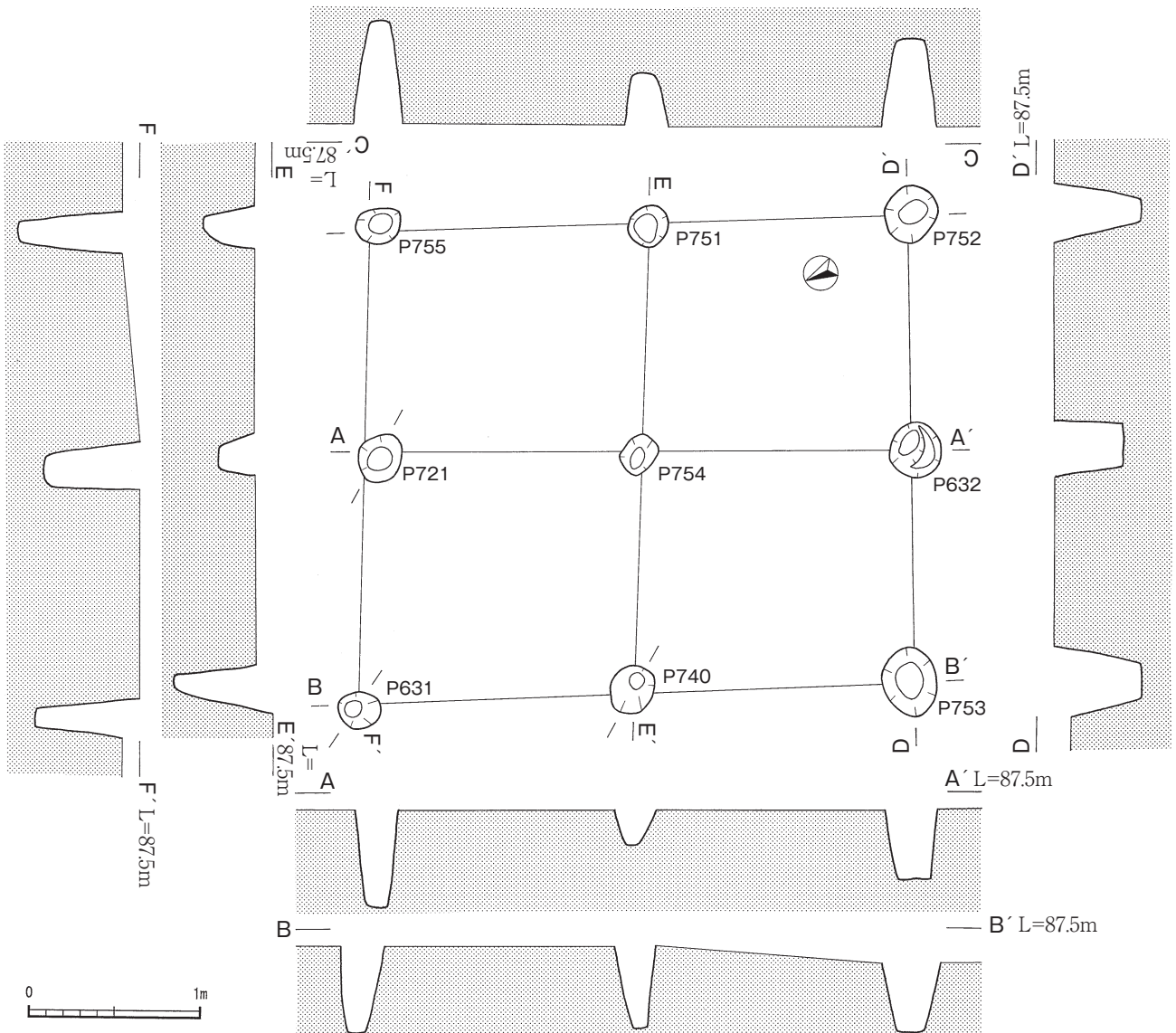
第148図 2号掘立柱建物跡のピット内遺物



第 149 图 3号掘立柱建物跡

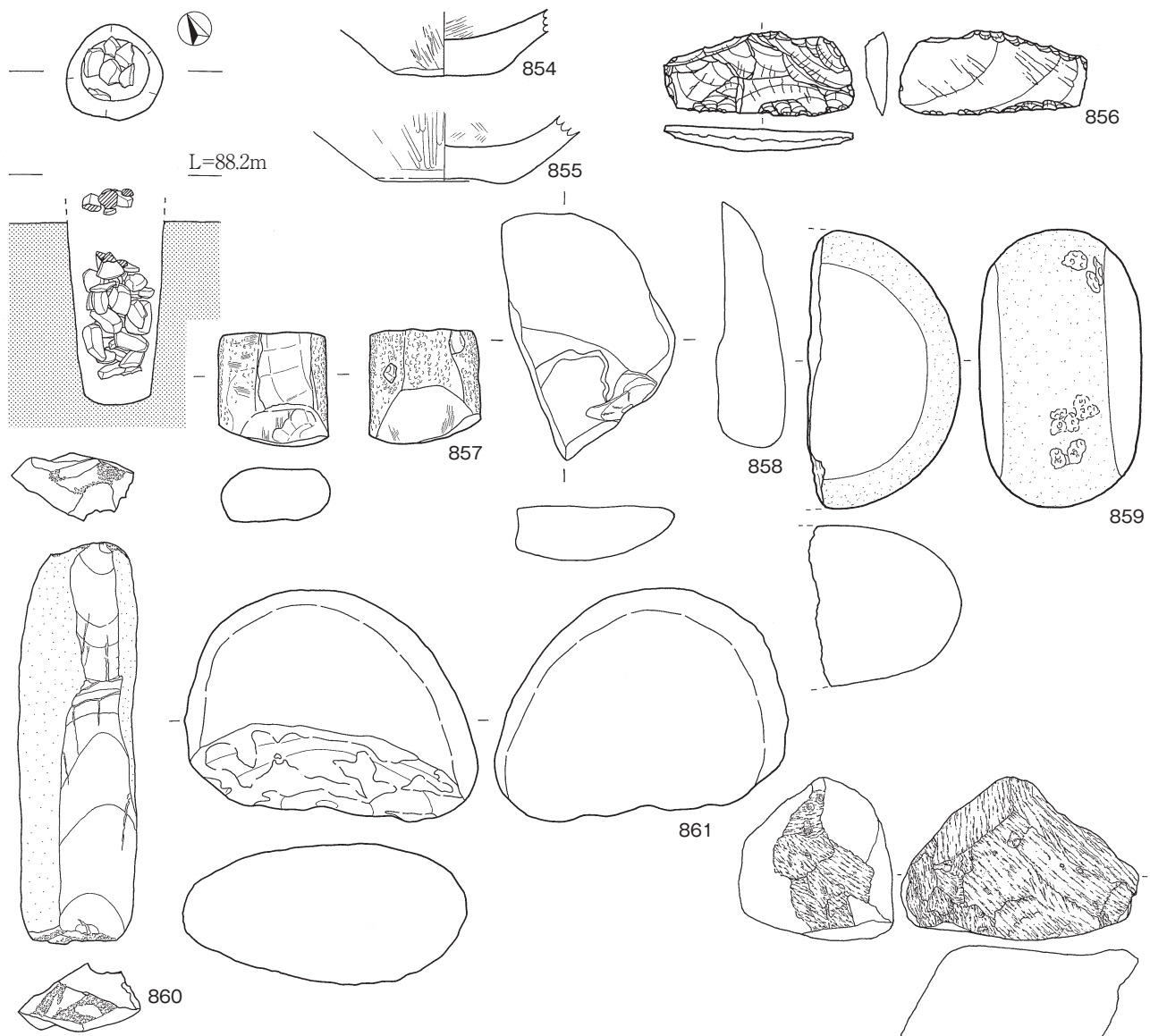


第150図 3号掘立柱建物跡のピット内遺物

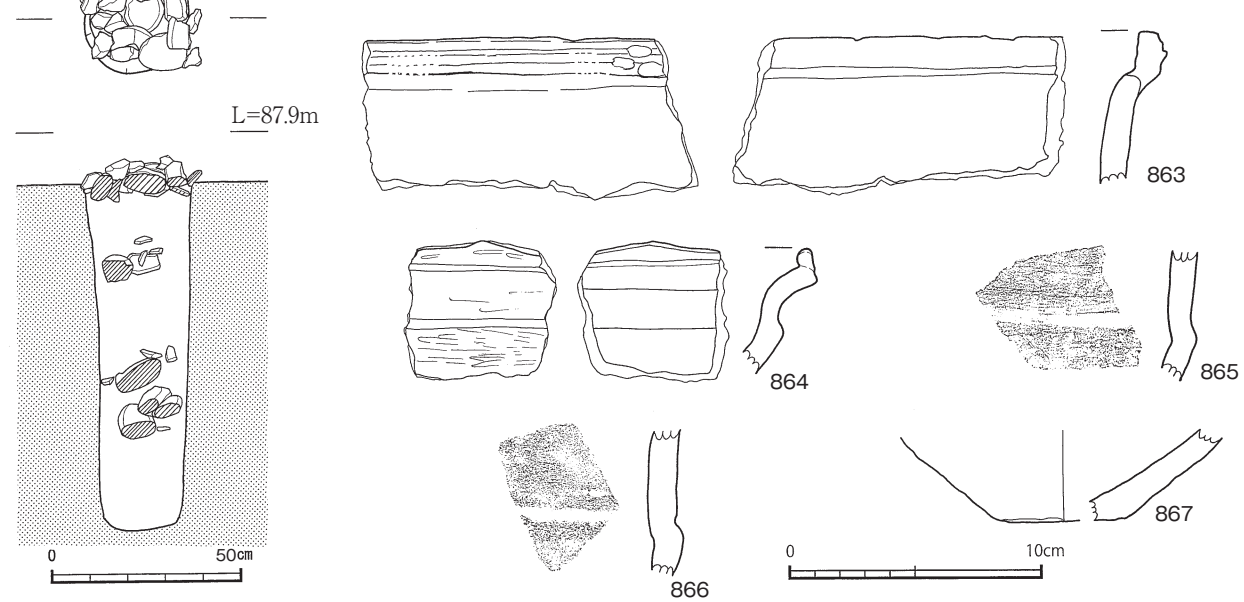


第151図 4号掘立柱建物跡

P631



P721

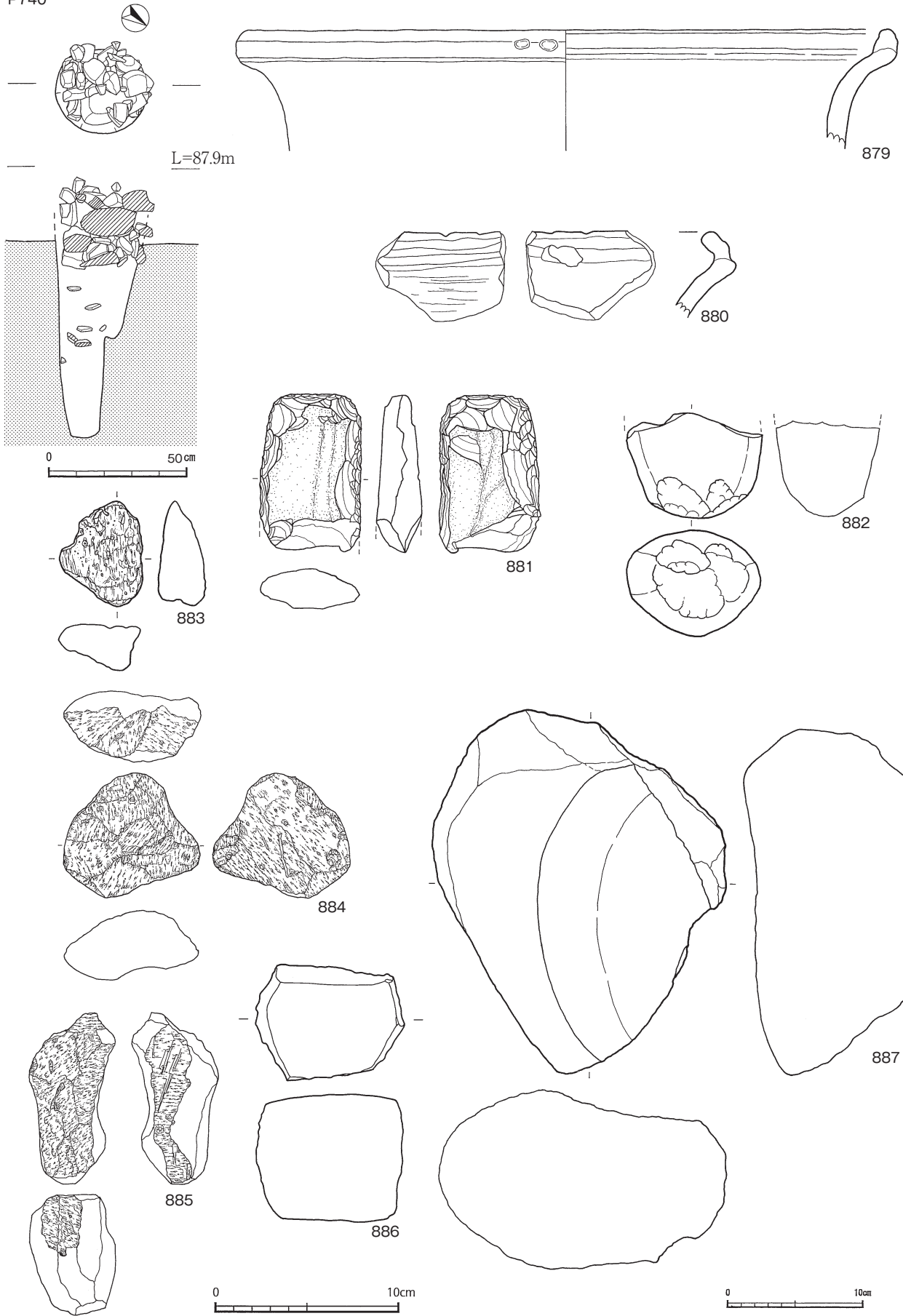


第 152 図 4号掘立柱建物跡のピット内遺物 1

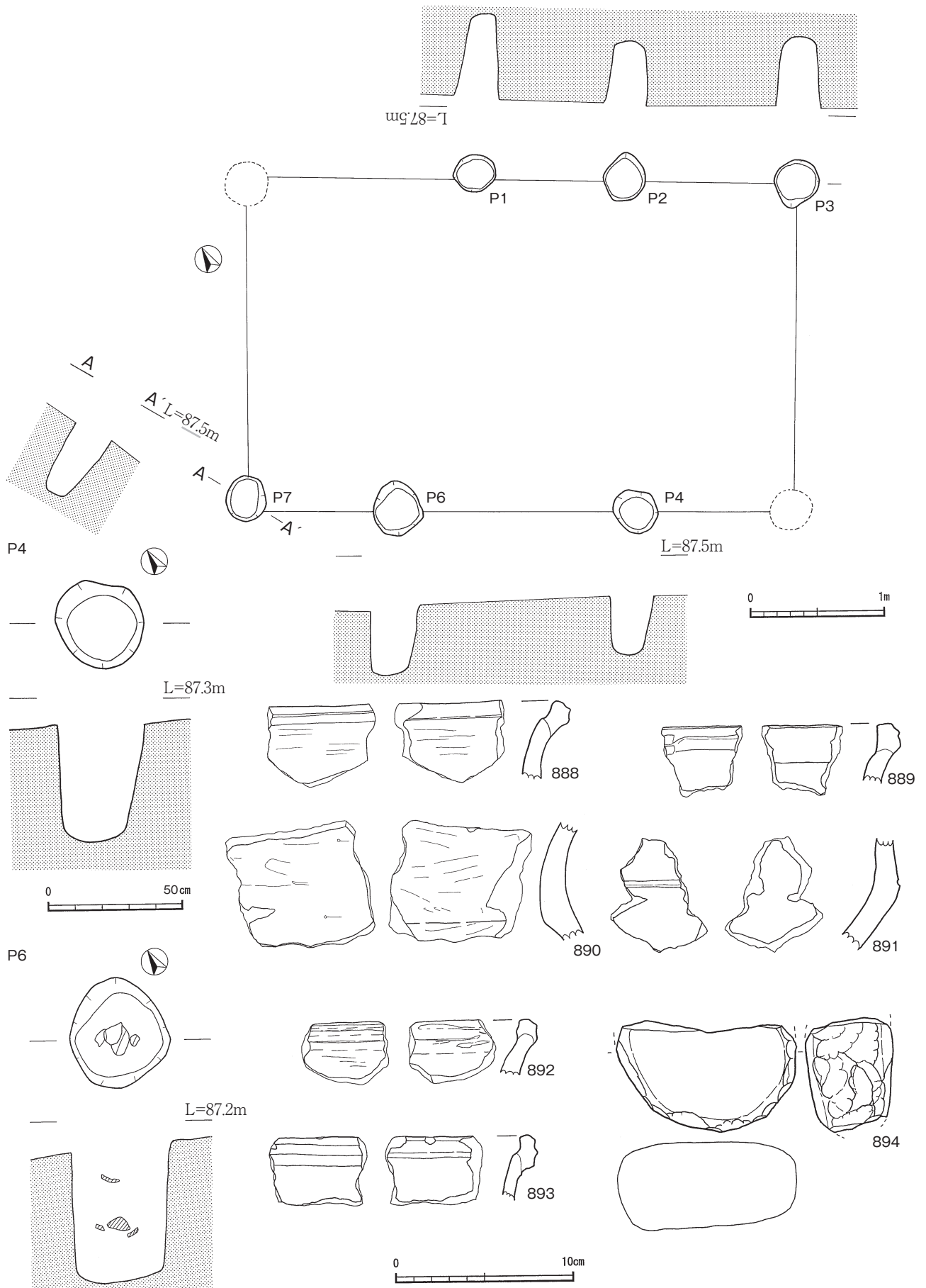


第 153 図 4号掘立柱建物跡のピット内遺物 2

P740



第154図 4号掘立柱建物跡のピット内遺物3



第155図 5号掘立柱建物跡・ピット内遺物

×重さ 722g, 石材はホルンフェルスである。両端に観察できる敲打部は複数の小さなつぶれ面で構成されている。また、右側面には被熱による赤化と剥落が認められる。

ピット 463 は、E-8 区で検出された。検出面の一部は耕作による攪乱を受けている。底面は平坦ではなく 2 か所で略円錐形にすぼまる。近接する 2 つのピットであった可能性もあるが、埋土の状況等からは不明であった。遺物は、自然礫や石器片が 6 点、底面近くに集中して出土した。897 は撥形の打製石斧の破断資料で、現況の長さ 10.6cm×幅 4.9cm で重さ 75g, 厚さ 1.0cm。石材はホルンフェルスである。899 は大型石皿の破片で、現況の長さ 31.5cm×幅 20.1cm で重さ 5,695g, 石材は花崗岩である。両面に凹面が形成されており、ともに極めて滑らかに加工されている。また表面の色調は、全体的に熱を受けたかのように赤変している。

ピット 504 は、E-8 区で検出された。平面形は略円形、断面は略円筒形で底面は VI 層に達する。遺物は、自然礫が 2 点と磨石が 1 点、埋土の中～上位に集中して出土した。896 は磨・敲石で、長さ 8.31cm×幅 7.24cm で重さ 456g, 石材は安山岩である。表面は全体的に滑らかである。敲打痕は、右側縁部分にみられるほか、表面には浅い凹みが生じている。裏面には 2 か所に剥落がみられる。

ピット 449 は、E-6 区で検出された。平面形は不整形、断面は略砲弾形で底面は VI 層に達する。遺物は、礫が 4 点、埋土中位から上端がおおむね同じレベルでまわって出土した。礫について使用痕等を観察したが、明瞭な痕跡を観察できなかった。

ピット 579 は、D-7 区で検出された。平面形は略円形、断面は略円筒形で底面は V 層中で収まる。遺物は、比較的大型の自然礫が 1 点、埋土中位から出土した。

ピット 430 は、D-6 区で検出された。平面形は略円形、断面は略円筒形で、底面は V 層と VI 層の境界付近で収まる。遺物は、石器 1 点が縦位に埋まっていたほか、小礫数点が埋土中～上位にかけて出土した。898 は、磨・敲石で長さ 10.1cm×幅 9.0cm で重さ 363g, 石材は安山岩である。厚さが 3.3cm と扁平で、磨面は背面に明瞭であり、敲打部は主に右側辺に集中する。

ピット 455 は、E-6・7 区で検出された。検出面の一部は耕作による攪乱を受けている。断面は円筒形で底面は VI 層に達する。遺物は、自然礫などが 6 点、埋土上位から全体的に傾斜した状態で出土した。900 は、磨・敲石で、長さ 9.8cm×幅 8.6cm, 重さ 846g, 石材は安山岩である。磨面とやや平滑な部分がみられるが、敲打痕ともに明瞭な使用痕ではない。

ピット 465 は、E-7 区で検出された。平面形は楕円形で断面は略円筒形、底面は VI 層に達する。遺物は、石

皿の剥落片などが埋土低位から出土した。

ピット 471 は、F-3 区で検出された。平面形は略円形、断面は円筒形で底面は V 層中に達している。遺物は、検出面で砂岩製の石皿片が 1 点出土したが、石皿としては小片で図化するに至らなかった。

ピット 468 も、F-3 区で検出された。平面形は略円形、断面は逆台形で底面は V 層上面に達する。遺物は、検出面で自然礫が 1 点出土した。

ピット 607 は、F-8 区で検出された。平面形は円形、断面は略円筒形で底面は IV 層中で収まる。掲載したピットの中では浅い。遺物は、磨・敲石と自然礫が 2 点、検出面と埋土中から出土した。901 は、扁平な磨・敲石で、長さ 13.6cm×幅 12.0cm, 重さ 736g, 石材は多孔質の安山岩である。磨面・敲打痕ともにあまり明瞭ではない。表面の色調は、赤褐色を呈する。

ピット 278 は、C-5 区で検出された。平面形は不整形、断面は略円筒形で底面は VI 層上面に達する。遺物は、土器片と自然礫が検出面近くで出土した。902 は、中岳式土器の胴部である。比較的薄手で焼成は良好、胎土に金雲母片が混ざっている。器面は、内面外面ともにミガキ調整で仕上げられているが、内面は外面よりわずかに粗い。破片下端には、かろうじて沈線を観察することができる。

ピット 481 は、F-3 区で検出された。平面形は楕円形で断面は円筒形、底面は IV 層中に収まる。遺物は、903 がピット 481 を含む周辺のピットから出土している。903 は、中岳 II 式である。復元口径 39.6cm, 底径 4.8cm, 復元高 35.0cm で、胎土に長石の細粒を含み焼成は良好、内外面ともミガキ調整で仕上げる。口縁部には 4 か所の波頂部が想定され、それぞれに浅い凹点が施文される。また、口縁部外面に 2 条の横位平行沈線文と胴部屈曲部やや上に 1 条の横位沈線文がある。胴部に焼成後穿孔が 1 か所あるが、口縁の波頂部や文様展開とは連携していないようである。

ここからは、ピット内出土遺物で主なものを掲載する。

904 (ピット 535) は、中岳 II 式の口縁部である。焼成は良好で、胎土に長石の細粒を多く含む。器面は、内外面ともミガキ調整で仕上げる。口唇部には、浅い横位沈線文が 2～3 条観察できるが、接続にズレがみられるなどやや粗い施文となっている。この沈線文を上下で挟むように連続刻目文が施される。刻目は、間隔や深さがほぼ一定した丁寧な施文である。905 (ピット 637), 906, 907 (ともにピット 638) は、形状が 904 とはやや異なるが、いずれも中岳 II 式の口縁部である。907 は、摩耗しているために全体的な形状がやや丸味を帯びているように見える。908 (ピット 609) は小型の鉢で、口縁部が厚みを持たずに収まっているが、口唇部内面を凹ませる点が他の資料と共通する。破片下端には、中岳 II 式の胴部

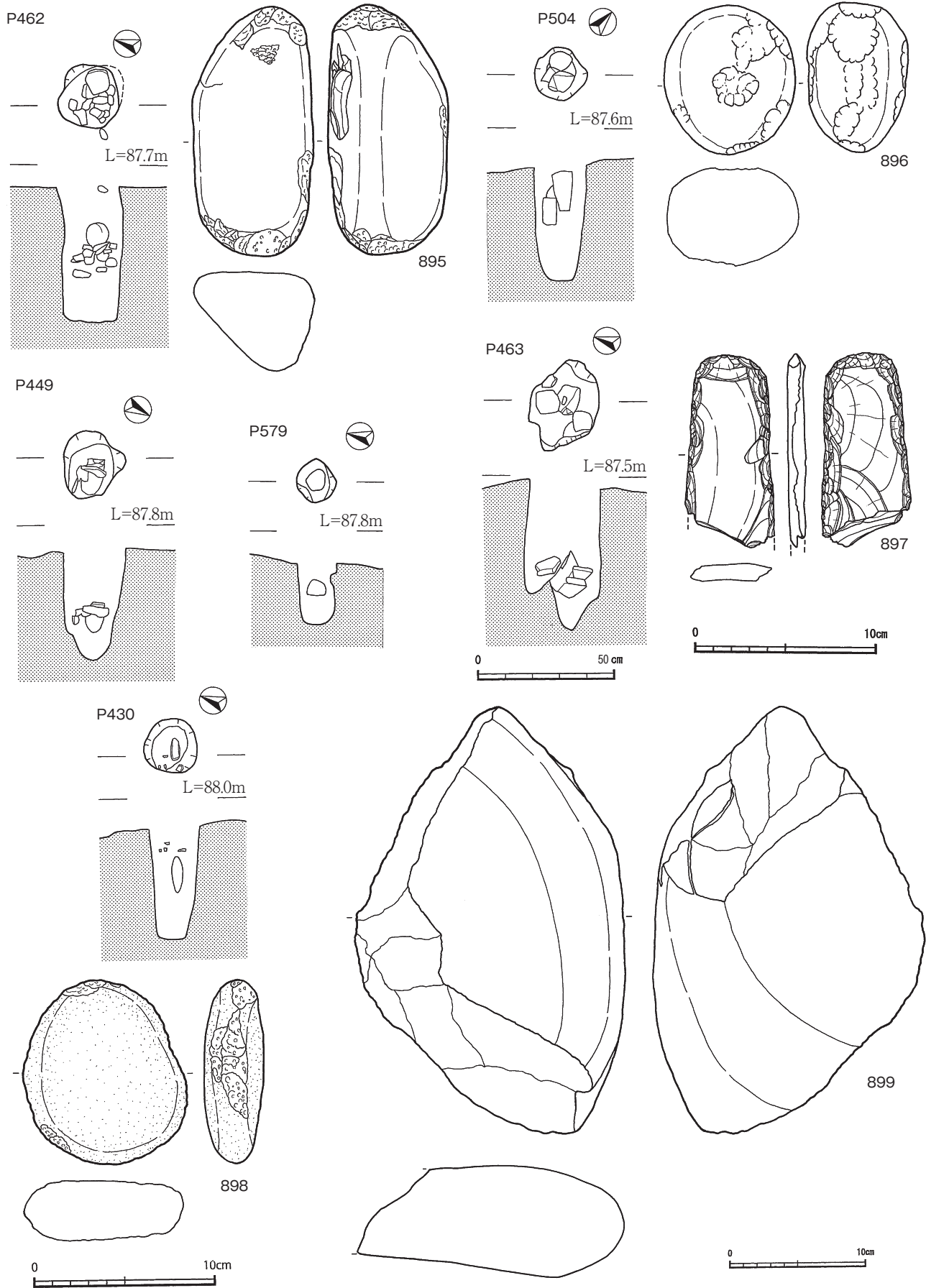
屈曲部に施文される一対の凹点のうち片方を観察できる。909（ピット 820）は無文の胴部である。内外面とも丁寧なナデ調整が施される。910（ピット 313 - 2）は、口縁部先端が剥落している。胴部上位の外面に、ミガキ調整を暗文様に施している。912（ピット 608）は、かなり大型の深鉢の胴部と推定される資料である。器厚約 1.5cm、長石粒が混じり、焼成は良好である。器面は、内外面ともに丁寧なナデ調整の後に、ミガキ調整を軽く施している。外面下位に、ごく浅い横位沈線文を 2 条観察できる。911（ピット 383 - 2）、913（ピット 502 - 1）、914（ピット 313 - 1）は中岳Ⅱ式の胴部屈曲部で、文様のある資料である。913 は大型の深鉢の胴部と推定される。ごく浅い 2 条の平行沈線文の下にある斜位の連続短沈線文は、911 にもみられる胴部屈曲部の稜線を利用した刻目文を意識したものと想定される。914 は、器壁が比較的薄く整形も丁寧である。外面には、ミガキ調整を暗文様に用いている。915（ピット 517）、917（ピット 469）は無文の胴部屈曲部であるが、屈曲部にわずかに段を形成させている。916（ピット 638）は、浅鉢の胴部にも見える資料である。胎土に長石細粒が混じり、焼成は良好、器面は内外面とも丁寧なヨコナデ調整を施している。成形時に粘土板をずらして貼り付けることで屈曲部を形成し、その屈曲部に浅い凹線を巡らせている。918（ピット 424）は口縁部の小片で山形隆起と外面に浅い沈線文を確認できる。919（ピット 693）は中岳Ⅱ式の底部である。内外面とも丁寧なミガキ調整で仕上げている。

920（ピット 638）～923（ピット 486）は、石斧類である。920 は、刃部を欠失する打製石斧で、長さ 10.4cm×幅 7.2cm、重さ 110g、石材はホルンフェルスで、幅広の刃部に対し、基部は細身に仕上げている。921（ピット 195）は、磨製石斧の基部付近で、残存部の長さ 7.3cm×幅 5.08cm、重さ 139g、石材はホルンフェルスで、敲打により整形されている。基端部と刃部側は折れて欠失するが、破砕面の状況や背面以外の器面の赤変から、被熱破砕の可能性はある。922（ピット 195）と 923（ピット 486）は、磨製石斧の刃部である。922 が残存部の長さ 7.4cm

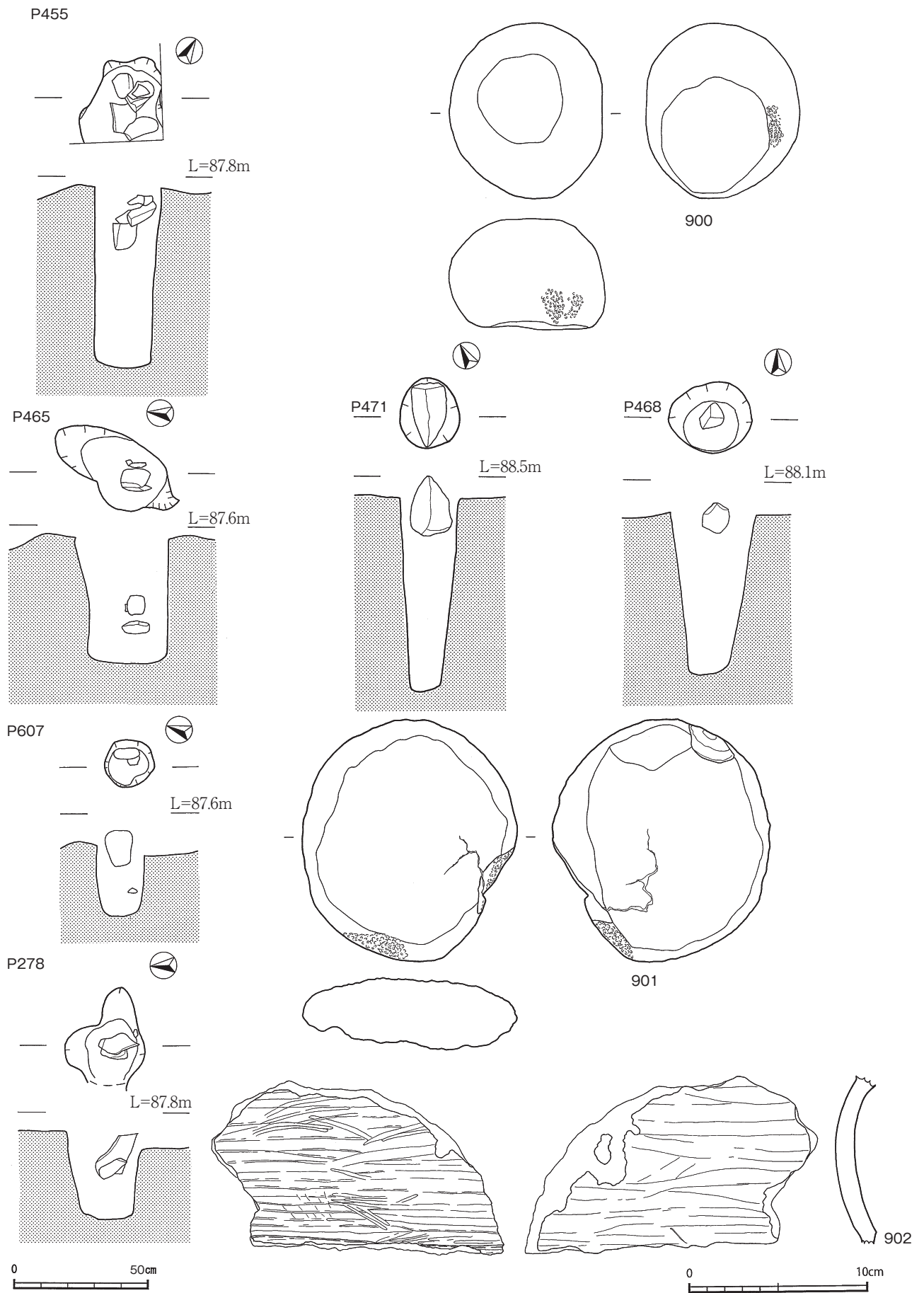
×幅 5.2cm、重さ 76g、石材はホルンフェルスで、923 は残存部の長さ 4.0cm×幅 3.6cm、重さ 23g、石材はホルンフェルスである。いずれも弱凸強凸片刃の身部がやや扁平な石斧である。922 の刃部平面形は円刃、923 は欠損により不明である。924（ピット 411）～927（ピット 561）は、磨石・敲石類である。924 は、長さ 7.0cm×幅 5.9cm、重さ 139g、石材は凝灰角礫岩である。小型でやや扁平な形状で、作業面は両面に形成されている。925（ピット 296）は、長さ 7.6cm×幅 6.8cm、重さ 102g、石材は頁岩である。扁平な形状で、磨面はあまり明瞭ではないが、敲打部は、下端から特に右側辺にかけて顕著に形成されている。上端はガジリによる欠損である。926（ピット 195）は、長さ 13.3cm×幅 10.9cm、重さ 912g、石材は安山岩である。敲打部は、右側辺に形成されているほか、正面と背面の磨面も明瞭に観察できる。927（ピット 561）は、残存部の長さ 9.7cm×幅 6.9cm、重さ 362g である。928（ピット 352）は残存部の長さ 10.7cm×幅 7.25cm、重さ 589g で、石材はどちらもホルンフェルスである。不定形な円礫で、上半を欠失する。左側面に凹面を呈する磨減面がみられることから砥石とした。上・下端部に弱い赤化が認められ、被熱により破砕、剥落が生じた可能性がある。

第5表 ピット観察表

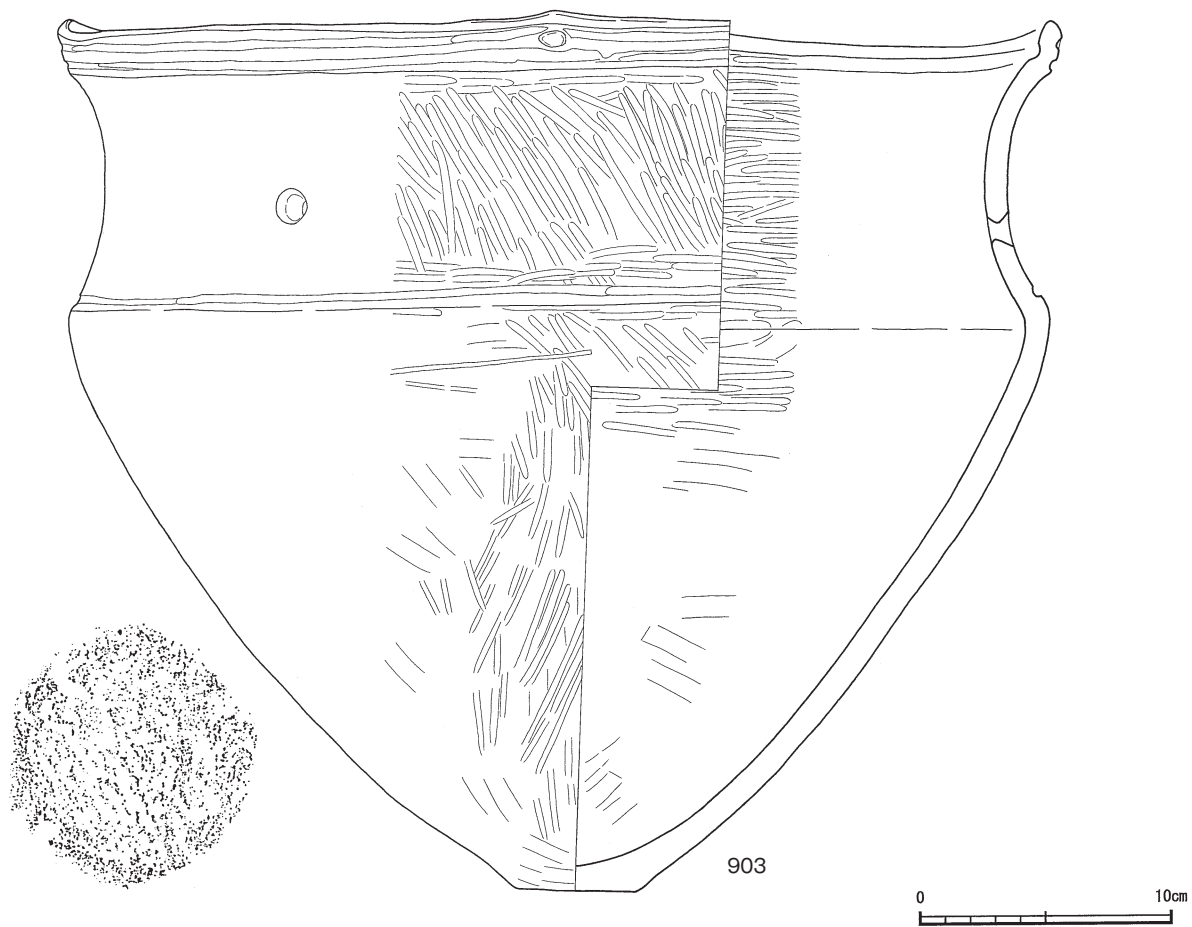
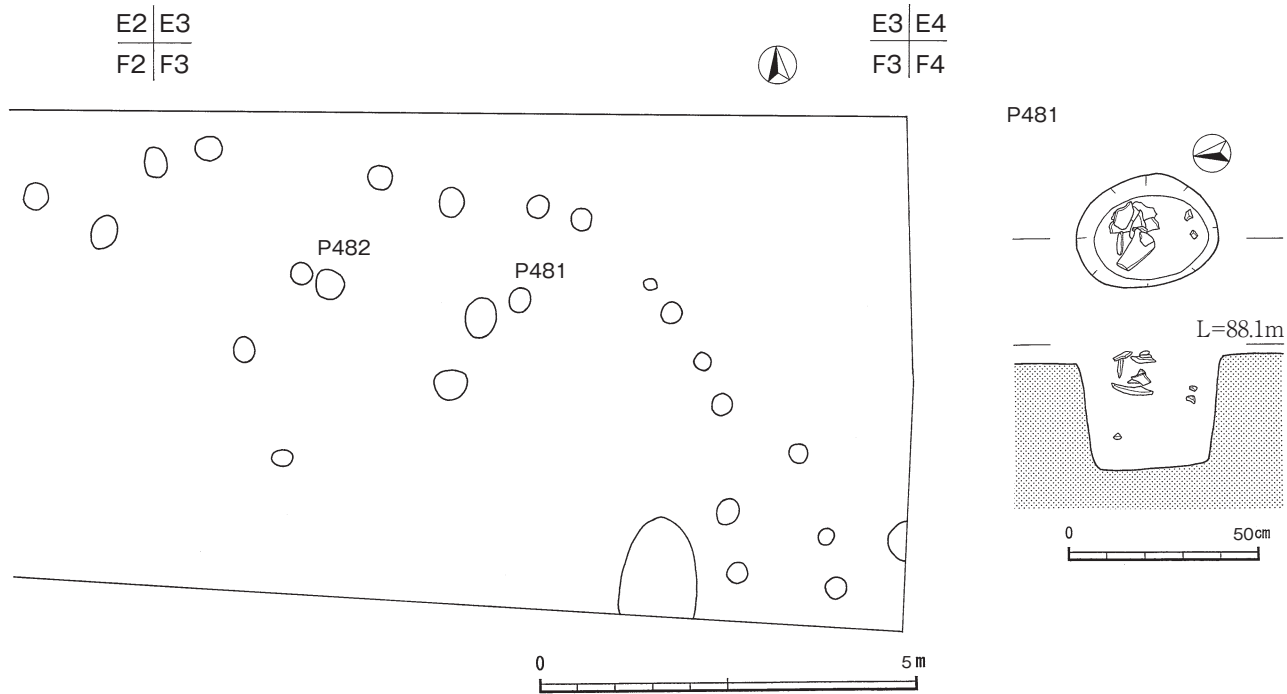
図	番号	区	規模（単位：cm）			埋土	図	番号	区	規模（単位：cm）			埋土
			縦	横	深					縦	横	深	
156	462	D8	23	23	51		157	465	E7	34	29	48	黒色 + 茶褐色
	504	E8	20	19	42			471	F3	26	23	74	黒色
	449	E6	25	23	40	黒色		468	F3	27	31	61	黒色
	579	D7	17	15	23	黒色 + 茶褐色		607	F8	18	19	25	黒色 + 茶褐色
	463	E8	31	25	54	黒色		278	C5	37	30	34	
	430	D6	20	20	42	茶褐色		158	481	F3	30	38	29
157	455	E6-7	31	32	68	黒色 + 茶褐色							



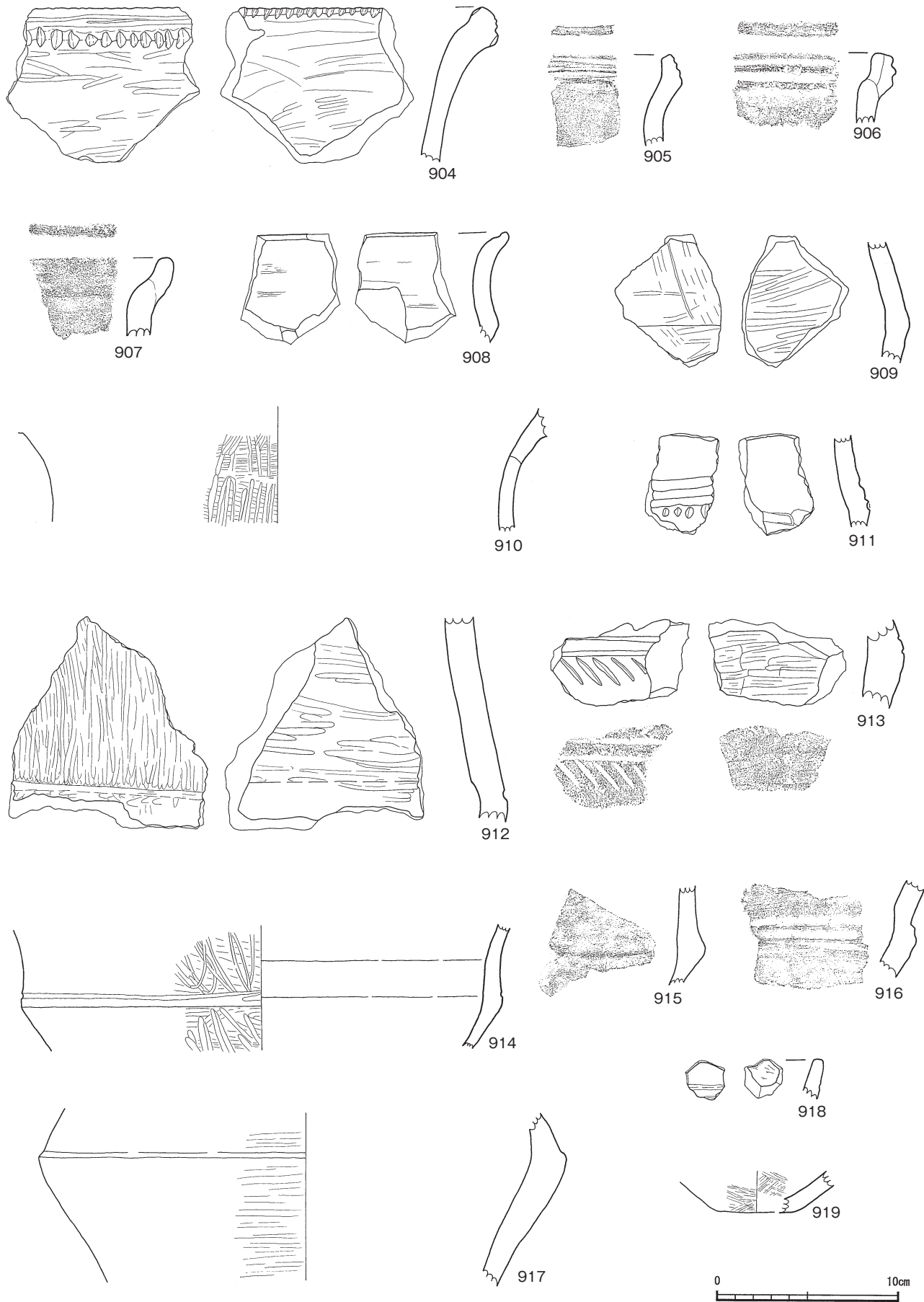
第 156 図 ピット内出土の遺物 1



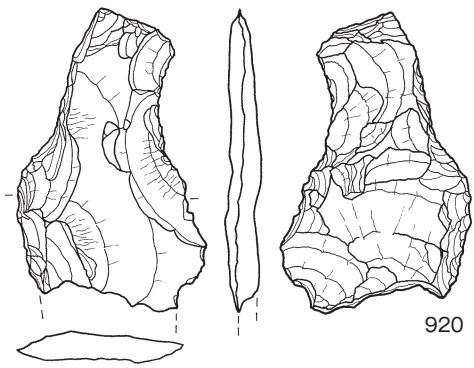
第 157 図 ピット内出土の遺物 2



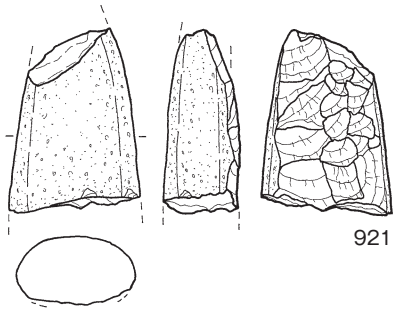
第 158 図 ピット内出土の遺物 3



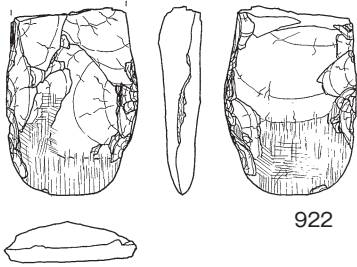
第 159 図 ピット内出土の遺物 4



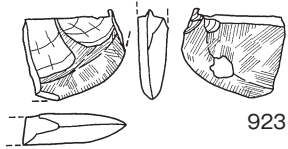
920



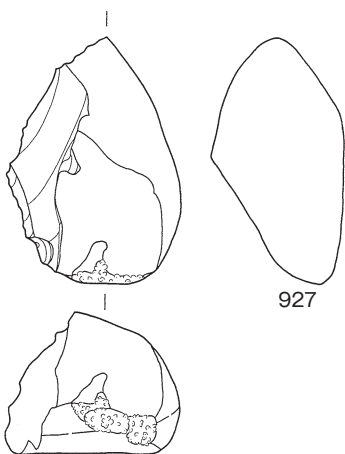
921



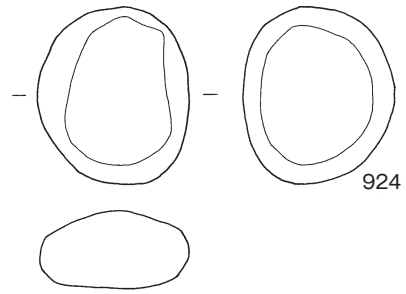
922



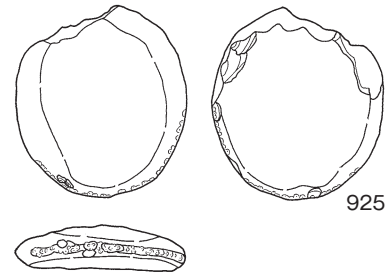
923



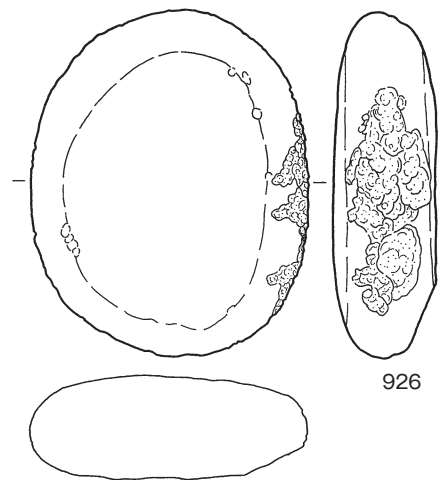
927



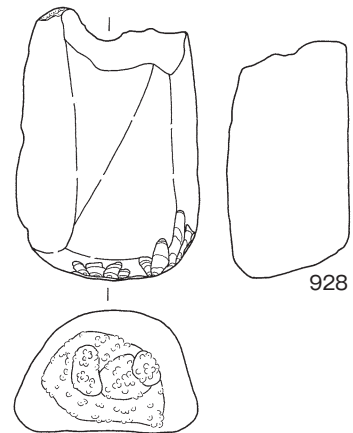
924



925



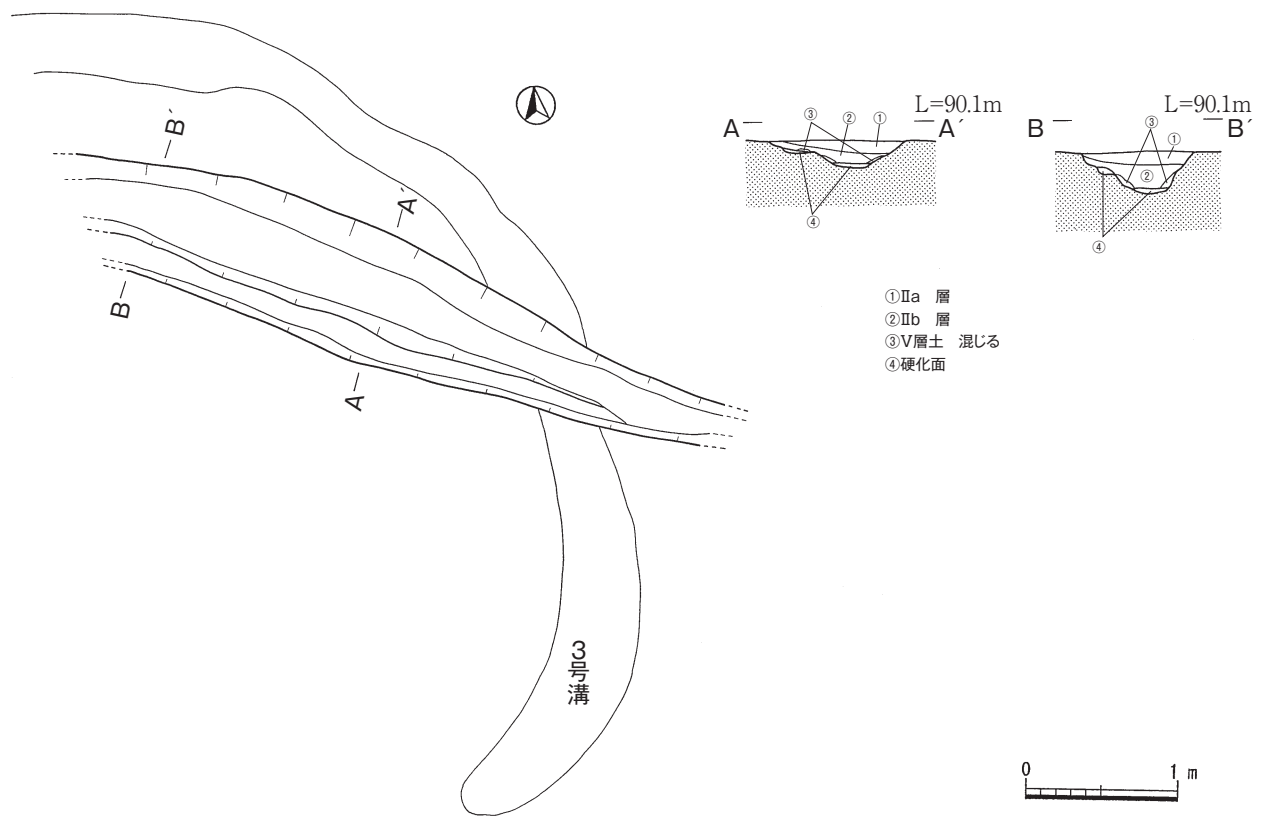
926



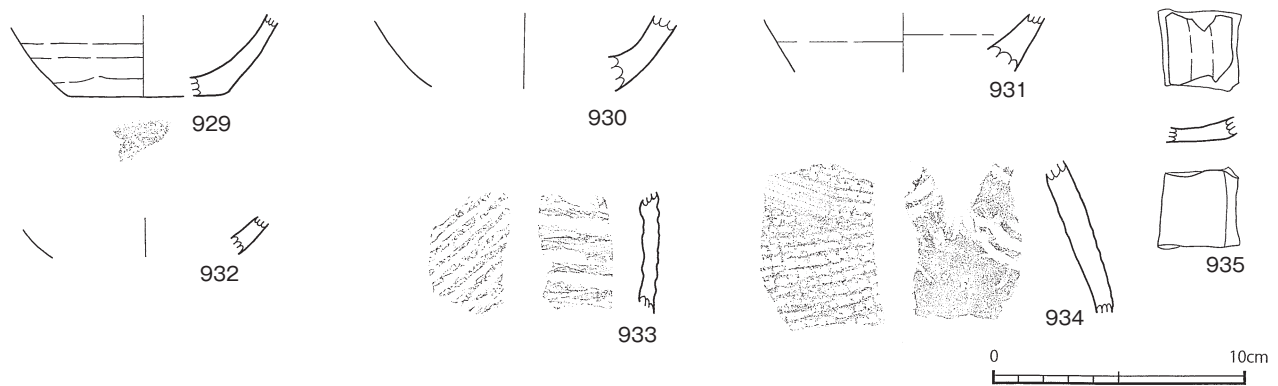
928



第 160 図 ピット内出土の遺物 5



第161図 1号道跡



第162図 古代以降の出土遺物

(2) 道 跡

1号道跡 (第161図)

G-18区のV層上面で検出された。平成25年度調査で検出していた“1号古道”の延長部にあたると考えられる。

検出した全長は4.4m、最大幅は0.9mで、上下2面の硬化面が見られる。埋土は下部からIIb層、IIa層に比定した。硬化面の上部にはV層土の混じった土が見られる。

平成27年度刊行の『町田堀遺跡』の報告書で年代測定が行われており、平安時代のものと想定された。

2 遺 物

土器 (第162図 929~935)

II層から、古代及びそれ以降の遺物と考えられる遺物が出土した。

929は土師器の椀である。930~932は底部が欠損していることから詳細は不明であるが、椀と考えられる。

935は焙烙の把手である。933と934は須恵器の甕の破片であろう。胴部の一部と考えられる。

第6節 II層ほか出土の石器

1 V層出土の石器 (第163図 936~942)

V層出土の石器として、加工痕のある剥片1点、打製石斧5点、剥片1点を図示した。なお、V層はアカホヤ火山灰層に相当し、本来、遺物包含層には該当しない。

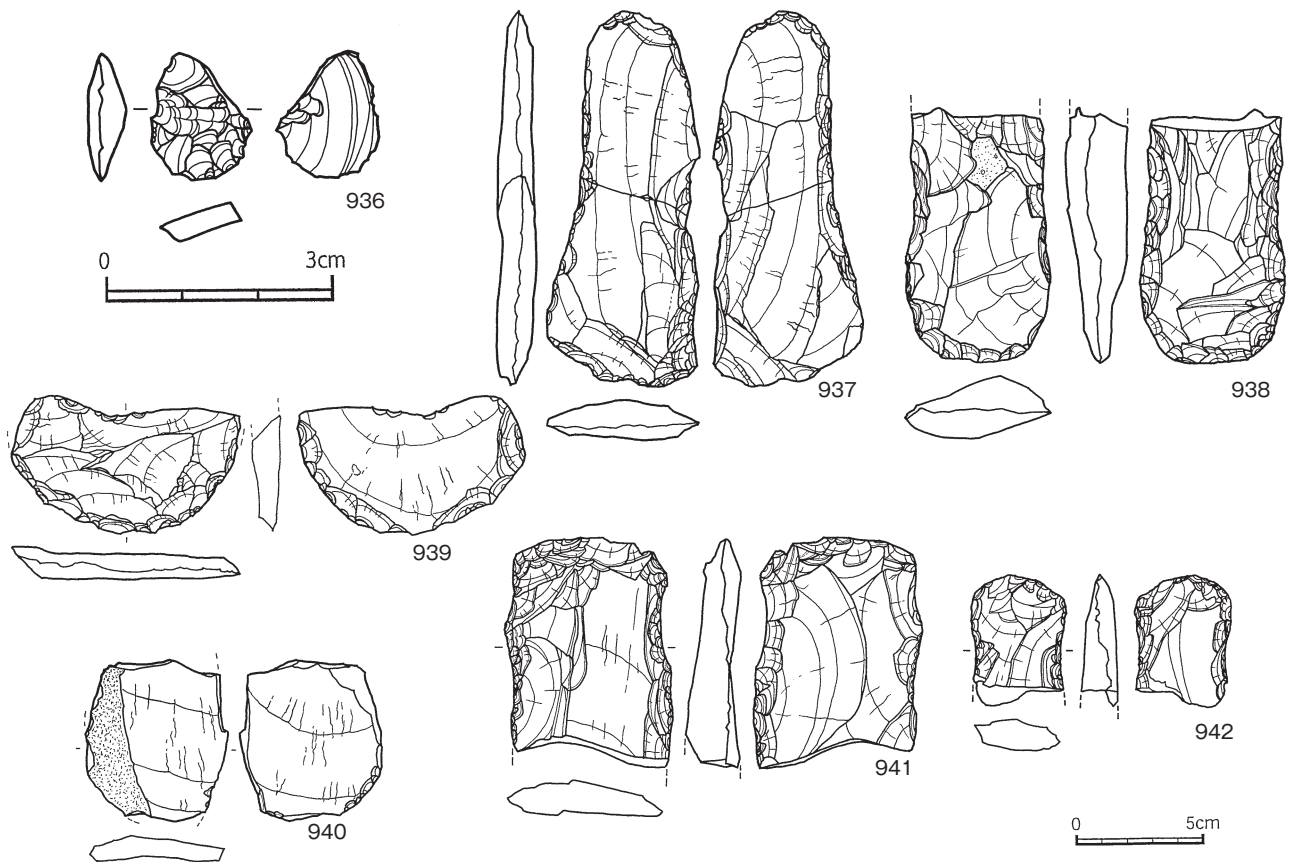
加工痕のある剥片 (第163図 936)

黒曜石II C類の剥片で、背面には周縁から剥離調整が加えられている。

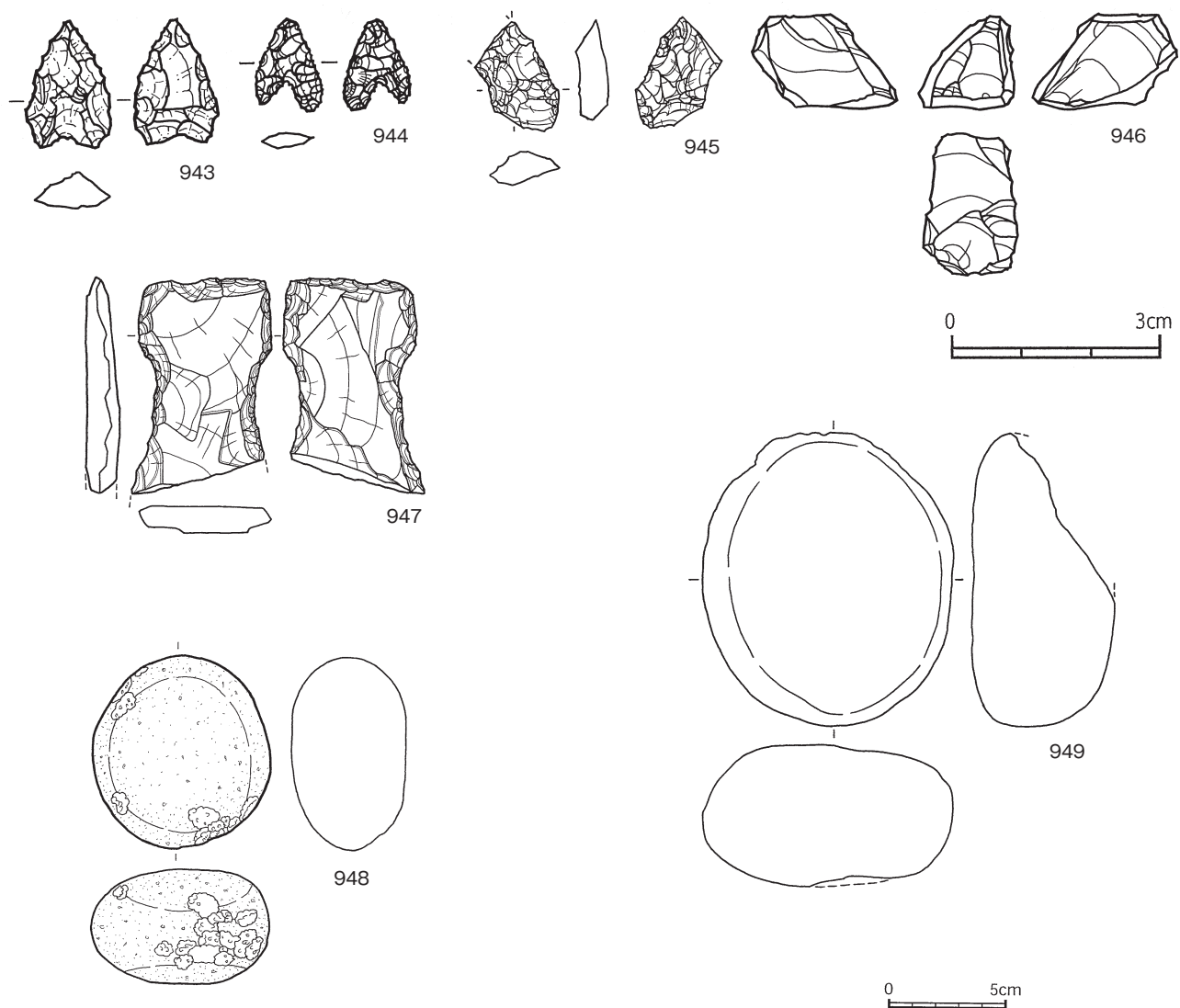
打製石斧ほか (第163図 935~942)

937はやや丸みを帯びた基端部から刃部に向けて広が

る撥形を呈する打製石斧である。右側辺下半に欠損が生じ、身部中間で折れている。938も剥離で整形された打製石斧で基部を欠失する。939は刃部が半円状に外湾する打製石斧の刃部片である。裏面は摂理に沿った剥離面である。941・942は打製石斧の基部である。いずれもホルンフェルスの大型の剥片を素材とする。940は風化面が黄褐色を呈するホルンフェルスの剥片である。打製石斧と同じ石材であるが、加工の痕跡が明確でないため、剥片として報告する。



第163図 V層出土の石器



第 164 図 IV層出土の石器

2 IV層出土の石器 (第 164 図 943~949)

IV層出土の石器は石鏃3点、使用痕のある剥片1点、打製石斧1点、磨・敲石類2点を図示した。

石鏃 (第 164 図 943~945)

943は黒色を呈する緻密な安山岩製で、基部に半円状の抉りをもつ。944は黒曜石IV類の小型の石鏃である。基部に抉りが入る凹基の石鏃で、脚部は左右非対称の形状である。945は黒曜石IV類のやや大型の石鏃の脚部片である。

使用痕のある剥片 (第 164 図 946)

946は乳白色を呈する玉髓製の剥片が分割されたもの

で、正面下辺部分に使用に伴う可能性のある小剥離がみられる。

打製石斧 (第 164 図 947)

947は風化面が黄褐色を呈するホルンフェルス製の打製石斧である。基部は左右から弧状に内湾し、基端部が広がる形状である。

磨・敲石類 (第 164 図 948・949)

948は粗面の安山岩円礫で、表面にやや顕著な磨面があり、下縁右半部に敲打によるつぶれと剥落がみられる。949は多孔質・粗面の安山岩で、裏面に顕著な磨面がみられる。

3 II層出土の石器

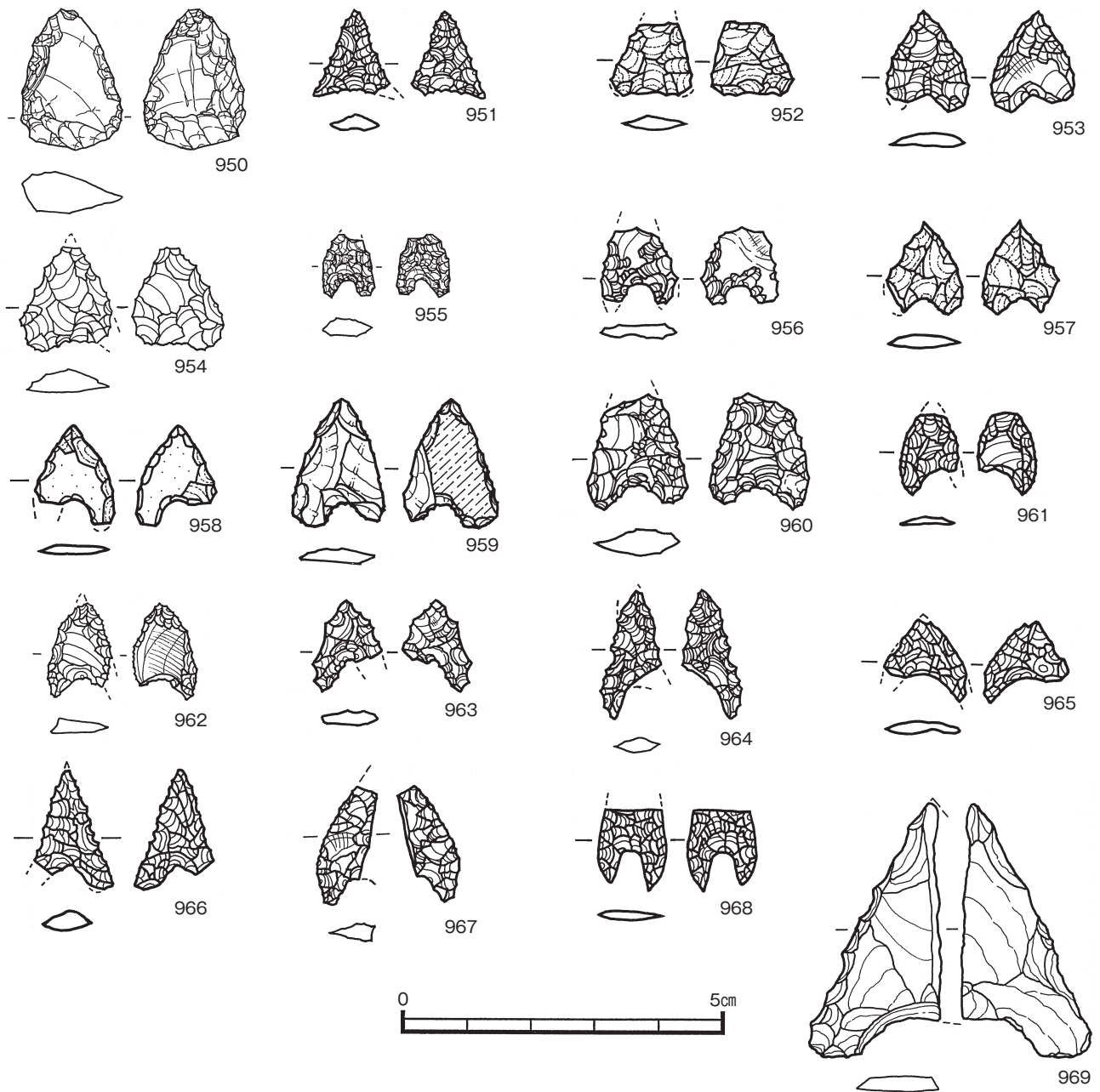
II層出土の石器として、打製石鏃20点、磨製石鏃4点、磨製石製加工品1点、石匙1点、石錐1点、加工痕・使用痕のある剥片16点、石核1点、磨製石斧12点、石包丁1点、石斧5点、打製石斧22点、スクレイパー1点、磨・敲石類19点、石錘1点、砥石類3点、石皿5点、異形石器2点、管玉1点、石製加工品2点、原礫5点を図示した。

出土層位のII層は耕作に伴い著しく攪乱を受けており、層位的安定性を欠く。また、I層（表土層）及び攪乱部分からの出土遺物、出土層位不明とされた遺物についてもII層出土石器に一括して報告した。個別の出土層位については一覧表で確認されたい。

石鏃（第165図 950～969）

950は珪質頁岩の不定形剥片を素材とする。調整剥離が周縁部のみにとどまり、断面形状が非対称で厚みが残ることから整形段階の未製品の可能性が高い。951～954は基部が浅く内湾する凹基の三角形鏃である。951は灰黒色を呈するチャート製、952・954は黒色を呈する緻密な安山岩製、953は黒曜石IV類製である。

955～960は基部に半円形に抉りの入る三角形鏃である。955は黒曜石III類、956は黒曜石IV類、957は黒色の緻密な安山岩、958はホルンフェルス、959は粘板岩、960は緑灰色を呈する珪質頁岩製である。961・962は基部が弧状に内湾する小型の石鏃で、左右側辺はやや外湾する。いずれも黒曜石IV類製である。



第165図 II層出土の石器1

963は黒曜石Ⅲ類製で、左右側边上半部が突起する基部に挟りが入る凹基の五角形鏃である。

964は黒曜石Ⅳ類製で、瘦身で脚部に膨らみをもち、基部にU字状の挟りが入る。965は水晶製で先端部及び左脚部を欠損する。基部は弧状に内湾する。966は黒曜石Ⅳ類製で、基部に半円状の挟りが入る。やや長身で側辺部分は鋸歯状を呈する。967は黒曜石Ⅴ類製の基部に半円状の挟りが入る石鏃であるが、右半部を大きく欠損する。968は上半部を欠損するが、基部にUの挟りが入るやや長身の黒曜石Ⅳ類製の石鏃である。969はホルンフェルス製の大型の石鏃である。

磨製石鏃 (第166図 970~973)

970は最大長が5.75cmを計るやや変成を受けた粘板岩製の大型の磨製石鏃で、矢が装着される身部中心部分が縦方向の研磨により薄身に仕上げられている。二次的な被熱により器面に赤化・剥落の痕跡が残る。971~973はいずれも黒色頁岩製の磨製石鏃である。971・972は基部

の凹部が表裏からの研磨で薄身に仕上げられている。973は上半部を欠損する。

磨製石製加工品 (第166図 974)

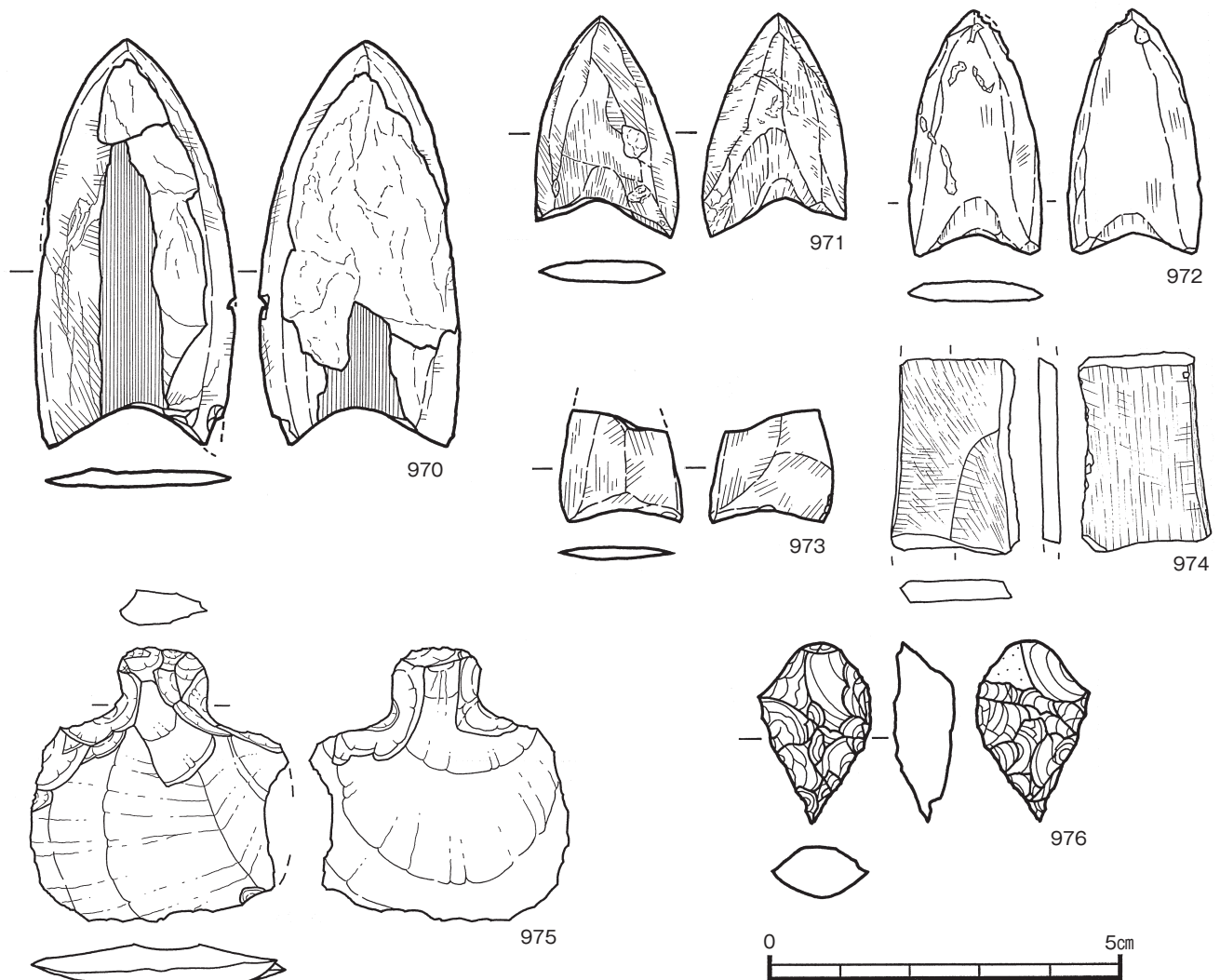
黒色頁岩製で表裏とも研磨され薄身である。左側辺は表裏からの擦り切りによって切断されている。上・下辺及び右側右辺を欠失するため全形は不明である。

石匙 (第166図 975)

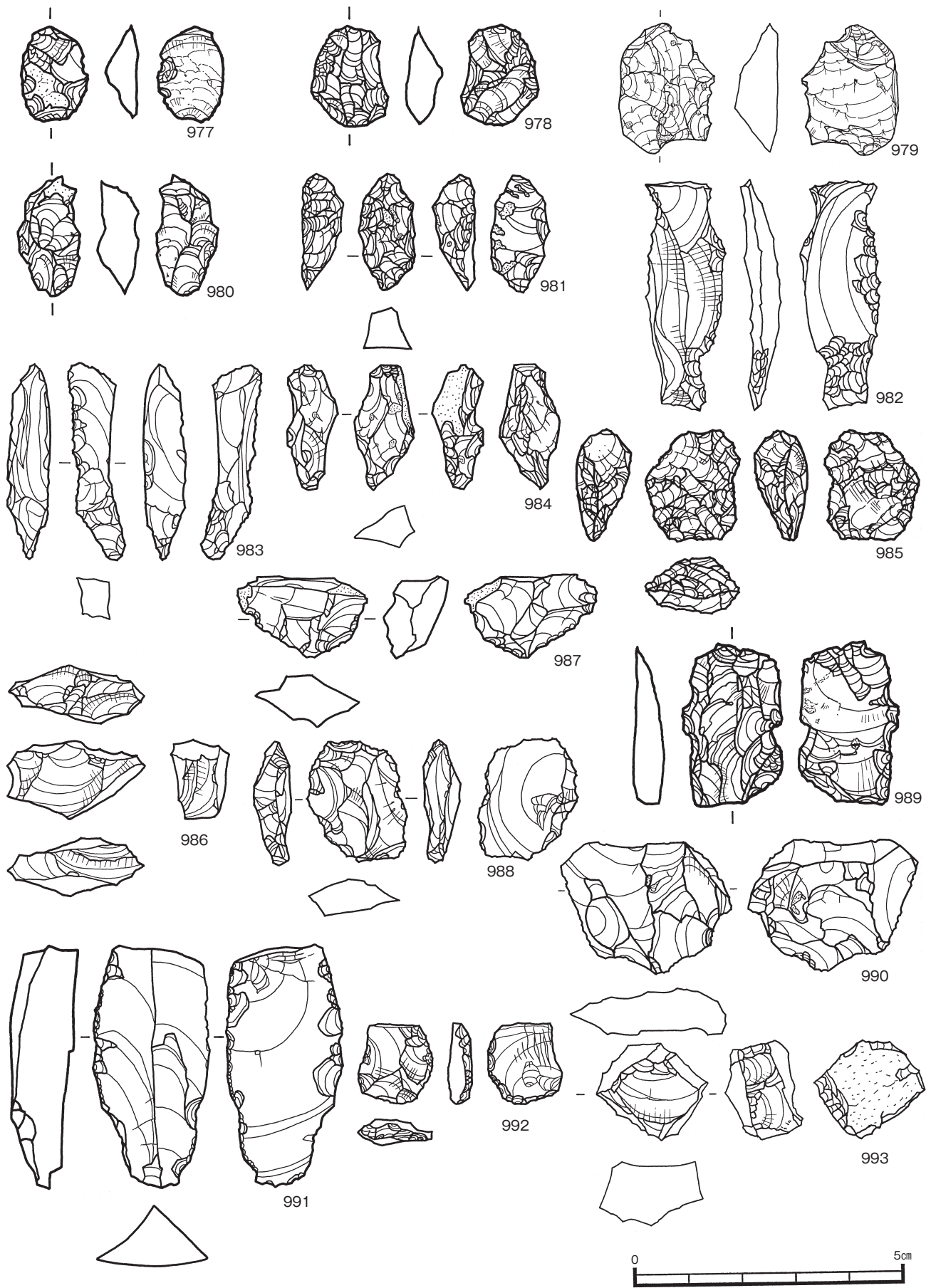
ホルンフェルス製の粗製の石匙である。上端及び側方からの調整でつまみ部が作り出されるが、刃部と目される下辺部は剥片の縁辺が残置され、二次加工は施されない。

石錐 (第166図 976)

玉髓製のやや厚みのある剥片を素材とし、周縁部分に二次加工を加え整形する。錐部は下端先端部分に短く作り出されている。機能部の梁上には摩耗が生じている。



第166図 II層出土の石器2

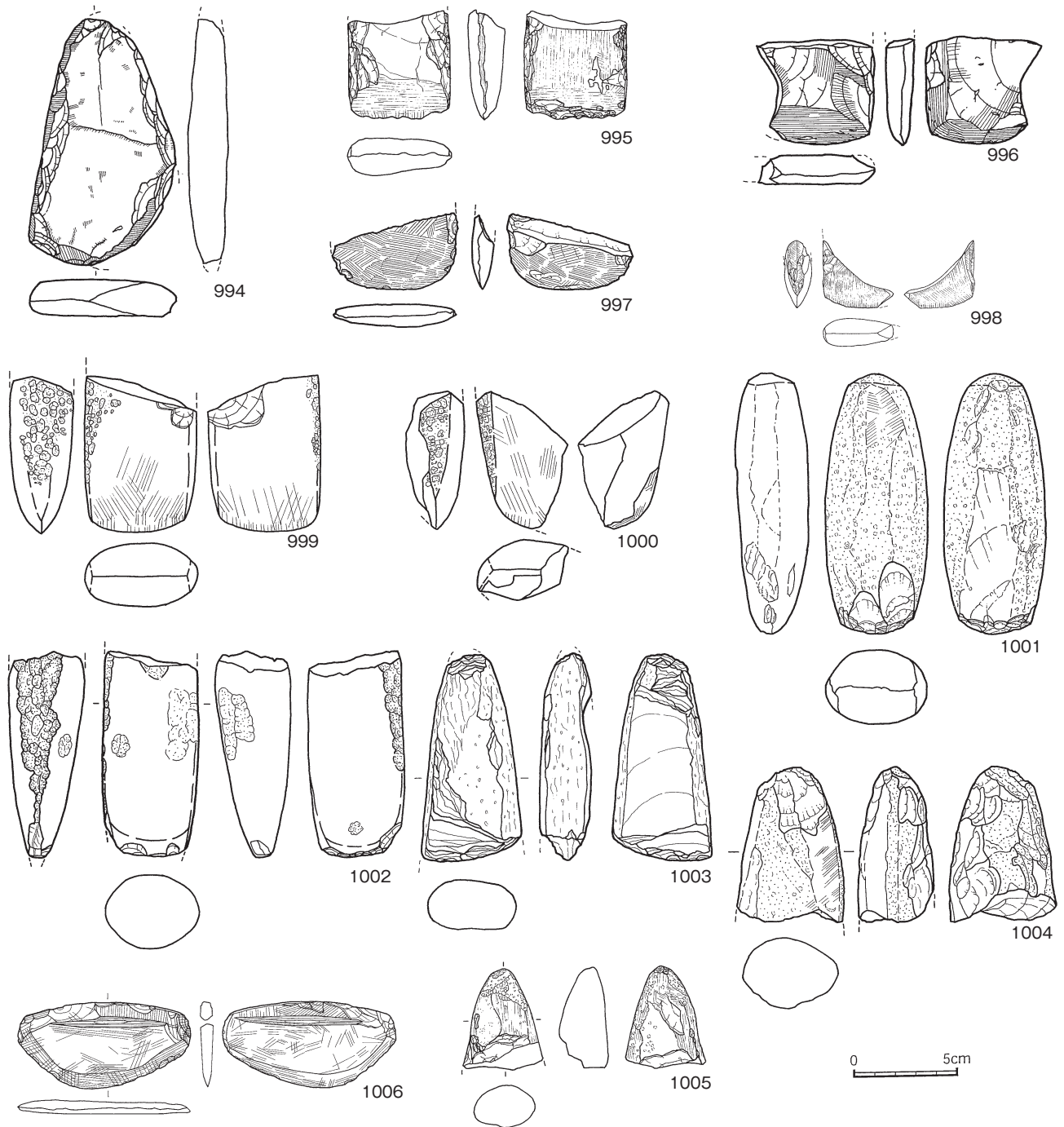


第 167 図 II 層出土の石器 3

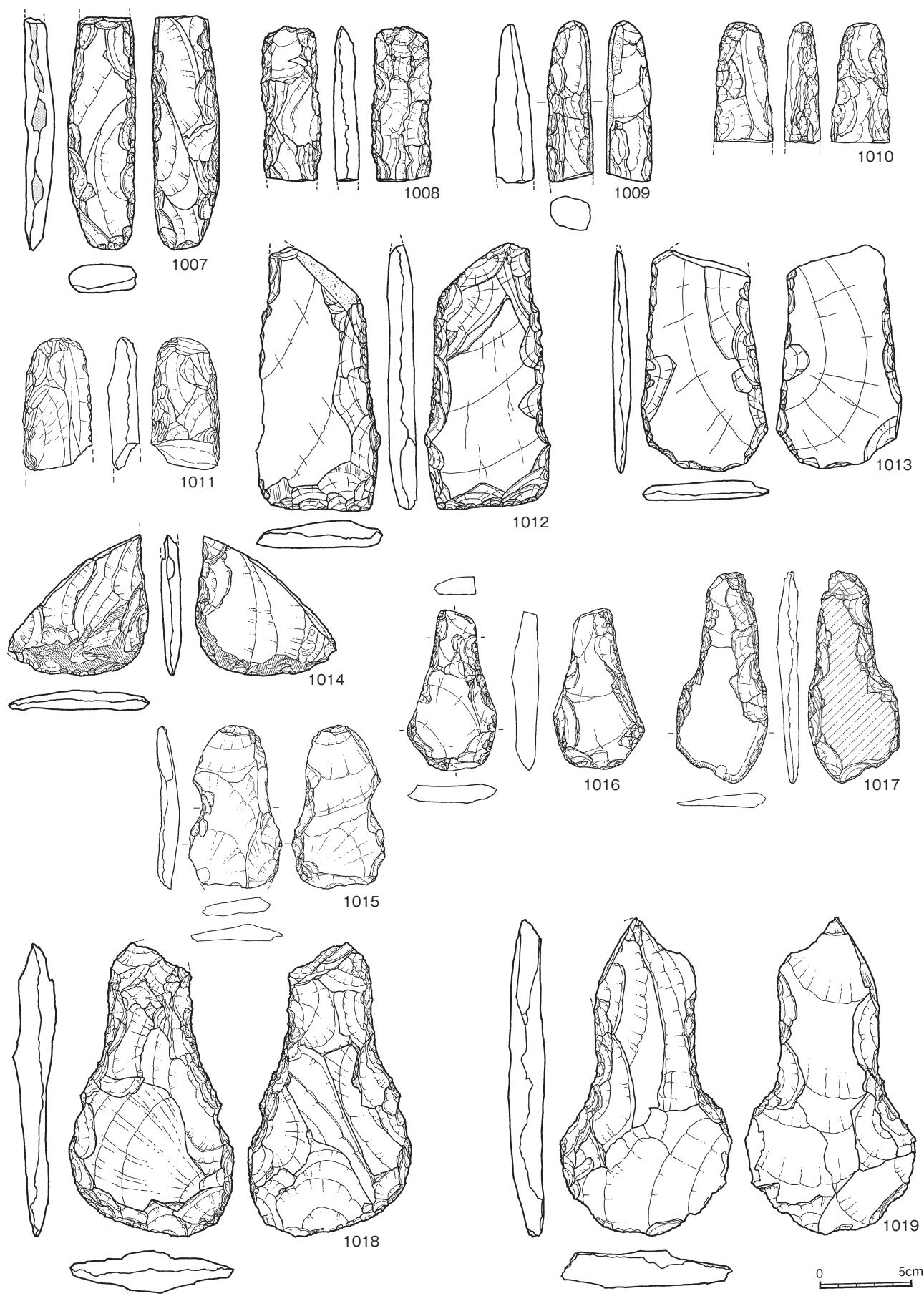
加工痕・使用痕のある剥片 (第 167 図 977~992)

977 は背面に自然面が残る黒曜石Ⅳ類の剥片で、下縁周辺及び左側縁上部に二次的な剥離痕がみられる。978 は黒曜石Ⅳ類で上下・左右に対向する剥離がみられ、左縁上半部及び右辺下端部にはつぶれが生じており、楔形石器に類する特徴がみられる。979 は黒曜石ⅡC類の不定形剥片で、主に覆面から背面側へ不規則に調整剥離が施される。左側縁上端に部分的に微細剥離がみられることから搔・削器的な用途が考えられる。980 は黒曜石Ⅲ類の碎片である。左側辺下半の縁辺につぶれが生じてい

る。981 は黒曜石ⅢU類で、覆面側からの急傾斜の調整剥離で丁寧に整形されている。下端部を機能部とする石錐の可能性を想定したが、錐部の作り出しがみられず、摩耗や微細剥離も生じていないことから加工痕のある剥片として報告した。982 は黒曜石Ⅴ類の幅広の剥片の切断した末端部を用い、左右側辺に細かい剥離調整を加え整形した後、上下につまみ状の括れを作り出す。983 は灰褐色のチャート製、984 は黒曜石ⅡC類で、いずれも下端部にやや粗雑な加工で錐部状の突起部が作り出されるが明瞭な摩耗などは観察されない。985 は黒曜石ⅡC



第 168 図 Ⅱ層出土の石器 4



第 169 図 II 層出土の石器 5



第170図 II層出土の石器6

類のやや厚みのある不定形剥片で、左側辺及び下辺部分に調整剥離が施され、縁辺に微細剥離が生じている。搔・削器的な使用の可能性がある。986は黒曜石Ⅳ類で、実測図では石核のように見えるが背面はポジティブな剥離面である。主要剥離の打面に相当する上面に複数の剥離が加えられている。987は灰黒色のチャート製の剥片で、右側辺下半、左側辺等の縁辺に小剥離がみられる。988は乳白色を呈する玉髓で、右側辺に微細な剥離がみられる。989は黒曜石ⅡC類のやや縦長の剥片で、図左が主要剥離面である。図左右側辺に剥離及び微細剥離が不規則にみられる。990は灰褐色のチャート剥片で、図左側辺に不規則な微細剥離がみられる。991も990と同質のチャートのやや縦長の剥片で両側辺に微細な剥離がみられる。992は黒曜石Ⅳ類の不定型な小剥片で、図右縁から下辺にかけて、小剥離が密にみられる。

石核 (第167図 933)

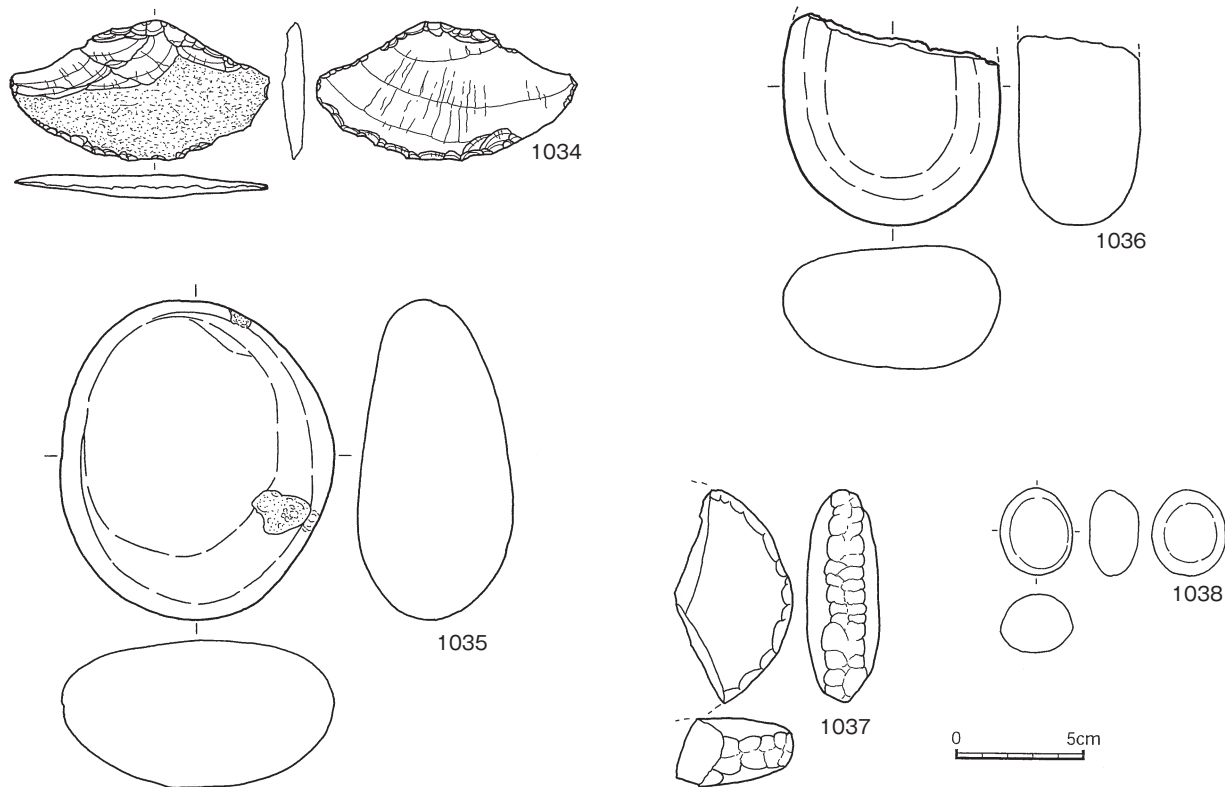
複数面に自然面が残る黒曜石ⅢU類の小原礫を用いた石核である。剥片剥離はさほど進行していないが、ネガティブな剥離面と自然面によって構成されることから石核とした。

磨製石斧 (第168図 944~1005)

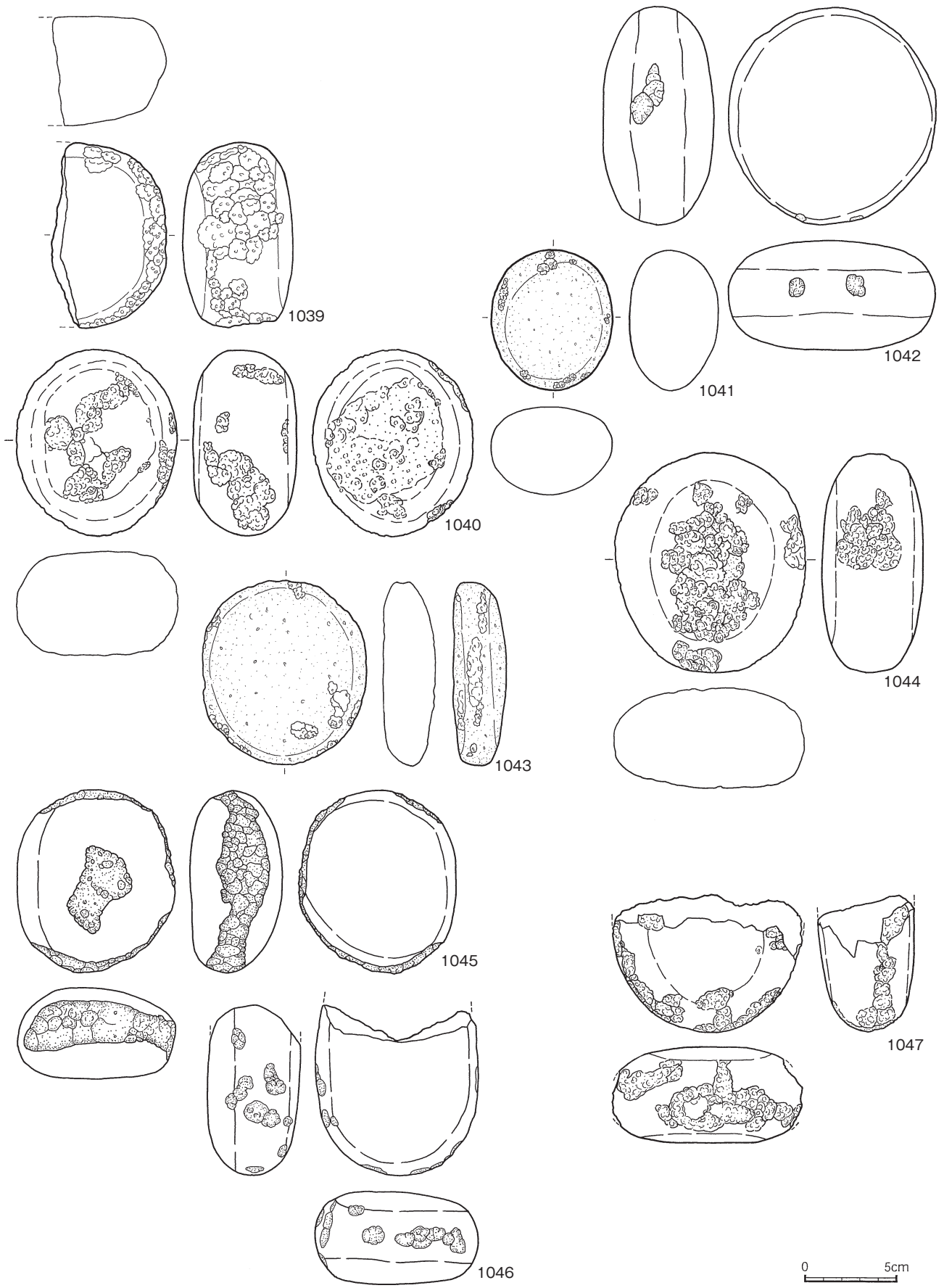
944はホルンフェルス製の厚みのある横長剥片を剥離・

敲打調整後、刃部のみを研磨した弱凸強平刃の磨製石斧である。平面形は撥形を呈し、右側刃部から側辺にかけて使用に伴うとみられる欠損が生じている。995・996もホルンフェルス製の弱凸強平刃の磨製石斧で、いずれも剥片素材で身部が扁平で、研磨は刃部を中心に表・裏面に及ぶ。997・998はホルンフェルス製の扁平な両凸刃の磨製石斧の刃部片である。残存部分は剥離調整後・敲打で整形されほぼ全面に研磨が及ぶ。

999は砂岩質のホルンフェルスの厚みのある全面研磨の磨製石斧で刃部は両凸刃である。被熱による赤化が生じており、基部を欠失するが乳房状を呈するものとみられる。1000は緑灰色の緻密な砂岩製の両凸刃の磨製石斧である。左側縁から背面にかけて被熱による赤化と剥落がみられる。1001はホルンフェルス製の乳房状を呈する磨製石斧である。体部は丁寧に敲打で整形され、刃部付近には研磨の痕跡を認める。刃部には敲打痕と剥離が生じており、敲打具に転用されたとみられる。このため、刃部形態は不明である。1002は器面の風化が激しく敲打や研磨痕跡は不明瞭であるが乳房状の両凸刃の磨製石斧とみられる。基部を欠失し、刃部縁辺のつぶれから敲打具へ転用されたとみられる。1003・1004・1005はいずれもホルンフェルス製の磨製石斧の基部である。いずれも剥離調整後、敲打で整形された乳房状の石斧とみられる。



第171図 II層出土の石器7



第 172 図 II 層出土の石器 8

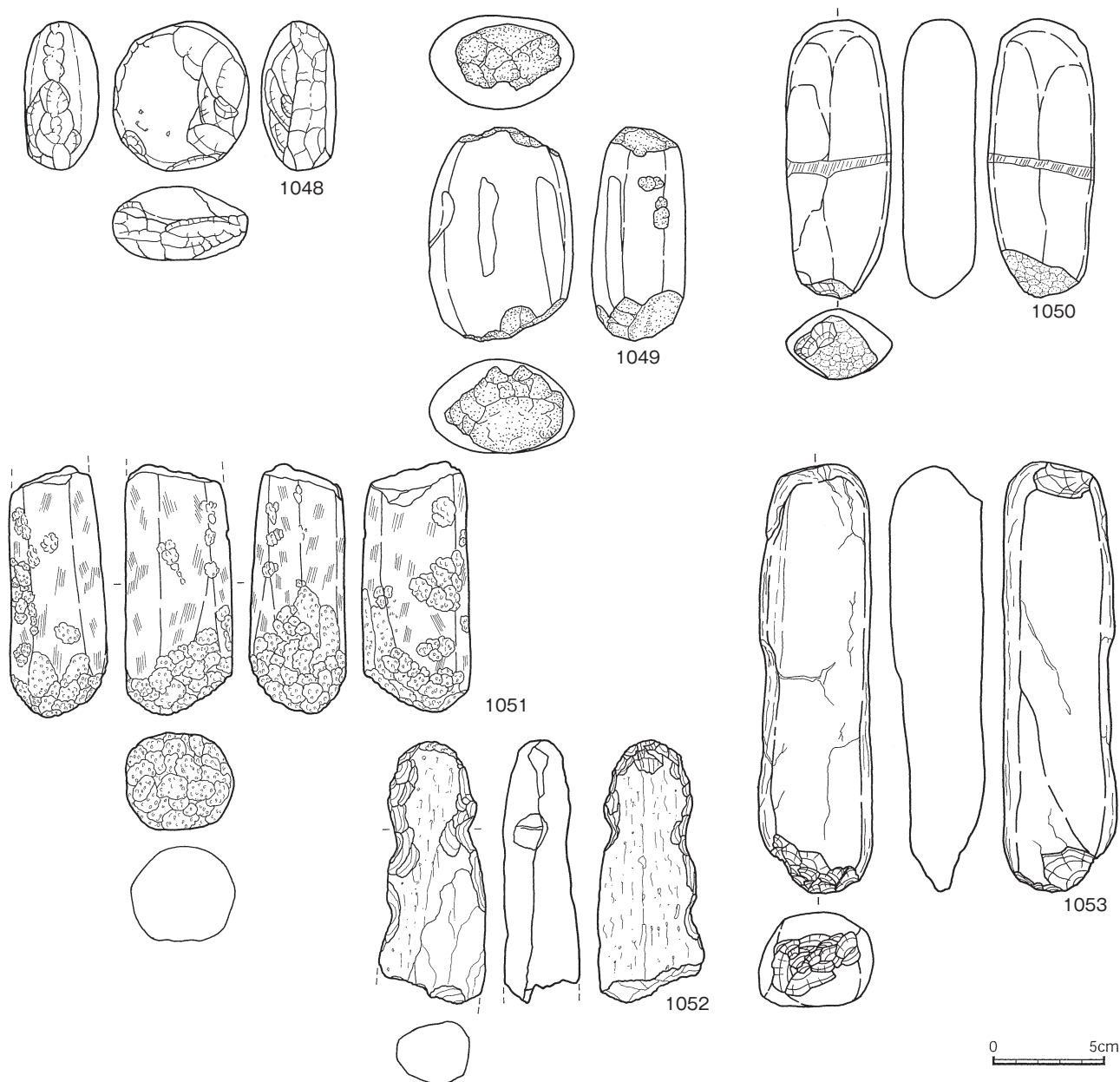
石包丁 (第 168 図 1006)

1006 はホルンフェルスの剥片に剥離を加え整形した後、表裏から擦り切りで穿孔し、全面を研磨して石包丁としている。下縁刃部には光沢が生じている。

石斧 (第 168 図 1007~1011)

1007~1011 は研磨痕が不明瞭なため、石斧として扱った。1007 はホルンフェルスの横長の剥片に剥離調整後、両側辺に敲打を加え整形している。刃部には二次的な剥離が生じ、器表面の風化もあり明瞭な研磨を認めることはできないが、扁平で細身の刃部磨製の石斧であった可能性がある。1008 は灰褐色を呈するホルンフェルス製

で、1007 同様、細身・扁平で側辺は剥離調整後、部分的ではあるが敲打で整形されている。1009 は器面が風化するホルンフェルス製で、側辺は剥離調整後、敲打で整形されている。身部がやや丸みを帯び、図上端部が基部に細身、扁平となっており、当該部位分が刃部である可能性がある。1010 もホルンフェルス製で、両側辺とも剥離調整後、敲打による整形が施され、細身の身部をもつ。1011 も同様に剥離調整後、敲打が加えられている。いずれも、剥離調整後、敲打整形の過程がみられることから、刃部磨製の石斧である可能性があり、他の打製石斧とは区分した。



第 173 図 II 層出土の石器 9

打製石斧（第 169・170 図 1012～1033）

1012～1014 は基部の一部を欠損するが、短冊形が想定される打製石斧である。いずれもホルンフェルス製であるが、1012 が灰褐色でやや硬質、1013 が黄褐色で器面の風化が激しくやや軟質である。いずれも刃部背面側の摩耗がみられる。1014 は刃部片であるが残存する右側面の形状から短冊形が想定される。刃部背面側の顕著な摩耗がみられる。

1015 は身部側辺が内湾し括れた形状を示す打製石斧である。刃部先端には折れが生じている。

1016～1019 は刃部が広く基部に向かって窄まる撥形の打製石斧で、1018 を除き他はホルンフェルス製である。1016 は小型で刃部平面形は円刃で、刃部背面側にわずかに摩耗が生じている。1017 は背面に自然面を残す黒灰色のホルンフェルスの剥片を素材とするやや小型の打製石斧である。刃部側背面に摩耗が生じており、特に右側縁部分に顕著である。1018 は砂岩製の打製石斧である。撥形の形状であるが、刃部は右寄りに傾く偏刃で、刃部左側縁が顕著に摩耗する。1019 は器面が黄褐色を呈し風化が進むが、新しく傷が生じた部分は暗紫色を呈する。刃部形状は円形を呈し、背面側に摩耗が生じている。

1020 は左側辺が直線状で、右側辺基部付近が抉り状に窄まる形状で、右側辺の基部が窄まる部分から左側辺下端付近が半円状の刃部となる。石材は黄褐色に器面が風化するホルンフェルス製で、刃部左端表・裏及び同縁辺に顕著な摩耗が生じている。

1021 は左右側辺基部の左右が剥離調整により弧状に内湾し、基端部がやや広がる。刃部は下端部に新しい欠損が生じているが、右側に膨らむ左右非対称の形状となっている。石材は黄褐色のホルンフェルス製で刃部左側縁縁辺に摩耗が生じている。

1022・1023・1027・1028 は打製石斧の刃部片である。1022 は砂岩製で、残存部からみるとかなり大型の製品である。刃部平面形状は円刃を呈し、裏面側器面に摩耗が生じている。1023 は刃部がやや広がる形状で、右側に傾く偏刃で背面上にわずかに摩耗を認める。1027・1028 はいずれも風化した器面が黄褐色を呈するホルンフェルス製で、刃部先端が尖る形状である。1027 は背面側に摩耗が生じている。

1024 は黒色の頁岩の横長剥片を素材とする打製石斧で、刃部及び基部を欠損するが、残存部から撥形を呈するものとみられる。表裏面の梁上に摩耗が生じている。

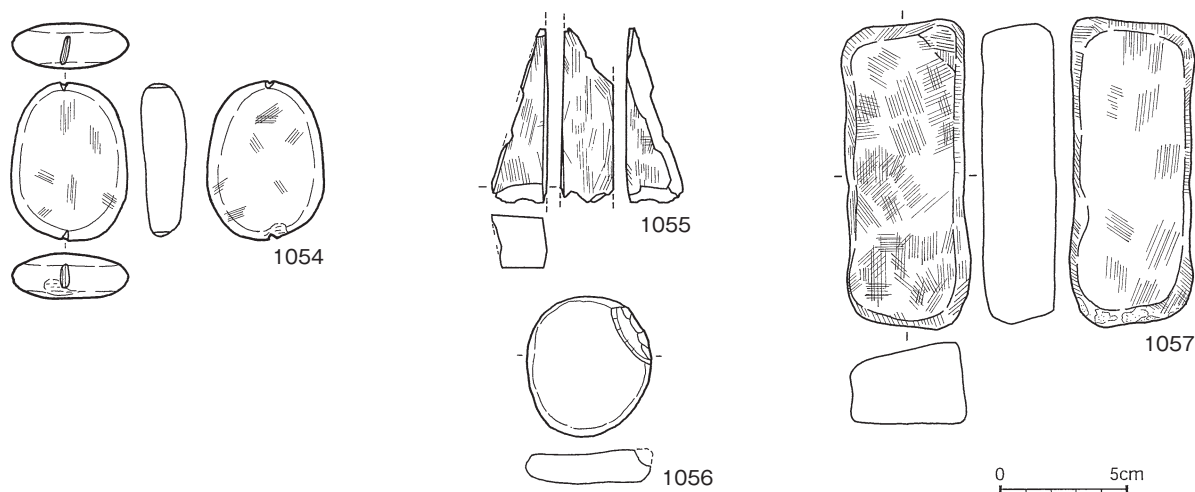
1025・1026・1030～1033 は打製石斧の基部破片である。1025 は砂岩製で残存する側辺の下部に左右側縁から浅い抉りが作り出されている。1026 は黄褐色の風化面を呈するホルンフェルス製である。1029～1032 左右側辺に調整剥離を加え、側辺を内湾させ基端部が広がる形状の基部を持つ。1029 は小型で砂岩製、1030～1032 はホルンフェルス製である。1033 はホルンフェルス製で新しいキズの部分は暗紫色を呈する。残存部分の両側辺はほぼ並行する。

スクレイパー（第 171 図 1034）

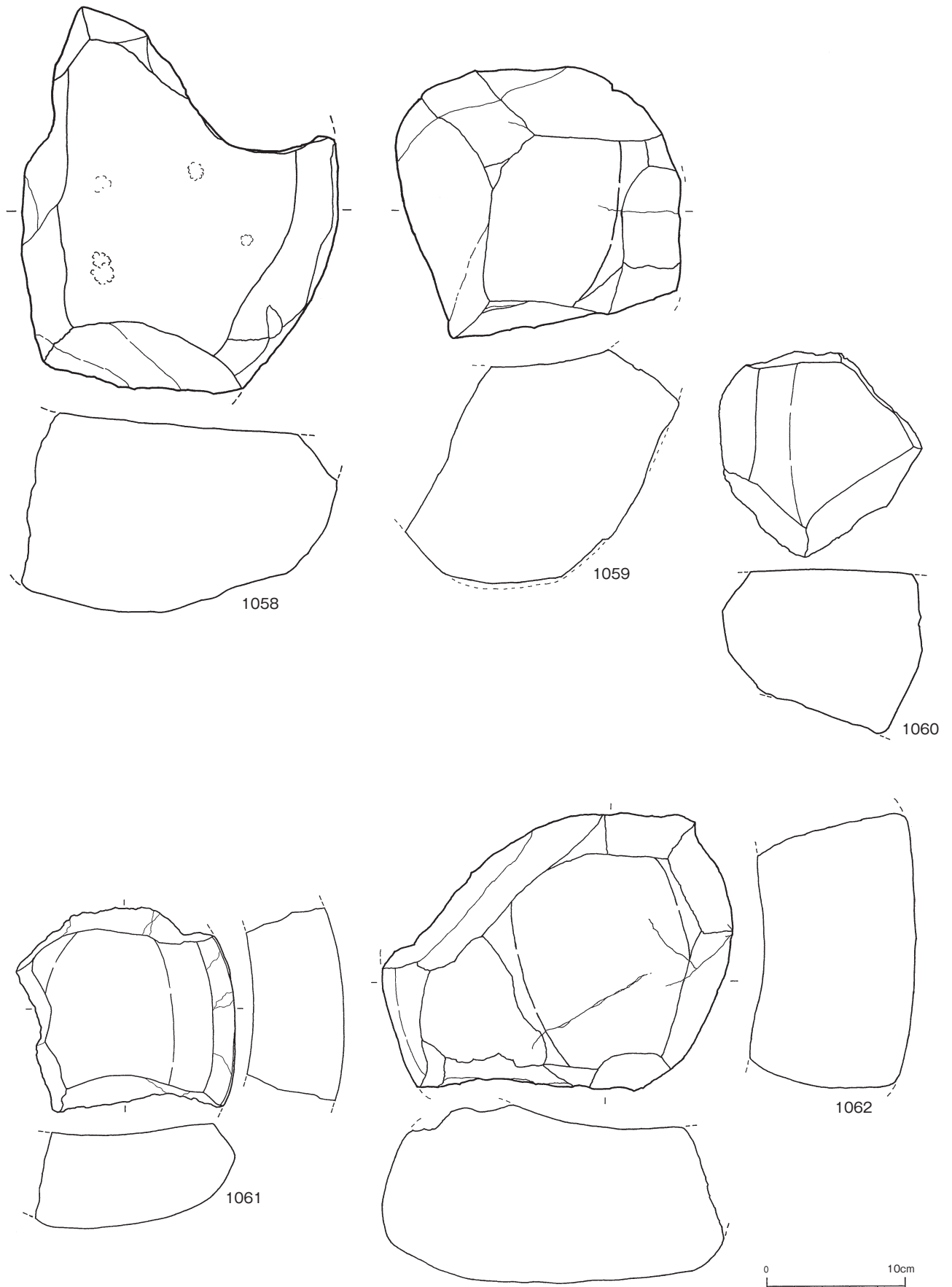
1034 は背面に自然面をもつ砂岩の翼状剥片を素材とするスクレイパーである。刃部は主に背面側から不規則な剥離で調整され、刃部は弧状に外湾する。

磨・敲石類（第 171～173 図 1035～1053）

1035 は安山岩製の磨・敲石で片面にやや平坦な磨面をもち、上端部側縁に敲打によるつぶれが生じている。1036 は花崗岩製の磨石で表・裏に磨面があるが、正面図側の摩滅が顕著である。1037 は砂岩製の磨・敲石の破片である。正面図表面の摩滅が顕著で、右側縁には敲打に



第 174 図 II 層出土の石器 10

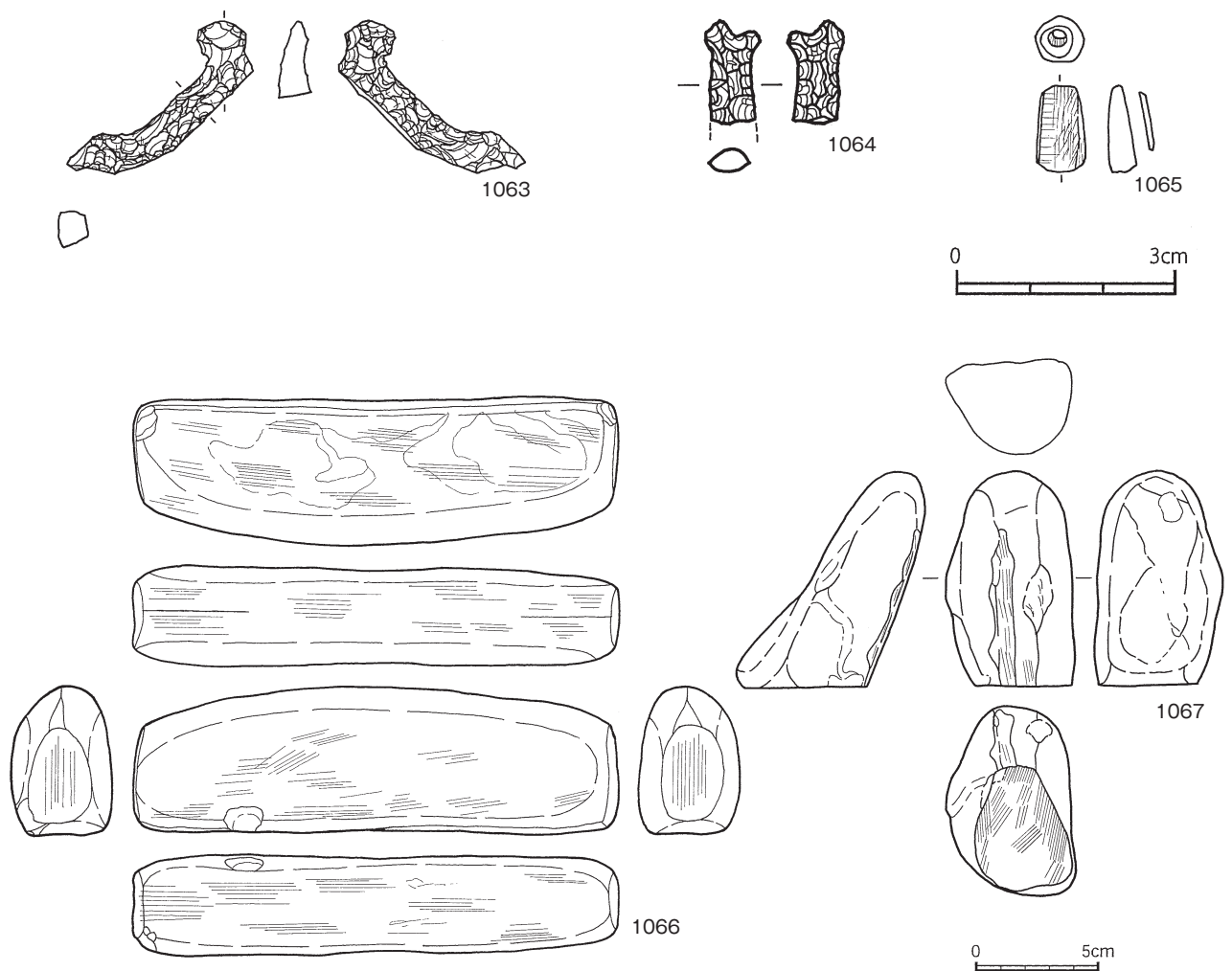


第 175 図 II 層出土の石器 11

よるつぶれがみられる。二次的に被熱を受けており赤化と剥落が生じている。1038は砂岩の小円礫である。片面に弱い摩耗がみられるのみで使用については不明である。1039は粗面の安山岩製の磨・敲石で、裏面側に顕著な摩滅面をもち、側縁に荒い敲打痕がみられる。1040は粗面の多孔質の安山岩で、表裏面にあばた状敲打痕が広がり磨面は縁辺にわずかに残る。側縁上下端部にも敲打痕がみられる。1041は鶏卵状の安山岩の円礫で、表裏面とも顕著な磨面はみられない。下端部周縁にわずかに敲打つぶれの痕跡がみられることから敲石とした。1042は粗面・多孔質の安山岩で片面に弱い磨面をもつ。左側縁から右側辺下半にかけて周縁部に敲打の痕跡がみられる。1043も粗面・多孔質の安山岩の扁平円礫で、表裏ともわずかに摩耗を認めるが顕著な磨面ではない。側縁のほぼ全周に敲打痕がみられる。1044は粗面の安山岩で裏面に顕著な磨面をもつ。左右側縁に敲打・つぶれがみられるほか、表面中央付近を中心にあばた状の凹みが生じている。1045も粗面の安山岩で裏面に外湾する顕著な磨面がみられる。上・下縁及び右側面に荒い敲打痕がみられ、特に右側辺は敲打によるつぶれが進行し側面が

形成されている。また、表面中央付近にあばた状の敲打痕がみられる。1046は粗面の安山岩で、敲打整形により側面をもつ。表面側に顕著な磨面が認められ、下縁左寄りを中心にあばた状の敲打痕がみられる。1047は花崗岩製の磨・敲石で、表裏に摩滅面をもち、下縁に敲打痕がみられる。1048は花崗岩の扁平な円礫で、下半部側縁に敲打によるつぶれや剥落がみられる。1049は長楕円形を呈する砂岩礫で、上下両端に敲打によるつぶれや剥落がみられ、裏面に磨面を認める。

1050～1053は棒状の礫を素材とする敲石類である。1050はホルンフェルスの棒状礫で、下端部に敲打によるつぶれ・剥落が認められる。石器製作具として用いられた可能性が高い。1051は棒状の砂岩礫で、周縁に複数の研磨面をもち、下端部にあばた状の敲打痕、つぶれが認められる。上端は折れ面となっており、砥石から敲石に転用された可能性がある。1052は粘板岩の棒状礫で下端部及び側辺の一部に敲打痕と剥落を認める。1053はやや大型の粘板岩の棒状礫で、下端部に敲打によるとみられる剥落が生じている。



第 176 図 II 層出土の石器 12

石錘 (第 173 図 1054)

1054 は黒灰色を呈する細粒砂岩の扁平な亜円礫で、上下に擦り切りにより断面V字状の切り目を入れている。

砥石 (第 173 図 1055~1057)

1055 は赤褐色を呈する細粒砂岩の破片で、3面に磨面が残る。1056 は扁平な砂岩円礫で凹面を呈する磨面がみられる。1057 は直方体を呈する砂岩亜角礫で磨面は顕著なものではない。

石皿 (第 175 図 1058~1062)

1058~1062 はいずれも凝灰岩製の石皿の破片で、破砕により全体の形状等は不明である。

異形石器 (第 176 図 1063・1064)

1063 は黒曜石Ⅶ類製で調整により端部につまみと小突起が作り出されている。1064 は黒曜石Ⅳ類で下半部を欠損する。扁平棒状で端部は叉状に整形される。

管玉 (第 176 図 1065)

緑灰色を呈する軟玉製の管玉で、下端は折れ面を再研磨したものとみられる。穿孔は中心より外側によっている。

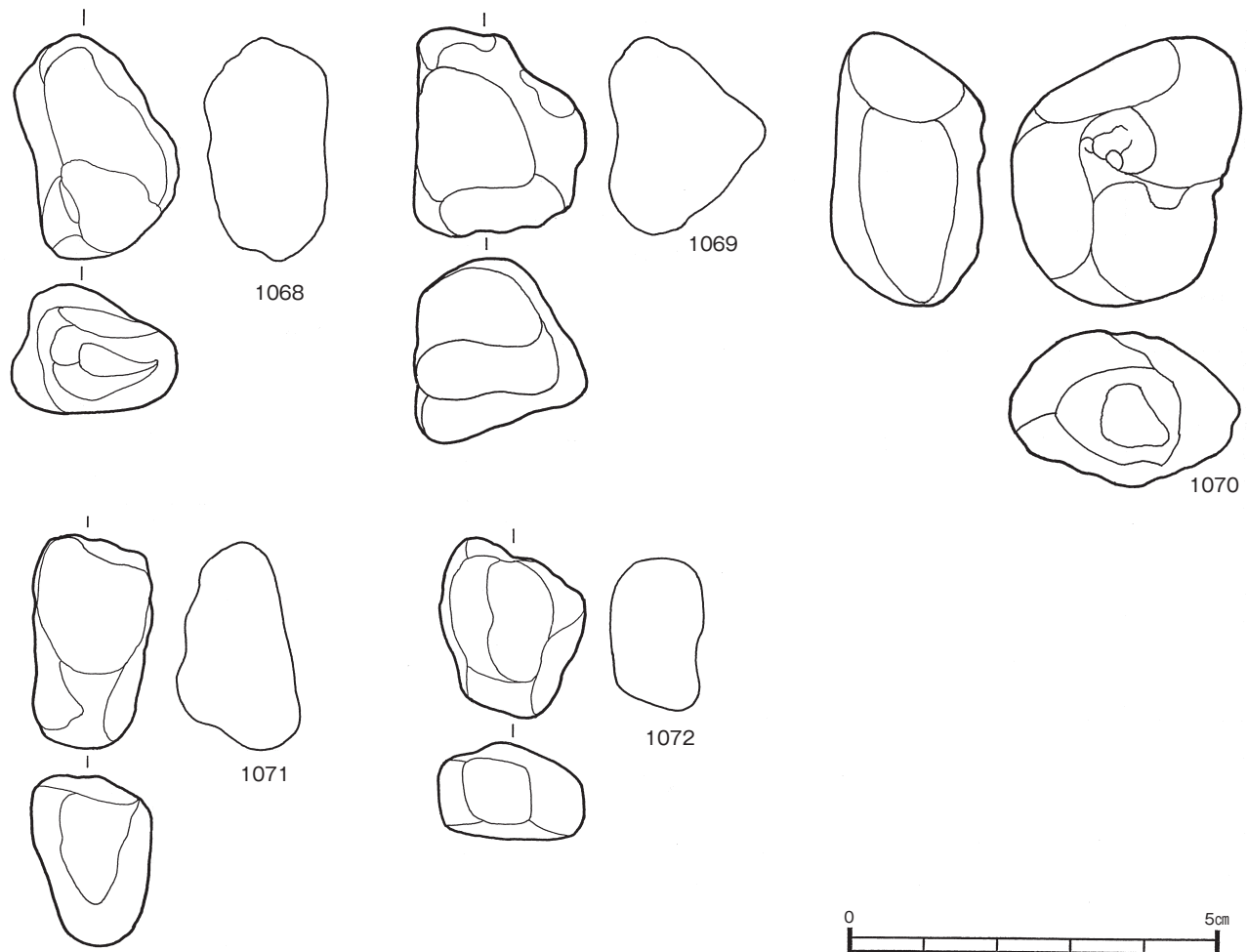
石製加工品 (第 176 図 1066・1067)

1066 は砂岩製で、左右側面は敲打により平坦面に仕上げられ、表裏面は研磨により仕上げられ横方向の線状痕が多数みられる。上縁は弧状にゆるく外湾し、底面も研磨により平坦に仕上げられている。やや横長ではあるが石冠に類似する石製品として報告する。

1067 はホルンフェルスの棒状の亜円礫で、下面は摂理に伴う折れ面の可能性があるが、平滑に擦られた痕跡がみられることから加工品として報告した。

原礫 (第 177 図 1068~1072)

灰白色を呈する石英質の亜円礫であり、加工の痕跡は認められない。



第 177 図 II 層出土の石器 13

第6表 縄文時代早期遺構内出土土器観察表

挿図番号	掲載番号	遺構名	器種	分類	出土区	部位	法量 (cm)			調整		胎土					取上番号	備考
							口径	底径	器高	外面	内面	白磁石	角閃石	雲母	石英	長石		
21	2	2号集石	深鉢	3	B-4-5	胴部				-	ナデ					P15	塞ノ神式・捺糸・沈線	
	3	2号集石	深鉢	3	B-4-5	胴部				ナデ	ナデ					P10	塞ノ神式・刻目・刺突	
	4	2号集石	深鉢	3	B-4-5	胴部				ナデ	ナデ					P21	塞ノ神式・沈線・捺糸・刺突	
	5	2号集石	深鉢	3	B-4-5	胴部				ナデ	ナデ					P3	塞ノ神式・沈線・捺糸	
	6	2号集石	深鉢	3	B-4-5	胴部				ナデ	ナデ					P22	塞ノ神式・沈線・捺糸	
	7	2号集石	深鉢	-	B-4-5	底部			(7.0)	ナデ	ナデ					P17		
	8	3号集石	深鉢	3	A・B-4	胴部				ナデ	ナデ					P1	塞ノ神式・沈線・捺糸	
22	9	3号集石	深鉢	2	A・B-4	胴部				ナデ	ナデ				P3	塞ノ神式・沈線・貝殻刺突		
	10	3号集石	深鉢	2	A・B-4	胴部				ナデ	ナデ				P16	加栗山式・貝殻刺突		
23	12	4号集石	深鉢	2-c	B-3-4	胴部				ナデ	ナデ				P3	桑ノ丸式・貝殻条痕		
25	14	6号集石	深鉢	2a	D-4	胴部				ナデ	ナデ				26	下剥釜式・貝殻刺突		
	15	9号集石	深鉢	2a	C-5-6	胴部				ナデ	ナデ				P1	下剥釜式・貝殻刺突		
28	16	9号集石	深鉢	2a	C-5-6	底部		(14.0)		ナデ	ナデ				P2	下剥釜式・貝殻刺突		
	17	10号集石	深鉢	2a	C-5	胴部				ナデ	ナデ				P1	下剥釜式・貝殻刺突		
29	18	11号集石	深鉢	2b	B-4	口縁部				ナデ	ナデ				P1 他	下剥釜式・辻タイプ・貝殻刺突		
	19	11号集石	深鉢	3	B-4	胴部				ナデ	ナデ				P2	塞ノ神式・沈線・捺糸		
30	20	11号集石	深鉢	-	B-4	底部				ナデ	ナデ				P3			
	21	12号集石	深鉢	1	B・C-4	口縁部	(24.2)			ナデ	ナデ・ミガキ				P1 他	下剥釜式・貝殻条痕		
31	22	12号集石	深鉢	2a	B・C-4	口縁部	(15.0)			ナデ	ナデ・ミガキ				P2	中原式・貝殻刺突		
	23	12号集石	深鉢	2a	B・C-4	胴部				ナデ	ナデ・ミガキ				P10	下剥釜式・貝殻刺突		
	24	12号集石	深鉢	2a	B・C-4	胴部				ナデ	ナデ				P6	下剥釜式・貝殻刺突		
	25	12号集石	深鉢	2a	B・C-4	胴部				ナデ	ナデ				P7	下剥釜式・貝殻刺突		
32	27	13号集石	深鉢	-	C-4	胴部				工具ナデ	ナデ				9			
33	28	14号集石	深鉢	2a	F-3-4	胴部				ナデ	ナデ				P12	下剥釜式・貝殻刺突		
	29	14号集石	深鉢	2a	F-3-4	胴部				ナデ	ナデ				P1	下剥釜式・短沈線		

第7表 縄文時代後期遺構内出土土器観察表

挿図番号	掲載番号	遺構名	器種	分類	出土区	部位	法量 (cm)			調整		胎土					取上番号	備考	
							口径	底径	器高	外面	内面	白磁石	角閃石	雲母	石英	長石			輝石
58	193	1号壱穴住居跡	精製浅鉢	5	E-5	口縁~胴部	(16.0)			ミガキ・ナデ	ミガキ・ナデ				○	○	SI8-137 他	中岳Ⅱ式	
	194	1号壱穴住居跡	精製浅鉢	5	E-5	口縁~胴部	(16.8)			ミガキ・ナデ	ミガキ・ナデ				○	○	SI8-151 他	中岳Ⅱ式	
	195	1号壱穴住居跡	深鉢	5	E-5	口縁部				ナデ	ナデ				○	○	SI8-22	中岳Ⅱ式	
	196	1号壱穴住居跡	深鉢	5	E-5	口縁部				ミガキ	ナデ				○	○	SI8	中岳Ⅱ式・刻目	
	197	1号壱穴住居跡	深鉢	5	E-5	口縁部				ナデ	ナデ				○		SI8-223 他	中岳Ⅱ式・沈線	
	198	1号壱穴住居跡	深鉢	5	E-5	口縁部				ナデ	ナデ				○		SI8-198	中岳Ⅱ式・凹点文 (貝殻押圧)	
	199	1号壱穴住居跡	深鉢	5	E-5	口縁部	(19.0)			ナデ	ナデ				○		SI8-37	中岳Ⅱ式・沈線	
	200	1号壱穴住居跡	深鉢	5	E-5	口縁部				ナデ	ナデ				○		SI8	中岳Ⅱ式	
	201	1号壱穴住居跡	浅鉢	5	E-5	口縁部				ナデ	ナデ				○	○	SI8	中岳Ⅱ式・沈線	
	202	1号壱穴住居跡	深鉢	5	E-5	口縁部				ナデ	ナデ				○	○	SI8-153	中岳Ⅱ式・沈線	
	203	1号壱穴住居跡	深鉢	5	E-5	口縁部				ナデ	ナデ				○		SI8-233	中岳Ⅱ式・沈線	
	204	1号壱穴住居跡	深鉢	5	E-5	口縁部				ナデ	ナデ				○	○	SI8-170	中岳Ⅱ式・沈線	
	205	1号壱穴住居跡	深鉢	5	E-5	口縁部				ナデ	ナデ				○		SI8-98	中岳Ⅱ式・沈線	
	206	1号壱穴住居跡	深鉢	5	E-5	胴部				ナデ	ナデ				○		SI8-31	中岳Ⅱ式	
	207	1号壱穴住居跡	深鉢	5	E-5	胴部				ナデ	ナデ				○		SI8-82	中岳Ⅱ式・沈線	
	208	1号壱穴住居跡	深鉢	5	E-5	底部		5.0		ナデ	ナデ				○	○	SI8-42 他	中岳Ⅱ式	
	209	1号壱穴住居跡	深鉢	5	E-5	底部		(8.0)		ナデ	ナデ				○		SI8	中岳Ⅱ式	
	210	1号壱穴住居跡	深鉢	5	E-5	底部		(7.0)		ナデ	ナデ				○	○	SI8-45	中岳Ⅱ式	
	211	1号壱穴住居跡	深鉢	5	E-5	底部		(5.4)		ナデ	ナデ				○		SI8-206	中岳Ⅱ式	
	62	226	2号壱穴住居跡	深鉢	5	F-5	口縁~胴部	(36.0)			ミガキ	ナデ				○		SI12-145	中岳Ⅱ式・沈線
		227	2号壱穴住居跡	深鉢	5	F-5	口縁~胴部	(28.8)			ミガキ	ナデ				○	○	SI12-46 他	中岳Ⅱ式・沈線
228		2号壱穴住居跡	深鉢	5	F-5	口縁部				ナデ	ナデ				○	○	SI12-23	中岳Ⅱ式・沈線	
229		2号壱穴住居跡	深鉢	5	F-5	口縁部				ナデ	ナデ				○	○	SI12-17	中岳Ⅱ式・沈線	
230		2号壱穴住居跡	深鉢	5	F-5	口縁部				ナデ	ナデ				○	○	SI12-71	中岳Ⅱ式	
231		2号壱穴住居跡	深鉢	5	F-5	口縁部				ミガキ	ナデ				○		SI12-24	中岳Ⅱ式・沈線・スス付着	
232		2号壱穴住居跡	深鉢	5	F-5	口縁部				ナデ	ナデ					○	SI12-2	中岳Ⅱ式・沈線	
233		2号壱穴住居跡	深鉢	5	F-5	口縁部				ナデ	ナデ				○	○	SI12	中岳Ⅱ式・沈線	
234		2号壱穴住居跡	深鉢	5	F-5	口縁部				ナデ	ナデ				○	○	SI12	中岳Ⅱ式	
235		2号壱穴住居跡	深鉢	5	F-5	口縁部				ナデ	ナデ				○	○	SI12-23	中岳Ⅱ式・口縁部肥厚	
236		2号壱穴住居跡	深鉢	5	F-5	口縁部				ナデ	ナデ				○	○	SI12-8	中岳Ⅱ式・口縁部肥厚	
237		2号壱穴住居跡	深鉢	5	F-5	口縁部				ナデ	ナデ				○		SI12-29	中岳Ⅱ式・沈線	
238		2号壱穴住居跡	深鉢	5	F-5	口縁部				ナデ	ナデ				○		SI12-64	中岳Ⅱ式・沈線	
239		2号壱穴住居跡	深鉢	5	F-5	口縁部				ナデ	ナデ				○	○	SI12-59	中岳Ⅱ式・沈線	
65	240	2号壱穴住居跡	深鉢	5	F-5	口縁部				ナデ	ナデ				○		SI12-5	中岳Ⅱ式	
	241	2号壱穴住居跡	深鉢	5	F-5	口縁~胴部	(29.0)			ミガキ	ナデ				○	○	SI12-29 他	中岳Ⅱ式	
	242	2号壱穴住居跡	深鉢	5	F-5	胴部				ナデ	ナデ				○	○	SI12-30	中岳Ⅱ式	
	243	2号壱穴住居跡	深鉢	5	F-5	胴部				ナデ	ナデ				○	○	SI12-61	中岳Ⅱ式・三日月文	
	244	2号壱穴住居跡	深鉢	5	F-5	胴部				ナデ	ナデ				○	○	SI12-101	中岳Ⅱ式	
	245	2号壱穴住居跡	深鉢	5	F-5	底部		(6.6)		ナデ	ナデ				○	○	SI12	中岳Ⅱ式	
	246	2号壱穴住居跡	深鉢	5	F-5	底部		(10.0)		ナデ	ナデ				○	○	SI12-43	中岳Ⅱ式	
	251	3号壱穴住居跡	深鉢	5	F・G-18	口縁~胴部	(30.4)			ナデ	ナデ				○		SI1-23 他-括	中岳Ⅱ式・沈線	
	252	3号壱穴住居跡	深鉢	5	F・G-18	口縁部				ナデ	ナデ				○	○	SI1	一括 中岳Ⅱ式・沈線	
	253	3号壱穴住居跡	深鉢	5	F・G-18	口縁部				ナデ	ナデ				○	○	SI1	一括 中岳Ⅱ式・沈線	
	254	3号壱穴住居跡	深鉢	5	F・G-18	口縁部				ナデ	ナデ				○	○	SI1-38	中岳Ⅱ式・口縁部肥厚	
	255	3号壱穴住居跡	深鉢	5	F・G-18	口縁部				ナデ	ナデ				○		SI1-56	中岳Ⅱ式・沈線	
	256	3号壱穴住居跡	浅鉢	5	F・G-18	口縁部				ミガキ	ナデ				○		SI1	一括 中岳Ⅱ式・沈線	
	257	3号壱穴住居跡	深鉢	5	F・G-18	口縁部				ナデ	ナデ				○	○	SI1-131	上加世田式・沈線	
	258	3号壱穴住居跡	深鉢	5	F・G-18	口縁部				ナデ	ナデ				○	○	SI1	一括 中岳Ⅱ式・沈線	
	259	3号壱穴住居跡	深鉢	5	F・G-18	口縁部				ナデ	ナデ				○		SI1-44 他	中岳Ⅱ式・スス付着	
	260	3号壱穴住居跡	浅鉢	5	F・G-18	口縁部				ナデ	ナデ				○	○	SI1	一括 中岳Ⅱ式・刻目	
261	3号壱穴住居跡	深鉢	5	F・G-18	口縁部	(38.9)			ミガキ	ミガキ				○	○	SI1-174	中岳Ⅱ式・沈線・波状口縁		
262	3号壱穴住居跡	深鉢	5	F・G-18	胴部				ナデ	ナデ				○		SI1-168 他	中岳Ⅱ式		
263	3号壱穴住居跡	深鉢	5	F・G-18	胴部				ナデ	ナデ				○	○	SI1-5 他	中岳Ⅱ式・刻目・沈線・凹点		
264	3号壱穴住居跡	深鉢	5	F・G-18	胴部				ナデ	ナデ				○	○	SI1	一括 中岳Ⅱ式・沈線		
265	3号壱穴住居跡	深鉢	5	F・G-18	胴部				ナデ	ナデ				○	○	SI1-159	中岳Ⅱ式・沈線		

第7表 縄文時代後期遺構内出土土器観察表

挿図番号	掲載番号	遺構名	器種	分類	出土区	部位	法量 (cm)			調整		胎土					取上番号	備考		
							口径	底径	器高	外面	内面	自然砂	角閃石	雲母	石英	長石			輝石	
66	266	3号竪穴住居跡	深鉢	5	F-G-18	胴部					ナデ・ミガキ	ナデ						S11-82他	中岳Ⅱ式・コゲ残存	
	267	3号竪穴住居跡	深鉢	5	F-G-18	底部		(6.0)			ナデ	ナデ						S11-128他	中岳Ⅱ式・コゲ残存	
	268	3号竪穴住居跡	深鉢	5	F-G-18	底部		(5.6)			ナデ	ナデ						S11-81	中岳Ⅱ式・内面剥落	
	269	3号竪穴住居跡	深鉢	5	F-G-18	底部		(5.8)			ナデ	ナデ						S11-一括	中岳Ⅱ式	
	270	3号竪穴住居跡	深鉢	5	F-G-18	底部		(4.8)			ナデ	ナデ						S11-90	中岳Ⅱ式	
	271	3号竪穴住居跡	深鉢	5	F-G-18	底部		(3.0)			ナデ	ナデ						S11-17	中岳Ⅱ式	
	272	3号竪穴住居跡	浅鉢	5	F-G-18	口縁部	(20.0)				ミガキ	ミガキ						S11-83他一括	中岳Ⅱ式・口縁部沈線	
	273	3号竪穴住居跡	浅鉢	5	F-G-18	口縁部					ミガキ	ミガキ						S11-一括	中岳Ⅱ式・沈線	
	274	3号竪穴住居跡	浅鉢	5	F-G-18	口縁部					ナデ	ナデ						S11-一括	中岳Ⅱ式・沈線	
	275	3号竪穴住居跡	浅鉢	5	F-G-18	口縁部					ナデ	ナデ						S11	中岳Ⅱ式・沈線	
	276	3号竪穴住居跡	浅鉢	5	F-G-18	口縁部					ミガキ	ナデ						S11-一括	中岳Ⅱ式	
	277	3号竪穴住居跡	浅鉢	5	F-G-18	口縁部					ナデ	ナデ						S11-一括	中岳Ⅱ式・沈線	
	68	289	4号竪穴住居跡	浅鉢	5	F-10	口縁部					ナデ	ナデ						S12-一括	中岳Ⅱ式
		290	4号竪穴住居跡	深鉢	5	F-10	口縁部					ナデ	ハケ目						S12-一括	中岳Ⅱ式・刻目・突帯剥離痕
	69	292	1号埋設土器	深鉢	5	E-8	完形	30.4	6.0	24.4		工具ナデ後ミガキ	工具ナデ後ミガキ・指ナデ						SJ15-3他	中岳Ⅱ式・スス附着・コゲ残存
	71	293	2号埋設土器	深鉢	5	E-11	完形	53.0	5.0	40.6		ミガキ・ナデ	ミガキ・ナデ						SJ17	中岳Ⅱ式
	72	294	3号埋設土器	深鉢	5	D-E-3-4	胴~底部		2.3			工具ナデ・指ナデ	工具ナデ・指ナデ						ST13-1他	中岳Ⅱ式・沈線・スス附着・コゲ残存
	76	296	土坑21号	深鉢	5	G-100	口縁部					ナデ	ナデ						SK2-一括	中岳Ⅱ式・沈線・刻目
297		土坑21号	深鉢	5	G-100	口縁部					ナデ	ナデ						SK2-一括	中岳Ⅱ式・沈線	
298		土坑21号	深鉢	5	G-100	口縁部					ナデ	ナデ						SK2-一括	中岳Ⅱ式	
299		土坑21号	深鉢	5	G-100	頸部					工具ナデ	ナデ・ミガキ						SK2-8他	中岳Ⅱ式・沈線	
300		土坑21号	深鉢	5	G-100	頸部					ナデ	工具ナデ						SK2-一括	中岳Ⅱ式	
301		土坑21号	深鉢	5	G-100	底部		(9.0)			ナデ	ナデ						SK2-一括	中岳Ⅱ式	
302		土坑21号	深鉢	5	G-100	底部		(6.0)			ナデ	ナデ						SK2-一括	中岳Ⅱ式	
77	306	土坑9号	深鉢	5	C-4	口縁部					ナデ	ナデ						SK124-1	中岳Ⅱ式・突帯	
	85	338	遺物集中域1	深鉢	5	D-9-10	口縁部					ミガキ・ナデ	ナデ						シュウ11	中岳Ⅱ式・スス附着・沈線
		339	遺物集中域1	深鉢	5	D-9-10	口縁部					ナデ	ナデ						シュウ25	中岳Ⅱ式・沈線
	340	遺物集中域1	深鉢	5	D-9-10	口縁部					ミガキ	ナデ						シュウ11	中岳Ⅱ式・凹点文	
	341	遺物集中域1	深鉢	5	D-9-10	口縁部					ナデ	ナデ						石シュウ29	中岳Ⅱ式	
	342	遺物集中域1	深鉢	5	D-9-10	口縁部					ミガキ・ナデ	ミガキ・ナデ						石シュウ16	中岳Ⅱ式	
	343	遺物集中域1	深鉢	5	D-9-10	底部		5.0			ナデ	ナデ						シュウ11-11	中岳Ⅱ式	
	344	遺物集中域1	深鉢	5	D-9-10	底部		(8.0)			ナデ	ナデ						シュウ11	中岳Ⅱ式	
345	遺物集中域1	深鉢	5	D-9-10	底部		(8.6)			ナデ	ナデ						シュウ11-3	中岳Ⅱ式		
86	346	遺物集中域1	深鉢	5	D-9-10	底部		3.6			ナデ	ナデ						シュウ11-26	中岳Ⅱ式	
	347	遺物集中域2	深鉢	5	H-1	口縁部					ナデ・ハケ目	ナデ・ハケ目						土集1-4他	中岳Ⅱ式・波状口縁	

第8表 弥生時代遺構内出土土器観察表

挿図番号	掲載番号	遺構名	器種	分類	出土区	部位	法量 (cm)			調整		胎土					取上番号	備考			
							口径	底径	器高	外面	内面	自然砂	角閃石	雲母	石英	長石			輝石		
98	516	1号竪穴住居跡	甕	成川	D-E-5	口縁部	(28.2)				ハケ目・ナデ	ナデ							S17-18他		
	517	1号竪穴住居跡	甕	成川	D-E-5	口縁部	(27.0)				ハケ目	ナデ							S17-110	スス附着	
	518	1号竪穴住居跡	甕	弥生	D-E-5	口縁部	21.6				ハケ目・工具ナデ	ハケ目							S17-17他	スス附着	
	519	1号竪穴住居跡	甕	弥生	D-E-5	口縁部	25.0				工具ナデ	工具ナデ							S17-93他	スス附着	
	520	1号竪穴住居跡	甕	成川	D-E-5	口縁部	(17.8)				ハケ目・ナデ	ナデ							S17-50		
	521	1号竪穴住居跡	甕	成川	D-E-5	口縁部	(22.0)				ナデ	工具ナデ							S17-29		
	522	1号竪穴住居跡	甕	成川	D-E-5	口縁部					ナデ	ナデ							S17		
	523	1号竪穴住居跡	甕	成川	D-E-5	胴~底部					ハケ目・ナデ	ナデ							S17-42他		
	99	524	1号竪穴住居跡	壺	弥生	D-E-5	完形	9.9	5.5	22.9		ハケ目・指ナデ・工具ナデ	指ナデ・工具ナデ・指頸区							S17-81他	黒斑
		525	1号竪穴住居跡	台付鉢	弥生	D-E-5	完形	21.1	6.0	14.8		ハケ目・工具ナデ	ハケ目・工具ナデ・指ナデ							S17-36	黒斑
526		1号竪穴住居跡	鉢	成川	D-E-5	口縁部	(14.6)				ナデ	ナデ							S17-56		
527		1号竪穴住居跡	小壺台付鉢	弥生	D-E-5	口縁部	10.0	7.0	10.4		工具ナデ	工具ナデ							S17-67他		
528		1号竪穴住居跡	鉢	成川	D-E-5	胴~底部					ハケ目・ナデ	ナデ							S17-98他	コゲ残存	
529		2号竪穴住居跡	深鉢	弥生	G-11	口縁部					ナデ	ナデ							S13上~中		
530		2号竪穴住居跡	壺	山ノ口	G-11	胴部					ナデ	ナデ							S113下	三角突帯	
532		遺物集中域	深鉢	5	D-E-10	口縁部					ナデ	ナデ							土集4	中岳Ⅱ式・沈線	
533		遺物集中域	浅鉢	5	D-E-10	口縁部					ナデ	ナデ							土集4	中岳Ⅱ式・沈線	
534		遺物集中域	甕	山ノ口	D-E-10	口縁部	(16.4)				ナデ	ナデ							土集4-24		
103	535	遺物集中域	甕	弥生	D-E-10	口縁部	(17.6)				ナデ	ナデ							土集4-22他		
	536	遺物集中域	壺	山ノ口	D-E-10	胴部					ナデ	ナデ							土集4-17		
	537	遺物集中域	甕	山ノ口	D-E-10	胴部					ナデ	ナデ							土集4-12		
	538	遺物集中域	甕	山ノ口	D-E-10	底部		(8.4)			ナデ	ナデ							土集4-3		
	539	遺物集中域	甕	山ノ口	D-E-10	底部		(7.9)			ハケ目	ナデ							土集4-19		
	540	遺物集中域	高坏	山ノ口	D-E-10	坏部					ミガキ	ミガキ							土集4-21	内面黒色	
	541	遺物集中域	壺	山ノ口	D-E-10	底部		4.8			工具ナデ	工具ナデ							土集4-9		
	542	遺物集中域	壺	山ノ口	D-E-10	底部		3.2			ナデ	ナデ							土集4-11		
	543	遺物集中域	壺	山ノ口	D-E-10	底部		(6.0)			ナデ	ナデ							土集4-14		
	544	遺物集中域	無頸壺	弥生	D-E-10	完形	14.3	6.5	12.9		工具ナデ	工具ナデ・指ナデ							土集4-7	黒斑	
104	545	遺物集中域	壺	弥生	D-E-10	口縁部	20.4				ミガキ・ナデ・指ナデ	ミガキ・ナデ・指ナデ							土集4-4他	貼付突帯・櫛描文・スス附着	
	546	遺物集中域	壺	山ノ口	D-E-10	頸部					ミガキ	ナデ							土集4-18		
	547	遺物集中域	壺	弥生	D-E-10	胴~底部		6.6			ミガキ・工具ナデ・指ナデ	指ナデ・工具ナデ							土集4-58他	黒斑	

第9表 古墳時代遺構内出土土器観察表

挿図番号	掲載番号	遺構名	器種	分類	出土区	部位	法量 (cm)			調整		胎土					取上番号	備考		
							口径	底径	器高	外面	内面	自然砂	角閃石	雲母	石英	長石			輝石	
115	669	2号地下式横穴墓	深鉢	5	G-18	口縁部					ナデ・ミガキ	ナデ							ST90-一括	中岳Ⅱ式・沈線
	670	2号地下式横穴墓	壺	成川	G-18	胴部					ナデ	ナデ							ST90-一括	三角突帯
	671	2号地下式横穴墓	壺	5	G-18	底部		(8.2)			ミガキ・ナデ	ミガキ・ナデ							ST90-一括	中岳Ⅱ式
	672	2号地下式横穴墓	深鉢	5	G-18	頸部					工具ナデ・ミガキ	工具ナデ・ミガキ							ST90-一括	中岳Ⅱ式
	117	674	4号地下式横穴墓	深鉢	5	F-18	口縁部					ナデ	ナデ							ST92-一括
675		4号地下式横穴墓	深鉢	5	G-18	底部		6.6			摩耗	摩耗							ST92-一括	中岳Ⅱ式
124	677	1号溝	甕	山ノ口	H-I-19	口縁部	(24.4)				ナデ	ナデ							溝1-一括	三角突帯

第9表 古墳時代遺構内出土土器観察表

挿図番号	掲載番号	遺構名	器種	分類	出土区	部位	法量 (cm)			調整		胎土					取上番号	備考
							口径	底径	器高	外面	内面	白磁子	角閃石	雲母	石英	長石		
124	678	1号溝	壺	山ノ口	I-19	底部		6.6					○	○	○	溝1一括		
	679	1号溝	埴	成川	I-19	完形	13.0		15.3	ミガキ・工具ナデ	工具ナデ・指ナデ			○	○	○	溝1-1他	穿孔
125	680	2号溝	深鉢	5	G-19	口縁部				ナデ	ナデ			○		溝1一括	上加世田式・沈線	
	681	2号溝	深鉢	5	H-19	口縁部				ナデ	ナデ			○	○	溝2一括	中岳Ⅱ式・沈線	
	682	2号溝	壺	成川	G-19	胴部				ナデ	ナデ			○	○	溝2一括	三角突帯	
	683	2号溝	浅鉢	5	H-19	口縁部	(18.8)			ナデ	ナデ			○		溝2一括	中岳Ⅱ式	
	684	2号溝	壺	成川	H-19	口縁部				ナデ	ナデ			○	○	溝2	柳描波状文	
	685	2号溝	小型壺	成川	H-19	胴部				ナデ	ナデ			○		溝2	丹塗り	
	686	2号溝	壺	山ノ口	H-19	口縁部	(14.7)			ナデ	ナデ			○		溝2一括	沈線	
	687	2号溝	壺	山ノ口	H-19	口縁部	(12.2)			ナデ	ナデ			○	○	溝2	柳描波状文	
126	688	2号溝	壺	成川	H-19	胴部				ナデ	ナデ			○	○	溝2一括		
	689	2号溝	壺	成川	G-18-19	完形	13.1		31.4	工具ナデ・ミガキ	工具ナデ			○	○	溝2一括	胴部と底部に穿孔・スス附着	
127	690	2号溝	壺	成川	H-19	完形	14.0		34.0	工具ナデ・指ナデ・ナデ	工具ナデ・指ナデ・ナデ			○	○	溝2一括		
	691	3号溝	壺	成川	G-18	完形	14.2		21.4	工具ナデ・ミガキ	工具ナデ			○	○	溝3土器1-7		
	692	3号溝	台付鉢	成川	G-18	完形	15.5	9.3	9.2	ナデ・ミガキ	ナデ・ミガキ			○	○	溝3土器2-1		
129	693	3号溝	壺	成川	G-18	底部		(4.8)		ナデ	ナデ			○		溝3		
	694	土器破砕祭祀遺構	深鉢	5	I-19	口縁部	(30.0)			ナデ	ナデ			○	○	土集3-19他	中岳Ⅱ式・沈線	
	695	土器破砕祭祀遺構	深鉢	5	I-19	口縁部				ナデ	ナデ			○	○	土集3一括	中岳Ⅱ式・沈線	
	696	土器破砕祭祀遺構	深鉢	5	I-19	口縁部				ナデ	ナデ			○	○	土集3一括	中岳Ⅱ式	
	697	土器破砕祭祀遺構	深鉢	5	I-19	口縁部	(29.2)			ミガキ	ナデ			○		土集3	中岳Ⅱ式・スス附着・沈線	
	698	土器破砕祭祀遺構	浅鉢	5	I-19	口縁部				ナデ	ナデ			○	○	土集3一括	中岳Ⅱ式・波状口縁・凹点文・沈線	
	699	土器破砕祭祀遺構	深鉢	5	I-19	口縁部				ナデ	ナデ			○		土集3-5	中岳Ⅱ式・スス附着・刻目突帯	
	700	土器破砕祭祀遺構	深鉢	5	I-19	胴部				ミガキ後ナデ	ミガキ後ナデ			○	○	土集3一括	中岳Ⅱ式・黒斑・沈線	
	701	土器破砕祭祀遺構	深鉢	5	I-19	胴部				ミガキ・ナデ	ミガキ・ナデ			○		土集3一括	中岳Ⅱ式・スス附着・沈線	
	702	土器破砕祭祀遺構	深鉢	5	I-19	胴部				工具ナデ	工具ナデ			○	○	土集3-11他	中岳Ⅱ式・沈線	
130	704	土器破砕祭祀遺構	壺	成川	I-19	口縁部	25.6	(10.0)	(82.0)	工具ナデ・指ナデ	工具ナデ・指ナデ			○	○	○	土集3-33他	突帯・刻目突帯
	705	土器破砕祭祀遺構	壺	山ノ口	I-19	底部		6.4		ナデ	ナデ			○		土集3-32他	黒斑	
131	706	土器破砕祭祀遺構	丸底壺	成川	I-19	底部				ナデ	工具ナデ			○		土集3-35他		
	707	土器破砕祭祀遺構	丸底壺	成川	I-19	底部				ナデ	工具ナデ・指頭圧痕			○		土集3-4他		

第10表 II層遺構内出土土器観察表

挿図番号	掲載番号	遺構名	器種	分類	出土区	部位	法量 (cm)			調整		胎土					取上番号	備考
							口径	底径	器高	外面	内面	白磁子	角閃石	雲母	石英	長石		
148	843	ビット705	深鉢	5	-	口縁部				ナデ	ナデ			○		P705-3	中岳Ⅱ式・沈線	
	844	ビット705	深鉢	5	-	頸部				ナデ	ナデ			○	○	P705-1	中岳Ⅱ式・沈線	
	845	ビット706	深鉢	5	-	口縁部				ナデ	ナデ			○	○	P706-1	中岳Ⅱ式	
	846	ビット711	深鉢	5	-	口縁部				ナデ	ナデ			○	○	P711-11	中岳Ⅱ式・沈線	
	847	ビット633	深鉢	5	-	頸部				ナデ	ナデ			○	○	P633-12	中岳Ⅱ式	
	848	ビット633	浅鉢	5	-	頸部				ナデ	ナデ			○	○	P633-25	中岳Ⅱ式	
152	854	ビット631	壺	弥生	-	底部		(4.2)		ナデ	工具ナデ			○	○	○	P631-67	中岳Ⅱ式
	855	ビット631	深鉢	縄文晩期	-	底部		(6.0)		ミガキ	ナデ			○		○	P631-32	中岳Ⅱ式
	863	ビット633	深鉢	5	-	口縁部				ナデ	ナデ			○		○	P721-6他	中岳Ⅱ式凹点文
	864	ビット721	浅鉢	5	-	口縁部				ナデ・ミガキ	ナデ・ミガキ			○	○	○	P721-17	中岳Ⅱ式・波状口縁
	865	ビット721	深鉢	5	-	頸部				工具ナデ・ミガキ	ナデ・ミガキ			○	○	○	P721-21	中岳Ⅱ式
	866	ビット721	深鉢	5	-	胴部				ナデ・ミガキ	ナデ			○	○		P721-12	中岳Ⅱ式・沈線
	867	ビット721	深鉢	5	-	底部		5.0		ナデ	ナデ			○	○		P721-16	中岳Ⅱ式・内外面剥離
	873	ビット632	深鉢	5	-	口縁部				ナデ	ナデ			○	○		P632-92	中岳Ⅱ式・沈線
153	874	ビット632	深鉢	5	-	口縁部				ナデ	ナデ			○	○		P632-4	中岳Ⅱ式・沈線
	875	ビット632	深鉢	5	-	頸部				ナデ	ナデ			○	○		P632-16	中岳Ⅱ式・沈線
	876	ビット632	深鉢	5	E-11	胴部				ミガキ・ナデ	ナデ			○	○	○	P632-19	中岳Ⅱ式・沈線
154	879	ビット740	深鉢	5	-	口縁部	(36.0)			ナデ	ナデ			○	○		P740-37他	中岳Ⅱ式・刺突凹
	880	ビット740	深鉢	5	-	口縁部				ナデ	ナデ			○	○		P740-19	中岳Ⅱ式・沈線
155	888	ビット4	深鉢	5	E-12	口縁部				ミガキ	工具ナデ			○			P4	中岳Ⅱ式・沈線
	889	ビット4	深鉢	5	E-12	口縁部				ナデ	ナデ			○			P4	中岳Ⅱ式・沈線・凹点文
	890	ビット4	深鉢	5	E-12	頸部				ナデ	ナデ			○			P4	中岳Ⅱ式・スス附着
	891	ビット4	深鉢	5	E-12	胴部				ナデ	ナデ・工具ナデ			○			P4	中岳Ⅱ式・沈線
	892	ビット6	深鉢	5	E-10	口縁部				ナデ	ナデ・工具ナデ			○			P6	中岳Ⅱ式・沈線
	893	ビット6	深鉢	5	E-11	口縁部				ナデ	ナデ			○			P6	中岳Ⅱ式・沈線
	902	ビット278	深鉢	5	-	胴部				ミガキ・ナデ	工具ナデ			○	○		P278-1	中岳Ⅱ式
159	903	ビット481	深鉢	5	B-6-F-3-5	完形	39.6	4.8	35.0	工具ナデ後ミガキ	工具ナデ・ミガキ・指ナデ			○	○	○	P481-1他	中岳Ⅱ式・沈線・波状口縁・補修孔
	904	ビット535	深鉢	5	C-6	口縁部				ミガキ	ミガキ・ナデ			○	○		P535	中岳Ⅱ式・刻目・沈線
	905	ビット637	深鉢	5	-	口縁部				ミガキ・ナデ	ミガキ・ナデ			○	○		P637	中岳Ⅱ式・沈線
	906	ビット638	深鉢	5	-	口縁部				ナデ・ミガキ	ナデ			○	○		P638	中岳Ⅱ式・沈線
	907	ビット638	深鉢	5	-	口縁部				ナデ	ナデ			○	○	○	P638	中岳Ⅱ式
	908	ビット609	深鉢	5	B-5	口縁部				ナデ	ナデ			○			P609	中岳Ⅱ式
	909	ビット820	深鉢	5	C-4	胴部				ナデ	ナデ			○	○		P820	中岳Ⅱ式
	910	ビット313	深鉢	5	D-3	胴部				ミガキ	ナデ			○	○		P313-2	中岳Ⅱ式
	911	ビット383	深鉢	5	-	頸部				ナデ	ナデ			○	○		P383-2	中岳Ⅱ式・沈線・凹点
	912	ビット608	深鉢	5	-	胴部				ミガキ・ナデ	ミガキ・ナデ			○	○		P608-2	中岳Ⅱ式・沈線
	913	ビット502	深鉢	5	-	頸部				ナデ	ナデ・ハケ目			○	○	○	P502-1	中岳Ⅱ式・沈線・刺突文
	914	ビット313	深鉢	5	D-3	胴部				ミガキ	ナデ			○			P313-1	中岳Ⅱ式・沈線
	915	ビット517	深鉢	5	C-6	胴部				ナデ	ナデ			○			P517	中岳Ⅱ式
	916	ビット638	深鉢	5	-	胴部				ナデ	ナデ			○	○	○	P638	中岳Ⅱ式・突帯
	917	ビット469	深鉢	5	-	頸部				ナデ	ナデ			○	○		P469-1	中岳Ⅱ式
918	ビット424	浅鉢	5	-	口縁部				ナデ	ナデ			○			P424-4	中岳Ⅱ式・沈線・波状口縁	
919	ビット693	浅鉢	5	-	底部		(4.2)			ミガキ	ミガキ			○			P693	中岳Ⅱ式

第 11 表 縄文時代早期土器観察表

挿図 番号	掲載 番号	器種	分類	出土区	層位	部位	法量 (cm)			調整		胎土					取上番号	備考	
							口径	底径	器高	外面	内面	白色	角閃石	雲母	石英	長石			輝石
38	34	深鉢	1	D-3	Ⅶ	口縁-胴部	(26.0)			ナデ	ナデ			○	○	26658 他	中原式・貝殻条痕		
	35	深鉢	1	E-5	Ⅶ	胴部				ナデ	ナデ			○	○	26439	中原式・貝殻条痕		
	36	深鉢	1	E-4	Ⅶ	底部	(17.2)			ナデ	工具ナデ			○	○	29537 他	中原式・貝殻条痕		
39	37	深鉢	2-a-1	C-4	Ⅶ	口縁部				ナデ	ナデ			○	○	25736	下剥峯式・貝殻条痕		
	38	深鉢	2-a-1	D-3	Ⅶ	口縁部	(12.0)			ナデ	ナデ			○	○	25727 他	下剥峯式・貝殻刺突		
	39	深鉢	2-a-1	F-3	Ⅶ	口縁部				ナデ	ミガキ			○	○	27065	下剥峯式・斜縄文		
	40	深鉢	2-a-1	C-5	Ⅶ	口縁部	(20.0)			ナデ	ナデ・ミガキ			○	○	26535	下剥峯式・貝殻刺突		
	41	深鉢	2-a-1	C-6	Ⅶ	口縁部				ナデ	ナデ			○	○	26521	下剥峯式・貝殻刺突		
	42	深鉢	2-a-1	D-3	Ⅶ	口縁部				ナデ	ナデ			○	○	26676	下剥峯式・貝殻刺突		
	43	深鉢	2-a-1	F-3	Ⅶ	口縁部				ナデ	ナデ			○	○	27130	下剥峯式・貝殻刺突		
	44	深鉢	2-a-1	C-6	Ⅶ	胴部				ナデ	ナデ			○	○	26525	下剥峯式・貝殻刺突		
	45	深鉢	2-a-1	G-11	Ⅶ	胴部				ナデ	ナデ			○	○	27739	下剥峯式・貝殻刺突		
	46	深鉢	2-a-1	H-2	Ⅶ	胴部				ナデ	ナデ			○	○	27632	下剥峯式・沈線		
	47	深鉢	2-a-1	E-3	Ⅶ	胴部				ナデ	ナデ			○	○	26917	下剥峯式・貝殻刺突		
	48	深鉢	2-a-1	D-5	Ⅶ	胴部				ナデ	ナデ			○	○	26739	下剥峯式・貝殻刺突		
	49	深鉢	2-a-1	B-4	Ⅶ	胴部				ナデ	ナデ			○	○	27498	下剥峯式・貝殻刺突		
	50	深鉢	2-a-1	C-5	Ⅶ	底部				ナデ	ミガキ			○	○	26538	下剥峯式・貝殻刺突		
40	51	深鉢	2-a-1	E-3	Ⅶ	底部	(16.6)			ナデ	ナデ			○	○	26908	下剥峯式・貝殻刺突		
	52	深鉢	2-a-1	E-3	Ⅶ	底部	(16.0)			ミガキ	ナデ			○	○	27141	下剥峯式・貝殻刺突		
	53	深鉢	2-a-2	D-5	Ⅶ	口縁部				ナデ	ナデ			○	○	26278	下剥峯式・貝殻刺突		
	54	深鉢	2-a-2	F-2	Ⅶ	口縁部				ナデ	ケズリ			○	○	27067	下剥峯式・貝殻刺突		
	55	深鉢	2-a-2	E-3	Ⅶ	口縁部				ナデ	ナデ			○	○	26912	下剥峯式・貝殻刺突		
	56	深鉢	2-a-2	C-5	Ⅶ	口縁部				ナデ	ミガキ			○	○	29552	下剥峯式・貝殻刺突		
	57	深鉢	2-a-2	D-4	Ⅶ	口縁部				ナデ	ナデ			○	○	26864	下剥峯式・貝殻条痕		
	58	深鉢	2-a-2	D-3	Ⅶ	口縁部	(16.0)			ナデ	ナデ			○	○	27353	下剥峯式・貝殻刺突		
	59	深鉢	2-a-2	F-3	Ⅶ	口縁部				ナデ	ミガキ			○	○	27025	下剥峯式・スス附着・貝殻刺突		
	60	深鉢	2-a-2	D-4	Ⅶ	口縁部				ナデ	ナデ・ミガキ			○	○	26456	下剥峯式・貝殻刺突		
	61	深鉢	2-a-2	C-5	Ⅶ	口縁部	(16.0)			ナデ	ナデ			○	○	26359 他	下剥峯式・貝殻刺突・貝殻条痕		
	62	深鉢	2-a-2	D-5	Ⅶ	口縁部附近				ナデ	ナデ			○	○	26230	下剥峯式・貝殻刺突		
	63	深鉢	2-a-2	H-2	Ⅶ	胴部				ナデ	ナデ			○	○	27809	下剥峯式・貝殻刺突		
	64	深鉢	2-a-2	D-3	Ⅶ	胴部				ナデ	ナデ			○	○	26672	下剥峯式・貝殻刺突		
65	深鉢	2-a-2	E-6	Ⅶ	胴部				ナデ	ナデ			○	○	27075	下剥峯式・貝殻刺突			
66	深鉢	2-a-2	D-3	Ⅶ	底部				ミガキ	ナデ			○	○	26936	下剥峯式・貝殻刺突			
41	67	深鉢	2-a-3	E-4	Ⅶ	口縁部				ナデ	ナデ・ミガキ			○	○	27077 他	下剥峯式・貝殻刺突		
	68	深鉢	2-a-3	D-4	Ⅶ	口縁部	(23.0)			ナデ	ミガキ			○	○	26211 他	下剥峯式・貝殻刺突		
	69	深鉢	2-a-3	D-5	Ⅶ	口縁部				ナデ	ナデ			○	○	26252	下剥峯式・貝殻刺突		
	70	深鉢	2-a-3	F-3	Ⅶ	胴部				ナデ	ナデ			○	○	26997	下剥峯式・貝殻刺突		
	71	深鉢	2-a-3	C-5	Ⅶ	胴部				ナデ	ナデ・ミガキ			○	○	26537	下剥峯式・貝殻刺突		
	72	深鉢	2-a-3	E-6	Ⅶ	口縁部				ナデ	ナデ			○	○	27076	下剥峯式・貝殻刺突		
	73	深鉢	2-a-3	D-3	Ⅶ	口縁部				ナデ	ナデ			○	○	26938	下剥峯式・貝殻刺突		
	74	深鉢	2-a-3	E-3	Ⅶ	口縁部				ナデ	ナデ			○	○	26904	下剥峯式・貝殻刺突		
	75	深鉢	2-a-3	D-3	Ⅶ	口縁部	(12.0)			ナデ	ミガキ			○	○	26924	下剥峯式・横位貝殻刺突		
	76	深鉢	2-a-3	D-4	Ⅶ	口縁部	(15.0)			ナデ	ナデ			○	○	26192 他	下剥峯式・縦位貝殻刺突		
	77	深鉢	2-a-3	H-1	Ⅶ	口縁部				ナデ	ナデ			○	○	27653	下剥峯式・貝殻刺突・条痕		
	78	深鉢	2-a-3	C-3	Ⅶ	口縁部				ナデ	ナデ			○	○	25702 他	下剥峯式・貝殻刺突		
	79	深鉢	2-a-3	C-5	Ⅶ	胴部				ナデ	ナデ			○	○	25951	下剥峯式・貝殻刺突		
	80	深鉢	2-a-3	C-3	Ⅶ	胴部				ナデ	ナデ			○	○	26108	下剥峯式・貝殻刺突		
81	深鉢	2-a-3	C-3	Ⅶ	胴部				ナデ	ナデ			○	○	26635	下剥峯式・貝殻刺突			
82	深鉢	2-a-3	H-1	Ⅶ	胴部				ナデ	ミガキ			○	○	27882	下剥峯式・貝殻刺突			
83	深鉢	2-a-3	E-4	Ⅶ	底部	(15.0)			ミガキ	ナデ			○	○	27004	下剥峯式			
84	深鉢	2-a-3	D-4	Ⅶ	完形	15.0	13.0	23.0	ナデ	ナデ			○	○	26977 他	下剥峯式・貝殻刺突			
85	深鉢	2-a-3	H-2	Ⅶ	口縁部				ナデ	ナデ			○	○	27692	下剥峯式・貝殻刺突			
86	深鉢	2-a-3	H-2	Ⅶ	底部				ナデ	ナデ			○	○	27835	下剥峯式・貝殻刺突			
42	87	深鉢	2-b	B-5	Ⅶ	胴部				ナデ	ナデ			○	○	26600	下剥峯式・沈線		
	88	深鉢	2-b	B-6	Ⅶ	胴部				ナデ	ナデ			○	○	26085	下剥峯式・辻タイプ・貝殻刺突		
	89	深鉢	2-b	B-6	Ⅶ	胴部				ナデ	ナデ・ミガキ			○	○	24314	下剥峯式・辻タイプ・貝殻刺突		
	90	深鉢	2-b	E-6	Ⅶ	胴部				ナデ	ミガキ			○	○	26754	下剥峯式・辻タイプ・貝殻刺突		
	91	深鉢	2-b	B-4	Ⅶ	胴部				ナデ	ナデ			○	○	26016	下剥峯式・辻タイプ・貝殻刺突		
	92	深鉢	2-c	H-2	Ⅶ	胴部				ナデ	ナデ			○	○	27802	桑ノ丸式・条痕		
	93	深鉢	2-c	C-3	Ⅶ	胴部				ナデ	ナデ・ミガキ			○	○	25688	桑ノ丸式・条痕		
	94	深鉢	2-c	D-6	Ⅶ	口縁部				ナデ	ナデ			○	○	26374	桑ノ丸式・単節斜縄文		
43	95	深鉢	2-c	C-5	Ⅶ	口縁部				ナデ	ミガキ			○	○	26071	桑ノ丸式・単節斜縄文		
	96	深鉢	2-c	C-6	Ⅶ	胴部				ナデ	ナデ			○	○	26509 他	桑ノ丸式・斜縄文		
	97	深鉢	3-a	C-4	Ⅶ	口縁部	(20.4)			ナデ	ナデ			○	○	25752 他	塞ノ神式・貝殻条痕・撚糸		
	98	深鉢	3-a	C-4	Ⅶ	口縁部	(20.0)			ナデ	ナデ			○	○	26594	塞ノ神式・貝殻条痕・撚糸		
	99	深鉢	3-a	B-4	Ⅶ	胴部				ナデ	ナデ			○	○	25384	塞ノ神式・貝殻条痕・撚糸・刺突		
	100	深鉢	3-a	B-4	Ⅶ	胴部				ナデ	ナデ			○	○	26050 他	塞ノ神式・貝殻条痕・撚糸		

第 11 表 縄文時代早期土器観察表

挿図 番号	掲載 番号	器種	分類	出土区	層位	部位	法量 (cm)			調整		胎土					取上番号	備考	
							口径	底径	器高	外面	内面	白色	角閃石	雲母	石英	長石			輝石
43	101	深鉢	3-a	B-4	Ⅶ	胴部				ナデ	ナデ		○	○	○		26763 他	塞ノ神式・貝殻条痕・捺糸	
	102	深鉢	3-a	E-3	Ⅶ	胴部				ナデ	ナデ			○	○		26682	塞ノ神式・貝殻条痕・捺糸	
	103	深鉢	3-a	B-4	Ⅵ	胴部				ナデ	ナデ			○	○		25854	塞ノ神式・貝殻条痕	
	104	深鉢	3	C-4	Ⅶ	底部			(10.4)	ナデ	ナデ		○		○		26577 他	塞ノ神式・貝殻条痕・捺糸	
44	105	深鉢	3-b	B-5	Ⅶ	口縁部	(33.0)			ナデ	ナデ		○	○	○		27431 他	塞ノ神式・貝殻刺突	
	106	深鉢	3-b	B-4	Ⅶ	口縁-胴部	(32.0)			ナデ	ナデ		○	○	○		26033 他	塞ノ神式・貝殻刺突・沈線・捺糸	
	107	深鉢	3-b	B-3	Ⅶ	口縁部	(20.0)			ナデ	ナデ			○	○		25812	塞ノ神式・貝殻刺突	
	108	深鉢	3-b	B-4	Ⅶ	口縁部				ナデ	ナデ			○	○	○		26627 他	塞ノ神式・貝殻刺突
	109	深鉢	3-b	B-4	Ⅶ	口縁部	(22.0)			ナデ	ケズリ			○	○	○		25379 他	塞ノ神式・貝殻刺突・押引文
	110	深鉢	3-c	B-4	Ⅶ	口縁-胴部	(10.4)			ナデ	ナデ		○		○		26405 他	塞ノ神式・貝殻条痕・貝殻刺突	
	111	深鉢	3-c	B-4	Ⅶ	胴部				ナデ	ナデ				○	○		25431 他	塞ノ神式・貝殻条痕・押引文
45	112	深鉢	3-c	B-4	Ⅶ	胴部				ナデ	ナデ				○	○		27197 他	塞ノ神式・貝殻条痕・押引文
	113	深鉢	3-c	B-C3-5-6	Ⅶ	口縁-胴部	(37.0)			ナデ	ナデ		○	○	○		25567 他	塞ノ神式・瘤状突起・貝殻条痕・押引文	
	114	深鉢	3-c	C-5	Ⅵ, Ⅶ	胴部				ナデ	ナデ		○	○	○		25552 他	塞ノ神式・貝殻条痕・押引文	
	115	深鉢	3-c	B-C4-6	Ⅵ, Ⅶ	胴-底部	(17.0)			ナデ	ナデ		○		○		25761 他	塞ノ神式・貝殻条痕・押引文	

第 12 表 縄文時代後・晚期土器観察表

挿図 番号	掲載 番号	器種	分類	出土区	層位	部位	法量 (cm)			調整		胎土					取上番号	備考		
							口径	底径	器高	外面	内面	白色	角閃石	雲母	石英	長石			輝石	
87	348	深鉢	4	F-11	Ⅱ	口縁部	(30.3)			ナデ	ナデ		○	○	○		21649 他	指宿式・凹線文・凹点文		
	349	深鉢	4	F-11	Ⅱ	口縁部				ナデ	ナデ				○		22080	波状口縁・口唇部刻み・凹線文・凹点文		
	350	深鉢	4	F-11	Ⅱ	口縁部	(31.0)			ナデ	ナデ		○	○	○		22135 他	指宿式・凹線文・凹点文		
	351	深鉢	4	F-11	Ⅱ	口縁部				ナデ	ナデ			○		○		21766	沈線	
	352	深鉢	4	F-11	Ⅱ	口縁部				ナデ	ナデ			○	○			22073	沈線	
	353	深鉢	4	F-11	Ⅱ	胴部				ナデ	ナデ		○	○	○			22071 他	指宿式・凹線文・凹点文	
	354	深鉢	4	F-11	Ⅱ	胴部				ナデ	ナデ			○	○			22022 他	沈線・凹線文・凹点文	
	355	深鉢	5	E-11	Ⅱ	口縁部				ナデ	ナデ			○	○	○		23783	中岳Ⅱ式・凹点文・沈線	
	356	深鉢	5	F-5	Ⅱ	口縁部				ナデ	ナデ		○		○	○		21215	中岳Ⅱ式・沈線・凹点文	
	357	深鉢	5	G-12	Ⅱ	口縁部				ミガキ	ナデ			○				21805	中岳Ⅱ式・沈線・凹点文	
	358	深鉢	5	E-12	Ⅱ b	口縁部				ナデ	ナデ		○		○	○		28357	中岳Ⅱ式・沈線・凹点文	
	359	深鉢	5	G-12	Ⅱ	口縁部				ナデ	ナデ				○			22042	草野式・沈線・凹点文	
	360	深鉢	5	F-18	Ⅱ b	口縁部				ナデ	ナデ				○			28020	中岳Ⅱ式・沈線・凹点文	
	361	深鉢	5	E-10	Ⅱ	口縁部				ナデ	ナデ				○	○		23575	中岳Ⅱ式・沈線・綾杉文	
	362	深鉢	5	C-4	Ⅰ	口縁部				ナデ	ナデ				○	○		-	中岳Ⅱ式・沈線・凹点文・半截竹管文	
	88	363	深鉢	5	C-6	Ⅱ	口縁部	(32.2)			ナデ	ナデ			○			21458	中岳Ⅱ式・沈線	
		364	深鉢	5	E-8	-	口縁-胴部	(26.4)			ナデ	ナデ			○			-	一括 中岳Ⅱ式	
		365	深鉢	5	-	-	口縁部	(27.4)			ナデ・ミガキ	ナデ				○	○		SI10-31 他	中岳Ⅱ式・沈線
366		深鉢	5	C-4	-	口縁-胴部	(23.6)			ナデ・ミガキ	ナデ		○			○		SI10-132 他	中岳Ⅱ式	
367		深鉢	5	E-12	Ⅱ b	口縁部				工具ナデ	ナデ			○		○		29359	中岳Ⅱ式・沈線	
368		深鉢	5	G-12	Ⅱ	口縁部				ナデ	ナデ		○		○	○		21841	中岳Ⅱ式・沈線	
369		深鉢	5	E-10	Ⅱ	口縁部				ナデ	ナデ			○	○	○		24563	中岳Ⅱ式・沈線	
370		深鉢	5	E-8	-	口縁部				ミガキ	ナデ				○	○	○		20892	中岳Ⅱ式・沈線
371		浅鉢	5	D-11	Ⅱ	口縁部				ナデ	ナデ		○					-	中岳Ⅱ式・沈線	
372		深鉢	5	G-10	Ⅱ b	口縁部				ミガキ・工具ナデ	ミガキ・ナデ			○	○			27328	中岳Ⅱ式・波状口縁・沈線	
373		深鉢	5	C-6	Ⅱ	口縁部				ナデ	ナデ			○	○	○		21043	中岳Ⅱ式・沈線	
374		深鉢	5	G-100	Ⅳ	口縁部				工具ナデ	ナデ			○	○	○		27548	中岳Ⅱ式・沈線	
375		深鉢	5	C-5	Ⅱ b	口縁部				工具ナデ	工具ナデ			○				-	中岳Ⅱ式・沈線	
376		浅鉢	5	C-4	-	口縁部				ナデ	ナデ					○			SI10	中岳Ⅱ式・沈線
377		浅鉢	5	G-11	Ⅱ	口縁部				ナデ	ナデ				○	○	○		24201	中岳Ⅱ式・沈線
89	378	深鉢	5	C-5	Ⅰ	口縁部				ミガキ・ナデ	ナデ		○			○		-	中岳Ⅱ式	
	379	深鉢	5	-	-	口縁部				ミガキ・ナデ	工具ナデ				○	○		土集 2-19	中岳Ⅱ式	
	380	浅鉢	5	-	-	口縁部				ナデ	ナデ				○			SI10-181	中岳Ⅱ式・沈線・波状口縁・X状刻目	
	381	深鉢	5	F-11	Ⅱ	口縁部				ナデ・ミガキ	ナデ		○			○			25034	中岳Ⅱ式
	382	深鉢	5	F-10	-	口縁部				ミガキ	ミガキ		○			○		-	一括 中岳Ⅱ式	
	383	深鉢	5	E-12	Ⅱ b	口縁部				ナデ・ミガキ	ナデ			○				29342	中岳Ⅱ式	
	384	深鉢	5	F-5	Ⅱ	口縁部				ミガキ・ナデ	ミガキ・ナデ			○		○		21180	中岳Ⅱ式・沈線	
	385	深鉢	5	G-100	-	口縁部				ミガキ・ナデ	ミガキ		○	○	○			-	一括 中岳Ⅱ式・沈線	
	386	深鉢	5	C-4	Ⅰ	口縁部				ナデ	ナデ		○	○	○	○		-	中岳Ⅱ式	
	387	深鉢	5	C-4	Ⅰ	口縁部				ミガキ	ナデ		○	○		○		-	中岳Ⅱ式	
	388	深鉢	5	E-9	Ⅱ	口縁部				ナデ	ナデ				○				25185	沈線・刻目
	389	深鉢	5	F-11	Ⅱ	口縁部				ナデ・ミガキ	ナデ			○	○	○			24888	中岳Ⅱ式
	390	深鉢	5	B-5	Ⅰ	口縁部				ナデ	ナデ			○				-	中岳Ⅱ式・スス付着	
	391	深鉢	5	E-11	Ⅱ	口縁部				ナデ	ナデ				○				24177	中岳Ⅱ式
	90	392	深鉢	5	F-11:F-12	Ⅱ	口縁部	(47.0)			ミガキ・ナデ	ナデ				○			24932 他	中岳Ⅱ式・沈線・スス付着
393		深鉢	5	F-11	Ⅱ	口縁-胴部				ナデ・ミガキ	ナデ・ミガキ			○				25053 他	中岳Ⅱ式	
394		浅鉢	5	E-9	Ⅱ	口縁部				ナデ・ミガキ	ナデ			○	○			-	中岳Ⅱ式・沈線	

第 12 表 縄文時代後・晩期土器観察表

挿図 番号	掲載 番号	器種	分類	出土区	層位	部位	法量 (cm)			調整		胎土					取上番号	備考				
							口径	底径	器高	外面	内面	白色	角閃石	雲母	石英	長石			輝石			
90	395	深鉢	5	G-12	II	口縁部				ミガキ・ナデ	ナデ				○	○	○	21834	中岳Ⅱ式・沈線			
	396	深鉢	5	B-5	IV	口縁部				ナデ	ミガキ					○		18689	中岳Ⅱ式・沈線			
	397	深鉢	5	B-6	II b	口縁部				ナデ	ナデ				○	○	○	21003	中岳Ⅱ式・沈線			
	398	深鉢	5	G-100	IV	口縁部				ナデ	ナデ					○	○	27553	出水式・沈線			
	399	深鉢	5	F-2	I	口縁部				ナデ	ナデ							-	中岳Ⅱ式・沈線			
	400	深鉢	5	F-12	II	口縁部				ミガキ	ナデ						○	21736	上加世田式・沈線			
	401	深鉢	5	E-9	II	口縁部				ナデ・ミガキ	ナデ・ミガキ						○	25253	中岳Ⅱ式			
	402	深鉢	5	G-12	II	口縁部				ミガキ・ナデ	ミガキ・ナデ				○	○	○	21866	中岳Ⅱ式・沈線			
	403	深鉢	5	H-19	表土	口縁部				ミガキ・ナデ	ミガキ・ナデ					○		○	一括	中岳Ⅱ式		
	404	深鉢	5	E-5	II	口縁部				ミガキ・ナデ	ミガキ・ナデ			○	○				18445	中岳Ⅱ式・スス附着		
	405	深鉢	5	G-11	II	口縁部	(21.8)			ミガキ・ナデ	ナデ				○	○	○	24367	中岳Ⅱ式・スス附着・沈線			
	406	深鉢	5	C-6	V	口縁部	(17.5)			ミガキ・ナデ	ナデ				○	○	○	21433	中岳Ⅱ式・スス附着			
	407	深鉢	5	D-8	-	口縁部				ナデ	ナデ					○			20285	中岳Ⅱ式		
	408	深鉢	5	-	-	口縁部				ナデ・ミガキ・ハケ目	ナデ				○			○	S110-101 他	中岳Ⅱ式・遺構認定せず		
409	浅鉢	5	C-4	-	口縁部				ナデ	ナデ					○	○		S110	中岳Ⅱ式・遺構認定せず			
410	深鉢	5	D-8	-	口縁部				ナデ	ナデ						○		20205 他	中岳Ⅱ式			
411	深鉢	5	D-8	-	口縁部				ナデ	ナデ							○	20217	中岳Ⅱ式			
412	浅鉢	5	D-8	-	口縁部				ミガキ・ナデ	ナデ								20298	中岳Ⅱ式			
413	深鉢	5	C-3	I	口縁部				ナデ	ナデ						○		○	-	中岳Ⅱ式		
414	浅鉢	5	B-5	I	口縁部				ナデ	ナデ					○		○	-	中岳Ⅱ式・口唇部沈線			
91	415	深鉢	5	E-11	II	頸部				ナデ	ナデ			○	○		○	24531 他	中岳Ⅱ式・沈線・刻目			
	416	深鉢	5	B-5	I	胴部				ナデ	ナデ				○		○	○	-	中岳Ⅱ式・沈線・綾杉文		
	417	深鉢	5	C-4	II	頸部				ミガキ・ナデ	ナデ				○		○	○	18431	中岳Ⅱ式・沈線・刻目突帯		
	418	浅鉢	5	F-11	II	胴部				ミガキ	ミガキ				○	○			24961	中岳Ⅱ式・刻目		
	419	深鉢	5	F-7	II	胴部				ナデ	ナデ・工具ナデ							○	22965	中岳Ⅱ式・沈線・刻目		
	420	深鉢	5	G-12	II	胴部				ナデ	ナデ								○	-	中岳Ⅱ式・沈線・凹点文	
	421	深鉢	5	F-3	II	頸部				ナデ	ミガキ・ナデ					○	○	○	20134	中岳Ⅱ式・刻目		
	422	深鉢	5	B-6	I	胴部				ナデ・ミガキ	ナデ					○		○	○	-	中岳Ⅱ式・刻目・口縁部付近	
	423	深鉢	5	F-10	II b	頸部				ナデ	ナデ					○		○	○	29390	中岳Ⅱ式・三日月文	
	424	深鉢	5	F-11	II b	頸部				ミガキ	ミガキ					○				29244	中岳Ⅱ式・スス附着	
	425	深鉢	5	F-12	II	頸部				ナデ	ナデ					○		○		24983	中岳Ⅱ式・沈線	
	426	深鉢	5	C-4	VII	頸部				ミガキ・ナデ	ナデ					○		○		25772	中岳Ⅱ式・沈線	
	427	深鉢	5	E-8	II	頸部				工具ナデ	ナデ					○	○	○	19717	中岳Ⅱ式・沈線		
	428	深鉢	5	E-11	II	頸部				工具ナデ	工具ナデ・ミガキ					○		○		24533	中岳Ⅱ式・沈線	
	429	深鉢	5	F-11	II	頸部				ミガキ・ナデ	工具ナデ・ナデ					○		○		25059 他	中岳Ⅱ式・沈線	
	430	深鉢	5	B-5	I	頸部				工具ナデ	ナデ					○	○			-	中岳Ⅱ式・沈線	
	431	深鉢	5	F-11	II b	頸部				ナデ	工具ナデ							○	○	29321	中岳Ⅱ式・微隆起突帯	
	432	深鉢	5	E-10	II	胴部				工具ナデ・ミガキ	ミガキ						○	○		23336	中岳Ⅱ式・沈線	
	433	深鉢	5	F-11	II	頸部				ミガキ・ナデ	ミガキ・ナデ					○	○			25006	中岳Ⅱ式・沈線	
	434	深鉢	5	G-12	II	頸部				工具ナデ・ミガキ	ナデ・ミガキ						○	○		24216	中岳Ⅱ式・沈線	
	435	深鉢	5	D-5	I	胴部				ナデ・ミガキ	ナデ					○		○		-	中岳Ⅱ式	
	436	深鉢	5	E-10	II	胴部				ナデ・ミガキ	ミガキ・ナデ					○	○			23121	中岳Ⅱ式・沈線	
	437	深鉢	5	F-11	II	頸部				ナデ	ナデ					○	○			24923	中岳Ⅱ式・沈線	
	438	深鉢	5	F-11	II	頸部				ミガキ	ナデ					○	○			24992	中岳Ⅱ式・沈線	
	439	深鉢	5	C-5	I	頸部				ミガキ・ナデ	ナデ					○				-	中岳Ⅱ式	
	440	深鉢	5	D-8	-	胴部				ミガキ	ナデ					○	○	○		20870	中岳Ⅱ式・沈線	
441	深鉢	5	H-11	IV	頸部				ナデ・ミガキ	ナデ・ミガキ					○		○		27723	中岳Ⅱ式・スス附着		
442	深鉢	5	F-18	II b	頸部				ナデ・ミガキ	ナデ・ミガキ					○	○	○		28063	中岳Ⅱ式・スス附着		
443	深鉢	5	D-8	-	胴部				ナデ・ミガキ	ナデ						○	○		20291	中岳Ⅱ式・スス附着		
444	深鉢	5	G-18	II b	胴部				ナデ	ナデ						○	○		28093	中岳Ⅱ式		
445	深鉢	5	F-11	II	胴部				ナデ・ミガキ	ナデ					○				25023	中岳Ⅱ式		
446	深鉢	5	E-8	II a	頸部				ナデ	ナデ						○	○		19312	中岳Ⅱ式		
92	447	深鉢	5	E-11	II	胴部				ナデ	ナデ				○	○	○		23742	中岳Ⅱ式		
	448	深鉢	5	B-5	I	頸部				工具ナデ	工具ナデ					○		○		-	中岳Ⅱ式・沈線	
	449	深鉢	5	E-10	II	頸部				工具ナデ	ナデ						○	○		23332	中岳Ⅱ式・沈線	
	450	深鉢	5	C-6	I	頸部				工具ナデ・ミガキ	ナデ・ミガキ						○	○		-	中岳Ⅱ式・沈線	
	451	深鉢	5	F-9	II b	胴部				ミガキ・ナデ	ミガキ・ナデ					○	○		○	29114	中岳Ⅱ式	
	452	深鉢	5	E-10	II	頸部				ナデ	ナデ						○			23098	中岳Ⅱ式・沈線	
	453	深鉢	5	E-9	II	頸部				ナデ	ナデ							○		24679	中岳Ⅱ式	
	454	深鉢	5	D-6	IV	頸部				ミガキ・ナデ	ナデ					○	○	○		19948 他	中岳Ⅱ式・スス附着	
	455	深鉢	5	E-12	II b	胴部				工具ナデ	ナデ					○		○	○	29308	中岳Ⅱ式	
	456	深鉢	5	E-12	II b	頸部				ナデ	ナデ						○	○		29224	中岳Ⅱ式	
	457	深鉢	5	C-6	I	頸部				ナデ	ナデ					○	○	○		-	中岳Ⅱ式	
	458	深鉢	5	E-11	II	頸部				ナデ	工具ナデ							○		24817	中岳Ⅱ式・沈線	
	459	深鉢	5	-	I	頸部				ミガキ・ナデ	ナデ						○	○		一括	中岳Ⅱ式・沈線	
	460	深鉢	5	E-11	II	胴部				ミガキ・ナデ	ナデ						○	○	○	○	24790 他	中岳Ⅱ式
	461	深鉢	5	D-10	II	胴部				ミガキ・ナデ	ナデ						○	○			23507 他	中岳Ⅱ式・スス附着

第12表 縄文時代後・晩期土器観察表

挿図 番号	掲載 番号	器種	分類	出土区	層位	部位	法量 (cm)			調整		胎土					取上番号	備考	
							口径	底径	器高	外面	内面	白色粒	角閃石	雲母	石英	長石			輝石
92	462	深鉢	5	D-8	-	胴部				ナデ	ナデ					○	20234 他	中岳Ⅱ式・スス付着	
	463	浅鉢	5	F-8	Ⅱ	口縁部				ナデ	ナデ				○		22985	入佐式・沈線	
	464	浅鉢	5	D-8	-	口縁部				ミガキ	ミガキ				○	○	20249	晩期・沈線	
	465	精製浅鉢	5	E-8	Ⅱ	口縁部				ナデ	ナデ				○		20314	晩期・沈線	
	466	精製浅鉢	5	E-10	Ⅱ	口縁部				ミガキ	ミガキ				○		23089	晩期・沈線	
	467	粗製浅鉢	5	D-7	Ⅳ	口縁部				ナデ	ナデ				○		19957	晩期	
	468	精製浅鉢	5	D-8	Ⅱ	口縁部				ナデ	ナデ				○		20198	晩期・沈線	
	469	精製浅鉢	5	E-11	Ⅱ	口縁部				ミガキ	ミガキ				○	○	25160	晩期・沈線	
	470	精製浅鉢	5	B-5	Ⅰ	口縁部				ナデ	ナデ				○	○	-	晩期・沈線	
	471	精製浅鉢	5	G-12	Ⅱ	口縁部				ミガキ	ミガキ				○		24875	晩期	
	472	精製浅鉢	5	C-6	Ⅱ	口縁部				ミガキ	ミガキ				○		21022	晩期・沈線	
	473	精製浅鉢	5	E-11	Ⅱ	口縁部				ミガキ	ナデ				○		23755	晩期・沈線	
	474	精製浅鉢	5	F-18	Ⅱ b	口縁部				ミガキ	ミガキ				○		28079	晩期・沈線	
	475	精製浅鉢	5	F-11	Ⅱ b	口縁部				ミガキ	ミガキ				○	○	27320	晩期・沈線	
	476	粗製浅鉢	5	E-11	Ⅱ	口縁部				ナデ	ナデ				○		27745	晩期・沈線	
	477	精製浅鉢	5	D-8	-	口縁部				ミガキ	ミガキ・ナデ				○		20302	晩期	
	478	浅鉢	5	-	-	口縁部				ナデ	ナデ						土集2-15	中岳Ⅱ式・沈線・遺構認定せず	
	479	精製浅鉢	5	E-11	Ⅱ	口縁部				ミガキ	ミガキ				○		-	晩期・沈線	
93	480	精製浅鉢	5	G-18	カクラン	口縁部				ミガキ	ミガキ				○		-	晩期・沈線・黒川式	
	481	精製浅鉢	5	E-11	Ⅱ	口縁部				ミガキ	ミガキ				○	○	-	晩期・沈線	
	482	精製浅鉢	5	D-11	Ⅱ	口縁部				ナデ	ミガキ				○		-	晩期・黒川式	
	483	精製浅鉢	5	E-8	Ⅱ	口縁部				ミガキ	ミガキ				○		19669	晩期・沈線	
	484	精製浅鉢	5	E-8	Ⅱ a	口縁部				ミガキ	ミガキ				○		19105	晩期・沈線	
	485	精製浅鉢	5	E-8	Ⅳ	胴部				ナデ	ナデ				○		19897	晩期	
	486	精製浅鉢	5	F-10	Ⅱ b	胴部				ミガキ・ナデ	ナデ				○	○	29261	晩期・沈線	
	487	鉢	5	C-5	Ⅶ	底部	(3.4)			ナデ	ナデ				○		26747	晩期	
	488	鉢	5	F-18	Ⅱ b	底部	(4.6)			ミガキ	ミガキ				○		28212	晩期	
	489	甕	5	E-8	Ⅱ a	脚部	6.7			ナデ・指頭圧痕	ナデ				○	○	19114	晩期	
	490	不明	5	H-19	表土	底部	(7.0)			ナデ	ナデ				○		一括	晩期・コゲ残存	
	491	不明	5	E-11	Ⅱ	底部	(4.4)			ナデ・ミガキ	ナデ				○	○	24499	晩期	
	492	不明	5	F-11	Ⅱ	底部	(6.0)			ナデ	ナデ				○	○	20813	晩期	
	493	不明	5	D-9	Ⅰ	脚部	(7.7)			指頭圧痕・ナデ	ナデ				○	○	一括	晩期・コゲ残存	
	494	不明	5	B-4	Ⅰ	底部	(5.6)			ナデ	ナデ				○	○	一括	晩期・コゲ残存	
	495	不明	5	B-4	Ⅶ	底部	(5.0)			工具ナデ	工具ナデ				○	○	25836	晩期	
	496	不明	5	F-18	Ⅱ b	底部	(7.0)			指ナデ	ナデ				○	○	27984	晩期	
	497	不明	5	F-7	Ⅱ	底部	(11.8)			ナデ	ナデ				○	○	22936	晩期	
	498	不明	5	F-10	-	底部	(4.2)			ナデ	ナデ				○		一括	中岳Ⅱ式・コゲ残存	
	499	精製浅鉢	6	G-12	Ⅱ	口縁・胴部	(19.4)			ミガキ	ミガキ				○		21837 他	玉縁口縁	
	500	精製浅鉢	6	G-12	Ⅱ	口縁部				ナデ	ナデ				○	○	21836	玉縁口縁	
	501	深鉢	7	C-5	Ⅰ	口縁部				ナデ	ナデ				○		-	口唇から斜めに下がる三角突帯	
	502	深鉢	7	H-19	Ⅱ b	口縁部				ナデ	ナデ				○		27941	三角突帯	
	503	深鉢	7	E-5	Ⅰ	口縁部				ミガキ	ナデ				○		-	刻目突帯	
	504	深鉢	7	C-6	Ⅱ	口縁・胴部				ナデ・ミガキ	ナデ				○		21013	中岳Ⅱ式・三角突帯	
	505	深鉢	7	D-4	Ⅰ	口縁部				ミガキ	ナデ				○	○	-	口唇に刻み・突起	
94	506	土製加工品	縄文後期	F-18	Ⅱ b	-				ナデ	ナデ				○	○	28064		
	507	土製加工品	縄文後期	F-18	Ⅱ b	-				ナデ・ミガキ	ナデ				○	○	28251	スス付着	
	508	土製加工品	縄文後期	F-11	Ⅱ	-				ナデ・ミガキ	ナデ				○	○	25057		
	509	土製加工品	縄文後期	E-11	Ⅱ	-				ナデ	ナデ				○	○	24512		
	510	土製加工品	縄文後期	C-4	Ⅰ	-				ナデ	ミガキ				○	○	-		
	511	土製加工品	縄文後期	E-10	Ⅱ	-				ナデ	ナデ				○	○	25272		
	512	土製加工品	縄文後期	F-11	Ⅱ	-				ナデ	ナデ				○	○	23933		
	513	土製加工品	縄文後期	D-10	Ⅲ	-				ミガキ	ミガキ				○	○	-		
	514	土製加工品	縄文後期	E-10	Ⅱ	-				ナデ	ナデ				○	○	23324		
	515	土製加工品	縄文後期	F-4	Ⅰ	-				ミガキ	ミガキ				○	○	SK156		

第13表 弥生時代土器観察表

挿図 番号	掲載 番号	器種	分類	出土区	層位	部位	法量 (cm)			調整		胎土					取上番号	備考	
							口径	底径	器高	外面	内面	白色粒	角閃石	雲母	石英	長石			輝石
105	551	甕	刻目突帯	G-18	Ⅱ a	口縁部				ナデ	ナデ・ミガキ					○	27953 他	一括	
	552	甕	刻目突帯	D-7	Ⅰ	口縁部				ミガキ	ナデ				○		-		
	553	甕	刻目突帯	F-18	Ⅱ b	口縁部				ミガキ	ナデ・ミガキ				○		28033		
	554	甕	刻目突帯	G-19	Ⅱ b	口縁部				ミガキ	ミガキ				○		27942		
	555	甕	刻目突帯	B-5	Ⅰ	口縁部				ミガキ	ミガキ				○		-		
	556	甕	刻目突帯	E-11	Ⅱ	口縁部				ナデ	ナデ				○		23738		
	557	甕	刻目突帯	F-5	Ⅰ	口縁部				ナデ	ハゲ目				○		-		
	558	甕	刻目突帯	F-18	Ⅱ b	口縁部				ナデ	ナデ				○		28032	スス付着	

第 13 表 弥生時代土器観察表

挿図 番号	掲載 番号	器種	分類	出土区	層位	部位	法量 (cm)			調整		胎土					取上番号	備考
							口径	底径	器高	外面	内面	白色	角閃石	雲母	石英	長石		
	559	甕	刻目突帯	C-5	I	胴部				ナデ	ナデ				○		-	
	560	甕	入来	F-11	II	口縁部	(45.2)			ナデ	ナデ			○		21700	三角突帯	
	561	甕	入来	E-11	II	口縁部	(27.2)			ナデ	ナデ			○		22861	他	
	562	甕	入来	E-11	II	口縁部				ナデ	ナデ				○	23720		
	563	甕	入来	F-10	II b	口縁部	(25.2)			ハケ目	ナデ			○		29162	沈線	
	564	甕	山ノ口	E-11	II	口縁部				ナデ	ナデ			○		22685		
	565	甕	山ノ口	F-12	II	口縁部	(23.0)			ナデ	ナデ			○	○	20516	他	
	566	甕	入来	F-10	II b	口縁部	18.6			ナデ	ナデ			○	○	20369	他-括	
	567	甕	山ノ口	E-10	II	口縁部				ナデ	ナデ			○	○	24725	突帯	
	568	甕	山ノ口	D-9	I	口縁部	(22.2)			ナデ	ナデ			○		-	三角突帯	
	569	甕	山ノ口	E-10	II	口縁-胴部	(29.0)			ナデ	ナデ			○	○	23329	他	
	570	甕	山ノ口	F-10	II b	口縁-胴部	(33.0)			ナデ	ナデ・ハケ目			○	○	28481	他	
	571	甕	弥生	G-11	II	底部	6.6			ナデ	ナデ			○		21293	中期	
	572	甕	弥生	G-11	IV	底部	5.8			ハケ目	ナデ			○	○	S113-3	コケ残存	
	573	甕	弥生	G-11	II	底部	5.8			ナデ	ナデ			○	○	21972	中期	
	574	甕	弥生	F-10	II b	底部				ナデ	ナデ			○		28465	中期	
	575	甕	弥生	E-11	II	底部	(5.6)			ナデ	ナデ			○	○	-	中期	
	576	甕	弥生	D-10	II	底部	6.7			ハケ目・工具ナデ	工具ナデ			○	○	24763	中期	
	577	甕	弥生	E-12	II b	底部	8.4			ナデ	-			○	○	28344	中期	
	578	甕	弥生	E-10	II	底部	8.0			ナデ	-			○	○	24608	中期	
	579	甕	弥生	E-8	II a	底部	4.3			工具ナデ	ナデ			○	○	19272	中期	
	580	甕	弥生	D-8	II	底部	5.5			ナデ	-			○	○	21514	中期	
	581	甕	弥生	F-11	II	口縁部	(38.0)			ナデ・ハケ目	ハケ目・ナデ			○		20706	他	
	582	甕	弥生	F-11	-	口縁部	(36.8)			ナデ・ハケ目	ハケ目・ナデ			○		21769	他	
	583	甕	弥生	F-11	-	口縁部				ナデ・ハケ目	ハケ目・ナデ			○		20970	三角突帯	
	584	甕	弥生	E-9	II	胴部				ナデ	ナデ				○	25110	三角突帯	
	585	甕	山ノ口	F-18	II b	口縁部	(36.0)			ナデ	ナデ			○		28038	他	
	586	甕	弥生	E-12	II b	口縁部	(39.2)			ナデ	ナデ			○		28356	M字状突帯	
	587	甕	弥生	E-12	II b	口縁部	(33.8)			ナデ	ナデ・指頭圧痕			○		28348	他	
	588	甕	弥生	E-11	II	口縁部				ナデ	ナデ			○		22737		
	589	甕	弥生	E-10	II	口縁部				ナデ	指頭圧痕・ナデ			○	○	22595	三角突帯	
	590	甕	弥生	E-10	II	胴部				ナデ	ハケ目・ナデ			○	○	23673	M字状突帯	
	591	甕	弥生	E-9	II	胴部				ナデ	ナデ			○		23414	三角突帯	
	592	甕	弥生	D-9	II	胴部				ナデ	ナデ				○	22440	三角突帯	
	593	甕	弥生	E-12	II b	胴部				ナデ	ナデ			○		29248	M字状突帯	
	594	深鉢	弥生	C-6	II	口縁部				ナデ	ナデ				○	21019	他-括	
	595	深鉢	弥生	E-8	II a	口縁部				ナデ	ナデ				○	-	三角突帯	
	596	深鉢	弥生	H-1	-	口縁部				ナデ	ナデ				○	-	括	
	597	鉢	弥生	E-7	I	口縁部				ミガキ	ナデ				○	-	三角突帯	
	598	鉢	弥生	H-1	-	口縁部				ミガキ	ナデ				○	-	括	
	599	鉢	山ノ口	F-12	-	口縁部	(19.4)			ナデ	工具ナデ				○	20522	三角突帯	
	600	鉢	弥生	D-6	IV	口縁部				ナデ	ナデ				○	19946	突帯	
	601	鉢	弥生	D-7	I	口縁部				ミガキ	ナデ				○	-	三角突帯	
	602	鉢	入来	D-6	I	口縁部				ミガキ	ナデ				○	-	突帯	
	603	深鉢	弥生	B-5	I	口縁部				ミガキ	ナデ				○	-	突帯	
	604	鉢	弥生	E-10	II	口縁部				ナデ	ナデ				○	24728	三角突帯	
	605	鉢	弥生	E-12	II b	口縁-胴部	(14.4)			ナデ	ナデ			○		28342	突帯・中期	
	606	高坏	弥生	F-3	II	脚部	(14.0)			ナデ	ナデ			○	○	20107	突帯	
	607	壺	山ノ口	E-11	II b	口縁部	(23.0)			ナデ	ナデ			○		28628		
	608	壺	弥生	E-11	II b	口縁部	(24.2)			ナデ	ナデ			○		28622	他	
	609	壺	弥生	G-11	II	口縁部	(23.0)			ナデ	ナデ				○	21287		
	610	壺	弥生	F-10	II b	口縁部	(24.2)			ナデ	ナデ			○	○	29336	スス付着	
	611	壺	弥生	E-12	II b	口縁部	(15.2)			ナデ	ナデ			○		28340		
	612	壺	弥生	E-10	II	口縁部	(19.1)			ミガキ・ナデ	ナデ				○	22248		
	613	壺	山ノ口	F-12	-	口縁部	(18.6)			ナデ	ナデ				○	20470		
	614	壺	弥生	G-F-12	II	口縁部	(15.8)			指頭圧痕・ナデ	ナデ				○	24392	他	
	615	壺	弥生	G-12	-	口縁部	(18.6)			ナデ	ナデ				○	-		
	616	壺	山ノ口	F-10	II b	口縁部	(17.2)			指頭圧痕・ナデ	指頭圧痕・ナデ				○	28443		
	617	壺	弥生	F-5	I	口縁部				ナデ	ナデ				○	-	口唇部刻み	
	618	壺	山ノ口	E-10	II	口縁部				ナデ	ナデ				○	22174	櫛描波状文	
	619	壺	山ノ口	F-10	-	口縁部				ナデ	ナデ				○	-	櫛描波状文	
	620	壺	弥生	E-10	II	口縁部				ナデ	ナデ				○	22228	沈線	
	621	壺	山ノ口	E-10	II	口縁部				ナデ	ナデ				○	22160	櫛描波状文	
	622	小型壺	弥生	E-8	I	口縁部	(9.0)			ナデ	ナデ				○	-		
	623	小型壺	弥生	E-11	II b	口縁部	(11.4)			ナデ	ナデ				○	28424		
	624	壺	山ノ口	D-8	II	口縁部	(11.8)			ナデ	ナデ				○	21512	細沈線 (鋸歯文)	
	625	壺	弥生	E-10	II	頸部				ナデ	ナデ				○	23652	突帯	

第 13 表 弥生時代土器観察表

挿図番号	掲載番号	器種	分類	出土区	層位	部位	法量 (cm)			調整		胎土					取上番号	備考	
							口径	底径	器高	外面	内面	白色	角閃石	雲母	石英	長石			輝石
109	627	壺	山ノ口	F-11	II b	頸部				ナデ	ナデ				○	○	28839	梅播波状文	
	628	壺	山ノ口	E-10	II	頸部				ナデ	ナデ				○	○	24868	丹塗り・細沈線	
	629	壺	山ノ口	F-12	II	胴部				ナデ	ナデ				○		20466	線刻	
	630	壺	弥生	E-10	II	頸~胴部				ナデ	ハケ目・ナデ				○		22185 他	沈線	
	631	壺	弥生	E-10	II	胴部				ハケ目・ナデ	ハケ目・指頭圧痕				○		23153 他	三角突帯	
	632	壺	弥生	F-10	II b	底部	6.8			ミガキ・ナデ	ナデ		○	○		○	29370	中期・コゲ残存	
	633	壺	弥生	F-11	II b	底部	6.0			指ナデ・ナデ	指ナデ・指頭圧痕				○	○	28426	中期	
	634	壺	弥生	F-11	II	底部	(8.0)			ナデ・ミガキ	摩耗				○	○	24118	中期	
	635	壺	弥生	E-5	I	底部	(10.6)			摩耗	ナデ				○		-	-	
	636	壺	弥生	E-8	II a	底部	(9.3)			工具ナデ	ナデ				○	○	19062	-	
110	637	壺	弥生	D-4・5	I	底部	7.6			ミガキ	摩耗		○	○	○		-	-	
	638	壺	弥生	G-11	II	底部	6.4			ナデ	指ナデ・指頭圧痕				○	○	21968	-	
	639	壺	弥生	E-11	II	底部	(5.0)			指ナデ・ナデ	ナデ				○	○	22704	-	
	640	壺	弥生	E-8	II	底部	(8.6)			ナデ・工具ナデ	ナデ					○	○	19703	-
	641	壺	弥生	G-11・12	II	底部	(9.0)			ナデ	ナデ				○	○	21331 他	中期	
	642	壺	弥生	I-19	-	底部	5.0			ミガキ・ナデ	工具ナデ				○	○	-	一括	
	643	壺	弥生	E-10	II	底部	4.2			ナデ・工具ナデ	ナデ・工具ナデ				○	○	23289	中期	
	644	壺	弥生	B-5	I	底部	(5.0)			ナデ	ナデ				○		-	中期	
	645	壺	弥生	D-8	-	底部	(8.0)			ナデ	ナデ					○	○	20234	-
	646	壺	弥生	F-18	II b	底部	(6.8)			工具ナデ・指頭圧痕	ナデ					○	○	28250	中期
	647	壺	弥生	C-6	II	底部	(7.6)			指ナデ・ナデ	ナデ				○	○	21446	中期	
	648	壺	弥生	E-12	II	底部	5.4			ナデ	ナデ				○	○	25354	-	
	649	壺	弥生	F-11	II b	底部	(6.0)			指ナデ	指ナデ				○	○	27326	-	
	650	壺	弥生	D-8	-	底部	(6.0)			ナデ	ナデ					○		20245	-
	651	壺	弥生	F-11	II b	底部	9.6			工具ナデ	工具ナデ		○	○			○	28836	中期
	652	壺	弥生	E-12	II b	底部	7.6			ナデ	ナデ・指頭圧痕		○			○		28784	-
	653	壺	弥生	F-12	II	底部	(5.8)			ナデ・ミガキ	工具ナデ				○	○	20583	-	
	654	壺	弥生	F-G-11	II	底部	5.4			ナデ	ナデ・指頭圧痕				○	○	21636 他	-	
	655	壺	山ノ口	F-12	-	底部	(6.0)			ナデ	ナデ					○		20533	-
	656	壺	弥生	F-9	II b	底部	(6.0)			ナデ	ナデ・ミガキ		○	○		○	○	28865	-
	657	小型壺	弥生	D-4・5	I	底部	3.2			ナデ・指頭圧痕	工具ナデ				○	○	-	中期	
	658	壺	弥生	F-4	I	底部	3.2			ナデ・工具ナデ	-				○	○	-	中期・コゲ残存	
	659	壺	弥生	E-12	-	底部	3.2			ナデ	ナデ				○	○	-	一括	
	660	小型壺	弥生	E-4	II	底部	(4.0)			ナデ	ナデ					○		18377	-
	661	小型壺	弥生	F-11	-	底部	2.0			ナデ	ナデ				○	○	○	20666	中期
	662	壺	弥生	G-12	II	底部	5.6			ナデ・ハケ目・ミガキ	ナデ				○	○	21409	-	
663	小型壺	弥生	F-18	表土	底部	(6.0)			ナデ	ナデ				○	○	○	-	一括	
664	小型壺	弥生	E-F-11	I	底部	(4.8)			ナデ	ナデ				○	○	-	中期		
665	小型壺	弥生	E-8	II a	底部	2.6			ナデ	ナデ				○	○	○	19327 他	中期	
666	短頭壺	弥生	E-9	II	完形	10.2	3.8	7.5	工具ナデ	工具ナデ・指ナデ				○	○	○	○	22546	-

第 14 表 古墳時代土器観察表

挿図番号	掲載番号	器種	分類	出土区	層位	部位	法量 (cm)			調整		胎土					取上番号	備考	
							口径	底径	器高	外面	内面	白色	角閃石	雲母	石英	長石			輝石
132	708	甕	成川	F-12	-	口縁部	(26.5)			ナデ	ナデ				○	○	20403 他	スス付着・刻目突帯	
	709	甕	成川	E-12	-	口縁部	(26.5)			ナデ	ナデ				○	○	20415	刻目突帯	
	710	甕	成川	F-12-13	I・II	口縁部	(26.5)			ナデ	ナデ				○	○	20537 他	刻目突帯	
	711	小型甕	成川	F-11	II b	口縁部	(18.6)			ナデ	ナデ					○	○	28597	刻目突帯
	712	甕	成川	E-F-11-13	表土	頸部				ナデ	ナデ					○		-	一括
	713	甕	成川	E-6	IV	頸部				ハケ目	ハケ目・ナデ					○		19924	三角突帯
	714	甕	成川	E-8	II	口縁部	(26.4)			ハケ目・ナデ	工具ナデ		○			○		18842	スス付着
	715	甕	成川	E-10	II	口縁部	(20.2)			ナデ	ナデ		○	○		○		23293	スス付着・黒斑
	716	甕	成川	D-9	II	口縁部	(20.2)			ナデ・ハケ目	ナデ・ハケ目		○	○		○		25127	スス付着
	717	甕	成川	F-9-10	表土	口縁部	(21.7)			ナデ	ナデ・ハケ目		○			○		-	一括
	718	甕	成川	E-3	I	口縁部	(23.8)			ナデ・ハケ目	ナデ				○	○	-	黒斑	
	719	小型甕	成川	E-10	II	口縁部	(20.0)			ナデ	ハケ目・ナデ					○		-	スス付着
	720	甕	成川	E-10	II	口縁部	(20.2)			ハケ目・ナデ	ナデ					○		23308	-
	721	甕	成川	D-7	I	口縁部	(21.2)			ハケ目	ナデ					○		-	スス付着
133	722	甕	成川	F-11	II b	口縁部	(27.3)			工具ナデ・ハケ目	ナデ・ハケ目				○	○	28842 他	-	
	723	甕	成川	D-8	II	口縁部				ナデ	ナデ					○		19384	-
	724	甕	成川	E-5	I	口縁部				ハケ目・ナデ	ハケ目・ナデ					○		-	-
	725	甕	成川	F-11	II b	口縁部	(27.4)			工具ナデ	工具ナデ				○	○	28948	スス付着	
	726	甕	成川	E-11	II b	口縁部				ハケ目・ナデ	ハケ目・ナデ					○	○	28636 他	一括
	727	甕	成川	E-10	II	口縁部	(22.8)			ナデ	ナデ		○	○		○		22330	スス付着
	728	甕	成川	F-12	II	口縁部				ハケ目・ナデ	ハケ目・ナデ					○	○	20927	-
	729	甕	成川	F-11	II b	口縁部	(26.0)			工具ナデ・ハケ目	工具ナデ・ハケ目		○	○		○		28401 他	-

第 14 表 古墳時代土器観察表

挿図 番号	掲載 番号	器種	分類	出土区	層位	部位	法量 (cm)			調整		胎土					取上番号	備考			
							口径	底径	器高	外面	内面	白色	角閃石	雲母	石英	長石			輝石		
133	730	甕	成川	F-11	-	頸部				指ナデ	ナデ・ハケ目			○	○	○	○	一括			
	731	甕	成川	E-10	II	頸部				工具ナデ	工具ナデ・指頭圧痕			○	○			24612			
	732	甕	成川	E-11	II	頸~胴部				ナデ・ハケ目	ナデ		○	○	○			22653 他	スス付着		
	733	甕	成川	E-F-11-13	表土	頸部				ナデ	工具ナデ			○	○	○			一括		
134	734	甕	成川	D-9	II	頸部				ナデ	ナデ・指頭圧痕			○	○	○		22495	スス付着		
	735	甕	成川	E-7	I	頸部				ナデ	工具ナデ			○	○			-	スス付着		
	736	甕	成川	E-11	II	頸部				ハケ目・ナデ	ナデ			○	○			22665			
	737	甕	成川	F-11	II b	頸部				ナデ	ナデ			○	○	○		28407	スス付着		
	738	甕	成川	E-10	II	頸部				ナデ	工具ナデ			○	○	○		23292	スス付着・黒斑		
	739	甕	成川	E-11	II	頸部				ナデ	ナデ			○	○	○	○	22745 他			
	740	甕	成川	F-11	II	頸~胴部				ハケ目・ナデ	タタキ・工具ナデ			○				20774 他	スス付着		
	741	甕	成川	D-9	II	底部付近				工具ナデ・指頭圧痕	指ナデ			○		○		23477	スス付着		
	742	甕	成川	E-12	カクラン	底部付近				ハケ目・ナデ	ナデ					○			一括	スス付着	
	743	甕	成川	E-9	II	底部付近				ナデ	工具ナデ			○		○			22538	スス付着	
	744	甕	成川	E-12	II b	底部付近				ナデ	ナデ			○		○			28339	コゲ残存	
	745	甕	成川	F-11	II a	底部付近				ナデ	ナデ			○		○	○		27262		
	746	甕	成川	E-11	II	底部付近				ハケ目・ナデ	ナデ			○		○	○		22673		
	747	甕	成川	E-11	II	底部付近				ナデ・指頭圧痕	工具ナデ・指ナデ				○	○			22515		
	748	甕	成川	E-F-11	表土	底部付近				ハケ目・指頭圧痕	指頭圧痕						○		一括	コゲ残存	
	749	甕	成川	E-12	II b	底部付近				ナデ	ナデ			○		○			28358		
750	小型甕	成川	E-10	I	底部付近				ナデ	ナデ				○				-			
135	751	甕	成川	E-11	II	底部		7.8		ハケ目・ナデ	ハケ目・ナデ			○				24258	コゲ残存		
	752	甕	成川	E-7	I	底部		(9.8)		工具ナデ	指ナデ			○	○	○		-			
	753	甕	成川	F-11	II b	底部		6.8		ハケ目・ナデ	ナデ			○	○	○		28912	コゲ残存		
	754	甕	成川	E-11	II	底部		7.2		ハケ目・ナデ	ナデ			○		○			22678 他		
	755	甕	成川	E-10	II	底部		6.6		ナデ	工具ナデ			○	○	○	○		22593	コゲ残存	
	756	甕	成川	E-F-11-13	II	底部		(9.2)		ナデ・指ナデ	ナデ				○	○			22620 他		
	757	甕	成川	E-11	II	底部		(8.6)		ナデ	ナデ				○	○			22744		
	758	甕	成川	E-11	II	底部		(8.0)		工具ナデ	工具ナデ・指頭圧痕				○	○			22708		
	759	小型甕	成川	D-3	-	底部		(6.7)		ナデ	ナデ						○		-		
	760	小型甕	成川	E-10	II	底部		(6.8)		ナデ	ナデ				○	○			23215		
	761	甕	成川	F-11	II	底部		(11.0)		工具ナデ・ナデ	工具ナデ・ナデ			○			○		21719		
762	甕	成川	E-8	II	脚部		(8.0)		工具ナデ	ナデ・工具ナデ				○	○			18840			
136	763	鉢	成川	D-9	II	口縁部	(25.6)			指頭圧痕・ナデ	指頭圧痕・ナデ			○	○			23448			
	764	脚台付鉢	成川	D-10,E-9	II	口縁~胴部	(18.0)			ハケ目・ナデ	ハケ目・ナデ・指頭圧痕				○	○	○		24774 他		
	765	鉢	成川	D-9	II	口縁部	(17.2)			ナデ	ナデ				○	○			25124		
	766	鉢	成川	E-10	II	口縁部	(16.6)			ナデ	ナデ				○				23290		
	767	鉢	成川	F-12	II	口縁部	(16.0)			ナデ	ナデ				○	○			20423		
	768	鉢	成川	F-10	II b	頸部				工具ナデ	ハケ目				○	○	○		一括	スス付着	
	769	鉢	成川	F-8	-	口縁部				ナデ	ナデ				○				23015	三角突帯	
	770	鉢	成川	F-4	-	口縁部				ナデ	ナデ					○			-	三角突帯	
	771	鉢	成川	F-10	II b	頸部				工具ナデ	工具ナデ				○	○	○		28565		
	772	台付鉢	古墳	D-E-10	II	完形	16.0	9.4	17.8	工具ナデ	工具ナデ・指ナデ				○	○			24609 他	スス付着	
	773	台付鉢	古墳	F-11	II b	完形	10.0	7.6	9.6	工具ナデ・指ナデ	工具ナデ・指ナデ			○		○	○			29034 他	
	774	鉢	成川	E-10	II	底部		(5.5)		ハケ目・指頭圧痕	ハケ目								22301 他		
	775	小型鉢	古墳	D-6	IV	完形	7.5	5.2	6.8	工具ナデ・指ナデ	工具ナデ・指ナデ				○		○	○		19000	
	776	小型鉢	古墳	E-10	II	完形	6.6	3.8	7.1	工具ナデ・指ナデ	工具ナデ・指ナデ				○	○	○			23599	スス付着
	777	鉢	成川	D-9	II	底部		5.8		指頭圧痕・ナデ	ナデ				○	○	○		22494		
	778	鉢	成川	F-11	-	底部		5.2		ナデ・指頭圧痕	ナデ				○	○	○			20770	コゲ残存
779	手捏ね	成川	D-9	II	口縁部	(6.0)			指頭圧痕	指頭圧痕					○				-		
780	手捏ね	成川	E-8	I	口縁部	(9.4)			指頭圧痕	指頭圧痕・ナデ				○					-		
781	手捏ね	成川	E-9	II	口縁部				指頭圧痕	指頭圧痕					○	○			25111		
782	手捏ね	成川	D-8	I	底部		2.8		ナデ	ナデ					○				-		
783	手捏ね	成川	E-9	II	底部		(2.2)		ハケ目・ナデ	ハケ目・ナデ					○	○			22533		
137	784	壺	古墳	E-F-11-13	II b	頸~底部				ハケ目	ハケ目・指ナデ				○	○			29217 他	黒斑	
	785	壺	古墳	E-F-11	II b	完形	13.2	4.3	31.4	工具ナデ・指ナデ	工具ナデ・指ナデ				○	○	○		28817 他		
	786	壺	成川	F-11	II b	口縁部	(11.6)			指頭圧痕・ナデ	指頭圧痕・ナデ				○				28386		
	787	壺	成川	E-11	II b	口縁部	(14.0)			ナデ	ナデ					○				29015	
	788	壺	成川	-	-	口縁部	(13.2)			ハケ目・ナデ	ナデ				○	○			30T		
	789	壺	成川	E-10	II	口縁部	(19.4)			ミガキ・ナデ	ナデ					○				22251 他	スス付着・黒斑
	790	壺	成川	E-9	I	口縁部	(12.8)			ナデ	ナデ・ミガキ					○	○			22532	内面黒色
	791	壺	成川	E-10	II	口縁部	(12.6)			ナデ	ミガキ・ナデ			○		○			24660	突帯・黒斑	
138	792	壺	古墳	F-11	II b	口縁部	16.0			工具ナデ・指ナデ	工具ナデ					○			28903 他	口唇部瓣描波状文	
	793	壺	古墳	F-11	II b	頸~胴部				ハケ目・ナデ	指ナデ・ナデ						○			28900 他	
	794	壺	成川	E-10	II	頸~胴部				ハケ目・ナデ	ナデ					○			23305		
	795	壺	成川	E-10	II	頸~胴部				ハケ目・ナデ	ナデ					○				23291	
	796	壺	成川	F-G-11	II	胴部				ナデ	ナデ・ハケ目			○	○	○	○			20972 他	突帯

第 14 表 古墳時代土器観察表

挿図 番号	掲載 番号	器種	分類	出土区	層位	部位	法量 (cm)			調整						取上番号	備考						
							口径	底径	器高	外面			内面					胎土					
										白色粒	角閃石	雲母	石英	長石	輝石								
138	797	壺	成川	E-10	II	胴部				ナデ	ナデ					○		22755 他	細沈線				
	798	壺	成川	G-11	II	胴部				ナデ	ナデ			○	○			21280	突帯				
	799	壺	成川	E-8	II a	胴部				ナデ	ナデ			○	○			-	突帯				
	800	壺	成川	F-11	II b	胴部				ハケ目・ナデ	ハケ目・ナデ			○	○			28616	刻目突帯				
	801	壺	成川	F-10-11	II	胴部				ナデ	ナデ			○	○			27237 他	刻目突帯				
	802	壺	成川	E-7	II	胴部				ハケ目	ナデ			○				18967	刻目突帯				
	803	壺	成川	D-8	I	胴部				ナデ	ナデ			○				-	刻目突帯				
	804	壺	成川	C-6	II	胴部				ミガキ	ミガキ				○			-	刻目突帯				
805	壺	成川		I	胴部				ナデ	ナデ			○	○			-	細沈線					
806	壺	成川	E-11	II	胴部				ナデ	ナデ				○			24528	細沈線					
139	807	壺	成川	E-11	II	胴~底部	4.8			ナデ・ミガキ・ハケ目	ナデ・ハケ目			○	○			22759 他	刻目突帯・黒斑				
	808	壺	成川	E-8	IV	底部	(8.2)			工具ナデ・ナデ	工具ナデ・ナデ		○	○		○		19905	コゲ残存				
	809	壺	古墳	F-11	II	胴~底部	7.4			ハケ目	工具ナデ・指ナデ				○	○	○	20920 他	スス付着				
	810	壺	成川	E-8	II a	底部	(6.8)			ハケ目・指頭圧痕	工具ナデ			○		○		19230 他	黒斑				
	811	壺	成川	E-10	II	底部	7.0			指頭圧痕・ハケ目	指頭圧痕・指ナデ			○	○			24719 他	スス付着・コゲ残存				
	812	壺	成川	F-10	II b	底部	(4.2)			工具ナデ・ナデ	工具ナデ			○		○		29381	コゲ残存				
	813	壺	成川	F-10	II b	底部	(5.2)			ナデ	ナデ・ミガキ			○		○		28890					
140	814	小型壺	成川	E-9	II	底部	(4.0)			ナデ	ナデ・指頭圧痕				○			23250					
	815	壺	成川	F-10	II b	底部	(3.8)			工具ナデ	ナデ			○	○			27313	スス付着				
	816	壺	成川	D-9	II	底部	(3.5)			ナデ	ナデ			○				22577	コゲ残存				
	817	壺	成川	E-8	I	底部	(2.8)			ミガキ・ナデ・工具ナデ	ミガキ・工具ナデ		○		○			-	黒斑				
	818	壺	成川	D-7	I	底部	(6.0)			工具ナデ	工具ナデ			○				-					
	819	壺	成川	F-11	-	底部	(5.8)			ハケ目・ナデ	ハケ目・ナデ			○		○		20737					
	820	壺	成川	E-12	II b	底部	(4.4)			ナデ	工具ナデ・ナデ			○				28337					
	821	平底壺	成川	E-6	I	底部	(3.4)			工具ナデ	工具ナデ				○		○	-					
	822	小型壺	成川	D-10	II	底部	(3.2)			ナデ	ナデ				○			24778					
	823	壺	成川	-	I	底部	(5.6)			工具ナデ	工具ナデ			○		○		-	黒斑				
	824	壺	成川	E-8	I	底部	(4.0)			工具ナデ	ナデ			○		○	○	-					
	825	壺	成川	F-11	II	底部	(3.8)			ナデ	ナデ			○		○		25043					
	826	壺	成川	D-8	-	底部	(2.2)			ナデ	ナデ				○			-					
	827	壺	成川	C-4	IV	底部	(5.4)			ナデ	ナデ				○	○		18675	コゲ残存				
	828	壺	成川	H-19	II a	底部	(9.2)			ナデ	ナデ					○		-	一括				
	829	小型壺	成川	F-8	II	底部	(4.0)			ナデ	ナデ				○			22953					
	830	丸底壺	成川	E-10	I	胴~底部				ミガキのちナデ	ナデ・指頭圧痕			○	○			-					
831	壺	成川	E-11	II	底部	(6.0)			ナデ	ナデ・指頭圧痕			○	○			22746						
832	壺	成川	E-6	II	胴~底部				ハケ目	ナデ				○	○		18925 他	内面剥離・スス付着					
833	丸底壺	成川	E-10	II	胴~底部				ナデ	指頭圧痕・工具ナデ				○		○	23306	黒斑					
834	壺	成川	E-9	II	胴~底部				ケズリのちナデ	ナデ			○		○	○	23406						
835	壺	成川	E-10-11	II	底部	6.0			ハケ目	工具ナデ			○		○	○	22226 他	黒斑					
141	836	高坏	成川	E-6	II	坏部	(30.4)			ハケ目	ナデ			○				19922 他	黒斑				
	837	高坏	成川	E-12	脚部				ミガキ	指頭圧痕・ナデ				○	○			23842 他	円形透かし				
	838	高坏	成川	F-11	II	坏部	(28.8)			ナデ	ナデ				○			23952 他					
	839	高坏	成川	E-6	II	坏部	(23.7)			ハケ目・ナデ	ナデ				○			18883					

第 15 表 古代土師器・須恵器観察表

挿図 番号	掲載 番号	器種	分類	出土区	層位	部位	法量 (cm)			調整						取上番号	備考						
							口径	底径	器高	外面			内面					胎土					
										白色粒	角閃石	雲母	石英	長石	輝石								
162	929	椀	土師器	F-11	II	底部		6.4		ナデ	ナデ					○		24149					
	930	椀	土師器	E-7	I	胴部				ナデ	ナデ			○	○			-					
	931	椀	土師器	D-4	I	胴部				回転ナデ	回転ナデ							-					
	932	椀	土師器	E-8	II	胴部				回転ナデ	回転ナデ					○		19600					
	933	甕	須恵器	G-18	II a	胴部				平行叩き	同心同状アテ具痕					○		27915	給軸				
	934	甕	須恵器	G-17	-	胴部				格子叩き	同心同状アテ具痕								カクランノ楯 青海波文				
	935	焙烙	土師器	F-10	-	底部				回転ナデ	回転ナデ					○		-	一括				

第 16 表 弥生時代裝飾品観察表

挿図 番号	掲載 番号	器種	出土区	層位	分類	法量 (cm)			胎土						取上番号	
						最大長	最大径	最大厚	白色粒	角閃石	雲母	石英	長石	輝石		
111	667	土製勾玉	D-9	II	-	3.0	1.6	1.6		○		○	○			22391

第 17 表 縄文時代早期石器観察表

挿図 番号	掲載 番号	器種	石材	出土区	層位	最大長	最大幅	最大厚	重量	取上番号	備考
						(cm)	(cm)	(cm)	(g)		
20	1	砥石	砂岩	D・E-6		7.20	5.90	3.20	161.0	集石 1	1号集石遺構
22	11	磨石	安山岩	B-4	-	7.60	7.30	4.00	319.0	集石 3-19	3号集石遺構
24	13	磨・敲石	安山岩	B-3	-	10.50	9.70	5.20	659.0	集石 5-35	5号集石遺構
31	26	打製石斧	ホルンフェルス	B-4	-	10.45	7.95	3.50	385.0	集石 12-2	12号集石遺構
33	30	石鏃	チャート	F-3・4	-	2.70	1.50	0.45	1.6	集石 14 S-1	14号集石遺構
	31	磨・敲石	安山岩	F-3・4	-	6.10	5.10	3.68	170.0	集石 14-13	14号集石遺構
	32	磨・敲石	安山岩	G-1	-	9.05	7.61	4.38	496.0	集石 2-19	19号集石遺構
	33	磨・敲石	安山岩	G-1	-	12.00	10.12	6.00	897.0	集石 2-22	19号集石遺構
	116	石鏃	安山岩	B-6	Ⅶ	2.60	2.05	0.75	4.0	26518	
	117	石鏃	チャート	C-4	Ⅶ	2.30	1.90	0.55	1.5	26216	
	118	石鏃	チャート	C-4	Ⅶ	2.50	1.85	0.51	1.4	25760	
	119	石鏃	黒曜石Ⅰ類	C-3	Ⅶ	2.40	1.30	0.45	2.0	26638	
	120	石鏃	黒曜石Ⅳ類	D-4	Ⅶ	2.00	1.20	0.30	0.4	26200	
	121	石鏃	黒曜石Ⅲ類	C-3	Ⅶ	1.90	1.40	0.45	0.7	26102	
	122	石鏃	黒曜石Ⅴ類	D-4	Ⅶ	1.80	1.20	0.40	0.9	26730	
	123	石鏃	安山岩	B-4	Ⅶ	1.50	1.50	0.32	1.0	25390	
	124	石鏃	珪質頁岩	G-100	Ⅶ	1.20	0.90	0.30	0.4	27879	
	125	石鏃	黒曜石Ⅴ類	B-4	Ⅶ	1.65	1.05	0.40	0.5	27458	
	126	石鏃	珪質頁岩	C-5	Ⅶ	1.90	1.55	0.30	0.5	25889	
	127	石鏃	黒曜石Ⅴ類	D-6	Ⅶ	2.90	1.50	0.50	1.4	26293	
	128	石鏃	チャート	E-4	Ⅶ	2.15	1.00	0.40	0.9	26694	
	129	石鏃	珪質頁岩	D-6	Ⅶ	2.40	1.10	0.30	0.8	26416	
	130	石鏃	安山岩	E-5	Ⅶ	2.80	1.50	0.40	1.8	26436	
	131	石鏃	黒曜石Ⅲ類	F-7	Ⅶ	2.65	1.50	0.35	1.0	27028	
	132	石鏃	玉髓	D-4	Ⅶ	1.75	1.50	0.35	1.2	26457	
	133	石鏃	安山岩	B-4	Ⅶ	1.85	1.55	0.30	0.7	25822	
	134	撿器	黒曜石Ⅱ C類	F-4	Ⅶ	2.55	2.45	1.15	6.0	26809	
	135	撿器	黒曜石Ⅰ類	B-4	Ⅶ	2.89	1.91	1.25	6.0	25839	
	136	撿器	珪質頁岩	F-3	Ⅶ	3.30	1.90	1.30	5.0	27061	
	137	楔形石器	チャート	F-3	Ⅶ	3.00	1.70	1.00	6.9	27064	
	138	彫器	玉髓	D-4	Ⅶ	3.80	2.25	1.00	13.0	25784	
	139	加工痕剥片	チャート	B-3	Ⅶ	1.60	3.00	0.80	4.0	25373	
	140	加工痕剥片	黒曜石Ⅱ C類	C-5	Ⅶ	2.12	1.70	0.70	2.0	26084	
	141	加工痕剥片	珪質頁岩	C-4	Ⅶ	1.60	1.90	0.70	5.0	25774	
	142	加工痕剥片	ホルンフェルス	D-7	Ⅶ	6.60	9.45	1.70	123.0	27035	
	143	石核	黒曜石Ⅰ類	D-5	Ⅶ	2.37	4.67	2.01	18.0	25809	
	144	石核	黒曜石Ⅰ類	D-4	Ⅶ	2.10	3.11	1.45	9.0	25741	
	145	石核	黒曜石Ⅰ類	C-3	Ⅶ	2.00	3.92	1.22	8.0	26119	
	146	尖頭状石器	砂岩	A-4	Ⅶ	7.06	2.91	1.10	28.0	27491	
	147	磨製石斧	ホルンフェルス	B-4	Ⅶ	6.50	2.30	1.90	34.0	27490	
	148	磨製石斧	ホルンフェルス	D-4	Ⅶ	5.70	4.30	1.10	37.0	26159	
	149	磨製石斧	ホルンフェルス	B-5	Ⅶ	9.10	5.10	1.60	101.0	25875	
	150	磨製石斧	ホルンフェルス	B-5	Ⅶ	6.80	3.90	0.90	31.0	27410	
	151	打製石斧	ホルンフェルス	B-4	Ⅶ	7.04	3.93	1.88	58.0	レキ 3308	
	152	打製石斧	ホルンフェルス	C-5	Ⅶ	8.35	4.40	2.20	84.0	25893	
	153	礫器	砂岩	C-4	Ⅶ	11.00	9.90	3.20	447.0	26575	
	154	打製石斧	ホルンフェルス	D-4	Ⅶ	14.35	6.90	0.14	140.0	26777	
	155	礫器	ホルンフェルス	B-3	Ⅶ	10.60	13.20	4.90	800.0	25375	
	156	磨・敲石	安山岩	C-3	Ⅶ	7.64	7.52	3.31	307.0	26639	
	157	磨・敲石	安山岩	F-3	Ⅶ	9.10	8.47	3.93	449.0	26805	
	158	敲石	砂岩	B-3	Ⅶ	11.80	7.70	5.30	625.0	27520	
	159	磨・敲石	安山岩	B-3	Ⅶ	7.55	6.30	4.80	320.0	25820	
	160	磨・敲石	安山岩	C-4	Ⅶ	8.60	7.10	4.30	337.0	26336	
	161	磨・敲石	花崗岩	D-7	Ⅶ	6.10	9.80	6.80	566.0	27034	
	162	敲石	安山岩	C-5	Ⅶ	9.00	8.30	3.70	376.0	26555	
	163	磨・敲石	安山岩	D-3	Ⅶ	10.00	9.00	6.30	792.0	26661	
	164	磨・敲石	安山岩	C-3	Ⅶ	13.35	13.15	5.10	119.3	25724	
	165	磨・敲石	安山岩	D-4	Ⅶ	5.40	8.60	5.80	394.0	26454	
	166	磨・敲石	安山岩	C-4	Ⅶ	16.50	17.00	5.90	2439.0	26579	
	167	砥石	砂岩	C-4	Ⅶ	6.90	5.24	1.80	91.0	26186	
	168	砥石	砂岩	B-5	Ⅶ	11.10	8.21	2.04	256.0	27001	
	169	砥石	砂岩	B-4	Ⅶ	10.90	8.50	3.00	470.0	27362	
	170	砥石	ホルンフェルス	B-4	Ⅶ	15.45	2.70	2.50	187.0	27463	
	171	砥石	砂岩	B-5	Ⅶ	12.90	5.80	3.55	310.0	レキ 4031	
	172	石皿	花崗岩	H-1	Ⅶ	12.80	18.20	14.50	3960.0	27720	
	173	石皿	安山岩	D-4	Ⅶ	44.00	53.70	11.85	20000.0	27009	
	174	石錘	砂岩	E-3	Ⅶ	4.20	3.80	1.60	105.0	26910	
	175	石錘	砂岩	F-3	Ⅶ	5.10	6.40	1.20	55.0	27074	
	176	石錘	砂岩	D-5	Ⅶ	5.70	6.60	2.00	186.0	25811	
	177	石錘	砂岩	E-5	Ⅶ	5.20	8.30	1.70	176.0	26435	
	178	石錘	安山岩	D-4	Ⅶ	6.50	7.50	2.20	209.0	レキ 1147	
	179	石錘	ホルンフェルス	D-4	Ⅶ	5.20	6.80	2.20	190.0	26770	
	180	石錘	ホルンフェルス	C-5	Ⅶ	6.30	8.00	2.10	230.0	26568	
	181	石錘	ホルンフェルス	C-5	Ⅶ	6.10	10.40	1.92	210.0	27424	
	182	蜂の巣石	安山岩	D-4	Ⅶ	6.40	6.50	2.50	149.0	27500	
	183	石鏃	黒曜石Ⅴ類	C-6	Ⅵ	1.80	1.30	0.23	1.0	21001	
	184	石鏃	安山岩	D-5	Ⅵ	2.20	1.70	0.35	0.8	25777	
	185	石鏃	チャート	B-5	Ⅵ	2.20	1.40	0.45	0.9	25481	
	186	石鏃	安山岩	B-4	Ⅵ	1.30	0.85	0.30	0.5	25397	
	187	石鏃	鉄石英	B-5	Ⅵ	2.80	1.95	0.40	1.4	25500	
	188	石鏃	黒曜石Ⅲ類	C-3	Ⅵ	2.10	1.45	0.35	0.7	25705	

第 17 表 縄文時代早期石器観察表

挿図 番号	掲載 番号	器種	石材	出土区	層位	最大長	最大幅	最大厚	重量	取上番号	備考
						(cm)	(cm)	(cm)	(g)		
54	189	加工痕剥片	鉄石英	C-4	VI	2.00	2.25	0.64	2.0	26124	
	190	剥片	粘板岩	C-5	VI	5.60	5.30	0.40	22.0	樹根一括	
	191	打製石斧	ホルンフェルス	B-4	VI	7.30	7.50	2.70	153.0	レキ98	
	192	磨・敲石	安山岩	G-1	VI~VII	11.20	8.60	4.70	713.0	-	

第 18 表 縄文時代後・晩期遺構内出土石器観察表

挿図 番号	掲載 番号	器種	石材	出土区	層位	最大長	最大幅	最大厚	重量	取上番号	備考
						(cm)	(cm)	(cm)	(g)		
59	212	石鏃	安山岩	E-5	IV上	1.40	1.00	0.30	0.3	8号住一括	1号竪穴住居跡
	213	打製石斧	ホルンフェルス	E-5	-	3.44	3.10	0.75	9.0	8号住 94	1号竪穴住居跡
	214	打製石斧	ホルンフェルス	E-5	-	14.00	6.61	2.13	176.0	8号住 88	1号竪穴住居跡
	215	打製石斧	ホルンフェルス	E-5	IV上面	8.00	5.70	2.00	106.0	8号住 130	1号竪穴住居跡
	216	打製石斧	ホルンフェルス	E-5	-	9.01	5.92	1.40	90.0	8号住 124	1号竪穴住居跡
	217	スクレイパー	ホルンフェルス	E-5	-	4.95	8.45	0.92	45.0	8号住 117	1号竪穴住居跡
	218	スクレイパー	ホルンフェルス	E-5	-	5.92	10.92	1.02	78.0	8号住 123	1号竪穴住居跡
	219	スクレイパー	ホルンフェルス	E-5	-	5.67	9.24	0.54	35.0	8号住 30	1号竪穴住居跡
	220	磨・敲石	凝灰岩	E-5	-	10.00	8.90	3.70	432.0	8号住 59	1号竪穴住居跡
	221	磨・敲石	花崗岩	E-5	-	9.30	6.60	5.50	480.0	8号住 229	1号竪穴住居跡
	222	磨・敲石	安山岩	E-5	-	12.60	5.70	7.20	673.0	8号住 142	1号竪穴住居跡
	223	磨・敲石	安山岩	E-5	-	5.70	4.80	3.10	120.0	8号住 214	1号竪穴住居跡
	224	石皿	凝灰岩	E-5	-	18.10	27.70	10.28	6510.0	8号住 173	1号竪穴住居跡
	225	石皿	凝灰岩	E-5	-	21.20	16.30	10.70	3340.0	8号住 162	1号竪穴住居跡
63	247	打製石斧	ホルンフェルス	F-5	-	8.80	7.75	1.90	150.0	12号住 66	2号竪穴住居跡
	248	打製石斧	ホルンフェルス	F-5	埋土	6.25	5.10	1.20	49.0	12号住 21	2号竪穴住居跡
	249	磨・敲石	砂岩	F-5	-	5.75	5.20	4.30	193.0	12号住 81	2号竪穴住居跡・被熱
	250	石皿	凝灰岩	F-5	-	9.40	9.20	5.50	498.0	12号住 98	2号竪穴住居跡・被熱
67	278	石鏃	黒曜石VI類	F・G-18	埋土	1.60	1.00	0.20	0.3	竪穴住居跡 1 (74)	3号竪穴住居跡
	279	石鏃	ホルンフェルス	F・G-18	埋土	2.00	1.50	0.30	0.9	竪穴住居跡一括	3号竪穴住居跡
	280	磨製石斧	ホルンフェルス	F・G-18	埋土	11.60	5.00	2.10	168.0	1号住 198	3号竪穴住居跡
	281	磨製石斧	ホルンフェルス	F・G-18	埋土	2.75	2.10	1.3	10.0	1号住	3号竪穴住居跡
	282	打製石斧	ホルンフェルス	F・G-18	埋土	10.10	5.05	0.95	51.0	1号住	3号竪穴住居跡
	283	打製石斧	ホルンフェルス	F・G-18	埋土	2.80	4.60	0.69	15.0	1号住 52	3号竪穴住居跡
	284	打製石斧	ホルンフェルス	F・G-18	埋土	10.80	6.40	2.00	105.0	1号住一括	3号竪穴住居跡
	285	打製石斧	ホルンフェルス	F・G-18	埋土	8.80	5.42	1.50	100.0	1号住 169	3号竪穴住居跡
	286	スクレイパー	ホルンフェルス	F・G-18	-	7.70	12.50	1.16	109.0	1号住一括1	3号竪穴住居跡
	287	磨・敲・凹石	安山岩	F・G-18	-	9.10	9.85	6.10	820.0	1号住 158	3号竪穴住居跡
	288	磨石	砂岩	F・G-18	-	7.75	5.25	3.60	250.0	1号住一括1	3号竪穴住居跡
69	291	磨・敲石	安山岩	E-8	-	8.53	5.45	1.80	123.0	埋設 15	1号埋設土器
73	295	打製石斧	ホルンフェルス	D-4	埋土	8.10	5.20	2.20	96.0	土坑 93-1	土坑 3
76	303	打製石斧	ホルンフェルス	G-100	埋土	5.70	4.10	1.75	51.0	土坑 2-10	土坑 9
	304	打製石斧	ホルンフェルス	G-100	埋土	8.50	5.60	1.70	98.0	土坑 2	土坑 9
77	305	磨・敲石	花崗岩	C-5	-	8.20	6.10	3.30	217.0	土坑 82-1	土坑 15
78	307	加工痕剥片	黒曜石II C類	C-7	-	3.00	1.81	1.31	7.0	SK150-2	土坑 17
	308	石皿	安山岩	C-7	-	19.50	13.80	13.30	5020.0	SK150-7	土坑 17
	309	石皿	凝灰岩	C-7	-	33.65	26.15	15.40	12000.0	土坑 150-8	土坑 17
	310	礫片	凝灰岩	C-7	-	10.60	9.20	9.70	990.0	SK150-4	土坑 17
	311	台石	凝灰岩	C-7	-	24.50	11.70	6.90	1860.0	SK150-6	土坑 17
	81	312	打製石斧	ホルンフェルス	E-9	-	14.55	6.93	2.04	235.0	集石 11 (H26)
313		打製石斧	ホルンフェルス	E-9	-	12.16	5.73	1.85	133.0	集石 11-54 (H26)	石器集積遺構
314		打製石斧	ホルンフェルス	E-9	-	7.46	6.41	1.62	95.0	集石 11-143 (H26)	石器集積遺構
315		打製石斧	ホルンフェルス	E-9	-	7.95	5.01	2.06	93.0	集石 11-5 (H26)	石器集積遺構
316		打製石斧	ホルンフェルス	E-9	-	7.47	5.58	2.10	110.0	集石 11-27 (H26)	石器集積遺構
317		打製石斧	ホルンフェルス	E-9	-	6.71	6.82	2.30	118.0	集石 11-116 (H26)	石器集積遺構
318		打製石斧	ホルンフェルス	E-9	-	10.80	6.98	1.68	132.0	集石 11-77 (H26)	石器集積遺構
319		打製石斧	ホルンフェルス	E-9	-	9.04	7.03	1.51	97.1	集石 11-13 (H26)	石器集積遺構
320		打製石斧	ホルンフェルス	E-9	-	6.82	5.42	1.67	64.0	集石 11-31 (H26)	石器集積遺構
321		スクレイパー	ホルンフェルス	E-9	-	4.15	8.62	1.06	50.0	集石 11 (H26)	石器集積遺構
322		打製石斧	ホルンフェルス	E-9	-	6.40	5.78	1.39	53.0	集石 11 (H26)	石器集積遺構
323		磨・敲石	安山岩	E-9	-	7.04	8.94	3.61	232.0	集石 11-68 (H26)	石器集積遺構
324		軽石加工品	軽石	E-9	-	7.80	6.60	2.90	70.0	集石 11-97 (H26)	石器集積遺構
82		325	磨・敲石	安山岩	E-9	-	12.40	9.80	6.50	1088.0	集石 11-9 (H26)
	326	磨・敲石	花崗岩	E-9	-	6.60	10.60	5.85	660.0	集石 11-82 (H26)	石器集積遺構
	327	石皿	凝灰岩	E-9	-	38.75	17.40	10.20	7350.0	集石 11-64 (H26)	石器集積遺構
	328	石皿	凝灰岩	E-9	-	21.20	18.40	10.50	4150.0	集石 11-55 (H26)	石器集積遺構
84	329	打製石斧	ホルンフェルス	D-9・10	II	13.45	6.96	1.74	155.0	25208	遺物集中域 1
	330	打製石斧	ホルンフェルス	D-9・10	II	14.50	7.61	1.56	156.0	25231	遺物集中域 1
	331	打製石斧	ホルンフェルス	D-9・10	II	14.30	6.40	1.80	188.0	25206	遺物集中域 1
	332	打製石斧	砂岩	D-9・10	II	15.10	8.00	1.50	200.0	25200	遺物集中域 1
	333	打製石斧	ホルンフェルス	D-9・10	II	13.40	7.30	2.60	186.0	25205	遺物集中域 1
	334	スクレイパー	ホルンフェルス	D-9・10	II	5.60	10.90	0.74	60.0	25229	遺物集中域 1
	335	スクレイパー	ホルンフェルス	D-9・10	-	5.96	8.49	1.19	97.0	斧集 30	遺物集中域 1
	336	打製石斧	ホルンフェルス	D-9・10	II	12.40	6.84	1.34	121.0	25207	遺物集中域 1
	337	磨・敲石	安山岩	D-9・10	-	6.33	5.56	3.12	143.0	斧集 2	遺物集中域 1

第 19 表 弥生時代遺構内出土石器観察表

挿図 番号	掲載 番号	器種	石材	出土区	層位	最大長	最大幅	最大厚	重量	取上番号	備考
						(cm)	(cm)	(cm)	(g)		
104	531	石皿	砂岩	D・E-5	-	10.80	15.50	4.70	1002.0	7号住 21	1号竪穴住居跡
	548	磨石	砂岩	D・E-10	-	15.50	11.10	9.40	2437.0	土集 4-34	遺物集中域
	549	砥石	砂岩	D・E-10	-	14.50	12.00	3.84	1116.0	土集 4-10	遺物集中域
	550	磨・敲石	安山岩	D・E-10	-	15.30	11.40	4.40	1057.0	土集 4-1	遺物集中域

第 20 表 古墳時代遺構内出土石器観察表

挿図 番号	掲載 番号	器種	石材	出土区	層位	最大長	最大幅	最大厚	重量	取上番号	備考
						(cm)	(cm)	(cm)	(g)		
115	673	打製石斧	ホルンフェルス	F・G-18	埋土	7.20	4.95	1.50	60.0	地下式横穴墓 90号	2号地下式横穴墓
117	676	スクレイパー	ホルンフェルス	F-18	-	6.54	10.97	1.45	112.0	地下式横穴墓 92号	4号地下式横穴墓
129	703	磨・敲石	安山岩	I-19	-	10.30	8.95	5.90	655.0	土集 3-115	土器破砕祭祀遺構

第 21 表 II層遺構内出土石器観察表

挿図 番号	掲載 番号	器種	石材	出土区	層位	最大長	最大幅	最大厚	重量	取上番号	備考
						(cm)	(cm)	(cm)	(g)		
146	840	石皿	花崗岩	E-10・11	-	13.80	19.50	14.70	4270.0	P712-1	1号掘立柱建物跡
	841	スクレイパー	ホルンフェルス	E-10・11	-	4.18	8.92	0.95	39.0	P707	1号掘立柱建物跡
147	842	軽石加工品	軽石	E-10・11	-	7.30	4.80	4.86	38.0	P738一括	2号掘立柱建物跡
148	849	打製石斧	ホルンフェルス	E-10・11	-	12.70	6.60	2.10	230.0	P633-9	2号掘立柱建物跡
	850	打製石斧	ホルンフェルス	E-10・11	-	12.20	6.95	2.00	153.0	P633-8	2号掘立柱建物跡
	851	打製石斧	ホルンフェルス	E-10・11	II	7.70	5.10	2.10	97.0	P633	2号掘立柱建物跡
	852	スクレイパー	頁岩	E-10・11	-	6.90	9.60	1.00	61.0	P633-1	2号掘立柱建物跡
	853	磨・敲石	砂岩	D・E-9・11	-	15.70	9.00	7.10	1100.0	P733	3号掘立柱建物跡
152	856	スクレイパー	ホルンフェルス	E-11	-	8.30	3.75	1.03	34.0	P631-10	4号掘立柱建物跡
	857	磨製石斧	ホルンフェルス	E-11	-	5.00	5.00	2.40	113.0	P631-21	4号掘立柱建物跡
	858	砥石	砂岩	E-11	-	10.90	7.70	3.00	246.0	P631-22	4号掘立柱建物跡
	859	磨・敲石	花崗岩	E-11	-	12.30	6.70	9.10	797.0	P631-20	4号掘立柱建物跡
	860	レキ	頁岩	E-11	-	17.80	5.40	3.00	362.0	P631-30	4号掘立柱建物跡
	861	磨・敲石	安山岩	E-11	-	10.40	12.95	6.30	866.0	P631-15	4号掘立柱建物跡
	862	軽石加工品	軽石	E-11	-	7.30	10.50	6.50	103.0	P631-27	4号掘立柱建物跡
	868	磨・敲石	花崗岩	E-11	-	14.00	7.10	6.30	790.0	P721-30	4号掘立柱建物跡
153	869	磨・敲石	安山岩	E-11	-	8.30	7.50	3.90	333.0	P721-34	4号掘立柱建物跡
	870	磨・敲石	花崗岩	E-11	-	10.60	9.65	5.80	760.0	P721-3	4号掘立柱建物跡
	871	磨・敲石	安山岩	E-11	-	10.20	10.30	6.50	946.0	P721-9	4号掘立柱建物跡
	872	磨・敲石	ホルンフェルス	E-11	-	4.00	6.50	4.20	114.0	P721-20	4号掘立柱建物跡
	877	敲石	ホルンフェルス	E-11	-	4.90	9.55	1.75	102.0	P632	4号掘立柱建物跡
	878	石皿	砂岩	E-11	-	9.00	7.90	6.80	500.0	P632-8	4号掘立柱建物跡
	881	磨製石斧	ホルンフェルス	E-11	-	8.50	5.40	2.40	150.0	P740-59	4号掘立柱建物跡
	882	敲石	安山岩	E-11	-	5.82	7.24	5.60	290.0	P740-7	4号掘立柱建物跡
154	883	軽石加工品	軽石	E-11	-	5.80	4.40	2.50	11.0	P740-18	4号掘立柱建物跡
	884	軽石加工品	軽石	E-11	-	6.80	7.40	3.80	29.0	P740-10	4号掘立柱建物跡
	885	軽石加工品	軽石	E-11	-	9.40	4.70	4.70	42.0	P740-12	4号掘立柱建物跡
	886	磨石	安山岩	E-11	-	6.40	8.10	6.90	573.0	P740-54	4号掘立柱建物跡
	887	石皿	花崗岩	E-11	-	26.20	21.50	12.70	8200.0	P740-20	4号掘立柱建物跡
	894	磨・敲石	砂岩	E-11・12	-	6.40	9.88	4.82	446.0	P6-3	5号掘立柱建物跡
156	895	敲石	ホルンフェルス	D-8	-	13.70	6.55	5.45	722.0	P462-2	P462
	896	磨・敲・凹石	安山岩	E-8	-	8.31	7.24	5.56	456.0	P504-2	P504
	897	打製石斧	ホルンフェルス	E-8	-	10.60	4.90	1.00	77.0	P463-3	P463
	898	磨・敲石	安山岩	D-6	-	10.10	9.00	3.30	363.0	P430-5	P430
	899	石皿	花崗岩	E-8	-	31.50	20.10	9.60	5695.0	P463-7	P463
157	900	磨・敲石	安山岩	E-7	-	9.80	8.60	6.10	846.0	P455	P455
	901	磨・敲石	安山岩	F-8	-	13.60	12.00	4.00	736.0	P607	P607
160	920	打製石斧	ホルンフェルス	-	-	11.90	7.50	1.15	108.0	P638一括	P638
	921	磨製石斧	ホルンフェルス	-	埋土	7.30	5.08	2.70	139.0	P195	P195
	922	磨製石斧	ホルンフェルス	-	埋土	7.40	5.20	1.60	76.0	P195-2	P195
	923	磨製石斧	ホルンフェルス	-	-	4.00	3.60	1.25	23.0	P486一括	P486
	924	磨・敲石	凝灰角礫岩	-	-	7.00	5.90	3.10	139.0	P411	P411
	925	磨・敲石	頁岩	D-3	-	7.60	6.80	1.75	102.0	P296	P296
	926	磨・敲石	安山岩	-	-	13.70	10.90	4.10	912.0	P195-1	P195
	927	敲石	ホルンフェルス	C-7	-	9.70	6.90	5.60	362.0	P561	P561
	928	砥石	ホルンフェルス	D-4	-	10.70	7.25	4.85	589.0	P352	P352

第 22 表 V層出土の石器観察表

挿図 番号	掲載 番号	器種	石材	出土区	層位	最大長	最大幅	最大厚	重量	取上番号	備考
						(cm)	(cm)	(cm)	(g)		
163	936	加工痕剥片	黒曜石 II C 類	-	-	1.80	1.30	0.50	2.0	遺物集中① 258	遺構認定せず
	937	打製石斧	ホルンフェルス	-	V	14.74	6.04	1.60	165.0	10号住 90	遺構認定せず
	938	打製石斧	ホルンフェルス	-	V	10.50	5.70	2.50	165.0	10号住 73	遺構認定せず
	939	打製石斧	ホルンフェルス	C-4	V	5.40	8.90	1.22	65.0	10号住 93	遺構認定せず
	940	剥片	ホルンフェルス	C-4	V	6.36	5.58	1.10	49.0	10号住 147	遺構認定せず
	941	打製石斧	ホルンフェルス	-	V	9.50	6.70	2.20	117.0	10号住 127	遺構認定せず
	942	打製石斧	ホルンフェルス	-	V	5.20	3.80	1.50	33.0	10号住 92	遺構認定せず

第 23 表 IV層出土の石器観察表

挿図 番号	掲載 番号	器種	石材	出土区	層位	最大長	最大幅	最大厚	重量	取上番号	備考
						(cm)	(cm)	(cm)	(g)		
164	943	石鏃	安山岩	B-4	IV	1.80	1.20	0.50	0.7	18681	
	944	石鏃	黒曜石IV類	D-6	IV	1.30	0.92	0.21	0.2	19001	
	945	石鏃	黒曜石IV類	D-8	IV	1.50	0.90	0.40	0.6	19983	
	946	使用痕剥片	玉髄	D-7	IV	1.30	1.37	2.06	2.0	19966	
	947	打製石斧	ホルンフェルス	E-7	IV	9.25	6.05	1.35	109.0	19912	
	948	磨・敲石	安山岩	G-100	IV	8.25	7.60	4.90	447.0	27841	
	949	磨石	安山岩	H-2	IV	12.60	10.60	6.10	1093.0	27542	

第 24 表 II層他出土の石器観察表

挿図 番号	掲載 番号	器種	石材	出土区	層位	最大長	最大幅	最大厚	重量	取上番号	備考
						(cm)	(cm)	(cm)	(g)		
165	950	石鏃	珪質頁岩	H-19	II b	2.20	1.60	0.50	2.0	28307	
	951	石鏃	チャート	B-5	-	1.35	0.80	0.20	0.3	一括	
	952	石鏃	安山岩	B-4	-	1.10	1.00	0.25	0.4	カクラン一括	
	953	石鏃	黒曜石IV類	B-4	-	1.55	1.20	0.25	0.5	一括	
	954	石鏃	安山岩	E-10	II	1.45	1.90	0.35	0.7	24551	
	955	石鏃	黒曜石III類	G-18	II b	1.00	0.70	0.30	0.2	28263	
	956	石鏃	黒曜石IV類	D-3	-	1.20	1.25	0.20	0.3	ゴボトレ	
	957	石鏃	安山岩	A-4	-	1.45	1.15	0.25	0.4	カクラン一括	
	958	石鏃	ホルンフェルス	C-4	-	1.55	1.15	0.15	0.3	トレンチ	
	959	石鏃	粘板岩	C-6	II c	1.95	1.38	0.21	0.5	20999	
	960	石鏃	珪質頁岩	C-3	-	1.80	1.40	0.40	1.0	カクラン一括	
	961	石鏃	黒曜石IV類	C-4	-	1.25	0.90	0.15	0.2	トレンチ	
	962	石鏃	黒曜石IV類	E-10	II	1.20	0.95	0.23	1.0	25137	
	963	石鏃	黒曜石III類	B-4	-	1.40	0.95	0.20	0.2	ゴボトレ	
	964	石鏃	黒曜石IV類	E-9	II	2.00	0.70	0.20	0.3	一括	
	965	石鏃	水晶	C・D-4	-	1.25	1.20	0.20	0.4	一括	
	966	石鏃	黒曜石IV類	E-6	-	1.85	0.80	0.35	0.5	一括	
	967	石鏃	黒曜石V類	B-4	II	1.83	0.66	0.29	1.0	18639	
	968	石鏃	黒曜石IV類	-	-	1.30	1.10	0.15	0.2	表土一括	
	969	石鏃	ホルンフェルス	E-9	II	3.35	1.90	0.25	2.6	24707	
166	970	磨製石鏃	粘板岩	D-10	II	5.75	2.70	0.35	7.2	24620	
	971	磨製石鏃	頁岩	C-7	II b	3.15	1.80	0.35	2.7	21002	
	972	磨製石鏃	頁岩	C-5	-	3.50	2.00	0.30	3.1	表土一括	
	973	磨製石鏃	頁岩	D-8	-	1.65	1.65	0.20	0.8	カクラン一括	
	974	磨製石製加工品	頁岩	E-8	II a	2.60	1.70	0.20	2.0	19131	
	975	石匙	頁岩	E-9	II	3.87	3.46	0.65	7.0	22516	
	976	石鏃	玉髄	D-10	II	2.55	1.40	0.75	2.8	23510	
167	977	加工痕剥片	黒曜石IV類	D-4	-	1.85	1.25	0.65	1.1	カクラン一括	
	978	加工痕剥片	黒曜石IV類	E-8	II	1.90	1.45	0.60	1.7	19690	
	979	加工痕剥片	黒曜石II C類	C-5	-	2.45	1.65	0.75	3.2	カクラン一括	
	980	加工痕剥片	黒曜石III類	F-3	II	2.25	1.15	0.80	1.8	20130	
	981	加工痕剥片	黒曜石III U類	C-4	-	2.15	1.05	0.75	2.0	ゴボトレ C-4トレンチ	
	982	加工痕剥片	黒曜石V類	G-11	II	4.25	1.45	0.59	5.0	24370	
	983	使用痕剥片	チャート	C-4	-	3.66	0.88	0.83	2.0	カクラン C-4一括	
	984	加工痕剥片	黒曜石II C類	D-4	-	2.30	1.10	0.95	2.0	カクラン D-4一括	
	985	加工痕剥片	黒曜石II C類	B-5	-	2.05	1.75	0.98	2.0	ゴボトレ B-5トレンチ	
	986	使用痕剥片	黒曜石IV類	B-4	-	1.43	2.55	1.12	4.0	ゴボトレ	
	987	加工痕剥片	チャート	F-2	I	1.55	2.40	1.20	5.0	F-2トレンチ	
	988	使用痕剥片	玉髄	B-4	-	2.37	1.85	0.63	2.0	ゴボトレ B-4トレンチ	
	989	加工痕剥片	黒曜石II C類	F-3	II	2.95	1.85	0.60	3.9	一括	
990	使用痕剥片	チャート	E-11	II	2.45	3.14	0.79	4.0	23864		
991	加工痕剥片	チャート	E-10	II	4.50	2.15	1.15	9.0	24580		
992	加工痕剥片	黒曜石IV類	E-7	-	1.50	1.35	0.45	2.0	E-7一括		
993	石核	黒曜石III U類	A-4	-	1.80	2.01	1.20	4.0	カクラン一括		
168	994	磨製石斧	ホルンフェルス	E-9	II	11.70	6.50	1.90	235.0	25089	
	995	磨製石斧	ホルンフェルス	E-9	II	5.00	4.90	1.80	63.0	25082	
	996	磨製石斧	ホルンフェルス	F-3	II	5.11	5.56	1.31	57.0	20088	
	997	磨製石斧	ホルンフェルス	F-18	II b	3.70	6.00	1.10	24.0	28217	
	998	磨製石斧	ホルンフェルス	F-18	II b	3.40	3.20	1.33	10.0	28089	
	999	磨製石斧	ホルンフェルス	E-9	II	7.50	5.50	3.10	182.0	25248	
	1000	磨製石斧	砂岩	F-11	II	6.70	4.45	2.95	75.0	24910	
	1001	磨製石斧	ホルンフェルス	E-9	II	12.60	4.90	3.60	337.0	25138	
	1002	磨製石斧	ホルンフェルス	E-9	-	10.20	4.70	3.70	250.0	カクラン一括	
	1003	磨製石斧	ホルンフェルス	G-18	II b	10.00	4.70	2.45	173.0	28106	
	1004	磨製石斧	ホルンフェルス	E-9	II	7.50	5.10	3.60	163.0	25314	
	1005	磨製石斧	ホルンフェルス	D-8	II	5.00	3.80	2.30	47.0	19795	
	1006	石包丁	ホルンフェルス	B-5	-	4.25	8.40	0.70	32.5	カクラン B-5一括	
169	1007	石斧	ホルンフェルス	E-8	II	12.90	3.70	1.60	103.0	20280	
	1008	石斧	ホルンフェルス	D-10	II	8.50	3.30	1.40	52.0	23531	
	1009	石斧	ホルンフェルス	E-9	II	8.90	2.50	2.80	65.0	25178	
	1010	石斧	ホルンフェルス	F-4	II	6.60	3.70	1.75	52.0	21248	
	1011	石斧	ホルンフェルス	E-8	II	7.15	3.80	1.80	61.0	19838	
	1012	打製石斧	ホルンフェルス	E-12	II	14.60	6.95	1.50	210.0	24099	
	1013	打製石斧	ホルンフェルス	D-8	II	12.25	6.90	1.00	107.0	20251	
	1014	打製石斧	ホルンフェルス	E-8	II	7.80	7.70	1.10	64.0	19745	
	1015	打製石斧	ホルンフェルス	G-12	II	8.90	5.10	0.93	54.0	21345	
	1016	打製石斧	ホルンフェルス	F-11	II a	9.00	4.90	1.50	65.0	27255	

第 24 表 II 層他出土の石器観察表

挿図 番号	掲載 番号	器種	石材	出土区	層位	最大長	最大幅	最大厚	重量	取上番号	備考
						(cm)	(cm)	(cm)	(g)		
169	1017	打製石斧	ホルンフェルス	C-6	II	11.80	5.00	1.20	69.0	21023	
	1018	打製石斧	砂岩	E-8	-	16.30	9.00	2.30	249.0	カクラン	
	1019	打製石斧	ホルンフェルス	C-5	II	17.50	9.20	2.00	298.0	18584	
170	1020	打製石斧	ホルンフェルス	E-11	II	13.30	9.20	1.60	173.0	24467	
	1021	打製石斧	ホルンフェルス	D-3	I	15.90	8.50	2.60	392.0	-	
	1022	打製石斧	砂岩	F-11	II	9.10	10.40	2.10	119.0	21742	
	1023	打製石斧	ホルンフェルス	F-11	II	7.50	5.30	1.30	63.0	24997	
	1024	打製石斧	頁岩	F-12	II	11.60	7.60	2.00	174.0	24989	
	1025	打製石斧	砂岩	F-12	II	9.40	5.70	2.00	153.0	24985	
	1026	打製石斧	ホルンフェルス	E-8	II	6.00	5.50	1.50	67.0	19661	
	1027	打製石斧	ホルンフェルス	E-10	II	9.10	4.70	1.90	104.0	23156	
	1028	打製石斧	ホルンフェルス	D-8	II	5.60	6.30	1.52	53.0	21101	
	1029	打製石斧	砂岩	E-10	II	4.10	3.50	0.80	12.0	23117	
	1030	打製石斧	ホルンフェルス	D-10	II	6.00	5.70	1.30	84.0	23711	
	1031	打製石斧	ホルンフェルス	-	-	7.40	6.30	1.90	111.0	不明一括	
	1032	打製石斧	ホルンフェルス	D-9	II	8.60	7.20	1.50	114.0	25123	
	1033	打製石斧	ホルンフェルス	B-6	II	4.60	4.50	1.20	43.7	21010	
	171	1034	スクレイパー	砂岩	D-10	II	5.50	10.20	0.91	52.0	23528
1035		磨・敲石	安山岩	E-10	II	12.60	10.70	6.10	1127.0	24647	
1036		磨・敲石	花崗岩	E-10	II	7.40	8.40	4.90	505.0	23278	
1037		磨・敲石	砂岩	I-19	-	8.40	4.70	2.83	123.0	磔集 8	
1038		磨・敲石	砂岩	C-6	II	3.40	2.90	1.90	28.0	21050	
172	1039	磨・敲石	安山岩	D-8	II	10.20	6.10	5.90	577.0	21504	
	1040	磨・敲石	安山岩	E-10	II	10.20	8.70	5.60	716.0	24645	
	1041	磨・敲石	安山岩	E-10	II	7.60	6.60	4.85	349.0	23328	
	1042	磨・敲石	安山岩	F-18	II b	11.90	11.10	6.70	1127.0	28216	
	1043	磨・敲石	安山岩	F-12	II	10.00	8.90	2.90	347.0	21544	
	1044	磨・敲・凹石	安山岩	E-9	II	12.00	10.20	5.45	825.0	25232	
	1045	磨・敲石	安山岩	F-10	II b	10.00	8.50	4.90	628.0	27296	
	1046	磨・敲石	安山岩	F-10	II b	9.30	8.80	5.17	660.0	29169	
	1047	磨・敲石	花崗岩	E-10	II	7.40	10.30	5.20	573.0	22594	
173	1048	敲石	花崗岩	E-11	II	6.80	6.10	3.40	194.0	24830	
	1049	磨・敲石	砂岩	C-7	II	9.70	6.60	4.30	395.0	21471	
	1050	敲石	ホルンフェルス	E-11	II	12.60	4.80	3.30	308.0	23770	
	1051	敲石	砂岩	F-10	II b	11.30	4.80	4.40	359.0	28688	
	1052	敲石	粘板岩	F-11	II b	12.00	4.70	3.00	233.0	28390	
	1053	敲石	粘板岩	E-10	II	19.50	5.00	4.30	722.0	24584	
	1054	石錘	砂岩	D-9	II	4.60	6.30	1.80	77.0	22456	
174	1055	砥石	砂岩	E-10	II	6.90	2.00	2.00	29.0	22153	
	1056	砥石	砂岩	F-10	II b	5.50	4.90	1.30	47.0	28568	
	1057	砥石	砂岩	E-8	II	12.30	4.80	2.80	361.0	20083	
175	1058	石皿	凝灰岩	D-10	II	28.30	22.34	14.30	8990.0	22376	
	1059	石皿	凝灰岩	F-8	II	19.60	20.60	17.00	6590.0	24357	
	1060	石皿	凝灰岩	E-10	II	14.90	14.30	11.80	2610.0	23381	
	1061	石皿	凝灰岩	F-11	II	14.90	15.70	7.10	2160.0	25026	
1062	石皿	凝灰岩	F-3	II	20.00	25.30	11.20	6500.0	20093		
176	1063	異形石器	黒曜石Ⅲ類	C-4	-	2.10	0.70	0.35	1.1	10号住一括	遺構認定せず
	1064	異形石器	黒曜石Ⅳ類	A-4	-	1.40	0.70	0.30	0.4	カクラン一括	
	1065	管玉	結晶片岩様緑色岩	C-4	-	1.20	0.70	0.30	0.6	一括	
	1066	石製加工品	砂岩	E-10	II	5.90	20.00	4.15	872.0	23097	
	1067	石製加工品	ホルンフェルス	E-11	II b	8.80	5.20	5.10	327.0	28421	
177	1068	原礫	石英	E-9	II	3.00	1.90	1.67	15.0	25181	
	1069	原礫	石英	F-11	II	2.65	2.30	2.15	19.9	21608	
	1070	原礫	石英	E-9	II	3.60	3.00	2.10	30.0	22535	
	1071	原礫	石英	F-11	II	2.90	1.65	1.60	13.0	21746	
	1072	原礫	石英	B-4	-	2.25	2.00	1.20	8.0	カクラン	

第 25 表 古墳時代遺構内出土鉄器観察表

※ () は推定

挿図 番号	掲載 番号	遺構名	器種	部位	出土区	層位	長さ	幅	厚さ	重さ	備考
							(cm)	(cm)	(cm)	(g)	
114	668	1号地下式横穴墓	刀子	刃部~茎部	I-19	-	(6.5)	1.4	0.3	5.79	旧地下式横穴墓 89号

第5章 自然科学分析

第1節 放射性炭素年代測定

パレオ・ラボ AMS 年代測定グループ
伊藤 茂・佐藤正教・廣田正史・山形秀樹
小林紘一・Zaur Lomtadze・黒沼保子

1 はじめに

鹿児島県鹿屋市に位置する町田堀遺跡から出土した試料について、加速器質量分析法（AMS 法）による放射性炭素年代測定を行った。

2 試料と方法

試料は、1号住居跡から出土した炭化材（試料 No. 1：PLD-34470）と、2号住居跡から出土した炭化材（試料 No. 2：PLD-34471）、3号住居跡から出土した炭化種実（試料 No. 3：PLD-34472）、中岳Ⅱ式土器近辺から出土した不明炭化物（試料 No. 4：PLD-34473）、弥生1号住居跡から出土した炭化材（試料 No. 5：PLD-34474）、弥生遺物集中域から出土した炭化材（試料 No. 6：PLD-34475）の、計6点である。炭化材4点のうち、1号住居跡の試料 No. 1（PLD-34470）は最終形成年輪が残存していたが、それ以外の2号住居跡の試料 No. 2（PLD-34471）と、弥生1号住居跡の試料 No. 5（PLD-34474）、弥生遺物集中域の試料 No. 6（PLD-34475）は最終形成年輪が残存しておらず、部位不明であった。

調査所見では、1号住居跡と2号住居跡、3号住居跡、中岳Ⅱ式土器近辺が縄文時代後期、弥生1号住居跡が古墳時代～古代？、弥生遺物集中域が弥生時代中期と推測されている。

測定試料の情報、調製データは表1のとおりである。試料は調製後、加速器質量分析計（パレオ・ラボ、コンパクト AMS：NEC 製 1.5SDH）を用いて測定した。得られた¹⁴C濃度について同位体分別効果の補正を行った後、¹⁴C年代、暦年代を算出した。

3 結果

表2に、同位体分別効果の補正に用いる炭素同位体比（ $\delta^{13}\text{C}$ ）、同位体分別効果の補正を行って暦年較正に用いた年代値と較正によって得られた年代範囲、慣用に従って年代値と誤差を丸めて表示した¹⁴C年代、暦年較正結果を、図1に暦年較正結果をそれぞれ示す。暦年較正に用いた年代値は下1桁を丸めていない値であり、今後暦年較正曲線が更新された際にこの年代値を用いて暦年較正を行うために記載した。

¹⁴C年代はAD1950年を基点にして何年前かを示した年代である。¹⁴C年代（yrBP）の算出には、¹⁴Cの半減期として Libby の半減期 5568年を使用した。また、付記した¹⁴C年代誤差（ $\pm 1\sigma$ ）は、測定の統計誤差、標準偏差等に基づいて算出され、試料の¹⁴C年代がその¹⁴C年

表1 測定試料および処理

測定番号	遺跡データ	試料データ	前処理
PLD-34470	遺構：1号住居跡 試料 No. 1	種類：炭化材（広葉樹） 試料の性状：最終形成年輪 状態：dry	超音波洗浄 有機溶剤処理：アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2N、水酸化ナトリウム：1.0N、塩酸：1.2N）
PLD-34471	遺構：2号住居跡 試料 No. 2	種類：炭化材（スダジイ） 試料の性状：最終形成年輪以外、部位不明 状態：dry	超音波洗浄 有機溶剤処理：アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2N、水酸化ナトリウム：1.0N、塩酸：1.2N）
PLD-34472	遺構：3号住居跡 試料 No. 3	種類：炭化種実（イチイガシ子葉） 状態：dry	超音波洗浄 有機溶剤処理：アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2N、水酸化ナトリウム：1.0N、塩酸：1.2N）
PLD-34473	遺構：中岳Ⅱ式土器近辺 試料 No. 4	種類：炭化物（不明） 状態：dry	超音波洗浄 有機溶剤処理：アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2N、水酸化ナトリウム：1.0N、塩酸：1.2N）
PLD-34474	遺構：弥生1号住居跡 試料 No. 5	種類：炭化材（ツバキ属） 試料の性状：最終形成年輪以外、部位不明 状態：dry	超音波洗浄 有機溶剤処理：アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2N、水酸化ナトリウム：1.0N、塩酸：1.2N）
PLD-34475	遺構：弥生遺物集中域 試料 No. 6	種類：炭化材（クスノキ） 試料の性状：最終形成年輪以外、部位不明 状態：dry	超音波洗浄 有機溶剤処理：アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2N、水酸化ナトリウム：1.0N、塩酸：1.2N）

代誤差内に入る確率が68.2%であることを示す。

なお、暦年較正の詳細は以下のとおりである。

暦年較正とは、大気中の¹⁴C濃度が一定で半減期が5568年として算出された¹⁴C年代に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の¹⁴C濃度の変動、および半減期の違い(¹⁴Cの半減期5730 ± 40年)を較正して、より実際の年代値に近いものを算出することである。

¹⁴C年代の暦年較正にはOxCal4.3(較正曲線データ: IntCal13)を使用した。なお、1σ暦年代範囲は、OxCalの確率法を使用して算出された¹⁴C年代誤差に相当する68.2%信頼限界の暦年代範囲であり、同様に2σ暦年代範囲は95.4%信頼限界の暦年代範囲である。カッコ内の百分率の値は、その範囲内に暦年代が入る確率を意味する。グラフ中の縦軸上の曲線は¹⁴C年代の確率分布を示し、二重曲線は暦年較正曲線を示す。

4 考察

以下、各試料の暦年較正結果のうち2σ暦年代範囲(確率95.4%)に着目して、遺構ごとに結果を整理する。なお、縄文時代の土器編年と暦年代の対応関係については宮地(2008)を、弥生時代の暦年代については藤尾(2013)を参照した。

1号住居跡から出土した炭化材(試料No. 1: PLD-34470)は、1386-1340 cal BC (15.3%), 1310-1194 cal BC (79.2%), 1141-1134 cal BC (0.9%)であった。これは、縄文時代後期後葉～晩期に相当し、遺構の推定時期である縄文時代後期に対して整合的である。

2号住居跡から出土した炭化材(試料No. 2: PLD-34471)は、1421-1293 cal BC (95.4%)であった。

これは、縄文時代後期後葉に相当し、遺構の推定時期である縄文時代後期に対して整合的である。

3号住居跡から出土した炭化種実(試料No. 3: PLD-34472)は、1410-1261 cal BC (95.4%)であった。これは、縄文時代後期後葉～晩期に相当し、遺構の推定時期である縄文時代後期に対して整合的である。

中岳Ⅱ式土器近辺から出土した不明炭化物(試料No. 4: PLD-34473)は、1404-1265 cal BC (95.4%)であった。これは、縄文時代後期後葉～晩期に相当し、遺構の推定時期である縄文時代後期に対して整合的である。

弥生1号住居跡から出土した炭化材(試料No. 5: PLD-34474)は、54 cal BC-30 cal AD (92.0%)および37-51 cal AD (3.4%)であった。これは、弥生時代中期後葉～後期前半に相当し、遺構の推定時期である古墳時代～古代?よりも古い暦年代を示した。

弥生遺物集中域から出土した炭化材(試料No. 6: PLD-34475)は、99 cal BC-23 cal AD (95.4%)であった。これは弥生時代中期後葉～後期前半に相当し、遺構の推定時期である弥生時代中期に対して整合的である。

引用・参考文献

- Bronk Ramsey, C. (2009) Bayesian Analysis of Radiocarbon dates. Radiocarbon, 51(1), 337-360.
- 藤尾慎一郎(2013) 弥生文化像の新構築. 275p, 吉川弘文館.
- 宮地総一郎(2008) 黒色研磨土器. 小林達雄編「総覧縄文土器」: 790-797, アム・プロモーション.
- 中村俊夫(2000) 放射性炭素年代測定法の基礎. 日本先史時代の¹⁴C年代編集委員会編「日本先史時代の¹⁴C年代」: 3-20, 日本第四紀学会.

表2 放射性炭素年代測定および暦年較正の結果

測定番号	$\delta^{13}\text{C}$ (%)	暦年較正用年代 (yrBP ± 1σ)	¹⁴ C年代 (yrBP ± 1σ)	¹⁴ C年代を暦年代に較正した年代範囲	
				1σ暦年代範囲	2σ暦年代範囲
PLD-34470 試料No. 1	-29.12 ± 0.20	3019 ± 24	3020 ± 25	1367-1365 cal BC (1.5%) 1291-1220 cal BC (66.7%)	1386-1340 cal BC (15.3%) 1310-1194 cal BC (79.2%) 1141-1134 cal BC (0.9%)
PLD-34471 試料No. 2	-27.45 ± 0.21	3095 ± 21	3095 ± 20	1410-1381 cal BC (29.7%) 1343-1306 cal BC (38.5%)	1421-1293 cal BC (95.4%)
PLD-34472 試料No. 3	-25.39 ± 0.17	3065 ± 25	3065 ± 25	1389-1338 cal BC (40.0%) 1321-1285 cal BC (28.2%)	1410-1261 cal BC (95.4%)
PLD-34473 試料No. 4	-24.94 ± 0.15	3066 ± 22	3065 ± 20	1389-1338 cal BC (40.6%) 1321-1286 cal BC (27.6%)	1404-1265 cal BC (95.4%)
PLD-34474 試料No. 5	-25.39 ± 0.19	2016 ± 19	2015 ± 20	44 cal BC- 5 cal AD (68.2%)	54 cal BC-30 cal AD (92.0%) 37-51 cal AD (3.4%)
PLD-34475 試料No. 6	-26.92 ± 0.11	2035 ± 19	2035 ± 20	53 cal BC- 2 cal AD (68.2%)	99 cal BC-23 cal AD (95.4%)

Reimer, P. J., Bard, E., Bayliss, A., Beck, J. W., Blackwell, P. G., Bronk Ramsey, C., Buck, C. E., Cheng, H., Edwards, R. L., Friedrich, M., Grootes, P. M., Guilderson, T. P., Hafliðason, H., Hajdas, I., Hatte, C., Heaton, T. J., Hoffmann, D. L., Hogg, A. G., Hughen, K. A., Kaiser, K. F., Kromer, B., Manning, S. W., Niu, M., Reimer, R. W., Richards, D. A., Scott, E. M., Southon, J. R., Staff, R. A., Turney, C. S. M., and van der Plicht, J. (2013) IntCal13 and Marine13 Radiocarbon Age Calibration Curves 0–50,000 Years cal BP. Radiocarbon, 55 (4), 1869–1887.

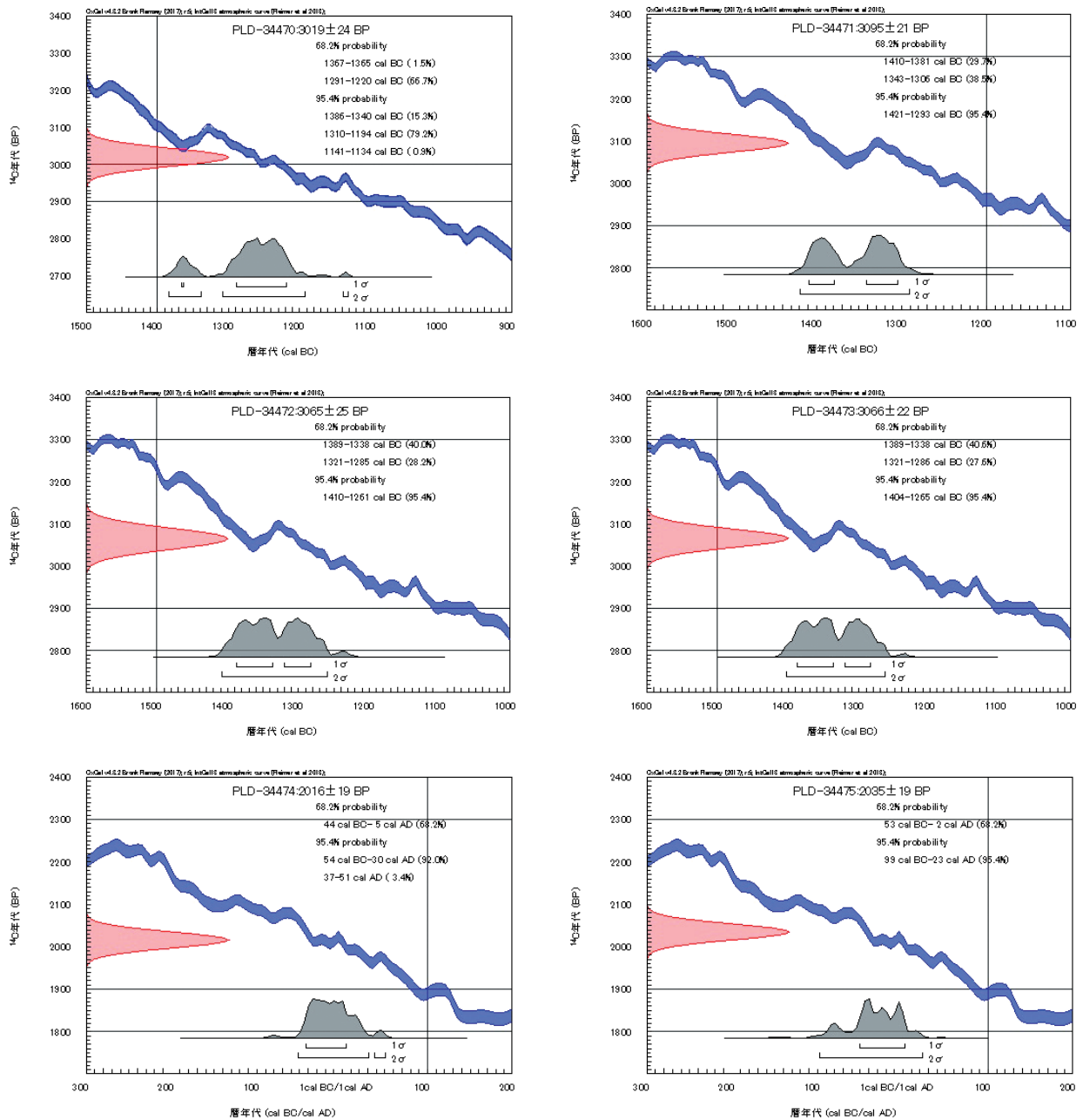


圖 1 曆年較正結果

第2節 町田堀遺跡から出土した炭化種実

佐々木由香・バンダリ スダルジャン (パレオ・ラボ)

1 はじめに

鹿児島県鹿屋市串良町に所在する町田堀遺跡は、標高約90mの笠野原台地の北縁辺部に位置し、串良川が遺跡の北側と東側を蛇行する、縄文時代後期～古代の複合遺跡である。ここでは、縄文時代後期のと推定された竪穴住居跡や埋設土器、土器集中などから出土した炭化種実の同定を行い、当時の利用植物について検討した。なお、一部の試料については放射性炭素年代測定も行われている(放射性炭素年代測定の項参照)。

2 試料と方法

試料は、肉眼で確認・採取された炭化種実2袋(1号住居跡、遺物集中域2)と、放射性炭素年代測定のために抽出された炭化物2点(3号住居跡、中岳Ⅱ式土器近辺)である。遺構の時期は、いずれも縄文時代後期と推定されている。年代測定の結果、3号住居跡と中岳Ⅱ式土器近辺から採取された炭化物は、縄文時代後期後葉～晩期に相当する年代を示した。また、1号住居跡から採取された炭化材も同様の年代を示したため(放射性炭素年代測定の項参照)、炭化種実も同じ時期の試料として扱った。

抽出・同定・計数は、現生標本と比較して、肉眼および実体顕微鏡下で行った。試料は、公益財団法人鹿児島県文化振興財団に保管されている。

3 結果

同定の結果、木本植物のイチイガシ炭化子葉とコナラ属アカガシ亜属(以下、アカガシ亜属)炭化子葉、コナラ属炭化子葉、オニグルミ炭化核、ムクロジ炭化種子の5分類群が得られた。また、科以上の詳細な同定ができなかった不明炭化植物が得られた。これ以外に不明の炭化材も得られたが、同定の対象外とした。同定結果を表1と2に示す。

以下に、出土傾向について試料別に記載する。

1号住居跡：イチイガシとアカガシ亜属、コナラ属、

表1 町田堀遺跡から出土した炭化種実(括弧内は破片数)

試料番号		8	9
試料名		1号住居跡	遺物集中域2
時期		縄文後期後葉 ～晩期	縄文後期
分類群	採取方法	肉眼取上げ	
イチイガシ	炭化子葉	(4)	(1)
コナラ属アカガシ亜属	炭化子葉	(2)	
コナラ属	炭化子葉	≒1※(12)	<1※(7)
オニグルミ	炭化核	(1)	
ムクロジ	炭化種子	(6)	
不明	炭化材	(+)	

+ : 1-9

表2 町田堀遺跡から出土した炭化種実(括弧内は破片数)

試料番号		3	4
試料名		3号住居跡	中岳Ⅱ式 土器近辺
時期		縄文後期後葉～晩期	
分類群	採取方法	肉眼取上げ	
イチイガシ	炭化子葉	1	
不明	炭化植物	(1)	

オニグルミ、ムクロジがわずかに得られた。コナラ属の完形換算個体数は1点であった。

土器集中1号：イチイガシとコナラ属がわずかに得られた。コナラ属の完形換算個体数は1点未満であった。

3号住居跡：イチイガシが1点であった。

中岳Ⅱ式土器近辺：不明炭化植物が1点得られた。

次に、炭化種実の記載を示し、図版に写真を掲載して同定の根拠とする。なお、分類群の学名は、米倉・梶田(2003-)に準拠し、APGⅢリストの順とした。

(1) イチイガシ *Quercus gilva* Blume 炭化子葉 ブナ科

楕円体～長楕円体で、側面観は佞形。先端の突出はあまりない。縦方向に明瞭な溝が1本確認できたが、溝が浅いものや複数あるもの等、変異の幅が大きい。高さ12.4mm、幅8.9mm(PLD-34472)と、高さ12.5mm、幅8.0mm。

(2) コナラ属アカガシ亜属 *Quercus* subgen. *Cyclobalanopsis* 炭化子葉 ブナ科

楕円体。上下端はやや平坦。表面は平滑でやや縦皺があるが、深い溝が認められない一群をアカガシ亜属とした。イチイガシの可能性もある。高さ12.1mm、幅10.2mm。さらに遺存度が悪い個体をコナラ属とした。

(3) オニグルミ *Juglans mandshurica* Maxim. var. *sachalinensis* (Komatsu) Kitam. 炭化核 クルミ科

1/2未満の破片であるが、完形ならば側面観は広卵形。木質で、壁は厚くて硬く、ときどき空隙がある。表面に浅い縦方向の縫合線があり、浅い溝と凹凸が不規則に入る。断面は角が尖る。内部は二室に分かれる。残存高12.0mm、残存幅9.2mm、残存厚5.4mm。

(4) ムクロジ *Sapindus mukorossi* Gaertn. 炭化種子 ムクロジ科

完形ならば球形。上部は突出せず、やや平坦。表面は平滑。線状の着点の痕跡がある。残存長7.5mm、残存幅10.8mm。

(5) 不明 Unknown 炭化植物

いくつかの破片に分かれており、年代測定に用いた試料は残存長16mm、残存幅12.9mm(PLD-34473)。扁平で、いくつかの植物遺体が融着したように見える。一部に同心円状の構造が確認されるため、鱗茎類の可能性が考えられたが、鱗茎に特徴的な細胞は観察されなかった。

4 考察

炭化種実を同定した結果、縄文時代後期の遺構および

縄文時代後期後葉～晩期の遺構からは、食用可能なイチイガシとアカガシ亜属、オニグルミ、ムクロジが得られた。イチイガシは2棟の住居跡と1つの遺物集中域から得られた。イチイガシは生食可能なドングリ類であり、縄文時代の常緑広葉樹林帯では最もよく利用されている(小畑, 2011)。産出した部位は、食べられる部位である子葉であった。ただし、ドングリ類の果皮は薄く、炭化すると取れやすくなるため、果実の状態では炭化したのか子葉の状態では炭化したのかは不明である。今回は肉眼で確認され、採取された試料であったため検証は難しいが、土壌ごと取り上げて乾燥篩がけを行うか、もしくは土壌水洗を合わせて行くと、果皮の残存の有無を確認できる可能性がある。なお、状態が悪く、コナラ属アカガシ亜属とコナラ属の同定に留めた個体もイチイガシの可能性はある。

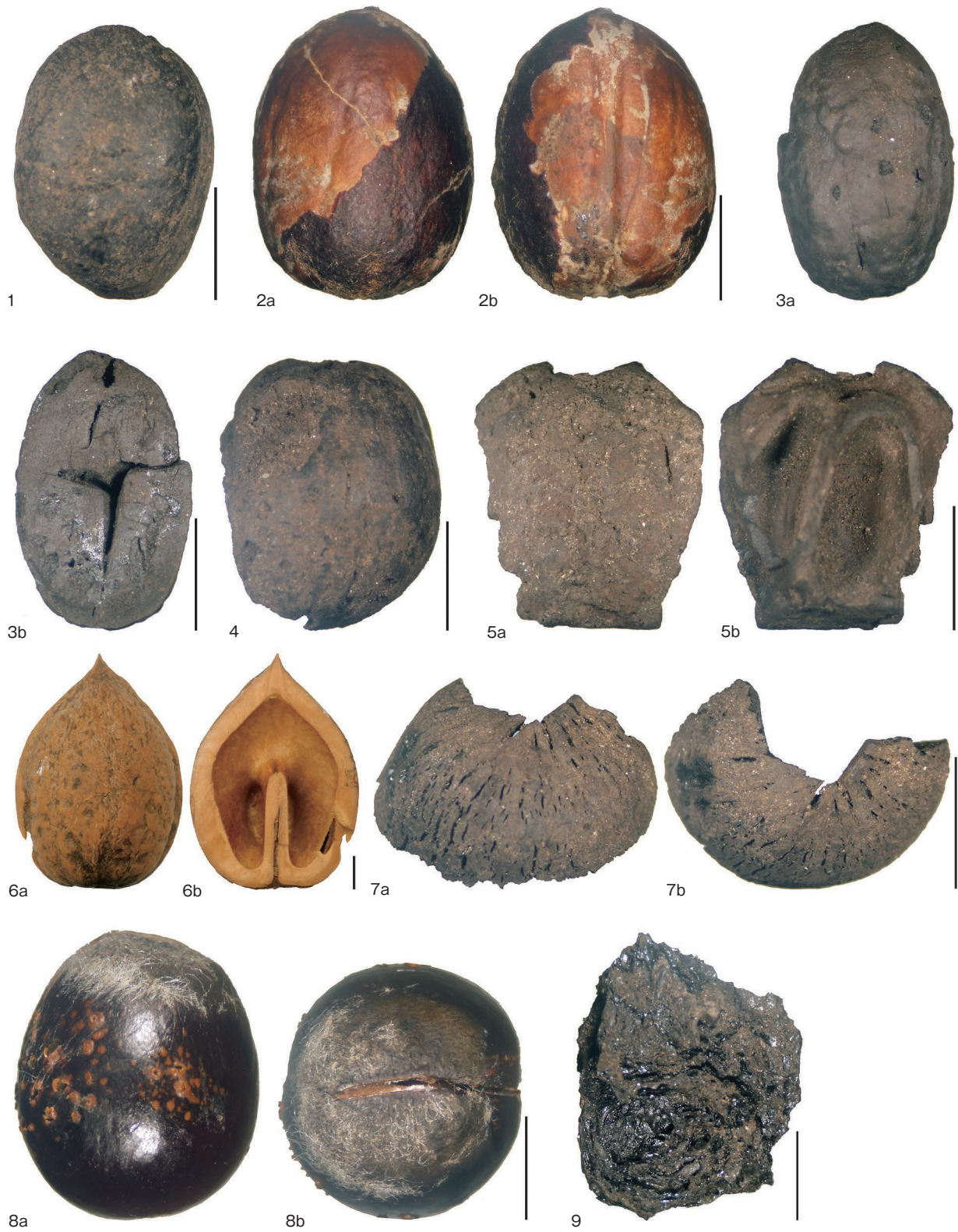
ムクロジはアクの成分であるサポニンが含まれているが、種子を煎って食べることもできる。ムクロジは近現代の民俗例で洗剤や薬用としても用いられている(長沢, 2012)。今回、住居跡から炭化した状態で得られたため、何らかの用途に利用されたと考えられる。

中岳Ⅱ式土器近辺から見出された炭化物は、土器に付着したような扁平な炭化植物遺体ではあった。一部が同心円状の構造を呈するため、鱗茎類の可能性が考えられたが、鱗茎に特徴的な細胞は観察されなかったため、科以上の詳細な同定はできなかった。

今回検討したのは肉眼で取り上げられた炭化種実のみであったが、野生植物で利用可能な堅果類が確認され、同定できた個体は遺存状態も良好であった。今後、炉やその周辺など、炭化種実が堆積しやすい土壌中に含まれる微細な炭化種実もあわせて検討すれば、当時の食生活や利用植物について、より具体的に明らかにできると考えられる。

引用文献

- 長沢 武 (2012) 野外植物民俗事苑. 443p, ほおずき書籍.
- 小畑弘己 (2011) 東北アジア古民族植物学と縄文農耕. 309p, 同成社.
- 米倉浩司・梶田 忠 (2003-) BG Plants 和名-学名インデックス (YList), <http://ylist.info>



スケール 1-9:5mm

図版1 町田堀遺跡から出土した炭化種実

1. イチイガシ炭化子葉 (3号住居跡, No. 3, PLD-34472), 2. イチイガシ子葉 (現生:大分県), 3. イチイガシ炭化子葉 (1号住居跡, No. 8), 4. コナラ属アカガシ亜属炭化子葉 (1号住居跡, No. 8), 5. オニグルミ炭化核 (1号住居跡, No. 8), 6. オニグルミ核 (現生:東京都), 7. ムクロジ炭化種子 (1号住居跡, No. 8), 8. ムクロジ種子 (現生:東京都), 9. 不明炭化植物 (中岳Ⅱ式土器近辺, No. 4, PLD-34473)

第3節 町田堀遺跡出土炭化材の樹種同定

黒沼保子（パレオ・ラボ）

1 はじめに

鹿児島県鹿屋市に所在する町田堀遺跡から出土した炭化材の樹種同定を行った。なお、一部の試料については放射性炭素年代測定も行われている（放射性炭素年代測定の項参照）。

2 試料と方法

試料は、古墳時代～古代？と推定されている弥生1号住居跡と、弥生時代中期と推定されている弥生遺物集中域、縄文時代後期と推定されている1号住居跡から出土した炭化材で、計6点である。

樹種同定に先立ち、肉眼観察と実体顕微鏡観察による形状の確認と、残存年輪数および残存径の計測を行った。その後、カミソリまたは手で3断面（横断面・接線断面・放射断面）を割り出し、直径1cmの真鍮製試料台に試料を両面テープで固定した。次に、イオンスパッタで金コーティングを施し、走査型電子顕微鏡（KEYENCE社製 VE-9800）を用いて樹種の同定と写真撮影を行った。

3 結果

樹種同定の結果、広葉樹のクスノキ、クスノキ科、クリ、クマノミズキ類、ツバキ属の5類群が確認された。結果の一覧を表1に示す。

以下に、同定根拠となった木材組織の特徴を記載し、走査型電子顕微鏡写真を図版に示す。

(1) クスノキ *Cinnamomum camphora* (L.) J. Presl
クスノキ科 図版1 1a-1c (No. 6)

やや大型の道管が単独ないし2～4個複合して散在し、晩材部で徐々に径を減じる半環孔材である。軸方向柔組織は周囲状～翼状となる。道管の穿孔は単一である。放射組織は異性で、1～3細胞幅で大型の油細胞がある。

クスノキは亜熱帯から暖帯に分布する常緑高木である。材は、やや軽軟なものから中庸程度まで幅があるが、切削加工は容易で、耐水性や耐朽性、耐虫性は極めて高い。

(2) クスノキ科 Lauraceae 図版1 2a-2c (No. 7-1)

表1 樹種同定結果一覧

試料番号	遺構名	樹種	形状	年代測定番号
5	弥生1号住居跡	ツバキ属	破片	PLD-34470
6	弥生遺物集中域	クスノキ	破片	PLD-34471
7-1	1号住居跡	クスノキ科	破片	-
7-2		クリ	破片	-
7-3		ツバキ属	破片	-
7-4		クマノミズキ類	破片	-

やや小型の道管が、単独ないし2～4個複合してまばらに分布する散孔材である。軸方向柔組織は周囲状～翼状となる。道管の穿孔は単一である。放射組織は異性で、1～3列幅である。

クスノキ科は熱帯から温帯に分布する常緑または落葉の高木もしくは低木である。ニッケイ属やタブノキ属、クロモジ属など8属がある。

(3) クリ *Castanea crenata* Siebold et Zucc. ブナ科
図版1 3a-3c (No. 7-2)

大型の道管が年輪のはじめに数列並び、晩材部では薄壁で角張った小道管が火炎状に配列する環孔材である。軸方向柔組織はいびつな線状となる。道管の穿孔は単一である。放射組織は同性で、主に単列である。

クリは暖帯から温帯下部に分布する落葉高木である。材は重硬で、耐朽性および耐湿性に優れ、保存性が高い。

(4) クマノミズキ類 *Cornus cf. macrophylla* Wall.
ミズキ科 図版1 4a-4c (No. 7-4)

やや小型で丸い道管が、単独で分布する散孔材である。道管の穿孔は20段程度の階段状である。放射組織は3～4列幅で、縁辺部に方形もしくは直立細胞が2～4細胞ある異性である。以上の特徴からクマノミズキかヤマボウシと思われるが、これ以上の同定は困難であるため、クマノミズキ類とした。

クマノミズキおよびヤマボウシは暖帯から温帯に分布する落葉中高木である。材はやや硬いが一般に加工は容易である。

(5) ツバキ属 *Camellia* ツバキ科 図版1 5a-5c (No. 5)

小径の道管がほぼ単独で密に分布する散孔材で、晩材に向けてやや径を減じる。道管の穿孔は10段程度の横棒からなる階段状である。放射組織は方形もしくは直立細胞が上下に2～4細胞連なる異性で、1～3列幅程度、多列部が単列部と同じ大きさである。

ツバキ属は温帯から暖帯に生育する常緑高木もしくは低木である。ヤブツバキやサザンカ、チャノキなどがある。材は重硬および緻密で、切削加工および割裂は困難であるが、強靱で耐朽性は大きい。

4 考察

弥生1号住居跡から出土した炭化材は、ツバキ属であった。調査所見では古墳時代～古代？と推測されていたが、年代測定の結果、炭化材は弥生時代中期後葉～後期前半の暦年代を示した。

弥生遺物集中域から出土した炭化材は、クスノキであった。調査所見では弥生時代中期の遺構と推測されており、炭化材の年代測定でも弥生時代中期後葉～後期前半の暦年代を示した。

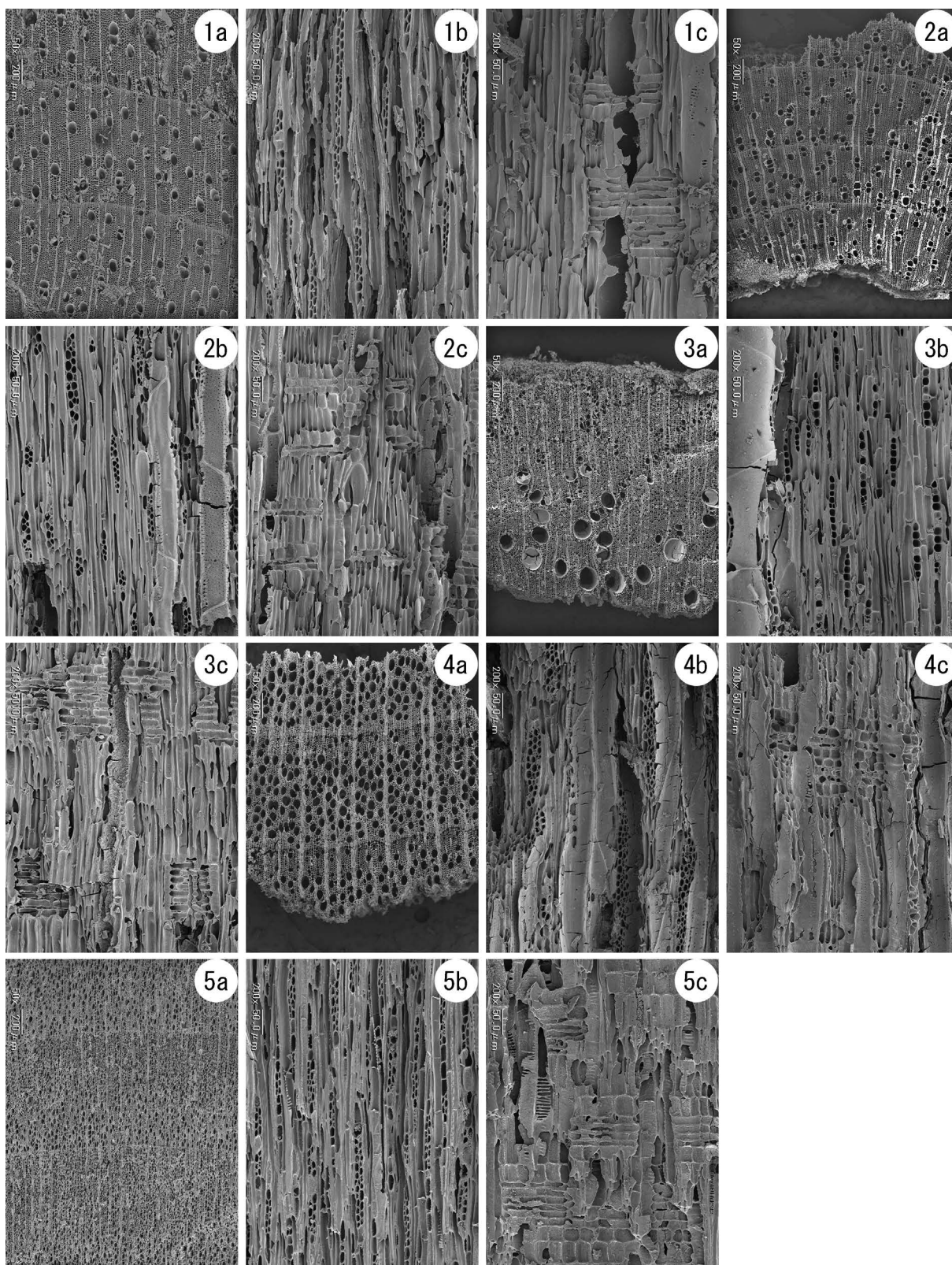
1号住居跡から出土した炭化材では、クスノキ科とク

り、ツバキ属、クマノミズキ類の4分類群がみられた。遺構の時期は、調査所見から縄文時代後期と推定されている。

いずれも試料の用途は不明であるが、住居跡の炭化材は建築部材や燃料材、器具材など、土器集中の炭化材は燃料材の可能性が考えられる。今回の分析で確認された樹種は、いずれも常緑広葉樹林帯に分布する樹木であり、遺跡周辺に生育していた樹木が利用されたと推測される。

参考文献

- 平井信二（1996）木の大本科. 394p, 朝倉書店.
伊東隆夫・山田昌久編（2012）木の考古学－出土木製品
用材データベース－. 449p, 海青社.



図版1 町田堀遺跡出土炭化材の走査型電子顕微鏡写真

1a-1c. クスノキ (No. 6), 2a-2c. クスノキ科 (No. 7-1), 3a-3c. クリ (No. 7-2), 4a-4c. クマノミズキ類 (No. 7-4), 5a-5c. ツバキ属 (No. 5)

a: 横断面, b: 接線断面, c: 放射断面

第4節 町田堀遺跡出土の赤色顔料について

鹿児島県立埋蔵文化財センター 武安雅之

1 試料

3号地下式横穴墓内から出土した赤色顔料塊

2 観察・分析方法

(1) 形状観察

以下の機器を使用して、形状を観察し撮影を行った。

双眼実体顕微鏡（ニコン製 SMZ1000）による

10～80倍観察

金属顕微鏡（ニコン製 ECLIPSE L150）による

100～200倍観察

(2) 成分分析

エネルギー分散型蛍光X線分析装置（堀場製作所製 XGT-1000, X線管球ターゲット：ロジウム, X線照射径 100 μ m）を使用し、次の条件により分析を行った。

X線管電圧：15/50kV 電流：自動設定

測定時間：200秒 X線フィルタ：なし

試料セル：なし パルス処理時間：P3

定量補正法：スタンダードレス

3 結果

試料の蛍光X線分析スペクトルチャート（成分分析）と FPM 定量結果、金属顕微鏡による形状観察結果の1例である。

(1) 玄室左側

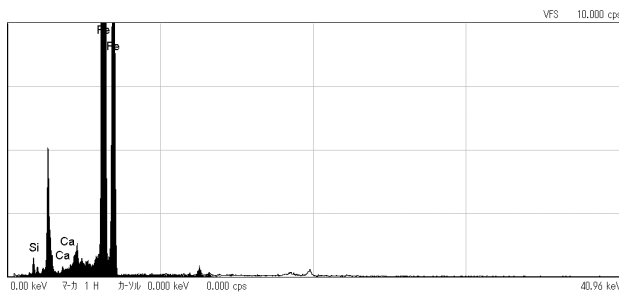


図1 スペクトルチャート

表1 FPM 定量結果

元素	ライン	強度(cps/mA)	質量濃度(%)
ケイ素	K	8.97	2.39
カルシウム	K	2.66	0.11
鉄	K	11670.44	97.51

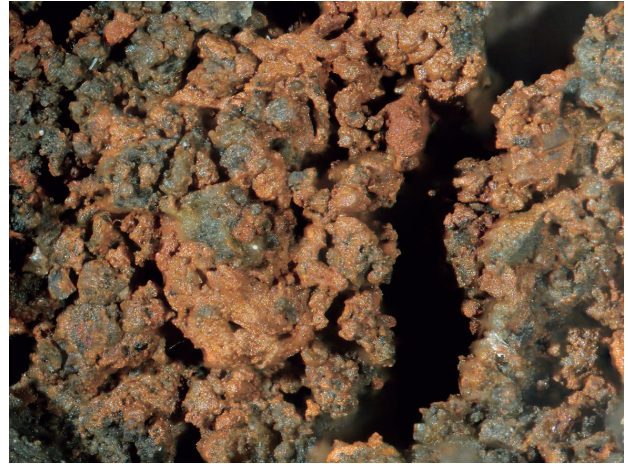


図2 形状観察結果（双眼実体顕微鏡）



図3 形状観察結果（金属顕微鏡）

(2) 玄室中央

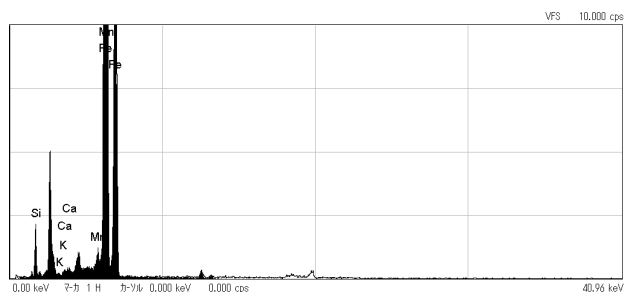


図4 スペクトルチャート

表2 FPM 定量結果

元素	ライン	強度(cps/mA)	質量濃度(%)
ケイ素	K	20.29	6.31
カリウム	K	2.21	0.14
カルシウム	K	1.12	0.06
マンガン	K	22.44	0.21
鉄	K	9382.15	93.28

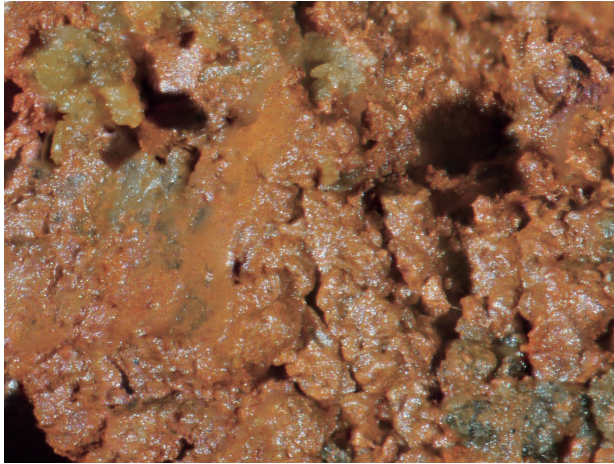


図5 形状観察結果（双眼実体顕微鏡）



図6 形状観察結果（金属顕微鏡）

4 考察

蛍光X線分析の結果から、鉄（Fe）の強いピークが見られる。また、形状観察の結果から針状結晶が多数見られる。これらのことから、この赤色顔料は鉄（Fe）を主な成分とするパイプ状ベンガラの可能性が高い。

第6章 総括

第1節 発掘調査の成果

平成26年度以降の町田堀遺跡の調査をもとに、各時代の成果を概観してみたい。なお、平成25年度調査の成果（註1）も適宜織り込むことにより、町田堀遺跡の全体像を浮かび上がらせていきたい。

1 縄文時代早期

町田堀遺跡での最も古い遺構・遺物は縄文時代早期のものである。本遺跡の西側の台地縁辺で20基の集石遺構が検出された。集石遺構は、平成27年度に調査を行った第1調査区の中でも西側に寄った地域、なかんづく北側部分と、平成28年度に調査を行った第3調査区の中央部付近に位置していた。この遺構の立地を考える場合に参考となるのはⅨ層上面のコンターである。それによると、第1地点の北側のほぼ中央部に径5m程度の凹みが見られ、その凹みを取り囲むように集石遺構が所在し、南側の低くなった部分には見られない。また、第3地点では、調査区のほぼ中央の最も高い部分よりも一段低い南東側に列状に所在し、北側の急傾斜で谷に向かって下がる部分には見られない。これらのことから、最高所を避けて、それほど急傾斜でない比較的安定した場所に設けていることがわかる。

この遺構の構成礫数は、平均で53.4個、多いものは225個であった。また、明確な掘り込みが見られるものではなく、平坦に置かれたような状況である。礫の広がる範囲は50cmから4m程度と差が大きい。高低差は10cmから20cm程度である。炭化物やタールの付着はあまり見られなかった。熱破碎礫や赤色化した礫がそれほど多くない、平坦地に集まっていることなどから、調理場として活用された場所か、調理場の使用前後の礫を集めた場所かは明確にできなかった。なお、使用された礫は、安山岩や砂岩が多かった。

次に、この時期の土器について見てみよう。縄文時代早期の土器は、第4章第1節で述べたように、1類から3類に分類した。1類土器は円筒形平底の土器で、口唇部は丸みを持つ。外面は全体が貝殻条痕によって施文されている。口縁部付近は横方向、それより下部は右下がりの地文の上に重ねて左下がりの条痕文を間隔を置いて施している。内面はナデ調整である。円筒形条痕文土器とか中原式土器とか呼ばれているものである。

2類土器も円筒形平底の土器である。口縁部は直立あるいは内湾し、口唇部は丸みを持つものと平坦面をなすものがある。外面にはさまざまな文様の貝殻刺突文が付され、内面はナデ調整である。下剥峯式土器と考えら

れる。同じ系統として、外面に単節の斜縄文が施され、内面にはミガキの見られるものもあり、それらは桑ノ丸式段階のものと考えられる。

3類土器は円筒形平底で、口縁部がラッパ状に外反する土器である。外面に沈線と撚糸文が施されるもの、貝殻刺突文や貝殻条痕文、沈線の間を撚糸文で満たすものなどがある。中には貝殻押引文の見られるものもある。内面は丁寧なナデである。塞ノ神式土器と考えられる。

図示した石器は遺構内出土の遺物も含め、石鏃25点、部分磨製の尖頭状石器1点、彫器1点、搔器3点、楔形石器1点、加工痕・使用痕のある剥片5点、石核3点、磨製石斧4点、打製石斧5点、剥片1点、礫器2点、磨・敲石類（蜂の巣石1点含む）18点、石錘8点、砥石類6点、石皿2点の計85点である。

石鏃は浅い凹基の三角形鏃、鋏形鏃が多く、サヌカイト類似の緻密な安山岩、チャート、珪質頁岩、黒曜石Ⅲ類（熊本県人吉市桑ノ木津留産）、黒曜石Ⅷ類（大分県姫島産）が利用されている。

彫器、搔器、楔形石器などその他の小型剥片石器には、黒曜石Ⅰ類（薩摩川内市上牛鼻・いちき串木野市平木場産）、黒曜石ⅡC類（鹿児島市三船産）、珪質頁岩、チャートなどが利用されている。

磨製石斧は扁平小型の刃部磨製石斧が主体で、小型の鑿状のものもある。いずれも10cm未満の小型品で加工具とみられ、伐採具とみなしうる資料がない。打製石斧としたものは、磨製石斧の未製品等の可能もある。いずれもホルンフェルス製である。

磨・敲石類は、自然円礫を利用するものが多い。石材は粗面の安山岩がほとんどで、花崗岩、砂岩が各1点のみ含まれる。

石錘はいずれも粗略な打ち欠きの石錘で、安山岩、砂岩、ホルンフェルスの扁平な亜円礫を用いている。

2 縄文時代後期・晩期

後・晩期の遺構としては、竪穴住居跡4軒、埋設土器3基、土坑22基、石器集積遺構1基、石斧を多く含む遺物集中域1か所が検出された。この時期の広がりには、第1調査区から第2調査区までまんべんなく及ぶが、特に西側からは遺構が密に検出された。

竪穴住居跡は第1地点の西側で2軒、東側で1軒、第2地点で1軒それぞれ検出された。円形や楕円形を呈しており、1号住居跡が2.55m×2.53mのほぼ円形で、5類の中岳Ⅱ式を多く含む遺物が出土した。竪穴の内外からは柱穴を確認することができなかった。2号住居跡

は3.50(+ a)m×3.41 mの楕円形である。遺物の出土も多かったが、土器のほとんどは5類の中岳Ⅱ式である。竪穴内に1基のピット、竪穴住居を囲むように5基のピットが検出されたが、竪穴住居に伴うものか否かは明確にできなかった。3号住居跡は3.2 m程度の円形を呈すると考えられる。3軒の住居跡から出土した土器から、これらは、後期中岳Ⅱ式期の所産と考えられる。それに対して4号住居跡は2.25 m×1.80 mの楕円形である。柱穴もなく、深さもわずか9 cmである。遺構内出土の土器はなかったが、埋土の状況よりこの期の竪穴住居跡と判断した。

3基の埋設土器は、いずれも掘り込みの底面に若干の余裕があるものの、胴部付近は、ぴったりと納まるように埋設されていた。残念ながら、後世の耕作等により口縁部など土器上部を欠くものも見られた。これらの土器は、肥厚した口縁部に沈線が1条巡ることと、胴部の屈曲部の上部に1条の沈線の巡るものと見られないものがあることなどから、5類の中岳Ⅱ式土器と考えられ、時期も縄文時代後期と考えられる。

22基の土坑は大きく4つのタイプに分類でき、それらはさらに2つに分けられるものもある。a類は縦横長に比較して深さが相対的に浅いもの、b類は縦横長と深さが相対的にほぼ同じのもの、c類は縦横長と比較して深さが相対的に深く、柱穴状の断面形状を呈するもの、d類は縦横長に比較して深さが相対的に浅く、全体形状が皿状や不定形のものである。

a類は8基が含まれる。深さは10~30 cmである。b類は4基が含まれる。深さは40~70 cm程度である。c類は5基が属する。深さは40~50 cm程度である。d類は5基が含まれる。深さは5~15 cm程度である。これらの土坑の埋土中から出土した土器が中岳Ⅱ式土器であることから、これらの土坑はこの時期の遺構と捉えておきたい。

石器集積遺構は、2.26 m×1.90 mの広がりを持ち、高低差は20 cmほどである。掘り込みは見られない。形態的には大小2つの集中域からなっており、礫構成には自然礫の割合が少なく、石皿や台石、磨石、敲石、石斧などの石器片が多いことが大きな特徴である。

石斧がまとまって出土した集中域(註2)が1か所検出された。石斧だけが集積していたのではなく、土器や礫などが集中して出土した中に、石斧が列状に見られたものである。1.75 m×1.56 mの範囲に広がっており、高低差は約26 cmである。全てが石斧というわけではなく、破碎した自然礫や磨石、土器などの中に、幅約0.6 m、長さ約2 mの北西-南東の帯状の範囲にあり、北西端と南東端にそれぞれまとまっている状況であった。検出の状況からは、意図的なものが感じられる。打製石斧が6点出土し、内訳は撥形のもの4点、短冊形1点、靴

形1点、スクレイパー2点それに磨・敲石1点であった。このほかに、土器が合わせて105点出土している。土器はいずれも中岳Ⅱ式であることから、これもその時期のものと考えられる。

土器は、後期・晩期のものを合わせて4類~7類に分類した。4類土器は、外面の口縁部下部あるいは胴部にかけて沈線を付す深鉢で、鈎手状繋ぎ文などから考えて指宿式に比定できる。

5類土器は、深鉢は胴部から口縁部にかけて全体的に外反し、口縁部は肥厚して内湾・直行、あるいは外反する。口唇部は平らに面取りされたものが多く、口縁部の内面に明瞭な段のあるものとなないものがある。口縁部に沈線の巡るものや刺突文・凹点のあるもの、無文のものなどがある。胴部は張り、胴部の屈曲部の上部に沈線が付されるものもある。底部には平底のほか、上げ底も見られる。浅鉢も口縁部は外反し、胴部が張り、底部は平底であることから、概ね中岳Ⅱ式土器に比定できる。本遺跡の中心をなすものである。

6類土器は器壁が薄く、口縁部が大きく外反し、胴部にかけては大きく膨らむ浅鉢である。黒川式土器に比定できる。数は少ないが、非常に精緻な作りである。

7類土器は口縁部に突帯が付くもので、突帯に刻目が見られるものもあり、一つの類型としてまとめた。刻目突帯文土器と考えられる。

これらのほかに、土器片の周囲を円形に加工した円盤状土製加工品も10点ほど出土した。

3 弥生時代

遺構や遺物の広がる範囲は第1調査区に限られており、中でも東側の遺構密度が濃く、相対的に西側は薄いといえる。検出された遺構は、竪穴住居跡2軒、掘立柱建物跡1棟、土坑1基である。

竪穴住居跡のうち第1調査区の西側で検出された1号住居跡は、2.44 m×2.18 mの隅丸方形で、大量の遺物が出土した。深さ50 cmほどの4本の支柱穴を持ち、3方向にベッド状の張り出しがある。一段低い中央部には大型の土坑が見られる。東側の2号住居跡は2.11 m×1.74 mの小型の遺構で、竪穴内部と周囲には柱穴は見られないが、竪穴内に土坑が見られる。両住居跡は60 mほど離れている。時期は、1号住居跡から出土した土器が中津野式土器であることから、少なくともこの住居跡は弥生時代後期の終末に位置づけられる(註3)。

この2基については本文中でも示したように、検出面が低いことから、本来はまだ周囲に広がりがあった可能性も考慮しておきたい。

掘立柱建物跡は、第1調査区の東端で検出された。検出された部分は1間×2間であるが、柱穴が調査区域外に延びる可能性が考えられる。2号竪穴住居跡の10 m

ほどの場所に位置していることから、2つの遺構の間には何らかの関連性があることも考えられる。

土坑は1基検出された。場所は第1調査区の東側で、Ⅱ層中で検出された掘立柱建物跡が集まる区域である。2.06 m×1.30 mの楕円形であり、深さは32cmである。

遺物が集中して出土した場所があり、遺物集中域として捉えた。山ノ口式土器の甕や鉢、壺などとともに砥石や磨石が出土したことから、調査に際しては竪穴住居跡の可能性を考えたが、明確な掘り込みがなかったことから、遺構としては認定できなかった。

土器は、甕形土器、鉢形土器、壺形土器のほか、土製品として土製勾玉が出土した。

甕形土器は、口縁部や口縁部の下部に刻目突帯の付くものが見られる。口縁部は外反ないし内湾しており、定期的な差異のあることが考えられる。刻目のない突帯も見られる。前期に位置づけられる可能性が大きい。次に、逆「L」字状の口縁部を持つものがあり、引き続いて「く」の字状の口縁部を有するものが見られる。逆「L」字状、「く」の字状のものともに口唇端部が浅く凹んでいるものとそうでないものの両方が見られる。胴部に細い沈線が巡るものや、頸部を含めて三角突帯が巡るものも見られる。底部は充実した脚台を持つものである。また、「く」の字状の口縁部を持つものには、大型の甕形土器もある。

鉢形土器は、口縁部あるいはその下部に突帯を巡らすもので、口縁部は直立のほか、外反、内湾するものなど、変化に富む。

壺形土器にはいくつかのタイプが見られる。1つは口縁部が逆「L」字状に折れ曲がったもの、もう1つは大きく外反した口縁部の口唇端部が浅く凹んでいるもの、いま1つは小さく外反した口縁部を持つものである。逆「L」字状のものの中には、口唇部に刻目や沈線、櫛描波状文が描かれるものも見られる。胴部上部に、幾重もの沈線や波状の沈線が描かれるものもある。そのほかにも、頸部や胴部に沈線で文様が描かれているものもある。また、胴部の上部に三角突帯が付されているものも見られる。底部は、基本的には安定した平底で、脚台気味に厚いものや若干上げ底となるものもある。

これらの土器は弥生時代中期に位置づけられるもので、逆「L」字状の口縁部を持つ甕形土器は入来式土器、「く」の字状の口縁部を持つ甕形土器や壺形土器・鉢形土器の大半は山ノ口式土器（註4）であると考えられる。

1点出土した土製勾玉は尾部を欠くが、頭部は丁字頭であり、全体的に丁寧な作りの整ったものである。2kmほど西側に位置する田原迫ノ上遺跡（註5）から出土しているものと、極めて類似している。

4 古墳時代

古墳時代の遺構や遺物が検出された範囲は第2地点を中心とする。この区域は、平成25年度に調査が行われ、地下式横穴墓や円形周溝墓、溝などが集中して検出された部分の隣接地である。遺構は、地下式横穴墓4基、溝4基（平成25年度に検出されていたものを含む）のほか、破碎された土器片が集中して出土した祭祀に係わると考えられる遺構（土器破碎祭祀遺構）も見つかった。

1号地下式横穴墓は市道部分で検出されたが、道路の敷設工事により大部分は破壊されており、残存部分はごくわずかであった。それでも竪坑部分と玄室部分が明確に検出されたことの意義は大きいと考えられる。狭い羨道も検出され、玄室は平入りで極めて小規模なものであることが判明した。竪坑は0.53 m×0.32 m、羨道は0.47 m×0.20 m、玄室は1.48 m×0.7 mであった。玄室内から鉄製の刀子が1点出土した。2号地下式横穴墓は、竪坑が2.08 m×1.13 m、玄室は2.10 m×1.32 m、平入りで竪坑と玄室がほぼ平行な作りといえ、羨道は確認できない。3号地下式横穴墓は竪坑が1.27 m×0.62 m、玄室は1.12 m×0.58 mで、床面は竪坑の最下部よりも13cmほど高い位置に、段を設けるようにして作られている。玄室中央から南側にかけて見られた赤色顔料は、分析の結果、パイプ状ベンガラであることが判明した。4号地下式横穴墓は、竪坑は1.95 m×1.20 m、羨道は0.96 m×0.56 m、玄室は2.03 m×0.60 mであった。玄室の天井は約30cmと極めて低い。

4基検出された溝のうち、平成25年度の調査で確認されていたのは1号溝と2号溝であり、そのうちの2号溝は地下式横穴墓を間に挟んだ状態で検出されたことから、A・B2つに分岐した溝としてとらえられていた。平成28年度の調査で、地下式横穴墓を挟みながらも一連の溝として繋がったことから、一つの溝として改めて2号溝と呼称することとした。

1号溝は、平成25年度の調査で1号溝状遺構として掲載されていたが、今回、平成28年度の調査でこの溝の2つの端が確認されたことになる。溝の南側端の部分の埋土の中ほどから壺形土器が出土した。2号溝の西側は市道の敷設工事によって失われている。今回検出した南側の埋土中ほどから、2点の壺形土器がほぼ完全に復元される形で出土した。この中の1点の中ほどには穿孔が見られ、意図的に開けられたものと考えられる。3号溝は南側の端は確認されたものの、西側は市道の敷設工事により失われている。南側の端付近では、2か所の埋土中から壺形土器と鉢形土器が出土している。4号溝は1号溝の南側に隣接しており、北側の端部が検出されたものの、大部分は市道の敷設工事により失われている。

1号溝の南側から4号溝の東側端部にかけての上部で、土器片がまとまって出土した。これらの土器片は器

壁が一様に厚く小片の土器が多かったため、接合により完全に復元することはできなかったが、図上では大型の壺形土器として復元することができた。大型の壺形土器を中心とした意図的破碎が考えられたことから、平成25年度調査でも検出された土器破碎祭祀遺構として捉えておきたい(註6)。この遺構は、土器片群の下部や近辺に地下式横穴墓が見られないことから、墓域全体に対して行われた祭祀である可能性も考えられる。

土器は、甕形土器、鉢形土器、壺形土器のほか、高坏や手捏ね土器も出土した。

甕形土器は、口縁部が外反し、口唇端部が丸みを帯びていたり、平らに面取りされていたり、中央部が幾分凹んでいたりするなど変化が見られる。内面には明確な稜が見られるものと鈍い稜のあるものがある。器面調整にはハケ目調整が多く見られ、外面には頸部から口縁部に向けてハケ目を跳ね上げて調整するものもあり、東原式土器の特徴といえる(註7)。頸部のやや下部に絡縄状突帯が巡るものも見られる。底部は中空脚台の付くもので、低い上げ底から高い上げ底まで見られる。

鉢形土器は、甕形土器に類似するものとそうでないものがある。甕形土器に似ないものは、口縁部が大きく開くものやコップ形のものがある。手捏ね土器は、鉢形土器を模したものが多いように感じられる。

壺形土器は、口縁部がそれほど広がらずに長く立ち上がるものと、大きく広がるものが見られる。底部は丸底や丸底気味の狭い平底が多く、全体的な形状は砲弾型となるものと、球形状となるものがあるほか、高さの割に胴部が大きく膨らむものなどがある。胴部に、板による刻目を付す突帯や沈線の見られるものもある。

高坏は、坏部が比較的浅く、口縁部が外反するものである。内面に鈍い稜の見られるものがあるほか、外面に明確な稜を持ち、口縁部が内湾気味に外反するものも見られる。1点のみの出土であるが、裾広がり気味の脚部には3か所に孔が開けられている。

5 古代以降と時期不詳の遺構・遺物

Ⅱ層をベースとした埋土を有し、Ⅲ層上面以下で検出された遺構として、掘立柱建物跡5棟と道跡1条がある。

5棟の掘立柱建物跡は、1棟が1間×3間の建物で、それ以外の4棟は2間×2間の総柱建物である。また、その4棟のうち2棟には、中央部または両側部に複数の柱穴があり、同時併存であるのか建て替えであるのか、同時併存であった場合でも、いずれかが東柱であったのか、または、屋根の加重を考えて柱を2本にして重圧の拡散を図ったのか、不明である。

1号掘立柱建物跡は2間×2間の総柱建物であり、東側及び西側の柱穴が2基ずつ見られる。5棟の掘立柱建物跡の中で、この1棟のみ柱筋がほぼ東西方向で、ほか

の建物とは異なっている。柱間の距離は、東西方向の中央の列をもとにすると東側の手前のものまで1.55 m～1.71 m、奥のものまで1.84 m～1.90 m、西側の手前のものまで1.65 m～1.82 m、奥のものまで1.90 m～2.02 mとなる。また、南北方向は1.48 m～1.67 mとなる。

2号掘立柱建物跡も2間×2間の総柱建物であるが、柱筋が1号掘立柱建物跡とは異なり、他の3号～5号とほぼ同じである。柱間の距離は、東西方向の中央の列をもとにすると、東側で1.88 m～2.03 m、西側で1.75 m～1.92 mとなり、南北方向は1.83 m～2.22 mとなる。

3号掘立柱建物跡も2間×2間の総柱建物で、2号などと柱筋を揃えている。東西方向の中央部にそれぞれ2基ずつの柱穴が見られる。東西方向の中央の列をもとにすると、東側で1.76 m～2.00 m、西側で1.96 m～2.13 mとなり、南北方向は1.73 m～1.96 mとなる。

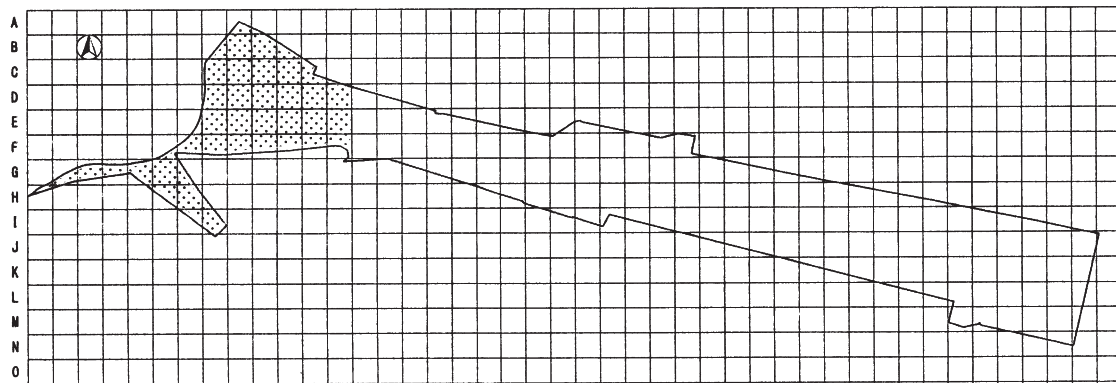
4号掘立柱建物跡も2間×2間の総柱建物で、2号などと柱筋を揃えている。東西方向の中央の列をもとにすると、東側で1.33 m～1.38 m、西側で1.36 m～1.47 mとなり、南北方向は1.55 m～1.65 mとなる。

5号掘立柱建物跡は1間×3間の建物で、1号を除く2～4号建物と東西方向の柱筋を揃えているように思われる。また、4号に近接して建てられている。柱穴の位置関係には、若干、揃わないところも見られる。また、パイプの敷設工事によるものと思われる掘削により、柱穴が検出できなかったところもある。柱間の距離は、北側で1.12 m～1.30 m、南側で1.15 m～1.80 m(検出されなかった部分の推定値は除く)となり、南北方向は推定値も含め2.40 m～2.5 mとなる。

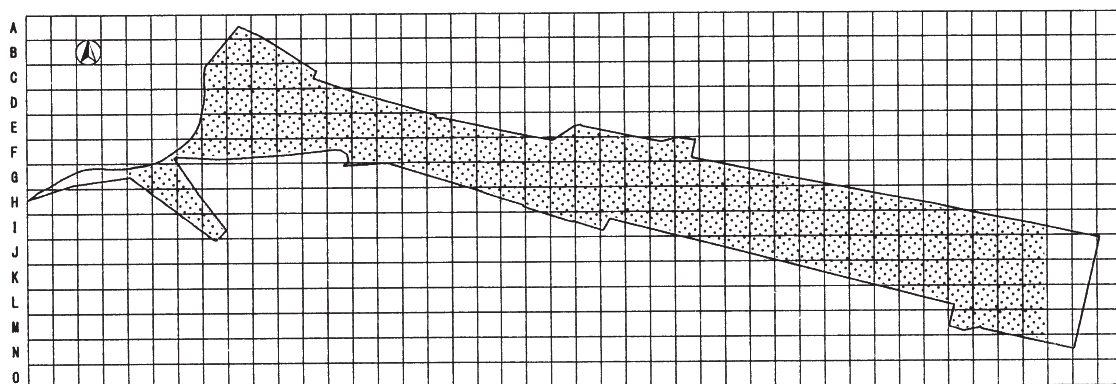
この掘立柱建物跡の配列は、1号が柱筋が異なっているものの、それ以外の建物は同じである。総柱建物間の距離は2号～3号間約5.3 m、2号～4号間約5.6 mとほぼ等距離にあるとみなして良い。4号と5号の間は約1.1 mほどであるが、この2種類の建物は、形状から機能が異なるものと考えられる。5号以外の建物が全て総柱建物であることは、この掘立柱建物跡群の特色である。また、1～3号については、柱穴列が複数になっている。発掘調査時は、どの建物跡も建て替えという解釈であった。しかし柱穴の深さや位置関係等を考慮すると、2号は建て替えの可能性が残るものの、1号と3号は重複する柱穴は添え柱になると判断した。これらの総柱の建物跡は倉庫群、5号建物跡は、それを管理する建物として捉えることも可能であろう。

これらの掘立柱建物跡の時期については、検出面が低いということもあり明確ではない。柱穴の埋土のベースとなるⅡ層は、縄文時代後期から古代までの遺物包含層であることから、ここではその時間幅を考慮しておきたい。ただし、住居内出土の土器はほぼ中岳Ⅱ式土器期の

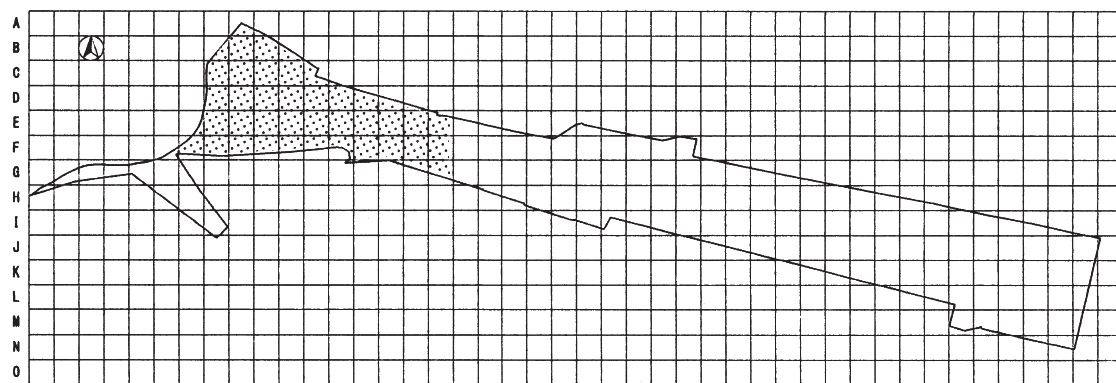
縄文時代
早期



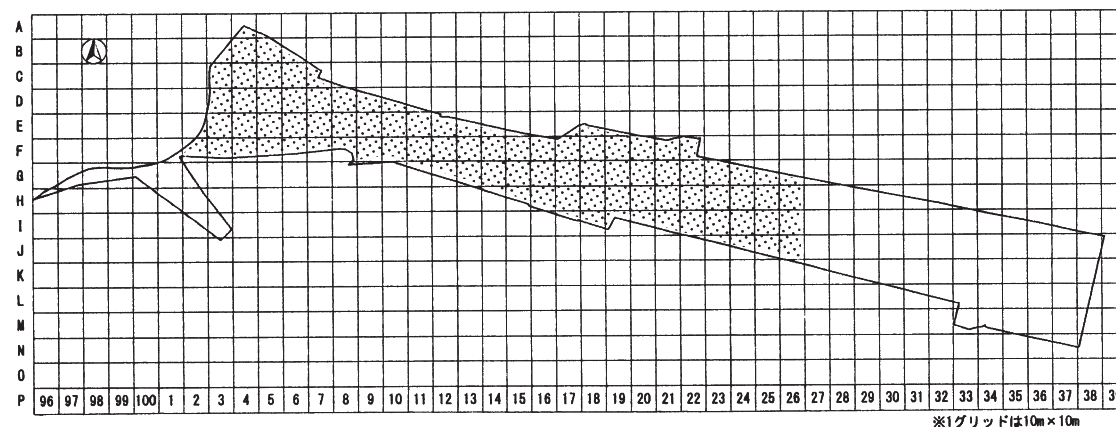
縄文時代
後・晩期



弥生時代



古墳時代



第 178 図 時期別変遷図

ものであったので、縄文時代後期の所産である可能性も視野に入れておきたい。遺構周辺の遺物包含層内出土の土器は、古代の資料が少なく、縄文時代後期・弥生時代・古墳時代のものが多かった。

次に、1条の道跡であるが、平成25年度調査で検出されていた1号古道の延長線上にあるものと考えられる(註8)。東側からG-25区まで延びて来ていた1号古道をそのまま延長すれば、平成28年度に検出されたG-18区にほぼ繋がるようであることから、そのように考えて大過はないであろう。

古代及びそれ以降の遺物の出土は少ない。土師器の椀や坏が出土したほか、須恵器の甕の破片、それに中世と考えられる焙烙の柄の部分が出土した。

Ⅱ層出土の遺物として図示した出土土器は、遺構内出土のものも含め、石鏃23点、磨製石鏃4点、磨製石製加工品1点、石匙1点、石錐1点、加工痕・使用痕のある剥片17点、石核1点、石斧5点、磨製石斧19点、打製石斧57点、石包丁1点、スクレイパー12点、磨・敲石類56点、石錘1点、砥石類8点、石皿15点、石皿破片の可能性のある礫片1点、台石1点、軽石加工品6点、原礫5点のほか、異形石器2点、管玉1点、石製加工品2点の総計240点である。

石鏃は小型の資料が主体を占め、黒曜石Ⅳ類(佐賀県伊万里市腰岳産)、サヌカイト類似の緻密な安山岩、ホルンフェルス、黒曜石Ⅲ類(熊本県人吉市桑ノ木津留産)、珪質頁岩、水晶などが利用される。磨製石鏃は頁岩及び粘板岩製で、根挟み部分を薄身に加工する特徴がある。

その他の小型剥片石器の石材には、黒曜石ⅡC類(鹿児島市三船産)、チャート、黒曜石Ⅳ類(佐賀県伊万里市腰岳産)、玉髄などがみられる。

磨製石斧には両凸刃の乳房状を呈する資料が多く、石材は砂岩製の2点を除きホルンフェルス製である。打製石斧は、基部が細く括れ刃部が幅広の円刃のラケット形が多く、撥形、短冊形のほか、有肩石斧、分銅形も出土している。石材は、横刃形の粗製のスクレイパーも併せ、大多数がホルンフェルス製である。

磨・敲石類には磨面、敲打痕の顕著でない資料も含まれる。本文中で指摘したように石器製作具の可能性の高い資料もある。石材は約半数を粗面の安山岩が占め、花崗岩・砂岩・凝灰岩、粘板岩がこれに続く。

砥石類には多様な形態がみられ、一部は古代以降の遺物が含まれる可能性がある。石材は砂岩が多数を占め、ホルンフェルス、安山岩が各1点ずつ含まれる。

石皿・台石は大多数が被熱・破碎しており、全形を知りうる資料は少ない。石材は凝灰岩が多数を占め、花崗岩がこれに次ぎ、砂岩、安山岩が各1点みられた。

石包丁はホルンフェルス製で、擦り切りにより穿孔されている。前記の磨製石鏃同様、一般的には弥生時代に

類出する石器である。

異形石器2点は黒曜石Ⅷ類(大分県姫島産)、黒曜石Ⅳ類(佐賀県伊万里市腰岳産)を素材とする。

管玉の石材は前回報告例と同じ、結晶片岩様緑色岩(クロム白雲母岩)の可能性はある。

石製加工品として報告した1066は、「石冠」に類似する特徴をもつ。縄文時代後・晩期に中部山岳地域を中心に近畿から東北地方南部に分布する「石冠」は、呪術的・儀器的遺物ともされる。近畿以西の西日本は分布の空白域とされてきたが、福岡県、熊本県、宮崎県で出土が報告されている。本県でも本例のほか、干迫遺跡(始良市加治木町)、柘原貝塚(垂水市)で出土している。市ノ原遺跡第5地点(日置市東市来町)、藤平小田遺跡(南種子町)の「三角罫形石製品」として報告された資料も含め、伝播や受容の背景、隣接地域及び遠隔地との交渉のあり方について検討する必要がある。(註9)

第2節 町田堀遺跡全体の遺構配置

町田堀遺跡の縄文時代後期検出主要遺構を第180図のようにまとめた。刊行済みの町田堀遺跡報告書(註1)と本報告の遺構を合わせると、竪穴住居跡7軒、埋設土器15基、石斧集積遺構2基、集石遺構12基、土坑48基となる。これらの遺構の大半が、東南部九州の縄文時代後期後半の中岳Ⅱ式期に帰属するものであるが、一部鳥井原式や御領式期のものも含まれることから、集落は複数の土器型式期の幅の中で営まれたものと考えられる。

ここでは竪穴住居跡と埋設土器との関係を見ていきたい。前回報告分では、竪穴住居跡と埋設土器とは10m~35m離れて位置していた。本報告書掲載分で見ても10m~20mの距離を置いている。埋設土器15基すべてが正位置ということも鑑みると、埋設土器を活用して子どもの埋葬もしくは再葬を行った可能性が高く、居住域と墓域とをやや離して形成していたことが推測される。

次に、古墳時代の墓域について第181図で見ると。遺跡全体がこの時期は墓域であり、地下式横穴墓が92基、円形周溝墓が7基確認されている。前回報告分での形態分類に基づき、地下式横穴墓の細分類を行う。

大分類

- 1類：玄室が中規模(1.5m前後)
- 2類：玄室が大規模(1.7m以上)
- 3類：玄室が1m以下の極小
- 4類：玄室が極小で羨道部の取り付けが竪坑の短辺に付く

小分類

- ①：羨門が竪坑とほぼ同じ幅
- ②：羨門が竪坑より幅が狭い



第 179 図 遺跡の残存範囲図

細分類

- A：玄室床面が竪坑床面と平坦
- B：玄室床面が竪坑床面から傾斜する
- C：玄室が竪坑の一部から段落ちする
- D：玄室が竪坑より一段上にある

それぞれの組合せで分類すると、18類に細分される。

- 1-①-A類：14基
- 1-①-B類：11基
- 1-①-C類：1基
- 1-②-A類：14基
- 1-②-B類：4基
- 1-②-C類：5基
- 2-①-A類：7基
- 2-①-B類：1基
- 2-①-C類：7基
- 2-②-A類：12基
- 2-②-B類：2基
- 2-②-C類：4基
- 2-②-D類：1基
- 3-①-A類：1基
- 3-①-C類：2基
- 3-②-A類：2基
- 3-②-C類：2基
- 4-②-A類：2基

1類が49基、2類が34基、3類が7基、4類が2基となった。前回報告から4基増えただけなので形態分類の概要に大差はないが、今回の細分類ではDが新たに加わった。羨道より一段高い場所に玄室が設けられている。町田堀遺跡では92基中21基が羨道より玄室が段落ちしているという特色があったが、1基だけは逆である。埋土より竪坑の掘りすぎによるものとは考えられない。同じ鹿屋市に所在する立小野堀遺跡の地下式横穴墓には、この形態が数基存在している。

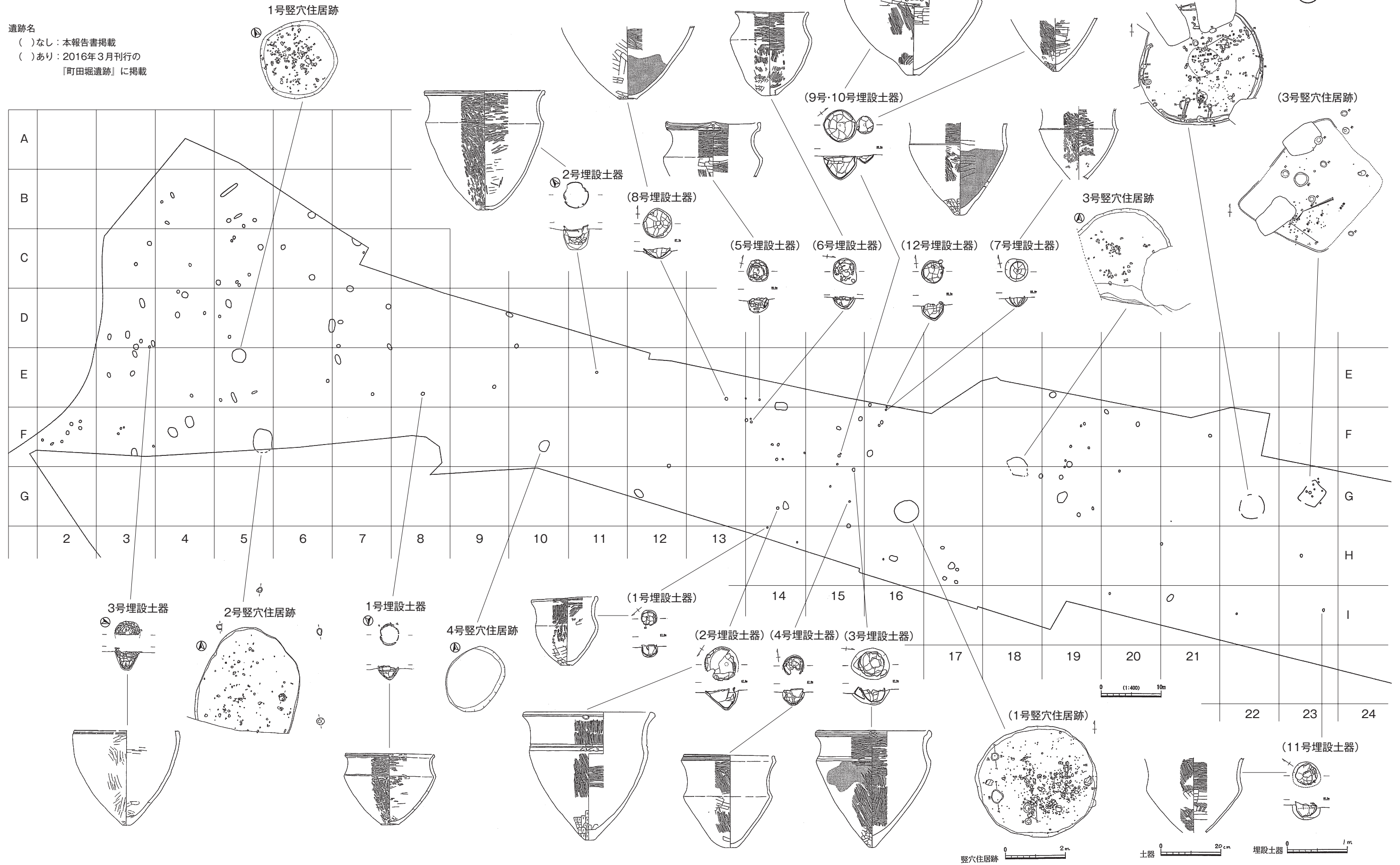
第3節 遺跡の残存状況

第179図は町田堀遺跡の残存状況を示したものである。東九州自動車道建設に伴って調査が行われた区域の外側には、まだ、埋蔵文化財包蔵地が広がっていることから、遺跡が残存している可能性が高い。

【註】

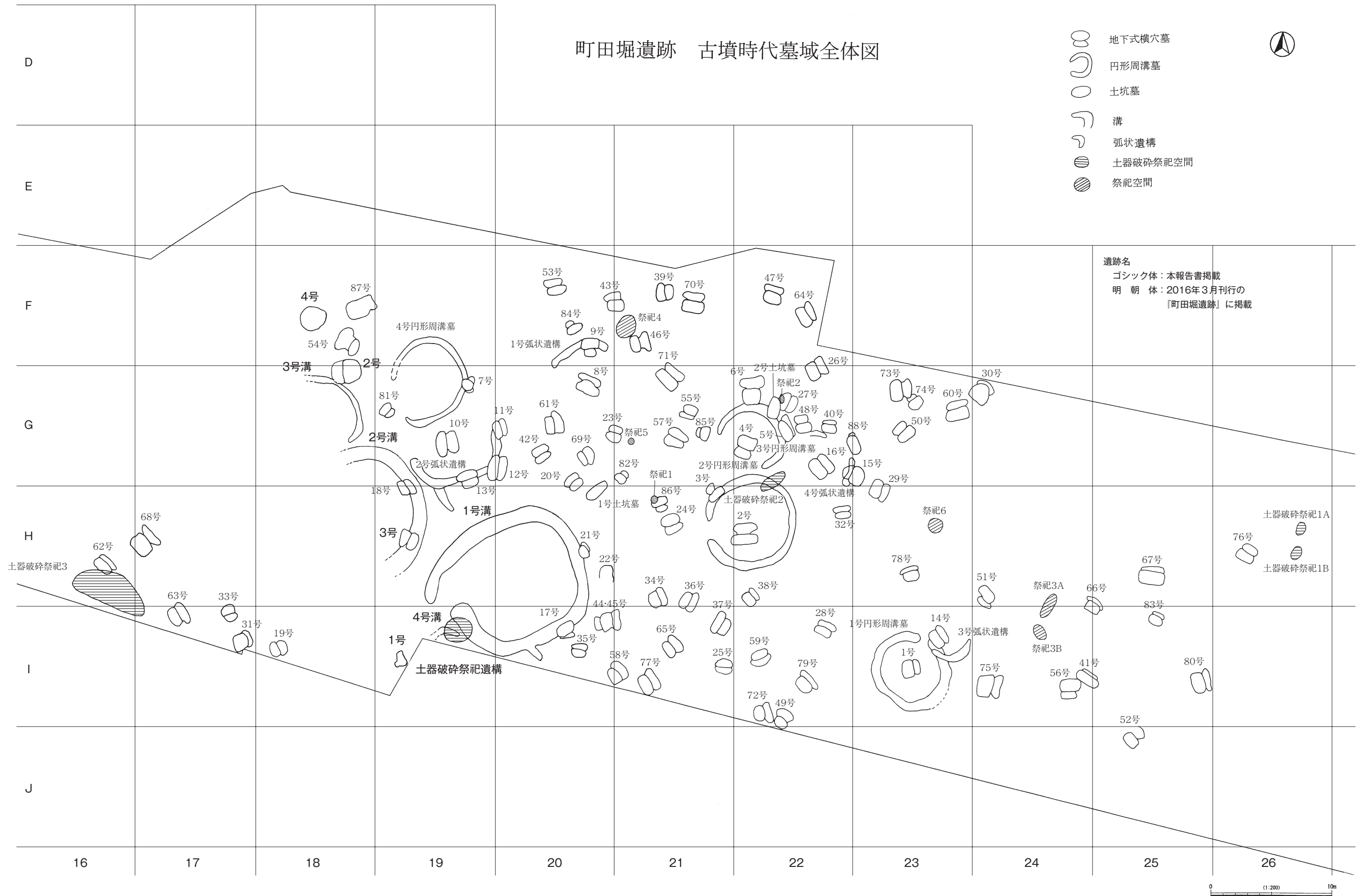
- 1 鹿児島県教育委員会・公益財団法人鹿児島県文化振興財団埋蔵文化財調査センター 2016『町田堀遺跡』公益財団法人鹿児島県文化振興財団埋蔵文化財調査センター発掘調査報告書(7)
- 2 石斧だけの集積ではなかったことから遺物集中域として整理した。
- 3 中村直子 2015「成川式土器の時代」『成川式土器ってなんだ? -鹿大キャンパスの遺跡から出土する土器-』鹿児島大学総合研究博物館 2015
- 4 註3に同じ
- 5 鹿児島県教育委員会・公益財団法人鹿児島県文化振興財団埋蔵文化財調査センター 2016『田原迫ノ上遺跡』公益財団法人鹿児島県文化振興財団埋蔵文化財調査センター発掘調査報告書(5)
- 6 註1に同じ。なお、縄文時代後期中岳Ⅱ式土器も多く出土しているが、大型の壺形土器がほぼ完形に復元できたことから、この大型壺を墓前で粉々に破砕していたことが考えられたため、このような位置付けを行った。3号溝付近に中岳Ⅱ式土器の竪穴住居跡が検出されたことから、この付近は中岳Ⅱ式期の集落跡であり、中岳Ⅱ式土器もそれを裏付けているものと考えられる。
- 7 註3に同じ
- 8 註1によると、東側に続くと考えられている。この道(跡)をさらに東に伸ばしていくと、現在調査中で古代の掘立柱建物跡などが多く検出されている川久保遺跡方面へと延びる可能性がある。
- 9 中島栄一「石冠・土冠」『縄文文化の研究9縄文人の精神文化』1995 雄山閣
小島俊彰「三角罫形土製品」『縄文文化の研究9縄文人の精神文化』1995 雄山閣
九州縄文研究会鹿児島大会実行委員会事務局『第22回九州縄文研究会鹿児島大会 縄文時代における九州の精神文化発表要旨資料集』2012 九州縄文研究会・南九州縄文研究会

町田堀遺跡 縄文時代後期検出主要遺構図



第180図 縄文時代後期検出主要遺構図

町田堀遺跡 古墳時代墓域全体図



第 181 図 古墳時代墓域全体図

写 真 图 版



① 1号集石検出状況 ② 4号集石検出状況 ③ 5号集石検出状況
④ 6号集石検出状況 ⑤ 2号集石検出状況 ⑥ 3号集石検出状況
縄文時代早期の遺構 1

図版2



① 7号集石検出状況 ② 9号集石検出状況 ③ 10号集石検出状況
④ 11号集石検出状況 ⑤ 12号集石検出状況 ⑥ 13号集石検出状況
⑦ 14号集石検出状況 ⑧ 15号集石検出状況

縄文時代早期の遺構 2



① 16号集石検出状況 ② 17号集石検出状況 ③ 18号集石検出状況
 ④ 19号集石検出状況 ⑤ 20号集石検出状況 ⑥ B-4区 遺物出土状況 (遺物 NO. 173)
 ⑦ D-4区 遺物出土状況 (遺物 NO. 182) ⑧ A-4区 遺物出土状況 (遺物 NO. 146)
 縄文時代早期の遺構 3

図版4



① 1号竖穴住居跡検出状況 ② 1号竖穴住居跡断面状況
③ 1号竖穴住居跡遺物出土状況 ④ 1号竖穴住居跡完掘状況
縄文時代後期の遺構 1



① 2号竖穴住居跡検出状況 ② 2号竖穴住居跡断面状況 ③ 2号竖穴住居跡完掘状況
④ 3号竖穴住居跡検出状況 ⑤ 3号竖穴住居跡断面状況
⑥ 4号竖穴住居跡検出状況 ⑦ 4号竖穴住居跡完掘状況
縄文時代後期の遺構 2